一茶一代集

装幀　津田青楓

一茶自畫贊

けふの日もあゝ蜩に鳴れけり

家も一茶

文路宛一茶書翰

一茶短冊　（武藤一郎氏藏）

名月の御覽のとほり屑家哉　一茶

同　（同）

山寺や椽の上なる鹿の聲　一茶

解題

一茶俳句選抄

一茶の俳句に於ける歩みは急激に歩調を進めたのでないが、『たびしうゐ』と『三韓人』と『おらが春』の三部の書を通じて見ると、あきらかに其の格調は變つてゐる。寛政時代は『續五色墨』の一人であるその師の二六庵竹阿によつて影響されてゐるが、たゞ師風を墨守するのみでなく、葛飾正風といふ俳系の上からも句作態度を考慮して、素堂の俳句の一特色と見るべき言葉の鋭い、言ひ廻はしの強さをあらはす爲めに、いはゆる字あまりの句が多いのである。享和時代はその過渡期ともいふ可く前期の名殘りをとゞめてゐるが、一茶自身の一人あるきを試みようとして焦慮し、ぎごちない文字あまりの句躰はだん／＼影をひそめてゐる。文化時代になると、自分と自分の周圍を振りむきつゝ、その心の動きをたゞちに俳句に反映させようとして表現に苦心してゐる。それが成功したのは『七番日記』を周匝する文化七八年以後である。文政時代は全く一茶獨自の世界であつて『おらが春』を以てその唯一の句境と見る可きである。晩年になるとその心境の安らかになるにつれて、餘りに安易に墮して感覺の鋭さがなくなつて來てゐる。――要するに寛政・享和・文化・文政の四時代を一茶の俳句に於ける歩みに平衡させる爲め、作句の年次を附記し、類題の形式で編纂したものが此の『一茶俳句選抄』である。私は一茶に關する句稿の類はあらまし通覽したつもりであるが、寛政時代は斷簡の存するのみであり、文化になつても同六年は全く日記を缺き、一茶の晩年、文政九・十兩年の日記

も發見されないので參照し得なかつたから、これで充分であるとは斷言し得ない。たゞ私の選抄に際しての用意は文獻をあさる事の廣きを誇示するよりも、一茶の俳句のそれ〲の時代的特徴を見逃すまいとした點である。

引用書名は年代の古きを揭げ、數部の書に見えるのはその中の二部のみを記載したので、引用書は『七番日記』その他既刊書が大部分を占める事になつて了つた。年代はその年の作と確定的には云へないが、すくなくともその年以後の作でない事は明瞭である。同案類句はその一を選んで他は省略したが、『おらが春』に載するのは保存し、『一茶發句集』（文政十二年刊）俳諧寺社中校、及び同書とは別に嘉永元年書林向榮堂の發行した『一茶發句集』（小本二册）にあるものも全部收錄し、異同の甚しい句は年代の古きものに據り、發句集の方は省略したものが多いのである。

一茶俳諧歌集

萬葉調の擬作をしてゐるのでも知れるように、一茶は和歌に對して無關心でなかつた。殊に萬葉や記紀の歌を愛誦して、遺稿の中にも方々に抄錄してゐる。『株番』に契沖の富士の歌を手抄してゐる如きも和歌に對する愛好心を語つてゐる。が、彼の時代の歌には一茶はさして感心して居なかつたようで、たとへ古學派のやゝ清新な歌も、これを摸する氣持になれなかつたらしい。といつて天明調の狂歌は一茶の信ずる道でなかつたので、こゝに彼は俳諧歌として特異な表現形式を選む事になつたのである。『古今集』の如き言葉の緣のみにすがるのは、一茶の俳諧歌の本意ではない。一茶の俳諧歌とは蓋し彼の俳諧的境地を歌の形式をかりて表現したものであると見たい。それ故に一茶は俳諧歌と俳句とで同一の着想を詠じてゐる。一茶を知る上に彼の餘技として輕視さるゝ俳諧歌も、決してこれを等閑に附するを許さないので、既に宋鵗の編集した『一茶翁誹諧歌帖』（安政二年序）の稿本があり、私は山口久治氏の藏本を筆寫して

置いたが、今こゝに又、一茶の俳諧歌を既刊の覆刻本にあるものから書抜いて四季・雜に分つて一集とし、且つ類系・同想と雖取捨しないので、ありのまゝに收録したのである。年代は引用書によつたので强ち同年の作と決定した譯でない事も言ひ添へたい。

一茶連句集成

太陽系はたゞ一つと信ずる者は、その上に七つの太陽系の存在する事を無條件で承知しないだらう。俳句を唯一のものとして、連句の藝術價値をやゝもすれば否定しようとする者は、まさしく其の亞流であらねばならぬ。連句が三句本位に一躰系をなして、その上に大きな躰系に進展して歌仙となり、百韻となり、千句となり、それ〳〵に特殊な藝術躰系をなして居るのは日本文學として實に壯大な景觀である。一茶の俳句鑑賞者がその連句に對して無關心であるのは、明治時代の單純な寫生俳句論に支配されて居るばかりでない。一茶といへば『おらが春』にしても『七番日記』にしても俳句のみで連句は『七番日記』に蕉雨との兩吟を見らるゝに過ぎないから、或は一茶は連句を無視して居たかのように誤解してゐる者のあるからだらう。『一茶一代集』に彼の連句をつとめて多く集成しようとした微意は、かうした誤解をのぞき、現に芭蕉の連句に對して多少とも理解者の出で來つゝあるように、一茶の連句の鑑賞者乃至研究者の出現を期待するが故である。一茶の連句は門人の西原文虎・山岸梅塵その他によつて書寫されて、その眞蹟の散佚した今日と雖かなり多く殘存するので、それらの寫本連句帖を中心として、當時の俳書より發見せる連句を附加し、年代順に排列したものが卽ち『一茶連句集成』である。一茶の連句はなほ洩れたものも尠くはあるまい。

しかし大体はこれで盡きてゐるといつても過言であるまいと信ずる。

校正を了つて後に信州戸倉兒玉氏の所持する寛政時代の連句草稿は私の抄錄したのはその一部であつて、別帖の分は歌仙數卷及び殘闕のものゝある事を忘却して居た事に氣附いたが、既に校了となつたので附記する事を得なかつた。編纂の際その記憶を呼び起したらばと悔恨の至りである。一茶の獨吟「蚤蠅にあなどられつゝ今日も暮ぬ」の歌仙一卷は乙左の『一覽集』と遺篇とに記載するものとに據つたが、久保柳葉氏の許に一茶眞蹟の同一の一卷がある事を解説する事を忘れて居た。又、本集の解説に中野の井賀屋を梅塵の家の屋号としたのは私の覺違ひで、後に「おらが春」を出板した同じ中野の白井氏の屋号である。梅塵の家は袋屋であつた。

一茶紀行・日記集

一茶の紀行は『七番日記』その他から旅行に關する雜錄を抄出すれば文集のようなものとなるが、こゝには纒まつたものとして『寛政紀行』と『花見の記』を採錄するに止めた。又、日記は『七番日記』及び文政五・六・七年の日記、假に『九番日記』と題して出版されたもの丶外に、門人の筆寫したもので、日附と記事を省略した『八番日記』が存在するが、日附と、それから簡單な記事を抄錄しても面白くないので全部見合せ、一茶が父彌五兵衛の病床にあつて介抱に手をつくした日記を、假に『みとり日記』の題で既刊したものを採つたのである。

寛政紀行　一茶自筆の稿本は無題名で尾張一の宮の佐分利新右衛門氏が所藏してゐる。私は前年『一茶新集』を編輯する際、氏より借覽して飜刻したが、その前中村六郎氏は『一茶選集』の中に『西國旅日記』の標題を附して發表してゐる。最近信濃教育會で佐分利氏藏本の通り凸版にて印刷したものは、眞蹟そのまゝであるから一番信用し得る。本文は寛政七年讃岐觀音寺町の專念寺で元旦を祝ひ、それより伊豫道後のいざよひ櫻を一見し、中國を經て

大阪に戻り、河内・和泉の俳人を訪問した旅行記である。一茶は多分翌八年に江戸に歸來した事と思はれる。

花見の記　上野の花にうかれあるき淺草から角田川堤をさまよひ、成美の隱栖した多田森の舊庵に立寄り、春日道遙の一日を文章としたので、文中に挿入した俳句によつて年代を推定して見ようとしたが、前後に矛盾するところがあつて正確に知り難い。俳諧寺可秋の『一茶一代全集』には斷片的に一項づゝばら〳〵にして收めてあるが、一茶遺稿『株番其他』にあるものは原稿本に據つたのであるから、それに從つて附錄の旅行吟も省略せずに載せたのである。

みどり日記　寬政十二年の葛飾派俳人和泉の歲旦帖を裏返しにして、その裏紙に卒直に看病中の感情の動きを記したのであるから、父に對しての眞情の背景には、繼母との葛藤が暗示されてゐて誇大な印象の伴はない事はないが、父の病床錄としてなほ未定稿である爲め、却つて一茶の本心を看取し得られる。東松露香氏の校訂本『父の終焉日記』の外に小著『一茶新集』にも收めてある。

一茶書翰抄

震災前の事である。嶋田筑波氏から一茶の手紙がこんなに束になつてある事を告げられたので、こんなにといふ手附で百通以上のものであらうと豫期して、出掛けるつもりで其のまゝになつた爲め、全部烏有に歸したらしい、定に殘念ながらいたし方ない。こゝに收めた書翰は下總馬橋の秋本斗囿編『一茶翁文通』からたゞ發句をのみ記したものを除き手紙の躰をなして居るもの全部と、素鏡・春畊・希杖などの一茶門人後裔の許に保存するものを一覽手寫したるものと、『一茶一代全集』『一茶俳集』に揭ぐるものとを纏めて年代順に記載したのである。推定年代は解說を一通毎に

添へた通り、まゝ確定的のものもあるが、大部分は日記類によつてほゞ明瞭になつたものである。私の觸目した書翰だけでも、もつと〳〵多數で、それを筆錄するのみ解つたので、僅々數十通に過ぎないから今後蒐集家によつて充分增補する必要がある。書翰抄と題したが多數の中から抄出したのでなく、私の手抄したものを揭げる意味であるから、誤解なきように望むと共に一茶書翰の所持者に向つて、本抄に洩れたるもの又は誤寫あるものゝ示教を煩はしたく希望する。

一茶著作集

私は一茶の生前著作したものは『三韓人』だけと信じて、講演の時にもその事をしば〳〵發表したが、川西和露氏から『たびしうゐ』發見の報に接した時は愕然として私の淺學と不用意な發表を悔いた。それと同時に『たびしうゐ』の發見は私をして一茶に對する硏究心を刺激した事も多大であつた。私は信濃敎育會に『たびしうゐ』の復刻を推薦して、和露氏藏本によつて其の復製本が最近發行されたが、寬政十年の紀行『さらば笠』の存在を知り得ないので、その果して出板されたか否かを確言する譯にいかない。荻原井泉水氏及び小池直太郎氏の談によると、『さらば笠』は湯本氏藏の有鱗編、誹諧年代記風の一枚刷に一茶自から寬政十年の項に、さらば笠選と記入してあるさうである。一日も早く其の發見の知らせを得たいと望んでゐる。

たびしうゐ『寬政紀行』の扉に此年旅拾遺とあるのを和露氏から原本を借覽した後に氣が附いて、本集の寬政七年の出版である事を確實になし得たのである。大坂に於て交際した人々の作を始め、西國旅行の際に接近した九州・中國の諸俳人及び近畿の人の作を添へてある。河内古市の俳人一葉の序文に「ことし六とせぶりとや、此地に足を止

むる折から、こゝだく拾ひ集たるくさ〴〵呑魚の禍あらんを歎き」編集に着手したとあるがその通りであらう。『宇治拾遺物語』によつて『旅拾遺』と題した事も一葉の序に書いてある。本文中廿五丁は缺丁であるが、和露氏所藏の外に舊洒竹文庫にある分も同一であるから、缺丁のまゝにして置くより手を下し難い。

我春集　江戸と下總とで試みた連句と、一茶と知友の發句をさしはさみ、旅中の隨筆を添へたものである。題名の『我春集』は後人の假に附けたので一茶みづから選んだ標題ではなからう。中野都雲氏の所藏する寫本に據つたが、湯本氏の許に一茶自筆のものがあり、『株番其他』に飜刻されてゐる。文化八年の起稿と推定する。

株番　下總月船亭の月待の事を記した文章に「よし〳〵汝はなんぢをせよ、我はもとの株番」と結んでゐるので題意は明瞭である。これも湯本氏は一茶眞蹟本を所藏してゐるが、私は林順亮の令弟の所持される門人梅塵の舊藏本によつて飜刻したので本文に數ケ所の異同がある。文化十年か十一年に淨書して置いたものらしい。

三韓人　笠翁筆の其角と嵐雪は彦兵衛、笠翁は平助といつた時代に、一つ蒲團に寒夜を凌いだ疎畫を或人から贈與されたので、文化十一年を以て江戸俳壇に別れる事に決心した一茶が、その集の標題に使用したので、『三韓人』とは蓋しその畫の三人男といふ意味である。これは信州に戻つたら、俳壇的に一人ぼつちの一茶自身を『一韓人』の標題であらはさうとした伏線であらうが、『一韓人』は豫告のみで了つたらしい。一茶舊知己の俳句と、故人となつた者は歿年月日を記してあつて、囘舊の情のなか〳〵につきせない處が見える。一茶の著作として第一に舉げらる可きものである。

おらが春　一茶には必らずつきものゝ、一茶の編纂ものには又かと思はるゝ程ありふれた隨筆で、しかもこれを全く除外視するを許さない主著である。板行本は嘉永年代白井一之の摸刻したもので、一茶生前には稿本のまゝ門人

梅薩の家に傳へられたのである。今は小林萬次郎氏がその眞蹟稿本を所藏してゐるが、私は同氏の快諾を得てその稿本をコロタイプ刷にして古今書院から發行したから承知される人も多からう。『おらが春』の題名は一之が開板する時に附けたのであらう。本文は文政二年の起稿に疑ひなく、それ以前のをり〳〵の隨筆及び句作をもまじへて、同年の發句を中心に記述したのである。板行の初刷本には懷舊の連句と嘉永年間の俳人の句を附錄としてあるが、再刷本は題簽を『一茶翁文集』と改めて懷舊の連句以下を削除してある。明治刷には題簽をもとの『おらが春』に復してゐるが内容は同一である。（勝峰晋風）

日本俳書大系 第十二巻 一茶一代集 目次

筆蹟

（總頁數六五六）

類題 一茶俳句選抄

類題 一茶俳句選抄

勝峯晋風編

新年の部

元日（ぐわんじつ）

家なしも江戸の元日したりけり　【文化七年―七番日記】

古郷や馬も元日いたす顔　【文化七年―七番日記】

例の通り梅の元日いたしけり　【文化八年―七番日記】

元日も立のまゝなる屑家哉　【文政四年―句帖・發句集】

元日や日の本ばかり花の娑婆　【文政四年―句帖】

元日や上々吉の淺黄空　【文政年中―發句集】

年立（としたつ）

新家賀

年立や雨落ちの石凹む迄　【文政五年―九番日記・發句集】

あら玉の年立かへる虱かな　【文政年中―發句集・題叢】

今年（ことし）

六十二の年

ことしから丸まうけ也娑婆の空　【文政三年―句帖】

遊民〳〵とかしこき人に叱られても今更せんすべなく

またことし婆娑ふさけそよ草の家　【文化三年―旅日記・題叢】

春立

春立や見古したれど筑波山　【享和四年―句帖】

兩國橋上看二紫曙一

春立と申すもいかゞ上野山　【文化七年―七番日記】

門々の下駄の泥より春立ちぬ　【文化七年―七番日記】

春立や先づ人間の五十年　【文化九年―七番日記】

春立や彌太郎改一茶坊　【文化十五年―七番日記・句帖】

還暦

春立や愚の上に又愚にかへる　【文政五年―句帖・發句集】

春來る

草の戸やどちの穴から春が來る　【文化八年―七番日記】

御傘めす月から春は來りけり　【文化十一年―七番日記】

稗餅にあんきな春が來りけり　【文化十五年―七番日記】

今春が來た様子なり煙草盆　【文政三年―句帖】

富士の畫に

春めくや藪ありて雪ありて雪　【文政七年―九番日記】

初春

初春やけぶり立るも世間むき　【文化四年―旅日記】

初春も月夜となりぬ人の顏　【文政年中―遺叢・發句集】

今朝の春

初春や千代のためしに立ち給ふ　【文政年中―嘉永板發句集】

けさの春四十九ぢやもの是も花　【文化八年―七番日記】

みどり子や御箸いたゞくけさの春　【文化九年―七番日記】

鶯のいなゝきやうも今朝の春　【文政年中―嘉永板發句集】

明の春

明ぼのゝ春早々に借着哉　【享和三年―享和句帖】

あばら家や其身その儘明の春　【文政三年―句帖・發句集】

君が春

拙者儀も異議なく候君が春　【文政五年―九番日記】

御代の春

日の本や金も子を生む御代の春　【文政七年―句帖】

おらが春

目出度さもちう位なりおらが春　【文政二年―おらが春】

我が春

我春も上々吉ぞ梅の花　【文化七年―我春集・題叢】

花の春

頭巾とる門はどれ〳〵花の春　【享和三年―享和句帖】

隣へよばれて

君が代やよその膳にて花の春　【文化三年―旅日記】

おのれやれ今や五十の花の春　【文化九年―株番・七番日記】

狗が鼠とるなり花の春　【文政四年―句帖】

菴の春

菴の春寐そべるほどは霞む也　【文政年中―遺藁・發句集】

江戸の春

大江戸や藝なし猿も花の春　【文化七年―七番日記】

引窓も一度にあくや江戸の春　【文政五年―句帖】

春（はる）

欠鍋も旭さす也是も春　【文化二年―旅日記】

ふがひない身となおぼしそ人は春　【文化十年―七番日記】

正月（しやうぐわつ）

正月の町にするとや雪が降る　【文化八年―七番日記】

餘所並の正月もせぬしだら哉　【文化十年―七番日記】

正月や穢多の玄關も梅の花　【文化十五年―七番日記】

正月や夜は夜とて梅の月　【文化十五年―七番日記・おらが春】

道ばたの土めづらしやお正月　【文政二年―句帖】

正月やころりと寐たるとつとき着　【文政五年―九番日記】

問正月

正月のふたつありとや旅寐鳥　【文政年中―狹蓑集・發句集】

初空（はつぞら）

初空のもやうに立てるけぶり哉　【文化八年―七番日記】

初空のはづれの村も寒いけな　【文化八年―七番日記】

壁の穴我初空もうつくしき　【文化八年―七番日記】

初空へさし出す獅子の天窓哉　【文化八年―我春集・俳林良材集】

うす墨のやうな色でも初空ぞ　【文化十一年―七番日記】

初空を夜着の袖から見たりけり　【文化十四年―七番日記】

初空にはや疵付けるけぶり哉　【文化十四年―七番日記】

初日（はつひ）

松竹の行合ひの間より初日哉　【寛政四年―句帖】

我々が顔も初日や御代の松　【享和三年―享和句帖】

今歳稱二革命年一倚四十二年他國送二星霜一

初旭（はつあさひ）

上段の世の初日哉旅の家　【享和四年―旅日記】

土蔵から筋違にさす初日かな　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

初旭鍬も拜まれ給ひけり　【文化十五年―七番日記】

御降（おさがり）

まんべんに御降うける小家哉　【文政三年―句帖】

門松（かどまつ）

折てさす是も門松にて候　【文化九年―七番日記・題叢】

雑巾のほしどころ也門の松　【文政六年―九番日記】

飾（かざり）

吹けばとぶ家の世並や〆かざり　【文政八年―新集】

つんとして飾りもせぬやでかい家　【文政八年―新集】

福藁（ふくわら）

福藁や十ばかりなる供奴　【文化十一年―七番日記・發句集】

蓬莱（ほうらい）

蓬莱になんむ〱といふ子かな　【文化七年―我春集・おらが春】

蓬莱や只三文の御代の松　【文化八年―七番日記・發句集】

若水（わかみづ）

三崎野中の井は遊女柏木がかたみなり

若水のよしなき人に汲れけり　【文化五年―旅日記・發句集】

ちとのあひはや若水でなかりけり　【文化五年―九番日記】

名代の若水浴びる雀かな　【文化十五年―七番日記・おらが春】

雑煮（ざふに）

君が代や旅にしあれど笥の雑煮　【寛政五年―句帖】

八丁堀貧乏町に春をむかへる

我庵や元日も來る雜煮賣　【文化十四年―七番日記】

去年十一月生れたる娘に一人並の雜煮祝はせて

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは　【文化十五年―七番日記・おらが春】

しん／＼とすまし雜煮や二人住　【文政四年―句帖】

もと／＼の一人前ぞ雜煮膳　【文政六年―句帖】

屠蘇

月代に屠蘇ぬり付けて出たりけり　【文化十五年―七番日記】

齒固

人並に齒莖固めの豆麩哉　【文政六年―九番日記】

着衣始

釋迦どのゝいくつの年ぞきそ始　【文政四年―句帖】

御慶

白髮天窓をふり立て御慶哉　【文政三年―句帖】

年始

御年始の返事をするや二階から　【文政四年―句帖】

下駄持を二役するや年始道　【文政四年―句帖】

年始帳

米値段ばかり見るなり年始帳　【文政四年―句帖】

禮者

諸暦の判じくらする禮者哉　【文政六年―九番日記】

年玉

我庵やけさの年玉とりに來る　【文化十一年―七番日記・題叢】

かくれ家や猫にも一つおとし玉　【文政三年―句帖】

惠方

寐勝手に梅の咲きけり我惠方　【文化五年―旅日記】

元日草

神國や草も元日きつと咲く　【文政八年―新集】

福壽草（ふくじゆさう）

帳面の上に咲きけり福壽草　〔文政八年―新集・九番日記〕

初夢（はつゆめ）

初夢に古郷を見て涙哉　〔寛政六年―句帖〕

初夢に猫も不二見る寐様哉　〔文政七年―九番日記・發句集〕

若餅（わかもち）

若餅やざぶと搗き込む梅の花　〔文政年中―遺叢・狭蓑集〕

若湯（わかゆ）

江戸住は我々しきも若湯かな　〔文政二年―句帖〕

吉書（きつしよ）

小坊主が棒を引いても吉書かな　〔文政三年―句帖〕

書賃の蜜柑見い〳〵吉書哉　〔文政三年―句帖〕

凧（たこ）

家二ツ三ツ四ツ凧の夕哉　〔文化二年―旅日記〕

朔日や一文凧も江戸の空　〔文化七年―七番日記〕

人の親凧を跨いで通りけり　〔文化八年―七番日記〕

里しんとしてづんづと凧上りけり　〔文化八年―七番日記〕

番町や夕飯過の凧　〔文化八年―我春集・七番日記〕

山寺や翌剃る兒の凧　〔文化十年―七番日記〕

反故凧のあたり拂て上りけり　〔文化十二年―七番日記〕

凧抱いたなりですや〳〵寝たりけり　〔文化十三年―七番日記〕

寝たいやらかぶりふりけり凧　〔文化十三年―七番日記〕

凧のかぶり猿が守りする日なりけり　〔文化十三年―七番日記〕

乞食子や歩行ながらの凧　〔文政三年―句帖〕

すゝけ紙まゝ子の爪と知られけり　【文政五年―九番日記】

まゝつ子やつぎだらけなる爪　【文政五年―九番日記】

まゝ子爪つぎのいろ〳〵見えにけり　【文政七年―九番日記】

美しき鳳巾上りけり乞食小屋　【文政年中―發句集・題叢】

風巾上ゲてゆるりとしたる小村哉　【文政年中―發句集】

羽子（はご）

つく羽根を犬がくはへて參りけり　【文政十五年―七番日記】

つく羽根の轉びながらに一つ哉　【文化十五年―七番日記】

手毬（てまり）

小兒のあどけなさを

鳴猫に赤ン目をして手まり哉　【文政三年―句帖・發句集】

萬歳（まんざい）

萬歳よも一つはやせ春の雪　【享和三年―享和句帖】

萬歳のまかり出たよ親子連　【享和四年―旅日記】

大聲や廿日過ての御萬歳　【文化八年―我春集・花實發句集】

萬歳や五三の桐の米ぶくろ　【文化十五年―七番日記】

人日（ひとのひ）

人日や本堂いづる汗けぶり　【文化十二年―七番日記】

薺（なづな）

人日

垢爪や薺の前もはづかしき　【文化十年―七番日記・發句集】

七草（なゝくさ）

七草を打つてそれから寐役哉　【文化十四年―七番日記】

若菜摘（わかなつみ）

茜うら帶にはさんで若菜摘　【享和三年―享和句帖】

三足程旅めきにけり野は若菜　【享和三年―享和句帖】

一桶は如來のためよ朝若菜　【文化二年―旅日記】

出序にひんむしつたる若菜哉　【文化十二年―七番日記】

脇差の柄にふら〳〵若菜かな　【文政八年―新集・發句集】

鶴の贊

小松引

小松引人とて人のさみすらん　【文政四年―句帖新々五百題】

袴着て芝にころりと子の日哉　【文政年中―發句集】

水祝

川捨なく水祝ひけり五十聟　【文化十五年―七番日記】

逃しなや水祝はるゝ五十聟　【文化十五年―七番日記・發句集】

爆竹

はやされよ蓬の飾のけぶり様　【文化十一年―七番日記】

どんど焚どんどと雪の降りにけり　【文化十五年―七番日記】

春の部

時候　地理

彼岸

我國は何にも咲かぬ彼岸哉　【文化十一年―七番日記】

ばくち小屋降つぶしけり彼岸雨　【文化十五年―七番日記】

あゝ寒いあら〳〵寒い彼岸哉　【文政五年―九番日記】

ついて來た犬も乘る哉彼岸舟　【文政八年―新集】

彼岸とて袖に這する虱かな　【文政年中―嘉永板發句集】

うら門のひとりでにあく日永かな　【文化四年―旅日記】

日永（ひなが）

さあ騒げ日永になるぞ門の雁　【文化七年―七番日記】

忍ぶが池に龜どもの菓子ねだる有さまを見るに、此の苦の娑婆に百年の逗留も退屈なるらん

永の日を喰や喰ずや池の龜　【文化九年―七番日記・句帖】

さほてんのつぺり永くなる日哉　【文化十三年―七番日記】

老ぬれば日の永いにも泪かな　【文化十三年―七番日記・句帖】

ばか永い日やと口あく烏かな　【文化十五年―七番日記】

日が永い〳〵とのらりくらり哉　【文政三年―句帖】

念佛の申賃取る日永かな　【文政三年―句帖】

あたら世や日永の上に花が咲く　【文政三年―句帖】

待ち〳〵し日永となれど田舍哉　【文政年中―發句集】

闇がりの牛曳き出す日永かな　【文政年中―嘉永板發句集】

日（ひ）の延（のび）る

有がたや能なし窓の日も伸る　【文化十三年―七番日記】

暮（くれ）遲（おそ）し

丸にの丶字の壁見えて暮遲き　【文化十一年―七番日記】

店開き賀

山笑ふ
長閑

福の来る門や野山の朝笑ひ　【文政年中―發句集】

長閑しや大宮人の裾埃り　【文化九年―七番日記】

辻だんぎちんぷんかんも長閑哉　【文化九年―七番日記】

長閑さやはや三日月の出ておじやる　【文化九年―七番日記】

長閑さや垣間を覗く山の僧　【文政年中―發句集】

長閑さや浅間けぶりの昼の月　【文政年中―發句集】

小金原

呼あふて長閑に暮らす野馬哉　【文政年中―嘉永板發句集】

春寒

木の七五三のひら〳〵残る寒かな　【文政六年―九番日記】

三日月はそるぞ寒サはさえかへる　【文政年中―發句集】

水温む

鷺烏雀の水もぬるみけり　【文政年中―題叢】

春の夜

春の夜のおもはくもあり夜のふね　【文化二年―旅日記】

春の暮

下京の窓かぞへけり春の暮　【文化二年―旅日記】

木兎の面魂よ春の暮　【文化二年―旅日記】

春の山

梅若氏會出席

寝仲間に我をも入よ春の山　【文化元年―旅日記】

降暮し〳〵けり春の山　【文化七年―旅日記】

寝ころぶや手まり程でも春の山　【文政五年―九番日記】

春の水　家形に月のさしけり春の水　【文化二年―旅日記】

春邊　田と畔の廻りくらする春邊哉　【文政五年―九番日記】

月さして一文橋の春邊哉　【文政年中―題叢】

行春　とても行く春ならいそけ草の雨　【文化二年―旅日記】

ゆさ／＼と春が行くぞよ野べの草　【文化八年―七番日記・題叢】

やよ虱這へ／＼春の行方へ　【文化十一年―七番日記】

鳥どもよだまつて居ても春は行ク　【文政八年―新集】

行春やどれが先立つ草の露　【文政年中―狹蓑集】

春惜む　鳩鳴くや大事の春がなくなると　【文化八年―七番日記】

錆持よ春を逃すな合點か　【文化十年―七番日記】

長の春今盡るなり角田川　【文政七年―九番日記】

くせ酒の泣ク程春がをしい哉　【文政八年―新集】

天文

春の日　春の日や暮ても見ゆる東山　【文化二年―旅日記・發句集】

春の月　淺川や鍋すゝぐ手に春の月　【文化二年―旅日記】

水光春色

春の風

春の月さはらば雫たりぬべし　【文化二年―旅日記】

ついそこの二文渡しや春の月　【文化九年―七番日記・發句集】

すつぽんも時や作らん春の月　【文化十五年―七番日記・おらが春】

松苗も肩過にけり春の風　【文化元年―旅日記】

棒先の茶笊かはくや春の風　【文化二年―旅日記】

立際に春風吹くや京の山　【文化六年―苔むしろ・千題集】

春風の夜にして見たる我家哉　【文化七年―七番日記】

春風や十づゝ十の石なごに　【文化九年―七番日記】

春の風足むく方へいざさらば　【文化九年―七番日記】

細長い春風吹くや女坂　【文化九年―七番日記】

春風に尻を吹るゝ屋根屋哉　【文化十年―七番日記】

提灯でたばこ吹也春の風　【文化十年―七番日記】

春風や逢坂越る女講　【文化十五年―七番日記】

ほた餅や藪の佛も春の風　【文政二年―おらが春】

春風のそこ意地寒し信濃山　【文政三年―句帖】

春風やとある垣根の赤草履　【文政三年―句帖・嘉永板發句集】

狗が鼠とるなり春の風　【文政三年―句帖】

春の風おまんが布のなりに吹ク　【文政年中―發句集】

春風や牛にひかれて善光寺　【文政年中―發句集】
宿引に女も出たりはるの風　【文政年中―發句集】

東風(こち)

東風ふけよはにふの小屋も同じ雛　【文化七年―七番日記】
ぬり立の看板餅や東風の吹　【文化十二年―七番日記】

春(はる)の雪(ゆき)

紫の袖にちりけり春の雪　【享和三年―享和句帖】
春の雪あら菰敷て降らせけり　【文化十三年―七番日記】
雪國の雪もちよほ〳〵殘りけり　【文化十五―七番日記】
あさましやちよつとのがれに殘る雪　【文政年中―逭叢・發句集】

雪解(ゆきげ)

里の子が枝川作る雪解哉　【寛政五年―句帖】
世に住めばむりにとかすや門の雪　【文化六年―鶚の井・裏白集】
雪とけてくり〳〵したる月夜哉　【文化七年―七番日記】
沙汰なしに雪のとけたる山家哉　【文化七年―七番日記】
片隅に鳥かたまる雪解かな　【文化七年―七番日記】
庵の雪下手な消やうしたりけり　【文化十年―七番日記・發句集】
十ばかり鍋うつむける雪解哉　【文化十一年―七番日記】
庵の餅雪より先に消にけり　【文化十二年―七番日記】
門の雪なぶりどかしにされにけり　【文化十四年―七番日記】
雪どけや鷺が三疋立臼に　【文化十四年―七番日記・發句集】

町住や雪とかすにも錢がいる　【文化十五年―七番日記】

門前や子供の作る雪解川　【文政二年―句帖】

嫌れぬうちに消けり門の雪　【文政五年―九番日記】

素鏡が母八十八歳賀

門畑や米の字なりの雪解水　【文政年中―發句集】

雪解や門は雀の十五日　【文政年中―百叢・嘉永板發句集】

鍋の尻ほしならべたる雪解かな　【文政年中―嘉永板發句集】

初雷

初雷やエゾの果迄御代の鐘　【享和三年―享和句帖】

初ものや大雷の光さへ　【文政七年―九番日記】

春の霜　忘れ霜　霜解

足きりと見えてどつさり春の霜　【文政五年―九番日記】

鶯も元氣を直せ忘れ霜　【文化九年―七番日記】

霜どけやとらまる枝は茨也　【享和三年―享和句帖】

春雨

武家町

春雨や窓から直ぎる肴うり　【寛政年中―句帖・七番日記】

北嵯峨や春の雨夜のむかし杵　【享和三年―享和句帖】

ほうろくをかぶつて行くや春の雨　【享和四年―句帖】

春雨のいくらもふれよ茶呑橋　【享和四年―句帖】

きのふ寐し嵯峨山みゆるはるの雨　【文化元年―はたけせり】

春雨や家鴨よちよち門歩き　【文化二年―旅日記】

宿二山寺一

春雨や窓も一人に一ツづゝ　【文化三年―旅日記】

五百崎遊二茶店一

春雨や盃見せて狐よぶ　【文化七年―七番日記】

わら苞やとうふのけぶる春の雨　【文化八年―七番日記】

餅欠の石と成りけり春の雨　【文化八年―七番日記】

春雨や喰れ殘りの鴨が鳴　【文化十年―七番日記・發句集】

善光寺

しんしんとしんらん松の春の雨　【文化十二年―七番日記】

鳩、いけんしていはく

梟よつらくせ直せ春の雨　【文化十二年―七番日記・發句集】

行灯で茶をつみにけり春の雨　【文化十二年―七番日記】

春雨や籔に吹るゝ捨手紙　【文化十四年―七番日記】

初午

幣振てとうふ下るや春の雨　【文化十五年―七番日記】

春雨やしたゝか錢の出た窓へ　【文化十五年―七番日記】

笹の葉の春雨なめる鼠哉　【文化十五年―七番日記】

芝居日と人はいふ也春の雨　【文政二年―句帖】

馬迄も旅籠とまりや春の雨　【文政二年―句帖・おらが春】

御守のわらぢかざるや春の雨　【文政三年―句帖】

はる雨や鯲ののぼる程の瀧　【文政三年―句帖】

はる雨や猫に踊ををしへる子　【文政三年―句帖】

線香や平内堂の春の雨　【文政三年―句帖】

菜のゆだる湯の涌口や春の雨　【文政四年―句帖】

湯桁迄菜を呼込や春の雨　【文政八年―新集】

春雨や腹をへらしに湯につかる　【文政八年―新集】

春雨に大欠伸する美人哉　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

袖たけの垣の嬉しや春の雨　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

傘さして箱根越すなり春の雨　【文政年中―發句集】

春甫新宅賀

安堵して鼠も寐るよ春の雨　【文政年中―發句集】

婚禮

春雨や相に相生の松の聲　【文政年中―發句集】

春雨や鼠のなめる角田川　【文政年中―發句集】

穴藏の中でものいふ春の雨　【文政年中―發句集】

負弓の藪にかゝりて春の雨　【文政年中―發句集】

餅買に箱提灯や春の雨　【文政年中―嘉永板發句集】

三助がはつせ詣やはるの雨　【文政年中―嘉永板發句集】

掃留の赤元結や春の雨　【文政年中―嘉永板發句集】

朝市に大肌ぬぎや春の雨　【文政年中―嘉永板發句集】

陽炎（かげろふ）

陽炎や子をなくしたる鳥の顔　【文化三年―旅日記】

陽炎や道灌どのゝ物見塚　【文化八年―我春集・七番日記】

陽陽炎や貝むく奴がうしろから　【文化九年―七番日記】

陽炎に成ても仕まへ草の家　【文化十年―七番日記】

陽炎や臼の中からま一すぢ　【文化十年―七番日記發句集】

陽炎や縁からころり寐ぼけ猫　【文化十一年―七番日記】

陽炎や土の姉さま土僧都　【文化十一年―七番日記】

陽炎やわらで足ふく這入口　【文化十一年―七番日記】

陽炎や雫ながらの肴錢　【文化十一年―七番日記】

陽炎や猫にもたかる歩行神　【文化十二年―七番日記】

陽炎や狐の穴の赤の飯　【文化十二年―七番日記】

陽炎に扇を敷て寢たりけり　【文化十二年―七番日記】

淺草寺

さむしろや錢と樒と陽炎と　【文化十二年―七番日記】

陽炎や笠へそりおとす月代に　【文化十二年―七番日記】

陽炎や大の字形に殘る雪　【文化十三年―七番日記】

陽炎や下駄屋が桐の青葉吹く　【文化十五年―七番日記】

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談　【文化十五年―七番日記・發句集】

陽炎や新吉原の晝の體　【文化十五年―七番日記】

居去

陽炎や手に下駄はいて善光寺　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

陽炎の中にうごめく衆生哉　【文政二年―句帖】

陽炎やそば屋が前の箸の山　【文政六年―九番日記・發句集】

陽炎や子をかくされし親の貌　【文政年中―發句集】

霞（かすみ）

しら浪に夜はもどるか遠がすみ　【寛政四年―句帖】

三文がかすみ見にけり遠目鏡　【寛政四年―句帖】

別戀

きぬ〴〵やかすむ迄見る妹が家　【寛政五年―句帖】

京見えて臑をもむ也春がすみ　【享和三年―享和句帖】

中村二竹古郷に赴けば、本郷追分迄おくる

霞み行や二親持ちし小すげ笠　【文化元年―旅日記】

かすむ日や夕山かげの飴の笛　【文化二年―旅日記・題叢】

柱をも拭しまひけり春霞　【文化二年―旅日記】

家もはや捨たくなりぬ春霞　【文化二年―旅日記】

うら窓にいつもの人が霞む也　【文化二年―旅日記】

春がすみ鍬とらぬ身のもつたいな　【文化三年―旅日記】

霞む日や花のお江戸も寐あく時　【文化四年―旅日記】

親にらむ平目もかすむ一つ哉　【文化七年―七番日記】

夕暮や霞む中より無常鐘　【文化七年―七番日記】

梟のこれはかすまぬつもり哉　【文化七年―七番日記】

けさ程やちさい霞も春ぢや迚　【文化八年―七番日記】

天上

かすむ日やさぞ天人の御退屈　【文化九年―株番・發句集】

古椀がはやかすむぞよ角田川　【文化九年―七番日記】

じや〳〵馬のつくねんとして霞む也　【文化九年―七番日記】

霞む日やとばかりけふもむだ仕事　【文化九年―七番日記】

婆どのゝ舌切雀それかすむ　【文化十年―七番日記】

かすむ日や飴屋がうらのばせを塚　【文化十年―七番日記】

かすむやら目が霞むやらことしから　【文化十年―七番日記】

古郷やいびつな家も一かすみ　【文化十年―七番日記】

御佛の手桶の月もかすむなり　【文化十年―七番日記】

むく／＼とかすみ給ふはどなた哉　【文化十年―七番日記】

西山やおのれがのるはどのかすみ　【文化十年―七番日記・發句集】

すりこ木の音に始まるかすみ哉　【文化十年―七番日記】

我里はどうかすんでもいびつなり　【文化十一年―七番日記】

茶を呑めと鳴子引なり朝霞　【文化十一年―七番日記】

かすむ日や／＼とてむだぐらし　【文化十一年―七番日記】

横がすみ足らぬ處が我家ぞ　【文化十二年―七番日記】

老婆洗衣畫

彼の桃も流れ來よ／＼春霞　【文化十三年―杖の竹・七番日記】

妻なしやありやかすんで居る小家　【文化十三年―七番日記】

春がすみいつち小いぞおれが家　【文化十四年―七番日記】

輕井澤春色

笠でするさらば／＼や薄がすみ　【文化十四年―七番日記・發句集】

吳服やの朝聲かすみかゝりけり　【文化十四年―七番日記】

加賀守

梅ばちの大挑灯やかすみがち　【文化十五年―七番日記】
芝風に笠追なくすかすみ哉　【文化十五年―七番日記】
さらし布かすみの足に聳えけり　【文化十五年―七番日記　おらが春】
迹の家見るや霞めばかすむとて　【文政二年―句帖】
霞むならかすめと捨し菴かな　【文政二年―句帖】
一引や下手な霞もおれが家　【文政二年―句帖】
横乘の馬のつゞくや夕がすみ　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】
霞む日やしんかんとして大坐舗　【文政二年―おらが春・發句集】
かすみけり憎い宿屋も迹の村　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

上野

白壁のそしられながら霞かな　【文政二年―おらが春・句帖】
拍子木や供のかけよる霞から　【文政三年―句帖】
跡供は霞引けり加賀守　【文政三年―句帖】
誰それとしれてかすむや門の原　【文政五年―九番日記　發句集】
盗人のかすんでけゝら笑ひかな　【文政五年―九番日記】
傘の雫ながらにかすみかな　【文政九年―九番日記】
空色の傘もかすむや女坂　【文政六年―九番日記】
しなの路やそれ霞それ雪が降る　【文政六年―九番日記】

霞より引つゞく也諸大名　【文政七年―九番日記】

還暦賀

老松や又あらためていく霞　【文政七年―新々五百題、發句集】

破鐘のかすめる聲もむつかしや　【文政年中―題叢】

けふも〱霞んで暮らす小家哉　【文政年中―發句集】

茶翁とあそぶ

此門の霞むたそくや隅田の鶴　【文政年中―發句集】

茶鳴子のやたらに鳴るや春がすみ　【文政年中―嘉永板發句集】

牡丹餅を喰はへて霞む烏かな　【文政年中―嘉永板發句集】

鐘霞む

婆ゞがつく鐘もうつすり霞む哉　【文政七年―新集】

朧月

段々に朧の月よこもり堂　【文化三年―旅日記】

朧月夜はあつけなくなりにけり　【文化五年―旅日記】

朧

夕されば朧作るぞ小藪から　【文化十一年―七番日記】

木の端のおれが立ても朧也　【文化十一年―七番日記】

夕さればけちな藪でもおぼろなり　【文化十三年―七番日記】

すみだ川くれぬうちより朧也　【文政九年―墨田川集】

汐干

汐干潟雨しと〱と暮かゝる　【文化元年―旅日記】

女から先へかすむぞ汐干潟　【文化元年―旅日記】

青空のとつぱづれ也汐干潟　【文政三年―句帖】

人眞似に鳩も雀も汐干哉　【文政年中―題叢】

人事

藪入

やぶ入の先に立けりしきみ桶　【享和四年―句帖】

やぶ入や先つゝがなき墓の松　【享和四年―句帖】

藪入や墓の松風うしろ吹　【文化七年―七番日記・句帖】

藪入の顔にもつけよ桃の花　【文政七年―山若葉集】

藪入や連に別レて櫛仕廻ふ　【文政八年―新集】

藪入や三組一處に成田道　【文政年中―狹莚集・千題集】

藪入のわざと暮すや草の月　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

出代

出代の市にさらすや五十兒　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

出代や直ぶみをさるゝ上りはな　【文政六年―九番日記】

一年を實て親を養ふは孝行云ん方なし

出代や汁の實なども蒔て置ク　【文政年中―發句集】

初午

花の世を無官の狐啼にけり　【文政二年―おらが春・發句集】

涅槃

蒲公英の天窓そつたるねはん哉　【文化十二年―七番日記】

涅槃像錢見ておはす兒もあり　【文化十三年―四歌仙】

御佛や寐ておはしても花と錢　【文政二年―おらが春・句帖】

寐ておはしても佛ぞよ花が降る　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

小うるさい花が咲とて寢釋迦哉　【文政二年―句帖・おらが春】

相伴に我等もころり涅槃哉　【文政三年―句帖】

ほつくりと死ぬが上手な佛哉　【文政九年―句帖】

辻堂や掛つ放しのねはん像　【文政九年―句帖】

二月十五日雪ふりけるに

花のところへ雪のふる涅槃哉　【文政年中―發句集】

御ねはんやとりわけ花の十五日　【文政年中―嘉永板發句集】

二日灸（ふつかぎう）

隱れ家や猫にもすゑる二日灸　【文政年中―句帖・おらが春】

曲水（きよくすゐ）

筆添ておもふ盃流しけり　【文政三年―句帖・嘉永板發句集】

曲水やどたり寢ころぶ其角組　【文政三年―句帖】

盃よ先流るゝな三日の月　【文政年中―眞蹟・嘉永板發句集】

川下や果は闇どりの小盃　【文政年中―嘉永板發句集】

雛（ひな）

煙たいとおぼしめすかよ雛顔　【文化六年―旅日記】

み肴に櫻やよけん雛の前　【文化七年―七番日記】

けふの日もがらくた店の雛哉　【文化九年―七番日記】

御雛をしやぶりたがりて這ふ子哉　【文化十一年―七番日記】

へな土でおッつくねても雛かな　【文化十五年―七番日記】

煤け雛然も上坐を召れけり　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

生酔の張り番なさる雛かな　【文政七年―九番日記】

古い雛いつち上坐にましましける　【文政七年―九番日記】

手のひらにかざつて見るや市の雛　【文政年中―發句集】

上巳之部

浦風にお色の黒いひゝなかな　【文政年中―嘉永板發句集】

花咲ヵぬかた山かげも雛まつり　【文政年中―嘉永板發句集】

鞦韆（ふらんど）

鞦韆　和名由左布利　里言仙良武伊

ふらんどや櫻の花をもちながら　【文政七年―句帖・たねおろし】

爐塞（ろふさぎ）

爐塞

炉の蓋にはや蝶どもが寐たりけり　【文化十一年―七番日記】

ぬり塞ぐ爐にも吉・日さわぎ哉　【文政八年―新集】

野山燒（のやまやく）

野火つけてはらばうて見る男哉　【文化四年―旅日記】

寝よ子供やける山から鬼が來る　【文化十年―七番日記】

野火山火夜も世の中よいとやな　【文化十年七番日記】

寝がてらや咄がてらや山を燒く　【文化十二年―七番日記】

おれがのは野火にもならで仕廻けり　【文化十五年―七番日記】

山焼の明りに下る夜舟哉　【文化十五年　七番日記・狭莢集】

くゝつけた人も詠める山火哉　【文政二年―句帖】

種蒔

山畠や種蒔よしと鳥のなく　【文化三年―旅日記】

我蒔た種をやれ〳〵けさの露　【文政年中―發句集】

畠打

棒切でつゝいておくや菴の畠　【文化十年―七番日記】

畠打の眞似して歩く烏哉　【文化十一年―七番日記】

打畠や世を立山の横つらに　【文化十五年―七番日記】

門前や半分打ておく畠　【文化十五年―七番日記】

山畠や人に打せてねまる鹿　【文化十五年―七番日記】

門畠や一鍬づゝに腰たゝく　【文政七年―九番日記】

畠打や鍬でをしへる寺の松　【文政七年―九番日記】

畑打や子が這ひ歩行くつゝじ原　【文政年中―嘉永版發句集】

畑打や田鶴啼キわたる邊り迄　【文政年中―嘉永版發句集】

田打

二渡し越えて田を打ひとり哉　【文政六年―九番日記】

接木

雑巾をはやかけらるゝつぎ木哉　【文化八年―七番日記】

山烏おれがつぎ木を笑ふ哉　【文化九年―七番日記】

むだ草に伸勝たれたるつぎ木哉　【文化十一年―七番日記】

庭先や接木の弟子が茶をはこぶ　【文化十五年―七番日記】

たのみなきおれがさしてもつく木哉　【文政三年　句帖】

接穂(つぎほ)

夜に入れば直したくなる接穂哉　【文化五年―旅日記・題叢】

餅腹をこなしがてらのつぎほ哉　【文化十五年―七番日記・おらが春】

歯も持たぬ口に咥へて接穂哉　【文政三年―句帖・發句集】

挿木(さしき)

揚土にしばしのうちのさし木哉　【文化十五年―七番日記】

苗代(なはしろ)

我こねたのも苗代と成にけり　【文化十三年―七番日記】

苗代は庵のかざりに青みけり　【文政二年―らが春・句帖】

草餅(くさもち)

草餅を先吹にけり筑波東風　【文化七年―七番日記】

ふや〳〵の餅につかるゝ草葉哉　【文化七年―七番日記】

とてもなら餅につかれよ庵の草　【文化九年―七番日記】

おらが世やそこらの草も餅になる　【文化十二年―七番日記・發句集】

草餅を鍋でこねても祝ひけり　【文政二年―句帖】

五加木飯(うこぎめし)

西行に御宿申さんうこぎ飯　【文政年中―花實發句集】

朝顔蒔(あさがほまく)

世にあれば蕣もまくばかり也　【文化十一年―七番日記】

早さびし朝顔蒔といふはたけ　【文政年中―狹莖集・發句集】

摘草(つみくさ)

草摘やうれしく見ゆる土の鈴　【文化二年―旅日記】

里の子や草摘んで出る狐穴　【文化九年―七番日記】

茶摘唄（ちやつみうた）

木曾山やしごき捨るも茶つみ唄　【文化八年―七番日記】

茶摘（ちやつみ）

御佛の茶でもつまうかあゝまゝよ　【文化十三年―七番日記】

茶もつみぬ松もつくりぬ丘の家　【文政年中―題叢・狹衣集】

扱茶（こきちや）

茶を扱やふくら雀の顔に迄　【文化四年―旅日記】

古笠へざくり／＼とこぎ茶哉　【文化十年―七番日記】

ごろり寐や先は扱茶も一莚　【文化十五年―七番日記】

動物

落し角（おとしづの）

さをしかに手拭かさん角の迹　【文化十年―七番日記・題叢】

人鬼の見よ／＼鹿の角落る　【文政三年―句帖】

角落てはづかしげ也山の鹿　【文政三年―句帖・嘉永板發句集】

さをしかや蝶を振るッて又眠る　【文政七年―九番日記】

小男鹿の落した角を枕かな　【文政年中―嘉永板發句集】

戀猫（こひねこ）

山猫も戀は致すや門のぞき　【文化二年―旅日記】

化るなら手拭かさん猫の戀　【文化十年―七番日記】

庵の猫玉の盃そこなきぞ　【文化十年―七番日記】

蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀　【文化十一年―七番日記・發句集】

嗅で見てよしにする也猫の戀　【文化十一年―七番日記】

あれも戀ぬすつと猫と呼れつゝ　【文化十二年―七番日記】

鼻先に飯粒つけて猫の戀　【文化十二年―七番日記】

淨はりの鏡見よ〳〵猫の戀　【文化十四年―七番日記】

山猫も作り聲して忍びけり　【文政五年　九番日記】

戀猫や口なめずりをして逃る　【文政七年―九番日記】

戀猫のぬからぬ皃でもどりけり　【文政七年―九番日記・新集】

夜すがらや猫も人目を忍戀　【文政七年―九番日記】

寐て起て大欠(アクビ)して猫の戀　【文政年中―發句集】

うかれ猫

梅が香にうかれ出けり不性猫　【文化五年―旅日記】

むさし野や只一つ家のうかれ猫　【文化九年―株番・七番日記】

うかれ猫どの面さげて又來たぞ　【文化十三年―七番日記】

うかれ猫奇妙に焦げて參りけり　【文化十三年―七番日記・發句集】

庵の猫しやがれ聲にてうかれけり　【文化十四年―七番日記】

面の皮いくらむいてもうかれ猫　【文化十五年―七番日記】

おどされて引返しけりうかれ猫　【文政三年―句帖・嘉永板發句集】

うかれ猫天窓はりくらしたりけり　【文政五年―九番日記】

猫の妻

のら猫も妻かせぎする夜也けり　【文化二年―旅日記】

のら猫も妻乞ふ聲は持にけり　【文化四年――旅日記】

汚れ猫それでも妻は持に鬼　【文政三年――句帖】

猫の子

松原に何をかせぐぞ子もち猫　【文化九年――株番・七番日記】

猫の子や秤にかゝりつゝざれる　【文化十五年――七番日記・おらが春】

人中を猫も子故の盗み哉　【文政七年――九番日記】

鶯

鶯ももどりがけかよおれが窓　【文化元年――旅日記】

鶯よこちむけやらん赤の飯　【文化元年――旅日記】

鶯や何のしやうもない門に　【文化四年――旅日記】

三日月やふはりと梅にうぐひすが　【文化八年――我春集・七番日記】

鶯のふい〳〵何が氣にくはぬ　【文化八年――七番日記】

かさい酒かさい鶯鳴にけり　【文化八年――七番日記】

欲の柄に鶯鳴くや小梅村　【文化八年――我春集・七番日記】

鶯にあてがつておく垣根哉　【文化十年――七番日記・發句集】

鶯の袖するばかり鳴きにけり　【文化十年――七番日記】

鶯や田舎廻りがらくだんべい　【文化十一年――七番日記】

鶯があのものといふ口つきぞ　【文化十一年――七番日記】

鶯が呑ぞ浴びるぞ割下水　【文化十一年――七番日記】

山崎や山鶯も下々の客　【文化十一年――七番日記】

袖垣にたゞ止つてもうぐひすぞ　〔文化十一年—七番日記〕

咄賃に鶯鳴て居たりけり　〔文化十二年—七番日記〕

鶯も添て五文の茶代哉　〔文化十四年—七番日記〕

月ちらり鶯ちらり夜は明けぬ　〔文化十五年—七番日記〕

鶯よけさは彌太郎事一茶　〔文化十五年—七番日記〕

そこに居よ下手でもおれが鶯ぞ　〔文化十五年—七番日記〕

鶯や垣踏ンで見ても一聲　〔文化十五年—七番日記〕

うぐひすや男法度のおくの院　〔文政二年—句帖〕

鶯の馳走に掃し垣根かな　〔文政二年—おらが春・句帖〕

鶯のまてに啼けりつんぼ庵　〔文政二年—句帖〕

來るも〱下手鶯ぞおれが垣　〔文政二年—句帖〕

天王寺

鶯や彌陀の淨土の東門　〔文政三年—句帖〕

鶯のまてに歩行や紺屋敷　〔文政三年—句帖・發句集〕

御殿山

鶯も親子づとめや梅の花　〔文政五年—九番日記・發句集〕

鶯がぎよつとするぞよ咳ばらひ　〔文政五年—七番日記〕

鶯はとんぼ返りも上手也　〔文政六年—九番日記〕

鶯や品よくとまる竹の葉に　〔文政七年―九番日記〕

鶯やよくあきらめた籠の聲　〔文政七年―寂砂子・發句集〕

鶯の鳴だけ借りし明地かな　〔文政八年―新　集〕

鶯や子に人中を見せがてら　〔文政八年―新　集〕

鶯や雀はせゝる報謝米　〔文政八年―新　集〕

鶯ののにして鳴くや留守御殿　〔文政九年―句　帖・發句集〕

鶯や黄色の聲で親を呼ぶ　〔文政年中―俳林良材集〕

黄鳥や泥足ぬぐふ梅の花　〔文政年中―發　句　集〕

近江

袖下は皆うぐひすや小關越　〔文政年中―狂葉集・發句集〕

鶯の目利して啼く我家かな　〔文政年中―嘉永板發句集〕

是程の上鶯を田舍かな　〔文政年中　嘉永板發句集〕

經讀鳥（きやうよみどり）

今の世も鳥は法華經鳴にけり　〔文政二年―おらが春〕

雲雀（ひばり）

摘殘る草の先より夕雲雀　〔文化元年―句日記〕

鳴雲雀人の皃から日の暮る　〔文化元年―旅日記〕

木曾山はうしろになりぬ鳴雲雀　〔文化元年―旅日記〕

野大根も花咲にけり鳴雲雀　〔文化元年―旅日記・題叢〕

淺草や家尻の不二も鳴雲雀　〔文化七年―九番日記〕

三四尺それてもよいぞ鳴く雲雀 【文化九年—七番日記】

下りよ〳〵野火が付いたぞ鳴く雲雀 【文化九年—七番日記】

菫飯をたべにおりたる雲雀哉 【文化十年—七番日記・題叢】

釣舟は花の上こぐ雲雀哉 【文化十年—七番日記】

宇治山や寺はどんちやん夕雲雀 【文化十五年—七番日記】

松嶋や小隅は暮て鳴雲雀 【文政二年—句帖・おらが春】

横乘の馬のつゞくや夕雲雀 【文政二年—おらが春・發句集】

子を隱す藪の廻りや啼く雲雀 【文政二年—おらが春】

田へ落つと見せて麥より雲雀哉 【文政七年—九番日記】

燕（つばめ）

片里や宿なし乙鳥暮いそぐ 【文化二年—旅日記】

島〳〵も佛法ありて燕哉 【文化四年—旅日記】

婆見やれあれよ乙鳥がまめな皃 【文化十一年—七番日記】

なぜぢややら脇の乙鳥はとくに來ぬ 【文化十一年—七番日記】

目を覺せあこが乙鳥も參たぞ 【文化十年—七番日記】

いざこざをじつと見て居る乙鳥哉 【文化十二年—七番日記】

燕もおれが門をば嫌ふげな 【文政三年—句帖】

どれも〳〵〳〵口まめ乙鳥哉 【文政五年—九番日記】

大佛の鼻から出たる乙鳥哉 【文政五年—九番日記】

ふらんどにすり違ひけりむら乙鳥　【文政七年—九番日記】

乙鳥の泥口ねぐふぼたん哉　【文政八年—新集】

乙鳥子のけいこにとぶや馬の尻　【文政九年—句帖】

夕乙鳥我には翌のあてもなし　【文政年中—顧叢・嘉永板發句集】

南　都

朝起の古風を捨テぬ乙鳥哉　【文政年中—發句集】

歸雁（かへるかり）

門口の灯し霞みてかへる雁　【享和四年—旅日記】

行雁やきのふは見えぬ小田の水　【享和四年—旅日記】

兀山も見知つておけよかへる雁　【享和四年—旅日記】

立雁のぢろ〳〵見るや人の顔　【享和四年—旅日記】

かへる雁翌はいづくの月や見る　【享和四年—旅日記】

田の雁のかへるつもりか歸らぬか　【文化元年—旅日記】

けつそりと雁はへりけりよしず茶屋　【文化三年—旅日記】

玉川や臼の下よりかへる雁　【文化三年—旅日記】

雁にさへとり殘されし栖哉　【文化五年—九番日記】

雁起よ雪がとけるぞ〳〵よ　【文化七年—七番日記】

雁行な今錠あけるの家　【文化七年—七番日記】

夕暮や雁が上にも一人旅　【文化七年—七番日記】

いざさらば〳〵と雁のきげん哉　【文化七年―七番日記】
卅日なき里があるやら歸雁　【文化七年―七番日記】
有明の雁になりたや行雁に　【文化九年―七番日記】
かしましや江戸見た雁の歸り様　【文化十年―七番日記・發句集】
金輪際來ぬふりをして雁立ぬ　【文化十一年―七番日記】
泣な〳〵それ程まめで歸る雁　【文化十二年―七番日記】
かしましき雁もいに風立にけり　【文化十二年―七番日記】
釣人のぼんの凹より歸る雁　【文化十二年―七番日記】
歸る雁花のお江戸をいく度見た　【文化十二年―七番日記】
立際になるやさつさと歸る雁　【文化十三年―七番日記】
雁どもは歸る家をば持たけな　【文化十三年―七番日記】

高梨むら

歸り度雁は思ふやおもはずや　【文化十五年―七番日記】
雁行な小茶もほちや〳〵ほけ立に　【文化十五年―七番日記】
鳴な雁いつもわかれは同じ事　【文政四年―句帖】
夜伽して鳴たる雁よなぜ歸る　【文政五年―九番日記】
ひとり身やだまりこくつて雁かへる　【文政五年―九番日記】
行がけの駄賃になくや小田の雁　【文政年中―題叢・發句集】

寐た跡の尻も結ばず歸る雁　【文政年中—嘉永板發句集】

雉子（きじ）

痩臑にいさみをつける雉子哉　【文化四年—旅日記】

雉うろ〳〵門を覗くぞよ　【文化九年—株番・七番日記】

雉と臼寺の小晝は過にけり　【文化九年—七番日記】

きじなくや見かけた山のあるやうに　【文化九年—株番・題叢】

雉鳴や先今日は是ぎりと　【文化十年—七番日記】

大筵雉を鳴せて置にけり　【文化十一年—七番日記】

雉鳴くや道灌どのゝ馬先に　【文化十五年—七番日記】

山雉子や何に見とれてけろりくわん　【文化十五年—七番日記】

さをしかの背中借りてや雉の聲　【文政三年—句帖】

駕籠先や下にの聲ときじの聲　【文政四年—句帖】

夕雉の走り留りや鳰の海　【文政年中—發句集】

雉子鳴やきのふ焼れし千代の松　【文政年中—發句集】

呼子鳥（よぶこどり）

好〳〵や此としよりを呼子鳥　【文政七年—九番日記・發句集】

鷹化レ成鳩（たかくわしてはとゝなる）

新鳩よ鷹氣を出して憎まれな　【文政三年—句帖】

田鼠化成レ鶉（でんそくわしてうづらとなる）

飛鶉鼠のむかし忘るゝな　【文政三年—句帖】

雀成レ蛤（すゞめはまぐりとなる）

蛤になつても まけな江戸雀　【文政四年—句帖】

人は塚に雀蛤に成にけり　【文政四年—句帖】

親雀

大勢の子に疲れたる雀哉　【文化八年—七番日記】

子ども等に腹こなさする雀哉　【文化十一年—七番日記】

痩たりな子につかはるゝ門雀　【文化十三年—七番日記】

善光寺

開帳に逢ふや雀もおや子連　【文化十五年—七番日記・發句集】

それ馬が〳〵とやいふ親雀　【文化十五年—七番日記】

竹にいざ梅にいざとや親雀　【文政年中—題叢・發句集】

夕暮や親なし雀何と鳴　【文化七年—七番日記】

雀の子

赤馬の鼻で吹きけり雀の子　【文化八年—我春集・七番日記】

夕暮や雀のまゝ子松に鳴く　【文化八年—七番日記】

雀子を遊ばせて置く疊哉　【文化十年—七番日記】

我と來てあそべよ親のない雀　【文化十一年—七番日記・おらが春】

雀子のはや喰逃をしたりけり　【文政十二年—七番日記】

草の戸やみやけをねだる雀の子　【文化十二年—七番日記】

雀子やお竹如來の流し元　【文化十四年—七番日記・發句集】

雀子や佛の肩にちよんと鳴く　【文化十五年—七番日記】

さあござれこゝ迄ござれ雀の子　【文化十五年—七番日記】

しよんぼりと雀にさへもまゝ子哉　【文化十五年—七番日記】

雀子やそこのけ〳〵御馬が通る　【文政二年—句帖・おらが春】

雀子や女の中の豆いりに　【文政三年—句帖】

踏そめは千代の竹也雀の子　【文政三年—句帖】

ひよ子から氣が強い也江戸雀　【文政七年—九番日記】

生れ立からおぞいぞよ京すゞめ　【文政七年—九番日記】

慈悲すれば糞をする也雀の子　【文政七年—九番日記・發句集】

むだ鳴になくは雀のまゝ子哉　【文政七年—九番日記】

雀子のはやしりにけり隠れやう　【文政年中—遺稿・發句集】

雀子や川の中にて親を呼ブ　【文政年中—嘉永板發句集】

鳥の巣

おとされし巣をいく度見る鳥哉　【文化元年—旅日記】

鳥の巣のあり〳〵みゆる榎哉　【文化元年—旅日記】

鳥の巣や突おとされし朶に又　【文化元年—旅日記】

塊も心おくかよ巣立鳥　【文化二年—旅日記、狭[illegible]集題叢】

鳥の巣もはやいく度日の榎哉　【文化五年—旅日記】

鳥をとる鳥のすみかも焼れけり　【文化五年—旅日記】

鳥の巣や翌は切らるゝ門の松　【文政二年—句帖】

鳥でさへ巣を作るぞよ鈍太郎　【文政七年—九番日記】

我宿は何にもないぞ巣立鳥　【文政年中—發句集】

鳥の子

又むだに口明く鳥のまゝ子かな　【文政三年―句帖】

から口を又も明ぞよまゝ子鳥　【文政七年―九番日記】

巣の鳥の口あくかたや暮の鐘　【文政年中―題叢】

若鮎

花の散る拍子に急ぐ小鮎哉　【文化七年―七番日記】

わか鮎は西へ落花は東へ　【文化七年―七番日記】

笹陰を空頼みなる小鮎哉　【文化七年―七番日記】

わか鮎やとらるゝ穴を逃所　【文化十二年―七番日記】

田螺

鳴く田螺鍋の中ともしらざるや　【文化九年―七番日記】

さゞ波や田螺がにじる角大師　【文化九年―七番日記】

青芝ぞ爰迄ござれ田螺殿　【文化九年―七番日記】

小盥や今むく田螺辷り遊ぶ　【文化九年―七番日記】

地獄

夕月や鍋の中にて鳴ク田にし　【文政年中―發句集】

蛙

つるべにも一夜過ぎけりなく蛙　【享和三年―享和句帖】

かりそめの嫁入月夜や啼蛙　【享和三年―享和句帖】

蛙なくや始て寐たる人の家　【文化元年―旅日記】

草陰にぶつくさぬかす蛙哉　【文化　年―旅日記】

影ほうし我にとなりし蛙哉　【文化四年―旅日記】

我を見て苦い顔する蛙哉　文化五年――歲日記・發句集〕

花びらに舌打ちしたる蛙哉　〔文化七年――七番日記〕

象潟や櫻を浴てなく蛙　〔文化八年――我春集・七番日記〕

なく蛙溝の茶の花咲にけり　〔文化九年――七番日記〕

夕不二に尻を並べてなく蛙　〔文化九年――七番日記〕

迯足や尿たれながら鳴く蛙　〔文化九年――七番日記〕

草陰に蛙の妻もこもりけり　〔文化九年――七番日記〕

夕空をにらみつめたる蛙哉　〔文化九年――七番日記〕

むき〳〵に蛙のいとこはとこ哉　〔文化十年――七番日記〕

草の葉にかくれんぼする蛙哉　〔文化十年――七番日記〕

いうぜんとして山を見る蛙哉　〔文化十年――七番日記・おらが春〕

疱瘡のさんだらぼしに蛙哉　〔文化十年――七番日記〕

ことしや世がよいぞ小蛙大蛙　〔文化十三年――七番日記〕

痩蛙まけるな一茶是にあり　〔文化十三年――七番日記〕

寅の江戸大火

火の粉追ふ聲のはづれや鳴く蛙　〔文化十五年――七番日記〕

大蛙から順々に坐どりけり　〔文化十五年、――七番日記〕

庵崎や龜の子笊に鳴く蛙　〔文化十五年――七番日記〕

蛙啼や狐の嫁が出た〱と　【文政二年―句帖】

鵜鴒の尻ではやすや鳴蛙　【文政二年―句帖】

叱つてもシャア〱として蛙かな　【文政二年―句帖】

親分と見えて上坐に啼蛙　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

獨坐

おれとして白眼くらする蛙かな　【文政二年―句帖・おらが春】

産さうな腹をかゝへて啼蛙　【文政三年―句帖】

もとの坐について月見る蛙哉　【文政三年―句帖】

小蛙も鳴なり口をもつた迚　【文政四年―句帖】

なむ〱と蛙も石に並びけり　【文政五年―九番日記】

とや巾ながらとや又とぶ蛙　【文政五年―九番日記】

高うはムりますれど木から蛙哉　【文政六年―九番日記】

蕗の葉にとんで引くりかへる哉　【文政七年―九番日記】

天文を考へ顔の蛙哉　【文政七年―九番日記】

めい〱に鳴き場を坐とる蛙哉　【文政七年―九番日記】

三巡り

傍杭に江戸を詠める蛙哉　【文政八年―新集】

じつとして馬にかゞるゝ蛙哉　【文政八年―新集】

榎まで春めかせたり啼蛙　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

めでたさの煙聳えてなく蛙　【文政年中―發句集】

玉川や先ヅ御先へとぶ蛙　【文政年中―發句集】

其聲でひとつ踊れよ啼蛙　【文政年中―嘉永板發句集】

蛇衣脱（へびころもぬぐ）

法の世や蛇もそつくり捨衣　【文政二年―句帖】

法の山や蛇もうき世を捨衣　【文政二年―おらが春】

蛇穴出（へびあなをいづ）

けつかうな御世とや蛇も穴を出る　【文政七年―九番日記】

蝶（てふ）

あたふたに蝶の出る日や金の番　【享和四年―旅日記】

通り抜ゆるす寺也春のてふ　【享和四年―旅日記】

目の砂をこする握手に小てふ哉　【享和四年―旅日記】

湖の鶯から見えて春の蝶　【享和四年―旅日記】

ちり紙に漉込るゝな風のてふ　【文化元年―旅日記】

葭簀あむ槌にもなれし小てふ哉　【文化元年―旅日記】

肘まくら蝶は毎日來てくれる　【文化元年―多羅葉集】

蝶とぶや二軒もやひの痩畠　【文化二年―旅日記】

糸屑にきのふの露や春のてふ　【文化二年―旅日記】

文七とたがひ違ひに小てふ哉　【文化二年―旅日記】

あか棚に蝶も閑かよ一大事　【文化五年―旅日記】

初蝶の一夜寢にけり犬の椀　【文化五年―旅日記】

馬柄尺の御紋に暮る小蝶哉　【文化七年―七番日記】

蝶とんで我身も塵のたぐひ哉　【文化七年―七番日記】

むつましや生れかはらば野べの蝶　【文化八年―七番日記・題叢】

蝶とぶやしなのゝおくの草履道　【文化八年―七番日記】

蝶が來てつれて行けり庭のてふ　【文化九年―七番日記】

蝶とぶやいよの湯桁の左り八　【文化九年―七番日記】

糞汲が蝶にまぶれて仕廻けり　【文化九年―七番日記】

鐵砲の三尺先の小てふかな　【文化九年―七番日記】

うら住や五尺の空も春のてふ　【文化十年―七番日記】

蝶來るや何のしやうもない庵へ　【文化十年―七番日記】

泥足を蝶に任せて寐たりけり　【文化十一年―七番日記】

蝶小てふあはれ疲れて歸るかや　【文化十一年―七番日記】

犬と蝶他人むきでもなかりけり　【文化十一年―七番日記】

笛役は名主どのなり蝶のまひ　【文化十二年―七番日記】

やよや蝶そこのけ〳〵湯がはねる　【文化十三年―七番日記】

蝶とぶや横明りなる流し元　【文化十三年―七番日記】

蝶の身も業の秤にかゝる哉　【文化十四年―七番日記・九番日記】

大猫の尻尾でじやらす小蝶哉　【文化十五年―七番日記・おらが春】

麥に茶にてん〳〵舞の小蝶哉　【文化十五年―七番日記】

蝶々や菜の葉にとまる與次郎兵衛　【文化十五年―七番日記】

それがしが供する蝶よ一里程　【文化十五年―七番日記】

一莚蝶もほされて居りにけり　【文化十五年―七番日記】

茂林寺

蝶〳〵のふはりとんだ茶釜かな　【文政二年―おらが春】

葎からあんな胡蝶の生れけり　【文政二年―おらが春・句帖】

てふ飛や煮しめを配る蕗の葉に　【文政二年―句帖】

草庵の棚捜しする小てふ哉　【文政三年―句帖】

來る蝶に鼻を明するかきね哉　【文政三年―句帖】

おとなしや蝶も淺黄の出立は　【文政四年―句帖】

善の綱しつかり蝶のすがりけり　【文政四年―句帖】

風呂水の小川へ出たり飛ぶ胡蝶　【文政四年―句帖】

寢仲間に我も這入ぞ野邊の蝶　【文政四年―句帖】

人穴を見とゞけに入る小てふ哉　【文政五年―九番日記】

御坐敷の隅からすみへ小てふ哉　【文政六年―九番日記】

チンヒラ〳〵蝶も金比羅參哉　【文政六年―九番日記・發句集】

小娘の山路の案内しけるに、一むら雨のさと降りければ

木の陰や蝶と休むも他生の縁　【文政八年―新集・發句集】

かはい男の聲すれば

かんざしの蝶にひら〳〵とぶ小蝶　【文政八年―新集】

蝶飛ぶや此世にのぞみないやうに　【文政年中―題叢】

門の蝶子が這へばとびはへば飛ッ　【文政年中―發句集】

氣の毒やおれをしたうて來る小蝶　【文政年中―嘉永板發句集】

蝶寐るや草ひきむしる尻の先　【文政年中―嘉永板發句集】

蠶（かひこ）

さまづけに育られたる蠶哉　【文化十五年―七番日記・句帖】

村中にきげんとらるゝ蠶哉　【文化十五年―七番日記】

蚕醫者〳〵するむすめ哉　【文政三年―句帖】

繭（まゆ）

まゆひとつ佛のひざに作るなり　【文化九年―七番日記】

蜂（はち）

軒の蜂くつともいはぬくらし哉　【文化七年―七番日記】

一凸まんまと蜂に住れけり　【文化十一年―七番日記】

虻（あぶ）

それ虻に世話をやかすな障子窓　【文化十四年―七番日記・發句集】

山道や斯う來い〳〵と虻が飛ぶ　【文政三年―句帖】

道連の虻一つ我もひとりかな　【文政四年―句帖】

神風や虻が教へる山の道　【文政年中―發句集】

植物

梅

梅咲けど鶯啼けどひとり哉　〔享和三年―享和句帖〕

丘の梅けさ見し枝もなかりけり　〔享和三年―享和句帖〕

梅守に舌切らるゝなむら雀　〔享和三年―享和句帖〕

袖すれば祟る杉ぞよ梅の花　〔享和四年―旅日記〕

八丁堀の庵を疊む日

梅の花見倒し買の手にかゝる　〔文化元年―旅日記〕

ちる梅のかゝる賤しき身柱哉　〔文化元年―旅日記〕

あれ梅といふ間に曲る小舟哉　〔文化元年―旅日記〕

來るも〳〵下手鶯よ窓の梅　〔文化元年―旅日記〕

梅が香やおろしやを遣す御代にあふ　〔文化元年―旅日記〕

梅が香やどなたが來ても欠茶碗　〔文化元年―旅日記〕

蒲焼の香にまけじとや梅花　〔文化二年―旅日記〕

龜井天神宮

御櫻御梅の花松の月　〔文化二年―旅日記〕

梅咲くや見るかげもなき門に迄　〔文化二年―旅日記〕

あさぢふや犬の盆子も梅の花　〔文化二年―旅日記〕

それそこの梅も頼むぞ畚おろし　【文化五年―旅日記】

梅咲くやあはれことしももらひ餅　【文化五年―旅日記】

幼子や握々したる梅の花　【文化七年―七番日記】

藪の梅主なし狀のさらさるゝ　【文化七年―七番日記】

梅の木に何か申て出替りぬ　【文化七年―七番日記】

我梅やとにかく薄き衆生緣　【文化七年―七番日記】

へな土や草履のうらも梅の花　【文化八年―七番日記】

もゝんじの出さうな藪を梅の花　【文化九年―七番日記】

團十郎

咲たりな江戸生ぬきのうめの花　【文化九年―株番・嘉永板發句集】

月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ　【文化十年―七番日記・發句集】

梅の木のある顏もせぬ山家哉　【文化十年―梅双紙】

畠の梅したゝか犬におどさるゝ　【文化十年―七番日記】

溪の梅忽然と咲き給ひけり　【文化十一年―七番日記】

梅さくや我にとりつく不性神　【文化十一年―七番日記】

菴の梅よんどころなく咲にけり　【文化十一年―七番日記】

下戸村やしんかんとして梅の花　【文化十一年―七番日記・發句集】

紅梅にほしておくなり洗ひ猫　【文化十二年―七番日記】

膳先へ月のさしけり梅の花　【文化十二年―七番日記】

門の梅不性〳〵に咲にけり　【文化十二年―七番日記】

へし込や馬糞叺に梅の花　【文化十二年―七番日記】

先は梅こんがらせいたかお豆だぞ　【文化十三年―七番日記】

梅が香やあつたら月が家うらへ　【文化十三年―七番日記】

不性犬寐て吼るなり梅の咲く　【文化十四年―七番日記】

がら〳〵やぴい〳〵うりや梅の花　【文化十四年―七番日記】

梅咲くや現金酒の通帳　【文化十四年―七番日記】

かさい言葉

せなみさい赤いはどこの梅だんべい　【文化十四年―七番日記】

刈萱堂

子地藏よ御手出し給へ梅の花　【文化十五年―七番日記】

大福帳

梅が香よ湯の香よ外に三日の月　【文化十五年―七番日記】

うら店やつッぱり廻る梅の花　【文化十五年―七番日記】

一茶坊留守圖

そら錠と人には告よ梅の花　【文化十五年―七番日記・發句集】

梅咲くや地獄の釜も休日と　【文化十五年―七番日記】

小坊主よも一つ笑へ梅の花　〔文化十五年—七番日記〕

藪尻の賽錢箱や梅の花　〔文政二年—句帖〕

山鶯よりもめづらしく新金を歯にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花　〔文政二年—句帖・發句集〕

梅の花笑を盗めとさす月か　〔文政二年—句帖・おらが春〕

梅折や天窓の丸い影法師　〔文政二年—句帖・嘉永板發句集〕

藪村やまぐれあたりも梅の花　〔文政二年—句帖・おらが春〕

菰剝げば早赤〳〵と梅の花　〔文政二年—句帖・嘉永板發句集〕

闕守の灸點はやる梅の花　〔文政二年—おらが春〕

天神參

ちさい子の麻上下や梅の花　〔文政三年—句帖・發句集〕

齋日

梅さくや地獄の門も休み札　〔文政三年—句帖〕

梅散れば取て〳〵仕舞ふやかざり井戸　〔文政四年—句帖〕

梅咲やしなのゝおくも草履道　〔文政四年—句帖〕

神前

黑塗の馬もいさむや梅の花　〔文政四年—句帖〕

なさな子や目を皿にして梅の花　〔文政五年—九番日記〕

痩がまんして咲きにけり門の梅　［文政五年―九番日記］

中野の湯いつ湯に成るぞ梅の花　［文政五年―九番日記］

あながちに丸くならでも梅の月　［文政五年―九番日記］

羽折きた女も出たり梅の花　［文政五年―九番日記］

梅さくや手垢に光るなで佛　［文政六年―九番日記］

あくまのけさゝら三八宿の梅　［文政六年―九番日記］

梅が枝や欲にや希ぬ三ケの月　［文政七年―九番日記・發句集］

梅折るや盗ますぞと大聲に　［文政七年―九番日記・發句集］

紅梅やうつとしかれば二本まで　［文政年中―題叢・嘉永板發句集］

梅の木のある兒もせぬ山家哉　［文政年中―題叢・嘉永板發句集］

笠着るや梅の咲日を吉日と　［文政年中―發句集］

長谷の山中に年籠りして

我もけさ御僧の部なり梅の花　［文政年中―發句集］

相馬覧古

梅が香や平親王の御月夜　［文政年中―發句集］

梅咲や唐土の鳥の來ぬ先に　［文政年中―發句集］

信濃言葉

赤いぞよあのものおれが梅の花　［文政年中―嘉永板發句集］

柳（やなぎ）

餅組も一ざしきなりうめの花　【文政年中―嘉永板發句集】

梅に月いやみからみはなかりけり　【文政年中―嘉永板發句集】

鳥の音に咲うともせず藪の梅　【文政年中―嘉永板發句集】

茶の煙柳と共にそよぐ也　【寛政六年―句帖】

雨あがり朝飯過のやなぎ哉　【寛政十二年―花見二郎】

是からは大日本と柳哉　【享和三年―享和句帖】

行灯におつかぶさりし柳哉　【享和四年―旅日句】

身じろきもならぬ塀より柳哉　【享和四年―旅日記】

樂々と家鴨の留守の柳哉　【文化八年―七番日記】

けろりくわんとして鳥と柳哉　【文化八年―七番日記・發句集】

柳からもゝんぐわとて出る子哉　【文化十年―七番日記・おらが春】

ちよんぼりと不二の小脇の柳哉　【文化十一年―七番日記】

犬の子の咥へて寐たる柳哉　【文化十一年―七番日記】

畠打の内股くゞる柳かな　【文化十一年―七番日記】

大坂の人にすれたる柳かな　【文化十一年―七番日記】

門柳佛頂面をさする也　【文化十一年―七番日記】

蛇に成るけいこにくねる柳哉　【文化十二年―七番日記】

目に這入るやうな門でも青柳ぞ　【文化十二年―七番日記】

大犬をこそぐり起す柳哉　【文化十三年―七番日記】

きかぬ氣の江戸の門にも柳かな　【文化十三年―七番日記】

穴一の穴十ばかり柳哉　【文化十五年―七番日記】

通りぬけせよと垣から柳哉　【文化十五年―七番日記・おらが春】

白猫のやうな柳も御花哉　【文政二年―句帖・おらが春】

入口のあいそになびく柳かな　【文政二年―おらが春・發句集】

門柳天窓で分けて這入けり　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

我門はしだれ嫌ひの柳哉　【文政二年―句帖】

庵の錠いらぬ事とや柳吹く　【文政三年―句帖】

馬の子の柳潜りをしたり皃　【文政三年―句帖】

ずん切り際より一すぢ柳哉　【文政七年―九番日記】

そよ〳〵と江戸氣に染ぬ柳哉　【文政七年―九番日記】

さし柳(やなぎ)

六月のゆふべをあてやさし柳　【享和四年―旅日記】

さし柳翌は出て行く庵也　【文化二年―旅日記】

苗代にかくておきたしさし柳　【文化十年―七番日記】

青(あを)柳(やぎ)

青柳ややがて螢をよぶところ　【享和四年―旅日記】

青柳の慥にみゆる夜明哉　【享和四年―旅日記】

青柳や二軒もやひの茶呑橋　【文化二年―旅日記】

鶏〆る門の柳の青みけり　【文化五年―九番日記】
ちゝむさい庵も今は青柳ぞ　【文化十五年―七番日記】
青柳やよらずさはらず門に立　【文政四年―句帖】
皮剝が腰かけ柳青みけり　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】
人聲にもまれて青む柳かな　【文政年中―嘉永板發句集】

桃の花

福蟾ものさばり出たり桃の花　【文化元年―旅日記】
桃の門猫を秤にかける也　【文化二年―旅日記】
苦桃も節句に逢ふや赤い花　【文化十五年―七番日記】
麦などもほちや〳〵肥て桃の花　【文政八年―新集】
桃咲やほつほとけぶること し塚　【文政八年―新集】

櫻

七々叟と富岡八幡の開帳に詣、おく山にて

咲からに縄を張れし櫻哉　【文化元年―旅日記】
本降りのゆふべとなりし櫻哉　【文化元年―旅日記】
何櫻かざくら錢の世也けり　【文化二年―旅日記】
かいはいの口すぎになる櫻哉　【文化二年―旅日記】
穀つぶし櫻の下にくらしけり　【文化二年―旅日記】
うしろから犬のあやしむ櫻哉　【文化三年―旅日記】

竹阿十七忌　長應院ニ參る

古き日を忘るゝなとや櫻咲　〔文化三年―旅日記〕

ばゞが餅爺が櫻咲にけり　〔文化四年―旅日記〕

米蹈みも唄をば止めよ櫻ちる　〔文化五年―旅日記〕

ちる櫻けふもむちやくちやくらしけり　〔文化五年―旅日記〕

御佛もこち向玉ふ櫻哉　〔文化五年―旅日記〕

天の邪鬼踏れながらもさくら哉　〔文化七年―七番日記〕

上人は芹と見たる櫻哉　〔文化七年―七番日記〕

よるとしや櫻のさくも小うるさき　〔文化七年―七番日記〕

死支度致せ〱と櫻哉　〔文化七年―七番日記〕

散る櫻肌着の汗を吹せけり　〔文化七年―七番日記〕

老ぬれば櫻も寒いばかり哉　〔文化七年―七番日記〕

さくら花晋子の落書まがひなし　〔文政七年―九番日記〕

ヱタ寺の櫻まじ〱咲にけり　〔文化七年―七番日記〕

憎い程櫻咲かせる屑家哉　〔文化七年―七番日記〕

散櫻よしなき口を降り埋よ　〔文化七年―七番日記〕

から〱と下駄をならして櫻哉　〔文化八年―七番日記〕

誰も居ぬうしろ座敷の櫻哉　〔文化八年―七番日記〕

櫻花何が不足で散りいそぐ　〔文化八年―七番日記〕

櫻見て歩く間も小言哉　【文化八年―七番日記】

上野にて

十日様九日さまのさくらかな　【文化九年―名なし艸紙】

未だ不時満花を植木屋起したるに別世界に入る心ちして

あのくたら三百文の櫻哉　【文化九年―株番・七番日記】

時に范蠡なきにしもあらずさく櫻　【文化十年―七番日記】

傘にべたり／＼と櫻哉　【文化十年―七番日記】

何櫻かざくら花もむつかしや　【文化十一年―七番日記】

此やうな末世を櫻だらけ哉　【文化十一年―七番日記】

迷子のしつかり掴むさくら哉　【文化十一年―七番日記】

櫻さく大日本ぞ日本ぞ　【文化十一年―七番日記】

髭どのゝ鍬かけ櫻咲にけり　【文化十一年―七番日記】

隙あれや櫻かざして喧嘩買　【文化十一年―七番日記】

留守寺にせい出してさく櫻哉　【文化十二年―七番日記】

日本はばくちの錢もさくら哉　【文化十三年―七番日記】

けんどんなつむりにざぶと櫻哉　【文化十三年―七番日記】

塗下駄の方へと櫻ちりにけり　【文化十五年―七番日記】

小座敷や端折おろせばちる櫻　【文化十五年―七番日記】

大馬に尻こすらるゝ櫻哉　【文化十五年—七番日記】

御報謝と出した柄杓へ櫻哉　【文化十五年—七番日記】

櫻へと見えてじん〱ばしより哉　【文化十五年—七番日記・おらが春】

欲垢のぼんの凹へも櫻かな　【文政二年—句帖】

苦の娑婆や櫻が咲ばさいたとて　【文政二年—句帖】

櫻〱と唄はれし老木かな　【文政二年—句帖・おらが春】

茶屋むらの一夜にわきし櫻かな　【文政二年—おらが春】

石佛風除にしてさくらかな　【文政三年—句帖】

善の綱惡のさくらの咲にけり　【文政三年—句帖】

さい錢にあほり出さるゝ櫻かな　【文政三年—句帖】

寝むしろや櫻にさます足のうら　【文政三年—句帖】

拍子拔して散りかゝる櫻哉　【文政五年—九番日記】

天からでも降つたるやうに櫻かな　【文政五年—九番日記・發句集】

未練なく散るも櫻はさくら哉　【文政五年—九番日記】

櫻花見るも義理也京住居　【文政五年—九番日記】

吉原

夜目遠目にておくまいか櫻花　【文政七年—九番日記】

小蓮や錢と小蝶とちる櫻　【文政七年—九番日記】

世中をあつさりあさぎ櫻哉　【文政八年―新集】

つき合はむりにうかるゝ櫻哉　【文政八年―新集】

垣添やことし花もつわか櫻　【文政八年―新集】

見かぎりし古郷の櫻咲にけり　【文政九年―句帖】

一本のさくら持けり娑婆の役　【文政九年―句帖】

氣に入た櫻の陰もなかりけり　【文政年中―題叢・發句集】

世の中を木のもとにする櫻哉　【文政年中―題叢】

東西の花に散立られて、心も山にうつり行といふ日は、三月廿日也けり

喋くさき笠も櫻の降日哉　【文政年中―發句集】

御所にて

棒突が腮でをしへる櫻かな　【文政年中―發句集】

君が代の大飯喰うてさくら哉　【文政年中―發句集】

一夜さに櫻はさゝらほさら哉　【文政年中―發句集】

糸ざくら

大象もつなぐけぶりや糸ざくら　【文政五年―九番日記】

庭櫻

出切手を指にむすぶや庭櫻　【文政八年―新集】

江戸櫻

江戸櫻花も錢だけ光るなり　【文政三年―句帖】

夕櫻

夕櫻家ある人はとくかへる　【享和三年―享和句帖・花供養】

夕ざくらけふも昔に成にけり　【文化七年―七番日記】

夕櫻箱ぢやうちんで見たりけり　【文化十二年―七番日記】

人聲にほつとしたやら夕ざくら　【文政年中―嘉永板發句集】

夜ざくら

夜ざくらや美人天から下るとも　【文政三年―句帖】

下〳〵に生れて夜も櫻哉　【文政年中―題叢・發句集】

山櫻

見限りし古郷の山の櫻哉　【享和三年―享和句帖】

棒突も餅を賣りけり山櫻　【文化　年―旅日記】

山櫻髮なき人にかざさるゝ　【文化五年―旅日記】

山櫻花にけかちはなかりけり　【文化十一年―七番日記】

小うるさや山の櫻も評判記　【文化十三年―七番日記】

露の葉に煮〆配りて山櫻　【文化十三年―七番日記】

小坊主や親の供して山櫻　【文政年中―發句集】

山櫻皮を剝れて咲にけり　【文政年中―嘉永板發句集】

遲櫻

隣から氣毒がるや遲ざくら　【文政十年―あみだかさ】

初花

袖たけの初花櫻咲にけり　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

父ありて母ありて花に出ぬ日哉　【寛政四年―句帖】

花

夕暮や鳥とる鳥の花に來る　【享和三年―享和句帖】

花の山飯買ふ家はかすむ也　【文化二年―旅日記】

金の糞しさうな犬ぞ花の陰　【文化三年―旅日記】

傘の來し人をにらむや花の陰　【文化四年―旅日記】

花おの〳〵日本だましひいさましや　【文化四年―旅日記】

咲花やけふをかぎりの江戸住居　【文化四年―旅日記】

花咲くや足の乘物手の奴　【文化五年―旅日記】

花咲や目を縫れたる鳥の鳴く　【文化五年―旅日記】

さく花にぶつきり棒の翁哉　【文化七年―七番日記】

ちる花や已におのれも下り坂　【文化七年―七番日記】

花ちるや權現様の御膝元　【文化七年―七番日記】

散がての花よりもろき泪哉　【文化七年―七番日記】

花さけや佛法わたる蝦夷が嶋　【文化七年―何袋・七番日記】

斯う活て居るも不思議ぞ花の陰　【文化七年―七番日記】

花さくや欲のうき世の片隅に　【文化七年―七番日記】

花ちるや稱名うなる寺の犬　【文化七年―七番日記】

花の月のとちんぷんかんのうき世哉　【文化八年―七番日記】

ちる花のわらぢながらに一寢哉　【文化十年―七番日記】

有様は我も花より團子哉　【文化十一年―七番日記】

何のその花が咲うと咲くまいと　【文化十一年―七番日記】

ちる花に喧嘩買らが通りけり　【文化十一年――七番日記】

堪忍をいたしに行や花の陰　【文化十一年――番日記・多羅葉集】

花ちるな彌陀が御苦勞遊ばさる　【文化十二年――七番日記】

小うるさや山もなか〳〵花の何のと　【文化十三年――七番日記】

散花もつかみ込けりばくち錢　【文化十三年――七番日記】

花咲て本ンのうき世と成にけり　【文化十三年――七番日記】

おところへや花を折るにも口曲る　【文化十四年――七番日記・發句集】

花ちるやとある木陰も開帳佛　【文化十五年――七番日記・おらが春】

しんぼ高臺寺はしろぼきや入らぬお市小袖の裾ではく

ちる花やお市小袖の裾ではく　【文化十五年――七番日記】

花ちるや日の入かたが往生寺　【文化十五年――七番日記】

如ニ病得レ醫

花を折ル拍子にとれししやくり哉　【文化十五年――七番日記・發句集】

花のかげ南無さんなかりけり　【文政元年――松葉遥・茗荷】

花の陰あかの他人はなかりけり　【文政二年――おらが春句帖】

咲花を當に持出す佛かな　【文政三年――句帖】

咲花やこり〳〵したる坂を又　【文政三年――句帖】

花散てとつとくつろぐ御寺哉　【文政三年――句帖】

人に風花は申すに及ばぬぞ　【文政四年―句帖】

南無大師昔も花の降しよな　【文政四年―句帖】

花咲や道の曲りに立地藏　【文政七年―九番日記】

花咲や散ルや天狗の留主事に　【文政八年―新集】

まゝ子花いぢけ仕廻もせざりけり　【文政九年―句帖】

散る花のぱつぱと春はなくなりぬ　【文政九年―句帖】

花の木のもつて生れた果報哉　【文政年中―發句集】

さる人は病氣をつかふ花見かな　【文政年中―嘉永板發句集】

觀音奉納

只たのめ花もはら〱あの通り　【文政年中―發句集】

花の木に鷄寐るや淺艸寺　【文政年中―發句集】

人撰して一人なり花の陰　【文政年中―發句集】

花の山

あたら雨の晝ふりにけり花の山　【享和三年―享和句帖】

又けふも逢ひそこなひぬ花の山　【享和三年―享和句帖】

花莚

小莚や花草臥のとさ〱と　【文政三年―句帖】

小言いふ相手もあらば花莚　【文政七年―九番日記】

花の世

花の世は佛の身さへ親子哉　【文化十五年―七番日記】

苅萱堂

花盗人（はなぬすびと）

花の世は地蔵ぼさつも親子哉　【文政年中―発句集】

山の月花盗人をてらし給ふ　【文政二年―句帖・おらが春】

花守（はなもり）

花守や夜は汝が八重櫻　【文政年中―真蹟・嘉永板発句集】

花の雲（はなのくも）

挑灯ではやし立けり花の雲　【文政年中―句帖】

大和めぐりする人に旅の眞言といふをさづけて

かならずよ迹見よそはか花の雲　【文政年中―発句集】

花吹雪（はなふぶき）

花吹雪泥わらんぢで通りけり　【文政四年―句帖】

花見（はなみ）

首途の時薙髪して

剃捨て花見の眞似や檜笠　【寛政四年―句帖】

花見るもあぶなげのない所哉　【文化二年―旅日記】

ない袖を振て見せ〱花見哉　【文化十五年―七番日記】

赤髪にきせるをさして花見哉　【文政四年―句帖】

江戸聲や花見の果の喧嘩買ひ　【文政七年―九番日記】

今の世や猫も杓子も花見笠　【文政九年―句帖・発句集】

椿（つばき）

片〱は椿で持ちし小家哉　【享和四年―旅日記】

我門に甚我侭してさく椿　【文政四年―句帖】

百両の石にもまけぬつゝじ哉　【文政八年―新[illegible]・発句集】

かまくらや昔どなたの千代椿　【文政年中―発句集】

藤

何ぞ舞へ藤引かつぐ昔笠　【文化五年―旅日記】

藤さくや一文糊としきみ桶　【文化十二年―七番日記】

春の日の入所なり藤の花　【文政年中―發句集】

木の芽

彼視三釜三千鍾　如雀蚊虻相過

山椒をつかみ込んだる小なべ哉　【享和三年―享和句帖】

金のなる木のめばりけり穢多が家　【文化二年―旅日記】

樒の花

古桶や二文樒も花の咲　【文政年中―題叢】

山吹

山吹や草にかくれて又そよぐ　【文化七年―七番日記】

根岸

山吹をさし出し兒の垣根哉　【文化八年―七番日記・發句集】

山吹やまづ御先へととぶ蛙　【文化十三年―七番日記】

草の芽

門の草芽出すやいなやむしらるゝ　【文政二年―句帖】

芽出しから人さす艸はなかりけり　【文政年中―發句集】

草青む

垣添や猫の寢る程草青む　【文化十年―七番日記】

ひとはなに憎れ草の青むなり　【文政三年―句帖】

まん丸に草青みけり堂の前　【文政九年―句帖】

若草

上野にて

わか草に御裾引ずり給ひけり　【文化二年―旅日記】

櫻艸(さくらさう) 菫(すみれ)

草々も若いうちぞよ村雀　【文化七年―七番日記】

世につれて萢の草もわかいぞよ　【文化八年―七番日記】

わか草にどた〳〵馬の灸かな　【文化十一年―七番日記】

わか草ののう〳〵とする葉ぶり哉　【文化十一年―七番日記】

かくれ家や日に〳〵草は若くなる　【文化十三年―七番日記】

わか草に背中をこする野馬哉　【文化十五年―七番日記】

若艸をむざ〳〵ふむや泥わらぢ　【文政八年―新集】

若艸や北野参りの小供講　【文政年中―嘉永板發句集】

我國は草もさくらを咲にけり　【文政年中―狹蓑集・題叢】

今少たしなくも哉菫草　【享和三年―句帖・園清水物語】

野の菫あの家なくもあれかしな　【文化元年―旅日記】

地車におつぴしがれし菫哉　【文化元年―旅日記】

菓子書とる敷居際より菫哉　【文化元年―旅日記】

壁土に丸め込まるゝ菫哉　【文化二年―旅日記】

大菫小菫萢もむつかしや　【文化七年―七番日記】

蕾けふや生れん菫さく　【文化七年―七番日記】

鍋ずみのかゝれ迹しも菫哉　【文化七年―七番日記】

にくまれし妹が菫は咲にけり　【文化七年―七番日記】

菜の花

臼と塩の間より菫かな　【文化十一年―七番日記】

菜の花や行抜ゆるす山の門　【享和三年―享和句帖】

菜の花の横に寝て咲く庵哉　【文化五年―七番日記】

なむあみだおれがほまちの菜も咲た　【文化九年―株番・七番日記】

ほの〴〵と乞食の小菜も咲にけり　【文化九年―七番日記】

菜の花のとつぱづれなりふじの山　【文化九年―株番・七番日記】

喰屑の菜もはら〳〵と咲にけり　【文化九年―七番日記】

菜の花も猫の通ひぢ吹とぢよ　【文化十年―七番日記】

菜の花やかすみの裾に少しづゝ　【文化十一年―七番日記】

大菜小菜喰ふ側から花咲ぬ　【文化十一年―七番日記・發句集】

かぢけ菜のそれでも花のつもり哉　【文化十一年―七番日記】

ちぐはぐの菜種も花と成りにけり　【文化十一年―七番日記】

藪の菜のだまつて咲て居たりけり　【文化十三年―七番日記】

菜の花や四角な麥もまぜこぜに　【文政五年―九番日記】

かるた程門の菜の花咲にけり　【文政年中―發句集】

大根咲く

まかり出て花の三月大根哉　【文政年中―遺稿】

蕨

鎌倉の見える山也蕨とる　【享和三年―享和句帖】

鐵釘のやうな蕨も都哉　【文化十年―七番日記】

夏の部

時候

入梅

下手晴の入梅の山雲又出たぞ　【文化十四年―七番日記】

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ　【文政二年―おらが春・句帖】

六月

戸口から青水無月の月夜哉　【文政二年―句帖】

六月や月夜見かけて煤佛　【文政二年―句帖・發句集】

六月は丸にあつくもなかりけり　【文政九年―七番日記】

土用

寐心や膝の上なる土用雲　【享和三年―享和句帖】

白菊のつんと立たる土用哉　【文政五年―九番日記】

此雨は天から土用見廻かな　【文政六年―九番日記】

素鏡亭にて先ㇾ笠

二ツなき笠盗れし土用哉　【文政八年―清集】

鎗かけん坊主頭の土用照　【文政八年―清集】

夏の夜

夏の夜や二軒して見る草の花　【文政二年―書簡・嘉永版發句集】

夏の夜や背中合の惣後架　【文政五年―九番日記】

短夜

短夜をあくせくけぶる淺間哉　【文化九年―七番日記】

短くて夜はおもしろやなつかしや　【文化九年―七番日記】

露ちりて急にみじかくなる夜哉　【文化十年―七番日記】

行雲やだら〳〵急に夜がつまる　【文化十一年―七番日記】

今に知れ夜が短いといふ男　【文化十二年―七番日記】

泣雲水

わるびれな野に伏迚も短夜ぞ　【文化十二年―七番日記】

閑窓

田も見えて大事の〳〵短夜ぞ　【文化十三年―七番日記】

魁されたり、なむ闍[?]之佛

短夜やよしおくるゝも草の露　【文化十三年―七番日記】

短夜をうれしがりけり隱居村　【文政四年―句帖】

夜のつまる峠の家の寐よさ哉　【文政八年―新集】

短夜に竹の風癖直りけり　【文政年中―遺[?]叢。嘉永板發句集】

明易し

明易き闇の小すみの柳哉　【文化七年―七番日記】

暑し

あつき夜や江戸の小隅のへらず口　【文化七年―七番日記】

むさし野や暑さに馴れし茶の煙　【文化九年―七番日記】

あつき夜をありがたがりて寢たりけり　【文化十一年―七番日記】

隣ニ二階住

暑き夜をにらみ合たり鬼瓦　〔文化十二年―七番日記〕

喰ぶとり寐ぶとり暑さ〳〵哉　〔文化十三年―七番日記〕

遊女めが見てけつかるぞ暑い舟　〔文化十四年―七番日記〕

暑き日や子に踏せたる足のうら　〔文政十五年―七番日記〕

なほ暑し今來た山を寐て見れば　〔文政二年―おらが春・句帖〕

　　關宿舟中

暑き夜の荷と荷の間に寐たり鳧　〔文政二年―句帖・嘉永板發句集〕

南無あみだ佛の方より暑かな　〔文政二年―句帖〕

暑いとてつらで手習ひしたみかな　〔文政二年―おらが春〕

米國の上々吉のあつさ哉　〔文政二年―句帖〕

暑いぞよけふも一日遊び雲　〔文政四年―句帖〕

馬になる人やおか目も暑くるし　〔文政四年―句帖〕

遊ぶ夜の暑さたしなく成に鳧　〔文政四年―句帖〕

手に足におきどころなき暑哉　〔文政五年―九番日記〕

立じまの草履詠る暑哉　〔文政七年―九番日記〕

あつし〳〵と寐る仕事哉　〔文政八年―句帖〕

穀値段どか〳〵下るあつさ哉　〔文政九年―九番日記〕

蕗の葉にぼんと穴あく暑哉　〔文政年中―發句集〕

碓氷にて

しなの路の山が荷になる暑哉　〔文政年中―發句集〕

涼風（すゞかぜ）

涼風はあなた任せぞ墓の松　〔文化七年―七番日記〕

涼風も佛任せの我身かな　〔文化八年―七番日記〕

涼風に月をも添て五文哉　〔文化九年―七番日記・發句集〕

一本の草も涼風やどりけり　〔文化十一年―七番日記〕

涼風の横すぢかひに入る家哉　〔文化十一年―七番日記〕

裏店に住居して

涼風の曲りくねつて來たりけり　〔文化十二年―七番日記・發句集〕

涼風の吹く木へ縛る我子哉　〔文化十三年―七番日記・おらが春〕

涼風も一升入のふくべ哉　〔文政三年―句帖〕

菊女觀

涼風や何喰はせても二人前　〔文政五年―九番日記〕

すゞ風も隣の竹のあまり哉　〔文政年中―發句集〕

涼風やちから一ぱいきりぎりす　〔文政年中―發句集〕

涼し（すゞし）

四條河原

川中に床几三ツ四ツ夕すゞみ　〔寛政四年―句帖〕

涼し

能い女郎衆岡崎女良衆夕涼み　【寛政四年―句帖】

涼しさや鈌釜一ッひとりずみ　【寛政五年―句帖】

涼しさは黒節だけの小川哉　【享和三年―享和句帖】

行灯を持つてかたつく涼み哉　【享和三年―享和句帖】

一尺の竹に毎晩涼み哉　【享和三年―享和句帖】

近よれば祟る榎ぞゆふ涼み　【享和三年―享和句帖】

翌は剃る佛の皃や夕涼　【文化元年―旅日記】

蕣の折角咲ぬ門涼　【文化元年―旅日記】

一本もよその竹也夕納涼　【文化元年―旅日記】

舟板に涼風吹けどひだるさよ　【文化元年―旅日記】

夜涼や蟾が出ても福といふ　【文化二年―旅日記】

留別

涼しさや今出て行く青簾　【文化七年―七番日記】

うら門や誰も涼まぬ大榎　【文化七年―七番日記】

身のうへの鐘としりつゝ夕すゞみ　【文化八年―[illegible]】

藪原やしかしのんきな夕涼　【文化八年―七番日記】

鶴龜や梓ながらの夕涼　【文化九年―七番日記】

よるとしや涼しい月も直あきる　【文化九年―七番日記】

夜に入れば江戸の柳も凉しいぞ　〔文化九年―七番日記〕
門凉み夜は煠くさくなかりけり　〔文化十年―七番日記〕
芭蕉樣の臑をかぢつて夕凉　〔文化十年―七番日記〕
下々も下々下々の下國の凉しさよ　〔文化十年―七番日記〕
大の字に寢て凉しさよ淋しさよ　〔文化十年―七番日記〕
凉しさは天王樣の月夜哉　〔文化十年―七番日記〕
富士の氣で跨げば草も凉しいぞ　〔文化十一年―七番日記〕
草雫今拵へし凉風ぞ　〔文化十一年―七番日記〕
母親や凉みがてらの祭り帶　〔文化十一年―七番日記〕

年代未改

錢出した程は凉しくなかりけり　〔文化十一年―七番日記〕
魚どもは桶としらでや夕凉　〔文化十二年―七番日記・おらが春〕
妻なしは草を咲かせて夕凉　〔文化十二年―七番日記〕
夜凉や足でかぞへるゐちご山　〔文化十二年―七番日記〕
翌しらぬ盥の魚や夕凉　〔文化十二年―七番日記〕
凉しさや笠へ月代そり落し　〔文化十二年―七番日記〕

東本願寺御門跡

凉しやな彌陀成佛の此かたは　〔文化十二年―七番日記〕

あら涼しすゞしといふもひとり哉 〔文化十三年―七番日記〕

關之追善　七日〳〵とうつり行に

夜涼が笑納であありしよな 〔文化十三年―七番日記〕

わんぱくや縛られながら夕涼 〔文化十三年―七番日記〕

あこよ來よ轉ぶも上手夕涼 〔文化十三年―七番日記〕

田ぐるめに直ぶみされけり夕涼 〔文化十三年―七番日記〕

立涼寐涼さても涼しさや 〔文化十三年―七番日記〕

夕涼や汁の實を釣るせどの海 〔文化十四年―七番日記・題叢〕

涼まんと出れば下に〳〵哉 〔文化十四年―七番日記〕

犬ころが火入の番や夕涼 〔文化十五年―七番日記〕

寐て涼む月や未來がおそろしき 〔文化十五年―七番日記〕

橋涼し張良たのむ其沓を 〔文政二年―句帖〕

繼ッ子や涼み仕事に藁たゝく 〔文政二年―句帖〕

一尺の瀧も音して夕涼 〔文政二年―句帖〕

雲水に送る

鬼茨も添へて見よ〳〵一涼み 〔文政二年―おらが春〕

青草も錢だけそよぐ門涼み 〔文政二年―おらが春〕

人形町

人形に茶を運ばせて門凉み　【文政二年―おらが春・句帖】
夜〳〵や同じ面でも門すゞみ　【文政三年―句帖】
凉しさや土橋の上の煙草盆　【文政三年―句帖】

賀二新宅一

凉しさや糊のかはかぬ丸行燈　【文政三年―句帖】
愛〳〵とめん鶏よぶや下すゞみ　【文政三年―句帖】
夕凉に笠忘れけり跡の宿　【文政四年―句帖】
尻べたに莚のあとや一すゞみ　【文政四年―句帖】
一ツ窓客にとられて門すゞみ　【文政四年―句帖】
江戸で見た山は是なり一凉み　【文政四年―句帖】
子の母や凉みがてらの賃仕事　【文政四年―句帖】
夜凉みや大僧正のおどけ口　【文政五年―九番日記・新集】

隱居村

隣でも二番凉みや門の月　【文政七年―九番日記】
凉しさや青いつりがね赤い花　【文政八年―新集】
拵へた露も凉しや門の月　【文政年中―題叢】
門凉み人の葬に咲にけり　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】
凉しさや何所に住でも不二の山　【文政年中―狹藝集】

月さへもそしられ給ふ夕涼み　【文政年中―發句集】

蕪村の貧乏鬮て夕涼　【文政年中―發句集】

兩國橋上

下見ても法圖はないぞ涼船　【文政年中―發句集】

森市、京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水　【文政年中―發句集】

此月に涼みてのない夜なりけり　【文政年中―嘉永板發句集】

涼しさや笠を帆にして煮賣舟　【文政年中―嘉永板發句集】

青田（あをた）

脊戸の不二青田の風の吹過る　【文化二年―旅日記】

けいこ笛田はこと〴〵く青みけり　【文化七年―七番日記・題叢】

ほまち田も先青むぞよ〳〵　【文化十年―七番日記】

茶仲間や田も青ませて京參り　【文化十三年―七番日記】

青田からのつぺらぽうの草家哉　【文化十三年―七番日記】

起〳〵の欲目引はる青田かな　【文政二年―句帖・おらが春】

そんぢよそこ爰と青田の贔屓哉　【文政二年―句帖・おらが春】

青い田の露を肴やひとり酒　【文政六年―九番日記】

一人前田も青ませて夕木魚　【文政七年―九番日記】

夏山（なつやま）

夏山や一足づゝに海見ゆる　【享和三年―享和・句帖】

夏山や一人きけんの女郎花　【文化七年―七番日記・緖絶草】

夏山やばかていねいに赤い花　【文化十五年―七番日記】

清水（しみづ）

櫛水に髮撫上る清水哉　【寛政四年―句帖】

湧清水淺間のけぶり又見ゆる　【文化元年―旅日記】

夜に入ればせい出してわく清水哉　【文化九年―七番日記】

古郷や厠の尻もわく清水　【文化九年―七番日記】

さゝら賣三八どのゝ清水哉　【文化九年―七番日記】

三日月の清水守りておはしけり　【文化十年―七番日記】

人の世の錢にされけり苔清水　【文化十二年―七番日記】

戸隱山

居風呂に流し込んだる清水かな　【文政二年―おらが春】

小金原

母馬が番して呑す清水かな　【文政二年―おらが春・句帖】

此入りはどなたの庵ぞ苔清水　【文政二年―おらが春】

山番の爺が祈りし清水かな　【文政二年―おらが春・句帖】

山里は馬にかけるもしみづ哉　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

天文

薬降る（くすりふる）

神國は天から薬降りにけり　【文政五年――九番日記・發句集】

薬降る空よとてもに金ならば　【文政五年――八番日記】

五月雨（さみだれ）

五月雨や二階住居の艸の花　【享和　年――享和句帖】

十軒は皆はしか也五月雨　【享和三年――享和句帖】

五月雨や胸につかへる秩父山　【文化七年――七番日記】

ちよんぼりと鷺も五月雨じたく哉　【文化十三年――七番日記】

五月雨も仕廻のはらり〳〵哉　【文化十三年――七番日記・おらが春】

ひき殿は石法華かよ五月雨　【文化十五年――七番日記】

掃溜とうしろ合や五月雨　【文化十五年――七番日記】

五月雨や線香立したばこ盆　【文化十五年――七番日記】

五月雨も中休みかよ今日は　【文政二年――おらが春・句帖】

さみだれや肩など叩く火吹竹　【文政四年――句帖】

次の間へ毛抜かす也五月雨　【文政四年――句帖】

五月雨の竹にはさまる在所哉　【文政年中――真蹟・嘉永板發句集】

妙義

夕立（ゆふだち）

五月雨や夜もかくされぬ山の穴　【文政年中―發句集】
夕立や舟から見たる京の山　【文化元年―旅日記】
夕立に打任たりせどの不二　【文化八年―七番日記】
夕立やかみつくやうな鬼瓦　【文化九年―七番日記】
三粒でもそりや夕立よく　【文化九年―七番日記】
ござるぞよ戸隱山の御夕立　【文化十年―七番日記】
草二本我夕立をはやすなり　【文化十年―七番日記】
とかくしてはしした夕立ばかり也　【文化十一年―七番日記・題叢】
白雨がせんたくしたる古屋哉　【文化十一年―七番日記】
夕立やすつくり立る女郎花　【文化十三年―七番日記】

日和乞

やめ給へ御夕立といふうちに　【文化十三年―七番日記】
夕立の月代絞る木陰哉　【文化十四年―七番日記】
夕立や大肌ぬいで小盃　【文化十五年―七番日記】、
寢並んで遠夕立の評議哉　【文政二年―おらが春】、
言譯に一夕立の通りけり　【文政三年―句帖】
風ばかりにても夕立の夕かな　【文政三年―句帖】
夕立にまでにくまれし門田かな　【文政四年―句帖】

夕立がどつと腹だちまぎれかな　【文政四年―句帖】

夕立の取て返すや贔屓村　【文政四年―句帖】

夕立や赤い寝莫蓙に赤い花　【文政四年―句帖】

夕立や椽へもてたつ蕎麥の膳　【文政四年―句帖】

夕立に足たゝかせて寝たりけり　【文政四年―句帖】

夕立の裸湯うめて通りけり　【文政五年―九番日記】

夕立や追かけ〳〵又も又　【文政五年―九番日記】

止め給へ御夕立といふうちに　【文政七年―九番日記】

門掃除させて夕立來ざりけり　【文政七年―九番日記】

夕立やしやんと立ッてる菊の花　【文政八年―新集】

圖に乘つて夕立來るやけふも又　【文政八年―新集】

始るやつくば夕立不二に又　【文政八年―新集】

門畠やあつらへむきの一夕立　【文政九年―句帖】

夕立や行燈直す小椽先　【文政年中―嘉永板發句集】

夏の雨（なつのあめ）

着ながらも洗濯したり夏の雨　【文政四年―句帖】

夏の月（なつのつき）

夏の月と申すも一夜二夜哉　【享和三年―享和句帖】

夏の月柱なでゝも夜の明る　【文化元年―旅日記】

夏の月無きずの夜もなかりけり　【文化九年―七番日記】

象潟や能因どのゝ夏の月　【文化九年―七番日記】
戸口から難波がたなり夏の月　【文化九年―七番日記】
なぐさみにわらを打つ也夏の月　【文政二年―おらが春・句帖】
寢せつけし子のせんたくや夏の月　【文政六年―九番日記・發句集】
小むしろや茶釜の中の夏の月　【文政年中―嘉永板發句集】

雲の峰

しづかさや湖水の底の雲のみね　【寛政四年―句帖】
雲のみね見越〳〵て安蘇煙　【寛政六年―句帖】
雲の峰いさゝか松が退くか　【享和三年―享和句帖】
雲の峰立つや野中の握飯　【文化元年―旅日記】
すき腹に風の吹けり雲の峰　【文化二年―旅日記】
ちさいのは門にほしさよ雲の峰　【文化八年―七番日記】
涼しさよ手まり程なる雲の峯　【文化九年―七番日記】
むだ雲やむだ山作る又作る　【文化十年―七番日記】
ちよぼ〳〵と小峰並べる小雲哉　【文化十二年―七番日記】
うき雲の苦もなく峰を作りけり　【文化十五年―七番日記】
寢むしろや足でかぞへる雲の峰　【文化十五年―七番日記】
風有をもつて尊し雲の峰　【文政二年―句帖】
湖へずり出しけり雲の峰　【文政三年―句帖】

おとらじと峯拵へる小雲かな　【文政四年―句帖】

造作なく作り直すや雲の峰　【文政五年―九番日記】

手ばしこく疊仕廻ふや雲のみね　【文政五年―九番日記】

湖水から出現したり雲の峯　【文政六年―九番日記・發句集】

うき雲や峰ともならでぶらしやらと　【文政七年―九番日記】

投出した足の先なり雲の峯　【文政年中―發句集】

人事

幟（のぼり）

うら店や青葉一鉢帋のぼり　【享和三年―享和句帖】

穢多町に見おとされたる幟哉　【享和三年―享和句帖】

門の木にくゝし付たる幟哉　【文化十五年―七番日記】

江戸住や二階の窓の初幟　【文政三年―句帖】

三尺に足らぬ幟も御客かな　【文政三年―句帖】

幟から引つゞくなり田のそよぎ　【文政三年―句帖】

乞食町とは見えざりし幟かな　【文政三年―句帖】

一際に田も引立ちぬ初幟　【文政三年―句帖】

山風のがつくり落ちや門幟　【文政四年―句帖】

菖蒲葺　かくれ家やそこらむしつてふく菖蒲　【文化十三年―七番日記】

菖蒲酒　相伴に蚊も騷ぎけり菖蒲酒　【文政三年―句帖】

草庵

菖蒲湯　菖蒲湯も小さ盥ですましけり　【文化十三年―七番日記】

十ばかり笹にならべる粽哉　【文化十三年―七番日記】

御袋が手本に投るちまき哉　【文政三年―句帖】

嘉定喰　子のぶんを母いたゞくや嘉定喰　【文政八年―新集】

越後女

麥秋　麥秋や子を負ひながら鰯賣　【文政二年―おらが春】

麥秋や土臺の石も汗をかく　【文政五年―九番日記】

山寺は碁の秋里は麥の秋　【文政八年―新集】

麥刈　麥刈の不二見所の榎哉　【享和三年―享和句帖】

里の女や麥にやつれしうしろ帶　【享和三年―享和句帖】

麥ぬかの流の末の小なべ哉　【享和三年―享和句帖】

門出よし麥もよし原雀哉　【文政八年―新集】

麥藁　むら雀麥わら笛にをどるなり　【文化十年―七番日記】

麥打　隱家の柱で麥を打れけり　【文政二年―おらが春・句帖】

麥搗　門々や月を見かけて麥をつく　【文化十五年―七番日記】

麥搗に大道中の茶釜哉 【文政八年—新集】

早乙女（さおとめ）

早乙女や箸にからまる草の花 【文化七年—七番日記・題叢】

葛飾や早乙女がちのわたし船 【文政年中—花實發句集】

田植（たうえ）

藷の葉にいわしを配る田植哉 【文化十年—七番日記・句帖】

婆達やおどけ咄で田を植る 【文化十三年—七番日記】

莚の田は朝のまぎれに植りけり 【文化十五年—七番日記】

妹が子や笠をほしさに田を植る 【文政二年—句帖】

身一ツ過すとて女やもめの哀さは

おのが里仕廻うてどこへ田植笠 【文政二年—句帖・おらが春】

村〳〵や寝て居るうちに田が植る 【文政四年—句帖】

芝原に膳立をする田植哉 【文政八年—新集】

みちのくや判官どのを田うゑ歌 【文化八年—七番日記】

おれが田も唄の序に植りけり 【文化十二年—七番日記】

それがしも田植の膳に座りけり 【文化十五年—七番日記】

餘所の子や十そこらにて田植唄 【文化十五年—七番日記】

今の世や見え半分の田植唄 【文[illegible]五年—九番日記】

勿體なや晝寐して聞く田植唄 【文政十年—句帖・發句集】

信濃路や上の上にも田うゑ唄 【文政年中—嘉永板發句集】

汗（あせ）

御馬の汗さまさする木陰哉　【享和三年―享和句帖】

大名のなでゝやりけり馬の汗　【享和三年―享和句帖】

青雲と一つ色なり汗ぬぐひ　【文化十年―七番日記】

汗の玉草葉におかばどの位　【文化十年―七番日記・題叢】

ふんどしで汗を拭き〳〵咄哉　【文化十二年―七番日記】

おもしろう汗のしとるや旅浴衣　【文政八年―新集】

紺の汗手へ流けり駕の者　【文政八年―新集】

川狩（かはがり）

川がりや地藏のひざの小脇差　【文化十年―七番日記】

をどる魚桶とおもふや思はぬや　【文政二年―句帖】

川狩にのがれし魚の見すぼらし　【文政八年―新集】

川狩のうしろ明りやむら木立　【文政年中―狹蓑集・題叢】

晝寐（ひるね）

親方の見ぬふりされし晝寐哉　【享和三年―享和句帖】

逢坂や荷牛の上に一晝寢　【文化十二年―七番日記】

青石の晝寐にすれし木陰かな　【文化十五年―七番日記】

繼ッ子や晝寢仕事に蚤拾ふ　【文化十五年―七番日記】

五六人二番晝寢の御堂哉　【文化十五年―七番日記】

十露盤を肱につッ張る晝寢哉　【文化十五年―七番日記】

今までは罪もあたらぬ晝寢哉　【文政二年―句帖】

人並に晝寢したふりする子哉　【文政三年—句帖】

田のくろや菰一枚の晝寢小屋　【文政三年—句帖】

庭草もむしりなくして晝寢哉　【文政四年—句帖】

蠅よけに孝經かぶる晝寐哉　【文政八年—新集】

枝折の日陰作りて晝寢哉　【文政六年—九番日記】

虫干（むしぼし）

虫干や竹見て暮す人にさへ　【文化四年—句帖】

旅人や歩ながらの土用干　【文政五年—九番日記】

晒井（さらしゐ）

庵の井戸手で替ほして仕廻けり　【文化十三年—七番日記・句帖】

井の中に屁をひるやうな咄哉　【文化十三年—七番日記】

新しい水湧く音や井の底に　【文化十三年—七番日記】

あざら井や小魚と遊ぶ心太　【文政年中—題叢・花實發句集】

振舞水（ふるまひみづ）

門雀ふる廻水を先浴る　【文化十一年—七番日記】

打水（うちみづ）

武士町や四角四面に水をまく　【文政五年—九番日記】

田中

打水や打湯や一つ月夜なり　【文政十年—句帖】

水を打つ場せきも持たぬ借屋かな　【文政十年—句帖】

氷室（ひむろ）

鶯よ江戸の氷室は何が唉　【文化九年—七番日記】

夏氷（なつごほり）

拜領を又はいれうの氷哉　【文政五年—九番日記】

雪賣（ゆきうり）

けふは迚しなのゝ雪の賣られけり　〔文政五年―九番日記〕

水賣（みづうり）

水うりや聲ばかりでも冷つこい　〔文政四年―句帖〕

江戸住や錢出た水をやたらうつ　〔文政五年―九番日記〕

一文が水を馬にも呑せけり　〔文政五年―九番日記〕

一夜酒（ひとよざけ）

甘露降る世もそつちのけ一夜酒　〔文政三年―句帖〕

冷汁（ひやじる）

冷汁の莚引ずる木陰かな　〔文政三年―句帖〕

心太（ところてん）

心太芒もともにそよぐぞよ　〔文化十年―七番日記〕

心太から流けり男女川　〔文化十年―七番日記〕

逢坂や牛の上からところてん　〔文政五年―九番日記〕

軒下の拵へ瀧や心太　〔文政八年―新集〕

旅人や山に腰かけて心太　〔文政年中―發句集〕

鮓（すし）

鮓見世や水打かける小笹山　〔文化十年―七番日記〕

蛇の鮓も喰ひかねぬ也江戸女　〔文政八年―新集〕

柴の戸や鮓のおもしの米瓢　〔文政八年―新集〕

鮓になる間を配る枕哉　〔文政八年―新集・發句集〕

鮓壓の足しに寐るかよ蝸牛　〔文政八年―新集〕

夏座敷（なつざしき）

この風の不足いふなり夏座敷　〔文政二年―句帖　おらが春〕

松陰や寐莫蓙一つの夏座敷　〔文政二年―おらが春〕

としこそ小言相手も夏坐敷　〔文政六年―九番日記〕

旅瘦を目出度がる也夏坐敷　〔文政八年―新集・狹蓑集〕

他の人の見るも恥し夏ざしき　〔文政年中―嘉永版發句集〕

日傘（ひがさ）

木母寺が見ゆる〱と日傘哉　〔享和三年―享和句帖〕

上人や草をむしるも日傘持　〔文政五年―九番日記〕

青天と一ツ色也日傘　〔文政六年―九番日記〕

輕業

下駄はいて細縄渡る日傘哉　〔文政八年―新集〕

木の陰や尻にあてがふ日傘　〔文政八年―新集〕

夕陰や煎じ茶賣の日傘　〔文政八年―新集〕

更衣（ころもがへ）

更衣しばし虱を忘れたり　〔寛政五年―句帖〕

うつる日や心のまゝと更衣　〔享和三年―享和句帖〕

其松をいぢり枯すな衣更　〔文化元年―旅日記〕

更衣いで物見せんとばかりに　〔文化七年―七番日記〕

何をして腹をへらさん更衣　〔文化七年―七番日記〕

能なしもどうやらかうやら更衣　〔文化九年―七番日記〕

手まり唄

下谷一番の顔してころもがへ　〔文化十年―七番日記・發句集〕

更衣よしなき草をむしりけり　【文化十年―七番日記】

四ッ月のしの字嫌ひや更衣　【文化十年―七番日記】

更衣寐て見る山をつくねけり　【文化十一年―七番日記】

うしろから見れば若いぞ更衣　【文化十三年―七番日記】

貧乏が追うても來ぬぞ更衣　【文化十三年―七番日記】

のらくらも御代のけしきぞ更衣　【文化十四年―七番日記】

年とへば片手出す子や更衣　【文化十五年―七番日記・おらが春】

其の門に天窓用心更衣　【文政二年―おらが春・句帖】

衣更て坐つて見てもひとりかな　【文政二年―句帖】

おもしろい夜は昔なり更衣　【文政年中―發句集】

けふの日や替てもやはり苔衣　【文政年中―發句集】

人らしく替もかへたり苔衣　【文政年中―嘉永板發句集】

綿拔（わたぬき）

買人が綿引ぬいてくれにけり　【文化十二年―七番日記】

立ながら綿引拔て出たりけり　【文化十三年―七番日記】

南無あみだどてらの綿よひまやるぞ　【文政年中―嘉永板發句集】

初袷（はつあはせ）

飴ン棒横に咥へて初袷　【享和三年―享和句帖】

初袷松の見る目もはづかしや　【文化四年―俵閑帳】

向ふ通るは長兵衛どのか初袷　【文化九年―七番日記】

としよれば犬も嗅ぬぞ初給　【文化十二年―七番日記】

初袷しなのへ嫁がござるげな　【文化十二年―七番日記】

小児の成長を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷　【文化十三年―七番日記・おらが春】

文虎が妻、身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初袷　【文政年中―發句集】

よき袷はしか前とは見ゆる也　【享和三年―享和句帖】

袷きる度に年寄ると思ふ哉　【文化四年―句帖】

金時がてんつるてんの袷かな　【文化十一年―七番日記】

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな　【文政二年―おらか春・發句集】

ふだらくや赤い袷の小順禮　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

たちまちに寐皺だらけの袷哉　【文政四年―句帖】

式臺や明ぬうちから袷役　【文政四年―句帖】

春日野の鹿に嗅るゝ袷哉　【文政年中―發句集】

夏衣（なつごろも）

むだ人や隙にあぐんで夏衣　【文政四年―句帖】

帷子（かたびら）

今そりの兒や帷子うつくしき　【文化八年―七番日記】

青空のやうな帷子きたりけり　【文化九年―七番日記】

帷子を眞四角にぞきたりける　【文化十年―七番日記】

帷子を雨が洗つてくれにけり　【文化十二年―七番日記】

青簾（あをすだれ）

青すだれ白衣の美人通ふ見ゆ　【寛政五年―句帖】

むら雨のかゝれとてしも青簾　【享和三年―享和句帖】

かくれ家や死なば簾の青いうち　【文化二年―西國七部集・犬古今】

岩くらやさもなき家の青簾　【文化五年―旅日記】

草そよ〱簾のそより〱哉　【文化七年―七番日記】

草むらにそよぎまけじと簾哉　【文化七年―七番日記】

一人呑む茶も朔日ぞ青簾　【文化十四年―七番日記】

人並に青くなくても簾哉　【文政八年―新集】

飯櫃の簾は青き屑家哉　【文政八年―新集】

扇（あふぎ）

海の月扇かぶつて寢たりけり　【享和三年―享和句帖】

雨三粒はらつて過ぎし扇哉　【享和三年―享和句帖】

竹の月〱とて扇哉　【文化元年―旅日記】

此月に扇かぶつて寢たりけり　【文化四年―旅日記】

暮行や扇のはしの淺間山　【文化七年―七番日記】

夕暮の腮につツ張る扇哉　【文化八年―七番日記・題叢】

入道の眞似してかざす扇哉　【文化九年―七番日記】

草花が咲ゆと扇かな　【文化九年―七番日記】
三日の月扇のはしへ入にけり　【文化九年―七番日記】
我家とふん返りたる扇哉　【文化十年―七番日記】
立しなに借下されの扇哉　【文化十一年―七番日記】
うしろ手や扇ばかりがうつくしき　【文化十二年―七番日記】
老けりな扇づかひの小ぜはしき　【文化十三年―七番日記】
たばこの粉扇で掃て置にけり　【文化十五年―七番日記】
手にとれば歩行たくなる扇哉　【文化十五年―七番日記】
ごろり寝の兒にかぶせる扇哉　【文化十五年―七番日記】
太郎冠者まがひに通る扇かな　【文政二年―おらが春。句帖】
ほのくほに扇をちよつと小僧哉　【文政二年―句帖】
小坐頭の天窓にかぶる扇かな　【文政二年―おらが春。句帖】
貰ふより早くうしなふ扇かな　【文政二年―おらが春】
大寺や扇で知れし小僧の名　【文政二年―おらが春】
橋のらんかんにもたれて扇哉　【文政三年―句帖】
夕陰の尻へ敷かるゝ扇かな　【文政四年―句帖】
鼻先にちゐぶらさげて扇かな　【文政五年―九番日記】
日歸りの小づかひ記す扇哉　【文政八年―新集】

團扇

松影や扇でまねく千雨雨 〔文政年中―發句集〕
西山や扇落しに行ヶ月夜 〔文政年中―嘉永板發句集〕
うつくしき團持けり未亡人 〔享和三年―享和句帖〕
死ぬる迄見る榎とや澁團 〔文化元年―旅日記〕
反故團シャにかまへたるひとり哉 〔文化二年―旅日記〕
おとろへの急に目につく團哉 〔文化三年―旅日記〕

夕顏の長者

御侍團扇と申せ東山 〔文化五年―九番日記〕
子ども等の團十郎する團扇哉 〔文化十年―七番日記〕
臼引が臼とねまりて團扇哉 〔文化十二年―七番日記〕
菊せゝる御尻へちよいと團扇哉 〔文化十二年―七番日記〕
大猫のどさりと寢たる團扇哉 〔文化十三年―七番日記〕
何喰はぬ皃して左りうちは哉 〔文政五年―九番日記〕
あれあんな山里にさへ江戸うちは 〔文政六年―九番日記〕
杖ほく〳〵團扇はさむや尻の先 〔文政六年―九番日記〕

母におくれたる子の哀れは

團扇の柄なめるを乳のかはり哉 〔文政八年―新集〕
團扇はつて先そよがする莽かな 〔文政年中―嘉永板發句集〕

蚊遣(かやり)

木一本ありても蚊やり〳〵哉　【享和三年―享和句帖】

一景色蚊やりで持つや鴉の海　【文化七年―七番日記】

蚊いぶしもなぐさみになるひとり哉　【文化十年―七番日記・題叢】

猫ともに二人ぐらしや朝蚊やり　【文化十二年―七番日記】

二尺程月のさし入る蚊やり哉　【文化十二年―七番日記】

蚊いぶしにぶつぶつと煮える土瓶哉　【文化十五年―七番日記】

文箱の蓋にてあふぐ蚊やり哉　【文化十五年―七番日記】

蚊いぶしを持つて引越す木陰哉　【文政四年―句帖】

雨の日や机の脇の捨蚊やり　【文政四年―句帖】

かいぶしの上に煮立つ土鍋かな　【文政四年―句帖】

寮〳〵へ順に廻すや蚊遣鍋　【文政四年―句帖】

幮(かや)

夜仕事や子を思ふ身は幮の外　【寛政五年―句帖】

梟よ蚊屋なき家と沙汰するな　【文化七年―七番日記】

くら仕や田螺に似せてひとり蚊屋　【文化十一年―七番日記】

おそ起や蚊屋から呼る豆腐賣　【文化十五年―七番日記】

江戸屋鋪

馬迄も萌黄の蚊屋に寝たりけり　【文政二年―句帖】

今迄は罰もあたらず晝寐蚊帳　【文政二年―句帖】

手をすりて蚊屋の小隅を借にけり　〔文政二年―句帖〕
今見ればつぎだらけ也おれが蚊屋　〔文政三年―句帖〕
新らしき蚊屋に寢る也江戸の馬　〔文政三年―句帖〕
田の人よ御免ゆへ晝寢蚊屋　〔文政三年―句帖〕
蚊屋釣て喰に出るなり又茶漬　〔文政三年―句帖〕
鉢の蘭蚊屋の中にてよろぎ凫　〔文政三年―句帖〕
江戸の水呑み〳〵馬も蚊屋に寢る　〔文政三年―句帖〕
蚊屋の月いらぬ天下を取らんより　〔文政四年―句帖〕

蚊屋賣(かやうり)

かや賣の一聲村にあまりけり　〔文政八年―新集〕

紙帳(しちやう)

病後

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　〔文政二年―おらが春・句帖〕
留守中も釣り放しなる紙帳かな　〔文政二年―おらが春〕
持佛くるめに引かける紙帳哉　〔文政四年―句帖〕

宗教

御田植(みたうゑ)

住よし

唐人も見よや田植の笛太鼓　〔文政年中―嘉永板發句集〕

祭（まつり）

乙松やことし祭の赤扇　【文政七年—題叢・七番日記】

御祓（みそぎ）

夕はらひ竹をぬらして濟す也　【文化二年—旅日記】

旅烏江戸の御祓にとしよりぬ　【文化七年—七番日記】

夕祓鴨十ばかり立にけり　【文化七年—七番日記】

夕されば〳〵草も御祓哉　【文化十年—七番日記】

蛙等も何かぶつくさ夕はらひ　【文化十一年—七番日記】

萩もはや色なる波ぞ夕祓　【文化十五年—七番日記・發句集】

蟾どのゝ這出し給ふ御祓哉　【文政三年—句帖】

灯籠のやうな花さく御祓哉　【文政年中—題叢・嘉永板發句集】

茅の輪（ちのわ）

一番に乙鳥の來る茅の輪哉　【文化十一年—七番日記】

母のぶんも一ッは潛るちの輪哉　【文政三年—句帖】

茅の輪かな手引て潛る子があらば　【文政四年—句帖】

髪のない頭も撫でる茅の輪哉　【文政四年—句帖】

御袋は猫をも連レてちのわ哉　【文政八年—新集】

形代（かたしろ）

形代やとても流れば西の方　【文化七年—七番日記】

やあそこの形代ふむな都鳥　【文化十一年—七番日記】

形代に虱おぶせて流しけり　【文化十三年—七番日記】

疫病神蚤も負せて流しけり　【文政二年—おらが春】

形代も吹けば飛ぶ也輕い身は　【文政四年―句帖】

かたしろも肩身すほめて流れ鳧　【文政四年―句帖】

形代にさらば／＼をする子哉　【文政八年―句集・嘉永板發句集】

形代に赤けべゝきせる娘哉　【文政八年―新集】

形代をとく吹ふるせ萩芒　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

麻の葉流（あさのはながす）

麻の葉に借錢書て流しけり　【文化十年―七番日記】

雨乞（あまごひ）

ほろつくや八兵衛どのゝ祈り雨　【文化十年―七番日記】

我雨と觸れて歩くや小山伏　【文化十三年―七番日記】

佛生會（ぶつしやうゑ）

御佛や蝦夷が島へも御誕生　【文化八年―七番日記】

誕生佛お月さまいくつおしやるげな　【文化十三年―七番日記】

御指に錢が一文誕生佛　【文化十三年―七番日記】

長の日をかはく間もなし誕生佛　【文政二年―おらが春・句帖】

濱風に色の黑さよ誕生佛　【文政四年―句帖】

灌佛は指切をする手つき哉　【文政八年―新集】

御佛や生るゝまねに錢が降ル　【文政八年―新集】

御佛や錢の中より御誕生　【文政八年―新集】

甘茶（あまちや）

雀らがざぶ／＼浴る甘茶かな　【文化十五年―七番日記】

水ざぶり佛なりやこそ天窓から　【文政二年―句帖】

蛙にもちよとなめさせよ甘茶水　【文政四年―句帖】

雀子もおなじく浴る甘茶かな　【文政年中―嘉永板發句集】

花御堂

茅場町藥師

藤棚も今日に逢けり花御堂　【文化五年―旅日記】

へぼ蜂が孔雀氣どりや花御堂　【文化十五年―七番日記】

花御堂月も上らせたまひけり　【文化十五年―七番日記】

二三文錢もけしきや花御堂　【文政五年―九番日記】

鶯のほゝと覗くや花御堂　【文政年中―發句集】

一夏　夏籠　夏書　花摘

てゝつほう聲が高いぞ夏の始　【文化十四年―七番日記】

夏籠や隙にこまりて窓すだれ　【文政四年―句帖】

夏籠と人には見せて寢坊哉　【文政五年―九番日記】

夏籠や毎晩見廻ふ引がへる　【文政八年―新集】

上むきの夏書と見ゆる簾かな　【文政四年―句帖】

よそ目には夏書と見ゆる小窓哉　【文政八年―新集】

朝がほにはげまされたる夏書かな　【文政年中―嘉永板發句集】

あさぢふや少おくるゝ夏花摘　【文化三年―旅日記】

花つむや扇をちよいとぼんのくぼ　【文政二年―おらが春・句帖】

夕陰や鴛の小脇の夏花持　【文政年中―題叢・發句集】

動物

鹿の親（しかのおや）

俄川飛んで見せけり鹿の親　【文政二年―おらが春】

鹿の親笹吹く風に戻りけり　【文政二年―おらが春・題叢】

鹿の子（かのこ）

鹿の子の人に摺れたる芝生哉　【享和三年―享和句帖】

人聲に子を引き隱す女鹿かな　【文政二年―おらが春】

老鶯（おいうぐひす）

百兩の鶯もやれ老を鳴く　【文化十年―七番日記】

まぎれぬぞとしより聲も鶯は　【文政五年―九番日記】

鶯よ老をうつるな草の家　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

時鳥（ほととぎす）

時鳥逃る山のは追つめよ　【享和三年―享和句帖】

聞初ていく日ふる也時鳥　【享和三年―享和句帖】

時鳥鳴直スなら今のうち　【文化三年―旅日記】

老翁岩に腰かけて一軸をさづける畫

我汝を待つこと久し時鳥　【文化七年―おらが春 七番日記】

なでしこの正月いたせ郭公　【文化七年―七番日記】

曉の夢をはめなん時鳥　【文化七年―七番日記】

戸隱

權現やどの御耳で時鳥　〔文化八年―七番日記〕
穢多村や山時鳥ほとゝぎす　〔文化八年―七番日記〕
それでこそ御時鳥松の月　〔文化九年―七番日記・世美塚〕
江戸子におくれとらすな時鳥　〔文化九年―七番日記〕
時鳥つゝじは笠にさゝれたり　〔文化九年―七番日記〕
江戸入の一ばん聲やほとゝぎす　〔文化九年―七番日記〕
今ごろや大内山のほとゝぎす　〔文化九年―七番日記〕
そこ許もお江戸入かよ時鳥　〔文化九年―七番日記〕
時鳥湯けぶりそよぐ草そよぐ　〔文化十年―七番日記〕
時鳥俗な庵とさみするな　〔文化十一年―七番日記〕
此雨にのつ引ならじ時鳥　〔文化十一年―題叢・七番日記〕
らふそくでたばこ吸けり時鳥　〔文化十二年―七番日記〕
宗鑑に又しかられな時鳥　〔文化十二年―七番日記〕
馬上からおゝいおいとや時鳥　〔文化十三年―七番日記〕
時鳥なけ〳〵一茶是にあり　〔文化十三年―七番日記〕
も一聲まけろこれ〳〵時鳥　〔文化十三年―七番日記〕
時鳥ねぶつちよ佛ゆり起せ　〔文化十三年―七番日記〕
大江戸や鎗おし分てほとゝぎす　〔文化十四年―七番日記〕

鳴まけなけふから江戸の時鳥　〔文化十四年―七番日記〕

四月八日

吉も吉上吉日ぞほとゝぎす　〔文化十四年―七番日記〕

這渡る橋の下より時鳥　〔文化十四年―おらが春・七番日記〕

吉原

時鳥待まうけてや屋根の桶　〔文化十五年―七番日記〕

時鳥蝿虫めらもよつく聞け　〔文政二年―おらが春〕

時鳥けんもほろゝに通りけり　〔文政二年―句帖〕

急ぐかよ京一見のほとゝぎす　〔文政二年―句帖〕

ほとゝぎす通れ辨慶是にあり　〔文政三年―句帖〕

今の間や江戸見て戻る時鳥　〔文政四年―句帖〕

三介が蛇の目の傘や子規　〔文政四年―句帖〕

有明のすてつぺんからほとゝぎす　〔文政四年―句帖〕

祇園夜雨忠盛是にあり

やあれまて聲が高いぞ時鳥　〔文政四年―句帖〕

時鳥なけよやれこれいふうちに　〔文政五年―九番日記〕

こをれやい聲が高いぞほとゝぎす　〔文政五年―九番日記〕

やれ起よそれ時鳥〳〵　〔文政七年―九番日記〕

兩國橋遠望

時鳥小舟もつういく哉　〔文政八年―新集〕

よびくらをするや夜盗と時鳥　〔文政八年―新集〕

卯の花も馳走にさくか子規　〔文政年中―發句集〕

せはしさを我にうつすな子規　〔文政年中―發句集〕

ほとゝぎすなくや頭痛のぬけるほど　〔文政年中―嘉永板發句集〕

閑古鳥（かんこどり）

椴からも二つなきけりかんこ鳥　〔享和三年―享和句帖〕

かんこ鳥しなのゝ櫻咲にけり　〔文化三年―旅日記〕

まかり出ゆ是はかんこ鳥　〔文化八年―七番日記〕

かんこ鳥鳴くや馬から落るなと　〔文化九年―七番日記〕

田中なる小まん何するかんこ鳥　〔文化九年―七番日記〕

淋しさを我にさづけよかんこ鳥　〔文化十年―七番日記〕

五十年聞きも聞たよ閑古鳥　〔文化十年―七番日記〕

守るかよお竹如來のかんこ鳥　〔文化十二年―七番日記〕

かんこ鳥鳴くや蟇どのゝ弔に　〔文化十二年―七番日記〕

それがしがひぜんうつるな閑古鳥　〔文化十四年―七番日記〕

長居して蔦にまかれなかんこ鳥　〔文化十四年―七番日記〕

越後

柿崎やしぶ〳〵鳴きの閑古鳥　【文政二年―おらが春】

閑古鳥泣坊主に相違なくば　【文政三年―句帖】

閑古鳥でも來てくれようしろ窓　【文政四年―句帖】

桑の木は坊主にされてかんこ鳥　【文政五年―九番日記】

吉日の卯月八日もかんこ鳥　【文政年中―題叢・發句集】

前の世のおれがいとこか閑古鳥　【文政年中―發句集】

高野山

地獄へは斯う參れとやかんこ鳥　【文政年中―發句集】

先住のつけわたりなりかんこ鳥　【文政年中―發句集】

恰好鳥

我家に恰好鳥の啼にけり　【文政二年―おらが春】

羽拔鳥

馬鹿鳥よ羽根ぬけてから何思案　【文政三年―句帖】

憎まるゝ鳥ははねも拔ぬなり　【文政三年―句帖】

なか〳〵に安堵皃なり羽拔鳥　【文政年中―發句集】

水鷄

鳴く水鷄うき舟塚でありしよな　【文化九年―七番日記】

水鷄なく拍子に雲が急ぐぞよ　【文化九年―七番日記】

鵜

草の雨おのが家とや鵜のもどる　【文化二年―旅日記】

つかれ鵜や子をふり返り〳〵　【文化十三年―七番日記】

一村や鵜にかせがせて夕枕　【文化十四年―七番日記】

はなれ鵜が子の泣く船に戻りけり　【文政二年―おらが春・句帖】

鵜の椀へ先へ入たる膾かな　【文政二年―句帖】

ひいき鵜は又もから身で浮みけり　【文政二年―おらが春・發句集】

鵜の眞似は鵜より上手な子供かな　【文政二年―おらが春・句帖】

叱られて又はいる鵜のいぢらしや　【文政二年―句帖】

疲れ鵜の叱られて又入にけり　【文政二年―句帖】

賑しく鐘の鳴込む鵜舟哉　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

手枕や親子三人鵜のかせぎ　【文政年中―嘉永板發句集】

通し鴨（とほしかも）

暮らすには一人がましか通し鴨　【文政八年―新集】

まつて居る妻子もないか通し鴨　【文政年中―嘉永板發句集】

浮巣（うきす）

永の日を涼んでくらす浮巣哉　【文化七年―七番日記】

鳰の巣の一本草をたのみ哉　【文化九年―七番日記】

行々子（ぎやうぎやうし）

今の間に一行々子過にけり　【文化十一年―七番日記】

行々子それぎりにして置まいか　【文化十一年―七番日記】

涼風を鼻にかけてや行々子　【文化十一年―七番日記】

行々子大河はしんと流れけり　【文政五年―九番日記】

晝飯を犬が引く迯行々子　【文政八年―新集】

滿月に夜かせぎするや行々子　【文政八年―新集】

はけ天窓籥をかけろと行々子　【文政年中―嘉永板發句集】

蜘の子

蜘の子はみなちり／＼の身すぎ哉　【文政五年―九番日記・發句集】

灯取虫

庵の灯は虫さへ取に來ざりけり　【文政三年―句帖】

心中に決定してや火とり虫　【文政三年―句帖】

けしてよい時は來ぬ也火取虫　【文政三年―句帖】

むだ噺虫に行灯を消されけり　【文政三年―句帖】

蟬

浮嶋や動きながらの蟬時雨　【享和三年―享和句帖】

蜘の巣に月さしこんで夜の蟬　【文化二年―旅日記】

蟬啼や梨にかぶせる紙袋　【文化二年―旅日記】

夏の蟬しかし我らが先ぢややら　【文化八年―七番日記】

蟬なくや鷺のつッ立つ寺座敷　【文化八年―七番日記】

迯くらし／＼けり夏のせみ　【文化十年―七番日記】

蟬鳴や空にひッつく最上川　【文化十年―七番日記】

そこでなけ同じ風ぞよ夏の蟬　【文化十年―七番日記】

だまれ蟬今髭どのがござるぞよ　【文化十年―七番日記】

狗に爰へ來よとや蟬の聲　【文政二年―おらが春・句帖】

松の蟬どこ迄啼て晝になる　【文政二年―おらが春・句帖】

蟬なくやつく／＼赤い風車　【文政二年―句帖】

うつせみ

なつかしやゆかしや蟬の捨衣　〔文政三年―句帖〕

鳥さしの邪魔にとびけり松のせみ　〔文政五年―九番日記〕

ねがはくは念佛を鳴け夏の蟬　〔文政年中―發句集〕

蟬鳴や我家も石に成るやうに　〔文政年中―發句集〕

山蟬のたもとの下を通りけり　〔文政年中―嘉永板發句集〕

羽蟻（はあり）

水桶の尻干す日なり羽蟻とぶ　〔文化十五年―七番日記〕

門柱羽蟻と化して仕廻ふかよ　〔文政五年―九番日記〕

羽蟻出る迠に目出たき柱かな　〔文政年中―嘉永板發句集〕

蚤（のみ）

風も吹き月もさしけり蚤の宿　〔享和三年―享和句帖〕

艸の蚤はら〳〵もどる火かげ哉　〔享和三年―享和句帖〕

盃に蚤およぐぞよ〳〵　〔文化八年―七番日記〕

夕暮や大盃の月と蚤　〔文化九年―七番日記〕

蚤の迹それも若きはうつくしき　〔文化十年―株番集・七番日記〕

蚤どもに松島見せて迯しけり　〔文化十年―七番日記〕

庵の蚤不便やいつか痩るなり　〔文化十年―七番日記〕

よい日やら蚤がをどるぞはねるぞよ　〔文化十年―七番日記〕

皺腕歩きあきてや蚤のとぶ　〔文化十年―七番日記〕

夕されば痩子やせ蚤賑はしや　【文化十一年―七番日記】

草原をかせぎ廻るや宿の蚤　【文化十一年―七番日記】

追ふな〳〵追ふな子どもよ子持蚤　【文化十一年―七番日記】

辻堂を蚤蚊に借りて寝たりけり　【文化十一年―七番日記】

猫の子が蚤すりつける榎かな　【文化十二年―七番日記】

飛下手の蚤のかはゆさまさりけり　【文化十三年―七番日記】

蚤どもも隠るゝすべはしりにけり　【文化十三年―七番日記】

蚤の迹吹いて貰つてなく子哉　【文化十五年―七番日記】

蚤の迹かぞへながらに添乳哉　【文化十五年―おらが春・七番日記】

むく起や蚤をとばせに川原迄　【文化十五年―七番日記】

飛べよ蚤同じ事なら蓮の上　【文政二年―おらが春】

蚤虱よりあひもする脊中哉　【文政五年―九番日記】

庵の蚤子どもに迄もとられけり　【文政五年―九番日記】

とんだ蚤かくれて人をはかるかよ　【文政五年―九番日記】

川風や砂つ原にも蚤のわく　【文政六年―九番日記】

青芝にすり付る也猫の蚤　【文政七年―九番日記】

あれ蚤が子を負ひツゝ逃廻る　【文政八年―新集】

としよりと見くびつて蚤逃ぬかよ　【文政八年―新集】

蚤焼て日和占ふ山家哉　【文政八年—新集・發句集】

蚤ひよいひよい〱〱達者じまん哉　【文政八年—新集】

かまふなよやれかまふなよ子持蚤　【文政十年—句帖】

まゝつ子や晝寐しごとに蚤拾ふ　【文政年中—嘉永板發句集】

蟾（ひきがへる）

云ぶんのあるつらつきや蟾　【文化十四年—七番日記】

蟾鳴くや麥殻笛とかけ合に　【文化十五年—七番日記】

まかり出たるは此の藪の蟾にて候　【文政二年—おらが春・句帖】

雲を吐く口つきしたり蟇　【文政二年—おらが春・發句集】

一雫天窓撫でけり蟇　【文政二年—おらが春】

ひきどのゝ葬禮はやせ時鳥　【文政二年—句帖】

蟾我をつく〲ねめつける　【文政五年—九番日記】

孑孑（ぼうふり）

孑孑も御經の拍子とりにけり　【文化十二年—七番日記】

孑孑の天上したり三日の月　【文政二年—おらが春】

けふの日も棒ふり虫よあすも又　【文政二年—おらが春・發句集】

孑孑のひとり遊びやぬり盥　【文政四年—句帖】

京みがてら江戸に入

臨見すな虫も棒ふる江戸の水　【文政五年—九番日記】

孑孑よせい出してふれ翌は盆　【文政五年—九番日記】

蚊か

通し給へ蚊蠅の如き僧一人 〔寛政四年―句帖〕
蚊を燒くや紙燭にうつる妹が皃 〔寛政五年―句帖〕
宵越の豆麩明りや蚊のさわぐ 〔享和三年―享和句帖〕
追れ〳〵蚊の湧く艸を寢所哉 〔享和三年―享和句帖〕
蚊のゆふべ坊主にされし一木哉 〔享和三年―享和句帖〕
蚊を殺す紙燭にうつる白髮哉 〔享和三年―享和句帖〕
燒にけりさしてとがなき藪蚊迄 〔文化三年―旅日記〕
さし柳見てをれば蚊の出たりけり 〔文化七年―七番日記〕
御迎の鐘を聞き〳〵やく蚊哉 〔文化七年―七番日記〕
蚊柱や草は何など咲くやうす 〔文化七年―七番日記〕
老ぬれば只蚊をやくを手柄哉 〔文化七年―七番日記〕
夕空や蚊が鳴出して美くしき 〔文化八年―め見抄記・七番日記〕
ひとつ蚊の咽へとび込むさわぎ哉 〔文化九年―七番日記〕
朝な〳〵蚊のかくれ家の御花哉 〔文化十年―七番日記〕
蚊柱やこんな家でもあればこそ 〔文化十年―七番日記〕
五十にして都の蚊にも喰れけり 〔文化十年―七番日記〕
明がたはどこへかせぎに行く蚊哉 〔文化十一年―七番日記〕
十念をうけるこぶしへ鳴く蚊哉 〔文化十二年―七番日記〕

一つ蚊のかはゆらしくも聞えけり　【文化十二年—七番日記】

我宿は口で吹ても出る蚊哉　【文化十三年—七番日記・發句集】

目出度はことしの蚊にも喰れけり　【文化十三年—七番日記】

むらの蚊の大寄合や軒の月　【文化十三年—七番日記】

庵の蚊は手で追出して仕まひけり　【文化十四年—七番日記】

蚊所がくらしよいぞよ裸組　【文化十四年—七番日記】

うしろからふいと巧者な藪蚊哉　【文化十四年—七番日記】

一つ二つから蚊柱となりにけり　【文化十五年—七番日記】

柱事などして遊ぶ藪蚊哉　【文化十五年—七番日記】

蚊柱も横ッ倒しの小道哉　【文化十五年—七番日記】

あばれ蚊や臼引あきて餅をつく　【文化十五年—七番日記】

蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　【文政二年—おらが春】

あばれ蚊のついと古井に忍びけり　【文政二年—おらが春】

南無あみだ佛の方より鳴く蚊かな　【文政二年—おらが春】

閨の蚊のぶんとばかりに燒れけり　【文政二年—おらが春】

一つ蚊の默つてしくり〱かな　【文政二年—おらが春・句帖】

年寄と見るや鳴く蚊も耳の際　【文政二年—おらが春句帖】

夕空に蚊も初聲を上にけり　【文政二年—句帖】

蚊もちらりほらり是から老が世ぞ　〔文政二年―句帖〕
闇の蚊のはつ出の聲を焼れけり　〔文政二年―句帖〕
櫻まで惡くいはする藪蚊かな　〔文政二年―おらが春〕
蚊もいまだ大あばれなり江戸の隅　〔文政三年―句帖〕
思ふさま蚊に騷がせる番屋哉　〔文政三年―句帖〕
御佛にかぢり付たる藪蚊かな　〔文政三年―句帖〕
一ッ蚊の聲と知て又來た歟　〔文政四年―句帖〕
釣鐘の中よりわんと鳴く蚊哉　〔文政四年―句帖〕
隙人や蚊が出た〳〵と觸歩く　〔文政五年―九番日記・發句集〕
本堂にきづしりつまる藪蚊かな　〔文政五年―句帖〕
湯から出たを待かねて來る蚊哉　〔文政六年―九番日記〕
荒れ蚊や叱りのゝしる口ばたへ　〔文政七年―九番日記〕
晝の蚊やだまりこくつて後ろから　〔文政七年―梅塵・發句集〕
やけ原ややけを起して蚊のさわぐ　〔文政九年―句帖〕
蚊柱の外にのうなき榎かな　〔文政年中―暮蒼嘉板發句集〕
我ひとりくひて淺茅に鳴蚊哉　〔文政年中―花實發句集〕
蚊柱の穴から見ゆる都かな　〔文政年中―發句集〕
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ　〔文政年中―發句集〕

蠅

晝の蚊を後にかくす佛かな　〔文政年中—嘉永板發句集〕

蠅一つ打つては山を見たりけり　〔享和三年—享和句帖〕

庵の蠅何をうろ〳〵ながらふる　〔文化三年—旅日記〕

やれうつな蠅は手をすり足をする　文化六年—關清水物語・句帖

病中

蚤蠅にあなどられつゝけふも暮ぬ　〔文化十年—七番日記〕

さわぐなら外がましぞよ庵の蠅　〔文化十年—七番日記〕

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ、三界無安といふ事を

蠅よけの草もつるして扨どこへ　〔文化十三年—杖の竹・七番日記〕

武士に蠅を追する御馬哉　〔文化十三年—七番日記〕

摺子木で蠅を追ひけりとろゝ汁　〔文化十三年—七番日記〕

隱家は蠅も小勢で暮しけり　〔文政二年—おらが春〕

古郷は蠅まで人をさしにけり　〔文政二年—おらが春・句帖〕

世がよくばも一ツとまれ飯の蠅　〔文政二年—おらが春句帖〕

御首に蠅が三疋とをまつた　〔文政二年—句帖〕

親しらず蠅もしつかりおぶさりぬ　〔文政二年—句帖〕

蠅打てば蝶もそこ〳〵去にけり　〔文政二年—句帖〕

ぬり盆にころりと蠅の辷りけり　〔文政二年—句帖〕

歸庵

笠の蠅我より先へかけ入ぬ　〔文政二年―句帖〕

腕の蠅手をする所を打れけり　〔文政二年―句帖〕

雨止むぞ立て行ヶ〱笠の蠅　〔文政四年―句帖〕

口明て蠅を追ふなり門の犬　〔文政四年―句帖〕

はつ蠅や客より先へ青疊　〔文政四年―句帖〕

老の手や蠅を打さへ逃げた跡　〔文政四年―句帖〕

なぐさみに猫がとる也窓の蠅　〔文政五年―九番日記〕

とく逃げよにげよ打たれなそこの蠅　〔文政五年―九番日記〕

人有れば蠅あり佛ありにけり　〔文政六年―九番日記〕

から紙のもやうになるや蠅の屎　〔文政六年―九番日記〕

點一ッ蠅が打たる手紙かな　〔文政六年―九番日記〕

豐年の聲を上けり草の蠅　〔文政六年―狹蓑集・九番日記〕

無常鐘蠅虫めらもよつくきけ　〔文政八年―新集〕

草の葉や世の中よしと蠅さわぐ　〔文政年中―題叢・嘉永板發句集〕

蠅一ッ打てばなむあみだ佛哉　〔文政年中―發句集〕

壁虎(はへとりぐも)

平蜘や蠅とりはづし〱　〔文政八年―新集〕

蛭(ひる)

涼風をはやせば蛭が降りにけり　〔文化十二年―七番日記〕

初螢（はつほたる）

人の世や山は山迚蛭が降る　【文化十三年—七番日記】

物さしのとゞかぬ松や初螢　【文化元年—旅日記】

露散ぞ迯尻するな初螢　【文化十一年—七番日記】

初螢脇目もふらず通りけり　【文化十五年—七番日記】

はつ螢ついとそれたる手風哉　【文化十五年—七番日記】

螢（ほたる）

初螢共の手はくはぬ飛び振りや　【文政二年—おらが春】

今植し草とも見ゆれとぶ螢　【文化元年—旅日記】

庵の螢痩なくなりもせざりけり　【文化三年—旅日記】

我門や螢をやどす草もなき　【文化三年—旅日記】

古わらぢ螢とならば角田川　【文化五年—旅日記・狹莚集】

とぶ螢うはの空呼びしたりけり　【文化七年—七番日記】

とぶ螢臼も加賀蓑着たりけり　【文化七年—七番日記】

手枕や小言いうても來る螢　【文化七年—七番日記】

人魂の中へさつさと螢哉　【文化七年—七番日記】

熊坂が長刀にちる螢哉　【文化八年—七番日記】

子ありてや橋の乞食もよぶ螢　【文化八年—七番日記】

夕螢灸をなめてくれにけり　【文化九年—七番日記】

笠にさす草が好やらとぶ螢　【文化九年—七番日記】

隱れ家や何の來ずともよい螢　【文化九年—七番日記】

江戸者にかはいがらるゝ螢かな　【文化九年—七番日記】

行け螢手のなる方へなる方へ　【文化九年—七番日記】

草の葉や犬に嗅れてとぶ螢　【文化九年—七番日記】

行け螢藥罐の口がさし出たぞ　【文化九年—七番日記】

筏士や螢の責を見るやうに　【文化十年—七番日記】

行け螢とく／＼人のよぶうちに　【文化十一年—題叢・七番日記】

小乙女にばこさせてとぶ螢かな　【文化十二年—七番日記】

手の皺に蹴つまづいたる螢かな　【文化十二年—七番日記】

出仕度の飯の暑さやとぶ螢　【文化十二年—七番日記】

出よ螢錠をおろすぞ出よ螢　【文化十二年—七番日記】

寢筵や尻をかぞへて行く螢　【文化十三年—七番日記】

わんぱくや縛られながらよぶ螢　【文化十三—おらが春・七番日記】

かくれ家や手追ひ螢の走り入る　【文化十四年—七番日記】

我袖に一と息つくや負螢　【文化十五年—七番日記】

あちこちの聲にまごつく螢哉　【文化十五年—七番日記】

不忍池

螢火や呼らぬ龜は手元迄　【文化十五年—七番日記・發句集】

とべ螢野ら同前のおれが家　〔文化十五年―七番日記〕
大螢ゆらり〳〵と通りけり　〔文政二年―おらが春・句帖〕
我袖を親とたのむか迯ほたる　〔文政二年―句帖〕
片息に成て迯入るほたる哉　〔文政二年―おらが春・句帖〕
二三遍人をきよくつて行螢　〔文政二年―おらが春〕
人聲の方へ〳〵やれ〳〵初螢　〔文政二年―句帖〕
飛螢其手はくはぬ〳〵とや　〔文政二年―おらが春〕
きりつぼ源氏三ツのとし、我も三ツのとし母に捨られければ
孤の我は光らぬほたる哉　〔文政三年―句帖〕
寢むしろや野良同前にとぶ螢　〔文政三年―句帖〕
螢籠惟光是へ召れけり　〔文政三年―句帖〕
芦の家や掃いても〳〵來る螢　〔文政三年―句帖〕
今賣つた竹にあれ〳〵初螢　〔文政三年―句帖〕
蕗の葉に引つゝんでも螢哉　〔文政三年―句帖〕
酒は酢に草は螢となりにけり　〔文政四年―句帖〕
おれとして戸まどひをする螢哉　〔文政四年―句帖〕
飯櫃の螢追ひ出す夜舟哉　〔文政七年―九番日記〕
芦の葉や片息ついてとぶ螢　〔文政六年―九番日記〕

馬の屁に吹とばされし螢哉　【文政六年—九番日記】

夜に入れば螢の花の芥かな　【文政六年—九番日記】

又一ツ川を越せとやよぶ螢　【文政八年—新集】

乳呑子や見やう見まねによぶ螢　【文政八年—新集】

出よ螢又〱おれをたゝせるか　【文政八年—新集】

蛇(へび)

草の葉に蛇の空死したり鳧　【文政三年—句帖】

古婆ゝがかたにかけゝり蛇の衣　【文政年中—嘉永板發句集】

蝸牛(かたつむり)

朝焼がよろこばしいか蝸牛　【文化二年—旅日記・題叢】

ぬれたらぬ草の月夜や蝸牛　【文化二年—旅日記】

でゝ虫や筵の上の十文字　【文化十年—七番日記】

蝸牛やうろ〱夜もかせぐかや　【文化十年—七番日記】

夕月や大肌ぬいでかたつむり　文化十年—七番日記・發句集

蝸牛見よ〱おのが影法師　【文化十一年—七番日記】

一ぱしの面魂やかたつむり　【文化十二年—七番日記】

柴の戸や錠のかはりの蝸牛　【文化十二年—七番日記・發句集】

雨一見のかたつぶりにてゆよ　【文化十三年—七番日記】

戸を〆てずんずと寝たり蝸牛　【文政七年—八番日記】

此雨の降るにどつちへでいろ哉　【文政六年—九番日記・發句集】

練塀や廻りくらするかたつむり　〔文政六年——九番日記〕

木の雫天窓張りけりかたつむり　〔文政六年——九番日記〕

大天狗の鼻やちよつほりかたつむり　〔文政六年——九番日記〕

かたつぶりそろ〳〵登れ富士の山　〔文政年中——發句集〕

蝙蝠

かはほりや看板餅の横月夜　〔文化十三年——七番日記〕

かはほりや四十島田も更衣　〔文化十五年——七番日記〕

かはほりも土藏住居のお江戸哉　〔文政七年——九番日記〕

我宿に一夜たのむぞ蚊喰鳥　〔文政八年——新集〕

かはほりや鑓を投げてもついて來る　〔文政八年——新集〕

けぶりして蝙蝠の世もよかりけり　〔文政年中——題叢・嘉永板發句集〕

かはほりやさらば汝と雨國へ　〔文政年中——發句集〕

初松魚

髭どのに先こされけりはつ松魚　〔文化九年——七番日記〕

江戸者に三日なりけりはつ鰹　〔文化九年——七番日記〕

芝浦や初松魚より夜が明る　〔文政七年——九番日記・發句集〕

大家や犬もありつく初松魚　〔文政七年——九番日記〕

鰹一本で長家のさわぎ哉　〔文政八年——新集〕

わが宿のおくれ鰹も月夜哉　〔文政年中——題叢・嘉永板發句集〕

植物

青葉(あをば)

梅の木の心しづかに青葉かな　【寛政四年―句帖】

若葉(わかば)

目の上の瘤とひろがる榎哉　【文化九年―七番日記】

わか葉して又もにくまれ榎哉　【文化十一年―題叢・七番日記】

しんとしてわか葉の赤い御寺哉　【文化十一年―七番日記】

なまじひに赤いわか葉の淋しさよ　【文化十三年―七番日記】

つるべ竿きよんとしてあるわか葉哉　【文化十三年―七番日記】

わか葉して御八日講の幟かな　【文化十五年―七番日記】

ざぶ〳〵と白壁洗ふわか葉哉　【文化十五年―七番日記】

眞丸にせつてうさるゝわか葉哉　【文化十五年―七番日記】

けし炭の庇にかはく若葉かな　【文政四年―句帖】

楠の念の入たるわか葉哉　【文政五年―九番日記】

乘掛のひよつくり出たるわか葉哉　【文政五年―九番日記】

すり鉢をかぶつた形でわか葉哉　【文政八年―新集】

乾く迄繩張る庭や若葉吹　【文政八年―新集】

茂(しげ)り

伊香保根や茂りを下る溫泉の煙　【寛政四年―句帖】

大蛇の二日目につく茂り哉　【享和三年―享和句帖】

突さした柳もばつと茂哉　【文化十二年―七番日記】

つるべ竿きよんとしてある茂り哉　【文化十三年―七番日記】

一本は晝寢のたしの茂り哉　【文政二年―句帖】

しげり葉や庇の上の湯治道　【文政五年―九番日記】

木下闇（こしたやみ）

灰汁桶の蝶のきげんや木下闇　【文化元年―旅日記】

さし柳はや下闇の支度かな　【文化七年―七番日記】

界隈の繩なひ所や木下闇　【文化十二年―七番日記・句帖】

門脇や麥つくだけの木下闇　【文化十二年―七番日記】

白笠を少しさますや木下蔭　【文政二年―おらが春】

禪寺

隅々も掃除屆くや木下闇　【文政年中―發句集】

夏木立（なつこだち）

塔ばかり見えて東寺は夏木立　【寛政四年―句帖】

家ありて又家ありて夏木立　【享和三年―享和句帖】

赤い葉の榮耀に散るや夏木立　【文政二年―おらが春】

芝でしたた休み所や夏木立　【文政二年―おらが春】

夜駄賃の越後肴や夏木立　【文政三年―句帖】

門先やことしさしても夏木立　【文政三年―句帖】

堂守が茶菓子うる也夏木立　【文政五年―九番日記】

山寺は留守の体也夏木立　【文政七年―九番日記・發句集】

人聲に蛭の降る也夏木立　【文政八年―新　集】

法談の手まねも見えて夏木立　【文政年中―發　句　集】

梅の實

痩梅のなり年さへもなかりけり　【文政年中―題　叢】

柹の花

澁柹のしぶ〳〵花の咲にけり　【文化十一年―題叢・七番日記】

李

葉がくれの赤い李になく小犬　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

合歡の花

寢ぐらしやねぶつちよ佛に合歡の花　【文政三年―句　帖】

若楓

門楓茶色でらちを明にけり　【文政二年―句　帖】

卯の花

八　日

卯の花の花の無きさへ賣られけり　【文政二年―句　帖】

卯の花の吉日持ちし後架かな　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

卯の花に一人きりの社かな　【文政二年―おらが春】

獨樂坊

寢所見るほどは卯花明りかな　【文政二年―おらが春】

卯の花もほろり〳〵や蟇の塚　【文政二年―おらが春】

卯の花や子供の作る土團子　【文政四年―句　帖】

卯の花にしめつぽくなる疊哉　【文政六年―九番日記】

卯の花や臼の目切と鶯と　【文政年中―題叢・嘉永板發集】

筍(たけのこ)

卯の花の垣に名代のわらぢ哉　【文政年中―發句集】

筍をにらんでおじやる佛哉　【文化七年―七番日記】

娑婆の風にはや筍の痩にけり　【文化十二年―七番日記】

筍のうんぷてんぷの出所哉　【文化十二年―七番日記】

足序若筍も折られけり　【文化十三年―七番日記】

竹の子の千代もほつきり折にけり　【文政二年―句帖】

筍よ人の子ならば花咲ん　【文政二年―おらが春】

竹の子と品よく遊べ雀の子　【文政二年―おらが番】

筍の番してござる地藏哉　【文政四年―句帖】

筍も育つ度〻に痩にけり　【文政五年―九番日記】

筍に病のなきはなかりけり　【文政年中―發句集】

今年竹(ことしだけ)　若竹(わかたけ)

邪魔にされ〳〵つゝ今年竹　【文化七年―七番日記】

藪竹もわかいうち迚さわぐなり　【文化九年―七番日記】

なよ竹のさゝら三八御宿哉　【文化九年―七番日記】

扨は月君がわか松わか竹よ　【文化十年―七番日記】

あつぱれの大若竹ぞ見ぬうちに　【文政二年―おらが春・發句集】

少し見ぬうちに天晴若竹ぞ　【文政二年―句帖】

若竹の子さへのがれぬうき世哉　【文政五年―九番日記】

若竹やとしより竹も友いさみ　〔文政六年―みはしら・句帖〕

せいだしてそよけ若竹今のうち　〔文政年中―題叢・發句集〕

若竹と呼るゝうちもすこしかな　〔文政年中―發句集〕

稻青む

ちぐはぐにつッさす稻も青みけり　〔文化十年―七番日記〕

穗麥

首だけの水にもそよぐ穗麥かな　〔文政年中―嘉永板發句集〕

新麥

新麥や幸月の利久垣　〔文政年中―題叢〕

麥飯にとろゝの花の咲きにけり　〔文化十五年―七番日記〕

烏麥

のら〱の丈の高さよ烏麥　〔文化十三年―七番日記〕

初茄子

苗賣の通る跡より初なすび　〔享和三年―享和句帖〕

初瓜

初瓜を引とらまへて寐た子哉　〔文政二年―おらが春・句帖〕

瓜

瓜一ッ丸にしづまぬ井也けり　〔文化二年―旅日記〕

酒なども賣侍る也瓜の番　〔文化二年―旅日記〕

ごろり寐の枕にしたる眞瓜哉　〔文化十四年―七番日記〕

頬べたにあてなどしたる眞瓜かな　〔文政二年―おらが春〕

冷し瓜

人來たら蛙となれよ冷し瓜　〔文化十年―題叢・七番日記〕

三日月とひとつならびや冷し瓜　〔文政年中―嘉永板發句集〕

青瓢

むだ花にけしきとられて青瓢　〔文政年中―俳林良材集〕

牡丹

糸屑もいとしがらすやぼたん咲　〔文化元年―旅日記〕

四日花斎佛

目覺しのぼたん芍藥でありしよな　【文化九年—七番日記】

福相と脇から見ゆるぼたん哉　【文化十年—七番日記】

是程のぼたんと仕方する子哉　【文化十五年—種おろし・七番日記】

蟾どのも福と呼るゝぼたん哉　【文化十五年—七番日記】

盃をちよいと置きたるぼたん哉　【文化十五年—七番日記】

侍が傘さしかける牡丹哉　【文化十五年—七番日記】

紙屑も牡丹顏ぞよ葉隱れに　【文政二年—おらが春】

福もふく大福花のぼたん哉　【文政二年—句帖】

すだれのみ青き屑屋のぼたん哉　【文政四年—句帖】

扇にて尺を取たるぼたん哉　【文政七年—九番日記・發句集】

てもさてもても福相のぼたん哉　【文政七年—九番日記・發句集】

獅の氣取りに狂ふぼたん哉　【文政七年—九番日記】

唐ひいきめさるゝ寺のぼたん哉　【文政八年—新集】

隅つこに咲くやぼたんのかぢけ花　【文政八年—新集】

長沼内町魚淵所持の内カケモノ也、蓮は水難の恐あれば

ぬく〳〵と乘らば牡丹のうてなかな　【文政十年—句帖】

撫子（なでしこ）

御地藏や花なでしこの眞中に　【文化九年—七番日記】

露の世や露のなでしこ小なでしこ　【文化九年―七番日記】

石となりし姫がなでしこありしよな　【文化十年―七番日記】

撫子やまゝはゝき木の日陰花　【文政二年―おらが春】

撫子に二文が水を浴せけり　【文政二年―おらが春】

晝顔

大汐や晝顔砂にしがみつき　【文化九年―七番日記】

とうふ屋が來る晝顔が咲にけり　【文化十年―七番日記】

晝顔やふんどし晒す傍示杭　【文化十一年―七番日記】

晝顔や石菖鉢と蚊いぶしと　【文化十二年―七番日記】

淺間山

晝顔やぽつぽつと燃える石ころへ　【文政二年―おらが春】

晝顔の這のぼる也わらぢ塚　【文政四年―句帖】

夕顔

夕顔にひさしぶりなる月夜哉　【享和三年―享和句帖】

夕顔に尻を揃へて寢たりけり　【文化十一年―七番日記】

夕顔や馬の尻へも一つ咲く　【文化十三年―七番日記】

夕顔の花で涕かむおばゞかな　【文政二年―おらが春】

源氏の題にて

夕がほや男結ビの垣にさく　【文政年中―嘉永板發句集】

葵

指さしもならぬ葵の咲にけり　【文化十二年―七番日記】

威をかりてしなのゝ葵咲にけり　【文化十二年—七番日記】

夏菊（なつぎく）

夏菊の小しやんとしたる月夜哉　【文化元年—旅日記】

芥子の花（けしのはな）

門番がほまちなるべしけしの花　【享和三年—享和句帖】

咲く日より雨に逢けりけしの花　【享和三年—享和句帖】

生て居るばかりぞ我とけしの花　【文化七年—七番日記】

花けしのふはつくやうな前歯哉　【文化九年—七番日記】

桑の木は坊主にされて芥子の花　【文政三年—句帖・嘉永板發句集】

僧になる子のうつくしやけしの花　【文政七年—九番日記】

一重でもすまゝしものをけしの花　【文政七年—九番日記】

兩方にけしの咲也隱居庭　【文政八年—新集】

芥子さけて群集の中を通りけり　【文政年中—遺句集】

二十四年榮花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花　【文政年中—發句集】

百合の花（ゆりのはな）

松迄は日もとゞきけり百合の花　【享和三年—享和句帖】

我見ても久しき蟾や百合の花　【享和三年—享和句帖】

百合咲や米つく僧の藪白眼　【文化元年—旅日記】

茨の花（いばらのはな）

古郷やよるもさはるも茨の花　【文化七年—七番日記】

茨の花爰をまたげと咲にけり　【文政年中—遺句集】

葎の花

馬柄杓にちよいと葎の咲にけり　【文政二年―句帖】

うちは張て先そよがする葎かな　【文政年中―題叢】

蓮

蓮の香をうしろにしたり岡の家　【享和三年―享和句帖】

二日ぶり夜は明にけり蓮の花　【享和三年―享和句帖】

雀等が浴なくしたり蓮の水　【文化元年―旅日記】

はす池やつんとさし出る乞食小屋　【文化十年―七番日記】

蓮池にうしろつんむく後架哉　【文化十一年―七番日記】

蓮の風ふんばたがつて吹れけり　【文化十三年―七番日記】

蓮池や切てやりたき家の尻　【文化十四年―七番日記】

うす縁や蓮に吹かれて夕茶漬　【文化十四年―七番日記】

蓮の葉に此の世の露は曲りけり　【文政二年―おらが春】

直き世や小錢ほどでも蓮の花　【文政二年―おらが春】

蓮の花少し曲るも浮世かな　【文政二年―おらが春】

沼の蓮葉さへ花さへ賣られけり　【文政五年―九番日記】

泥中の蓮も力ンで咲にけり　【文政五年―九番日記】

花菖蒲

うしろ日のいら〳〵しさよ花あやめ　【文化二年―旅日記】

軒の菖蒲しなびぬうちに寢たりけり　【文化三年―旅日記】

馬の子がなめたがるなりさし菖蒲　【文化十三年―七番日記】

湯上りの尻にべつたり菖蒲哉　【文化十三年―七番日記】

草家根やさゝぬ菖蒲は花がさく　【文政七年―九番日記】

あやめめせ武門かやうに靜なり　【文政年中―嘉永板發句集】

杜若（かきつばた）

杜若低い花にも風の吹く　【文化元年―旅日記】

雁鴨が足を拭くなりかきつばた　【文化九年―七番日記】

太刀かつぐ子のかあいさよ杜若　【文化十五年―七番日記】

馬の子が口さん出すや杜若　【文政二年―句帖、嘉永板發句集】

馬の髪結ひて立なり杜若　【文政二年―句帖】

杜若花ゆゑに葉も切れけり　【文政四年―句帖】

通ひ路に階子わたすやかきつばた　【文政年中―發句集】

大江戸やおめずおくせず杜若　【文政年中―嘉永板發句集】

萍（うきくさ）

萍のちさい經木をたのみ哉　【文化九年―七番日記】

萍の花よ來い〳〵爺が茶屋　【文化九年―題叢・七番日記】

萍の咲てたもるや庵の前　【文化十一年―七番日記】

大沼

萍の花から乘らんあの雲へ　【文政二年―おらが春・句帖】

萍の鍋の中にも咲にけり　【文政三年―句帖】

萍や桶に咲ても風そよぐ　【文政四年―句帖】

荵

水かけて夜にしたりけり釣荵　【文化十一年―七番日記】

蚊屋釣草

野に伏せば蚊屋釣草も頼むべし　【文政三年―句帖】

番附に、和 カヤツリクサ

苔の花

我苔の花咲時に逢にけり　【文化三年―旅日記】

庵の苔花さくすべもしらぬなり　【文化九年―七番日記・題叢】

默禮の髮がそよぐぞ苔の花　【文化十二年―七春日記】

我が苔の花さへ盛り持にけり　【文化十二年―七番日記】

髭袋松に吹かせて苔の花　【文化十二年―七番日記】

我が上にやがて咲らん苔の花　【文化十二年―七番日記・發句集】

山苔も花咲く世話は持にけり　【文政二年―おらが春・句帖】

苔もあれ花の咲けり埋れ家　【文政三年―句帖】

屋根の苔花迄咲て落にけり　【文政四年―句帖】

老僧が塵拾ひけり苔の花　【文政四年―句帖】

秋の部

時候

初秋

初秋や瘧の落たやうな空　【文政二年―句帖】

今朝の秋

草かりや秋ともしらで笛を吹　【文政十年—あみだかさ】

雨だれや三粒おちてもけさの秋　【文化元年—旅日記】

けさ秋ぞ秋ぞと大の男哉　【文化七年—七番日記】

お目出度存じゆ今朝の秋　【文政三年—句帖】

秋立

秋立や身はならはしのよその窓　【文化元年—旅日記】

秋立や峰の小雀の門なるゝ　【文化三年—旅日記】

秋立や隅の小隅の小松嶋　【文化九年—株番・發句集】

立秋は風のとがでもなかりけり　【文政五年—九番日記】

秋立といふばかりでも足かろし　【文政八年—新集】

「狗子有佛生」

秋來ぬとしらぬ狗が佛かな　【文政年中—發句集】

二百十日

二百十日

むしどもゝなき事いふなこんな秋　【文政三年—句帖】

下泉

秋日和

刈株のうしろの水や秋日和　【享和三年—享和句帖】

なぐさみのぱつち〱や秋日和　【文化十五年—七番日記・發句集】

秋日和とも思はない凡夫哉　【文政年中—發句集】

秋の夕

さぼてんやのつぺらぼうの秋の夕　【文化十一年—七番日記】

うかうかと人に生れて秋の夕　【文政年中―題叢】

秋の夜

枕石山

秋の夜や旅の男の針仕事　【寛政五年―句帖】

秋の夜や障子の穴の笛をふく　【文化八年―我春集・發句集】

秋の夜や祖師もかやうに石枕　【文政三年―句帖】

秋の暮

我植し松も老けり秋の暮　【享和三年―享和句帖・旅日記】

一つなくは親なし鳥よ秋の暮　【享和三年―享和句帖】

手招きは人の父也秋の暮　【享和三年―享和句帖】

御佛の外の石さへ秋の暮　【享和三年―享和句帖】

越後節藏に聞えて秋の暮　【文化元年―旅日記】

下の關

どの蟹も平家めく也秋の暮　【文化　年―旅日記】

象潟やそでない松も秋の暮　【文化八年―七番日記】

松島や一こぶしづゝ秋の暮　【文化八年―七番日記】

さをしかや片ひざ立て秋の暮　【文化八年―七番日記】

なかなかに人と生れて秋の暮　【文化八年―我春集・世美塚】

姥の[illegible]たやうな石なり秋の暮　【文化九年―七番日記】

松井山よかりぬと聞く

正夢や終にはかゝる秋の暮　〔文化十年―七番日記〕

えいやつと活た所が秋の暮　〔文化十年―七番日記・發句集〕

薪ちよほ〳〵遠山作る秋の暮　〔文化十年―七番日記〕

我拵へし野けぶりも秋の暮　〔文化十年―七番日記〕

親といふ字を知てから秋の暮　〔文化十年―七番日記〕

草からも乳は出るぞよ秋の暮　〔文化十一年―七番日記〕

江戸〳〵と江戸へ出れば秋の暮　〔文化十一年―七番日記〕

杉で葺く小便桶や秋の暮　〔文化十一年―七番日記〕

芦の穂を蟹がはさんで秋の暮　〔文化十三年―的中集・花實發句集〕

又ことし死損じけり秋の暮　〔文化十三年―七番日記〕

親なしや身に添ふかげも秋の暮　〔文化十三年―七番日記〕

行な雁住めばどつちも秋の暮　〔文政二年―おらが春〕

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮　〔文政二年―おらが春・句帖〕

佐渡ヶ島

某も宿なしにてゆ秋の暮　〔文政三年―句帖〕

留舟や古人ヶ様の秋の暮　〔文政三年―句帖〕

銭金をしらぬ島さへ秋の暮　〔文政五年―九番日記〕

善光寺の柱に、長崎の舊友昨二日通るとありけるに

知た名の落書見えて秋の暮　【文政五年—九番日記】

小言いふ相手のほしや秋の暮　【文政六年—九番日記】

をさな子や笑ふにつけて秋の暮　【文政六年—九番日記。發句集】

古郷は雲の先也秋の暮　【文政十年—句帖】

行秋(ゆくあき)

から／＼と貝殼庇秋過ぬ　【文化八年—七番日記】

行秋やどれもへの字の夜の山　【文化八年—七番日記】

山川眺望、不蹇樓に招るゝ夜は九月六日也けり

秋をしめ／＼とか昔松　【文化九年—木槿集】

行秋やいかい御苦勞かけました　【文政四年—句帖】

行秋やつく／″＼をしと蟬の鳴　【文政五年—九番日記】

行秋や糸瓜の皮のだん俤　【文政四年—句帖】

殘暑(ざんしよ)

よい程に夜が暑いぞ萩すゝき　【文化七年—七番日記】

茶屋の灯のけそりと暑へりにけり　【文化十一年—七番日記】

秋寒(あきさむ)

秋寒や行先／＼は人の家　【享和三年—享和句帖】

ほうろくのがたつく家や秋寒し　【文化二年—旅日記】

冷か(ひやゝか)

よりかゝる度に冷つく柱哉　【享和三年—享和句帖】

下冷よ又上冷よ庵の夜は　【文化十四年—七番日記】

十萬億土よい連なれど少用あり、迹から

先へ行て下冷ぬ場を必よ　【文政七年―九番日記】

風冷り／＼からだのしまりかな　【文政九年―たねおろし】

漸寒

寐むしろや虱わすれてやゝ寒き　【文政年中―題叢・發句集】

うそ寒

信解品　周流諸國五十年

うそ寒や親といふ字を知てから　【文化十年―七番日記　發句集】

うそ寒や如意輪さまもつくねんと　【文化十一年―七番日記】

うそ寒や只居る罰が今あたり　【文化十一年―七番日記】

うそ寒や蚯蚓の唄も一夜ヅヽ　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

うそ寒をはや合点の蜻蛉哉　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

夜永

ばか長き夜と申したる夜永哉　【享和三年―享和句帖】

スリコ木もけしきにならぶ夜永哉　【文化元年―旅日記】

おもしろき夜永の門の四隅哉　【文化八年―七番日記】

蚤どもがさぞ夜永だろ淋しかろ　【文化十年―七番日記】

庵の夜や寢あまる罪は何貫目　【文化十年―七番日記・發句集】

あいつらも夜永なるべしそゝり唄　【文化十年―七番日記】

長いぞよ夜が長いぞよなむあみだ　【文化十年―七番日記】

十ばかり屁を棄に出る夜長哉　【文化十年―七番日記】

下駄からり／＼夜永のやつら哉　〔文化十年―七番日記〕

かくれ家や一かたまりの夜永楽　〔文政七年―九番日記〕

田中

一の湯へ灯貰ひに行く夜永哉　〔文政八年―新集〕

朝寒(あさざむ)

闇の灯のとれかねる也朝寒み　〔享和三年―享和句帖〕

朝寒し／＼と菜うり箕うり哉　〔文化二年―旅日記〕

朝寒や蟾もまなこを皿にして　〔文化二年―旅日記〕

朝寒や菊も少ゝ素湯土瓶　〔文政三年―句帖〕

朝寒や雑巾あてる門の石　〔文政四年―句帖〕

朝寒や垣の茶筅の影法師　〔文政年中―題叢・嘉永板發句集〕

夜寒(よさむ)

やゝ寐よき夜となれば夜の寒哉　〔寛政六年―句帖〕

売俵たゝいて見たる夜寒哉　〔享和三年―享和句帖〕

見る程の木さへ山さへ夜寒哉　〔享和三年―享和句帖〕

先住がめでし榎も夜寒哉　〔文化元年―旅日記〕

見分の門とむきあふ夜寒哉　〔文化元年―旅日記〕

さる程に五両の松も夜寒哉　〔文化元年―旅日記〕

夜寒さへ川さへ住ば住れけり　〔文化三年―旅日記〕

門の木にはしごかゝりて夜寒哉　〔文化六年―鳴の井〕

さぼてんのさめはだ見れば夜寒哉　〔文化八年―七番日記〕

あばら骨なでじとすれど夜寒哉　〔文化十年―七番日記・發句集〕

寐ぐらしに丁度よい程夜寒哉　〔文化十年―七番日記〕

木兎が杭にちよんぼり夜寒哉　〔文化十年―七番日記〕

兩國の兩方ともに夜寒哉　〔文化十年―七番日記〕

救世觀世音かゝる夜寒を助給へ　〔文化十年―七番日記〕

六〔マゝ〕十に二つふみ込む夜寒哉　〔文化十一年―七番日記・狹莚集〕

次の間の灯で飯を喰ふ夜寒哉　〔文化十二年―七番日記〕

店賃の二百を叱る夜寒哉　〔文化十三年―七番日記〕

垣外へ屁を捨に出る夜寒哉　〔文化十三年―七番日記〕

卅日錢がらつく旅の夜寒哉　〔文化十三年―七番日記〕

たばこ盆足で尋る夜寒哉　〔文化十四年―七番日記〕

咄する一方は寐て夜寒哉　〔文化十四年―七番日記〕

盆の灰いろはを習ふ夜寒哉　〔文化十五年―七番日記〕

一人と書留らるゝ夜寒哉　〔文化十五年―七番日記〕

若僧の扇面に

影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩き　〔文政二年―おらが春・發句集〕

小便所こゝと馬よぶ夜寒かな　〔文政二年―おらが春・句帖〕

子供らを心でをがむ夜寒かな　【文政二年―おらが春】
親といふ字を知てから夜寒哉　【文政二年―句帖】
のらくらが遊び加減の夜寒かな　【文政二年―おらが春】
一ツ蚊の伽に鳴たる夜寒かな　【文政四年―句帖】
行燈のしん〳〵として夜寒哉　【文政四年―句帖】
窓際や虫も夜寒の小寄合　【文政五年―九番日記】
藪村に豆腐屋出來る夜寒哉　【文政二年―九番日記】
草の家は秋も晝寒夜寒哉　【文政二年―九番日記】
親の狀三度いたゞく夜寒哉　【文政八年―新集】

旅

一人と帳面につく夜寒かな　【文政年中―嘉永板發句集】
膝がしら木曾の夜寒に古びけり　【文政年中―嘉永板發句集】

野分（のわき）

小簾や蝿よけ草の野分吹　【文化八年―七番日記】
こやし塚そよ〳〵けぶる野分かな　【文政四年―句帖】
痩むしろや野分に吹かす足のうら　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

末枯（うらがれ）

末枯も一番はやき庵哉　【文化二年―旅日記】
末枯や諸勸化入れぬ小制札　【文政年中―發句集】

秋の家（あきのいへ）

只一つ見る俵かよ秋の家　【享和三年―享和句帖】

秋の山（あきのやま）

秋の山活て居ル迚うつ鉦か　【文化二年―旅日記】

秋の水（あきのみづ）

蛇と臑おしするや秋の水　【文政五年―九番日記】

秋の原（あきのはら）

秋の原知たらなんぞうたふべき　【文政年中―發句集】

花野（はなの）

狼も子につかはるゝ花野哉　【文化十一年―七番日記】

刈田（かりた）

大猫の口かせぎする刈田哉　【文化十四年―七番日記】

天文

秋の風（あきのかぜ）

秋の風親なき我を吹そぶり　【享和三年―享和句帖】

日の暮や人の顔より秋の風　【享和三年―享和句帖】

夕月のけば〳〵しさを秋の風　【享和三年―享和句帖】

留別

秋の風蟬もぶつ〳〵おしと鳴　【文化元年―旅日記】

姥捨し國に入けり秋の風　【文化元年―旅日記】

秋風や草より先に人の顔　【文化二年―旅日記】

秋風や家さへ持たぬ大男　【文化二年―旅日記】

秋風の吹けとは植ぬ小松哉　【文化二年―旅日記・題叢】

燒柱轉げたなりに秋の風　【文化三年―旅日記】

欲捨よ〱と吹か秋の風　〔文化三年―旅　日　記〕

草原やとうふの殼に秋の風　〔文化七年―七番　日　記〕

秋風やあれも昔の美少年　〔文化七年―七番　日　記〕

秋の風一茶心に思ふやう　〔文化八年―我春集・七番日記〕

秋風や壁のへマムショ入道　〔文化八年―我春集・七番日記〕

秋風やのらくら者のうしろ吹　〔文化九年―七番　日　記〕

小　兒

泣く者をつれて行とや秋の風　〔文化九年―株　番・七番日記〕

秋風やよこに車の小役人　〔文化九年―七番　日　記〕

秋風やそとば踏へてなく烏　〔文化十年―七番　日　記〕

秋の風俄にぞつとしたりけり　〔文化十年―七番　日　記〕

江戸立の身がまへしたり秋の風　〔文化十一年―七番　日　記〕

うそり山奥州也

秋風や我うしろにもうそり山　〔文化十二年―七番　日　記〕

秋風の一もくさんに來る家哉　〔文化十二年―七番　日　記〕

流さるゝ藿の蝶を秋の風　〔文化十二年―七番　日　記〕

秋風や鶏なく家のてつぺんに　〔文化十三年―七番　日　記〕

秋風や壁をきて寐る坊主宿　〔文化十四年―七番　日　記〕

松宇婦人歿

秋風や摘み殘されし桑の葉に 〔文化十五年―七番日記〕

秋風に歩いて逃げる螢かな 〔文政二年―おらが春〕

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる故郷山 〔文政二年―おらが春・發句集〕

秋風やむしりたがりし赤い花 〔文政二年―おらが春〕

秋風や蓮生坊が馬の尻 〔文政三年―句帖〕

秋風にふつとむせたる峠かな 〔文政四年―句帖〕

西方と氣づく空より秋の風 〔文政五年―九番日記〕

でゞ虫の捨家いくつ秋の風 〔文政五年―九番日記〕

草の葉の釘のとがるや秋の風 〔文政五年―九番日記〕

正見寺の上人十ばかりなる後住を殘して、遷化ありし哀さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ 〔文政五年―九番日記・發句集〕

唐紙の引手の穴を秋の風 〔文政六年―九番日記〕

淋しさに飯を喰ふ也秋の風 〔文政八年―新集〕

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花 〔文政年中―發句集〕

病後

かな釘のやうな手足を秋の風　〔文政年中―發句集〕

墨染の蝶がとぶなり秋の風　〔文政年中―發句集〕

秋の雲

祇兵とともに、相生町見に行かへるさ、兩國茶店にて

橋見えて暮かゝる也秋の雲　〔文化元年―旅日記〕

夕暮や鬼の出さうな秋の雲　〔文化七年―七番日記〕

秋の空

はづかしやおれが心と秋の空　〔文化十三年―七番日記〕

天の川

汁なべもながめられけり天の川　〔享和三年―享和句帖〕

天の川都のうつけ泣やらん　〔享和三年―享和句帖〕

うつくしや障子の穴の天の川　〔文化十年―七番日記・發句集〕

寢むしろやたばこ吹かける天の川　〔文化十二年―七番日記〕

ほんのくぼから冷しけり天の川　〔文政三年―句帖〕

穴のあくほど見たりけり天の川　〔文政四年―句帖〕

木曾山へながれ込けり天の川　〔文政年中―狹蓑集・發句集〕

露

大名の笠にもかゝる夜露哉　〔享和三年―享和句帖〕

海音は堺の北也夜の露　〔享和三年―享和句帖〕

活過し脛をたゝくや艸の露　〔享和三年―享和句帖〕

朝露の袖からけぶり初めけり　〔享和三年―享和句帖〕

おく露やことしの盆は上総山　【文化元年―旅日記】

信

土器のほどこし栗や草の露　【文化元年―旅日記】

今に見よ人とる人も草の露　【文化三年―旅日記】

白露に氣の付年と成にけり　【文化三年―旅日記】

露の玉一ツ〱に古郷あり　【文化三年―旅日記】

草の露あはれことしも蹈そむる　【文化三年―旅日記】

露時雨佛頂面へかゝりけり　【文化三年―旅日記】

墓の顔露のけしきになりもせよ　【文化七年―七番日記】

杭の鷺いかにも露を見るやうに　【文化八年―七番日記】

おく露のはり合もなき念佛哉　【文化八年―七番日記】

露はらり〱大事のうき世哉　【文化九年―株番・七番日記】

ふんどしと小赤い花と夜露哉　【文化九年―七番日記】

白露のてれん偽なき世哉　【文化九年―七番日記】

露ちるやむさい此世に用なしと　【文化十年―七番日記・發句集】

二文茶にかさいの露のまだひぬぞ　【文化十年―七番日記】

露ちるに彌陀の御苦勞あそばさる　【文化十一年―七番日記】

世の中へおちて見せけり草の露　【文化十一年―七番日記】

白露や茶腹で越るうつの山　〔文化十一年—七番日記〕

丸い露何の苦もなく居直りぬ　〔文化十二年—七番日記〕

世の中よでかい露から先おつる　〔文化十三年—七番日記〕

徳本の念佛ともなれ石の露　〔文化十四年—七番日記〕

悼

露の世は得心ながらさりながら　〔文化十四年—七番日記〕

露だぶり世がよい上にまたよいぞ　〔文化十四年—七番日記〕

丸い露いびつな露よいそがしき　〔文化十四年—七番日記〕

わらぢながら墓參

息災で御目にかゝるぞ草の露　〔文化十四年—七番日記〕

露ちるや是から永き夜の段　〔文化十五年—七番日記〕

さと女夭折

露の世は露の世ながらさりながら　〔文政二年—おらが春・發句集〕

露の玉つまんで見たるわらは哉　〔文政二年—おらが春・句帖〕

昔からばさぞおらが露人の露　〔文政三年—句帖〕

上出來の淺黄空なり秋の露　〔文政三年—句帖〕

露ちるや五十以上の旅人衆　〔文政三年—句帖〕

太子堂書懷

撞鐘は草に咲せて石の露　〔文政三年—句帖〕
瓦屋に古び付るや露しぐれ　〔文政四年—句帖〕
世話しなの世や下る露上る露　〔文政四年—句帖〕
露の玉十と揃ひはせざりけり　〔文政四年—句帖〕

道具好める人にしめす

村雨が露の似せ玉造るぞよ　〔文政四年—句帖〕
玉となる欲はある也草の露　〔文政五年—九番日記〕
露の身のおき所也草の庵　〔文政五年—九番日記〕
うつくしやめでたさやても露の玉　〔文政五年—九番日記〕
玉になる智慧は露さへ有馬山　〔文政五年—九番日記〕
柴の戸や手足洗ふも草の露　〔文政八年—新集〕
草刈や火を打こぼす露の原　〔文政八年—新集〕

草庵

客人の草履におくや門の露　〔文政八年—新集〕
露置や茶腹で越るうつの山　〔文政年中—發句集〕

五十過ては

露はらり〳〵大事のうき世哉　〔文政年中—發句集〕
世の中はよすぎにけらし艸の露　〔文政年中—發句集〕

しら露やいつもの處に火の見ゆる　【文政年中―發句集】

男女私にちぎりて夜ひそかに逃行を教訓して

人間は露と答へよ合點か　【文政年中―發句集】

獵好のその身にかゝる夜露哉　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

露ちるや地獄の種をけふも蒔く　【文政年中―發句集】

白露に淨土參りのけいこ哉　【文政年中―發句集】

火ともして生おもしろや艸の露　【文政年中―發句集】

御目出度存ゆけさの露　【文政年中―發句集】

夕やけやから紅に露しぐれ　【文政年中―嘉永板發句集】

露 霧

霜

露霜をゑいしてなめる御馬哉　【文政二年―句帖】

晴てのく霧のはし〲鳰の海　【享和三年―享和句帖】

藁すぐる人や夕霧吹かゝる　【享和三年―享和句帖】

檣さす手からも霧は立にけり　【文化元年―旅日記】

一藪は別の夕霧かゝる也　【文化二年―旅日記】

夕暮や今賣る檳に霧の立　【文化七年―七番日記】

うす霧の引からまりし垣根哉　【文化八年―七番日記】

有明や淺間の霧が膳をはふ　【文化九年―株番・七番日記】

山霧のさつさと拔る座敷哉　【文化十年―七番日記】

夕暮やおばゝが松も霧が立 〔文化十一年―七番日記〕
山霧や瓦の鬼が明く口へ 〔文化十一年―七番日記〕

山寺

山霧の通り抜たり大座敷 〔文化十三年―七番日記〕
牛もう〳〵と霧から出たりけり 〔文化十三年―七番日記〕
古郷をとく降りかくせ霧時雨 〔文化十三年―七番日記〕
夕霧や馬の覺えし橋の穴 〔文政二年―おらが春・句帖〕
さむしろや一文橋も霧のたつ 〔文政二年―句帖〕
翌も〳〵あすも天氣ぞ淺間霧 〔文政四年―句帖〕
人の吹く霧も寒いぞエゾが嶋 〔文政五年―九番日記〕
狹莚や三文槙も霧の立 〔文政六年―九番日記〕
秋霧に河原撫子みゆる哉 〔文政年中―花實發句集・題叢〕
霧に眠る目付きして居ル墓かな 〔文政年中―嘉永版發句集〕

稻妻

水打ていなづま待つや門畠 〔文化二年―旅日記〕
稻妻や蚊にあてがひし片足へ 〔文化九年―七番日記〕
稻妻をとらまへたがる子ども哉 〔文化九年―七番日記〕
稻妻を浴せかけるや死ぎらひ 〔文化十一年―七番日記〕
稻妻やうつかりひよんとした顏へ 〔文化十一年―七番日記・發句集〕

稻妻につぶり撫けりひきがへる　〔文政二年―句帖〕

石川はくはらり稻妻さらりかな　〔文政二年―おらが春〕

稻妻や一ト切づゝに世が直る　〔文政二年―おらが春〕

豐年の大稻妻よいなづまよ　〔文政三年―句帖〕

稻妻や畠の中の風呂の人　〔文政五年―九番日記〕

稻妻や浦の男の供養塚　〔文政六年―九番日記〕

豐年の大稻妻よ〱　〔文政八年―新集〕

秋の雨

秋雨やともしびうつる膝頭　〔享和三年―享和句帖〕

秋の雨いやがる蚤をとばせけり　〔文化十年―七番日記〕

小庇や砂利打やうな秋の雨　〔文化十三年―七番日記〕

秋雨や乳放れ馬の旅に立つ　〔文化十四年―七番日記〕

二軒家や二軒餅つく秋の雨　〔文政三年―句帖・發句集〕

三日月

それ鞠の松にかゝりて三日の月　〔文化十年―七番日記〕

豐秋

むだ草も穗に穗が咲いて三日の月　〔文政四年―句帖〕

宓盞のつゝ張りとれて三ケの月　〔文政六年―九番日記〕

たのもしやまだうす暑き三日の月　〔文政年中―題叢〕

待宵

翌の夜の月を請合ふ爺哉　〔文政年中―發句集〕

十五夜（じふごや）

江戸川や月待宵の芒船　〔文政年中―發句集〕

十五夜や無疵の月はいつのまゝ　〔享和三年―享和句帖〕

十五夜の月やあなたも御安全　〔文政四年―句帖〕

名月（めいげつ）

名月は翌と成けり夜の雨　〔享和三年―享和句帖〕

名月もそなたの空ぞ毛唐人　〔享和三年―享和句帖〕

名月や都に居てもとしのよる　〔文化元年―旅日記〕

名月やけふはあなたも御急ぎ　〔文化七年―七番日記〕

名月や門から直にしなの山　〔文化八年―七番日記〕

名月や高觀音の御ひざ元　〔文政八年―七番日記。我春集〕

赤間關

名月や蟹も平を名乘り出　〔文政九年―句帖・發句集〕

名月とばかり立居むづかしき　〔文化十年―七番日記。發句集〕

名月や明て氣のつく芒疵　〔文化十年―七番日記〕

壁穴に我名月の御出哉　〔文化十二年―七番日記〕

名月や西に向へば善光寺　〔文化十二年―七番日記〕

名月や芒に投る御賽錢　〔文化十四年―七番日記〕

名月の御名代かよ白うさぎ　〔文政二年―句帖〕

名月や當にはせざる壁の穴　〔文政二年―句帖〕

名月を取つてくれろと泣く子かな　〔文政二年―おらが春〕

祝

名月やことに男松のいさみ聲　〔文政二年―句帖〕
名月や五十七年旅の秋　〔文政二年―句帖〕
名月や下戸はしん〳〵しんの坐に　〔文政二年―句帖〕
缺際のいさぎよいのも名月ぞ　〔文政二年―句帖〕
名月やおれが外にも立地藏　〔文政三年―句帖〕
名月にまかせておくや家の尻　〔文政三年―句帖〕
山里は小鍋の中も名月ぞ　〔文政三年―句帖〕
名月のさつさと急ぎ給ふ哉　〔文政四年―句帖〕
名月や生たまゝの庭の松　〔文政五年―九番日記〕
名月や隅の小すみの小松島　〔文政五年―九番日記〕
名月に來て名月を鼾かな　〔文政五年―九番日記〕
名月や山有川有寢ながらに　〔文政五年―九番日記〕
名月や八重山吹のかへり花　〔文政句年―九番日記〕
壁穴で名月をする寐樂哉　〔文政八年―新集〕
名月に尻つんむける草家哉　〔文政九年―句帖〕
名月も御覽の通り屑家哉　〔文政年中―狹蓑集〕

名月や先はあなたも御安全　【文政年中―發句集】

名月や御煤の過し善光寺　【文政年中―發句集】

筑摩川舟留

名月や、つい指先の名所山　【文政年中―發句集】

雨

月の雨　ぼんやりとしてもさすがは名月ぞ　【文化十三年―七番日記】

久しく願ひけるに北國日ひより定めなくて、おもひはたさゞるに、今年文化六年八月十五日同行二人姥捨山に登る事を得たり

今日の月　けふといふ今日名月の御側哉　【文化六年―薑集・發句集】

姥捨などゝは老足むづかしくて

有合の山で濟すやけふの月　【文政四年―句帖・發句集】

小言いふ相手もあらばけふの月　【文政六年―番日・發句集】

秋の月　深川や蠣から山の秋の月　【文政四年―句帖・發句集】

月夜　さらしなを離れし其夜月夜哉　【享和三年―享和句帖】

戸をさして月にもそぶく住居哉　【享和三年―享和句帖】

年寄や月を見るにもなむあみ陀　【文化二年―旅日記】

御月様いくつ昔の神の松　【文化二年―旅日記】

かばかりの藪も毎ばん月夜哉　【文化二年―旅日記】

楪くさき疊も月の夜也けり　【文化三年―旅日帖】

さらしなの月を〆出す庵哉　【文化八年―七番日記】

赤い月是は誰のぢや子ども達　【文化八年―我春集・七番日記】

明く口へ月がさすなり角田川　【文化九年―株番・七番日記】

月も月抑大の月夜哉　【文化九年―株番・七番日記】

月さえよあの世の親が今ござる　【文化十一年―七番日記】

さしあたり當もなけれど月夜哉　【文化十二年―七番日記】

酒盡てしんの坐につく月夜哉　【文政二年―句帖】

月の顏年は十三そこらかな　【文政四年―句帖・發句集】

佛の眞似にはあらねど

有合の臼の上にて月夜哉　【文政四年―句帖】

のゝさまと指た月出たりけり　【文政五年―九番日記】

薄壁や月もろともに家が入　【文政七年―九番日記】

月入て後もたつぷり一夜哉　【文政七年―九番日記】

反古窓もたくさん月のあかり哉　【文政八年―新集】

春耕孫祝

門の月ことに男松のいさみ聲　【文政年中―發句集】

月蝕

人數は月より先へ缺にけり　【文政二年—おらが春】

人の世へ月も出直し給ひけり　【文政二年—おらが春・句帖】

忽に無疵な月と成にけり　【文政二年—句帖】

世は斯うと月も傾ひ給ひけり　【文政二年—句帖】

月見

大雨や月見の舟も見えてふる　【文化二年—旅日記】

人聲やおくれ月見も所がら　【文化十三年—七番日記】

土でつくねた西行も月見哉　【文化十四年—七番日記】

古郷の留守居も一人月見哉　【文政二年—おらが春】

借上に月の缺けるを目利かな　【文政二年—おらが春】

蕎麥國のたんを切りつゝ月見哉　【文政二年—おらが春】

大圓寺

松が枝の上に坐とりて月見哉　【文政四年—句帖】

旅にありて

雁鳴やあはれ今年も片月見　【文政年中—發句集】

後の月

みたらしやすみ捨てある後の月　【文化十五年—七番日記】

積薪の一ッ二ッや後の月　【文政三年—句帖】

人事

七夕(たなばた)

星に手向し衣か人に見せるのか　【享和三年—享和句帖】

星迎大淀かつらどこよけん　【享和三年—享和句帖】

星待や龜も凉しいうしろつき　【文化二年—句帖・題叢】

ふんどしに笛つきさして星迎　【文化十一年—七番日記・題叢】

七日の夜只の星さへ見られけり　【文政二年—句帖・嘉永板發句集】

てもさても御わかい顔や夫婦星　【文政五年—九番日記】

鳴な虫あかぬ別れは星にさへ　【文政五年　九番日記】

わか／＼し星はことしも妻迎　【文政六年—九番日記】

女郎花もつとくねれよ星迎へ　【文政十年—句帖】

娵(よめ)星の御顔をかくす榎かな　【文政年中—遺句集】

梶(かぢ)の葉(は)

御祝儀に梶もそよぐか星いはひ　【文化十一年—七番日記】

子寶が蚯蚓のたるぞ梶の葉に　【文政年中—嘉永板發句集】

踊(をどり)

けふ神垣に鑓を納、是は寇降伏のためとかや

鑓やらんいざ／＼踊れ里わらは　【文化三年—旅日記】

赤紐や手を引れつゝをどり笠　【文化九年—七番日記】

世がよいぞはした踊も月がさす　〔文化十四年—七番日記〕

御留主でもこんな踊や善光寺　〔文政三年—句帖〕

石太郎此世にあらば盆踊　〔文政四年—句帖〕

身の程や踊て見せる親あらば　〔文政五年—九番日記〕

踊聲母そつくり〳〵ぞ　〔文政八年—新集〕

八朔

八朔や犬の椀にも小豆飯　〔文政三年—句帖〕

八朔や盆に乘せたる福俵　〔文政三年—句帖〕

駒迎

一袋蕎麥も添けり駒迎へ　〔文政三年—句帖〕

京入の聲を上けり信濃駒　〔文政三年—句帖〕

花火

べそ〳〵と花火過けり角田河　〔享和三年—句帖〕

世につれて花火の玉も大きいぞ　〔文化十一年—七番日記〕

とをんとんどんとしくじり花火哉　〔文政四年—句帖〕

舟〳〵や花火の夜にも花火賣　〔文政四年—句帖〕

椽はなや二文花火も夜の體　〔文政年中—發句集〕

砧

日中にどたりばたりと砧哉　〔享和三年—句帖〕

穢多町も夜はうつくしき砧哉　〔文化元年—旅日記〕

梟も役にして來る砧哉　〔文化二年—旅日記〕

古郷や母の砧のよわり様　〔文化七年—七番日記〕

小夜砧とばかり寝るもつたいな　【文化七年―七番日記】

どたばたは婆の砧としられけり　【文化十二年―七番日記】

ちとばかりおれに打たせよ小夜砧　【文化十三年―七番日記】

行灯を松に吊して小夜ぎぬた　【文政二年―おらが春・句帖】

行燈を畑に置て碪かな　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

御祝儀にうつ眞似したり麻衣　【文政二年―句帖】

梟が拍子とるなり小夜砧　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

纔ッ子は砧に馴れて寐たりけり　【文政八年―新集】

草藪や君が代をふく小夜砧　【文政年中―題叢・發句集】

飯けむり賑ひにけり夕きぬた　【文政年中―嘉永板發句集】

雨の夜やつい隣なる小夜碪　【文政年中―嘉永板發句集】

人ありと見せる艸履や田番小屋　【文政年中―發句集】

田番（たばん）
案山子（かゞし）

かゞし立て餅なき家はなかりけり　【文化三年―句帖】

蕣のちよいと咲たるかゞし哉　【文化十年―七番日記】

どちらから寒くなるぞよかゞし殿　【文化七年―七番日記】

うかと來て我をかゞしの替り哉　【文化十一年―七番日記】

晝飯をぶらさげて居るかゞし哉　【文化十三年―七番日記】

姨捨はあれにゆとかゞし哉　【文化十五年―七番日記・九番日記】

乳呑子の風除に立つ案山子かな　【文政二年―おらが春・句帖】

紋虎に蝶〻のつくかゞしかな　【文政四年―句帖】

晝顏のもやうにからむかゞし哉　【文政五年―句帖】

道問ひにはる〴〵來れば案山子哉　【文政八年―新集】

目出度は案山子もつひのけぶり哉　【文政八年―新集】

老の身やかゞしの前も恥かしき　【文政年中―狹萎集】

鳴子（なるこ）

鳴子から先へぬれけり窓の雨　【文化元年―旅日記】

一つ宛寒い風吹く鳴子哉　【文化二年―旅日記】

狗の通るたんびに鳴子かな　【文政五年―九番日記】

寢咄の足でおり〳〵鳴子哉　【文政五年―九番日記】

新酒（しんしゅ）

杉の葉のぴんとそよぐや新酒樽　【文政八年―新集】

小言いひ〳〵底たゝく新酒哉　【文政八年―新集】

濁酒（にごりざけ）

鍋こてら田におろす也濁り酒　【文政五年―九番日記】

茸狩（たけがり）

茸狩のから手で戻るさわぎ哉　【文政二年―句帖・狹萎集】

燒米（やきごめ）

燒米や子のない家も御一口　【文化二年―旅日記】

落し水（おとしみづ）

落水魚も古郷へもどる哉　【寛政五年―句帖】

小田守も落した水を見たりけり　【文化三年―旅日記】

田の水も小ばやく落すひとり哉　【文化三年―旅日記】

落し水鯰も瀧を上るなり　【文化十五年―七番日記】

崩れ築（くずれやな）

川添や雨の崩れ家崩れ築　【文政四年―九番日記】

親の築崩れ仕廻もせざりけり　【文政四年―九番日記】

角力（すまふ）

負角力其子の親も見て居るか　【寛政四年―句帖】

女郎花もつとくねれよ勝角力　【文化三年―旅日記】

痩馬にふんまたがりし角力哉　【文化八年―七番日記】

艸花を腮でなぶるや勝角力　【文化九年―九番日記】

べつたりと人のなる木や宮角力　【文化十四年―七番日記・發句集】

負相撲板行にして賣れけり　【文政四年―九番日記・狭蓑集】

見ずしらぬ角力にさへもひいき哉　【文政六年―九番日記】

勝角力虫も踏ずにもどりけり　【文政六年―九番日記】

脇向て不二を見る也勝角力　【文政七年―九番日記】

宗教

御射山祭（みさやままつり）

すは山やすべた芒も祭らるゝ　【文化十二年―七番日記】

青箸としとりといふもけふなりけり

ちぐはぐの芒の箸も祝哉　【文化十二年―七番日記】

御謝山や見ても涼しき芒箸　【文政四年―句帖】
御謝山やけふ一日のはなすゝき　【文政四年―句帖】

御謝山

へし折し芒の箸も祭り哉　【文政四年―句帖】
みさ山はけふ一日の名所哉　【文政七年―九番日記】
萩の末芒のもとや喰祭　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

盆(ぼん)

山里やあゝのこをのと日延盆　【文政七年―九番日記・發句集】
ふがひない家とおぼしそ盆佛　【文政八年―新集】

燒後、田中に盆して

御佛はさびしき盆とおぼすらん　【文政十年―句帖】

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたゝく　【文政年中―發句集】

燈籠(とうろう)

盆灯籠三ッ二ッ見て止めにけり　【享和三年―享和句帖】
夕風や木のない門の高灯籠　【文化元年―旅日記】
餘所事と思へ〱ど灯籠哉　【文化元年―旅日記】
草原にそよ〱赤い灯籠哉　【文化七年―七番日記】
灯籠にうざうむざうの咄かな　【文化十二年―七番日記】
我宿は灯籠釣さぬあたり哉　【文化十二年―七番日記】

うら住の二軒もやひの灯籠哉　【文政五年―九番日記】

履の用心がてら灯籠かな　【文政五年―九番日記】

灯籠の火で飯をくふ裸かな　【文政九年―句帖】

迎火(むかへび)

迎火やどちへも向かぬ平家蟹　【文化九年―七番日記】

迎火は草のはづれのはづれ哉　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

迎鐘(むかへがね)

迎ひ鐘落る露にも鳴りにけり　【文化七年―七番日記】

あの月は太郎がのだぞ迎鐘　【文化十一年―七番日記・題叢】

負た子が手でとゞくなり迎鐘　【文化十二年―七番日記】

なぐさみに打つと知りつゝ迎鐘　【文化十二年―七番日記】

旅人のならして行や迎ひ鉦　【文政八年―新集】

魂棚(たまだな)

魂棚や上座して鳴くきり〲す　【文化十一年―七番日記・題叢】

魂棚にかけ奉るたすき哉　【文化十一年―七番日記】

棚經(たなぎやう)

棚經を手前でよんで置にけり　【文化十二年―七番日記】

棚經を迯尻でよむ法師かな　【文政十年―句帖】

精靈(しやうりやう)

聖靈の御立をはやす川原哉　【文化七年―七番日記】

精靈の立ふる舞の月夜哉　【文政年中―發句集】

瓜の馬(うりのうま)

瓜の馬くれろ〱と泣く子哉　【文化十二年―七番日記】

茄子の馬(なすびのうま)

さし汐や茄子の馬の流れよる　【享和三年―享和句帖】

蟀のふいと乘けり茄子馬　【文化十二年―七番日記】

すね茄子馬役を相つとめけり　【文政六年―七番日記】

墓参(はかまゐり)

餘り花人の墓へも參りけり　【文政四年―句帖】

わらんぢのまゝで御意得る御墓哉　【文政五年―九番日記】

古犬が先に立つ也墓參り　【文政六年―九番日記】

孤や手を引れッヽ墓灯籠　【文政八年―新集】

末の子や御墓參りの箒持　【文政年中―發句集】

送り火(おくりび)

送り火やばたりと消てなつかしき　【文化八年―七番日記】

送り火や焚眞似しても秋の露　【文化九年―七番日記】

送り火や今に我等もあの通り　【文政十年―句帖】

魂送(たまおくり)

おれが座もどこぞにたのむ佛達　【文化十一年―七番日記】

攝待(せつたい)

攝待や猫がうけとる茶釜番　【文政六年―九番日記】

攝待の名ぬしは石のほとけ哉　【文政年中―花實發句集】

放生會(はうじやうゑ)

とくかすめとく／＼かすめ放ち鳥　【文化七年―おらが春・七番日記】

さればとて脇へも行ず放し鶴　【文化九年―七番日記】

栃團子(とちだんご)

栃だんごうたがふらくは是仙家　【文政年中―狹蓑集】

妙法の火(めうほふのひ)

いざいそげ火も妙法を捨る　【文化十一年―七番日記】

動物

鹿（しか）

一の湯は錠の下りけり鹿の鳴　〔文化元年―旅日記〕

丘の邊や人にたよりて鹿の鳴　〔文化元年―旅日記〕

さをしかの萩にかくれしつもり哉　〔文化二年―旅日記〕

さをしかの片ひざ立て雲や思ふ　〔文化二年―旅日記〕

さをしかは萩に糞して別れけり　〔文化十年―七番日記〕

おれが方へ尻つんむけて鹿の鳴　〔文化十一年―七番日記〕

足枕手枕鹿のむつましや　〔文化十一年―七番日記・題叢〕

山寺や椽の上なる鹿の聲　〔文政二年―おらが春・句帖〕

下手笛によつく聞けとや鹿の聲　〔文政二年―おらが春〕

不性鹿聞放しにて寢たりけり　〔文政二年―句帖〕

有明や鹿十ばかり對に啼　〔文政三年―句帖〕

我なりをうさんと見てや鹿の呼　〔文政三年―句帖〕

夜あらしや窓に吹込む鹿の聲　〔文政三年―句帖〕

さをしかやそれほど迯ずともよいに　〔文政四年―句帖〕

ぞつとした鹿から迯てくれにけり　〔文政四年―句帖〕

やさしさや鹿も戀路に迷ふ山　〔文政年中―發句集〕

敷島や深山の鹿も色好む　【文政年中—遺句集】

鹿鳴や今二三町遠からば　【文政年中—嘉永板發句集】

初雁

初雁や芒はまねく人は追ふ　【文化八年—我春集・七番日記】

初雁が人にはこして通りけり　【文化八年—七番日記】

初雁やあてにして來る庵の畠　【文化八年—我春集・七番日記】

初雁の三羽も竿と成にけり　【文政二年—句帖・嘉永板發句集】

初雁もとまるや戀の輕井澤　【文政年中—嘉永板發句集】

雁

行雁や更科見たき望みさへ　【享和三年—享和句帖】

不揃な家を目がけて來る雁か　【文化元年—旅日記】

夕風やふり向度に雁の鳴　【文化三年—旅日記】

暮行や雁とけぶりと膝がしら　【文化七年—七番日記】

鎌倉や實朝どのゝ天つ雁　【文化七年—七番日記】

行あたりばつたり雁の寢所哉　【文化七年—七番日記】

大橋や鑓もちどのゝ迹の雁　【文化七年—七番日記】

髭殿がおじやるぞだまれ小田の雁　【文化八年—七番日記】

とぶ雁よそれ〳〵そこは鬼の家　【文化八年—七番日記】

田の雁や里の人數はけふもへる　【文化八年—我春集・七番日記】

御佛の河中島ぞおりよ雁　【文化九年—七番日記】

とほ〳〵と足よわ雁の一つ哉　〔文化九年―七番日記〕
けふからは日本の雁ぞ樂に寢よ　〔文化九年―七番七番〕

小梅筋

かしましや將軍樣の雁ぢや迚　〔文化九年―株番・七番日記〕
雁わや〳〵おれが噂を致す哉　〔文化九年―株番・七番日記〕
古屋根の芒雁がね鳴にけり　〔文化十一年―七番日記〕
斯しては居られぬ世なり雁が來た　〔文化十二年―七番日記〕
連のない雁よ來よ〳〵宿かさん　〔文化十二年―七番日記〕
雁どもゝ來よ〳〵そこは臨の田ぞ　〔文化十三年―七番日記〕
鳴くな雁けふから我も旅人ぞ　〔文化十三年―七番日記〕
雁よ雁いくつの年から旅をした　〔文化十三年―七番日記〕
起番よ寐番よ雁のむつましき　〔文化十三年―七番日記〕
雁鳴くや相變らずに來ましたと　〔文化十四年―七番日記〕
下る雁どこの世並がよかんべい　〔文化十五年―七番日記〕
おとなしく雁よ寐よ〳〵どこも旅　〔文化十五年―七番日記〕
得手ものゝ片足立や小田の雁　〔文政二年―おらが春・句帖〕
大組の呼下しけり小田の雁　〔文政二年―句帖〕
雁鳴やおなりもしらで安堵顏　〔文政二年―句帖〕

片足立して見せるなり杭の雁　【文政二年―句帖】
雁啼や難なく碓氷越たりと　【文政二年―句帖】
雁どもが夜を日についで渡りけり　【文政二年―句帖】
一ツ雁夜〳〵ばかり渡りけり　【文政二年―句帖】
あれ月や〳〵と雁のさわぎ哉　【文政三年―句帖】
御成場や人よけさせて雁の鳴く　【文政三年―句帖】
雁どもや御用をかさに來て騒ぐ　【文政三年―句帖】
御成風吹かせて雁の立にけり　【文政三年―句帖】
いきせきとしてかけつくや跡の雁　【文政四年―句帖】
夜通しに雁も泊りにはぐれたか　【文政五年―九番日記】
雁寐よ〳〵旅艸臥の直る迄　【文政八年―新集】
雁が來た國の布子はなぜ遲い　【文政八年―新集】
くつろいで寐たり起たり門の雁　【文政八年―新集】
迹連をおつぱづしてや雁急ぐ　【文政八年―新集】
白川や曲り直して天津雁　【文政年中―發句集】
天津雁おれが松にはおりぬ也　【文政年中―發句集】
おちつくと直に鳴けり小田の雁　【文政年中―發句集】

鴫

立鴫とさし向ひたる佛哉　【文化八年―七番日記】

小けぶりやさて又鳴の影法師 【文化八年―七番日記】
鴫立や人のうしろの人の顔 【文化八年―七番日記】
鴫に似た人が立ても夕哉 【文化八年―七番日記】
けぶり立ち鴫立ち人も立ちにけり 【文化十四年―七番日記】
鴫よりもしぎ突やつが夕かな 【文政四年―句帖】
三絃で鴫を立たする潮來哉 【文政四年―句帖】
立鴫や我うしろにもうつけ人 【文政年中―題叢】

手古奈の井

立鴫の今にはじめぬ夕哉 【文政年中―猿蓑集・發句集】

啄木鳥

木つゝきの死ねとて敲く柱哉 【文化二年―旅日記】
木つゝきが目利して居る菴かな 【文政二年―おらが春・句帖】
啄木鳥の止めて聞かよ夕木魚 【文政二年―おらが春・句帖】
木啄のけいこに叩く柱かな 【文政二年―句帖】

鶉

なけ鶉邪魔なら庵もたゝむべき 【文化元年―旅日記】
小庇やけむい／＼となく鶉 【文化八年―七番日記】

鵙

鵙の聲かんにん袋破れたか 【文化十一年―おらが春・七番日記】
鵙よ鵙びんちやんするなかゝる代に 【文化十一年―七番日記】
頰けたを切さけられな鵙の聲 【文政三年―句帖】

燕歸る

鳴鳴くやあつもり返せ〳〵迚　【文政五年―九番日記】

乙鳥飛ぶや二度とふたゝび來ぬふりに　【文化十三年―七番日記】

又おせわになりますると鳴く燕　【文化十四年―七番日記】

山雀

山雀の輪拔けしながら渡りけり　【文政二年―おらが春・句帖】

小雀

朝夕や岑の小雀の門なるゝ　【文化三年―旅日記・題叢】

四十雀

むつかしやどれが四十雀五十から　【文政三年―句帖】

渡り鳥

どう追はれても人里を渡り鳥　【文政二年―おらが春・句帖】

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥　【文政二年―おらが春】

雀らも眞似して飛ぶや渡り鳥　【文政五年―九番日記】

渡り鳥一藝なきはなかりけり　【文政七年―九番日記】

蛇入穴

蛇の穴安房鼠が入にけり　【文政三年―句帖】

蛇も入る穴はもつなりどん太郎　【文政三年―句帖・發句集】

ふだらくや蛇も御法の穴に入る　【文政四年―句帖・發句集】

德本の御杖の穴や蛇も入る　【文政四年―句帖】

それ形に成佛いたせ穴の蛇　【文政四年―句帖】

蛇入るなそこは邪見の人の穴　【文政四年―句帖】

野らの蛇入るや鼠の明穴に　【文政四年―句帖】

鰍

鰍鳴く月の山川狩られけり　【文化七年―七番日記】

蚯蚓鳴

古犬や蚯蚓の唄にかんじ兒　【文政二年―句帖・發句集】

里の子や蚯蚓の唄に笛を吹く　【文政八年―新集】

其聲のさつても若い蚯蚓哉　【文政八年―新集】

秋の蟬

秋の蟬つく〴〵寒し〴〵となく　【文化十年―七番日記】

秋の蟬ころびおちては又鳴ぬ　【文化十一年―七番日記】

仰のけに落て鳴けり秋の蟬　【文政三年―句帖】

蜩

けふも〳〵あゝ日ぐらしに鳴かれけり　【文政四年―句帖】

寒いぞよ軒の蜩唐がらし　【文政年中―發句集】

蜻蛉

蜻蛉や二尺飛んでは又二尺　【文化元年―旅日記】

うろたへな寒くなる迚赤蜻蛉　【文化元年―旅日記】

蜻蛉の尻でなぶるや角田川　【文化十年―七番日記】

三日月を白眼つめたる蜻蛉哉　【文政三年―句帖】

馬の耳ちよこ〳〵なぶるとんぼ哉　【文政五年―九番日記】

虫

吹降や家陰たよりて虫の聲　【寛政四年―句帖】

鳴けよ虫腹の足しにもなるならば　【文化十一年―七番日記】

虫なくなそこは諸人の這入口　【文化十四年―七番日記】

籠の虫妻戀しとも鳴くならん　【文化十五年―七番日記】

虫どもゝまめではねるか戻つたぞ　【文政二年―句帖】

虫鳴や五分の魂ほしいとて　【文政二年―句帖】

虫鳴や草鞋も口を持つたとて　【文政三年―句帖】

じれ虫が身をいす振つて鳴にけり　【文政四年―句帖】

虫どもがなき事いふぞともすれば　【文政三年―句帖】

わや〳〵と虫の上にも夜なべかな　【文政三年―句帖】

聲〳〵に虫も夜なべのさわぎ哉　【文政五年―九番日記】

虫の外にも泣事や藪の家　【文政五年―九番日記】

おてんばよ虫もよなべにつゞれさす　【文政八年―新集】

雨月寐娘

つゞれさせさせ迚虫が叱る也　【文政八年―新集】

鳴な虫直る時には世が直る　【文政八年―新集】

なか〳〵に捨られにけりだまり虫　【文政八年―新集】

松虫や素湯もちん〳〵ちろりんと　【文政八年―新集】

松虫（まつむし）　鈴虫（すずむし）

世がよしや虫も鈴ふりはたをおる　【文化十一年―七番日記】

よい世とや虫が鈴ふり鳶がまふ　【文化十五年―七番日記】

あれ見よや虫が鈴ふりつゞれさす　【文化十五年―七番日記】

虫も鈴ふる也家内安全と　【文政七年―九番日記】

蟋蟀（きりぎりす）

きり〳〵す隣に居ても聞えけり　【文化元年―旅日記】

夕月や流れ殘りのきり〴〵す　〔文化元年—旅日記〕

その草はむしり殘すぞ　蛬　〔文化元年—旅日記〕

蛬きり〳〵死もせざりけり　〔文化二年—旅日記〕

蛬なけとてもやす芦火哉　〔文化二年—旅日記〕

夕汐や壁にすがりてきり〴〵す　〔文化七年—七番日記〕

庵の夜や棚捜しする　蛬　〔文化七年—七番日記〕

がり〳〵と竹かじりけりきり〴〵す　〔文化八年—七番日記〕

象潟を鳴きなくしけり　蛬　〔文化八年—七番日記〕

出て行ぞ仲よく遊べきり〴〵す　〔文化八年—七番日記〕

又も來よ膝をかさうぞきり〴〵す　〔文化九年—七番日記〕

鳴行くやちんば引き〳〵　蛬　〔文化九年—七番日記〕

迯しなに足ばし折なきり〴〵す　〔文化十年—七番日記〕

今掃し箒の中のきり〴〵す　〔文化十年—七番日記〕

妻やなきしはがれ聲のきり〴〵す　〔文化十年—七番日記〕

けふ迄はまめで鳴たよきり〴〵す　〔文化十年—七番日記・發句集〕

も一つの連はどうしたきり〴〵す　〔文化十年—七番日記〕

我足を草と思ふかきり〴〵す　〔文化十一年—七番日記〕

あてがつておくぞ共藪　蛬　〔文化十一年—七番日記〕

迯しなや瓜喰かけてきり〴〵す　【文化十一年―七番日記】

とぶ氣かや鬚をかつぎて蛬　【文化十一年―七番日記】

蛬穂屋を葺れて鳴にけり　【文化十二年―七番日記】

蛬まんまと籠を出たりけり　【文化十二年―七番日記】

白露の玉ふむかきなきり〴〵す　文化十三年―七番日記・句帖

寐返りをするぞそこのけ蛬　【文化十三年―七番日記・發句集】

下冷や臼の中にてきり〴〵す　【文化十四年―七番日記】

蛬紙袋にて鳴きにけり　【文化十五年―七番日記】

蛬かゞしの腹で鳴にけり　【文政二年―句帖】

歯きしみの拍子とるなりきり〴〵す　【文政三年―句帖】

錢箱の穴より出たりきり〴〵す　【文政三年―句帖】

蟋蟀身を賣られてぞ鳴きにけり　【文政三年―句帖】

蛬きり〳〵仕廻へ寒い雨　【文政五年―九番日記】

放ちやる手をかじりけりきり〴〵す　【文政八年―新集】

藪むらや燈籠の中に蟋蟀　【文政年中―狹集。發句集】

きり〴〵す聲が若いぞ〳〵よ　【文政年中―發句集】

彌陀堂の土になる氣かきり〴〵す　【文政年中―發句集】

妻におくれし太笻叟の聞くこと見る事、氣むづかしか

らんと

機織虫
螽斯
蛼

共窓にそれ〳〵虫もはたおるな　〔文化十五年―七番日記〕
ばつた虫ばたり〳〵が一藝か　〔文政四年―句帖〕
蛼のなくやころ〳〵若い同士　〔文化七年―七番日記〕
蛼がうごかして行く柱哉　〔文化八年―七番日記〕
蛼が顔こそぐつて通りけり　〔文化八年―七番日記〕
蛼が髭をかつぎて鳴にけり　〔文化九年―七番日記〕
蛼の飛ぶや唐箕の埃先　〔文政二年―おらが春・句帖〕
蛼の受取て鳴くかまど哉　〔文政三年―句帖〕
蛼の髭染て居る繪の具哉　〔文政四年―句帖〕

螽

鞍壺に三ツ四ツ六ツいなご哉　〔寛政五年―句帖〕
鎌の刃をくゞり巧者の螽哉　〔文化十五年―七番日記〕
螽等か飛ぞ世がよい〳〵と　〔文政三年―句帖〕
なぐさみに螽のおよぐ湖水かな　〔文政四年―句帖〕
したゝかに人を蹴てとぶいなご哉　〔文政五年―九番日記〕
洪水に運の強さよとぶいなご　〔文政八年―新集〕

九月盡

あれ程のいなごも一ツ二ツかな　〔文政八年―新集〕

蟷螂(かまきり)

蟷螂が片手かけたりつり鐘に　【文化十二年―七番日記】

蟷螂がわざ〳〵罷出ゆ　【文化十三年―七番日記】

蟷螂よ五分の魂是見よと　【文政二年―おらが春】

其分にならぬ〳〵と蟷螂哉　【文政年中―發句集】

蓑虫(みのむし)

もたいなや虫も蓑着てかせぐ世に　【文政四年―句帖】

屁、放虫(へひりむし)

屁ひり虫爺が垣根としられけり　【文化十一年―七番日記、[illegible]】

屁ひり虫人になすつた面つきぞ　【文化十二年―七番日記】

虫の屁を指して笑ひ佛かな　【文政二年―おらが春　發句集】

おれよりははるか上手よ屁ひりむし　【文政三年―句帖】

屁をひつてしやあ〳〵として垣の虫　【文政三年―句帖】

尺獲虫(しやくとりむし)

幽栖

虫に迄尺とられけり此はしら　【文政二年―おらが春。句帖】

綿の虫(わたのむし)

わたの虫本ンの間へ迯げ入ぬ　【文政四年―句帖】

鰯(いわし)

越後女の哀れさを

鰯めせ〳〵とや泣子負ひながら　【文政二年―句帖】

澁鮎(さびあゆ)

吉野鮎澁ればさびをはやさるゝ　【文政四年―句帖】

さくら葉もちらり〳〵や鮎さびる　【文政七年―九番日記】

人ならば四十盛りぞ鮎さびる　【文政七年―九番日記】

植物

桐一葉

活過し脛を叩けば一葉哉　【享和三年―享和句帖】
あらかんと二人寐て見る一葉哉　【享和三年―享和句帖】
ふは〱としていく日立つ一葉哉　【享和三年―享和句帖】
桐一葉二は三は四葉せはしなや　【文化九年―七番日記】
桐一葉とてもの事に西方へ　【文化九年―七番日記】
けさ程やこそりと落てある一葉　【文化九年―七番日記】
寐た犬にふはとかぶさる一葉哉　【文化十一年―七番日記】
桐の木やてきぱき散てつんと立　【文化十一年―七番日記】
狗が敷てねまりし一葉哉　【文政五年―九番日記】
桐一葉蠅よけにして寐たりけり　【文政八年―新集】

紅葉

さをしかの尻にべつたり紅葉哉　【文化十二年―七番日記】
紙屑のたしにちりたる紅葉哉　【文化十二年―七番日記】
鰐口にちよいとくはへし紅葉哉　【文化十四年―七番日記】
一つかみ塗樽拭ふ紅葉かな　【文政二年―おらが春】
少し散るうちや紅葉も拾はるゝ　【文政四年―句帖】
折〱に小瀧をなぶる紅葉哉　【文政五年―九番日記】

名所紅葉

缺椀も同じ流や立田川 【文政五年―九番日記・發句集】

谷川の脊に冷つくや夕紅葉 【文政五年―九番日記】

さをしかの水涕拭ふ紅葉哉 【文政年中―題叢・發句集】

大寺の片戸さしけり夕紅葉 【文政年中―發句集】

蔦紅葉

蔦紅葉最一つ家をほしげ也 【享和三年―享和句帖】

草紅葉

魚汁のとばしる草も紅葉哉 【文化元年―旅日記】

どの草も犬の後架ぞ散紅葉 【文化十一年―七番日記】

柿

生つたりな柿のほぞ落ちする迄に 【文化十三年―七番日記】

庵の柿生り年もつもをかしさよ 【文化十四年―七番日記】

夢にさと女を見て

頬ぺたにあてなどす也赤い柿 【文政二年―句帖】

澁いとこ母が喰ひけり山の柿 【文政三年―句帖】

柿の木であいと答へる小僧哉 【文政三年―句帖・發句集】

柿の實や幾日ころげて麓迄 【文政年中―嘉永板發句集】

澁柿

澁柿をはむは烏のまゝ子哉 【文化十三年―七番日記】

梨

戸隱山

初梨の天から降ッた社壇哉 【文政八年―新集發句集】

石梨や盲の面に吹きつける　〔文政八年―新集〕

柘榴（ざくろ）

我味の柘榴へ這す虱かな　〔文政三年―句帖・發句集〕

紅の舌を巻たるざくろかな　〔文政四年―句帖〕

栗（くり）

檻桶落ぬ日はなし岑の栗　〔文化三年―句帖〕

小布施

拾れぬ栗の見事よ大きさよ　〔文化十年―七番日記・發句集〕

大栗や栗の中にも虫の住む　〔文化十四年―七番日記〕

妹が子にそれゆづるぞよ杓子栗　〔文化十五年―七番日記〕

落る葉もちらりほらりやすがれ栗　〔文政二年―句帖〕

人ちらり木の葉もちらりすがれ栗　〔文政二年―句帖〕

流るゝに苦はなかりけり實なし栗　〔文政二年―句帖〕

柴栗の一人はぢけて居たりけり　〔文政三年―句帖〕

馬鹿猫や迯げたいが栗見にもどる　〔文政四年―句帖〕

栗ひとつ取に挑灯さわぎ哉　〔文政四年―句帖〕

栗拾ひねん／＼ころり云ひながら　〔文政五年―九番日記〕

くら壁に打つける也峰の栗　〔文政五年―九番日記〕

竈の栗者ども來よとはねる也　〔文政六年―七番日記〕

いがごてら都へ出たり丹波栗　〔文政十年―句帖〕

木槿（むくげ）

うか〱と出水に逢し木槿哉　【文化元年—旅日記・題叢】

遅咲の木槿四五本鳴く蚊哉　【文化二年—旅日記】

酒冷すちよろ〱川の木槿哉　【文化二年—旅日記】

ほろ〱が妻もこもりし木槿咲　【文化三年—旅日記】

花木槿鳥叱りてながらふる　【文化三年—旅日記】

七尺の栗おし分て木槿哉　【文化九年—七番日記】

搦手は木槿でかくす関屋哉　【文政年中—狭蓑集】

団栗（どんぐり）

落椎のあくまでぬれし旭哉　【文化元年—句帖】

団栗やころり子供のいふなりに　【文政四年—句帖】

橡散る（とちちる）

橡の葉の朝から散るや豆腐桶　【文政年中—題叢】

橡の實（とちのみ）

橡の實やいく日ころげて峯まで　【文政年中—題叢】

葡萄（ぶだう）

色白は江戸へ賣らるゝ葡萄哉　【文政七年—句帖】

菊（きく）

菊の花茄子序にぬかれけり　【文化二年—旅日記】

古郷や菜に引そへる菊の花　【文化八年—七番日記】

夕飯や醤油かけても菊の花　【文化八年—七番日記】

鬢に筆つッさして菊の花　【文化八年—七番日記】

夕暮や馬糞の手をも菊でふく　【文化十年—七番日記】

どう寝よとまゝの皮なり菊の花　【文化十年—七番日記】

汁鍋にむしり込だり菊の花　〔文化十年―七番日記〕
金藏を日除にしたり菊の花　〔文化十一年―七番日記〕
勝菊や力み返つて持つ奴　〔文化十一年―七番日記〕
菊垣にちよいとさしたり小脇差　〔文化十一年―七番日記〕
菊咲や茂介佛も願がきく　〔文化十一年―七番日記〕
我菊や形にもふりにもかまはずに　〔文化十二年―七番日記〕
我菊や向きたい方へつんむいて　〔文化十四年―七番日記〕
うるさしや菊の上にも負勝ちは　〔文化十四年―七番日記〕
菊園や女ばかりが一床几　〔文化十五年―七番日記〕
勝菊は大名小路もどりけり　〔文化十五年―七番日記〕
猿の脈も見る顏つきや菊の花　〔文政二年―句帖〕
小菊なら細目の恥はなかるべし　〔文政二年―おらが春・句帖〕
下戶庵が疵也こんな菊の花　〔文政二年―おらが春〕
入道の大鉢卷できくの花　〔文政二年―おらが春〕
杖先で畫解する也菊の花　〔文政二年　おらが春・句帖〕
我やうにどつさり寐たよ菊の花　〔文政二年―おらが春〕
菊園や步きながらの小盃　〔文政二年―おらが春・發句集〕
小隱居や菊の中なる茶呑道　〔文政二年―句帖〕

殿よりも少し上座や菊の花　【文政二年─句帖】

樂〱と寢て咲にけり名なし菊　【文政二年─句帖】

小坐敷や袖で拭ひし菊の酒　【文政二年─句帖】

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農顏や菊の花　【文政二年─おらが春・句帖】

鍬を杖に突〱菊の主かな　【文政二年─句帖】

鍬の柄に小僧が名あり菊の花　【文政二年─句帖・嘉永板發句集】

山の菊曲るなんどはしらぬなり　【文政三年─句帖】

綿きせて十ほど若し菊の花　【文政三年─句帖】

小人閑居成不善

茶代とるとてならふ也菊の花　【文政三年─句帖】

此菊の直なりけらしおのづから　【文政三年─句帖】

今の世や菊も賣らるゝ評判記　【文政四年─句帖】

艸菴は菊迄杖をちからかな　【文政四年─句帖】

汁の實の足しに咲けり菊の花　【文政四年─句帖】

大菊や今度長崎よりなどゝ　【文政四年─句帖・發句集】

念入て尺とる虫や菊の花　【文政四年─句帖】

菊咲や二夜泊りし下々の客　【文政五年─九番日記】

斯来よと菊の立けり這入口　【文政五年―九番日記】

見やう見まねに藪菊と成にけり　【文政七年―九番日記】

負け菊をひとり見直す夕べかな　【文政年中―狹蕣集・發句集】

菊作り九日は菊を貰ひけり　【文政年中―花實發句集】

爰に正風院、此奥に百花あり

門に立ッ菊や下戸なら通さじと　【文政年中―發句集】

酒臭き黄昏ごろや菊の花　【文政年中―嘉永板發句集】

朝顔(あさがほ)

君が扇の風朝顔にとゞく哉　【寛政六年―句帖】

朝顔にとゞく旅店の灯影哉　【寛政六年―句帖】

朝顔や女車の毛唐人　【享和三年―享和句帖】

蕣におッつぶされし庇哉　【文化二年―旅日記】

氣に入らぬ蕣過分咲にけり　【文化二年―旅日記】

蕣の一番がけに濡るゝ哉　【文化二年―旅日記】

鐘の聲蕣先へそよぐ也　【文化二年―旅日記】

朝顔や我おこたりの目に見ゆる　【文化二年―旅日記】

取込みの門も蕣咲にけり　【文化二年―旅日記】

留主のうちに大蕣は過にけり　【文化二年―旅日記】

蕣に入口もないしだら哉　【文化二年―旅日記】

びちや／＼と藪蕣の咲にけり　【文化三年―旅日記】

蕣やまだ片づかぬやけ瓦　【文化三年―旅日記】

蕣に名利張りたる住居哉　【文化三年―旅日記】

蕣やあかるゝころは晝も咲　【文化八年―七番日記】

雷鉢の音に朝顔咲にけり　【文化十二年―七番日記】

蕣に出し抜れたぞけふも亦　【文化十二年―七番日記】

朝顔もはやり花かよ世にあれば　【文化十五年―七番日記】

ながらへば絞蕣何のかのと　【文化十五年―七番日記】

朝顔の花やさら／＼さあらさら　【文政四年―句帖】

朝顔の上からとるや徑山寺　【文政四年―句帖・發句集】

朝顔をあいそにおくや店の先　【文政八年―新集】

朝顔にまくしかけたる湯霧哉　【文政八年―新集】

善光寺

朝顔とおつゝかつゝや開帳がね　【文政八年―新集】

朝顔や横たふは誰が影法師　【文政年中―花實發句集】

朝顔や人の顏にはそつがある　【文政年中―發句集】

蕣や一霜添てぱつと咲　【文政年中―嘉永板發句集】

女郎花（をみなへし）

何事のかぶり／＼ぞ女郎花　【文化八年―我春集・七番日記】

萱原や一人くねりの女郎花　【文化八年―七番日記】

　九月盡の心を

じやらつくもけふ翌ばかり女郎花　【文化九年―七番日記】

世の中はくねり法度ぞ女郎花　【文化九年―七番日記】

女郎花何の因果に枯れかぬる　【文化十三年―七番日記】

女郎花あつけらかんと立りけり　【文化十三年―七番日記・發句集】

女郎花一夜の風に衰ふる　【文政八年―あみだかさ・新集】

蘭(らん)　萩(はぎ)

蘭の香や異國のやうな三日の月　【文政四年―句帖】

痩萩や松の陰から咲そむる　【享和三年―享和句帖】

痩萩に雫見せけり萩の花　【享和三年―享和句帖】

萩散りぬ祭も過ぬ立佛　【享和三年―享和句帖】

咲やいな繩目に及ぶ木萩哉　【文化十年―七番日記】

さをしかは萩に糞して別れけり　【文化十年―七番日記】

さをしかの喰こぼしけり萩の花　【文政二年―おらが春】

鹿の子や横にくはへし萩の花　【文政二年―おらが春】

萩寺や鹿の氣取に犬が寢る　【文政三年―句帖】

吹あらしどこが萩の間桔梗の間　【文政三年―句帖】

玉川や臼にしかるゝ萩の花　【文政四年―句帖】

芥取の箕に寝る犬や亂れ萩　〔文政四年―句帖〕

萩の花爰をまたけと亂れけり　〔文政四年―句帖・題叢〕

存の外俗な茶屋有り萩の花　〔文政八年―新集・發句集〕、

鼠尾草（みそはぎ）

鼠尾草や水につければ風の吹　〔文化元年―旅日記〕

みそ萩や緣もゆかりもない塚へ　〔文政六年―九番日記〕

桔梗（きゝやう）

きり〳〵しやんとして咲く桔梗哉　〔文化九年―七番日記・題叢〕、

角力草（すもとりぐさ）

門先や角取草のひとり立　〔文政六年―九番日記〕

神風や艸も角力取る男山　〔文政八年―新集・發句集〕

草の花（くさのはな）

昔〳〵妻こもりしよ艸の花　享和三年―享和句帖

露けさや石の下より艸の花　〔享和三年―享和句帖〕

草の花妹がさゝげは老にけり　〔文化九年―七番日記〕

まけぬ氣やあんな小草も花が咲　〔文化十一年―七番日記〕

一寸の草にも五分の花咲ぬ　〔文政二年―句帖〕

草の花茵のゆへに踏れけり　〔文政五年―九番日記〕

門畠や今むしらるゝ草の花　〔文政五年―九番日記〕

入相の聞處なり草の花　〔文政年中―發句集〕

耳に數珠かけて折なり艸の花　〔文政年中―發句集〕

唐辛子（たうがらし）

居酒屋や愛相に植し唐がらし　〔文政三年―句帖〕

山陰や山伏村の唐がらし　【文政六年—九番日記】

鬼灯

弟子尼の鬼灯植て置にけり　【文政三年—句帖】

鬼灯を膝の小猫にとられけり　【文政年中—發句集】

九輪草

九輪草四五輪草でしまひけり　【文政二年—おらが春】

芒

猪追ふや芒を走る夜の聲　【寛政六年—句帖】

手のとゞく松に入日や花芒　【享和三年—享和句帖】

人並や芒もさわぐはゝき星　【文化八年—我春集・七番日記】

夕立の天窓にさはる芒かな　【文化九年—七番日記】

誰ぞ來よ／＼とてさわぐ芒哉　【文化九年—七番日記】

芒疵刈萱きずや痩臑に　【文化十年—七番日記】

一念佛申すだけ敷く芒かな　【文政二年—おらが春】

古郷や近よる人も切るすゝき　【文政三年—句帖】

今様の大立縞のすゝき哉　【文政七年—九番日記】

ちる芒寒くなるのが目にみゆる　【文政七年—寂砂子集・題叢】

穗薄

穗薄やおれがつぶりもともそよぎ　【文化八年—七番日記・題叢】

穗芒や細き心のさわがしき　【文政年中—發句集】

尾花

行秋を尾花もさらば／＼哉　【文化十年—七番日記・題叢】

鷄頭

一本の鷄頭ぶつゝり折にけり　【享和三年—享和句帖】

葛の花（くずのはな）

葛の花水に引ずるあらし哉　〔文政年中―嘉永板發句集〕

瓢（ふくべ）

老たりな瓢と我が影法師　〔文化九年―七番日記〕

約束や千生り瓢千人に　〔文政四年―句帖〕

むだ花に氣色とられし瓢かな　〔文政年中―發句集〕

糸瓜（へちま）

さほてんにどうだと下る糸瓜哉　〔文化十一年―七番日記〕

踏込や糸瓜の皮のだん袋　〔文政二年―句帖〕

二本目の桶はおまんが糸瓜哉　〔文政四年―句帖〕

芦の穂（あしのほ）

芦の穂や五尺程なるなにはがた　〔文化十一年―七番日記〕

日の暮や芦の花にて子をまねく　〔文化十一年―七番日記〕

蔦（つた）

青蔦の手にかしておく柱かな　〔文政二年―句帖〕

稻の花（いねのはな）

いくばくの人のあぶらよ稻の花　〔文政三年―句帖〕

稻の花大の男のかくれけり　〔文政三年―句帖〕

聟星にいで披露せん稻の花　〔文政年中―發句集〕

稻の穗（いねのほ）

四五本の稻もそよ〳〵穗に出ぬ　〔文化七年―七番日記〕

天皇の袖に一房稻穗哉　〔文化十一年―七番日記〕

旅人の藪にはさみし稻穗哉　〔文政五年―九番日記〕

草花と握り添へたる稻穗哉　〔文政五年―九番日記〕

稻（いね）

首出して稻つけ馬の通りけり　〔文政二年―句帖〕

落穂　御鷂より御聲のかゝるおち穂哉　【文政七年―九番日記】

米穀下直にて下々なんぎなるべしとは、こと國の人うらやましからん

日本の外が濱まで落穂哉　【文政年中―發句集】

今年米　今年米親といふ字を拜みけり　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

むだな身もことしの米をへらしけり　【文政三年―句帖】

ことし米飯に迄して貰ひけり　【文政四年―句帖】

役なしの身や人さきへことし米　【文政四年―句帖】

ことし米我等が小茶も青みけり　【文政年中―題叢・俳林良材集】

穭　ひつぢ田や青みにうつる薄氷　【寛政四年―句帖】

何をあてに山田のひつぢ穂にいづる　【文政七年―九番日記】

黍　いやな風穂のない黍のによき〱と　【文化十四年―七番日記】

蕎麥の花　痩山にはつか咲けり蕎麥の花　【文化元年―旅日記】

德本の腹をこやせよ蕎麥の花　【文化十四年―七番日記】

山畠や蕎麥の白さもぞつとする　【文政七年―九番日記・發句集】

新蕎麥　江戸店や初蕎麥がきに袴客　【文政四年―句帖】

零餘子　重箱をあてゝゆさぶる零餘子哉　【文政五年―九番日記】

初茸　初茸や踏つぶしたをつぎて見る　【文政四年―句帖】

茸（きのこ）

初茸や二人見つけてまあ〳〵と　【文政四年―句帖】

初茸の無疵に出るや袂から　【文政四年―句帖】

御子達よ赤い木の子に化されな　【文化十年―七番日記】

うつくしや人とる木の子とは見えぬ　【文化十年―七番日記】

鶏のかき出したる茸かな　【文政五年―九番日記】

大茸馬ふんも時を得たりけり　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

人をとる茸はたして美しき　【文政年中―題葉發句集】

遊二松林一

松茸（まつたけ）　茸狩（たけがり）

松茸や犬のだくなも嗅ぎ歩く　【文政九年―たねおろし】

茸狩の空手で戻る騒ぎかな　【文政二年―おらが春】

冬の部

時候

神無月（かみなづき）　十月（じふぐわつ）

安蘇一見急ぎけやがて神無月　【寛政五年―句帖】

十月や時雨奉る御寶前　【文化十一年―七番日記】

十月の中の十日の痳坊かな　【文化十三年―美佐古鮓】

冬至

鈴ふりがからり〳〵と冬至哉　【文化十一年―七番日記】

さほてんを上坐に直す冬至哉　【文化十一年―七番日記】

日本の冬至も梅の咲にけり　【文化十一年―七番日記】

冬枯

冬枯や鹿の見て居る桶の豆　【文化二年―旅日記】

冬枯や神馬の漆はげて立　【文政二年―句帖】

冬枯や在所の雨が横にふる　【文政二年―句帖】

霜枯

霜がれや東海道の這入口　【享和三年―享和句帖】

霜がれの中を元三大師哉　【文化八年―七番日記】

霜がれや新吉原も小藪並　【文化十年―七番日記・發句集】

霜がれや路通乞食に笠かさん　【文化十年―七番日記】

霜がれや壁のうしろは越後山　【文化十年―七番日記】

隨齋舊蹟

霜がれや米くれろ迚鳴く雀　【文化十三年―七番日記】

霜がれの笠にてゆと出かけたり　【文化十三年―七番日記】

霜枯や胡粉の兀し土團子　文政二年―句帖】

とし〳〵に霜がれにけりいろは茶屋　【文政三年―句稿】

追分

霜がれや鍋のすみかく小傾城　【文政年中―發句集】

霜がれて碓がたり〱かな　【文政年中―花實發句集】

霜がれやおれを見掛けて鉦叩く　【文政年中―嘉永板發句集】

人足も霜がれ時や王子道　【文政年中―嘉永板發句集】

枯野（かれの）

ざぶり〴〵雨ふる枯野哉　【享和三年―享和句帖】

鳥をとる鳥も枯野のけぶり哉　【享和三年―享和句帖】

虫除の札のひよろ〱枯野哉　【享和三年―享和句帖】

がい骨の笛吹やうな枯野哉　【文化七年―七番日記】

戸口迄ついと枯込む野原哉　【文化十年―七番日記】

御談義の手まねも見ゆる枯野哉　【文化十一―七番日記】

枯野原俵かぶつて走りけり　【文化十二年―七番日記】

終の身も見事なりけり枯野原　【文政四年―句帖】

藁苞の豆藪かついで枯野哉　【文政七年―九番日記】

吹風に聲も枯野の鳥かな　【文政七年―九番日記】

麥餅の幾日になりぬ枯野原　【文政年中―遺稿】

小春（こはる）

降雨も小春也けり智恩院　【文政年中―俳諧十家集・發句集】

棒先の紙もひら〱小春かな　【文政年中―嘉永板發句集】

寒さ（さむさ）

上野のふもとに、かりの庵を引結び

寒さ身にしむや元の主の寒さまで　【寛政十年―一茶終焉記・句帖】

井戸にさへ錠のかゝりし寒哉　【享和三年—享和句帖】

あら寒し〳〵といふも榮耀哉　【文化八年—我春集・七番日記】

かけ金の眞赤に錆て寒哉　【文化九年—七番日記】

白井峠

信濃路の山が荷になる寒哉　【文化九年—七番日記】

死こぢれ〳〵つゝ寒かな　【文化十年—七番日記】

我程は寒さまけせぬ茶臼哉　【文化十一年—七番日記】

自像

ひいき目に見てさへ寒し影法師　【文化十五年—七番日記】

うしろから見ても寒げな天窓也　【文化十五年—七番日記】

ずん〳〵とぼんの凹から寒哉　【文化十五年—七番日記】

狼は糞ばかりでも寒かな　【文政二年—おらが春】

壹文に一ツ鉦うつさむさ哉　【文政二年—句帖・嘉永板發句集】

東に下らんとして中途迄出たるに

椋鳥と人に呼るゝさむさ哉　【文政二年—おらが春・句帖】

しん〳〵としんそこ寒し小行灯　【文政五年—九番日記】

一人と帳面につく寒かな　【文政七年—寂砂子集】

小座敷の丁度半分小春哉　【文政七年—九番日記】

としかさをうらやまれたる寒哉　〔文政年中―発句集〕

一人旅

次の間の灯で膳につく寒哉　〔文政年中―発句集〕

寒さにもなれて歩行や信濃山　〔文政年中―嘉永板発句集〕

凍(いて)氷(こほり)

おのれが姿にいふ

ひいき目に見てさへ寒きそぶりかな　〔文政年中―発句集口繪〕

うちの戸や腹へひゞきて凍割るゝ　〔文化十四年―七番日記〕

せゝなぎや氷を走る炊ぎ水　〔寛政六年―句帖〕

子ども達江戸の氷は甘いげな　〔文化八年―七番日記〕

賽銭を追かけ廻る氷哉　〔文化十二年―七番日記〕

八文で家内が祝ふ氷かな　〔文化十二年―七番日記〕

葭垣や立かけておく丸氷　〔文化十四年―七番日記〕

ざく〳〵と氷かみつる茶漬哉　〔文化十四年―七番日記〕

我家の一つ手拭氷りけり　〔文化十四年―七番日記〕

縄附て子に引せけり丸氷　〔文政二年―句帖〕

氷ともしらで渡りし湖水哉　〔文政三年―句帖〕

草鞋のなみにつるすや丸氷　〔文政三年―句帖〕

手拭のねぢつたまゝの氷哉　〔文政六年―九番日記〕

本馬のしやん〳〵渡る氷哉　【文政七年―九番日記】

人ともに氷ついたよ橋の月　【文政八年―新集】

鐘氷る

鐘氷る川をうしろに寐たりけり　【文化三年―旅日記】

門口に来て氷るなり三井の鐘　【文化八年―我春集・七番日記】

下町に曲らんとして鐘氷る　【文化十年―七番日記】

氷柱

夕風や社の氷柱灯のうつる　【寛政四年―句帖】

かくれ家に氷柱廻りて這入けり　【文政五年―九番日記】

一方は氷柱でもちし草家哉　【文政五年―九番日記】

かた〳〵は氷柱をたのむ屑家哉　【文政五年―九番日記】

垂氷

冬日向

おそろしき柳となりて垂氷哉　【文政年中―花實發句集・狹蓑集】

借はぐる松よ古井よ冬日向　【享和三年―享和句帖】

かくれ家や村一番の冬日向　【文化十年―七番日記】

三巡りの日向ぼこしに出たりけり　【文化十一年―七番日記】

冬の夜

寒の入

冬の夜やきのふ貰ひしはりまなべ　【文化二年―旅日記】

むつかしや今月が入寒が入　【文化七年―七番日記】

さす月のほんの四から寒が入　【文化十三年―七番日記】

下馬先や奴が尻に寒が入　【文化十四年―七番日記】

うす壁にづんづと寒が入にけり　【文化十四年―七番日記】

離れ家やすい〳〵別の寒が入　〔文政三年―句帖〕

うしろから寒が入る也壁の穴　〔文政三年―句帖〕

駕脇の高股立や寒の入　〔文政二年―句帖〕

赤坂や奴が尻に寒が入　〔文政五年―九番日記〕

宵過や柱みり〳〵寒が入　〔文政六年―九番日記〕

寒の水（かんのみづ）

見るにさへぞつとする也寒の水　〔文政三年―句帖〕

寒月（かんげつ）

寒月や喰つきさうな鬼瓦　〔文化八年―七番日記〕

棒突や石にかん〳〵寒の月　〔文化十三年―七番日記〕

寒月やむだ呼されし座頭坊　〔文化十三年―七番日記〕

寒月やしやきり張たる大男　〔文化十三年―七番日記〕

大寒（だいかん）

大寒や八月ほしき松の月　〔文政年中―題叢・嘉永版發句集〕

年内立春（ねんないりつしゆん）

けふからは正月分ぞ麦の色　〔文政二年―おらが春〕

年木（としぎ）

寐て見るや元日焚の柴一把　〔文化十年―七番日記〕

年惜む（としをしむ）

日本の年がをしいかおろしや人　〔文化元年―旅日記〕

おもしろや翌は我等も卅九　〔文化八年―七番日記〕

年取（としとり）

はづかしやまかり出てとる江戸のとし　〔文政二年―おらが春〕

膳先の猫にも年をとられけり　〔文政五年―九番日記〕

どこでとしとつてもそちはらくだ哉　〔文政七年―九番日記〕

行年

念々相續

みだ佛のみやげに年を拾ふ哉　〔文政年中―發句集〕

行く年や氣違舟の遊山暮　〔文化七年―七番日記〕

藪先や暮行く年の烏瓜　〔文化七年―七番日記〕

行く年や身はならはしの古草履　〔文化七年―七番日記〕

行としもそしらぬ富士のけぶり哉　〔文化九年―七番日記〕

年もはや穴かしこなり如來様　〔文化十年―七番日記〕

年神が今行かしやるぞ御時宜せよ　〔文化十年―七番日記〕

行く年や覺一つと書く附木　〔文化十二年―七番日記〕

行く年や庇の上におく薪　〔文化十四年―七番日記〕

ごろり寐や先はことしも仕廻酒　〔文化十五年―七番日記〕

年六十といへど、ことし迄ちくら流してすましければ

せめてもの足六十よとしの坂　〔文化十五年―七番日記〕

行年や湯水に遣ふ金壹分　〔文政四年―句帖〕

年の暮

流れ木のあちこちとしてとし暮ぬ　〔享和三年―享和句帖〕

役どしと中間に暮にけり　〔文化元年―旅日記〕

餅の出る槌がほしさよ年の暮　〔文化二年―旅日記〕

兩國橋

としの暮龜はいつ迄吊さるゝ　〔文化四年―旅日記〕

枕の鷺汝がとしはどう暮る　〔文化十年―七番日記〕

梟よのほゝん所かとしの暮　〔文化十年―七番日記・題叢〕

めそ／＼と年は暮けり貧乏樽　〔文化十五年―七番日記〕

ともかくもあなたまかせの年の暮　〔文政二年―おらが春〕

影法師も祝へたゞ今年暮る　〔文政二年―句帖〕

下戸の立たる藏もなし年の暮　〔文政四年―句帖〕

のらくらもあればあるぞよ年の暮　〔文政七年―九番日記〕

酒後

手枕や年が暮よとくれまいと　〔文政八年―新集〕

アヽまゝよ年が暮よとくれまいと　〔文政八年―新集〕

叱らるゝ人うらやましとしの暮　〔文政年中―發句集・狹蓑集〕

天文

初時雨（はつしぐれ）

影ぼうしの翁に似たり初時雨　〔享和三年―享和句帖〕

古郷に高い杉ありはつしぐれ　〔享和三年―享和句帖〕

茶の水の川もそこ也初しぐれ　〔享和三年―享和句帖〕

こんにやくにかゝらせ給へ初時雨　〔文化三年―旅日記〕
初時雨馬も御紋をきたりけり　〔文化三年―旅日記〕
ほた餅の來べき空也初時雨　〔文化七年―七番日記・木槿集〕

十二日

はらつくや是は御好の初時雨　〔文化七年―七番日記〕
初時雨俳諧流布の世なりけり　〔文化七年―七番日記〕
あれみさい松が三本初しぐれ　〔文化八年―七番日記〕
口笛も御意にかなふか初時雨　〔文化八年―七番日記〕
桃青靈神託宣に曰くはつ時雨　〔文化九年―七番日記〕
しぐるゝや家にしあらば初時雨　〔文化十年―七番日記・發句集〕
やあしばらく蟬だまれ初時雨　〔文化十年―七番日記〕
米と錢飾ひ分けゝり初時雨　〔文化十一年―七番日記〕
義仲寺や拙者も是にはつ時雨　〔文化十三年―七番日記〕
義仲寺はあれにゝはつ時雨　〔文化十三年―七番日記〕

法樂

御寶前にかけ奉るはつしぐれ　〔文化十年―遺稿・發句集〕

澁湯和泉亭にて

座敷から湯に飛込や初しぐれ　〔文政四年―句帖〕

丈たけの箕をかぶる子やはつ時雨　〔文政五年―九番日記〕

はせを翁の像と二人やはつ時雨　〔文政六年―九番日記〕

雀ふむほどは茶もあり初時雨　〔文政年中―遺叢・嘉永板發句集〕

初時雨夕飯買に出たりけり　〔文政年中―發句集〕

時雨雲（しぐれぐも）

三度くふ旅もつたいな時雨雲　〔享和三年―享和句帖〕

時雨雲毎日かゝる榎哉　〔享和三年―享和句帖〕

時雨雲かゝるにはやき木曾ぢ哉　〔享和三年―享和句帖〕

泣な子等時雨雲から鬼が出る　〔文政二年―句帖〕

北時雨（きたしぐれ）

番町や最合番屋の北しぐれ　〔文政三年―句帖〕

横時雨（よこしぐれ）

日ざす敵は鶏頭よ横時雨　〔文化十年―七番日記〕

むら時雨（むらしぐれ）

西念が家の奉加や村しぐれ　〔文化十一年―七番日記〕

惣〆て只三軒のむら時雨　〔文化十四年―七番日記〕

盗人おのれが古郷に隠れて縛られしに

業の鳥罠をめぐるや村時雨　〔文政二年―おらが春・發句集〕

中山道

椋鳥の我を呼ぶなりむら時雨　〔文政二年―句帖〕

いざこざを雀もいふや村しぐれ　〔文政六年―九番日記〕

夕時雨（ゆふしぐれ）

牲にもれし鹿かよ夕時雨　〔享和三年―享和句帖〕

夕暮を下手な時雨の通りけり　〔文化九年―七番日記〕

重箱の錢四五文や夕時雨　〔文政二年―おらが春・句帖〕

桑名

蛤のつひのけぶりや夕しぐれ　〔文政年中―發句集〕

小夜時雨

又犬にけつまづきけり小夜時雨　〔文化七年―七番日記〕

夜あんまやむだ呼されて降る時雨　〔文化十四年―七番日記〕

小夜時雨啼くは子のない鹿に哉　〔文政二年―おらが春〕

泣な〳〵鬼がさらふぞ小夜時雨　〔文政二年―句帖〕

素湯釜が迹うけとるや小夜時雨　〔文政六年―九番日記〕

豆麩煮る傳受する也小夜時雨　〔文政六年―九番日記〕

しぐれねば夜も明ぬ也片山家　〔文政年中―題叢・嘉永板發句集〕

時雨

山の家たがひ違ひに時雨哉　〔享和三年―享和句帖〕

吹かれ〳〵時雨來にけり瘦男　〔享和三年―享和句帖〕

我上にふりし時雨や上總山　〔享和三年―享和句帖〕

城きづくつくりの松に時雨哉　〔享和三年―享和句帖〕

さはつても時雨さう也ちゝぶ山　〔文化元年―旅日記〕

我と山とかはる〴〵に時雨哉　〔文化三年―旅日記〕

寢筵にさつと時雨の明り哉　〔文化七年―七番日記〕

しぐるゝや雀も口につかはるゝ　〔文化七年―七番日記〕

しぐるゝや軒にはぜたる梅もどき　〔文化八年―七番日記〕

しぐるゝや迎に出たる菴の猫　〔文化十年―七番日記〕

日本と砂へ書たる時雨哉　〔文化十年―七番日記〕

ちんば鶏たま〱出れば時雨けり　〔文化十一年―七番日記〕

捨杖よ時雨るたしになりもせよ　〔文化十一年―七番日記〕

艮ありとしらでしぐるゝ雀哉　〔文化十一年―七番日記〕

大時雨小しぐれ寐るもむつかしや　〔文化十一年―七番日記〕

小塚原

科札に天先づ時雨給ひけり　〔文化十一年―七番日記〕

須磨時雨河内時雨に追つきぬ　〔文化十一年―七番日記〕

時雨せよ茶壺の口を今切ぞ　〔文化十二年―七番日記〕

芭蕉塚

しぐれ込む角から二軒目の庵　〔文化十二年―七番日記・發句集〕

しぐれ鶴見て居て卵とられけり　〔文化十三年―七番日記〕

一時雨行あたりけりうしろ窓　〔文化十三年―七番日記〕

繼ッ子や指をくはへて行く時雨　〔文化十四年―七番日記〕

三介がたゝく木魚もしぐれけり　〔文政二年―おらが春句帖〕

しぐるゝや親椀たゝく唖乞食　〔文政二年―句帖・嘉永板發句集〕

俗のつく鐘も時雨るゝさがの哉　〔文政二年―句帖〕

下手時雨てきぱき降もせざりけり　〔文政四年―句帖〕

身代に時雨ておはす佛かな　〔文政四年―句帖〕

しぐれ捨〳〵けり辻ほとけ　〔文政四年―句帖〕

せはしなや門をちび〳〵しぐれ捨　〔文政六年―九番日記〕

一口の御祝義としてしぐれ哉　〔文政六年―九番日記〕

庵迄送りとゞけて行時雨　〔文政七年―九番日記〕

山柴の秤にかゝる時雨哉　〔文政七年―九番日記〕

悼

鳴鳥こんなしぐれのあらんとて　〔文政年中―發句集〕

曲り所に出つ合さるゝ時雨哉　〔文政八年―新集〕

子を負うて川越す狙や一時雨　〔文政年中―嘉永板發句集〕

初霜（はつしも）
今朝の霜（けさのしも）

初霜や乙食の竈も一ながめ　〔寛政四年―句帖〕

一人前茶も青みけりけさの霜　〔享和三年―享和句帖〕

小男鹿やゑひしてなめる今朝の霜　〔文政二年―おらが春・句帖〕

小松菜の一文把や今朝の霜　〔文政年中―嘉永板發句集〕

善光寺

朝霜（あさしも）
朝霜やしかも子供の御花賣　〔文政三年―句帖〕

大霜（おほしも）
大霜と見せて泥也ほしわらぢ　〔文政八年―新集〕

霜柱（しもばしら）
一方は霜柱なり野雪隱　〔文政三年―句帖〕

夜の霜（よるのしも）
うら店かりて
霜の夜や前居た人の煤下る　〔文化十五年―七番日記〕

强盗はやりければ
張番に庵とられけり夜の霜　〔文政二年―おらが春〕

廻番の貧乏鬮や夜の霜　〔文政五年―九番日記〕

霜の夜や横丁曲る迷子鉦　〔文政五年―九番日記〕

霜（しも）
おく霜や白きを見れば鼻の穴　〔文化八年―七番日記〕

深川や霜けたやうな玄關番　〔文化十一年―七番日記〕

霜おくや此夜はたして子を捨る　〔文政四年―句帖〕

霜掃て塩花まくや這入口　〔文政四年―句帖〕

知己のけふもへりけり門の霜　〔文政五年―九番日記〕

霞まで生やうものか霜の鐘　〔文政年中―發句集〕

霜除（しもよけ）
霜よけのたらぬ所へかゝし哉　〔文化十年―七番日記〕

橋上乞食
母親を霜よけにして寐た子哉　〔文政年中―發句集〕

初雪

初雪や誰ぞ來よかしの素湯土瓶　〔享和三年―享和句帖〕
初雪のふは〱かゝる小鬢哉　〔享和三年―享和句帖〕
はつ雪や其角が窓も見えて降る　〔文化元年―旅日記〕
初雪や古郷見ゆる壁の穴　〔文化元年―旅日記・題叢〕
はつ雪や家鴨の椀も朝のさま　〔文化二年―旅日記〕
はつ雪やけぶり立るも世間向き　〔文化三年―旅日記〕
はつ雪や雪やといふも歯ナシ哉　〔文化七年―七番日記〕
初雪やほの〲かすむ御式臺　〔文化七年―七番日記〕
はつ雪や椀久が世にありし時　〔文化七年―七番日記〕
はつ雪のひッつき易い皺手哉　〔文化七年―七番日記〕
むつかしや初雪見ゆるしなの山　〔文化七年―七番日記〕
はつ雪を皆ふんづけし烏哉　〔文化十年―七番日記〕
はつ雪やちりふの布の錢吹　〔文化十年―七番日記〕
はつ雪やとある木陰の神樂笛　〔文化十年―七番日記〕
はつ雪や息を殺して相借家　〔文化十年―七番日記〕
はつ雪を鬼一口にくひてけり　〔文化十年―七番日記〕
はつ雪を敵のやうにそしる哉　〔文化十年―七番日記〕
初雪やとの給ふやうな佛哉　〔文化十一年―七番日記〕

駕かきは尻を出すを禮とす

はつ雪を見よや奴が尻の先　【文化十一年—七番日記】

はつ雪やどなたが這入る野雪隱　【文化十一年—七番日記】

初物ぞうすつぺらでもおれが雪　【文化十二年—七番日記】

うら町は犬の後架もはつ雪ぞ　【文化十二年—七番日記】

初雪といふ聲今年よわりけり　【文化十四年—七番日記】

はつ雪や松にかけたる手挑灯　【文化十五年—七番日記】

はつ雪の降り捨てある家尻哉　【文政二年—おらが春・九番日記】

はつ雪やおしかけ客の夜番小屋　【文政二年—句帖】

初雪をいま〳〵しいといふべかな　【文政三年—句帖】

初雪を着て戻りけり祕藏猫　【文政三年—句帖】

初雪や御駕へ運ぶ二八そば　【文政四年—句帖】

はつ雪や御きげんのよい御烏　【文政五年—九番日記】

はつ雪やといふも家にあればこそ　【文政五年—九番日記】

はつ雪を降らせておくや鉢の松　【文政六年—九番日記】

初雪や右ぬる湯左あつ湯桁　【文政六年—九番日記】

はつ雪やこきつかはるゝ立佛　【文政六年—九番日記・發句集】

初雪や俵の上の小行燈　【文政年中—發句集】

はつ雪や今行く里の見えて降ル　【文政年中―發句集】

初雪や鳥も構はぬ女郎花　【文政年中―發句集】

初ゆきや椽から落し上草履　【文政年中―嘉永板發句集】

今朝の雪

大菊のさんだらぼしやけさの雪　【文化十一年―七番日記】

雪の日

雪の日や古郷人のぶあしらひ　【文化四年―旅日記】

雪の日やこきつかはるゝおしなどの　【文政二年―句帖】

大雪

大雪や印の竿を鳴く烏　【文化十年―七番日記】

大雪の山をづか／＼一人哉　【文化十年―七番日記】

門の雪

杖かりし夜はおとゝしよ門の雪　【享和三年―享和句帖】

火嫌も親ゆづり也門の雪　【享和三年―享和句帖】

門の雪汚れぬ先にとくきえよ　【文化十一年―七番日記】

山里や風呂にうめたる門の雪　【文政五年―九番日記】

來る人が道つける也門の雪　【文政七年―九番日記・發句集】

佛にもならでとけゝり門の雪　【文政七年―九番日記】

雪散る

雪ちるや小窓のたしの壁土に　【文化二年―旅日記】

雪ちるや七十兒の夜そば賣　【文化七年―七番日記】

淺草市、

雪ちるや錢はかり込む大叺　【文化十年―七番日記】

汚れ雪　夜の雪　雪

雪ちるやきのふは見えぬ明家札　〔文化十年—七番日記・發句集〕

雪ちるやおどけもいへぬ信濃山　〔文政二年—おらが春・句帖〕

雪ちるや脇から見たら榮耀籠　〔文政四年—一茶終焉記・發句集〕

雪ちらり〳〵見事な月夜哉　〔文政六年—九番日記〕

雪ちるやちん〳〵鴨の神參　〔文政六年—九番日記〕

汚れ雪それも消るがいやぢやげな　〔文化十一年—七番日記〕

ても花の都でゆか汚れ雪　〔文化十二年—七番日記〕

寝ならぶやしなのゝ山も夜の雪　〔文化四年—旅日記〕

人の親のまだ夜なべなり夜の雪　〔文化十四年—七番日記〕

外は雪内は煤ふる栖かな　〔寛政四年—句帖〕

降雪もはりあひなれや薬竹賣　〔文化元年—旅日記〕

ふるは雪隣りも同じ手鍋也　〔文化元年—旅日記〕

それがしも雪を待夜や欠土鍋　〔文化元年—旅日記〕

只居れば居るとて雪の降にけり　〔文化二年—旅日記〕

心からしなのゝ雪に降られけり　〔文化四年—旅日記〕

是がまあつひの栖か雪五尺　〔文化九年—七番日記〕

うまさうな雪がふうはりふはり哉　〔文化十年—七番日記・花實發句集〕

雁鴨おのが雪とてさわぐ哉　〔文化十年—七番日記〕

山に雪降る迚耳の鳴にけり　【文化十一年—七番日記】

御用の雪御傘と申せおさむらひ　【文化十二年—七番日記】

一吹雪尻つんむけて通りけり　【文化十二年—七番日記】

我門や此界隈の雪捨場　【文化十二年—七番日記】

むさし野や雪につくばふ御士　【文化十三年—七番日記】

とくとけよ貧乏雪とそしらるゝ　【文化十四年—七番日記】

ちよんぼりと雪の明りや後架道　【文化十四年—七番日記】

うら壁やしがみ付たる貧乏雪　【文化十四年—七番日記・九番日記】

一茶病中のていたらく

祇なりに吹込雪や枕もと　【文政二年—句帖・發句集】

菱形に雪が降入る疊かな　【文政三年—句帖】

風の子が摑みなくすや窓の雪　【文政三年—句帖】

里の子や雪待かねし棒角力　【文政三年—句帖】

雪菰や投込んで行とゞけ狀　【文政五年—九番日記】

旅人や人に見らるゝ笠の雪　【文政五年—九番日記】

ちとたらぬ僕や隣の雪もはく　【文政七年—九番日記】

野ら雪や菰にくるんで捨ル菴　【文政八年—新集】

大門や雪に並べる飴おこし　【文政八年—新集】

ほちや〳〵と雪にくるまる在所哉　［文政年中―發句集］

犬どもがよけてくれけり雪の道　［文政年中―發句集］

雪見（ゆきみ）

御用なら蚤もゆ雪見業　［文化十一年―七番日記］

陶の脉を見い〳〵雪見哉　［文政七年―九番日記］

雪礫（ゆきつぶて）

三絃のばちでうけたり雪礫　［文化十一年―七番日記］

親犬が尻でうけゝり雪礫　［文化十四年―七番日記］

青樓曲

かんざしでふはと留たり雪礫　［文政六年―九番日記］

雪佛（ゆきぼとけ）

狗の先つくばひぬ雪佛　［文化十年―七番日記］

とる年もあなた任せぞ雪佛　［文化十年―七番日記］

彼是といふも當座ぞ雪佛　［文政二年―おらが春］

ふり向ば大年増なり雪礫　［文政六年―九番日記］

霰（あられ）

遠乘や霰たばしるかさの上　［寛政四年―句帖］

掘かけし柱の穴をあられ哉　［文化四年―旅日記］

わやくやと霰を佗る雀哉　［文化七年―七番日記］

十月の中の十日の霰哉　［文化七年―七番日記］

普化忌

去程に鈴からおつるあられかな　［文化八年―七番日記］

ちりめんの狙を抱く子よ丸雪ちる　〔文化十年―七番日記〕

一筵霰もほして有りにけり　〔文化十年―七番日記〕

盛任が横面たゝくあられ哉　〔文化十年―七番日記〕

霰ちれくゝり枕を負ふ子ども　〔文化十年―七番日記〕

來よ〱とよんだる霰ふりにけり　〔文化十年―七番日記〕

堺町を通りて

悪形の紋看板をあられ哉　〔文化十三年―七番日記〕

たまれ霰たんまれあられ手にたまれ　〔文政四年―句帖〕

あられごと掴み込たり錢叺　〔文政四年―句帖〕

夕霰ねん〱ころり〱哉　〔文政五年―九番日記〕

一さんにとんで火に入ルあられ哉　〔文政年中―發句集〕

玉霰（たまあられ）

かさ守のおせん出て見よ玉霰　〔文化十二年―七番日記〕

玉霰茶の子のたしに飛入ぬ　〔文化十一年―七番日記〕

ちりめんの狙を負ふ子や玉霰　〔文化十四年―七番日記〕

起よ〱ころぶも上手玉あられ　〔文政四年―句帖〕

玉霰峯の小雀も連て來ぬ　〔文政年中―題叢〕

霙（みぞれ）

酒菰の戸口明りやみぞれふる　〔享和三年―享和句帖〕

飯の湯のうれしくなるやちるみぞれ　〔文化三年―旅日記〕

大菊のさんだらぼしをみぞれ哉　〔文化十年―七番日記〕

門番は足で掃寄るみぞれ哉　〔文化十年―七番日記〕

冬の月

冬の月さしかゝりけりうしろ窓　〔享和三年―享和句帖〕

武士ばりし寺のそぶりや冬の月　〔享和三年―享和句帖〕

下駄音や庵へ曲る冬の月　〔文化十三年―七番日記〕

行人

ふんどしに脇ざしさして冬の月　〔文化十三年―七番日記〕

木枯

木がらしや隣といふは淡路嶋　〔享和三年―享和句帖〕

木がらしや壁の際なる馬の桶　〔享和三年―享和句帖〕

木がらしや小溝にけぶる竹火箸　〔文化元年―旅日記〕

木がらしやこんにやく桶の星月夜　〔文化元年―旅日記〕

文化六年十二月十五日、賀舊室大川氏

木枯や千代に八千代の門榎　〔文化六年―發句集〕

木がらしにしく／＼腹のぐあひ哉　〔文化八年―七番日記〕

木がらしや鎌ゆひつけし竿の先　〔文化九年―七番日記〕

木がらしや菰に包んである小家　〔文化十四年―七番日記〕

凩や木の葉にくるむ塩肴　〔文化十四年―七番日記〕

芝浦

凩や行ぬけ道の上總山　〔文政二年—句帖・嘉永板發句集〕

木枯やから呼びされし按摩坊　〔文政二年—おらが春〕

木枯や折助かへる寒さ橋　〔文政二年—おらが春〕

護持院原

木枯や二十四文の遊女小屋　〔文政二年—おらが春・句帖〕

木がらしや風に乘行く火けし馬　〔文政三年—句帖〕

木がらしを踏ばり留よ石太郎　〔文政　年—句帖〕

凩の吹き草臥し榎かな　〔文政四年—句帖〕

木がらしや茶葉並べる煙草箱　〔文政四年—句帖〕

木がらしや一二三四五ばん原　〔文政五年—九番日記〕

木がらしに吹ぬき布子一ッかな　〔文政六年—九番日記〕

宿二山寺一

寢た下を凩づうん〱哉　〔文政七年—九番日記〕

木がらしや護持院原のあまざけ屋　〔文政八年—新集〕

けふも〱たゞ凩の茶屑哉　〔文政年中—題叢〕

木がらしや雀も口につかはるゝ　〔文政年中—發句集〕

人事

冬構(ふゆがまへ)

道灌に蓑かし申せ冬構　〔文化十年—七番日記〕

冬籠(ふゆごもり)

雀踏む程畠あり冬籠　〔享和三年—享和句帖〕

冬ごもる其夜の膝に竹の月　〔享和三年—享和句帖〕

嵯峨山

はや〱と誰冬ごもる細けぶり　〔文化三年—旅日記・發句集〕

五十にして冬籠さへならぬ也　〔文化三年—旅日記〕

冬ごもり茶はほちや〱とほけ立ぬ　〔文化八年—七番日記〕

眠り様鷺に習ん冬籠　〔文化十年—七番日記〕

屁くらべが又始るぞ冬籠　〔文化十三年—七番日記〕

「小人閑居シテ成ニ不善ヲ」

冬籠悪く物喰を習けり　〔文政二年—おらが春〕

能なしは罪も又なし冬籠　〔文政二年—おらが春・句帖〕

髭どのや恥しめられて冬ごもり　〔文政四年—句帖〕

太刀きずを一ッばなしや冬籠　〔文政五年—九番日記〕

人誹る會が立なり冬籠　〔文政六年—九番日記〕

竪の物横にはせぬや冬ごもり　〔文政七年—九番日記〕
口出すがとかく持病ぞ冬籠　〔文政七年—九番日記〕
鼻先に茶も青ませて冬籠　〔文政七年—九番日記〕
報謝米雀もつむや冬籠　〔文政八年—新　集〕
冬ごもりその夜にきくや山の雨　〔文政年中—題叢・嘉永板發句集〕
西の木と聞てたのむや冬籠　〔文政年中—發句集〕
さし捨し柳の陰を冬籠　〔文政年中—發句集〕

歸庵

留主札もそれなりにして冬籠　〔文政年中—發句集〕

煤掃（すゝはき）

煤はきや火のけも見えぬ見世女郎　〔文化七年—七番日記〕
夕月や御煤の過し善光寺　〔文化九年—七番日記〕
庵のすゝざつとはく眞似したりけり　〔文化十年—七番日記〕
門雀米ねだりけり煤いはひ　〔文化十年—七番日記〕
煤捨んそこのき給へ御雀　〔文化十年—七番日記〕
浴るともあなたの煤ぞ善光寺　〔文化十年—七番日記〕
隠家の犬も人數やすゝ祝　〔文化十一年—七番日記〕
我家は團扇で煤をはらひけり　〔文化十三年—七番日記〕
我家や初氷柱さへ煤じみる　〔文化十四年—七番日記〕

煤の手でうけとりにけり小重箱　【文化十五年―七番日記】

庵の煤風が拂つてくれにけり　【文政三年―句帖】

隅の蜘あんじな煤はとらぬぞよ　【文政四年―句帖】

大犬の胴づかれけりすゝはらひ　【文政五年―九番日記】

煤過やそろりとともる朱蠟燭　【文政六年―九番日記】

御持佛や肩衣かけて煤をはく　【文政六年―九番日記】

蠅の替りにたゝかるゝ疊哉　【文政八年―新集】

今掃た迹から煤がほたり哉　【文政年中―九番日記】

餅搗（もちつき）

餅つきや今それがしも古郷入　【文化九年―七番日記】

鳴く烏餅がつかれぬしだらやら　【文化十年―七番日記】

迹臼は烏のもちや西方寺　【文化十年―七番日記】

餅搗が隣りへ來たといふ子哉　【文政二年―おらが春】

犬の餅烏のもちも搗れけり　【文政二年―句帖】

寢てばかや貰ふ餅つき二所　【文政四年―句帖】

餅搗やせがむ子供をはり合に　【文政四年―句帖】

餅配り（もちくばり）

乙松や手を引れつゝ餅配　【文化十三年―七番日記】

我門へ來さうにしたり配餅　【文政二年―おらが春・發句集】

妹が子の背負ふた形りや配餅　【文政二年―おらが春】

歩きしま口上云ふや餅配り　【文政八年―新　集】

餅（もち）花（はな）

餅花の木陰にてうちあはゝ哉　【文化十年―おらが春・七番日記】

木に餅の花咲く世にも逢にけり　【文化十五年―七番日記】

餅花

かまけるな柳の枝に餅が生る　【文政二年―おらが春】

もち花を咲かせて見るや指の先　【文政七年―九番日記】

餅（もち）臼（うす）

餅臼にそれうぐひすよ〳〵　【文化十年―七番日記】

門並や只一臼も餅さわぎ　【文化十年―七番日記】

餅（もち）

あこが餅〳〵迚並べけり　【文化十年―おらが春・七番日記】

鶏が餅踏んづけて通りけり　【文化十一年―七番日記】

餅とぶやぱたりと犬の大口へ　【文化十三年―七番日記】

世の中やおれがこねても餅になる　【文化十四年―七番日記】

のし餅の皺手の跡はかくれぬぞ　【文化十四年―七番日記】

お袋がお福手ちぎる指南かな　【文政二年―おらが春】

草の戸ものがしはせぬや餅の札　【文政二年―句帖】

當にした餅が二所はづれけり　【文政三年―句帖】

隠れ家や猫が三疋餅の番　【文政三年―句帖】

三角の餅をいたゞくまゝ子哉　【文政四年―句帖】

古ばゝが丸める餅の口傳哉　〔文政五年―九番日記〕

一枚の餅の明りに寝たりけり　〔文政七年―九番日記〕

餅莚（もちむしろ）

神棚の灯で並べけり餅むしろ　〔文政四年―句帖〕

小莚や餅を定木にもちをきる　〔文政四年―句帖〕

顔見世（かほみせ）

世の中や皺顔見せになにはから　〔文化十一年―七番日記〕

臘八（らふはち）

臘八や我と同じく骨と皮　〔文化十一年―七番日記〕

衣配（きぬくばり）

馬迄も正月衣配りけり　〔文政三年―句帖〕

ころにやんと猫も並ぶや衣配　〔文政六年―九番日記〕

やれ孫が手紙どれ〱衣配　〔文政七年―九番日記〕

江戸状や親の外へも衣配　〔文政八年―新集〕

傾城や在所のみだへ衣配　〔文政八年―新集〕

節季候（せきぞろ）

松風や小野のおくさへせき候と　〔文化二年―旅日記〕

せき候やそれ〱そこの梅の花　〔文化七年―七番日記〕

せき候や七尺去て小せき候　〔文化九年―七番日記　花實發句集〕

せき候よ女せき候それも御代　〔文化十年―七番日記〕

それや梅が〱とやせき候　〔文化十一年―七番日記〕

木隠て又やせき候〱と　〔文化十五年―七番日記〕

子のまねを親もする也節き候　〔文政二年―おらが春〕

下京や夜は素人の節季ゆ　【文政二年—句帖】
やれも〳〵よい年をして節季ゆ　【文政二年—句帖】
とし寄のせいにあれ〳〵節季ゆ　【文政三年—句帖】
せきゆの犬蹴とばしもせざりけり　【文政七年—九番日記】
門の犬じやらしながらや小せきゆ　【文政七年—九番日記】

さし柊（ひゝらぎ）

猫の子のざれなくしけりさし柊　【文化十年—七番日記】

大門口

鬼除よ浪人よけよさし柊　【文政二年—句帖】

年（とし）の豆（まめ）

煎豆の福が來たぞよ懐へ　【文化八年—七番日記】
福豆や福梅ぼしや歯にあはぬ　【文化十年—七番日記】
三ツ子さへかりゝ〳〵や年の豆　【文政二年—句帖】

鬼（おに）やらひ

かくれ家や歯のない口で福は內　【文化十年—七番日記・希杖本】
福はうち〳〵とてをはり哉　【文化十年—七番日記】

廿一日節分

一聲に此世の鬼も迯るけな　【文政二年—おらが春・句帖】
其あとは子供の聲や鬼やらひ　【文政二年—おらが春】
鬼の出た迹掃出してあぐら哉　【文政五年—九番日記】

暦（こよみ）配（くばり）

君が世や寺へも配る伊勢暦　【文政五年—句帖】

古暦（ふるごよみ）

板壁や親の世からの古暦　〔文政七年―九番日記〕

古札と一ッにくゝる暦哉　〔文政七年―九番日記〕

我程は煤けもせぬや古ごよみ　〔文政七年―九番日記〕

わづらはぬ日をかぞへけり古暦　〔文政七年―九番日記〕

札納（ふだをさめ）

札納

梅の木や御祓箱を負ながら　〔文政二年―おらが春〕

竹賣（たけうり）

竹賣の竹にもしばし雀哉　〔文化三年―旅日記〕

掛乞（かけごひ）

掛乞に水など汲んで貰ひけり　〔文化十四年―七番日記〕

年忘れ（としわすれ）

わんといへさあいへ犬もとし忘　〔文化十四年―七番日記〕

深川や舟も一組とし忘　〔文化十四年―七番日記〕

山の手や澁茶すゝりて年忘　〔文化十五年―七番日記〕

いくつやら覺えぬ上にとし忘　〔文政二年―句帖・嘉永板發句集〕

御中間に猫も坐とるや年忘　〔文政二年―句帖〕

身貧にして樂も心不レ樂

家なしや今夜も人の年忘　〔文政二年―句帖〕

よんどころない用事迄とし忘　〔文政七年―九番日記〕

年籠（としごもり）

長崎

君が世やから人も來て年ごもり　〔寛政五年―句帖・發句集〕

大三十日

大卅日梅見て居るをそしらるゝ　【享和三年—享和句帖】

網代守

親のおやの打し杭也おじろ小屋　【享和三年・享和句帖】

網代守天窓でかぢをとりにけり　【文化十二年—七番日記・發句集】

網代守炙にとえへん〳〵哉　【文化十三年—七番日記】

三日月と肩をならべて網代守　【文政年中—發句集】

狩小屋

狩小屋の夜明也けり犬の鈴　【享和三年—享和句帖】

雪車

雪車負て坂を上るや小さい子　【文化十五年—七番日記】

狗も走りくらする小雪車かな　【文政四年—句帖】

棧や凡人わざに雪舟を引く　【文政年中—發句集】

雪舟引や屋根から呼る局ヶ狀　【文政年中—嘉永板發句集】

橇

かんじきや庵の前を踏序　【文政三年—句帖】

麥蒔

麥蒔て妻有る寺としられけり　【文化十三年—七番日記】

死下手や麥もしつけて夕木魚　【文化十四年—七番日記】

鹽引

塩引や蝦夷の泥迄祝はるゝ　【文化十三年—七番日記】

寒習ひ

まゝつ子や灰にイロハの寒ならひ　【文政五年—九番日記】

寒灸

風の子やはらつて逃る寒灸　【文政三年—句帖】

寒聲

寒聲や不二をも丸で呑んだ顔　【文化十一年—七番日記】

寒聲やイ組ロ組の喧嘩買　【文政五年—九番日記】

薬喰(くすりぐひ)

行人を皿でまねくや薬喰　【文政五年―九番日記・發句集】

納豆(なつとう)

納豆の糸引張て遊びけり　【文化九年―七番日記】

蕎麦湯(そばゆ)

赤椀に龍も出さうなそば湯哉　【文化十一年―七番日記】

そりや寐鐘そりやそば湯ぞよ〳〵　【文化十一年―七番日記】

皸(あかがり)

皸をかくして母の夜伽かな　【文政年中―發句集】

炭竈(すみがま)

炭竈にぬり込られし旭哉　【享和三年―享和句帖】

炭竈のちよほ〳〵けぶる長閑さよ　【文化十年―七番日記】

炭竈や放り込だる歸り花　【文化十一年―七番日記】

炭がまの空の小隅もうき世哉　【文政年中―眞蹟・嘉永板發句集】

炭(すみ)

起てから鳥聞く也おこり炭　【享和三年―享和句帖】

くわん〳〵と炭のおこりし夜明哉　【享和三年―享和句帖】

ちとの間は我宿めかすおこり炭　【文化二年―旅日記】

枝ずみのことしは折れぬこぶし哉　【文化三年―旅日記】

うれしさやしらぬ御山のくぬぎ炭　【文化七年―七番日記】

おもしろや隣もおなじはかり炭　【文化七年―七番日記】

おり炭の打殘たる肱哉　【文化九年―七番日記】

そとすればぐわくりと炭のくだけゝり　【文化十年―七番日記】

すりこ木も炭打程に老にけり　【文化十年―七番日記】

朝晴にぱち〳〵炭のきげん哉　〔文化十年―七番日記〕
炭舟や筑波おろしを天窓から　〔文化十年―七番日記・發句集〕
かた炭やいふ事きかぬくだけ様　〔文化十年―七番日記〕
一茶坊に過たるものや炭一俵　〔文化十年―七番日記〕
分てやる隣もあれなおこり炭　〔文化十年―七番日記・狹蓑集〕
京住や五文が炭も目にかける　〔文政二年―句帖〕
炭もはや俵たく夜と成にけり　〔文政五年―九番日記〕
炭迄も鋸引や京住居　〔文政五年―九番日記〕

炭火（すみび）

炭の火のふく〳〵しさよ藪隣　〔享和三年―享和句帖〕
埋めたり出したり炭火一つ哉　〔文化十四年―七番日記〕
炭の火や朝の祝儀の咳拂ひ　〔文政二年―おらが春〕
炭の火や齡のへるもあの通り　〔文政年中―題叢　嘉永板發句集〕
炭の火に峯の松風通ひけり　〔文政年中―發句集〕
炭の火に月落烏鳴にけり　〔文政年中―發句集〕

炭俵（すみだはら）

炭俵はやぬかるみに踏れけり　〔文化元年―旅日記〕
魚串のさし所なり炭俵　〔文化十年―七番日記〕

爐（ろ）

爐を明て見てもつまらぬ獨哉　〔文化十二年―七番日記〕
ひとりだけほじくつておくゐろり哉　〔文化十二年―七番日記〕

一尺の子があぐらかくゐろり哉　【文化十三年―七番日記】

掛取が土足ふみ込むゐろり哉　【文政五年―九番日記】

爐開（ろびらき）

爐開やあつらへ通り夜の雨　【文政年中―發句集】

布子（ぬのこ）

雲水は虱祭れよ初布子　【文化十一年―七番日記】

綿（わた）

なむ芭蕉先綿子にはありつきぬ　【文化十二年―七番日記】

綿帽子（わたぼうし）

シヨウ塚の婆〻へも誰か綿帽子　【文政四年―句帖】

頭巾（づきん）

野は柳頭巾やよけん笠よけん　【享和三年―享和句帖】

あつさりと淺黄頭巾の交ぞ　【文化十二年―七番日記】

梟が小ばかにしたるづきん哉　【文化十三年―七番日記】

横笛や猪首に着なす蒲頭巾　【文政三年―句帖】

御佛前でも御めん頭巾哉　【文政五年―九番日記】

立じまに頭巾ではくやたばこ芥　【文政八年―新集】

紙衣（かみこ）

紙衣きたうしろながらが西行ぞ　【文化十年―七番日記】

金かんや南天もきる紙袋　【文化十一年―七番日記】

切つぎの美を盡したる紙衣哉　【文政四年―句帖　九番日記】

千兩の嫁を取もつ紙衣かな　【文政四年―句帖】

精づけよ迚鳥が鳴く紙子哉　【文政五年―九番日記】

達者なは口ばかりなる紙衣哉　【文政七年―九番日記】

はせを塚先拜むなりはつ紙子　【文政年中―發句集】

加茂の水吉野紙子とほだへたり　【文政年中―發句集】

燒穴の日〳〵にふえる紙衣かな　【文政年中―嘉永板發句集】

足袋（たび）

はく日からはや白足袋でなかりけり　【文化十一年―七番日記・九番日記】

赤足袋や這せておけば猫しやぶる　【文政四年―句記】

はく外によそ行足袋はなかりけり　【文政五年―九番日記】

拇の出てから足袋の長さ哉　【文政五年―九番日記】

蒲團（ふとん）

三つ五つ星見てたゝむふとん哉　【享和三年―享和句帖】

座ぶとんに見ておはす也松の鳥　【享和三年―享和句帖】

佗ぬれば猫のふとんをかりにけり　【文化十年―七番日記】

ふとんともにおしよせらるゝ寢坊哉　【文化十年―七番日記】

今少鴈を聞とてふとん哉　【文化十年―七番日記・發句集】

祐成がふとん引はぐ笑ひかな　【文化十年―七番日記・發句集】

今しばし〳〵とかぶるふとん哉　【文化十一年―七番日記】

旅すれば猫のふとんも借りにけり　【文化十四年―七番日記】

安き世や二晩ぎりの借ぶとん　【文化十四年―七番日記】

飯繼にきせれば蒲團なかりけり　【文政二年―句帖】

早立のかぶせてくれし蒲團かな　【文政年中―荻叢集】

衾（ふすま）

大坂八軒家

舟が着てけとはぐふとん哉　〔文政年中―發句集〕、

小衾にかれのゝ雨のかゝる也　〔文化元年―旅日記〕

をり〳〵は竹の影おく衾哉　〔文化二年―旅日記〕

鶯も一夜來よやれ紙衾　〔文化四年―旅日記〕

寢衾や峯の紅葉のかゝれとて　〔文化七年―七番日記〕

入相に片耳ふさぐ衾哉　〔文化九年―七番日記〕

衾から顔出して呼ぶ菜うり哉　〔文化十年―七番日記〕

老たりな衾かぶるもどつこいな　〔文政五年―九番日記〕、

懲しめに留守の衾ぞ虱ども　〔文政七年―九番日記〕、

千兩のほしも見ゆる紙衾　〔文政七年―九番日記〕

犬が來てもどなたぞと申す衾哉　〔文政十年―句帖〕―

漏どのがおそろしといふ衾哉　〔文政年中―發句集〕

湯婆（たんぽ）

先よしと足でおし出すたんぽ哉　〔文化十四年―七番日記〕

榾火（ほだび）

翁さびうしろをあぶる榾火哉　〔寛政四年―句帖〕

大名の一番立のほだ火かな　〔文政二年―句帖〕

子寶がきやら〳〵笑ふ榾火かな　〔文政二年―おらが春〕

榾の火に背中向けり最明寺　〔文政三年―句帖・發句集〕、

埋火(うづみび)

榾の火や目出度御代の顔と顔　【文政年中―題叢・發句集】

埋火の餅をながむる烏哉　【文化七年―七番日記】

埋火のかき捜しても一ッ哉　【文政七年―九番日記】

埋火やきせるで天窓はりこくり　【文政七年―九番日記】

埋火に桂の鷗きこえけり　【文政年中―俳諧千題集・狹蓑集】

火鉢(ひばち)

ほんのくぼ夕日にむけて火鉢哉　【享和三年―享和句帖】

町内の一番起の火鉢哉　【享和三年―享和句帖】

とるとしや火鉢なでゝも遊ばるゝ　【文化十二年―七番日記】

草の戸やどなたが來ても缺火桶　【文政二年―句帖】

貧乏らしといひし火桶を抱けり　【文政二年―句帖】

炬燵(こたつ)

思戀

思ふ人の側へ割込む炬燵哉　【寛政五年―句帖】

南天よ炬燵やぐらよ淋しさよ　【享和三年―享和句帖】

炬燵より見ればぞ不二もふじの山　【文化九年―七番日記】

雀來よ炬燵辨慶是に有　【文化十年―七番日記】

へらず口のみ上りけり常炬燵　【文化十四年―七番日記】

づぶ濡の大名を見るこたつ哉　【文政三年―句帖】

居佛や炬燵で叱る立ほとけ　【文政四年―句帖】

旅

斯う寐るも我火燵ではなかりけり　〔文政年中―發句集〕

宗教

神の旅（かみのたび）

蔦ひよろひゝよろ神の御立げな　〔文化十二年―西歌仙・七番日記〕

旅じたく神の御身もせはしなや　〔文化十二年―七番日記〕

御遲參はおく病神や大社　〔文化十二年―七番日記〕

不性神置みやげかよ貧乏雨　〔文政七年―九番日記〕

まめな妻忘れ給ふな神送　〔文政七年―九番日記〕

門違してくださるな福の神　〔文政七年―九番日記〕

ほた餅は棚にいざ是へ福の神　〔文政七年―九番日記〕

我宿の貧乏神も御供せよ　〔文政年中―俳林良材集題叢〕

里神樂（さとかぐら）

翌は又どこの月夜の里神樂　〔文政年中―發句集〕

吹革祭（ふいごまつり）

里並に藪の鍛冶屋も祭哉　〔文化二年―旅日記・俳林良材集〕

子祭（ねまつり）

子祭や寢て待てばほたもちが來る　〔文政七年―九番日記〕

蛭子講（えびすかう）

梅さげし人しばしとやえびす講　〔文化三年―旅日記〕

杉ばしで火をはさみけり戎講　〔文化十三年―七番日記・花貫發句集〕

ほて振や歩行ながらのゐびす講　【文政四年―句帖・九番日記】

芭蕉忌

翁忌や鳫も平話な並び樣　【文化十三年―七番日記】

芭蕉忌や江戸にもこんな松の月　【文政二年―句帖】

芭蕉忌や留守をして居る椅桌　【文政四年―句帖】

旅の皺御覽候へはせを佛　【文政七年―九番日記】

はせを忌と中も只一人哉　【文政八年―新集】

はせを忌や晝から錠の明く菴　【文政八年―新集・發句集】

はせを忌に丸い天窓の披露哉　【文政年中―發句集】

はせを忌やことしもまめで旅虱　【文政年中―發句集】

十夜

茶畑を通してくれる十夜かな　【文政二年―おらが春・句帖】

城内の茶畠ほける十夜哉　【文政六年―九番日記】

雨のやみのと忘るや十夜寺　【文政八年―句帖】

もろ／＼の愚者も月さす十夜哉　【文政年中―[illegible]叢・發句集】

大師粥

なむ大師しらぬも粥にありつきぬ　【文化十一年―七番日記】

けふの日やする／＼粥もながまるゝ　【文化十一年―七番日記】

御取越

御取越節でもちくふ夜なりけり　【文化十二年―七番日記】

手序にきせる磨くや御取越　【文政三年―句帖】

とつときの江戸書屏風や御取越　文政六年―九番日記】

寒垢離
寒念佛

寒垢離に背中の龍の披露哉　【文政二年—おらが春句帖】
けふぎりやはかやつて行く寒念佛　【文化十二年—七番日記】
雨の夜やしかも女の寒念佛　【文政四年—句帖】
迹供に犬の鳴く也寒念佛　【文政五年—九番日記】
寒念佛さては貴殿でありしよな　【文政年中—發句集】
一夜さは出來心なり寒念佛　【文政年中—發句集】

鉦叩
鉢敲

中仙道
霜がれやおれを見かけて鉦叩　【文政二年—句帖】
宗鑑がとふばも見たか鉢敲　【文化元年—旅日記】
しばしまて白髪くらべん鉢敲　【文化元年—旅日記】
出始を祝うてたゝく瓢かな　【文政年中—發句集】

動物

鶴
唆め鳥
鷹
木兎

人眠き鶴よどちらに箭があたる　【文政二年—おらが春】
唆め鳥同士が何か咄すぞよ　【文化十一年—七番日記】
鷹來るや蝦夷を去事一百里　【寛政四年—句帖】
木兎なくや人の人とる家ありと　【文化二年—旅日記】

梟

梟のむく〳〵氷る支度哉　【文化八年―七番日記】

筐啼

筐鳴も手持ぶさたの垣根哉　【文化七年―七番日記】

鶯や黄色な聲で親をよぶ　【文政年中―題叢・嘉永板發句集】

糞土より梅へ飛んだり斤鳴　【寛政五年―句帖】

三十三才

さうとんで棒にあたるなみそさゞい　【文化十年―七番日記】

おつとよし皆迄鳴なみそさゞい　【文化十一年―七番日記】

野ばこせん見ることなかれみそさゞい　【文化十一年―七番日記】

みそさゞい身を知る雨が降りにけり　【文化十四年―七番日記】

きよろ〳〵きよろ〳〵何をみそさゞい　【文化十四年―七番日記】

みそさゞゐきよろ〳〵何ぞ落したか　【文政二年―句帖】

今しがた來たよ小しやくなみそさゞい　【文政二年―句帖】

こつそりとしてかせぐなりみそさゞい　【文政二年―句帖・嘉永板發句集】

雀等と仲間入せよみそさゞい　【文政二年―句帖】

鼠とはかせぎ仲間よみそさゞい　【文政四年―句帖】

うす壁や鼠穴よりみそさゞい　【文政五年―九番日記・句帖】

斤鶍ちゝというても日が暮る　【文政年中―題叢・發句集】

水鳥

水鳥のどちへも行ず暮にけり　【享和三年―享和句帖】

水鳥の我折た仲間つき合ぞ　【文化十年―七番日記】

水鳥よふい〱何が氣に入らぬ　【文化十年―七番日記】

水鳥のきつと起番寢ばん哉　【文化十一年―七番日記】

水鳥の夫婦かせぎや長の旅　【文政四年―句帖】

水鳥のこつそり暮す小庭哉　【文政五年―九番日記】

水鳥や親子三人寢てくらし　【文政六年―九番日記】

浮寐鳥（うきねどり）

君が世のとつぱづれなり浮寢鳥　【文化十年―七番日記】

流し薪功者によけて浮寢鳥　【文政六年―九番日記】

追鳥や鳥より先につかれ寢る　【文政七年―九番日記】

汝等も福は待かよ浮寐鳥　【文政年中―遺句集】

鴛鴦（をし）

放れ鴛鴦一すねすねて眠りけり　【文化十三年―七番日記】

千鳥（ちどり）

片壁は千鳥に任す夜也けり　【文化元年―旅日記】

袂へも飛入ばかり千鳥哉　【文化七年―七番日記】

菴崎の犬と仲よいちどり哉　【文化八年―七番日記】

浦千鳥だまつて玉子とられけり　【文化九年―七番日記】

行く年や何をいぢむぢ夕千鳥　【文化十年―七番日記】

上置の干茶切れとや夕千鳥　【文化十年―七番日記】

鳥海山は海を埋、蚶滿寺は地底に入

御地藏と日向ぼこして鳴く千鳥　【文化十年―七番日記・發句集】

象潟のかけをつかかんで鳴千鳥 【文化十年―迹 祭 七番日記】

むら千鳥犬をじらして通りけり 【文化十一年―七番日記】

さよ千鳥としより聲はなかりけり 【文化十二年―七番日記】

あちこちに小寄合する千鳥哉 【文化十四年―七番日記】

むら千鳥そつと申せばはつと立つ 【文政二年―おらが春】

犬の道あけて鳴也濱千鳥 【文政七年―九番日記】

忍べとの竿の印や鳴千鳥 【文政七年―九番日記】

聲〳〵や子どもゝ交る濱千鳥 【文政七年―九番日記】

濱衛ひねくれ松を會所哉 【文政七年―九番日記】

鴨(かも)

我門に來て痩鴨と成にけり 【文化十二年―七番日記】

鴨よかもどつこの水にさう肥た 【文化十二年―七番日記】

夫婦鴨碇おろして遊びけり 【文化十二年―七番日記】

おちつきにちつと寐て見る小鴨哉 【文政年中―發句集】

鱈(たら) 鰒(ふぐ)

蝦夷鱈も御代の旭に逢にけり 【文化十二年―七番日記】

淺ましと鰒や見るらん人の顔 【享和三年―享和句帖】

鰒好と窓むきあふて借家哉 【享和三年―享和句帖】

親分と家向あふて鰒と汁 【享和三年―享和句帖】

とら鰒の皃をつん出す葉かげ哉 【享和三年―享和句帖・題叢】

どこを風が吹かとひとり鰒哉　〔享和三年―享和句帖〕
江戸すれし目ざしも見ゆる鰒哉　〔文化二年―旅日記〕
わら苞やそれとも見ゆる鰒の顔　〔文化八年―七番日記〕
衆生ありさて鰒あり月は出給ふ　〔文化八年―七番日記〕
鰒喰ぬ奴には見せな不二の山　〔文化十年―七番日記〕
わら苞はてつきり鰒でありしよな　〔文化十一年―七番日記〕
鰒すゝるうしろは伊豆の岬かな　〔文化十一年―七番日記〕
京入も佛頂面のふぐと哉　〔文政八年―句帖〕
五十にして鰒の味しる夜哉　〔文政年中―花實發句集・題叢〕
鰒汁やもやひ世帶の惣餅　〔文政年中―發句集〕

海鼠（なまこ）
浮け海鼠佛法流布の世なるぞよ　〔文化十一年―七番日記〕

植物

冬木立（ふゆこだち）
賣家や一本よりの冬木立　〔文化十一年―七番日記〕
山寺に豆藪引く也冬木立　〔文政五年―九番日記〕
虫籠の軒にふらりや冬木立　〔文政五年―九番日記〕

枯木立（かれこだち）
町中に冬がれ榎立りけり　〔文化十一年―七番日記〕

木葉(このは)散る

津の國の何を申すも枯木立　〔文政二年―おらが春〕

かるゝなら斯くかれよとて立木哉　〔文政七年―九番日記〕

かけがねのさても錆しよ散る木の葉　〔文化二年―旅日記・題叢〕

吉原のうしろ見よとや散る木の葉　〔文化七年―七番日記〕

二つ三つ赤い木の葉のあら寒き　〔文化九年―七番日記〕

散る木の葉社の錠の錆しよな　〔文化十年―七番日記〕

夕暮や土とかたれば散る木の葉　〔文化十年―七番日記〕

散る木の葉音致さぬが又寒き　〔文化十年―七番日記〕

水をまく奴が尻へ木の葉哉　〔文化十年―七番日記〕

赤いのが先へもげたる木の葉哉　〔文化十年―七番日記〕

文字のある木の葉もおちよ身延山　〔文化十一年―七番日記〕

いる程は手でかいて來る木の葉哉　〔文化十五年―七番日記〕

門畑や猫をじやらして飛ぶ木の葉　〔文政二年―句帖。嘉永版發句集〕

猫の子のちよいと抑へる木の葉哉　〔文政三年―句帖〕

門先にちよいとうづまく木の葉哉　〔文政三年―句帖〕

黑塗の馬のはけゝり散る木の葉　〔文政三年―句帖〕

禪寺

役にして木の葉拾ふや寺の山　〔文政八年―新集〕

落葉

山川や落葉の上のいかだ守　〔寛政四年―句日記〕

むら落葉かさ森おせんいつちりし　〔文化八年―七番日記〕

おち葉して憎い鳥はなかりけり　〔文化九年―七番日記〕

またけふもおち葉の上の住居哉　〔文化九年―七番日記〕

澁紙のやうなのばかり落葉哉　〔文化十年―七番日記〕

おち葉してけろりと立し土藏哉　〔文化十年―七番日記〕

焚ほどは風がくれたるおち葉哉　〔文化十二年―七番日記〕

風のおち葉ちよい〱猫の押へけり　〔文化十二年―七番日記〕

手の皺のおち葉かくには相應ぞ　〔文化十二年―七番日記〕

落葉して日なたに醉し小僧哉　〔文化十四年―七番日記・發句集〕

山里や疊の上におち葉かく　〔文政七年―九番日記〕

鶯の山となしたる落葉哉　〔文政年中―題叢〕

落葉して三月ごろの垣根哉　〔文政年中―發句集〕

鶯の口すぎに來る落葉かな　〔文政年中―嘉永板發句集〕

散紅葉

散る紅葉水ない所も月夜也　〔文化元年―旅日記〕

ぬり樽にさつと散たる紅葉哉　〔文政二年―句帖〕

今打し畑のさまや散紅葉　〔文政年中―題叢〕

歸り花

北窓や人あなどれば歸り花　〔享和三年―享和句帖〕

櫻木やつんのめつても歸り花　〔文化十二年―七番日記〕
紙屑もたしに咲けり歸り花　〔文化十二年―七番日記〕
木瓜の株苅つくされて歸り花　〔文政年中―嘉永板發句集〕

石蕗の花

御地藏のおさむいなりや石蕗の花　〔文化八年―七番日記〕
ちま〳〵とした海もちぬ石蕗の花　〔文化十一年―七番日記〕

冬椿

塊のはしやぎ拔けり冬椿　〔享和三年―享和句帖〕
火のけなき家つんとして冬椿　〔享和三年―享和句帖〕

枇杷の花

嵯峨村と名乘り兒なり枇杷の花　〔文政年中―發句集〕

茶の花

茶の花に隱れんぼする雀哉　〔文化十年―七番日記〕

寒菊

寒菊に頰かぶりする小猿哉　〔文化十二年―七番日記〕

水仙

水仙や江戸の辰巳のかじけ坊　〔文化十年―七番日記〕
御侍御傘忘れな水仙花　〔文化十年―七番日記〕
水仙や大仕合のきり〳〵す　〔文政年中―題叢・發句集〕
水仙や垣に結こむ筑波山　〔文政年中―發句集〕

枯草

人をさす草もへた〳〵枯にけり　〔文化十四年―七番日記〕
花ノ銅委レ地無二人收一
思ひ草おもはぬ草も枯にけり　〔文政三年―句帖・發句集〕
がむしやらの辨慶草も枯にけり　〔文政五年―九番日記〕

枯芒　枯芒昔婆鬼あつたとさ　〔文化十四年―七番日記〕

枯尾花　六道の辻に立けり枯尾花　〔文政二年―句帖〕

枯萩　かれ萩に口淋しがる二人哉　〔享和三年―享和句帖〕

枯荻　濱荻のあこぎに枯て仕廻けり　〔文化十二年―七番日記〕

女郎花枯る　何が氣に入らで枯たぞ女郎花　〔文政六年―九番日記〕

女郎花なんの因果で枯かねる　〔文政年中―發句集〕

枯菊　作らるゝ菊から先へ枯にけり　〔文政年中―題叢・嘉永板發句集〕

枯茨　鬼茨踏んばたがつて枯にけり　〔文化十三年―七番日記〕

枯葎　かれ葎かなぐり捨もせざりけり　〔享和三年―享和句帖〕

葱　小鍋ど坐敷へ出る葱哉　〔文政七年―九番日記〕

大根　かつしかや鷺が番する土大根　〔文化七年―七番日記〕

大根で叩きあうたる子供哉　〔文化十四年―七番日記〕

大根武者椽の下から出たりけり　〔文政七年―九番日記〕

艸菴

武者などに成てくれるな土大根　〔文政八年―新集〕

大根引　大根引一本づゝに雲を見る　〔享和三年―享和句帖〕

菊をさへ只はおかぬや大根引　〔文化二年―旅日記〕

目利だてふしくれ大根引にけり　〔文化七年―七番日記〕

大根引大根で道を敎へけり　〔文化十一年―七番日記〕

二三本母大根を殘しけり　〔文化十三年―七番日記〕

大根引拍子にころり小僧かな　〔文政二年―おら春・句帖〕

野大根引捨られもせざりけり　〔文政二年―句帖〕

鳴雀その大根も今ひくぞ　〔文政年中―題叢・發句集〕

雉子なども粗鳴にけり大根引　〔文政年中―發句集〕

鶴遊べ葛西の大根今や引　〔文政年中―俳諧千題集・狹蓑集〕

尼寺や二人りかゝつて大根引　〔文政年中―嘉永板發句集〕

一茶俳諧歌集

一茶俳諧歌集

春の部

あら玉のうぐひす啼けどさほてんの
眞裸なる春に逢ふかな　（文化七年七番日記）

極樂も此邊りとや山吹の
花色衣着する錢かな　（文化七年七番日記）

蜜取にゆるせ〳〵と山蜂の
手をすり足をすりやすらるん　（文化八年七番日記）

ちる梅の影がはら〳〵淨破利の
かゞみの中も春風ぞ吹く　（文化八年株番）

四月八日

御佛と一つ盥にざんぶりと
甘茶を浴るむら雀哉　（文化九年七番日記）

雀らも祝ひはやして御佛の
うぶやにをどるむら雀哉　（文化九年七番日記）

かりそめにさし捨たりし一枝の
柳の陰をたのむ庵哉　（文化十年七番日記）

前の世に今もならなんよい種を
蒔んとばかり過しつる哉　（文化十年七番日記）

みよし野の吉野の山にぬるてふは
からの櫻や夢に見るらん　（文化十年七番日記）

漣や志賀の櫻の吹からに
龍の都も花や降るらん　（文化十年七番日記）

梟の古の羽衣洗ふらん
糊すりかけと宵々に鳴く　（文化十年七番日記）

春風にうしろつんむく梟は
吹きちる花をいきどほる哉　（文化十年七番日記）

風袋紐〆め給へさくら木の
としに二度咲く花ならなくに　（文化十年七番日記）

梅の花ちらぬうち(マヽ)の鶯の
かはりに來鳴くむら雀哉 (文化十年七番日記)

山畠や守る人もなき梅が枝を
折らんとすれば犬ぞとがむる (文化十年七番日記)

淺ましの老木櫻や翌の日に
倒るゝとても花の咲く哉 (文化十年七番日記)

花山も住にくしとや夕雉の
もとの燒野に鳴きもどる也 (文化十年七番日記)

子を捨る藪を見廻し〳〵て
つひに上らぬ夕雲雀哉 (文化十年七番日記)

御日様に咄殘りのあるやうに
今の雲雀の又上るなり (文化十年七番日記)

後の世にもしや住むてふ人しあらば
つぎ穗の梅よ花も咲なん (文化十年七番日記)

老の身は翌の夕も白桃の
二葉三ッ葉を植てける哉 (文化十年七番日記)

山人の眞柴のけぶり心せよ
軒ばの梅のすゝけもやせん (文化十年七番日記)

山吹の小金あざむく小流を
うしとや牛に呑せざらなん (文化十年七番日記)

古庵に後住む人を松の葉の
心さし木の花ぞこの花 (文化十年七番日記)

我庵に又住む人よ露程の
心さし木の櫻とをしれ (文化十年七番日記)

淺ぢふに妻乞ありくのら猫の
鳴けども〳〵藪ばかり哉 (文化十一年七番日記)

御日様に願ひ殘しのあるかして
ふたゝび上るあの雲雀哉 (文化十一年成美評一茶句稿)

大空に妻祈るらんのら猫の
月を見つめて夜たゞ鳴なり (文化十一年七番日記)

朝夕に竈はなれぬ老猫の
戀にはあらぬ身を焦すらん (文化十一年七番日記)

刀禰川の西に東になく猫の
　及ばぬ戀をよびくらす哉（文化十一年七番日記）

明暮になげき重る日の上の
　こぶしの花の盛りなりけり（文化十一年七番日記）

世の中はあた任せよ七ころび
　八起の春にあひにける哉（文化十一年七番日記）

赤々と日は入そめてさわらびの
　萌黄にかすむ山の裾哉（文化十二年七番日記）

かたくなの片山きゞす妻あらば
　けんもほろゝに立やしなまし（文化十二年七番日記）

よわ〳〵し老木櫻を山風の
　心づよくも吹倒す哉（文化十二年七番日記）

さく花もよわ〳〵し木を山風の
　心強くも吹倒すかな（文化十二年七番日記）

咲かゝる花や心におく山の
　かすみはづれに殘る鴈がね（文化十二年七番日記）

何櫻かざくらさくらちり〳〵に
　花々しくも春の行く哉（文化十二年七番日記）

玉だすきかけがひもなき一木の
　花をさそひて春の行く哉（文化十二年七番日記）

捨る神あれば拾ふかみ（上句マヽ）
　あればぞ我も花のかげ哉（文化十三年七番日記）

日が長い〳〵とばかり御佛の
　道にも入らで過しつる哉（文化十三年七番日記）

我もなく庵も倒れし共迹の
　印になれとさす柳哉（文化十三年七番日記）

人の道しらざる山に鶯の
　法ホケの聲をからして（文化十三年七番日記）

梅が香に御ならの匂ひこき交ぜて
　草の庵も春邊なりりけり（文化十三年七番日記）

門田なる我苗代のむら蒔を
　へた〳〵と蛙鳴なり（文化十三年七番日記）

曉の月をつく〲三毛猫の
　尾の上の鐘に腹やへるらん　（文化十三年七番日記）

長らくの夜伽をさしてくれ竹の
　葉越の雁の皆歸る也　（文化十四年七番日記）

亡跡に住むてふ人よ花さかば
　心さし木の櫻とをしれ　（文化十四年七番日記）

梅の花色は匂へどちりぬるを
　わが世〱と思ひける哉　（文化十五年七番日記）

思ひきや下萠いそぐわか草を
　野邊のけぶりになして見んとは　（文政二年おらが春）

朝夕に覆かぶさりし目の上の
　辛夷も花の盛り也けり　（文政二年おらが春）

古郷に花もあらねどふむ足の
　迹へ心を引くかすみかな　（文政二年おらが春）

山櫻咲くと思へばちりぬるを
　わが世は人もおもはざりけり　（文政二年句帖）

行く水のすらり〱と淡雪の
　あかれぬ前に流れけるかも　（文政二年句帖）

降ながら水となり行く淡雪の
　あは〱しさの世を頼む哉　（文政二政句帖）

鶯も垣へだつれば一入に
　しほらしき音の聞えつる哉　（文政二年句帖）

呼子鳥鳴聲すれば古郷は
　迹へこゝろを引く霞かな　（文政二年句帖）

世の中はかくてもへけれぬる蝶は
　夢見てばかり身をすぐす哉　（文政二年句帖）

乞食

櫻咲く木の下陰に乞食して
　袋にあまる花の雪かな　（文政二年句帖）

淺ましの老木櫻や翌が日に
　倒るゝ迄も花のさくかな　（文政二年八番日記）

梅の花ちらぬ先にと鶯の
　かはりに來鳴くむら雀哉　（文政二年句帖）

足もとの明るいうちに鴈がねの
　立いそぎして歸る夕暮　（文政三年句帖）

子を捨る藪を見廻し〳〵て
　終にのぼらぬ夕雲雀哉　（文政三年句帖）

お日さまに咄し殘の有やうに
　今の雲雀が又あがるなり　（文政三年句帖）

山きじの鳴音のほねや高砂の
　尾上の花のゆるぎつる哉　（文政三年句帖）

露の身は翌日あらじと白桃の
　二葉三葉を植てける哉　（文政三年句帖）

杣人の眞柴のけぶり心せよ
　軒端の梅のすゝけもやせん　（文政三年句帖）

散花の枝に戻らぬなげきとは
　おもひきれども〳〵　（文政四年句帖）

はつ夢に見えし日の出の朝やけは
　此夕けぶりあらんさとしか　（文政四年句帖）

散花はこゝ〳〵〳〵とめん鶏の
　呼り寄たる垣のもと哉　（文政四年句帖）

老ぬれば作れる罪も永き日の
　目はかすみても蚤を追ふかな　（文政五年九番日記）

六十の六なる春に大雪の
　中よりのぼるはつ日かげ哉　（文政五年九番日記）

漣やそらも一ッに夕はれて
　雲雀と舟と行違ふ也　（文政五年九番日記）

身をつみてしれや草のゝ夜の雨に
　古墓（巣カ）やかれし雉の鳴く也　（文政五年九番日記）

士英子の妻を悼みて

さばの緣うす花ざくらけふちると
　しらば木陰をいかではなれん　（文政五年九番日記）

雨風によわきは花の常ながら
　かく迄もろく散果んとは　（文政五年九番日記）
尋ねとふ主はたれともしらま弓
　入るかひある花の陰哉　（文政五年九番日記）
み佛に折殘されし一枝を
　けふは其身の塚の花哉　（文政五年九番日記）
一さんにおつる雲雀や寢せし子の
　鳴聲天に通じたりけん　（文政五年九番日記）
わか草のもえぎ淺黄とさま〴〵に
　入らざる世話をやく野原哉　（文政五年九番日記）
難波江のよしのあけくはあしもとの
　明いうちと雁のいぬらん　（文政五年九番日記）
きらはれぬ山には住まで山蜂の
　それ程人のなつかしき哉　（文政五年九番日記）
あながちに雀のみかは鶯を
　ずんと品よくとめる竹かな　（文政六年九番日記）
鶯の鳴て見せッヽほゝ〳〵と
　子のだみ聲を直しぬる哉　（文政七年九番日記）
おち所の田を尋ぬれば麥（マヽ）より
　爰に〳〵と上げ雲雀哉　（文政七年九番日記）
待〳〵て春にしなのゝ山ざくら
　花としもへば春はをへけり　（文政七年九番日記）
古庵にのちすむ人よ花さかば
　こゝろさし木の櫻とぞしれ　（俳諧歌帖）

夏の部

やよ鳥畠に飯を埋めおきて
　親やまつらん子や呼ふらん　（文化七年七番日記）
しば聲に呼べども〳〵ほたる火の
　聞ぬ皃してつい走りけり　（文化八年我春集）
御佛の顏にばりするむら蠅は
　盥のもちにかゝりけるかな　（文化八年七番日記）

我心外へひろげば鬼茨の
角ばかりなる野邊にぞありける　（文化八年七番日記）

足がらのあら山本の鬼茨の
とげばかりなる我が心哉　（文化八年七番日記）

久かたの空をがみするむら蠅が
もちの地獄に落んとすらん　（文化八年七番日記）

しは聲に呼べども〳〵螢火の
しらぬ顔してつい通りけり　（文化八年七番日記）

時鳥通すまじとや夕暮の
蚊やりも雲を捺る哉　（文化九年株番）

むら雨のふるの垣ねや野鼠の
あな卯の花のさくばかり哉　（文化九年株番）

子規さのみななきそ作べき
田はさら〳〵にもたぬ菴ぞ　（文化九年株番）

金が降る〳〵てふ白雨を
ばら〳〵海へ捨るむら雨　（文化九年七番日記）

から臼のとなりに住めば時鳥
鳴けども〳〵紛れこそすれ　（文化九年七番日記）

書き物も残らず棒にふる郷の
人は紙魚じみにくきつら哉　（文化十年七番日記）

夕さればうまや秣にとぶほたる
おのが野原と思ひける哉　（文化十年七番日記）

とぶ螢〳〵迚迷ひ來て
闇の茨をつかみつる哉　（文化十年七番日記）

小雨ふる柴の扉をしば〳〵に
音訪ふものは螢なりけり　（文化十年七番日記）

時鳥かゝる庵の卯の花の
雪だになくば見おとりやせん　（文化十年七番日記）

卯の花も葎の軒もおしなべて
たゞ一聲の時鳥哉　（文化十年七番日記）

卯の花も軒の葎もほと〳〵に
名乗りてぞ行く時鳥哉　（文化十年七番日記）

黒焼のけぶりを巡るほとゝぎす
妻にやあらん子にやありなん　（文化十年七番日記）

門口にふき並るを待かねて
菖蒲の先へ下る蜘かな　（文化十年七番日記）

柴の門もけふのあやめを福原や
古き藪蚊のさわぐ夕暮　（文化十年七番日記）

徒に軒ばにふけるあやめ草
あやしくけふも暮れんとすらん　（文化十年七番日記）

時鳥待遠しとや夕月は
小倉の山にかくれ給ひぬ　（文化十年七番日記）

わせ苗の伸〳〵口のしかられて
朝寐をさせぬ時鳥哉　（文化十年七番日記）

祈り聲とゞきやすらん水無月の
雨ををしまぬ雲よ八重雲　（文化十年七番日記）

卯の花の雪を似せるを時鳥
本尊かけて何たのむらん　（文化十年七番日記）

時鳥もてなすとてや山櫻
一木おくれて花の咲く哉　（文化十年七番日記）

卯の花も軒の葎もとも〴〵に
まねき出したる時鳥哉　（文化十年成美評一茶句稿）

卯の花の雪にまがへるしら髪を
まだそらぬとや鳴く時鳥　（文化十一年七番日記）

黒焼のけぶりに來鳴ほとゝぎす
妻やよぶらん子や尋らん　（文化十一年七番日記）

邪魔になるところ〴〵に筝の
よりによりてぞ生出る哉　（文化十二年七番日記）

大藪の隅の小すみに筝の
迯てかくれて身をかばふ哉　（文化十二年七番日記）

にくまるゝ隣堺へ筝の
よりによりてぞ生出る哉　（文化十二年七番日記）

ほの〴〵と風の辻子や夏の夜の
はがゆき迄に明る青空　（文化十三年七番日記）

遲く疾く拔捨らるゝ田の草の
花さく隙もやるせなの世や（文化十三年七番日記）

そよ風に吹かれ〳〵てうき草の
うき世並迚花の咲くらん（文化十三年七番日記）

つかの間も汀にうごくうき草の
うき世並迚花のさく哉（文化十三年七番日記）

ばか〳〵し死ね〳〵〳〵とよしきりの
あした夕に來つゝ鳴らん（文化十三年七番日記）

いさゝかも隙浪間やうき草の
うき世並迚花のさくらん（文化十三年七番日記）

庵の戸を明るおそしとむれ蝿の
我より先にさわぎ入る哉（文化十三年七番日記）

苔清水爰にありとて迹連を
松にさげたる笠の凉しき（文化十四年七番日記）

うけがたき人と生て鬼茨の
とが〳〵しくも世を過す哉（文化十四年七番日記）

此清水こゝにありとや迹連を
松にさげたる笠の凉風（文化十五年七番日記）

此所清水ありとや迹連を
松の木陰にすゞむ旅人（文化十五年七番日記）

曲つたら曲つたなりか蓬生の
世を麻の葉の入らぬ世話哉（文化十五年七番日記）

直なるも曲るも同じ世の中ぞ
蓬はよもぎ麻はあさ連（文化十五年七番日記）

一しめり有間の山の夕立は
別て凉しき月のかげ哉（文化十五年七番日記）

あまひらをおどろかさじと青麥に
ほどよき風の吹すぐるかな（文政二年おらが春）

人は人我はわが家の凉しさは
虻も通らず蜂も通らず（文政四年句帖）

ぬぎ捨るけふや蚤（虱カ）の古衣
かへす〳〵も耻をかくかな（文政五年九番日記）

黒髪に這うて光るも白露の
　草を分つゝよぶ螢哉　（文政五年九番日記）

身一ッをひたと苦になる暑哉
　かりの此世も責にあひつゝ　（文政五年九番日記）

星合の空をはやしてなでしこの
　花〳〵しくも揃ひつるかな　（文政五年九番日記）

明る夜はとてもかくてもくれ竹の
　よいがよいにもならぬ世の中　（文政五年九番日記）

五月雨の下拵へや山のこしを
　おびたゞしくも雲の巡れり　（文政六年九番日記）

片てりにてりからされしもろ草の
　ふたゝび青む夏のむら雨　（文政六年九番日記）

横雲を下目になしてほとゝぎす
　音も高松の上になくなり　（文政六年九番日記）

夕立の一降過る木の間より
　雫ながらに出る月哉　（文政六年九番日記）

夕立のまだ晴きらぬ木間より
　雫ながらに出る月かな　（文政六年九番日記）

里〳〵を涼しくなして夕立は
　なりしりぞきし山の外哉　（文政六年九番日記）

木の雫ほつちり〳〵と
　かたつむりをばはりこかす哉　（文政六年九番日記）

短夜の小田の蛙のもろ聲に
　寢ざめては又むすぶ夢哉　（文政七年九番日記）

あやむかれぬるもさら〳〵白蓮に（マヽ）
　ずゐきの泪かゝりける哉　（文政七年九番日記）

夕暮のさら〳〵竹に水打て
　涼しき風を拵へる哉　（文政七年九番日記）

うつ浪に千度もしづみて浮草の
　うき世なみとて花やさくらん　（俳諧歌帖）

秋の部

世の中はよすぎにけらし古郷の
　けぶりや細き秋の夕暮　（文化八年七番日記）

ほの〴〵と赤らむ柿を鶏が
　とつて喰はうと鳴にけるかな　（文化九年七番日記）

天人や人見おろさばむさしのゝ
　草葉にすだく虫とこそ思へ　（文化九年七番日記）

招かずもしぐるゝものを秋の田の
　心短きむら尾花哉　（文化九年七番日記）

星たちの人見たまはゞむさしのゝ
　草葉の虫とおぼしめすらん　（文化九年株番）

三日月も潮が峰にかくろひて
　念佛門に入相の鐘　（文化十年七番日記）

有明の月も此の世を秋の野の
　尾花が末に入り給ふ哉　（文化十年七番日記）

しばらくは招きとゞめよむさしのゝ
　尾花が末に暮急ぐ月　（文化十年七番日記）

けふもはやうき世の中に秋の野の
　草葉の陰に這入る三日月　（文化十年七番日記）

夕されば高屋の草になく虫の
　おのが野原と思ひける哉　（文化十年七番日記）

南無大悲なむ稲の穂よ〳〵
　かゝるみのりの秋はあらじな　（文化十年七番日記）

稲の穂よ南無稲の穂よ〳〵
　かゝるみのりの秋はあらじな　（文化十年成美評一茶句稿）

淺ましや佛ぎらひも白露の
　たま〳〵生れ出て此世を　（文化十一年七番日記）

翌もありあさてもありと露の世の
　露を露とも思はざりけり　（文化十二年七番日記）

すり鉢の音に朝々朝皃の
　卅日々々もしらぬ花哉　（文化十二年七番日記）

毒々とおどした瓜を馬にして
　玉迎へするけふの夕暮　（文化十二年七番日記）

小車の花の下枝に住む虫も
　ぎつち／＼と鳴にける哉　（文化十二年七番日記）

甘い露降か／＼と口明て
　待程もなき鳥のふん哉　（文化十二年七番日記）

目出度さはかくの通りと夕暮の
　粟のしら露稗のむら雨　（文化十二年七番日記）

世の中をたゝき直して行秋の
　いなほのあらし粟の有明　（文化十二年七番日記）

目出度さはかくの通りと行秋の
　粟の有明松のむら雨　（文化十二年七番日記）

蕣もつぶりの色にあやかりて
　此秋よりは白く咲けり　（文化十二年七番日記）

どの島も一こぶしづゝ有明の
　月に別るゝ海士のつり舟　（文化十二年七番日記）

盗喰また山猫や赤恥を
　柿核なりの目に泪して　（文化十二年七番日記）

紅葉ばのから紅に辻風の
　吹てくる／＼巡る猫かな　（文化十二年七番日記）

招かれて宿かる人も野に伏も
　つひの住居は芒とをしれ　（文化十三年七番日記）

きりはたりつゞれさせてふ聲々に
　虫もうき世につながゝる哉　（文化十三年七番日記）

寝て待たん福が來る夜ぞぼた餅は
　棚の小すみに有明の月　（文化十三年七番日記）

樂みもうれひも花に三日月の
　そりの合たる隣をもがな　（文化十四年七番日記）

といへば又々かくといざくさの
　茂きが中にやどる露哉　（文化十四年七番日記）

吹風のとが／＼し世に大栗の
　いがの中にも虫の住かな　（文化十四年七番日記）

おそろしき太山がくれのどんぐりも
　粟の仲間に轉げ入る哉　（文化十四年七番日記）

さわがしき嵐をよそにくれ竹の
　世にたのもしきかくれ家の月（文化十四年七番日記）

今様の紋りはかくと朝皃の
　教へ貌にも咲きほこる哉（文化十五年七番日記）

きりはたり／＼とはたおりを
　すゝめ（イをしへ）皃にも虫のなく哉（文化十五年七番日記）

小山田の道しる駒や稲の穂を
　おろせばひとり又通ふなり（文政二年句帖）

一寸の草にも五分の魂の
　あればぞ花の立派なりけり（文政二年句帖）

山ぐせの雨さからへど月影は
　さすがに秋の最中なりけり（文政二年句帖）

こひ願ひ奉らねど月影は
　迷ふ山路をてらし給ひぬ（文政三年句帖）

俳諧の手に葉も茂れ此庭は
　上手にうそを築山の月（文政三年句帖）

希奉らねど闇の夜の
　人道びきに出づる月哉（文政三年句帖）

はづかしのゆがみ心や落ち栗を
　人より先にばひとらんとは（文政三年句帖）

はづかしや翌をもしらぬ此身ぞと
　しりつゝ栗を奪ひ合ふかな（文政三年句帖）

山川に流れを急ぐ浮栗の
　行衛もしらぬ此身なりけり（文政三年句帖）

露の間の盛りをだにも朝皃の
　花のいろ／＼化はひつる哉（文政三年句帖）

風寒き世を秋蝉のいつ迄か
　うきをみん／＼みんと鳴らん（文政三年句帖）

西東別れし藪やなくむしの
　まけじ／＼とはり上る哉（文政三年句帖）

七夕の人見たまはゞむさしのゝ
　草葉の虫とおぼしめす也（文政四年句帖）

世の中はへちまの皮ぞ白露の
　落る所は谷川の水（文政四年句帖）

俤の替らぬうちに朝皃の
　花〱しくも世をしぼむ哉（文政四年句帖）

ものぐさの我に見よとや久かたの
　月も笠きて出給ふらん（文政五年九番日記）

貧しさをうき世のとがにぬり枕
　ぬらりくらりと寝てくらす哉（文政五年九番日記）

けふ〱とけふの暮さへ秋の田の
　かりのうき世にいつ迄あらん（文政五年九番日記）

かつしかやまゝの河原に立雁の
　跡を濁さぬ水の月哉（文政五年九番日記）

入相の鐘につく〴〵秋の田の
　かりの此世にいつまであらん（文政五年九番日記）

細竹の杖もつく〴〵秋の田の
　かりの此世にいつ迄あらん（文政五年九番日記）

入相の鐘もつく〴〵秋萩の
　露のうき世にいつ迄あらん（文政五年九番日記）

従（縦）に過さばつひに露の身の
　おき所なくなりぬべら也（文政五年九番日記）

入相の鐘より暮て秋行を
　つく〴〵をしと蟬の鳴らん（文政五年九番日記）

御佛にきのふ折られし菊そのを
　けふは其身の塚の花哉（文政五年九番日記）

露霜はいたくおけども山柿の
　澁のぬけざる我心哉（文政五年九番日記）

ともかくも風任なるほそすゝき
　起ても寝ても君によらなん（文政五年九番日記）

あつ寒の世に秋蟬やいく程の
　うきを見ん〱と鳴らん（文政五年九番日記）

女郎花なまめき立る花の野に
　いかでか虫のいぼをつるらん（文政五年九番日記）

老らくのかきねに生るしらぎくの
　よこねがちにて花のさく哉　（文政六年 九番日記）

吹あらし何にもかも瓜ありのみを
　梨地まがひに散らす夕暮　（文政七年 九番日記）

なむあみだ／＼ぶと山西に
　入る月かげの空たのみ哉　（文政七年 九番日記）

山くせの雨のさそへど月かげは
　さすがに秋のもなか也けり　（文政七年 九番日記）

いつはりのことの葉しげる山／＼を
　出入る月もむつかしの世や　（文政七年 九番日記）

笠の端に穂芒ちりて立つきりは
　足の下よりもや／＼の關　（俳諧歌帖）

鳴虫よそなたも五分の魂は
　きいつと／＼有明の月　（俳諧歌帖）

行秋をうこき直して夕ぐれは
　稲穂のあらし栗の有明　（俳諧歌帖）

乞食長者

紅葉ばのちりしく野邊にまろねして
　我も錦を身にまとふかな　（俳諧歌帖）

夜半衣うつ音さへもきれ／＼に
　きこえて寒く吹くあらしかな　（俳諧歌帖）

冬の部

澁柿のしぶとい山をしば／＼に
　あゆみをはこぶむら時雨哉　（文化九年 七番日記）

山の端に迯んとすらん月かげを
　やをら追つくむら時雨哉　（文化九年 七番日記）

茎漬の小塩の山のもみぢ葉を
　ざくり／＼と降るしぐれ哉　（文化九年 七番日記）

金が降る／＼てふ白雨を
　はら／＼海へ捨るむら雲　（文化九年 株番）

けふ／＼とうき世の中を古家の
　曲りなりなるとしの暮哉　（文化十年 七番日記）

山おろし吹井の浦にゐる鷺の
　身の毛よだちて冴ゆる月哉　（文化十年七番日記）
つひの日の烟のたしにならぬ柴の
　曲らぬ枝をたき殘しつゝ　（文化十年七番日記）
隱れ蓑よしや着るとも老らくの
　頭の雪のかくれやはする　（文化十年七番日記）
大雪のふるの山松七ころび
　やをら八起のけふに逢ふ哉　（文化十一年七番日記）
降しける雪のなげきの七ころび
　やをら八起の花に逢ふ哉　（文化十一年七番日記）
雨もふれ風もふけとて世の中を
　まゝの川原のうき寢鳥哉　（文化十一年七番日記）
あべこべにしぐれ〳〵てぶしつけの
　不仕合なる丘のつぶれ家　（文化十二年七番日記）
世の中はかくの通りと白雪の
　佛はふつと消え給ひけり　（文化十二年七番日記）
白雪の佛ほとけと土鳩の
　珠數をかけつゝさわぎける哉　（文化十二年七番日記）
朝菜つみ夕菜つみつゝつむとしの
　首の雪ぞ野らにまがへる　（文化十三年七番日記）
行雲の跡よりはける青空に
　うそを月夜の一しぐれ哉　（文化十三年七番日記）
月かげの松原西へ入りほがに
　曲り〳〵て行しぐれ哉　（文化十三年七番日記）
廿口でいかぬ〳〵といく時雨
　降れどしぶとい枝の柿哉　（文化十三年七番日記）
木がらしの梢にしやんと澁柿の
　下手律義にもしぐれける哉　（文化十三年七番日記）
椎柴の細きけぶりをそよ〳〵と
　しぐれの降をあしらへる哉　（文化十三年七番日記）
もり桶に月もちら〳〵〳〵と
　さすと思へば又時雨けり　（文化十三年七番日記）

むら時雨度重れば澁柿の
　しぶ〳〵色に出にける哉（文化十三年七番日記）

雪霜の降となけれど老樂の
　つむりの雪の目に見ゆる哉（文化十三年七番日記）

たゞ頼め〳〵迚しら雪の
　佛もとけて見せ給ひけり（文化十三年七番日記）

いくよさも待にまちたる初雪の
　ふれば降迚寒い庵哉（文化十三年七番日記）

大空の月をくもらすうき雲は
　うき世の煤のなりやしぬらん（文化十三年七番日記）

煤ほこりはかで此世を古家に
　只身に添ふは月日なりけり（文化十三年七番日記）

慾あかの汚れ込んだるぼんの凹
　心のおくの煤もはかなん（文化十三年七番日記）

大空の月にさからふうき雲は
　うき世の埃なりやしぬらん（文化十三年七番日記）

挑灯と釣鐘ならば大としの
　夜はやみ雲に目出度かるらん（文化十四年七番日記）

軒つゞくつらさも馴れて行く年の
　うきを三十日も入相の鐘（文化十五年七番日記）

あちへむきこちへねぢれて山道の
　曲りなりなる年の暮かな（文化十五年七番日記）

榾の火の燃行く先に蟻の身の
　ほどをもしらで遊びつる哉（文政二年句帖）

和詩

降雪にきのふもけふも呉竹の
　世にうとましき山住居哉（文政二年句帖）

世に住めば手をすり足を摺古木に
　してかけ廻る年の暮かな（文政二年句帖）

よは衣打音さへもきれ〳〵に
　きえても寒く吹あらし哉（文政三年句帖）

木がらしにほた〳〵煤のふる家は
　見かけの外の暖氣なりけり　（文政三年句帖）

二葉三葉四葉頃より置露の
　世話がひもなく枯るゝ草哉　（文政四年句帖）

掛乞の影さへ見ればかくれ笠
　かりの此世のせつなかりけり　（文政五年九番日記）

借金の淵におのれとしづみつゝ
　うき世をうらむとしの暮哉　（文政五年九番日記）

久かたの人目ばかりは有明の
　つき〴〵しさの空念佛かな　（文政五年九番日記）

人目にはことの心も有明の
　つくり聲なるうそ念佛哉　（文政五年九番日記）

木曾おろし雪吹盡す青空の
　はづれにけぶる淺間山哉　（文政六年九番日記）

降り迯て太山がくれの夕立の
　雨おし分て登る月哉　（文政六年九番日記）

老の身は寒さまけして何ひとつ
　まなばぬ窓に雪はつみつゝ　（文政七年九番日記）

招かずもよばずもつひに大霜に
　枯るゝを急ぐむら尾花哉　（文政七年九番日記）

かくれ蓑よく着るとても老樂の
　かしらの雪のかくれやはする　（俳諧歌帖）

雜の部

東本願寺上棟

やれ頼め〳〵とや棟上の
　大工の尻を拜みつる哉　（文化七年七番日記）

必よよそへふれるな門雀
　朝から米のない庵ぞと　（文化七年七番日記）

狂歌

門雀をり〳〵小首かたぶけて
　艮のありかを考るかな　（文化七年七番日記）

手取鍋おのれが口はさし出たぞ
ざう炊たくと人にかたるな（文化七年七番日記）

山風にとられし家を詠れば
あはう〱と鳴く鳥かな（文化七年七番日記）

世の中をすくふ心や山伏の
祈るかひある夕立の空（文化七年七番日記）

鳩山で切つてはなした鷹はそれ
とんだなんぎのきたる大進（文化八年七番日記）

ゐいやつと人に生れて山道の
曲りくねつて世をわたる哉（文化八年七番日記）

歯がぬけてあなた頼むもあもあみだ
あもあみだ佛あもだ佛哉（文化八年七番日記）

手を伸し〱つゝいけ花の
花の身振りを仕るかな（文化八年七番日記）

わり竹のさゝら三八宿かして
貧乏神をすりつぶすかな（文化八年七番日記）

手をそらし〱つゝいけ花の
はなの身ぶりを仕る哉（文化九年我春集）

ねがはくは松に生れてぬく〱と
かぶつて寐たき峰の白雲（文化九年七番日記）

双樹佛

折々のなむあみだ佛聞しりて
米をねだりしむら雀哉（文化九年七番日記）

入相のかねとばかりに聞すへて
我身の暮をしる人ぞなき（文化九年株番）

いかにせんきのふも過ぬけふも暮
翌しらぬ身の入相のかね（文化九年株番）

聞よりも心に思ひ身に修せば
いつか菩提に入相の鐘（文化九年株番）

百文の錢を二ッに折介の
袖を引たる五十ざう哉（文化九年株番）

鼻長く色白うして耳たれて
　舌をべろりと出した象哉　（文化九年株番）

けふも又きのふのころよ足引の
　病の責やあはれいつ迄　（文化十年七番日記）

くるしさよ又もきのふの今ごろと
　巡り車のわらはやみ哉　（文化十年七番日記）

かくばかり重き病や小車の
　私のみのなやみなるらん　（文化十年七番日記）

椌木のあな口をしき老の身は
　法の薪の折れ殘りかな　（文化十年七番日記）

月代の中ずり程に山やけて
　山の額のうつくしき哉　（文化十年七番日記）

大あらし吹にけらしな風の神の
　かんにん袋きれやしぬらん　（文化十年七番日記）

十重廿重繩は張るともあかねさる
　隙行く駒のとまるものかは　（文化十年七番日記）

前の世に命かりてや狩人の
　罠を巡れる業の鳥哉　（文化十年七番日記）

かくれみのかくれぬものは世の中の
　人の心の鬼にぞありける　（文化十年七番日記）

いくばくのなげきこりつむ小車の
　下り坂なる我よはひ哉　（文化十年七番日記）

世の中はかくてもへけれぬるてふの
　夢見てばかり身をすごす哉　（文化十年七番日記）

ながらへる印ばかりの細けぶり
　立田のおくのおくの庵哉　（文化十一年七番日記）

活て居る〳〵とて細けぶり
　立田のおくのおくの菴哉　（文化十一年七番日記）

雛程に見えし實生もいつの間に
　空をつらぬく青によろり哉　（文化十一年七番日記）

御佛の御山は鳩も珠數かけて
　としより來いと鳴廻るなり　（文化十一年七番日記）

けふはけふ翌はあす迚たく柴の
　細きけぶりのたのもしき哉　（文化十一年七番日記）

書出しの紙屋川原の川風に
　てん〳〵舞をしたるかり金　（文化十一年七番日記）

石なごのおちくる玉のたま〳〵に
　とると思へばやるせなの世や　（文化十一年七番日記）

石なごのおちくる玉の一二三四
　五つ六七つやかましの世や　（文化十二年七番日記）

一二三四の數をあらそふ石なごの
　たま〳〵とるもやるせなの世や　（文化十二年七番日記）

かち〳〵とかちを爭ふ石なごの
　たま〳〵とるもやるせなの世や　（文化十三年七番日記）

おくり風送り狼人鬼は
　なにしにあらんかゝる世の中　（文化十三年七番日記）

猫よりも幽（マヽ）みめよし〳〵と
　いへば鼬の手をかざす哉　（文化十四年七番日記）

子に迷ふ闇の夜終大聲に
　なくや鳥のかはい〳〵と　（文化十五年七番日記）

生けるもの殺すは五分の魂の
　蟻の思ひや天に通ぜん　（文政二年句帖）

一寸の此の身も五分の魂と
　鎌ふりあげてむかふ虫かな　（文政二年句帖）

老の坂上りつめたる小車の
　迹へもどれる月日をもがな　（文政二年句帖）

老の身はあの世へちかの汐竈の
　消のけぶりになるばかり哉　（文政二年句帖）

心をばさらり〳〵とさゝ竹の
　世を曲らずに煤さゝらなん　（文政二年句帖）

ながらへて歸らん事も白河の
　關をはる〴〵越る身なれば　（文政二年句帖）

君が代の流に住めばたつ鳥の
　跡はいよ〳〵すみ田川かな　（文政二年句帖）

假初の咄も人を襟もとの
　うき世の中も住なるゝ哉　（文政二年句帖）

松の吹をれたるを

千代八千代あた欲らしき松の木を
　やにはに折し大あらし哉　（文政三年句帖）

大笑ひとつと／＼と腹すじを
　夜の咄もかたみとぞなる　（文政三年句帖）

佛のてうちあはゝを思ひ寐の
　眠るひまさに夢を見る哉　（文政四年句帖）

赤鬼の心かくしてくれ竹の
　世にうつくしき墨衣かな　（文政五年九番日記）

世の中にあるべかゝりに蓬生の
　曲り形りにも古郷の原　（文政五年九番日記）

大空の色にならひて世の中は
　淺黄／＼と渡るべら也　（文政五年九番日記）

白髪をそり捨し身はうば玉の
　夜の衣をかぶりてぞ寢る　（文政五年九番日記）

欲垢も芹のたしになれ衣
　膝のあたりに光りさすのは　（文政五年九番日記）

欲あかもしん／＼からぞよごれ衣
　膝のあたりの光りけるかな　（文政五年九番日記）

追風にうしろ任せてあみだ笠
　おのれと西へ吹れ行く也　（文政五年九番日記）

かりのある人とし見ればかくれ笠
　身をきるよりはせつなかりけり　（文政五年九番日記）

肌衣のぬひ目かくれの古虱
　さし出て人に耻をかゝすな　（文政五年九番日記）

よしやよしなくともあしを三文も
　かりの此世はくるしかりけり　（文政五年九番日記）

おろかさになす事しらで人の物を
　かりの此身はかくれ笠哉　（文政五年九番日記）

借金の淵にしづむな〳〵と
なみ〳〵ならぬ敎へなりけり　（文政五年九番日記）

おろかさになす事なくて人の物を
負ふ程重き罪はあらなん　（文政五年九番日記）

田畠おこしこくられし大水の
迹から出るけすのちゐ哉　（文政五年九番日記）

かりの世の書(マヽ)はふみにふむ迚も
いかでゐん魔の帳はきえなん　（文政五年九番日記）

羽生へし迚もおそれはありの身の
鳥の嘴をばのがれざらなん　（文政五年九番日記）

むごらしや物もいはれぬ物の(マヽ)ものを
とりても夢の世は古間人　（文政五年九番日記）

別れては又逢ふことも白川の
關を越え行く老の旅哉　（文政五年九番日記）

今が今迄も念佛の細聲の
つひに今は今になる哉　（文政五年九番日記）

木のきれの竹のおのれといはれても
たきのこされし身の冥加哉　（文政五年九番日記）

君が代のめぐみあふぎて立鳥の
迹を濁さね角田川哉　（文政五年九番日記）

さなきだになみ〳〵ならぬおろかさに
なをおろかさをますしら髮哉　（文政五年九番日記）

母なしがまねすきやらん行足の
迹へ心を引間野の原　（文政六年九番日記）

こちあなち風のまに〳〵吹けばとぶ
塵の身一ッふり安哉　（文政六年九番日記）

西東北南と塵の身は
風のまに〳〵とび歩く哉　（文政六年九番日記）

石はこびなげきこりつゝしめし野の
人の油にひかるしろ哉　（文政六年九番日記）

つひに行汐の御國はかう〳〵と
西山さして急ぐ月かな　（文政六年九番日記）

日〳〵に鳴く鳥は我を鳥邊野の
　けぶりの立日待かねるらん　（文政六年九番日記）

むら烏さ鳴そ我を鳥邊野の
　けぶりの立日しばし待たなん　（文政六年九番日記）

降雪にきのふもけふもくれ竹の
　世にうとましき山ずまひ哉　（文政七年九番日記）

老らくの行衛をたのむ細杖の
　つく〳〵寒き別道哉　（文政七年九番日記）

夢の世の眠り所はともかくも
　かく（マヽ）な家の曲り形哉　（文政七年九番日記）

雨もよひ日も黒姫の山のこしに
　帶たゝしくも巡る雲哉　（文政七年九番日記）

我みたのゆづりの狀をくひ裂て
　世を故郷の人は鬼ども　（文政七年九番日記）

前の世にまきてし種かはゝき木の
　あるにもあらぬ我身なりけり　（俳諧歌帖）

信濃路や御山の坂の馬さくり
　さくり〳〵と木の實ふむなり　（俳諧歌帖）

一茶連句集成

祭らねば佗と答る川太良　歩

初旅立に母の敎訓　茶

毒立の第一番は祇園町　歩

拾ふた文の內に似せ金　茶

無念さやあの畜生をいかゞせん　歩

今夜討死致セ者共　茶

須磨の月松の霏込を驚カス　歩

砂吹まくる秋の初風　茶

ナ芋買て辨當喰ふ供廻り　ヽ

塗丸盃に黄粉ぞく〱　歩

正月が來た家もあり歳の暮　茶

着物の袴仕立よろこぶ　歩

節ヶ二本もて垣を繕ふ花盛り　ヽ

在番城の日の長き春　茶

遺篇　寛政年中

前卷と同一の斷簡中に見えるが、名殘の裏三句目から以下が鉠けて居て歌仙には三句不足してゐる。一茶初期の連句であると推定されるが、雨吟の作者既醉は下總吉岡の人らしい。同國には早く行脚して知人のあつた一茶の事だから、此の卷も下總で行つたものゝ如く考察される。

題畫象浮　下總吉岡

涼しさの浪こゝもとに盃畫哉　既醉

疊にかほる合歡の上風　一茶

旅衣草臥さする夕暮に　ヽ

引ちぎらす牛涎しつゝ　醉

有明の森はくらき里つゞき　ヽ

鐘の音遠く礎折く〱　茶

ウ肌寒に淡茶振舞へ坊が妻　醉

書籍ニ倦し欠ビ十程　茶

謎一つ終解かねて上に成る　醉

美レ娘戀にうとさよ　茶

商ひも仝ッ面なるうはき同士　酔
　柿の木多き植(上カ)田松本　茶
すぎはひの煙草を葉とる椽の月　酔
　故免にもれて白髪の秋　茶
さ(相良和布)も塩垂増ル雨つゞき　酔
　鳥居に鶯の日哉一日　茶
稽古場の築(マヽ)花の片明り　酔
　帳面づらを試る筆　仝
ナ
出替りの歳ゝの人新らしき　茶
　皿屋敷ほど秘藏スル皿　酔
石上古きを以て千家流　茶
　身を雲水の爰南部領　酔
粟飯を君にすゝめて涙ぐみ　茶
　むつくり雪の竹はしる音　酔
夜を深み掛にと掛けし狐艮　茶
　持あぐみたる下戸の大膽　酔
咎もなき帳の小袖引裂て　茶
　日取りにつらき黒日凶會日　酔
氏神の玉籬作る秋の月　茶
　勅使盻けにふれる熊綱　酔
ナウ
袷はなり着つゝ馴にし庄右衛門　茶
　咽がかはくか筒井づゝ見る　酔
補陀落やくまの路晕る馬埃り　茶

逵篇　寛政年中

寛政七年正月道後の十六日櫻を見に行く途次、伊豫松山の樗堂亭に立寄つてゐるが、此の両吟は冬の發句なのでそれより以前の作である。『三韓人』に樗堂の死を悼んでゐるので、『寛政紀行』の前にも必ず對坐なして居よう。一茶の連句として初期のものゝ一つである。

煙して長閑けき冬よ山の家　樗堂
　木の葉ちら〳〵晝頃の月　一茶

さゝ濁り魚とる水に竹さして　仝
人見えて人の立かゝるなり　堂
べん〱と雛値切りし宵の内　仝
ほろつき出たり雨の春風　茶
花菫野火のちよろ〱もへしきり　堂
忘れたことの袂さがして　茶
落つきの秋も涼しき別座敷　仝
何ともなしにたゞ痩る露　堂
大かたの祭月見も過けらし　仝
門にもたれて雲をながむる　茶
山越のやくそく來べき鐘の聲　堂
折おもしろの夜の村雨　茶
四方から螢とび込む宿なれや　仝
二人が二人足を投出し　仝
地藏切るあたりは花の散すまし　仝
日の入るまでに鶯の啼く　堂
今ン日は寒たけたちし空の色　仝
道さまたげの薪上る船　茶

こそ〱と奉行の鎗にかくれたり　仝
扇ひらけばあられぱらつく　堂
きぬ〱の顏どひやうしに明過て　仝
階子の陰に物思ひ居る　茶
雜汁に下部の瞎の秋の風　仝
醍醐は今に蚊の多き月　堂
羽織着てしばし見送る村尾花　仝
むつ〱腹は立じまふたり　茶
窓のかた鼻の先まで日のさして　仝
だぶり〱と汐のみち來る　堂
高みより丸太轉ばす人だかり　仝
いふほどの事おかしかりけり　茶
したゝかな豆の數見る年暮て　仝
寐て草臥し花の古鄕　堂
なつかしく諷ふ酒屋の春造り　仝
もつと降れかし二ン月の雪　茶

旅拾遺　寛政七年

寛政三年江戸を立つてその後永く西國の旅にあつた一茶は、同七年の春、讃岐の觀音寺より大坂に戻つて來たが、京都の闌更をその芭蕉堂に訪問して此の歌仙を催したのである。作者は闌更の一門ばかりで得終とあるのが闌更の妻である。後に南無庵の文臺を立てゝ女宗匠となつた得終尼と、一茶の同席してゐる事は史的興味をそゝる。

芭蕉堂之會

月うつる我顔過ぬほとゝぎす　闌更
風こゝちよき入梅晴の道　亞堂
わら薄く土器燒が軒垂て　白黛
思ひよらざる竿の細ぬの　百爾
朝まだき小開きまゝに霜滿る　芦翁
楠伐たをす山とゞろ也　月峰

ウ
頭に青砥獨はあぐらして　堂
舞の袂を亂るともし火　更
松風の中に祭のおこなはれ　芦涯
鋼なき波の西あかき空　黛
マタロスが古郷を泣く明がたに　堂
淋しく裂て栢榴こぼるゝ　黛
秋時雨月のかさぎの連哥堂　堂
はた〲飛て髭匂ふ也　黛
駕借れば駕の殘暑のたゞならね　堂
鳥非時は諏訪による名か　黛
門口の花に煙〻は燒うなぎ　堂
二月は俗にありし人の世　黛

二
戀衣春の御秡(三)にぬれ初て　涯
夕とゞろきは我を待らん　得終
呉竹の窓のさゝがに風吹けば　堂
居合刀のしづかならざる　更
母親の給仕おそるゝ八ッさがり　緗虎
死ナでもどりし舟のともづな　涯

葉にもならぬ防風のひよろ〳〵と　終
　盆山によき石起し見る　爾
(匂)曲緣なき人のゆづりし古屋敷　涯
　國三良が年忌つとむる　芦
明からぬ月に燈ならべ添へ　更
　車止メし犬かひの秋　涯
ナウ
家つとの紅葉ゞ折らんとばかりに　芦
　女翁の酒さめぬ顔　更
夜を込て疊一朱三の亂聲　堂
　橋を過れば鷄の羽たゝく　虎
岫に入る雲しづかなる花見へて　涯
　なへは天氣になりすます春　筆

旅拾遺　寛政七年

其日庵尺艾の大坂旅寓で行つた連句である。尺艾は「芭蕉翁古式之俳諧」の著者でもと下總の人である。江戸で立机して大坂に行き一派の俳諧を弘通してゐる際、たま〳〵一茶と逅邂したが、間もなく東西に袂を分つ事になつたので「浪華に足留むるあり、東に赴くあり」と互ひに行雲流水の境涯を憐んで、此の一卷を催したのであらう。尺艾は尾花澤の清風から蕉門俳諧を傳授された芝蘭の系統である。

浪華に足を留ムアリ東に赴クアリ、共に是雲水

羅の薄きぞ旅のかねてより　尺艾
　身は凉風に任せぬる月　一茶
湖に天つむら鴈かけ落て　東波
　莚につたふ陶の露　雨來
なぐさみにしころを敲く泊客　爾掌
　都馴しを手がら皃なる　鯉麥
寒梅も添へて配るいせごよみ　好ゝ
　やゝ春近く駒もいなゝく　雅笑
帘しかすが富る古家に　東耆
　選ミ當たる嫁はものかは　壺缺

さゝやきの果は棲追に月くらく　　一葉
　黄壁（檗）山の雨のもみぢ葉　　登舸
茸漬来たり古郷の初だより　　春木
　無我につどへる剛毅木訥　　静嘉
陽炎のあはき棺や埋むらん　　久一
　ほろ〳〵雉も曇る夕ベに　　如柳
共ゆふべ花の吹雪の笠に来て　　盛雅
　衣にしのべる宦人の大（太）刀　　葉司
内くもり漉てふ水のさゝら波　　夏雄
　宮ちいさくも浦の名をよぶ　　春更
松一木新羅の昔とゞめたり　　柳夫
　總角も共にうたふ詩　　来屯
濃髭やすゞりの海にひたるらん　　禮王
　七野を巡る白雨の雲　　秋卜
ものおもふ身を難面も蚊のせゝる　　米堂
　待夜のふすま潜るともし火　　敏馬
此郷に長と見へたる棟造り　　一貫
　津浪の人に薬ほどこす　　春魯
さいはいは空にも光ル三日の月　　其跡
　虫の戻に萩や手折る　　梅船
賤が秋さはつて通る風も吹　　雅席
　笛をもるゝ妹がそぎ袖　　之園
言よらん鞠相息せし文使　　魯夫
　夕日ちら〳〵雨後の二月　　初丸
咲ば匂ひにほへば花の世にみちて　　栢後
　東西南北正風の春　　執筆

旅拾遺　寛政七年

一茶が大坂に入ると、すぐ升六の黄花庵に投じたので、『寛政紀行』に三月十七日「夜のほのぐと明比、大坂に来る、黄花庵を主とす」と記してある。此の歌仙に一茶房亞堂とあるのは他に所見のない別号ないで、『旅拾遺』の一茶の著なる事に心附く者がなかつたのである。升六は大坂に正風道場を開き『冬の日註解』の著者として知られてゐる。

俳諧之連歌

天廣く地ひろく秋もゆく秋ぞ　一茶房 亞堂
人おのづから胸の有明　孚舟
北あらし百日うたふ臼すへて　升六
追へばはら〳〵家雞の二番子　仙所
下毛の花まだ殘る暮がてに　井眉
無事をとゞくる又傳手の狀　蘭戸
ウ
何するもたのみは眼鏡一ツにて　莵江
しぐるゝ窓に消炭を吹　六
土器の味噌に事足るしづかさは　舟
鼻つまむのもしれぬくら闇　眉
約束の琴は狐火かきならし　所
所も爰はいなのさゝ原　江
朝の月露なきものゝあらばこそ　戸
後鬼も角折此ごろの秋　舟
牛賭のすまひに牛を棒にふる　六
噓すれば淡雪の散る　所
たわし根の花にいくらの節ひきて　眉

榾一本に三代の春　戸
二
甚月の佛事に布を織おろし　江
嫁入すゝめる邪に泣く　六
戀死ナば敵うらみん魂ぞとも　舟
あはれ(汨)泪羅の霜の明暮　眉
骨柴の骨にこたふる斧うちて　所
酒泥房とよし云はゞいへ　江
ざは〳〵と御輿の迹の人崩れ　戸
舟にせり込ム橋本の月　舟
錢なくて懷寒き秋なれや　六
豆腐漉たる繩竿の絹　所
馳追ふ瓢に暮の風聞て　眉
くわらりと覺る本來の夢　戸
二ウ
傾城に數の家藏賣はたし　江
戀は曲もの今もむかしも　六
調布の臼にはおしきふしはかせ　舟
小石〳〵の水むせぶ也　眉
東雲の花にしばなく山鴉　所

きさらぎ半三月の來る　筆

旅拾遺　寛政七年

推敲亭は京都の書肆菊舎其成で『中興六家集』その他の俳書を出板してゐる。當時は俳書の出板元が諸國俳人の文音所になつて居たので、一茶もその店で知人の消息に接した事であらう。前文の「推敲亭に越のたよりをきく」といふのはその意味である。此の連句は歌仙の表六句で了つてゐる。

推敲亭に越のたよりをきく

しら〳〵と嘘つく秋の寒哉　壺仙
　雨はきのふにふり替る露　其成
月見すと竹分登ル客引て　石蘭
　笙もちとなる宮童也　北花
綾衣の袂の鈴にあらし吹　斗醉
　夏來にけらしいつく島山　ア堂

右表六唫

遺篇　寛政七年

尺艾とは惜別の俳諧を行つたが、「旅拾遺」の出板などで江戸へ立つのが延引して再び此の兩吟を行つたのであらう。『枯尾花の』季から考へて十月になつての作である。或は芭蕉忌を營んで後であるかも知れない。脇句に時雨をあしらつて居るので、殊にさうらしく思はれる。

分け入れば我に音あり枯尾花　尺艾
　時雨のほしき夕がたの月　一茶
たゝらふむ南隣に家建て　艾
　箕に一ぱいの汁の實を買ふ　茶
低くとぶ蝶〳〵一つ又ひとつ　艾
　苗代水のめぐるむら竹　茶
なつかしき草餅匂ふ朝もよひ　仝
　行基菩薩と徳利やくなり　艾

松風に腹を立ざる工夫して　茶
　三才駒に三度鞍おく　艾
たひら雪門もあつぱれ名所なり　茶
　山茶花寒く御祓讀む聲　艾
百番を謡に覺ゆる月の頃　仝
　ことし煙草のはけ口を問ふ　茶
北窓をあければ籠の鶉啼て　艾
　氣味よく空の晴るゝ朔日　茶
うつかりと鞍馬の花を見上つゝ　艾
　薄べり二枚菫まきこむ　茶
袷着る身の麗かをうらやまれ　艾
　鼻紙ねぢて火をあふぐ也　茶
講釋のなかばに木曾の物語　艾
　螢したゝか槙にはなして　茶
夏もはやはら〳〵雨にしのび合ひ　艾
　憎きしやくりの今にやまざる　茶
うき人に逢ばと袖を引かぶり　茶
　いつも上戸の恨がちなる　艾
宵の月ぱち〳〵竹のもえかゝる　茶
　八ツから鉦うつ露の深きに　艾
重ねては柹盗むなと笑ひけり　茶
　誰も見かへる棟の上捻　艾
湯の山の日は立易き二巡り　仝
　扇とともに蜘流しやる　茶
陽炎のはじめ終りを歌によみ　艾
　寺小さくも長閑なりけり　茶
元祿にかはらぬ花の夜の明て　仝
　御東より北より吹く　艾

遺篇

寛政十二年

信濃高井野の久保田家は兎園・春畊・五郁と三代、一茶をその家に泊めてよく待遇したので、父の終焉日記の草稿その他を今に傳來してゐる。兎園は寛政十二年五月一日歿したので、『隨齋筆紀』にも命日として此の句を記して

ある。成布はその女、春畊は成布の聟である。阜鳥は同家の僕、稲長は堀の内の人梨本氏である。作者名は一順より記してないが、舉句を執筆とすれば、以下一順づゝで一歌仙となる。兎園の追善興行でないとも疑はれるが、脇句がその躰をなして居ないので生前の興行であらう。

我のみかかゝる櫻の朝朗　兎園
　東は胡蝶西は茶の水　春畊
晒布百間ばかり風吹て　一茶
　草鞋ながら兒を愛すなり　成布
月の出る山も最一つあれかしな　阜鳥
　ふくら雀も祝へ稲の穗　畊
露時雨小ぐらき寺も住なれて　稲長
　寒い〳〵と觸れる鐵棒
鎌倉の代からはびこる大榎
　行徳塩の荷がつゞく也
釣瓶からがぶり〳〵と水を汲み
　螢來よ〳〵別れ三味線
笹百合に引隱したる小脇差
　宮司が門の明けばなしなる
湖のとろりと霞む晝の月
　花見よ〳〵と笠をあづかる
名物の苴と蜊を一皿に
　背戸のくぼみへ家鴨追こむ
夕番のはら〳〵雪の嬉しくて
　めつたむしやうに御鈴鳴るなり
酒さめよ醉よと植る今年竹
　蚊屋釣すてゝ越る奈良坂
うき人の繩ゆるさるゝ鐘の聲
　忍ぶためとて飴賣になる
貝殼のむさしも由良の湊町
　梓の顏にうつる夕虹
一と休み竹の子笠を尻に敷き
　ばさり〳〵と柳ちる也
布市のさはぎも過し月の出に

秋の柿を馬に振廻ふ
象潟を箸でをしへる峠茶屋
　手形二枚に石を置せる
入相の鐘の嬉しく鳴程に
　乳母の里から歸る雁がね
咲く花に夜も一入明るくて
　縄手につゞく菫たんほゝ

鹿嶋集　文化元年

芭蕉の『鹿島詣』に根本寺に宿して「月はやし」の句がある。寛保時代、葉之坊の發企でその句碑が根本寺中に建立されたが、柑翠の『鹿島集』にその句によつて脇起を行ひ一茶・成美・浙江と歌仙一卷にまとめたものを載せてある。『鹿嶋集』は同年出板の上下二冊本である。こゝには遺篇に掲ぐるものを本文としたのである。

脇起之俳諧

月はやし梢は雨をもちながら　芭蕉
　露のこゝろの物につきけり　柑翠
秋風に小さき臼を吹すらむ　一茶
　唇ぬらす朝のしほ賣　浙江
十日居る宿に師走の梅咲て　成美
　木履をはけば川がきこゆる　茶
ウ 經木たくあしたは過て鳴雀　翠
　小磯の人と袴かり合　美
涼しさに竹見る枕たくむ也　江
　星くれそめて琴をかつぎに　茶
つぶ〳〵と錢に涙のかゝるかな　江
　しばし里ある祭とぞいふ　美
只居れば薙坊と名を付て　茶
　月は有明山鳩も來よ　江
牛糞の勿來の關は跡もなし　翠
　蕗をかぶせて配る粟酒　美
花咲てむかしひいきを憎むらん　江

二
くせまひ舞が春もなくなる　翠
へた〳〵と壁うち付て假祝ひ　茶
はなしもなくて見ゆる利根川　江
四十には五つもたらぬ戀をして　美
誰が赤味噌の時雨そめけむ　茶
冬椿伊賀の茶飯に又あひし　翠
やがて屛風にかなふ山伏　美
生て來ぬ首途〳〵の見事也　江
鐵槌おとす黄鳥の影　翠
正月の烟をたつる巫女が家　茶
茉苡とりに舟を漕つゝ　江
目も鼻もめづらしくなる十六夜に　美
酒田ときくもやゝ寒きなり　茶
御佛の茶をまきつけし籔の先　翠
觀世こよりのいつをいつまで　美
鯛召せとむかし秤を引かたげ　江
霜も別れはかろき晴くち　翠
青疊寐て見る花を植にけり　茶
袷羽折にうつる獨活の香　江

遺篇　文化二年

一茶の門人は悉く信濃の人で、師一茶の連句をそれ〴〵に手抄して置いたので、淺野の文虎・中野の梅塵の抄錄したものなど孰れも寫本で行はれてゐる。俳諧寺二世を稱した可秋の『一茶一代全集』の連句は大部分それから拔抄したのである。本集に收めたもの亦同様である。此の半歌仙は前文に「文化二年三月於二隨齋一」とあるように成美亭の俳諧を手錄したので、『旅日記』の同年三月廿七日の記に「雨　隨齋出莚」とあるのと一致する。

文化二年三月於二隨齋一

里ふるや小山ひとつも雉の住ム　夜白
春ふたつこす雨の松苗　成美
海苔柴の隱れぬほどに汐さして　一茶

細き戸口も月はありけり　恒丸
竹取の畫を見る秋も暮かゝり　美
露の木の芽の何に延るぞ　莚志
ウ淋しさの鼠の顔に日のあたる　浙江
杵かりて來て置忘れたり　白
薄雪の松の粟津と降へだて　丸
瀧口どのゝ聲にかくるゝ　茶
淺藪も鈴さへ鳴れば神ごゝろ　志
わかき春とて鷄も殺さず　美
霞たつ礒家に觸るゝ遊事　白
手足へ花のはら〳〵とちる　江
旅烏うそ〳〵寒くなるまゝに　茶
菩提子つなぐ可兒の堂守　丸
燒餅を臍にあてたる月明て　美
くれ（ゝ）の風も窓に吹こむ　志

遺篇　文化二年

成美亭の俳諧は『旅日記』で見ると、文化二年正月から月々七の日を定例日として行はれ、一茶は大概出席して居るが、此の兩吟は定例の俳諧日に卷いたのでなく、平日成美と對坐して試みたものであらう。正月二十七日隨齋會の當日一茶は蛙の句をしきりに作つて居るので、その席で蛙を題詠した事が推察されるから、此の歌仙も成美の蛙の發句なので、或は當日の作かとも思はれない事はないが、他に旁證がないので、その日とは別の兩吟であると見て置きたい。

蛙なくそば迄あさる雀かな　成美
春めくものに門で薪割る　一茶
旅人の小雨に霞む顔見えて　美
かさごの安き浦のおもむき　茶
階子借す騷ぎも過ぎて小夜の月　美
木履をはけばきり〳〵す鳴ク　茶
ウ清澄の堂の油の秋も盡　美
肱一尺の總や染らん　茶

戻りには首に引まく小鳥罠　美
　行灯めぐりて春を待つとか　茶
粕汁にむせかへる程泣出して　美
　啌つかぬ木を立てし浅茅生　茶
する事の何にもなさに百合の咲ク　美
　けたゝましさよ入梅の夕月　茶
筆とりの大津の長に名を問れ　美
　鈴ふらぬ日ぞ嬉しかりける　茶
死ぬ事のなくばなほさら春の花　美
　わり竹しめす水の山吹　茶

二
菅笠を着ればすぐさま東風の吹ク　ヽ
　三輪の餅屋に見知られにけり　美
檜さす彌勒祭の鐘鳴りて　茶
　濡て菖蒲を人跡にふく　美
二の宮の御意そむかねど先ッ泪　茶
　射散らす鏑矢拾ひ人もなし　美
高砂は榎の聲もなつかしく　茶
　寺にも寐たる細き商ひ　美
名月の一年増しに寒うなり　茶
　松葉にまじるはらゝごの塩　美
萩の露目（マヽ）へさし消やすおもしろさ　茶
　鹿嶋の舟にかるたうつらん　美

ナ
方〳〵に爼板たゝく睦月とて　茶
　淡雪そふる紙子浪人　美
五六本寝て見る花の目利せん　茶
　鋸借りに扉たゝく歟　美
初霜の瓶の中迄夜は明て　茶
　もろこし舟に身をたとへけり　美

遺篇　文化二年

成美亭の定例俳諧日の歌仙である。『旅日記』の八月を見ると「廿七日　晴　随斎出莚」と記してある。閏年なので八月が二ヶ月あり、その閏八月の方に出てゐる。連衆十一人の盛會で一茶と仲の好い一瓢や恒丸が顔を揃へてゐ

ろ。成美の聲望の高かつた事はこれで思ひ合はされろし、發句の作者となつた一茶の力量を認められてゐたことも推測されろ。二の裏五句目成美の附句は『一代全集』にも「………」となつて缺けてゐる。

文化二年閏八月廿七日

秋の雨こぼれやすさよ片山家　一茶
雀鰊ふむ萩の有明　成美
一熟のうしろはとくに鐘ついて　浙江
煙硝こづくまでの事知り　梅壽
糸遊の小牛ひとつを大事がり　太嶠
茶屑たゝけば梅も落ち込ム　蓬芸
岡寺のきさらぎ過る人群て　恒丸
ほつれたまゝの鎧着て見る　一瓢
茶の花も東雲ごろの戀草に　素桃
うれしい時は壁たゝくなり　茶
ものいはぬ事も馴れたる小百日　知梁
菅笠こがす神のともし火　江
人並に老を隱して汁粉くふ　美
春の寒さは竹植てこそ　嶠
小雨降る在所に花の唉初て　李臺
舟こぐ影もおぼろげの月　丸
仲光をいさめかねたるしらま弓　壽
又このごろの風の椋鳥　桃
山越は袴着て來る坊主衆　芸
ひだるさ見せぬ歌つゞりたき　梁
歸り花唉かぬ枝より哀にて　瓢
古里しのぶけふのひぢ笠　臺
（一句闕）　美
誰かれまでも化ものゝ番　壽
行く人を三升樽でまねく也　茶
御輿の皷遠き五月雨　梁
三吉野の京は藪蚊もうれしくて　茶
前後の釜に溢る白粥　梁
綱つけてわらはを這す今日の月　茶

虫の音いろの亂れつくまで　梁
十
風吹かばふけとて露の假住居　茶
もとの土橋が石の繼橋　梁
御山に盲の杖を納めつゝ　茶
翌は必ず午の朔日　梁
箸紙をまたの花見にあづからん　茶
みな手を出す袖の黄鳥　梁

遺篇　文化二年

貧窮した一茶は雨にさす可き傘一本持つて居なかつたと見える。びしよ濡れになつて成美の家に來たので古傘に「破れても」の發句を添へてあたへたのであらう。その場の即興に一茶が脇をつけ、折からそこへ浙江が來合はせて一巻となつたと見てもよいし、發句と連句とは別々の日として置いてもよい。浙江は小野氏、關宿の人である。

雨降りける日、一茶坊に古傘を
おくるとて
破れてもみかさとまうせ木下闇　成美
蚊やり〳〵に萩の初花　一茶
名どころの水をなめ知る人とねて　美
舟をよばりにまゐる琵琶持　茶
瘦骨に欠たる月をうち詠め　美
杜の孔のうそさむうなる　茶
ウ
そろ〳〵と吳服祭の小侍　茶
雫ながらに松の木をひく　美
垢枕あはれ今年も暮にけり　茶
手を打つたびに跡しさる君　浙江
太ゝの小判をこぼす飯の上　美
涼しく見ゆるみちのくの空　茶
古家の鳩啼くたびにこけかゝる　江
轆轤ひく手にかゝる夕月　美
柿の澁ぬけよ〳〵と哥をよみ　茶
鳫のよこぎる海の小さき　江
花の陰鎧ながらにもの書て　美

世は陽炎のへんてつもなし　茶
蛤の口にひろがる小塩山　江
扇に顔も見せぬ蜷川　美
盗人は今をなごりの鐘鳴りて　茶
車にまじる門の山茶花　江
綾絹の袖に佛の油掛　美
誰が嫉みに星は飛らん　茶
二ツ三ツ壁のやぶれも世間向　江
吉野の坊につくる栗餅　美
雀なく今朝はずらりと衣更　茶
牛のこゝろの雨にがつくり　江
白木槿月の頃とて凋みけり　美
踊手向る市姫の宮　茶
秋はたゞ箸捨た日も淋しくて　江
鍋鶴あそぶ栗橋の宿　美
竹齋に臍くり金をまゐらせん　茶
素湯にもむせる初花の陰　江
芽柳を指さして泣く翠簾の間　美
忘れ貝にも春はたちけり　茶

遺篇　文化二年

『旅日記』によると一茶の成美亭俳諧に出席した中で十月は、文化元・二の兩年で三年は下總の布川、四年は日附を缺くので、同二年の作として置く。成美の附句に「日本紀をひねくり廻す癖ありて」は『方言雜集』の考證に記紀を引用したりして居る一茶に、さうした一面の癖があるのを揶揄したのだと見れば可笑しい。

十月二十七日

今打ちし畠のさまや散紅葉　一茶
霜の酉日をたのむ紙漉　成美
酢どくりを傘にかくして出ぬらん　仝
鳥を追ふてもあそばるゝ也　茶
買かけし川のありたけ薄月夜　仝

家さへあれば秋はいり込　美
ウ
腹たゝぬ工夫ひらけし草の露　茶
飯焦したる孫の首途　美
橋杭の芥を寄つて流すなり　茶
四月になれば鐘をほしがる　美
糠星の影となる身を起伏て　茶
家賃ならべる憂を知らずや　美
山城の衆に野松を見てもらひ　茶
褻に襟をぬらす木因　美
初春にさく〳〵汁のはやり來て　茶
十日は月のはや朧なり　美
目利して散り際早き花を植　茶
醫者をやめたる門の刎橋　美
二
富士の裾ぐるりとめぐる願ひなり　丶
百の螢をはなつ蕗の葉　茶
石臼を墓になしたる宵の雨　美
あまり拭へば柱淋しき　茶
日本紀をひねくり廻す癖ありて　美
松風聞きに三度旅立　茶
年寄し鞆のあそびか草の庵　美
人にかくれて炭賣をよぶ　茶
ほと〳〵と鋸借りにおとづるゝ　美
親の代には見えぬ白萩　茶
有明に朝寐とよみし歌もなし　美
腹をへらしに鳴子ゆさぶる　茶
ナ
兀山の煙りとはれて先ッ泪　丶
五百の錢をたくむ編笠　美
茶の水も近き居抜に引移り　茶
胡座かいても見ゆる淀川　美
よい日和貧乏村の花咲て　丶
むかしはやりし凧うなるなり　茶

遺篇　文化三年

双樹は下總流山の人である。『旅日記』の同年四月二日の記事に「双樹と深川に入」とあり、

「かんこ鳥」の發句を記してあるから、その日雨吟を試みたのであらう。双樹は流山から江戸によく來てゐたが、一茶も下總に行けば流山に立寄り、二人は非常に親しくして居たので、『七番日記』の文化九年十一月廿七日に「双樹歿」同廿九日に「双樹葬」とあり、双樹佛の題で「折々はなむあみだ佛聞しりて米をねだりしむら雀哉」の俳諧歌でその死を悼んでゐる。『三韓人』にも歿年を記してある。

閑古鳥信濃の櫻咲にけり　一茶
　まきの卯月にかゝる薄靄　双樹
朝よさのけぶりの料に壺ふせて　茶
　淋しき笛を聞に行らん　樹
麻市や月よ〱の川縁に　茶
　露の時雨のいかにめでたき　樹
ウ
いつとなく折敷の上も秋の立　樹
　古き涙のみちのくに入　茶
土橋の誰か緣づく鳥啼き　樹
　大笹藪をめら〱とやく　茶
十月は菅簑つくる禰宜が宿　樹
　夕飯過ぬ山科へいざ　茶
鍋鶴も記念と思へば不便なり　樹
　鈴かけ松といひ初る秋　茶
眞金ふく吉備は宵から月さして　樹
　むしが鳴にも袴はきつゝ　茶
小莚にむざ〱花の散初る　樹
　葎の青む鐘がなるなり　茶
二
鶯のうらやましさに髮きりて　丶
　浪が立ちても騷ぐ商人　恒丸
灯して閨屋は夏に押移る　樹
　百足かるべき皀角を折ル　丸
雨雲ののたくるやうな共こゝろ　樹
　舟の枕になりし小竹筒　丸
納豆の糸にも戀を泣そめて　樹
　むすび捨たる霜の門垣　丸
宗匠の五百年忌も昨日たち　樹

朱雀の野猫ふりて歌よむ　丸
月の笠濡れしも旅の様子也　樹
　木犀の香にかぶれたる哉　丸
ナ
つる〳〵と温泉霧かぶさる谷の寺　、
　牛の藥を尋ねかねけり　樹
ノ貫か赤星仰ぐ後つき　丸
　丸木つゝはる濱の小庇　樹
紙屑に花の塵までさらひ込　丸
　茶賣が來ねば春がなくなる　樹

遺篇　文化三年

四吟歌仙の作者の顔ぶれで見ると、成美亭の興行と思はれるが、『旅日記』の文化三年五月十四日に「蠅打て」の發句を記し、それに○を附けてあるだけで、成美亭の定例日七の日は休席らしく何の記事もない。發句の日附によつて同年の作と見て差間なからう。

蠅打てけふも聞けり山の鐘　一茶
　松葉散りうく水のうれしき　乙因
麻呂小さき人の見え初て　成美
　薄き稻妻おちつきもせず　浙江
乘ものゝ戸をなくしたる月の夜に　因
　鴈鳴く門や餅を搗らん　茶
ウ
風の吹く小塩の宿に朝寐せし　江
　古もの買に顔を見しられ　美
馬の脊に十月櫻ゆひ付て　茶
　とび〳〵濡るゝ枯原の雨　因
つれ〴〵をおもしろがりて人に戀と　美
　軒の瓢は夢にからつく　江
月にさへかくす刀を抜て見て　因
　吉次も參れ秋の志賀山　茶
竹九本共まゝほしき壁隣　江
　冷た飯にも花の香ぞする　美
君が代は奈良鶯も聲上げて　茶
　醉万歲をおくる川風　西

春霞留主じやと書いて張られけり　美
　山おかしさに叉笛を吹く　茶
搗栗をしろき扇にならべ置　江
　光廣どのへ念珠を參らす　美
茶の花も鶴も久しき在所也　茶
　錢がふる程雪のつのりし　江
五十日御油の宿屋に病み臥して　美
　戀しき外にけぶり立なり　茶
指の爪嚙むとて星をかぞへつゝ　江
　家越せばやと月の夜を待ッ　美
粟酒のはやり初たる笹の露　茶
　きたなくなりし蟬の聲　江
玉川を鍋墨かきに踏越て　美
　朝から辻に放下はじまる　茶
狀箱をかざして見たる閻魔堂　江
　雨にぬれたる鶏盜むらん　美
百年も一人寢て見る花植て　茶
　鼠のへらす春のうちまき　江

遺篇　文化三年

『旅日記』の文化三年九月二日「流山双樹來る」とあつて、同夜「宿二双樹草庵一」といふ記事、翌三日は「雨　夜亥刻雷雨　双樹逗留」とあるのを參照して、其の二日の間に兩吟を試みたのであらうと思ふ。しかし享和三年の句帖にある發句なので、或は同年の作かも知れない。

秋萑かなぐり捨もせざりけり　一茶
　月も出よとたゝく納豆　双樹
むら烏染物取に棹さして　、
　遲い梅さへほと〱と散る　茶
朔日の薄緣めぐる春霞　、
　綿を蒔ても井戸掘が來ぬ　樹
提灯に牡丹餅ほどの紋書て　、
　紫陽花咲けば粕漬を賣る　茶
ぬすまれし小猫二ツに寐そびれし　樹

嵯峨の松葉をいぶす村雨　茶
槻臼たゝいて何か唄ふらん　樹
別の月の鼻先に出る　茶
蒲の穂の少し散ても秋なれや　樹
佛の柿をひとつ振廻ふ　茶
朝日陰たま〳〵寺に土こねて　樹
宰相どのゝ鎗みゆるなり　茶
旅寐せよ野はさま〳〵の花の雪　樹
鍋つゝかけて嫩茶をぞつむ　茶

二

場ふさげに籥竹削る春の末　、
里にかぶさるかゞの白山　樹
風呂敷のおからにかゝる横時雨　茶
假の煙の低き行燈　樹
いさゝかな隙をぬすんで打粧ひ　茶
さら〳〵竹の藪蚊惜がる　樹
眞桑めせ伊豆の嶋までみゆる也　茶
佛掘たる跡にあざら井　樹
菊の露薄紙染る淋しさに　茶
やれた庇も月は嬉しき　樹
初鴈に風呂のたつらん鐘鳴て　茶
藥嫌ひが松をたはめる　樹

ナ

君が代の旅に出かける小鍋賣　、
蚤の涌かぬ守ある家　茶
酒壺の欠を大事に持ち古し　樹
今木因と人のいふらむ　茶
莨蒻の苞をかけたる花の枝　樹
露うつくしき艸の萠際　茶

遺篇　文化三年

下總流山の双樹亭に於ける兩吟であらう。發句と脇との句躰でさうらしく思はれるが作の年代は記してない。一茶は年中のように流山に行つてゐるが、「秋袷」の巻と同年の事と見て、文化三年の作と推定したのである。

十月の菊に貰ふて來た笠歟　双樹
炭火とほしき夜にあひけり　一茶
酒賣が土橋懸る旗ふりて　樹
鶯啼けと馬に鞍置　茶
猿が吹く垣ね〳〵の草笛や　樹
しだい〳〵に霞む有明　茶
高砂の鐘を拜みに棹さして　ヽ
夢の姿をかくす菅簑　樹
蚊遣火にかゝる小雨は誰が涙　茶
玉簾よる屋に朝茶たてつゝ　樹
柞さす出雲躍がはやる也　茶
實方どのにほくち貰はん　樹
小男鹿は明日の月夜に放つべき　茶
柿赤らみて晴るゝ香久山　樹
麻染る流れの石も見事にて　茶
假のやどりに隔つ陽炎　樹
散る花はさしたる譯もなかりけり　茶
神のゐぐ茶を選ぶ乙女子　樹

二
鳥程の鎗持通る海べらに　ヽ
一疊敷も我世嬉しき　茶
鎌倉の十夜過にも月夜なり　樹
邑の梅に雪降かゝる　茶
ある人の別れの皷ならさばや　樹
須磨のあしたに似たる石原　茶
篠弓も樗も弟子にくれてやり　樹
土用の入をめでたがりけり　茶
牛牽て一里山邊の片あかり　樹
佛つくるか小煙がたつ　茶
松まけて隣のあくびうつるかな　樹
遠あるきする家鴨まじなふ　茶
橋守よ眉の白きが淋しいか　樹
朔日餅をほう〳〵で搗く　茶
五年目に猫の聲聞く都にて　樹
田螺の盞も春といふべし　ヽ
美しう痒て暮さるゝ花も咲　茶
木曾茶一駄を下す朝東風　ヽ

我春集　文化三年

遺篇にあるものは「文化三年十一月廿五日於二隨齋一興行」とあつて、『我春集』の日附と同一である。下總の椿丘太笻を正客として五吟歌仙を行つたので、『旅日記』の同日は「陰　申刻雨」とあるばかり、隨齋の會に記してない。『我春集』にあるものは、文化九年の連句と煙管の掃除をして前齒を缺いた記事の間に挿入してあるが、一茶の眞蹟本で見ると、書躰も前後のものと一致しないさうである。

文化三年十一月廿五日

鳥買の行や霜おく漂澪　太笻
家さへあればけぶる寒空　成美
枝ながら松の倒木引捨て　乙因
夜より白き菊を寐て見る　浙江
宵〳〵の月夜に牛を撰ぶらん　一茶
秋の哀にまけぬ日もあれ　太
貰ふてはやたらに植る艸の株　美
ちだし心をうつすうら富士　因
斧の柄の古くもならぬ戀をして　江
一むら竹に鶏を葬る　茶
さく花の京を小脇に家もてば　太
御見がてら米買に出る　美
青天の淋しく神の鳴初て　因
うれしき物を膝に置けり　江
はる〴〵の心とげたる善光寺　美
荻も誠の秋になり行　太
こつそりと蜆口明く薄月よ　江
浴衣忘れし露の中垣　因
貫之が眠りし榎祭るなり　茶
卯浪の比の蝶のへら〳〵　美
さま〴〵に田蓑の雨を佗果て　太
夢見る家は別に作りし　茶
人憎きあまりに餅をくひちらし　因
御葛籠馬を晝にうつすらん　太

めた〳〵と二月になりて旭さす　美
菫のおくの謎ときをよぶ　因
雀にも胡葱鱠祝せて　茶
二つばかりは見たる玉川　美
槇柱それさへ月の馴安く　太
袷著たさに鈴をならしつ　茶
薺を踏で小沙彌のあはめられ　因
僅の雲の湖にかぶさる　太
盃を並てものを申しけり　美
筆に追やる鳩の餌ぶくれ　因
たゞ頼め昔念佛の花の時　茶
杉のあはひの水の糸ゆふ　太

遺篇　文化三年

此の歌仙の對竹は一茶の校合した『芭蕉葉ぶね』の著者鶯笠の前号である。旅日記の同年十一月三日から見ると「肥後對竹來ルニ付、隨齋ニテ歌仙有」と記し、同月九日「對竹の三日の次韻」とあるから、その時の作らしいが、發句は十二月一日、中七を「むなしく見るや」と再案してゐるので、前文の「かとりの浦に旅立んとする時」及び「師走のはじめなりけり」に對して、十一月三日の歌仙とは別に十二月興行したものゝ如くも考へられる。

かとりの浦に旅立んとする時、木母寺の鐘夕を告ろ。世間は師走のはじめなりけり

節季ゆの見向もせぬや角田川　一茶
扇折にも春の待るゝ　太節
雀啼く朝日に窓や作るらん　對竹
翌日はどこぞの月の旅人　恒丸
蓼の穗もうれしきものにかぞへばや　太
霧下りそめて折敷古びる　茶
ウ
磯くさき籠荷ひ込む紀三井寺　丸
外の焚火に莚かゝる也　竹

美くしき笹に泪のかゝる哉　茶
　忘れ草さへ花の咲く時　太
簑笠を岩城の山に着古して　竹
　飯焚くたびに鵲鴿をよぶ　丸
めた〱と露に消さるゝ朝の月　太
　荻のしげみに下す川舟　茶
子寶を守る神なら御宿せむ　丸
　酒をやめたる宵の村雨　竹
年〱の花見る役にあたりけり　茶
　鷺は歸るといふ春もなし　太
二
一桝蜆の汁に若やぎて　竹
　戀知りたまへ南無いつくしま　丸
櫛笥にも夕の雲の引かゝり　太
　鐘聞くまじと植るもちの木　茶
肖柏が迎へに來たか時鳥　丸
　どこまでころぶ膝の卷紙　竹
釜の澁ぬけよ〱と念佛して　茶
　雪に階子をかける曙　太
覺束な月の暗きに白羽の矢　竹
　鯉がはねれば稲妻が散る　丸
草花を引むしりては普門品　太
　富士を見所と人もいふらん　茶
ウ
松笠の火に腹あぶる浦の者　丸
　嵐にかゝる戸はかなき　竹
初花の連哥おそしと咲にけり　茶
　雛の御皃をみがく濱木綿　太
陽炎の髪に昔のさまもなし　竹
　袷の袖をふれば重たき　丸

遺篇　文化四年

隨齋亭の連句であるが、歌仙の初裏八句目で中絶してゐる。『旅日記』によると同年正月十九日は「晴　隨齋會」とあつて臨時の催しのようである。「芝いさご[illegible]出火、田町に出る」とあるから、その火事の話で俳諧は中止になつたのであらう。

文化四年正月十九日

鶯や人から先に暮易し　浙江
けふもおくれて松引を見る　成美
片家根は苔の植たき東風吹て　一茶
白髪の上に鐘をつき出す　江
鞘塗が水こぼしたる月の色　美
萩咲たりといふ聲がする　茶
有がたい世に生れ來て秋の空　江
三輪の酒屋に寢たる餅賣　美
山風の烈しき人を尋ねかね　茶
なさけ心にはりあひのなき　江
朔日も乙子になりし神の棚　美
木曽茶四五俵下す川舟　茶
よき方へ鶴を放しにさそはるゝ　江
座頭の手代口のかしこき　美

遺篇　文化四年

隨齋俳諧日の定連の一人乙因が旅行中に歿した。『三韓人』によると文化四年三月廿五日名古屋で客死したのである。訃音は五月になつて下總の太笻から成美のところに屆いた。乙因は「隨齋筆紀」に「巣こぼれの鳥ふみ跨ぐ山路哉　ナンブ乙因」とあつて南部の人で生白洞と号して居た。その追善の爲め五月十二日成美亭で行つた三吟の連句である。

乙因身まかりぬとて、太笻が許より文して告げ越したるに、おの〳〵そゞろ寒く泪こぼす日は、
文化四年五月十二日也けり

家ならば斯うは伏すまい夏の艸　成美
涼みの夕べ月の見どころ　一茶
雨の山その儘ほしき心して　浙江
そろりと門を潜る味噌賣　美
正月はとある小藪も見事也　茶
菫といへば腰の輕さよ　江
僅なる社守る身も春の雨　美

土こね唄も古き君が代　茶
鴨の鳴く雀が浦に杭うちて　江
　衣かぶりて人にかくるゝ　美
紫陽花に泪をそゝぐ夕嵐　茶
　柱かつぎと共に世をへん　江
茶粥する身延の水を袖にかけ　美
　竹一本の秋は來にけり　茶
牛馬にはづれかゝりし宵の月　江
　露の中から人を呼ぶらん　美
咲く花のちるは〳〵に年よりて　茶
　ひた〳〵水に春は暮れ行　江

遺篇　文化四年

恒丸の江戸寓居で行つた六吟歌仙であらう。江戸坐中に對竹が居るので文化三年十一月、江戸に來つて成美亭の俳諧に列して以後の作である。確たる年代は知れないが、同四年の作と見てこゝに載せたのである。

こゝろほどすむものはなし荻の聲　恒丸
　飯の先から秋は行く也　一茶
鶡月の鳥にはさはなくて　對竹
　旦の霜を覗く茶湯者　太節
穪の木を笠一枚のかへものに　其明
　菖蒲さく〳〵下す川船　兄直
いざをどれいざ〳〵踊れ爺が飴　茶
　戀せぬ佛水にあく世ぞ　竹
神崎は鏡のかげも鳴雀　節
　時聞ちがひ叱られにけり　明
白芙蓉嘘かけても散ぬべく　直
　曾良が紀念の月出給ふ　茶
砧など一里〳〵と越後めき　竹
　榎に雨の降るしほもなし　節
桐の間も鶯の間も花の春　明
　僧衆揃ふて東風に吹るゝ　直
うす霞蓼喰ふ事は流行なり　茶
　鐵槌拾ふ京の笹藪　竹

夢ゆする苫かき船をさし並べ　節
　侍威す鳥もたえざる　明
紫陽花の花の中より顔を出し　直
　泪のかゝるこのごろの松　茶
旅すかぬ俗山伏をすかし見ん　竹
　五百に賣りしけさの初雪　節
烏帽子着てうかれませうぞ居さしませ　明
　佐野の藥はよい藥なり　直
草の風牛の寐所にあてがふて　節
　露の合羽に虱とりつく　竹
名月やそも〳〵是は善光寺　茶
　木耳山を狩ることなかれ　明
叢の中からよい茶飲出して　直
　すはやといへば猫のつらかく　節
ねめちらす室町殿の壁塗に　竹
　うき世は花の二十八日　茶
春の鳥終には空にかくれけり　明
　たゞ陽炎の庵のあざら井　直

犬古今　文化五年

發句が無季であつたら、第三は春季を以て扱へといふ慣例によつてゐる。『成美家集』にも雜の部にこの句を入れてある。『犬古今』の著者太節を亭主としての歌仙であるが、成美亭の俳諧であらう。初裏になつて浙江が出席してゐる。

樵夫

薪をこりてかくまで老ぬ翌もまた　成美
　我と我田〳〵橋の下水　太節
捨杲の牛に正月いたさせて　一茶
　錢こぼしたる春のあり明　美
福壽草袖長かれとこそおもへ　節
　ふくら雀もかすむといふらむ　茶
住よしの隅にかくれし世中に　美
　端居のゆめをちらすたちばな　節

めら〳〵と甍焦したる戀をして　浙江
　秋の余波を雉子追に出　美
月てらせ貧乏祭り過にけり　茶
　めでたき箸に白萩のちる　江
浮雲の舟のまくらをかたるとて　節
　入相またば小はしらもあり　茶
麁相なる隣の先なる安積山　美
　蝶にわかれて歸る吉六　節
花ごゝろ松風吹いて暮安し　江
　欵冬あさく神にかたむく　美
餅搗てとなりの壁をたゝく也　茶
　耳のあかるき雨の片濱　江
乘ものゝ人の涙を鳥が啼　節
　二度あふまじとわたす榊葉　茶
夏の夜の水臭きまで更かゝる　美
　伊丹は風のうつくしうふく　節
米買のけぶりの中につゝ立て　江
　事觸のいふことはまことか　美
花芒穂に出よ〳〵とうち粧ひ　茶
　こゝろのはしを鳴かぬ蟬　江
雛鶴を飛ばしてみたき秋の月　節
　辻の榎にお茶たてまつる　茶
寐起からあたらし疊嬉しくて　美
　小春のやまの跡しさるかな　節
寒空の燈心買に舟をやり　江
　襟のあたりに大鐘をつく　美
二位どのゝ薄花ざくら咲にけり　茶
　鳶もよろこぶ籾のはへくち　執筆

恒丸は今泉氏、下總佐原の人である。葛齋はその庵号なので一茶がその家で三吟したのかと思ふが、恒丸は江戸にもしば〳〵來てゐるので、或は江戸の旅寓で行つたのであるかも知れない。此の連句の二の表八句目で中止した理由を「一茶古鄉へ急ぐ事ありてやみぬ」と

遺篇　文化六年

ある。

文化六年二月八日於二葛齋一

正月はくやしく過ぎぬ春の風　一茶
猫鳥啼いておぼろはじまる　恒丸
旅人に五形振廻ふ畑持ちて　ヽ
小舟ゆら〱錢買に行く　茶
新月のもつと淋しくあれかしな　ヽ
ヒヨンといふもの吹くは誰が子ぞ　丸
ウ
角力場に露の名所なくさるゝ　ヽ
湖をとり柄に替しつぶら家　茶
紫陽花の花色衣着たりけり　ヽ
粽に添へし宮城野の歌（イ本（花））　丸
傘にかくれて見えぬ不二の山　ヽ
神輿の渡る鐘が鳴る也　茶
冬枯の折敷の箔に月さして　ヽ
蕪の飯たく前の藏人　丸
行水をするにも諷ふ與謝念佛　兄直

さら〱川の雨を見にいざ　茶
あの鹿も花に急ぐと知れたり　丸
近付多き春になりぬる　直
ニ
雪汁の貧乏村に住馴れて　茶
親鸞様へ夢きゝに行く　丸
うき數に楢の廣葉を打かさね　直
町はずらりと青簾也　茶
顏を出す鼠の穴に旭さす　丸
白髪の麻を片木に打乘せ　直
松の事くはしく語れ小山伏　茶
脚のぬれたる鶴の來る月　丸

一茶古郷へ急ぐ事ありてやみぬ

遺篇　文化六年

上總の女俳人花嬌を主として五吟歌仙を行つたので、對洲庵は同國富津であらう。花嬌女に就ては『三韓人』に文化七年四月三日歿とあるが、一茶は「花嬌家集」及び『迹櫻』と題する

追善集の爲め、同九年五月三日の日記に「四月十二日書始、今日終」とその編輯に携つた記事があるので、女俳人として一茶の感激にあたひする技倆を持つて居たのであらう。

文化六年三月對湖庭に於て

かい曲り寐て見る藤の咲にけり　花嬌
　薪割る音に春の暮れ行く　文東
細長い山のはづれに雉子啼て　一茶
　鍋蓋ほどにいづる夕月　嬌
烏帽子着て風に吹るゝ荻の花　徳阿
　貢の酒の桶つくるらん　東
牛の子を秤にかけて淋しがり　嬌
　ひとり經よむまでになりしや　阿
山科は牡丹の花の盛にて　東
　絲を染め〳〵待つ人もなし　茶
曉の小川に夢を流す也　阿
　幣ふる役は佛五右衛門　嬌
をり〳〵の雨降る度に餅の事　東
　おとゝし見たるみよし野の月　阿
痩骨のふし〳〵しみる風吹て　子盛
　彼岸の鐘のどびやうしに鳴る　茶
豆腐殼花のさかりにけぶりけり　嬌
　大薙刀にかゝる春雨　盛
鶯の鳴行く方へ船引て　嬌
　爺の建たる藏に注連張る　仝
撫子の花すり衣着る時ぞ　茶
　念佛申して蚊に喰はれけり　嬌
白水をざふりとかける門畑　東
　節句序に嫁披露する　茶
薄縁の裏にをかしきもの書て　嬌
　車さくれの師走なりけり　東
寒菊をむりに咲する枕元　嬌
　鳩の來ぬ間に針供養せん　東
名月の出雲の國にふみこんで　茶
　茶さへ松さへ霧嗅くなる　嬌

秋風に小言ぎらひの西隣　東
　六所参りのかたい約束　茶
湖に雪隠すだれほど(マヽ)はして　東
　はや起がらす菫あらすな　仝
かばかりの垣ほど花となりけり　茶
　陶の穴も霞たなびく　東

菫集　文化六年

一茶の門人春甫は信濃長沼の人で村松氏、繪は狩野了承の弟子である。春甫の著『菫集』の脇起し歌仙は一茶と長沼の連衆十三人の合作で、文化六年春の興行である。長沼は俳諧寺十哲とよばるゝ春甫・松宇・素鏡・呂芳・掬斗等の居村であるが、此の歌仙を催した時分から一茶は足繁く長沼へ遊杖したのである。

山路來て何やらゆかし菫艸　翁
　雀が春も三日立けり　春甫
陽炎に樫ばしらの穴明て　掬斗
　一番船のいま着しころ　呂芳
傘のひろがるやうな月影に　松宇
　ぱちり〱ともゆる豆売　素鏡
藪菊におもひ付たる聟いわひ　子來
　竹筒ほうに夢の井を汲　有好
安元の御幸の有し裏の山　杉谷
　律義之助が門の小佛　瓢蘿
一文の石も火の出る初時雨　雪丸
　ふゆの仕事に梅を咲する　稲伽
青梨のあながち落もせざりけり　完芳
　古きけしきを衣打らむ　允兆
十六夜は鎌くら衆の旅ばかま　甫
　朧なべを水に浮して　一茶
つち鳩も花の三月十五日　芳
　鐘のかすむは東近江か　斗
長閑さに橋の商ひゆるすなり　鏡
　大長刀をかつぐゆふ暮　宇

撫子に貰ひ涙のかゝる哉　好
樗がくれは誰が袖の香　來
しほ風呂や木舟の人を先ッ入て　蟲
あくたれ雪といへばなを降る　谷
駒の綱手ばやく年の暮にけり　伽
ゑぼし着るまに上る半蔀　丸
笛捨ん桔梗かるる萱女郎花　兆
お婆どが餅の月夜成けり　完
津の國のなにはの秋も片便り　芳
惣〳〵かゝる寺の壁つち　鏡
そと盗む猫が袂に鳴出して　斗
朝茶けぶりを歌に詠るゝ　市
細長る呂はづれの隅田川　宇
板を蔽てふれる正月　谷
くち過の初花櫻咲にけり　茶
毎日かゝぬ庇のうぐひす　筆

菫集　文化六年

歌の下の句から卷き起したような連句で頗るめづらしい。「のりつけほゝんは………」の前文で見て短句を發句の如く取扱つてゐる事が解るが、全篇七句よりないので、或は歌仙の一部を抜抄したのでないかと疑はれるが、『菫集』には明らかに本文の如く載せてある。

のりつけほゝんは宵の寒さをしらせ皃になき、夜なべ虫は聲をからして綴させと、すゝむる秋も淋しくなる儘に、彼の長嘯が窓のこゝちす

ゆふべ〳〵の霜を苦に疾　春市
妻なしがひねくれ松と詠りけり　一茶
忍ぶたしにもならぬ紫陽花　呂芳
燼を水に流すがおもしろき　市
わたくし不死の晴るゝ復時　茶
したゝかに立市が櫻咲出して　芳
風ふく度に土筆伸けり　完芳

遺篇　文化六年

雪夜の炉に寄つて同好四人で行つた連句であるが、場所は成美亭であらう。年代は明瞭でないが、恒丸は『三韓人』に文化七年九月十四日歿とあるので、それ以前の作である。こゝにはその前年として置く。

うそらしや月になりたる雪の上　成美
　笘のうらまで冴る松風　恒丸
ある時はほろ味噌賣が笛吹て　一茶
　うるし干ぬまに門を見て來る　莚志
鶯のはや啼そめしみじか山　丸
　鍋たく筏春に流るゝ　美
ゥ とろゝにも梅花の沈むかげあれば　志
　平侍に身をやまかせん　茶
朝夕の帶さへ解かず常陸まで　美
　白雨あがり皆露になれ　丸
宗長に粥すゝらする客立て　茶
　あふむかひつゝ我も吃るよ　志
年〻の月を見古す筑波山　茶
　角力の弟子と寢るも珍らし　美
僧正のあたまを剃れば紅葉して　志
　世は花賣の夢とこたへよ　茶
陽炎に隣の屋根の棟つかひ　美
　火を吹く竹にかよふ夕東風　丸

我春集　文化七年

閑齋の『俳諧道中双六』には脇句は「おくれ子たなく乙鳥の親　閑齋」となつて居て文字に異同がある。けれど、大體同一の四吟歌仙である。『七番日記』の同年五月七日に「隨齋會」とあるので、その日の作らしい。『我春集』で見ると同八年の連句のようであるが、『道中双六』の異同を考へると、七年の作と見る方が

よいようである。

五月雨の翌は檜もたのみ哉　成美
乙鳥の親の浮れ子を鳴　太節
麻染るさら〱小川さらさらに　一茶
靭かつぎと人によばるゝ　美
ちる露に月の心のうつるかと　節
今や栗やけ二郎三郎　茶
ウ
寅日の古キ兜に早稲盛りて　美
うき世の端の甲斐の狙橋　幽嘯
うつくしき夢見る家をむすぶなり　茶
遊女の情霰ふりけす　節
ちる柾葉守の神はないじや迄　嘯
けふ聞初る丘寺の鐘　美
尺八吹に別て後の秋風　節
うどんの上も皆月夜也　茶
冷〱と放下の袴かしてやり　美
死損ひの紙魚とたはれて　〃

青疊ぱつぱつと花のちれかしな　茶
山葵の泪うつりたりけり　節
二
古かぢの跡とりすゑし宵の春　嘯
人にかくして鳥さしに出る　美
菅蓑をいた〱しくもきせ申　節
闇にほしがる小百合なでしこ　茶
いやながら五年預る佐田宮　美
國が芝居の名の通り来る　嘯
桐木に目鼻を書てわらひけり　茶
いざ薬めせ鴨の夕聲　節
蘆火焚かけに兜巾をひけらかし　嘯
名を替てより木賀を別るゝ　美
誰やらは都の月をきらはれて　節
たゞ七文の花の朝顔　茶
ナウ
傘張は秋に隠るゝ傘の陰　美
よい子拾ひに参る階　嘯
かづらきや外山の雲にものいふて　茶
佐川田どのゝ花に痩たり　節

艸の香に額をつけし墓ノ聲　嘯
　夕皃蒔てしづかなる暮　丶
　　成美十句　太節九、一茶九、幽嘯八、

七番日記　文化七年

蕉雨は一茶と同國飯田の人であるが、士朗門で名古屋から江戸に來て八巣と号したのである。『七番日記』の同年五月八日の日記に「雨晝より晴　蕉雨兩吟」とあつて此の半歌仙を載せてゐる。

古わらぢ螢とならば角田川　一茶
　噎一つに夏の明けけり　蕉雨
萩芒桔梗刈萱壁ぬりて　茶
　ころりからりと鳩吹が行　雨
月影のうそ／＼寒くなるまゝに　茶
　茶の匂ひなき島の振廻　雨
近づきの鳶の小面の哀ニて　丶
　廿日ばかりは鈴ふりになる　茶
榾の火に灰引かけて忍ぶらん　雨
　つら／＼椿夢をちらすな　茶
能因が親にかゝりの花盛　雨
　日がな一日鶯の番　茶
瓢たんで鯰押へるさたもなし　雨
　総の栖は出羽の象浮　茶
秋は只奇妙に月の夜ばかり　雨
　かゞし二つに餅奉る　茶
立田姫辱けなさになほ見たし　雨
　南部の衆にゆづる行灯　茶

蕉門中興俳諧一覧集　文化七年

『七番日記』同年十月を見ると、七日は隨齋の會、八日は「水道町にて」とて「十月やほの／＼かすむ御綿實」の外に十句記してある。九

日は下總の馬橋へ行つてゐる。八日と十二日の間に中七を「野邊に戀する」として此の發句が出てゐるから、同月八日の兩吟と見てよからう。信濃のノ左の著『一覽集』に收めてある。『一覽集』は文久三年板である。

文化七年十月

枯々の中に戀する盆かな　一茶
　はるまつ草は小松なるべし　太節
折烏帽子諷の体を棹さして　茶
　雛の御前に蝶參る也　節
有明のきりこみ汁がそれかすむ　茶
　人のかげさす櫻一本　節
梅若の念佛は雀の鼻の先　丶
　能夢見よと直す木枕　茶
白けしは誰が俤に云なさん　節
　今や首途の五位の螺吹　茶
世を遁る工夫の付しけさの空　節
　手前づかひの茶畑なりけり　茶
鶏追ふために御寺をあてゝ置　節
　判官殿を祭る名月　茶
一株の小萩を柴にすりなくし　節
　延寶二年花の世の中　茶
佐保姫の御座る處は何所ならん　節
　田螺逃しにまゐる津の國　丶
連山の三ッほどみゆる家を立　茶
　本因坊と日をくらすこと　節
百合の花妹は此世に無りけり　茶
　江口の朝の門掃をして　節
先以さかなの安い初しぐれ　茶
　神おくりにはいて見たいもの　節
どれも〳〵はや御十二の麻袴　茶
　古さとをよく鳴からす也　節
翌日あいと殘すもおかし柴一把　茶
　筏とならぶ川の土かき　節
月涼し大坂聲の揃ふ也　茶
　江戸は松魚に夜の明てゆく　節

逢戀はあはぬ戀する始にて　　　　　茶
かくれ〳〵に拜む桐の木　　　　　　茶
峰の花六月までも咲せたい　　　　　節
菰にならびし乙鳥小人形　　　　　　茶
鶯のやうにいはるゝ藪入や　　　　　節
五助ゐなりの多き吉日　　　　　　　茶

我春集　　文化七年

守谷は利根川を北に隔てた常陸の國である。鶴老は『隨齋筆紀』に「迯り火やはや立交る鶴の箒　もりや鶴老」とあるように守谷迄と詠み込んだので、「行としや」の發句に守谷迄と詠み込んだのだらう。天外は守谷より北の同國筑波郡長崎の人で、たま〳〵鶴老亭に來合せて此の三吟を試みたのであらう。『我春集』は文化八年の起稿なので、その前年を意味する爲め「去十二月」と前文に記したのである。

去十二月廿三日

行としや空の青さに守谷迄　　　　一茶
寒が入やら松の折れ口　　　　　　鶴老
鶯が赤みそ汁を鳴やらん　　　　　同
鑓ひねくつて遊ぶ陽炎　　　　　　茶
有明はことにおぼろと申也　　　　天外
玉子賣る迚植る柿の木　　　　　　老
急ぎゆ西に見ゆるは善光寺　　　　茶
六月寒きけさのむら雨　　　　　　外
時鳥蚤の迹まで奇妙也　　　　　　老
夢の通りに小宮作りて　　　　　　茶
拾ふものあらばと櫛を流すらん　　外
無分別なる雁の來所　　　　　　　老
名月の少すじかふ家を建　　　　　茶
貫之始〆蓼にむせつゝ　　　　　　外
かりそめに吹てのけたる螺の貝　　老
東かさいの春は來にけり　　　　　茶
花曇り心任せの筏さし　　　　　　外

蝶に別てもどる猿引　老

ナオ
灯の珍らしくなる夕枕　茶

鎧手向るかまくらの方　外

松風の吹起したる雪踏て　老

妹が山茶花盛り也けり　茶

鑰入の泪ぐむ程なぶるらん　外

艮を僻てもどす獺　老

涼しさや赤い鳥居に月さして　茶

遊行の植し合歓しげりつゝ　外

小三太ははや十三の小脇差　老

美濃の徳意に任す行灯　茶

どや〳〵と閏師走も中過　外

梨買に出る空也寺が妻　老

ナウ
風になびく朝茶けぶりと唱へ捨　茶

舟の日記の多き吉日　老

みちのくの銭一〆(貫)に身を賣て　茶

兒つきあはす兄弟の春　外

花の旦花の夕にとしよらん　老

大悲大慈の初がすみ哉　茶

一茶十三句　鶴老十三、　天外十、

我春集　文化七年

此の三吟は初裏の十一句から一茶が入つてゐる。やはり前巻と同時の作であらう。「七番日記」には十二月廿三日「守谷に入」とあつて、そのまゝ守谷で越年してゐるので日附はないが、同年の作に違ひなからう。

走り行名なら形なら磯千鳥　天外

あらし木がらし赤き夕空　鶴老

五六年藁の小家に伏くれて　外

鼠のわらふ秋のはじまり　老

月さゝば楓の陰も匂ふらん　外

痞の晴るゝ露の先ぶり　老

ウ
長池の堤おりれば豐後橋　外

鶴の眞似する鳥の侘しき　老

涼しさに烏帽子召せる御姿　外
　樗を送る宵の別路　老
思ふ事百年へても哀にて　外
　南无阿彌陀佛木曾の棧　老
一概に寒う成り行三ヶの月　外
　目をつくばかりさはぐ蜻蛉　老
鍋かりて蜆打込む秋しぐれ　外
　花の序に砂をいたゞく　老
門守が寢言にかすみ引はりて　一茶
　釣瓶おとしの春の鴈金　外
ナオ
藍染の匂ひを笹に押かくし　老
　瘤取る鬼を祭る赤飯　茶
朽かゝる廊下を風の吹ぬけて　外
　三里の灸にむせる實方　老
澁柿の花にせかるゝ普門品　茶
　けふも暮行甲斐が根の空　外
湖の端に小村のかたまりて　老
　五文の酒に爺が舞ふぞよ　茶
子共等は空神(ウツツキ)を送るらん　外
　鶉の逃しけさがたの夢　老
名月の俵に萩をつゝさして　茶
　霧にぬれたる山形の客　外
ナウ
どや〳〵と舟より上る栗丸太　老
　十里四方の見ゆる瓶風呂　茶
給りし替地は花の咲にけり　外
　祭りは過し人丸の宮　老
石などの玉の朝から長閑にて　茶
　よこ町曲る鳥おひが唄　外
天外 十五句 鶴老 十四、一茶 七、

我春集　文化七年

鶴老は守谷の西林寺の和尙なので年の暮の忙しさをよそに見て、一茶をその寺に泊めて天外と廿三日「行としや」の卷を三吟してから、「走り行」の卷に移りて、今又この「草臥し」の

巻をはじめ、引つゞき三巻の歌仙を行つたのである。

艸臥したねや時雨の筑ば山　鶴老
我國の日をおがむ冬枯　天外
白梅に月の莚の工夫して　老
霞のかたへ放すしの弓　外
さればこそ勇立たる福わかし　老
雀は踊るうぐひすはなく　外
（ウ）春風のはつせの縄を引はらせ　老
上手にならす薑飯の貝　外
うき人は山のむかふにありと聞　老
芥子の曇りに袂ぬらして　外
秋もはや月のしらける海士が家　老
世にあまされし蟀の聲　外
幻の桔（梗）梗刈かや糸すゝき　老
式部が口とて雨はふりきぬ　外
へら鷺に門のけしきを作りけり　老
腹一ぱいに寢タルはつ春　一茶
花守が乙子の髻見はやして　外
淺黄にかすむ夜の大原　老
選集をしまへば崩す小家也　茶
酒ふるまふてゆづる鶏　外
（ナ）裸身ですむべきものよ神輿かき　老
辻の夜店のつゝじ紫陽花　茶
月のさすよ所の蚊いぶしうらやみて　外
御油の遊女のくや〳〵と寢る　老
若乞食適皷ならしけり　茶
世界の花を我ものにして　老
暖に小判ならぶる會津盆　茶
寄合町の春の夕暮　外
鶯のとしも四十を越シぬらん　老
筆一本でたてし家藏　茶
（ナウ）頼朝の御成がすみて閑也　外
土人形を作る朔日　老
砂除の枳殻藪も名所にて　茶
稲妻こぼす山本の雲　外

月くらき舟幽靈にもの着せん　老
　露心あれ吹く女郎花　茶
老十五、(句)外十三、　茶八、

我春集　文化八年

其引とは文化八年正月一日として鶴老・天外と共に歳旦吟を『我春集』に掲げて、其の次に三吟歌仙を記してあるので、はし書に置いたのである。『七番日記』によると一茶は守谷の西林寺で年を越し、八年正月十三日まで滯在してゐる。『我春集』の發會序に籠山の聖人と稱するは鶴老の事であらう。此の三吟は元日から七日までの間、越後の竹里が來る以前に催したものである。

其引

ひよ鳥のひろふて行や梅花　鶴老
窓蓋上げて晝ごろの春　一茶

夫喚が桶の輪を組陽炎に　天外
　あらけたゝまし酢賣酒賣　老
けふの月五尺の稻のざはつきて　茶
　追るゝ鹿のよくおよぐ也　外
ウ
鍬好が莚の切と寢ても見ん　老
　(霰)雹來よ〳〵山の連哥日　茶
大かたは武藏さがみの人〳〵よ　老
　身は傾城の今の夕暮　茶
風呂敷に恨十程書ちらし　老
　蚤をはき込むせどの湖　茶
名月の迹へ〳〵と立まはり　老
　黒蒟蒻をくるむ穗芒　茶
白露にをどりの興やさますらん　老
　イ本（とろ〳〵）ぞろ〳〵舟を上る加賀衆　茶
我顏を花の木間にさし出して　老
　うき世は彌生三日也けり　茶
夜をこめて一坂越る瀨田蜆　ゝ
　初郭公聲をおしむな　老

大雨に小野小町をおがむ也　茶
　魚屋の息子の茨刈行　老
松柏妾御殿のありさまや　茶
　佛の鐘も戀くさにして　外
一時に蟬の小川へ遣入る也　老
　餅も降レかし卅日の空　茶
灯をいくらも付る假住居　外
　桐のひろ葉に露奉る　老
三ケ月にたとへられたる御運にて　茶
　黑髮山の遠く冷つく　外
ナウ
むら雨にふり殘されし中の庇　老
　此子たのむぞ又六が舟　茶
奉行所の使せわしくさゝやきて　外
　鴿にをさるゝ如月の雲　老
波際の花表も花の咲やうに　茶
　菫の上へ配る重箱　外

老十四　茶十五　外七

我春集　文化八年

文化八年になつての連句は此の三吟で一卷の筈であるが、はし書に「其三」とあるのが不審に思はれる。尤も前の卷の「其引」は歳旦の發句を承けたのでなく、旧臘發會の三歌仙に對して稱したのだとすれば、「其三」と記した理由のない事でない。しかし、さうした前例を見ないので疑ひを存して置く。

其三

鶯や梅や無我には暮されず　天外
　見よ世中は皆菫也　一茶
春の月鮹壺よりも哀にて　鶴老
　十町ばかり馬におくるゝ　外
麻の葉のさつとぬれたる凉しさに　茶
　粽のやうな家の灯　老
ウ
かづらきの鐘に泪のかゝる哉　茶

哥に詠れてつらき初雪　老
上張の上に荒繩引〆て　茶
村にほしがる那須のしの原　老
相應にほまちの蕎麥も咲にけり　茶
山のあちらへ消る三ヶ月　老
初鴈に湯守が兒のきよんとして　茶
あら鬧しき鉦の打やう　老
散花のそれさへいとふ御枕　茶
文書く隙も不二川の春　老
乙松が獨活のあえものかい摑み　茶
袋の紐のきれし朔日　老
ナ
間丸が門から見ゆる男山　茶
鷹にとらする鮒の腸　老
芍藥のかほそきうちを樂みて　外
朝な〳〵に直ス閨の圖　茶
うき人の影さへさゝぬ空の色　老
仇塩からきいせの喰物　外
松の木にくだらぬ發句ぶらさげて　茶
百になる迄灸きらひ也　老
さればこそ明ひろげたる無常門　外
道灌殿のめで給ふ月　茶
刈萱と桔校（梗）とすまふ始たり　老
柱なでゝも秋は行らん　外
ナウ
古郷の片兀山を夢に見て　茶
時に范蠡飯を焚けり　老
板の間の廣サ千疊ばかり哉　外
見（要）方に當る花の刀禰川　茶
鶯姫も丸一日は鳴かぬ也　老
山鳥の尾に霞引する　外

天外八、一茶十四、鶴老十四、

我春集　文化八年

正月七日、越後の竹里が西林寺にやつて來たので、員外として此の連句を行つたのである。竹里は『三韓人』に越後の部にあり、『隨齋筆

耙』にも「稲の香をおし廻したる出汐哉　ヱチゴ竹里」と出てゐる。竹里が正客として二の表から東陽が入つて五吟歌仙となつたが、東陽はどこの人であるか明瞭しない。

員外

黄鳥の聲をかぎりの枕哉　竹里
菊苗伏せて十日目の露　一茶
中餅の臼の中より月出て　鶴老
さし来る汐に舟廻す也　天外
里人よいづれの山が涼みよい　茶
榎の下に膳を並べる　里
ウ
ひた〳〵とよみ終タル提婆品　外
摩耶が高根に雨がふる迚　老
懐は三文程の寒さ也　里
中をかぶせてかくす行灯　茶
上紺に染通したる戀なれや　老
盆の踊の足揃へする　外
宵の月杵を里の名に呼て　茶
稲の匂ひの門に吹き込　里
弟は天神様へ走る也　外
雪でつくりし淡路島山　老
如月や朔日ごろの花の空　里
蛤やけば旅のありさま　茶
ナ
陽炎に倒るゝ程の家かりて　老
文治五年の夢ばかり見る　外
黒髪を菖蒲に添ておくりけり　茶
入梅晴るゝ市人の聲　里
大鍋に馬の喰もの拵へて　外
垣の外から盗む鶏　老
木がらしに尻を居へたる葛西舟　里
御八日講に参る夕月　茶
嘘に紛らかしても露寒く　老
秋の流の藍瓶に入　里
童が照り〳〵法師いとなみて　東陽
尾張なごやも神無月哉　外

ウ
寒菊や今も糠のかゝる也　　茶
　爺が命をつなぐ水飴　　老
春雨は平野の方へ降去て　　里
　車の御旅に運ぶ雛の音　　陽
遍昭が花もはら〱咲くならん　　外
　みそすりかけて箱根越す也　　茶

我春集　文化八年

『七番日記』の閏二月十三日の日附のところは、たゞ「雨」とあるばかりであるが、成美亭でその雨中の閑を兩吟に耽つたのであらう。『成美家集』に「花の句あまたよみける中」とある句なので、當座の作ではない。一茶が見てよしとして脇を附けたのが一歌仙となつたのであらう。ノ左の『一覽集』には二月十二日となつて居る。

文化八年閏二月十三日

花を折ル心いく度もかはりけり　　成美
　さく〱汁の春の夕暮　　一茶
鳥打がかすみ（イ本（に））の布子ぬぎ替て　　美
　あらうつくしの橋のかけ様（イ本（と橋かけよ水））　　茶
箕であふつ糠（粉）の先の三ケの月　　美
　木槿かざして人の行らん　　茶
ウ
赤染が露の印の石を見て（イ本（ほのみえこ））　　美
　あらくれ武士に身を任せッヽ　　茶
匂ひなき木地の小箱を打詠　　美
　涼しき足しにならぬ（イ本（ならぶ））柿の木　　茶
短夜の袴をぬらす地藏講　　美
　欠法度と書て張る也　　茶
笠程に湖見ゆる窓きりて　　美
　皺うち〱よばる旅人　　茶
山雀の袂をぬける月寒し　　美
　うき世は（イ本（の））花の胴ぶくら哉　　茶
舟にめす入道どのゝかげろひて　　美
　長閑也ける乞食の舞　　茶

二 鐘聲あれが大和の西なるや　全
　明家へ遣入る一期つたなし　美
白梅の片開きなる年とりて　茶
　あばたの君と誰か名によぶ　美
戀衣大行灯に打かぶせ　茶
　三輪の烏が耳につくなり　美
秋風の賢者を流すはりま浮　茶
　藥王品の草に入る月　美
桐一葉三葉四葉にかや葺て　茶
　雨の茶湯の人を待かね　美
古沼に小桶を浮す夕げしき　茶
　財布おとしていふ事もなし　美
ナウ ほか／＼と壁の穴から花の春　茶
　子日を老にくやむ針立　美
東風吹ばほまち無盡のはやる也　茶
　宵は更しか黒犬をふむ　美
臼唄のわか松様もねたましや　茶
　杉の葉程に髯は細りぬ　美

成美十八句　一茶十八句

物見塚記　文化八年

雲耕庵は一瓢の別号である。一瓢は江戸の郊外日暮里の本行寺住職であるが、『七番日記』を見ると一茶をよく其の寺に泊めて俳諧を試みてゐる。此の卷は兩吟で一瓢の著『物見塚記』に發表したのである。『七番日記』の同日には「折々雨」とあるばかりで記事はないが、その雨こそ究竟の俳諧日であつたらう。

五月四日於雲耕菴

夕暮や蚊が嗁出してうつくしき　一茶
　すゞしいものは赤いてうちん　一瓢
露しぐれはら／＼松も寶にて　茶
　筆一本に秋は來にけり　瓢
月かげの翌日は湖水のなきやうに　茶
　蒲團の下へ草鞋かいこむ　瓢

西念は願の通りなられたり　茶
　雨の相手にかきたてる灯か　瓢
桐のはなしのび車を筋違せ　茶
　繪かきの袖はひくによごるゝ　瓢
蕎麦切の寐覺の里に年寄て　茶
　丸くなくとも八月の月　瓢
召給へ蟀蟀きり〴〵す　茶
　しびれさましに河岸へふと出る　瓢
肥後米の買そこなひを笑はれて　茶
　人にかくして笠に字をかく　瓢
おほとけの花と〴〵く咲にけり　茶
　蒙古追討このかたの東風　瓢
蛤のもれば崩るゝ大坐敷　丶
　よい夢見する藥くれたり　茶
ひとりでも馴れば旅は歩行るゝ　瓢
　あらこと〴〵しつごもりの雪　茶
膳棚は鼠のものかとばかりに　瓢
　二人がふたり京ぎらひ也　茶

碁にまけて詠むる空も靑くこそ　瓢
　野なら山ならみなころもがへ　茶
押出す七里の船に素湯焚て　瓢
　南無觀世音ありあけの月　茶
白露の足はいづれにさし入む　瓢
　伐となかれ窓の葛華　茶
宗旦が末の弟子とも成たれば　瓢
　深山しぐれのうれぬ日もなし　茶
をしまれて死るは人のまうけ物　瓢
　そのきさらぎのみぞなる空　茶
うめぼしの核をはうるも花ごゝろ　瓢
　文化八年日暮里の春　茶

遺篇　文化八年

一峨は葛飾派と殁交渉で今日庵を再興した獨立判者である。此の半歌仙は『七番日記』の八月廿三日「雨　一峨兩吟」とあるのと一致して

ゐる。一茶は同月十二日流山から江戸に戻つて隨齋及び松井亭に同居してゐるので、多分一峨亭で行つたのであらう。

文化八年八月

白露を見て居る人のうしろかな　一峨
　鳩の夕暮鹿のゆふ暮　一茶
萩二本花の名月とて過ぎぬ　仝
　やつと提げ行く大釜の蓋　峨
庫守の白きかしらのめでたさや　仝
　竹の秤にかゝる初雪　茶
さゝ啼の鳥にしたしき靜かさは　峨
　初瀬の御山に餅たてまつる　茶
こそぐればこそぐりかへす面白さ　峨
　そも〳〵けふは四ッ月のそら　茶
卯の花の戸張も替る伊勢の宮　峨
　棚なし小船急けものども　茶
一〳〵に尊きおらが顯如様　峨
　十八丁の山ざくらかな　茶
朝よさに心の花もにほふ也　峨
　窓の穴からほのかすむ月　茶
白河の關の蠅なら笠きせん　峨
　世の中よかれ太皷たゝきて　仝

株番　文化九年

利根川を隔てゝ布佐と對する布川の月船亭で越年し、正月廿三日北へ四里ばかりの守谷に入つて西林寺の客となり、翌廿四日この兩吟を行つたのである。「おのくたら三百文の櫻かな」は鶴老の西林寺中の櫻を詠じた一茶の有名な發句である。

文化九年正月廿四日

霞日の咄するやら野べの馬　一茶
　へそにあてたるやき飯の春　鶴老
几巾庄屋の松に引かけて　丶

朔日汐のやうな夕月　茶
綿市をいざ迚鼓打ぬらん　丶
露もつ艸を今しもて來ぬ　老
ウ
侘ぬれば杜の數もむづかしく　丶
車序に越るあふ坂　茶
夕立のかきなぐらるゝ恨みにて　老
お竹如來を祭るさゝ百合　茶
惟然坊が鼻のひこつく涼風よ　老
天和二年と壁に張る也　茶
薄月のちら〱蝶の世となりぬ　老
大かはらの花にまぶれる　茶
青草に獅々の頭を投出し　老
あらありがたの那智の晩鐘　茶
ひよろ長くつき並べたる橋の錢　老
臼ころがして皆あそぶらん　茶
ニ
牛の子も殿の御紋をきたりけり　丶
黄色なめしにかゝるむら雨　老
うれしさを蕗の廣葉に書つけて　茶
閨の灯の見ゆる節穴　老
御馳走に鴎なきそ角田川　茶
としとり豆をはかる赤貝　老
木のはしの親をひたすらおがむ也　茶
咄に聞し大はらの里　老
有明の裸祭りが始りて　茶
九尺四方のきりの葉がちる　老
露寒き塩茶の淡に住ならひ　茶
又來る人も狐なるべし　老
ナ
輿にざく〱花を吹つけて　茶
苦みのぬけし壬生の念佛　老
めし給へ爺が艸餅召し給へ　茶
山時鳥はや過にけり　老
眉墨のたしにもならぬ杜若　茶
鈎簾のうしろに立る仇人　老

株番　文化九年

「おなじく廿八日」は前の卷の「正月」を承けた

ので、『七番日記』には「南吹始終不レ止」とあるが、その風の日な雨吟に耽つた譯で、一茶の擧句、さあ是からはおれが春風」に元氣がはり詰めてゐる。『遺篇』にあるのも同一で日附がないだけである。

おなじく廿八日張行

鶯も雀と寢てや軒の松　鶴老
ほんまの春よけさの有明　一茶
一かすみ舟こぐ人にはじまりて　ヽ
石をひろひに出たる小わらは　老
おとゝひの連哥にまけてあやめ引　ヽ
桶の中からほたるとぶ也　茶
ウ 八九年野上の酒にわかやぎて　ヽ
走り出てもしのぶ俤　老
たゝら踏ム音も師走のたゞ中に　茶
大山伏の兜巾すゞ掛　老
鍋飯につゝさす笹のそよぐ也　茶
圖にはづれたるむら雲の月　老
今捨る身の思出にをどらばや　茶
志賀の薪は露にぬれつゝ　老
ほの〳〵と颪の辻の風の吹　茶
山をゝしへて逃す山鳩　老
能（登）とどのゝ袖かけ櫻咲にけり　茶
ひゝなの宵の虫歯かゝへる　老
ニ 行春を追ッ立るやらたゝき鉦　ヽ
鈴鹿は曇る宮の御馬　茶
ちる芥子のかるはづみなる泪にて　老
茶汁にかゝれ夢のうき橋　茶
一休の前に備へし小長刀　老
てうちあはゝで暮す末の子　茶
鳴雀きのふに替る寒かな　老
河内ノ國へ三足ふみ込　茶
茶をまいれ江湖崩れの羅漢達　老
そも咲たりな垣の朝皃　茶
大名の寢間迄月のさし入て　老

こんな度の角力面目もなし　茶
されバこそ美人に似たる角田川　老
なんぞふるまへ婆々が艸庵　茶
百年に一度かそこら鶴の鳴ク　老
おの〳〵赤き木綿たつ也　茶
初花に角を並べる芋頭　老
さあ是からはおれが春風　茶

蕉門中興 俳諧一覧集　文化九年

柏原の諏訪神社境内に句碑のある名高い一茶の發句である。「株番」には「賀二治世一」といふ詞書がある。「七番日記」には同年二月に見えるから、「株番」を參照して同年作の兩吟と見てよいであらう。鶴老の脇が「鶴と遊ばん龜とあそばん」といふ縁喜のよい句なので、治世を賀する俳諧としてふさはしい一卷である。

松陰に寝てくふ六十よ州哉　一茶
鶴と遊ん龜とあそばん　鶴老
月影のだん〳〵細き春なれや　、
八重山吹のかくす行燈　茶
鮓賣の聲をつんつと東風吹て　、
子どものはしる辻の獅子舞　老
むく起に肝のつぶれし蚤の跡　、
五尺のあやめ見ぬ別れして　茶
うき人の鎧も山に朽ぬらん　老
あられたばしる朔日の膳　茶
又ふけと又せがまるゝ螺の貝　老
あほうに長き加賀の金澤　茶
ほちや〳〵と餅屋が月は出たり皃　老
鈴ふりふたりいそぐ秋かぜ　茶
雁がねの落來るほどにくるほどに　老
寐莚も捨よ風呂もわかせよ　茶
ありがたや東叡山の花の雲　老
かすみたがりて歩行供の衆　茶
鶯に赤の御飯をふるまはん　、

不二をむかふにしたる海士が家　老
しのぶ夜はたゞどひやうしに明過て　茶
　ひぢ笠雨の移り香をとく　老
青すだれ三日都といはゞいへ　茶
　竹の子堀に其角嵐蘭　老
宵の月はした祭は過にけり　茶
　露一めんに三井寺のかね　老
不甲斐なき御最期かくせ糸芒　茶
　菓子をもらひに出たる山猿　老
權爾宜が小春日向にはだかりて　茶
　時雨の舟のあともどりする　老
山城の入口見えて茶のけぶり　茶
　菩薩の皃の眞しろき也　老
梅が香の垣の草履は五文にて　茶
　花に吹れて参る糞汲　老
格別に世中よしとなく蛙　茶
　藍で染たるあけぼのゝ空　老

株香　文化九年

元旦の題で「云なしの花」に就いての論爭を記して、その後に此の兩吟を掲げてあるが、此事に關係ありとは認められない。「松陰に」の卷と同じく鶴老亭で試みた兩吟であらう。發句に治世を賀する心持があるのでさう思はれる。これ亦雜の歌仙である。

彌陀佛もゆるせし亀の齡哉　鶴老
　和哥の流を染色の山　一茶
有明の初花守に補せられて　、
　大蛤に春は立けり　老
めり〳〵と霞の中をおし歩き　、
　世はこと〳〵く更衣する　茶
ウ小莚の子ににぎらする芥子花　、
　局の泪ほねをとくらん　老
御灯を初瀬の御山につきつけて　茶

追灘（儺）の宵のあらし風　老
酒くれて長尻どのを歸す也　茶
髻切ておくるふる郷　老
宗因の大事がられし月が今　茶
ぱつと立たる小雀山がら　老
お花葺ほやのばくちがざは〱と　茶
兒に放れたる狩人が妻　老
うつくしき年うち暮て仇火たく　茶
さの〻渡りに馬を逊して　老
二
竹垣も翌の御用に立かとよ　ゝ
袖つゝ張て空を詠る　茶
涼風の西も東も砧うつ　老
聖靈もまいれかまくらの米　茶
ひよろ〱と枴の先に月出て　老
山から見ゆる土間のへつゝい　茶
九十九の母をしばしと篗の上　老
足利様の御代の青雲イ本（空）　茶
艸枕昆布かぶつて寢たりけり　老

赤鬼致せやよ太郎冠者　茶
大雪の夜に大鍋をかりかねて　老
辨才天をおくる川舟　茶
ナ
鶯のとしより聲のなつかしく　老
志賀の菫に丸二年すむ　茶
咲く花に大小さしてまかり出　老
べそかく妹を駕にへし込　茶
百年も思ひ切たる文書て　老
我名やなきそ奈良の小男鹿　茶

株番　文化九年

はし書の三月三日は『七番日記』によると文化九年になるが、一茶は同月一日流山に入り、二日は風邪ごゝち、三日は「曇　晝より晴」とあるから、此の兩吟は流山の双樹亭で行つたのであらう。双樹は一茶の一所不住の境涯を「翌は又どこぞの花の人ならん」と憐み、一茶は「川なら野なら」悉く小てふの舞ふ春である

と樂天的な脇句を附けてゐる。

三月三日

翌は又どこぞの花の人ならん　双樹
　川なら野なら皆小てふ也　一茶
水風呂は（イ本（の））ふひして焚きぬ田うち時　樹
　宿ちんだけの居合はじめる　茶
腰伸よ〳〵卯の花うす月よ　樹
　藪蚊の中に御馬よぶ聲　茶
ウ
手でなでし壁も三とせの夢にして　樹
　遊女が墓に膳居へる也　茶
そこといふ所も一里の上總路や　樹
　貧乏鳥すこししぐれよ　茶
掘植ルひよろ〳〵松に餅くれて（イ本（つれこ））　樹
　濱の喧嘩に又枝がさく　茶
布施に引荒山畠淋しげに　樹
　猫の眞似して月を見る哉　茶
風の秋らつせの舞がはやる也　樹
　柱に張りし御彼岸の事　茶
淺ましの老を櫻にかこつけて　樹
　志賀と一ッにかすむ鍋ぶた　茶
二
篇竹のそよぐ先から歸鴈　ゝ
　与作屋敷に金ほりそむる　樹
丸寝でも鏽でもふらば降れかしな　茶
　縛りからげて送る山笹　樹
六條は忍びぐらしによい所　茶
　朝妻ぶしをうたふねぶたさ（イ本（む））　樹
輿にくゝしつけたるけしの花　茶
　死も活るも珠數の世の中　樹
べら坊と人に呼るゝうれしさよ　茶
　子ばかりふへる畠新田　樹
名月の大杉様を祭る也　茶
　一本橋に名をつける露　樹
ナウ
風の吹芒の下に住なれて　茶
　紅葉折にも琵琶（巴）かつぎつゝ　樹
僧正の御成あるやら鐘をつく　茶

犬の巣をくふとうふやが門　樹
さく花の何へんてつもなかりけり　茶
常盤(磐)がましき春の松風　樹

世美塚　文化九年

上總の白老が坂東三十番高藏院觀音境内に造立した芭蕉の蟬塚の爲めに作つた脇起し歌仙である。この兩吟は『世美塚』の「それでこそ御時島松の月」の發句が『七番日記』の文化九年三月にあるので、同年の作と見なければならぬ。『世美塚』の解題に白老を高藏の僧としたが、『諸國翁墳記』によると上總望陀郡矢那鄕の人である。

やがて死ぬけしきはみえず蟬の聲　はせを
何わすれ草あか〱と咲　白老
むら雨の臼十ばかり月さして　一茶
秋のはじまる番俗かな　老

鳩のゐるはら〱垣のうそ寒く　茶
人まつ船に籠を吹せる　老
子ども等が曲突神をはやすらん　仝
元祿五年夏のゆふぐれ　茶
膳立も牡丹の花のさかりにて　老
あらさがなしや瞽女のさげ帶　茶
おとゝひの夢を筏に押ながし　老
須磨のけぶりときゆる相談　茶
我やまの櫻を人は花といふ　老
三文もちもみなつゝじ也　茶
陽炎のちよろ〱川に棒さして　老
はした無盡を觸る夕月　茶
よい虫に角力とらせて笑ひけり　老
萩の下から美濃の大垣　茶
鳥が飛び風が吹くとて普門品　仝
宮司の聟のまいりさぶらふ　老
野邊の松のべの榎にかくれ合　茶
あられの玉をいはふ君が代　老

埋火に化もいたさず年とりて　茶
豆腐つくりの星をおぼえる　老
一番の大聲あげる葛西船　茶
烏も見えず塔の足代　老
あらし吹草の小隅に住ならひ　茶
親の羽織を二度おがむ也　老
月てらせそれ世の中は十五日　茶
露にふられて戻る獅子舞　老
ぺん〳〵と百日紅のふがいなく　仝
はなし披露の大鐘が鳴　茶
けし炭にかへて曬ひし生ざかな　老
二日寐たればほんのはつ春　茶
加茂川の華よ囀る朝すゞめ　老
ひら〳〵狀をはさむ枸杞藪　茶

株番　文化九年

上總の富津で貞印尼の發句で作つた五吟歌仙

である。一茶は同年三月廿八日富津に入り、四月四日女俳人花嬌の三周忌に「目覺しのぼたん芍藥でありしよな」と手向け、同七日に此の連句を催したのである。『七番日記』にその旅程をかゝげてゐる。徳阿は大乘寺の僧・白老は同國矢那の人、六日の日記に「白老來る」とあつて七日の歌仙に出席し得たのである。工雪といふ人は判然しないが富津の者であらう。

四月七日張行

短夜の草に生れしとんぼ哉　貞印
布つく唄に夏がなくなる　一茶
五六枚新らし疊淋しくて　とく阿
茶の水汲に參る夕月　工雪
露時雨はら〳〵松をすぢかひに　阿
袷羽折を馬にかぶせる　雪
ウ　夕市の三輪の御山に造酒上ん　茶
子どもがしらの迯る鬼面ッ　印

冬枯のよろこび鳥鳴にけり　雪
　かさい隣の藪に住つく　白老
明暮の涙の玉に灰かけて　茶
　謎に作りし峰のしら雲　老
僧正の刈給ひける女郎花　阿
　ふる廻風呂のしづかなる秋　印
月うすき吹に胡麻をはかり込　老
　おの／＼祝へあれが木曾山　茶
ちる花に寢ぐせの付くがおもしろき　阿
　文珠(殊)を刻む窓の陽炎　印
ニ
うつくしき飯を燕の笑ふらん　老
　母のふとんをほふる川舟　茶
君が代は嘘つきどもも涼しくて(イ本(どのも))　印
　牛のうしろの鈴が鳴る也　阿
幻の鳥羽田へ雨をやり過し　老
　いざ／＼一首侍らんかな　茶
かた衣の終に直がなるとしの暮　印
　丸い枕をころがして見る　阿

したゝかな赤かう薬のうらめしや　老
　山ほとゝぎす志賀をあらすな　茶
宵の月鍋を莚に引ずつて(イ本(鍋と莚を))　阿
　芒がもとの祭り過けり　印
ナ
うそ寒しさむしと鐘のなるまゝに　茶
　何の願ひの錢みがくやら　老
臍のをはきのふ埋たる門畠　印
　ひたちこと葉のまだ抜ぬ也　阿
さく花は我らがための芥にて　老
　蕗の葉ごとに餅を並べる　茶

貞印八句　一茶九、徳阿八、
工雪三、白老八、

株番　文化九年

雉啄は安房の人、相撲の鳴立庵で白雄門の葛三に師事して居たので、肩書に房州葛三門人と特記したのであらう。『七番日記』には四月廿六日「雉啄來歸」とあり、翌廿七日一茶「大

乘寺に入」の記事があるので、その日此の四吟歌仙を催した事は疑ひない。

四月廿七日於二大乘寺一張行

朔日や給もたねば蓑をきる　房州葛三門人 雉啄
とある小家も青すだれせり　一茶
へら鷺の見事に並ぶ舟引て　とく阿
塁の西瓜を荷ふ人聲　貞印
うす月の少冷つき給ひけり　茶
雛の兒見る萩のいはひに　啄
ウ
小はつせの大鐘聞にいざゝらば　印
人が(阿呆)安房といふがうれしき　阿
鹿の道をその道にも雪降りて　啄
壁の先からとしは暮けり　茶
筋違におらりと居るそばの膳　阿
土器うりに折らす草花　印
みちのくの月夜〱に御汨　茶
閨の灯の露にかはりて　啄
イ本(露)
闇當の鳥居をどつと囃すらん　印
必返すな莚のからかさ　阿
さく花の一重のうちは鳫が鳴　啄
長刀形りの川かすむ也　茶
ニ
投節に那智の御山の畠打に　阿
螢のやうなちよつとした戀　啄
さらしなの石の世並が直るやら　印
風が吹込む土間のへつゝい　阿
馬士に默禮うけし帘　啄
彌勒菩を祭る名月　茶
稲の穂や榎の股ノ芽を吹て　阿
鶉鳴かせに猿澤へ行　印
綾錦それもけぶりになさばやな　茶
鏡戸さして白髪ふりむく　啄
誰が子ぞ陶さけて今かへる　印
將棊法度の雨の夕暮　阿
旅人に鯉の鳴子を引きられ　啄
イ本(くわり)
くるり〱と暖になる　茶

ありたけの花のこぼれし朝朗　阿

たて茶の淡のそよぐ春風　印

何袋　文化九年

江戸橋町に元夢の今日庵を再興した一峨の著『何袋』の爲め此の三吟を催したのである。『七番日記』には九月二日「今日庵にて一昨、素玩・一峨半歌仙」とあるが、それとは相違して成美亭で興行したものであらう。『何袋』の成美「折杖記」は同七年の記でその次に載せてあるので、或は七年の作でないかといふ疑ひも起るが、『何袋』出板の同九年の作と推定する。

三唫

人も見るや桐の一葉のけふもちる　一峨

月のほそさにいふ事もなし　成美

白露のかた山しぐれ壁ぬれて　一茶

しらぬ小鳥が來てもうなづく　峨

節季ゆのかろくすませし浮世也　美

階子のはしをわたす門川　茶

へこ牛の狂ひたがりし乳ばなれに　峨

まゝ子の君のあぶらかけたり　美

けふこそは鍋かぶり日ぞ百合の花　茶

餅をくはせてかける謎〳〵　峨

附木つく隣並びの店はりて　美

茂助佛が開眼の炑　茶

もろこしの芳野も月の廣き世に　峨

椎さへあればすまんとぞ思ふ　美

年のよる藥に松葉けぶらせむ　茶

花やちれ〳〵雪やこん〳〵　峨

古すみれ死はづれたる嬉しさは　美

東河内のおひがんの鐘　茶

あてなしに窮ゆく鳶の旅ごろも　峨

傘にかくるゝほどのわが宿　美

紫陽花もつゝじも文に書込て　茶

うそつき初し末の松やま　峨

門乞食いかなる人におはしけん　美
　ころは安元三月の空　茶
山吹を湯水にちらす時津風　峨
　寐て夏をまつ小酒屋のおく　美
淡路舟わらは一人それたのむ　茶
　蘆とはいはずよしと答へし　峨
月影や御所の御ふるの茶の袷　美
　泊瀬の山霧櫻井の秋　茶
摺小木も引板の相手に成果て　峨
　いとまごひぞと比丘の出らるゝ　美
あらしふく黒崑蒻の朝氣色　茶
　へなつく舟をわたし始る　峨
誰かしる花のあちらの隱れ里　美
　ちから一ぱい雲雀さへづる　茶

遺篇　文化九年

『七番日記』の文化七年八月廿一日に「久臧歌仙終」とあるが「五十過ては」のはし書は同九年以後でなくてはならぬので其の時の連句でない。九年八月の發句に見えるから兩吟の月日は知れないが、同年の作と推定してよからう。

五十過ては

露はらりはらり大事の浮世かな　一茶
　何所からふける松の名月　久臧
鴈の啼く上田三反水落ちて　茶
　長刀持の眠りつゝ行く　臧
春霞むしやうに咽の乾くなり　茶
　すみれ咲く日に壁を塗りかけ　臧
二の午も過たる藪の小行燈　仝
　いそぎの駕籠へ被衣なげこむ　茶
櫛けづる兒の泪のおがまれて　臧
　菖蒲ざぶ／＼ひたる佐保川　茶
酒桶に柄杓をそへて人を呼ぶ　臧

念佛舞に爺が泣くぞよ　茶
破れ笠松にかぶせて歸るらん　臧
連歌を賣てくらすひと里　茶
五日月春の寒さに消かゝり　臧
橋から右は花へ行くみち　茶
蝶ゝに飛ぬけらるゝ門立て　臧
幣ふる役をうけとりにけり　茶

遺墨　文化十年

文化十年の正月三ヶ日は柏原で借家住ひをして居たが、四日は「七番日記」に「雪　長沼に入る」とある如く、柏原と同じ水内郡の長沼に行脚してゐる。八日は「住田に入る」とあつて素鏡亭の客となり、經善寺の呂芳等と此の七吟歌仙を催したのであらう。一枚の紙に一茶の清書したもので、もと柏原にあつたが、今は越後の入村誠氏の所藏に歸してゐる。入村氏の手寫して送られたまゝ掲げるが、看齋は素鏡の別号攸齋の誤寫でないかと思ふ。

文化十年正月八日

せい出して蝶舞へ翌は十五日　柏我
朝皃も蒔く春風も吹　一茶
うすがすみほろ味噌うりに始りて　ろ芳
車法度と書るかり橋　が
有明の月にすじかふ壁の穴　春甫
なぐさみがてら衣打也　茶
やよやまて共柿買んよしの馬　芳
忍ぶたよりに植る松の木　我
來るとしも古都になぶられて　甫
雪でつくねし那古の觀音　茶
世中はたゞ丸かれとなく鳥　我
客の馳走にいぶす豆売　甫
湖の月のつく／＼涼しさよ　春和
見て居るうちにひらく姫百合　きくと
鼓打て終に叱を直す也　看(マヽ)齋

いせの勅使を送る山鶯　我
假小屋の貧乏樽に花咲て　茶
雛の市のはや過にけり　和
鶯にいさゝか鞠を蹴ならひぬ　茶
壽永二年の夢がたりして　我
ねんごろに朝な〳〵のかし小袖　甫
肴の安いみのゝ大垣　茶
只たのめ中の中でも鐘が鳴　和
ざぶととび込居風呂の月　我
秋風に昔哥舞妓のはやる也　茶
硯へこぼす刈かやの露　齋
嬉しさに諏訪の御灯吹けして　我
妹が名にせようね火香久山　茶
離家に梓の聲の細〳〵と　齋
しぶ〳〵晴る空の夕暮　甫
五六人酒塩とりに舟さして　茶
芥けぶりも春は來にけり　我
たのしさは赤土染の花衣　茶
茶つみの唄を二つ覺る　我
暖さうに南下りの片山家　茶
かまくら殿を祭る酉の日　丁

遺篇　文化十年

梅松寺の知洞と大綾と三吟で催した歌仙である。『七番日記』の同年四月十八日「晴　六川ニ入」として、翌十九日「晴　大綾同道長沼上町ニ入」とある其の十八日に行つたのであらう。知洞も大綾も高井郡六川の人である。

けふの日や替てもやはり苔衣　一茶
せどは卯月の花だらけ也　大綾
むら雀松から松へ繩張て　知洞
舟よ〳〵と呼る笛持　茶
月影に錠のかゝらぬ門もなし　綾
芋に實の入る風の吹らん　洞

鳴雁も殆ちかし鞍の上　茶
（イ本（あましと））
　珠數つまぐれとかまくらの鐘　綾
是式の窓さへ霜の朝けしき　洞
　犂の氣立を諷ふ餅搗　茶
思ふ事紙縷五尺に見せばやな　綾
　いつより早きむら鳥かな　洞
川舟にばら〳〵西瓜ほふり込　茶
　萩のうしろの小酒屋の月　綾
虫籠を握りながらに寐たりけり　洞
　すは宮様の御通りぞよ　茶
花盛浮世は慶長十九年　綾
　どつかり霞む古郷の松　洞
萱汁に藥師祭のはやる也　茶
　馬の尻尾に袋かぶせる　綾
妹は大竹原をゆづられて　洞
　涼しき風に配る木枕　茶
おかしさよ笛も李も三文に　綾
　熊野参りの箸をいたゞく　洞

板壁やおくの狀日も年暮て　茶
　頭巾の先へ消る三ヶ月　綾
千鳥鳴けかゝる小橋も名所也　洞
　大事の〳〵撫子をたく　茶
念佛は上總訛りも殊勝にて　綾
　加賀蓑二ッ垣に吹かるゝ　洞
まてしばし次郎三郎さきん達　茶
　よき夢見する水風呂も有　綾
朝朗棚のぼた餅春めきて　洞
　どつこも同じ花の世の中　茶
揚雲雀ちやくや何かいそがしき　綾
　そよりともせぬ軒の染絲　洞

木槿集　文化十年

信濃長沼の一茶門人魚淵の發願で筑紫高良山の桃青靈神を勸請し、「道端のむくげは馬に喰れけり」の句碑をその居村に建立した際の歌

仙である。『木槿集』は戸倉の虎杖の序文によつて同九年出板として『一茶七部集』に入れて置いたが、同年九月六日は一茶は江戸に在住するので此の兩吟を行ふ筈がないから、『木槿集』の出板は十年としなければならぬ。十年ならば『七番日記』の九月六日、長沼の呂芳亭の客となつた記事とよく合ふ。

山川眺望、不塞樓に招る丶夜は
九月六日也けり

秋おしめ〳〵とか昔松　一茶
ほの〴〵月のうれしかりけり　笹人
雁の鳴川の小隅に笊ふせて　魚淵
商人ふたり風に吹るゝ　程我
梅咲て大事の年のくれそうに　五柳
豆など洗ふ音のさやけき　厭路
裏富士はどの窓からも見へる也　雪丸
何やら祭榎一本　長阜
夕顔の實ならぬ人に思はれて　有麥
忍び倦たる宵のかやり火　管根
風吹ばわかの浦にぞ似たりけり　三千可
宗祇めかして酒にたをるゝ　舞凉
あばら家のはなの先より晝の月　文來
萩に浴せる洗足の水　龜石
山霧の世中よしと騒ぐらん　二休
和尚の蓮に丸書いて置　相月
ある程の花は一度に咲にけり　路
雉子追ふ番にあたる夕暮　柳
來い〳〵と風呂の貝吹く薄霞　人
山のはづれに見ゆる女盲宿　麥
御藥を無理に進て南無大悲　阜
菖蒲のひらく二十八日　丸
白暎の行燈部屋に風入て　峨
貧乏町のばか長き哉　來
澁柿の澁い顏するをかしさよ　凉
待もせぬのに有明の月　可
白露の終のけぶりは誰が妻　根

机にそよぐ浮舟の巻　休
漣のさら〳〵寄る庭持て　月
茶を挽小僧居眠にけり　石
片照の壬六月中時分　一茶
里の便りにちぎる青梅　淵
ふつとして仲の直りし西隣　山月
法事すぎても米を施す　几來
初花の烏帽子狩衣おかしくて　淵丸
小さい草も春風が吹　執筆

迹祭　文化十年

魚淵の勸請した桃青靈神の法樂俳諧である。その脇句の「文化十年十月吉日」が兩吟を行つた年月を確定してゐるが、『七番日記』によると、同月二日「長沼上丁に入る」とあるので、一層それが明瞭になつて來る。『迹祭』の出板は魚淵の跋にあるように同十二年で『木槿集』より三年後になる。魚淵は佐藤氏、正風院はその庵号である。

法樂

御寶前にかけ奉るはつしぐれ　一茶
文化十年十月吉日　魚淵
酒だるに桔梗かるかや菱書て　茶
わらじ掃こむ背戸の入海　淵
ありあけの左り明りの長閑さに　茶
梅一本も我世なりけり　淵
ふとん着て寐たる山から先霞む　茶
大福餅でまねく旅人　淵
仇雲の根なし咄を帳につけ　茶
屁闔なかまに猫も入けり　淵
門前の婆ゞが榎の凉し過　茶
連歌めせ〳〵萩もゆ　淵
ましばし三五夜中の大津鶴　茶
雁の功者に下るしら壁　淵
飯にこよことの貝の鳴ほどに　茶

まうしあはせて羽織着る也　ヽ
ちる花のひとつ〳〵に小淋しく　淵
鳩に節句をさする荳畑　茶
陽炎の鐘は御酉のかねなるや　淵
母の顔見に下る川ふね　ヽ
人ごとに千代よろづよとちぎり捨　茶
花なでしこをかざる櫛ばこ　淵
三十日経汗てら〳〵と奇妙院　茶
松の下まで膳をひろげる　淵
たのもしき雨がはら〳〵筑波から　茶
いで此沼の瀬ぶみいたさん　淵
赤いのはあのもの伯母が木槿垣　茶
ほまち祭りの小けぶりの月　ヽ
泣貨の柿をいろはと並べ置　茶
霰来よ〳〵うらの畠に　ヽ
なま化の狐を馬にいだきのせ　淵
いま一休と人のよぶ覧　ヽ
木で鼻をこくつたやうな西隣　茶
目利の通り晴るゝ朝空　ヽ
我神と祝ひはじめに花咲て　淵
俳諧さやづる雀うぐひす　茶

遺篇　文化十年

其一庵は呂芳の庵号である。はし書の十月十二日は「七番日記」に「長沼に入、経善寺有芭蕉会」とあるのと一致してゐる。呂芳は其の経善寺の住持であつた。

文化十年十月十二日於其一庵

芭蕉忌

時雨する今日とて古りし上着哉　一茶
塚にかならず千鳥啼也　呂芳
白妙の壁がをり〳〵木隠れて　完芳
月のあかりに膳をひろげる　允兆
秋の蝶露のやどりを嬉しげに　杉谷

手ごろの石に衣うたばや　茶

遺墨　文化十年

信濃の湯田中には一茶の門人希杖及び其翠が住んで居り、殊に希杖は湯本といふ温泉宿なので、一茶はちよく／＼出掛けて泊り込んで居た。此の三吟は『七番日記』に同年十月廿九日「田中に入る」とある記事と一致するので、その日の興行らしく、『株番其他』に現存の遺墨を掲げたものに據つた。

文化十年十月廿九日

俳諧の連歌

湯けぶりやそよとあしらふ初時雨　一茶
ちどりにあれし笠を小座敷　希杖
茶俵の棒ぐみ五人月を見て　其翠
折られぬ萩のはつとさく也　希杖
閑さにはしらによれば冬近き　希杖
なげ捨てある橋のふれ状　其翠
山しろや小幡の馬に餅くれん　茶
髪きるとての哥もならふか　杖
うつくしき聲で階子をかりらるゝ　翠
せどの御富士を祭る六月　茶
紫陽花の花に兎を追込て　杖
律義の助が好なあつ風呂　翠
廣嶋の徳意にたのむさよ砧　茶
月をもしらぬ軒の揃ひし　杖
蜻蛉のひようしに急ぐ六七里　翠
猫からさきへ渡す川舟　茶
もの忘れする程花のひろがりて　杖
世は出かはりのさなか也けり　翠
谷汲にうは着納てかすみ汲　茶
朝のけぶりのせい出して立　杖
鴻鶴が水を見かけてさはぐ也　翠
闇とりにして涼むまる窓　茶
うき人を疊の上に置かねて　杖

小松折りツヽ翌をうらなふ　翠
笠賣ん此かさうらん雪見笠　茶
鱠うつ間にかへる小車　杖
かもまつり見ると巾もあまり有　翠
不形りな山を筆でかぞへる　茶
錢になるまむしの膽にも軒の月　杖
二百十日のおとなしき水　翠
子ども來よきちかう刈かや女郎花　茶
名古曾の雀山鳥に鳴　杖
火を打て昔の旅に成りにけり　翠
謠ひのやうな春の夕暮　茶
ちる花を湯桁にすくふ暇あれや　杖
なをおしまるゝ杖の陽炎　翠

遺篇　文化十年

麥之も皐鳥も高井野の人である。發句は『七番日記』の同年十二月にあるが、高井野に入つた記事はない。或はそれより後の三吟かと思ふ。しかし確證を得ないので、發句と同時の作として置く。

梟よのほゝんどころか年の暮　一茶
藪の奥まで掛取の聲　麥之
この方が下街道と石建て　之
梨子も花梱も二文づゝなり　茶
今年又親の供してけふの月　仝
霧絶え〱に寒き長橋　之
御夕時の鐘は御西か御東か　之
しばらく孫をよそへ預ける　茶
次の間をさつと掃出す俄客　仝
汗拭ながら松を見るなり　之
谷汲の谷の咄しに實が入て　之
膳の際より出る名月　茶
うしろから無理に着せたる古袷　仝
躍歸りの淋しかりけり　之

しろ〳〵と蠣殼町の裏通り　之
　上總の山も見ゆる塩風呂　茶
愛嬌に花も一本植さして　仝
　小便無用すみれ蒲公英　之
春風に草鞋ずれをさする也　皐鳥
　女人講へも配る行燈　茶
三助と仇名呼るゝ嬉しげに　之
　雨が降るとて栗餅を搗く　鳥
象潟の合歡に發句をぶらさげる　茶
　近江で逢ふた人に又逢ふ　之
手拭を百反馬につけ出して　鳥
　六郎火を焚け雪の夕暮　茶
隣まで痘瘡神がござつたぞ　之
　ばらり〳〵と家鴨追込む　鳥
大の月のろりと上りたまひけり　茶
　折敷の上に白膠木かつ散る　之
わせ菊に地藏菩薩の家葺て　鳥
　隱居仕事に藥賣るなり　茶
牡丹餅をやるぞそこ退け子供衆　之
　日和もつゞく花も皆咲く　鳥
蕣を蒔けばさしたる用もなし　茶
　臼のかげろふ桶の陽炎　之

株番別篇　文化十一年

『七番日記』の同年正月に此の發句があるが、湯田中には二月五日に行つたのだから、此の兩吟は同日希杖の家で行つたらしい。一茶眞蹟の「株番」別篇に載するもので、梅塵隻藏本には別册がないので、此の連句も勿論收めて居ない。

あつさりと春は來にけり淺黄空　一茶
　西に鶯東に雪　希杖
青柳や大俎・板に雫して　〃
　御舟をゝがむ丘の人立　茶
有明の廿九日の凉しさに　〃

土鍋やくらん紫陽花の末　杖
ウ
いざ我も傘で越さうぞ春日山　丶
連歌座敷にあそべ雀等　茶
しら／＼ととらふのやうに夜明たり　杖
泪／＼に汚すすが蓑　茶
我戀は天神様に任すべし　杖
節季ゆはやせさくら山吹　茶
里／＼は松葉けぶらすうす月に　杖
霧ふきおろす圓覺の鐘　茶
牛ぞろり／＼山路の冬近く　杖
風の藥に梅ぼしを出す　茶
花盛りかるたにあきて寝たりけり　杖
足利どのゝ御代の春雨　茶
ニ
燕とぶ窓のわらぢは三文に　丶
うら松坂へぬける猿引　杖
けふも又白雲つかむ小いさかひ　茶
衣かぶせて忍ぶ行灯　杖
竹植よ壽永二年を夢に見ん　茶
熱田の宮へはなつへら鷺　杖
鼓打て駕舁どもを呼ふらん　茶
すかり／＼とかせる疱瘡　杖
風そよぐ三介早稲を皆刈て　茶
鹿の尻尾に入相の月　杖
うそ寒き隣並る人もあれな　茶
遊行を送る荒のしづまる　杖
さゝ波や志賀の都に夜の明て　丶
まて酒くれん菖蒲盗人　茶
渇けぶりにちんぷんかんを唱へ捨　丶
江戸の方から雨の降り來る　杖
それ／＼におのが花見と思ふ哉　丶
頭巾にためる菫たんぽゝ　茶

一茶文虎兩吟連句帖　文化十一年

信濃淺野の一茶門人文虎が、一茶との兩吟連句を手錄して置いたもので、現に同所西原伊

治郎氏の許に保存されてゐる。文虎は淺野の油屋で飯山藩の御用をつとめて居たが、一茶の爲めに其の終焉記をつくつたりして盡すところが多い。此の兩吟は『七番日記』の同年二月十六日「あさのに入る」とある時の作で、卷末に附記した「二月吉日」と一致してゐる。

俳諧の連歌

此やうな末世を櫻だらけ哉　一茶
今やひがんとほこるうぐひす　文虎
薄草履通さぬ程の陽炎に　同
朝茶の番をあてる有明　茶
秋來ぬと門の小松のそよぐ也　同
鹿に鳥に人に馴つゝ　虎
ウ 無緣寺の庭からぬける丹波道　同
腰かけ飯にかける冷汁　茶
我戀のはら〳〵麥は穗に出ぬ　同
美しき手に螢遣する　虎
村雨の木曾の御坂に宿とりて　同
はした喧嘩に棒（杢カ）のふりつゝ　茶
挑灯のほかりと消てうそ寒く　同
吹つぶれたる草庵の月　虎
初鴈に大長刀を引提て　同
盃流せ加茂の川原に　茶
咲花もたゞむちやくちやに過にけり　同
淸和を名乘ル者供が春　虎
ニ 何かしてやたらにはやる山の神　同
黄色な餅をくるむ落の葉　茶
てゝ親に仕上て見せる薄小袖　同
ねほけたやうな次郎作が戀　虎
霞ふる風が吹クとて酒の燗　同
千鳥鳴け〳〵我ガ禺田川　茶
百姓もなんぞの時は太刀佩て　同
十筋はた筋野路のやゝ寒　虎
水風呂に大聲あげる秋の月　丶
澁柿見せて狙を舞する　茶
象潟は晝に書てさへ小淋しく　丶

中あはせてひと餅かく　虎
ナ老松の曲り形なる年とりて　同
ぼた餅雪のどた〳〵と降ル　茶
朝市の辻の祠をはやすらん　同
ひとり目あけばぱつとかすんで　虎
兎角して花の都も十五日　同
いざめし給へつゝじ山冬　茶

文化十一年二月吉日

三韓人　文化十一年

故郷柏原へ江戸を引上げる事に決心した一茶は、故人となつた舊友を懷しみ、此の『三韓人』の出板を企てたのである。『七番日記』の同年十一月三日に「於二隨齋一三吟半歌仙」とあるのが此の「雪ちるや」の卷であるらしい。發句は前年十月の部に出てゐる。四吟歌仙であるが一茶自身を別にすれば、三吟となる譯なので成美亭の惜別俳諧と見てよからう。

石の上の住居のこゝろせはしさよ

雪ちるやきのふは見えぬ借家札　一茶
椙に雀の寒き足音　成美
鍋ひとつ其日〳〵がうれしくて　一瓢
たもとかざせば晴る夕雲　諫圃
京人と月のうき世をかたり合　美
丸書なぐる壁の秋風　茶
千貫に琵琶のうれたる露しぐれ　圃
山葵に鼻をはじく君が代　瓢
極樂の夫よ來よ〳〵咲華に　茶
小箱もかほれいざ蝶と寐ん　美
炮烙の二ッも破れる春の雨　瓢
かなしき事に濁る満　圃
住果ぬ寺を百里の迹に見て　美
大さかづきに入相の月　茶
頬かぶり菰盗人とはやされし　圃
おどりの後を野心にして　瓢
吹あらし垣に結こむ初瀬山　茶

遊びがちなる左甚五郎　美

三韓人　文化十一年

一茶が江戸へ「發足の折から」大慌てゞ歌仙半途で中止となつた卷であるが、『七番日記』の四月廿五日を見ると、文化十年は野尻、十一年は長沼に杖を曳いて居る。連衆は悉く長沼の人である。江戸へ行くつもりで氣が變つて見合はせたとすればそれでよいが、作の年代を明瞭に確め難いので、『三韓人』時代の作と見て置くより仕方なからう。

卯月廿五日發足の折から

江戸へいざ〳〵とやほとゝぎす　一茶
右は早苗ひだり卯のはな　春甫
市小屋に有明月の筋がひて　呂芳
茶呑に來よと笛をふく秋　魚淵
初あらしあつらへ通り過にけり　松宇
五尺の山も名所とぞいふ　允兆
二番目の膳はとつぷり夜に入て　春甫
參り候御犬三疋　一茶
あなにくの拵へ髭も凉しさよ　松宇
袖引雨のけふも降つゝ　兆
唐崎や松の小脇の家かりて　掬斗
つひの行幸の牛洗ひけり　春甫
子供らが錢蒴(蒔)け〳〵と夕月に　素鏡
桔梗刈萱やみくもにさく　斗
一人前栗もこなして仕廻けり　鏡
今や彼岸の谷(ヤツ)〳〵の鐘　篧人
此華をいくらも折れと札を立　淵
雀の分も青む萱畑　人

一茶立急して先しまひぬ

違篇　文化十一年

知洞は信濃六川の梅松寺住持である。『七番

日記」に六月二日「晴　知洞と田中に入る」とあつて、同四日「脩知洞歸」といふ記事によると、二・三・四の三日間のうち、希杖の家で行つた三吟であらう。

文化十一年六月

我宿は蚊遣の細いあたり哉　智洞
　魚呼ぶ聲や入梅のはれ口　一茶
五六人奥番匠の烏帽子着て　希杖
　御用の山と誰もいふらむ　洞
年々の角力もくろむ月影に　茶
　早稲もおくても招く世の中　杖
ウ
秋風の二木の松にやどらせん　〃
　此戀たのむ南無淡路島　茶
御馬にふはりと投る薄被(ウワキ)　〃
　葵の水のきよき六月　杖
待合もつれ〴〵ならぬ夜の茶に　〃
　大事の〳〵の髭を賣也　茶
いざ踊れ山伏村の小先達　〃
　烏もつれ舞ふ松島の月　杖
ちつぼけな餅屋の萩も盛にて　〃
　華子が魂をまつる草笛　茶
かし下駄にまた十ヲばかり恨みすて　〃
　舟の博奕のさかる夕暮　杖
ニ
猿叫ぶ蜜柑の中の紀三井寺　〃
　炭團丸めて年は寄けり　茶
塩風呂がさめる〳〵と貝吹て　〃
　百人前はいつも出す膳　杖
片隅にだまつて曾呂利新左衛門　〃
　一年ましに寒い兀山　茶
ふつとして石の小ま(マヽ)又はやる也　〃
　吉次が夢をやぶる赤坂　杖
合歡の花兒の唐輪に日の落て　〃
　月見の趣向壁に張けり　茶
うそ寒を余所へ語るた手取鍋　〃
　痳氣のつれに貰ふ秋猫　杖

繪に書いたやうに小雨の降出して　丶

　鳥居の角へかける灯籠　茶

念佛を敎へて蝦夷を放す也　丶

　子どもの踊唄によごれし　杖

朝の花もの喰ふうちも盛にて　丶

　蝶が下るぞ凧があがるぞ　茶

遺篇　文化十一年

『七番日記』の文化十一年十一月廿九日の記事に「訪二今日庵一峨一飯二奥州一昨廿八日ト云」とあるから、その時一茶が歸郷の決心を告げて惜別の發句・脇となつたのであらう。

送レ歸二舊里一

碓氷では時雨よ杖は輕くとも　一峨

　吾妻の空はみな小春也　一茶

迹祭　文化十二年

竹居士は善光寺の猨佐である。戸谷氏、享和元年故人となつたが、魚淵と同じく桃青靈神勸請の志望で、その事を果さなかつた爲め、「かたみの一軸をはしらにかけて」此の脇起しを行つたのである。「春祭の上座とす」とあるから、文化十二年春の興行であらう。

竹居士もこのくにに桃青社をうつし度と常にかたられけるが、事ならずして世をさりぬるものから、かたみの一軸をはしらにかけて春祭の上座とす

朝明の二階から來る小蝶かな　猨左

　ざく／＼砂利をあらふ陽炎　一茶

膝弓を梅の木ずゑにぶらさげて　魚淵

　やまの普請のはじまりにけり　雲士

五六人數をふむ月の夕ぐれに　春甫

見ればみるほど寒き穂芒　掬斗
ふだらくや熊野のうたも秋たけて　二休
此狀たのむ陸奥の商人　松宇
あさ夕を隣の素湯で仕舞けり　希杖
藪のぼさつに百合まいらする　素鏡
凉風に記念の兒を遣せつゝ　完芳
かまくらやまの夢ばかり見る　春耕
有明に大長刀をひねくつて　文路
どか〳〵霧のかゝる迹馬　公常
婆ゞが餅爺が新酒ととり〴〵に　呂芳
番傘をむりに貸す也　淵
象頭山大權現のはな咲て　鏡
いちもくさんにかへる雁かな　士

一茶 文虎 兩吟連句帖　文化十二年

「七番日記」に同年三月十九日「晴　あさのに入る」とあるので、その日文虎と兩吟を試みたのであらう。文虎は「ほまち畑」といふ題を此の連句に置いてゐる。卷のをはりの年月は文虎のこゝろ覺えに記したのである。

心ならず野がけして

世に住めば人の爲にも霞みけり　文虎
櫻さだゝぬ藪とてもなし　一茶
長閑さや小家〳〵に餅賣て　虎
ひと笛ふけば參る川舟　茶
大瓶を背負ふて月を詠むらん　虎
折敷の上に雁の鳴なり　茶
ウ
ほんのりとちいさい垣に秋の來て　虎
近い所へ迯る相談　茶
なき顏を茨の花におしかくし　虎
すはや半夏ぞ圓覺の鐘　茶
雨あらし旅の柄杓にとしよりて　虎
見越入道を壁に書なり　茶
露の葉に豆腐をくるむやゝ寒に　虎

貧乏まつりも月の十五夜　茶
軒の松祖父の代から露置て　虎
初花守と羨れけり　茶
鶯に是を見せうぞ米袋　虎
大和はやまとだけの春風　茶
二
嫁入の駕かきどのも打粧ひ　丶
芋を掘ルさへうはの空なり　虎
なまい陀と大材木をこかし捨　茶
犬の吼つくむらしぐれ哉　虎
ひだるさをこらへ〳〵ておもしろき　茶
舟を待間に喧嘩始まる　虎
比良三上ひとかたまりに若葉して　茶
獨樂園の朝の蚊やり火　虎
やよやまて酢賣味噌賣古着買　茶
手ばやく秋になりし橋立　虎
青天の月夜〳〵を帳に付ヶ　茶
ナ
龜のとしほど活し八朔　虎
兀山に先そなへたる赤の飯　茶
あられみぞれと替る世の中　虎
何事を待ッとなけれど一枕　茶
竹を賣つゝ喰ふ鎌倉　虎
芋ほどのほまち畑も花咲て　茶
けぶりに馴るひばり小ひばり　虎

文化十二年三月

遺墨　文化十二年

湯田中の其翠と兩吟の歌仙である。『七番日記』には五月二日「田中に入る」とあつて、五日はたゞ「晴」とばかりあるが、端午祝ひに對座吟を催したのであらう。此の歌仙は遺篇にもあるので、本文はその方に據つたが、湯本氏所藏の遺墨は「株番其他」に收めてある。

一夜鮓

文化十二年五月五日

藪村のでくま低間も幟かな　其翠
夜はほろ〳〵と明る鮓皿　一茶

涼風の椽から舟にとび下りて　丶
　爺が舞の見事也けり　翠
いざよひの月さすほどに　丶
　くねり盛りの萩女郎花　茶
ウ
皆並べきぬた始の酒汲ん　丶
　紙燭序に祈るはせ山　翠
引雲のなまめく唄がはやる也　丶
　手の凹程の門田うれしき　茶
ねんごろにほまち無盡を取結び　丶
　折敷の上にほたる亂れて　翠
百合あやめぱつぱと月は出たりけり　丶
　贔屓談義のすでに始る　茶
どこの兒ぞむしやくく飯をかい摑み　丶
　ふと來た醫者に頼む帳面　翠
花盛都風のはびこりぬ　丶
　臼に蝨にみなかすみつゝ　茶
ナ
鶯に浴せるだけは灑落て　丶
　かゝる御山に酒法度とは　翠

旅枕小唄小諷ひ小六節　丶
　福がくるやらうごく釣り棚　茶
猫に迄としをとらせて仕廻けり　丶
　むだ書したる大雪の上　翠
猪おひの螺をやたらに吹立て　丶
　藥師の鳥居湖の月　茶
駄菓子屋が片扉ふさぐ柿紅葉　丶
　小牛に乘せてはやすあに嫁　翠
まてしばし夢くらはせん時鳥　丶
　宗旦流に窓をくり拔き　茶
ナウ
名所もほとんど倦し旅袴　丶
　土人形のよく賣る也　翠
汁鍋も籬も東風の世と成ぬ　丶
　子をかりて來て遊ぶ藪入　茶
咲たぞよ赤い初花さいたぞよ　丶
　鳥のきげんも直る朝空　翠

一茶 文虎 兩吟連句帖

文化十二年

一茶の發句は「七番日記」の同年七月に出てゐるが、淺野に立寄つた事は日記にないので、兩吟を行つたのは文虎亭であるとも云へない。しかし、卷のをはりに「文化十二年七月」と明記してあるから年代に疑ひを挾み得ない。「蘆の月」と題したのは脇句の「蘆の家の月」から取つたのであらう。

蘆の月

それおもん見れば秋風秋の山　一茶
蘆の家の月黍の穗の月　文虎
舟棹のはづれの虫が鈴ふりて　茶
牛に召たる其角嵐雪　虎
隨分に不形な眞瓜それ買ん　茶
今年さしたる柳涼しき　虎
ウ
南無阿彌陀三尺店も住ならひ　茶
柿の羽織も二十八日　虎
逢戀を先春まではよしにして　茶
ちよつと垣根にはさむ文箱　虎
いざ跡の馬にも呉レよ小豆餠　茶
萩踏ミ分る太宰彌右衛門　虎
今日の月昔の御代にさも似たり　茶
鷺の羽音に露のしぐるゝ　虎
大日枝のなだれに小村かたまりて　茶
すはや首途のわれ鐘が鳴ル　虎
此花にもひとついほへ爺なし子　茶
まんまとかすむ門田門川　虎
二
鶯に手作り酒の口きりて　仝
二文が舞に人立かゝる　茶
さは〳〵と木更津舟の朝もよひ　虎
大黑棚へかくす脇指　茶
我戀は霰の玉の散ル程に　虎
哥氣違ひとはやさるゝ哉　茶
手拭もなくて年寄ルめでたさよ　虎
雀をはなす背戸の松島　茶

初雁に息吹かける臼の上　虎
僧都の御成ふれる夕月　茶
世の中ははら／＼雲と打詠め　虎
笛一本で越る志賀山　茶
ナ吹あらし後の車の工夫せん　虎
土かたも寐よ石かたも寐よ　茶
観音の少し北から時雨出し　虎
二間階子をわたす溝川　茶
咲く花にひよんな所をかけ歩行　虎
徳本どのゝ窓のかげろふ　茶
文化十二年七月

一茶が成美と面談したのは文化十二年十月以後の記録にないので、此の三吟も亦その以前の作であらう。『あられ供養』は成美が同十三年十一月故人となつた追善集である。その中

あられ供養　文化十二年

成美の文化甲戌再び淺草に栖を移す辭があつて「そのとしの夏もくれて」といふ前書附で、此の歌仙を掲げてある。『蕉門俳諧一覧集』にも載つてゐる。

夕雲や不二もうごけと鳴子引　成美
くねに鴫なくそれなりの月　諌圃
苗松のたふれて秋の暮ぬらん　久臧
傘に繪をかく雨のつたなさ（イ本（筆））　美
米瓢ころげ出したる川風に　圃
ほたるの影の壁をつたひし　臧
ウ鳥居たつ其日を人にふれあるき　美
ほそき情の寒椿さく　圃
黒羽折室のあそびにつながれて　臧
飯たくやつが歌をよみけり　美
すら／＼と三里の川のくれんとす　圃
銀杏の梺にのこるともし灯　臧
月くらく肱の痛み氣にかゝり　美

京の酒屋（イ本（染屋））も秋となりける　圃
大名の鑓のかくるゝ露しぐれ　臧
寐に來た人をまた送りゆく　美
西鶴が家と指さす花の雨　圃
それ〱そこも初午の藪　一茶
春の風瓦の竈もやすむ日に　美
繭おりの笠の見るに嬉しき　臧
梳る船のたいまつしづかにて　茶
小机かりにやりしはつ月　圃
間のありて同じ鐘きく雁のあと　臧
隣の坊主霧にふかるゝ　美
おもしろや佐野から琵琶を賣に來て　圃
親といふ字をしらぬ夕ぐれ　茶
ねたうへゝやたらに花をあびせかけ　美
温泉をとめる桃の枝さす　臧
春雨の常陸之介（イ本（常盤之助））にお茶焚人　茶
がつくりこけし家の朝おき　圃
二ウ
うき旅を燒酎うりにたづねられ　臧
ことづかりたる賴政の筆　美
何事か背戸へ持出す小長刀　圃
さら〱川に舟のうごかぬ　茶
満月に公家のお歩行拜む也　美
萩ちりてよりをれる苅萱　臧

西歌仙　文化十二年

一瓢が西國の俳人に詠草を廻はし、一人一句づゝの歌仙を成就して、『西歌仙』の外題で出板したものに此の連句がある。「去年の冬」は『西歌仙』の序が文化十三年夏であるから、その前年の同十二年の事で『七番日記』には九月六日「本行寺に入る」とある。此の兩吟は半歌仙に過ぎないが、一茶の特色のよく現はれた句振である。

去年の冬、わが物見塚に旅寐せし信濃の一茶が、たぬきの夜話

といふは

蔦ひよろひょよろ神も御立げな　一茶

ちれ〳〵もみぢぬさのかはりに　一瓢

大草鞋小草鞋足にくらべ見て　丶

一番ぶねにはふるぶちねこ　茶

あくた火もそれ名月ぞ名月ぞ　丶

芋喰ふわらは御代を贔屓か　瓢

彼岸經さら〳〵さつと埒あけて　丶

草の廣葉につゝむ壁つち　茶

あさがほの種まく日とていそがしや　瓢

子をかりて來てさはぐ藪入　茶

留主〳〵と陽炎もゆる黄檗寺　瓢

ちらりほらりとうれる山の圖　茶

泰平と天下の菊が咲たちて　瓢

三百店もわが月夜かな　茶

うそ寒の腰かけ將棊覗くらん　瓢

すはや御成とふれる小皷　茶

花の錢こぼれかゝりし隅田川　瓢

霞て來るはれいの其角か　茶

下略

西歌仙　文化十二年

前の卷は一茶の發句、一瓢の脇なので此の卷は一瓢の發句、一茶の脇で同時に催した兩吟である。一瓢の作には一茶調の瓢逸な處があるが、「頬白の」の發句はまさしくその擬作である。附句の運びもよく呼吸の合つてゐる事が頷かせる。

頬白の丸いぞけさは寒いやら　一瓢

二軒もやいに咲る山茶花　一茶

かんた屑ころげどまりに川堀て　丶

つくり習ひの酒五百石　瓢

隆達が口にまかせし秋の月　丶

おどり法度の辻の立札　茶

みよし野の吉野の里へ錢かりに　丶

子おろし草は目にもかゝらで　瓢
僞りのくゝり枕や流すらん　茶
　う月八日は剃こぼつ日歟　瓢
今植た松になけ〳〵ほとゝぎす　茶
　膳所の生洲に名祝ひをいざ　瓢
なけなしの白手拭に穴あけて　茶
　あかずも見るや妹がよこ顔　瓢
うす霞うかれ祭の有明に　茶
　花のたもとのよしや焦ても　瓢
長閑なり足利流に住なして　茶
　曾呂利といへばめでたがらるゝ　瓢

下略

遺篇　文化十三年

闗之は柏原の隣村野尻の人池田氏である。「七番日記」によると文化十三年五月廿二日故人となつたので、一茶は「短夜やよしおくるゝも草の露」の悼句を詠んでゐる。此の連句は同年春の作で、二月十五日「野尻訪二闗之一柏原に入」とある頃の兩吟であらう。

鹿の子の題をとりて

鹿の親笹吹く風に戻りけり　一茶
　淋しきほどに清水汲干す　闗之
元結こく杭のつか〳〵秋立て、　茶
　坂を越れば案山子なき里　之
有明の趣になる茶の煙　茶
　晝にかくばかり瀧の聞ゆる　之
さま〳〵と彌勒菩薩の家を建て　茶
　松の小枝に人の名を賣る　之
御車にあはじ〳〵と薄かつぎ　茶
　東の山を夢に見殘す　之
あちこちに餅つく菖蒲咲にけり　茶
　きのふの胞衣をほぜる庭鳥　之
秋風に八幡の市がはじまりて　茶
　月夜〳〵と筏くむ聲　之

うそ寒き茶杓を藪に投る也　茶
　杵こしらへて祭またばや　之
竹齋にみのしろ衣まゐらせん　茶
　里の咄を辻〳〵に聞く　之
蒟蒻の夜さへ賣れる花咲て　茶
　伊豆の狼烟の霞つらぬく　之
行春や水より外に不足なき　仝
　寐て見る竹を大事がりけり　茶
嵐ふく麓の寺に髮捨て　之
　米ありたけを馬にはませる　茶
朔日の病も煤も掃き出さん　之
　かざしにかざす撫子の花　茶
高安の歸りかり衣ぬぎ替て　之
　鍋の中まで初雪の降る　茶
枯枝とともに落たる朝の月　之
　階子の橋も渡りなれつゝ　茶
岩陰に餅をそなへて泣るゝよ　之
　鳩來る度にあふぐ生壁　茶

市人に居合刀をほどこして　之
　いざ〳〵開ん花園の鐘　茶
田螺取蛙に醉ふてもどりけり　之
　窓くり抜いてふらす春雨　茶

杖の竹　文化十三年

一茶門人松宇の六十賀集である。松宇と同村の春甫は杖、魚淵は眼鏡、素鏡は頭巾、公常は小桶を贈つて祝ひ、且つ一茶を招いて正式の俳諧を興行したのである。連衆十四人、「杖の竹」の編輯は一茶が引受け、同年七月十日長沼に行きその淸書中、病が再發して遂に中途で柏原へ戻つた事が「七番日記」にある。

隣から若竹來たりそよぎたり　松宇
　山郭公大晴の月　一茶
小肴の一番船に人むれて　春甫

見込の壁をひたと彩る　公常
長閑さに鉋ひねくつて遊ぶらん　掬斗
京の息子の戻る春先　素鏡
鳴きじのやうに口きく藥賣　雲士
茶水のよさに家をおし立　魚淵
身自慢の娘が唄をこなされて　春耕
鴛になげ込小袖山茶花　希杖
橋立を寐ころび處にしたりけり　呂芳
犬ころどもに餅をとらする　二休
名月も例の通りの陰まつり　文路
石の御座に衣うつなり　完芳
秋風に須磨の咄しの實が入て　常
君が位牌をくるむまきの葉　甫
咲花の空も慶長十二年　鏡
諸白はける里〳〵の春　斗
朝朗笛のうぐひすどこでなく　淵
百日留置と書て張らばや　宇
戀しさに嵯峨の松かさ煙らせて　杖
待てば雨さへ降かねるなり　士
杜若花の夕に酒くれむ　休
二階へ通せ其角嵐雪　耕
おかしさの我名を石に彫付て　完
念佛せよとの入相のかね　芳
一時雨鎌倉山に似たりけり　宇
冬構にはよさそうな里　路
薄汁に有明月のあり〳〵と　甫
雁も鴎もやみくもに來る　淵
花芒咲たをさるゝばかり也　休
めつほうかいに堤の長さよ　鏡
箔代の建立佛ひき出して　杖
けふは三月十五日なり　路
二會めの花は別してなつかしく　耕
紙ゆひつける柳山吹　執筆

遺墨　文化十三年

湯田中の希杖亭の兩吟である。『隨齋筆紀』に

希杖の此の句を記して、文化十三年に關する書通の中に挿入されてあるから、此の連句も同年の作と推定したけれど、前年のものと考へられない事もない。湯本氏の所藏である。

ほとゝぎす茄子の色の夜也けり　希杖
　空の際よりそよぐ麥の穗　一茶
連歌師の迹鐺二人坂越して　仝
　かけがけかけぬ家は何某　杖
名月の砂に書たる梅の花　仝
　御用とあらば柿もゆ　茶
つの國のくれは祭りも過にけり　仝
　しのんだ形りの見ゆる松の木　杖
はつとした咄しばかりのうす戀に　仝
　花なでしこをかざる行灯　茶
角田川酒の肴に流れけり　仝
　鈴かけ馬の十ばかり見ゆ　杖
淋しさはうかと出られぬ月よ也　仝
　其角らん雪窗らんが秋　茶
思入になけよいざ〳〵きり〳〵す　仝
　瓢たゝいて雀よぶなり　杖
舟に出る日をひろつたぞ酒買ん　仝
　佛の前に寐たるわんぱく　茶
はつ花をづぶ〳〵壁に突さして　仝
　稀に人とふ深草のはる　杖
うぐひすのなくにつけても御泪　仝
　黒髮おろす時は來にけり　杖
までしばし伊賀の上野のもどり駕　茶
　貢のたしに作る千なり　杖
月影にほつくり死のけいこして　茶
　新酒どくりををがむつり棚　杖
ゆうぜんと犬も吹かるゝ手操舟　茶
　そら鼾かく佐々木高綱　杖
いざゝらばしなのゝみゆも見に行ん　仝
　五文がこほり覗へものども　茶
世中はのぞみ通りの雲の峰　仝

小桶の魚に笹をかぶせて　杖
只ひとり鳥居の施主をとりはせし　仝
ならの小川の先長閑也　茶
花の木に火の用心の札はりて　仝
小松の中も賑な春　杖

遺篇　文化十三年

『七番日記』の同年五月五日の記事に「上町ニ入」とあるが、上町は長沼の内である。「七日希杖來」の記事で此の四吟を行つたのは、同日である事を推定し得る。初裏に廻つて二句目で中止したものと見える。

膝ぶしに腮をかけて涼みかな　松宇
螢來よ〳〵藪のはづれに　春甫
片駕に入れば月や重からん　希杖
露に手をうつ諸人の聲　一茶

糸薄小ばやく秋の來たりけり　甫
用事有氣な藤六の顏　宇
西山や生風流に住なして　茶
くるまのかげに見へぬ下ゲ帶　杖

一茶文虎兩吟連句帖　文化十三年

この年七月二日淺野に入つた一茶は「忘物して柏原」に戻つて、八日再び「あさのに入」り此の兩吟を詠じたのである。『七番日記』を見るとその消息に接するが、瘧か煩ひながら連句に熱中した一茶の意氣に驚く。

秋立て大き過たる庵哉　文虎
露の名所ぞ殊に夕暮　一茶
木兎の耳にも月は似たりけり　仝
はや召シたまへいざや木馬に　茶
小春ぞよ草葉の陰の在郷まで　虎
茶の子ひとつをくるむ風呂敷　茶

ウ
御祝儀の朝喧嘩先ッ過にけり　ヽ
能キ家柄の貧ぞ嬉しき　虎
上人の哥によまれし大榎　茶
越路へのたる夕立の雲　虎
酒の錢はらりと投る馬上から　茶
ぶつきらぼうに人呼る月　虎
更科もさらに及ばぬ蕎麥の花　茶
山伏死ぬる山の秋風　虎
薄箔の薄き折敷をとり膳に　茶
笠一盞に五千里の客　虎
昨日から彌勒二年の花咲て　茶
蛙の皃に夜が明るなり　虎

ニ
入舟の太皷どんどゝ陽炎に　ヽ
茶飯のありと壁におつ張ル　茶
傾城に何ぞの折は身をなして　虎
戀人の書に上る燈明　茶
癪持の一トちからなる此柱　虎
正月着物配る夕月　茶
大雪のどたばたとふる市祭　虎
そりやござつたぞ代官の駕　茶
飛驒山の窓にそろりとひつ付て　虎
小刀呑ムを不思議がるなり　茶
がくりして肝ひやしたる箱階子　虎
大事のわんぱくを寐セるほろ蚊屋　茶

ナ
稻の葉に凉しき雨が始りて　ヽ
醫者呼ビに行ク奴なるらん　虎
石町の鐘と一度に鳴ク鳥　茶
奇妙希代にはやる呪　虎
閼伽桶にいくらも花をつゝさして　茶
猫脊中から蝶の立けり　虎

文化十三年七月

一茶 文虎 兩吟連句帖　文化十三年

これも前の卷と同時の兩吟であらう。『兩吟連句帖』の「田家秋」といふ題は歌仙に對して

ゞなく、「鼠等に」の發句の前書であらう。「鼠」とあるので升落しの「升」で承けたのは古風で、一茶の連句としては感服し難いところがある。

田家秋

鼠等に茶の子ふるまふ夜寒哉　文虎
升を枕に寐て咄す月　一茶
秋の山深編笠を着たやうに　虎
鑓かいこんで馬をはせつゝ　茶
市人のもてあましたる村時雨　虎
砥四五俵額む川舟　茶
ウ 青天のあけぼの覗く二階から　虎
赤い藥を禿ほしがる　茶
涼風や寐覺の山の嬉しさに　虎
ちよろ〳〵水の錢になるなり　茶
我宿は今西行とはやされん　虎
月は名月ござれきん達　茶
手のひらに露ころがして遊ぶ也　虎
子猫の墓を祭る秋風　茶
朝明に南部津輕も垣根越　虎
木鉢ごてらに出すぼた餅　茶
花嫁を役なし馬に抱きのせ　虎
あこやいかざせ柳山吹　茶
二 小石壁白酒ありと太ッ筆に　丶
ざぶ〳〵汐の流す蓮塚　虎
幽靈もひとつ笑へ笠やらん　茶
將門どのゝ名を付し松　虎
傾城をひつさらひしは夢なるよ　茶
魚を釣さへ戀の裝束　虎
やよやまて向ふを通る清十良　茶
安蘇の社は是にゆ　虎
犬ころに饅頭なんどさつ呉て　茶
大稻妻に發句出來る　虎
觀音の頬杖寒き秋の月　茶
しばしの友になりしひよ鳥　虎
ナ 或時は嶋の言葉を稽古して　茶

藪仙人と人の呼ぶなり　虎
此所小便無用茶呑道　茶
杖にきりゝと縛る手拭　虎
明神の花が咲たぞ〱よ　茶
硯の水に蛙鳴なり　虎

三霜（はいかい）　文化十三年

一茶には殊に恩誼のある成美追善の脇起し歌仙である。「三霜」に「一周忌には二三子うちよりて、はい諧をもよほしける」とあるが、一茶は下總の布川で成美の訃を聞いたので、終焉の時に居合はさず、一周忌及び三周忌の兩月とも信濃に歸つてゐるから、脇起しの興行はその江戸に居た文化十三年の十一・十二の兩月でなくては辻褄が合はない。一周忌の言葉に強て拘泥せずともよからう。

みるほどにかへらむと思ふ歸り花　成美居士
けふは小春の山こゝろなき　車兩
簑虫のみのばかりなる人すみて　心非
窗ほのくらく鷄はもどらず　諫圃
かき五ッちぎりて月もすます也　久臧
狀よみながらあるく秋かぜ　一茶
川もはやいろ〱の露ながれこみ　兩
づゝぷり暮におよぶ大笛　非
そゝくさとしては出て行く京の客　圃
泪のかねの封をいまきる　臧
二度と着ぬ小袖に餅を備へつゝ　茶
七夕の蚊にまたやさゝれむ　兩
月の藪畠ぐるめに買とりて　臧
つくろふ舟を荷ふやゝ寒　圃
文覺のかへるころにもなりにけり　兩
西に松あり東に梅　茶
芦簾花よ〱とかけそめて　非
着ものに鳥の糞も春かな　丶
小うるさき戀の追分出ぬけたり　茶

白粉はねて破るたんざく　臧
茶の花に六十年の冬を見し　圃
　鼻にかけたる木がくれの家　雨
蠟燭のありたけ照らす佘古(吾)の海　非
　はした喧嘩に瓜かぶる也　茶
ふところに八合升をおし入て　臧
　吃歌よむ秋のふるきに　圃
雁と寐る宿はさしたる事もなく　雨
　月吹おとす眞間のよこ道　非
踊れとの相圖の狼烟ほん〳〵と　茶
　ひや〳〵喰ふ重ばこの飯　臧
ことづてをひくき垣根にいひはなち　圃
　膝もつゝまぬ御所の雪はき　雨
夕ぐれの竹を火箸にへし折て　非
　赤はげやまのなつかしき時　茶
四五人の心に花のこもるらむ　臧
　巣をわすれずに通ふ乙鳥　圃

はいかい三霜　文化十三年

此の兩吟は『三霜』に「知足坊より懷舊の俳諧一をり、おくられしをこゝろざしのひとしければ、こゝに追加となしぬ」として附載してあるが、脇起しの歌仙と同じく一茶の江戸に滯在した文化十三年十二月、『七番日記』の同月十九日「一瓢上人偕駕」とある頃、本行寺で成美の死を悼みつゝ兩吟したものであらう。

小ばなしや淺草さへも霜がれし　一瓢
　がつくり寒く不二へ入る月　一茶
生壁に諸白ありとおつ張て　ゝ
　駄ちんのあがる東風が吹也　瓢
若眼鏡かけよと計りうめのはな　ゝ
　千疊敷のはるの夕ぐれ　茶
それそこの其角迯すな女子衆　ゝ
　團扇うれしき牛嶋の空　瓢
はつ螢笹の藥添へて一文に　茶

くち三味線を旅の奔走　飄
柴の戸や彌勒の膝に日のさして　茶
額にさはるかまくらのやま　飄
いとほしき馬も博奕にとられたり　茶
盆の三日にあとさきもなく　飄
涼しいは町をながるゝ川の月　茶
酒つくらばやふところ手して　飄
茶初穂を朝な〳〵の花の木へ　茶
すゞめもをしむ春のちやほや　飄

一茶文虎兩吟連句帖　文化十四年

草庵の題で『七番日記』の同年八月に此の發句が出てゐる。兩吟を行つたのは卷末にある九月であらうが、『七番日記』には同月一日と廿九日との二日「淺野に入る」とあるから、その兩日の前後の作である事が考へられる。

草庵

此上の貧乏まねくな花芒　一茶
鍋も茶釜も露けかりけり　文虎
月の舟橋からふはり飛おりて　茶
笛狂亂はいづくなるらん　虎
拜領の寒紅梅をさむしろに　茶
鞍のあられを掃キ落す也　虎
ウ睦まじき夫婦の中へ水さして　茶
山ほとゝぎす御簾の香に啼　虎
いざ〳〵と牡丹へ投る小盃　茶
ねぢけ松とは我名なりけり　虎
細けぶり是から須磨の這入口　茶
日本晴のそよ風の月　虎
小男鹿に法華さづけて放す也　茶
母にとはるゝ秋の七艸　虎
藥代に伏見三町給りて　茶
はや初夢の春は過けり　虎
朝雀花の咲木を祭るらん　茶
濃紫は菫なるべし　虎

二
かぐや姫乞食に跡を追れつゝ　丶
　江口の舟へほふる小ぶとん　茶
さま〴〵のしぐれ〳〵に年寄て　虎
　柴火にすかす急用の狀　茶
下部等も貰ひ淚を押へかね　虎
　耳なし山に箸をつゝさす　茶
峯つくる雲は故鄉と見るからに　虎
　天窓ざぶ〴〵洗ふ僧正　茶
世の中は破れ笠でも渡らるゝ　虎
　唐にもあろかこんな名月　茶
深川も垣根に見えて草の花　虎
　南瓜に書や十五文づゝ　茶
本尊の惠心の作を鼻にかけ　虎
　（阿呆）安房ばかりをとめる旅人　茶
あけぼのゝ浦の氣色を畫に書て　虎
　三とせのもめが酒樽になる　茶
十分の花に大雨しきるなり　虎
　鶴も見るほど遊ぶ苗代　茶
文化十四年九月

遺篇　文化十五年

一茶は江戸から來た素玩を案內して、同年二月五日湯田中に赴き、希杖と三吟で此の半歌仙を卷いたのであらう。『七番日記』によると素玩は同月廿日江戸に立戻つてゐる。

古焦をちよろ〳〵させて梅の花　素玩
　山五六尺うつる雪汁　希杖
草餅の臼の際より鴈立ちて　一茶
　供奉のたよりの行違ひけり　玩
名月の橋の下まで寒さうに　杖
　百がものあり竹の白露　茶
ウ
此秋は開山樣も塗直し　玩
　馬の序に箱根越也　杖
藪越の悵いへ〳〵朝げしき　茶
　べに白粉の氷る引窓　玩
大聲に一番舟を漕出し　杖

高根〳〵を帳につけけり　茶
山伏の二本の杖も秋の月　玩
萩よりすこし入りし草庵　杖
栗むかん馬鹿と呼るゝ嬉しさに　茶
やりそこなひし跡のひと舞　玩
摺墨にちらほら花の散かゝり　杖
山吹もあり小はたけもあり　茶

遺篇　文化十五年

『七番日記』には中七が「帳に付たる」となつて此の發句がある。それから推定して文化十五年の兩吟と見るので、雨錦は中野の人である。『七番日記』には秋、中野に入つた記事はないので、或はそれ以後の作かとも思ふが確證を得ない爲め、同年作として置く。

旅

一人と帳面につく夜寒かな　一茶

月晴きつて犬の遠吼　雨錦
そく〳〵と柿の木原の目に立て　、
百姓なれど二本差なり　茶
椽薹の煙草の塵を吹はらひ　、
抄子に添て貰ふ青苔　錦
ウ
一夜さに雪はくり〳〵消る雨　、
土橋奉加に錏たゝきけり　茶
あざら井を自慢がてらに茶を奥て　、
世間噺の交易をする　錦
つく〴〵と獨湯治の夜永也　、
かち〳〵山の月を詠むる　茶
里の秋古い名所で有しよな　、
魚を見よとてはせ米を賣　錦
かさばるや馬に付出す竹細工　、
大冷酒もはける辻小屋　茶
緣組を請合ふ神の花咲て　、
爪紅ながらすみれ摘つゝ　錦
二
鶯に笛のうぐひす囀りし　、

屑家も同じ京のうちぞよ　茶
小野衆が小しやくな口をたゝく也　錦
夜明ぬうちに煤はらひ済　茶
此暮はちつと氣樂に思はれて　錦
子に曳れつゝ參る善光寺　茶
狗の口へ團子をほゝり込　錦
がらくた見世にはした夕立　茶
蚊屋の穴夫婦喧硴の起りにて　錦
內證客にたのむ蕎麥切　茶
赤〳〵と月は上らせ給ひけり　錦
豐年祭る田所の秋　茶
ナウ
珍らしい角力が來たる札立て　錦
博奕仲間の法度改む　茶
指先で烟管くる〳〵廻しつゝ　錦
下手の談義に俣(マヽ)のさきより　茶
明樽に花の大枝へし込で　錦
春の仕舞を祝ふ宿かな　茶

遺篇　文化年中

成美亭の俳諧で一茶は初裏三句目から顔を出してゐる。發句の筆は執筆の略語であるが、小人數の會には一坐の誰かゞその句を詠むので、特別に執筆を一人置く譯ではない。作の年代は推定の手がゝりがないので、文化十三年前といふ外に說の立てようがない。

小さくも菜圃持ちて春の宿　任只
鶯きけば淋しともなし　成美
朝〳〵のかすみ手にとる旅に寐て　浙江
酢を賣る人のことばずくなに　袁丁
十六夜にござらばさけよ小提灯　梅壽
みなみ隣は柿豆の秋　只
ウ
泣き〳〵も百萬遍のぬか子汁　美
鳩がとんでも昔也けり　江
ふろしきをとけば穴師の青松葉　一茶

涼しき顔が兒に似てゐる　壽
逆波に烏帽子とらるゝ馬渡し　丁
塩一俵をたしむ藥師寺　美
かけ渡す皮苧の重き夕月夜　只
人さへ見れば萩にかくるゝ　茶
三尺の艸を植ても戀の露　江
浮世は花に咲かゝりけり　丁
桶とちる人の手もとも春なれや　壽
水のこゝろも三月の空　筆

遺篇　文化年中

發句の作者梅夫は五十嵐氏、濱藻の所天である。梅夫も浙江も江戸に住居したのだから、一茶の江戸生活中の連句に疑ひないが、「旅日記」に梅夫の發句が載せてあるので、或は享和末年下總で試みた三吟かと思ふけれど、年代は定め難い。

菊の莞火に焚く夜也啼く千鳥　梅夫
味噌のにほひに氷はる桶　浙江
驛路や山三ッぼかり雨見えて　一茶
錢持つ事を忘れてもせず　夫
折〳〵は弓矢をかざる月明り　江
ふるき紅葉と人やいふらむ　茶
ウ田樂の秋は過けり新豆腐　夫
赤きさかなを提ける山伏　江
戀すてふ壁をべた〳〵くつゝけて　茶
下の句のなき扇子怪しむ　夫
酉の日の朝祝ひとて茶粥たく　江
竹まで植てくれし市人　茶
神事の梅に蚕の機嫌よき　夫
津輕の男うぐひすを聞く　江
咲く花に去來が柿も二葉して　茶
初茸匂ふ臺所の口　夫
羽織着て月のひとつを持て余し　江
急に秋めく野にぞ有ける　茶

遺篇　文化年中

濱藻は前卷の五十嵐梅夫の妻である。當時の女俳人として諸集にその作を散見するが、此の三吟は成美・一茶と鼎坐して、さして見劣りのしない處を見ると、しつかりした力量を持つてゐた事が頷かれる。

春の夜は鼠の嫁も出そめけり　成美
狗（枸）杞の茹湯のけぶる淺茅生　一茶
うす霞乘られぬ舟に棹さして　濱藻
親の相人に松の書を見る　美
淋しかれと柿もぎ殘す三日の月　茶
古き疊をかくす白萩　藻
ウ鈴ふりて神子にも出でぬ露の秋　美
うどむ冷かせ宇治の川水　茶
つひに見ぬ鳥をむなしく追迹し　藻
まづしばらくと馬方になる　美
行灯につるす艸さへ戀めきて　茶
遠き思ひに磯浪をふむ　藻
日蓮に茶も振廻はぬ霜の家　美
わたくし升で塩を分けあふ　茶
いくたびか小さ刀をねだらるゝ　藻
久しき貧も月は春也　美
ほた〳〵と花はめで度く散はじめ　茶
田螺のほらの見ゆる日もあり　藻

遺篇　文化年中

鷺白は上野吾妻郡本宿の人である。『隨齋筆紀』によると、文政元年七十一で一茶よりずつと老人であるが、成美亭で此の三吟を試みたのは記錄がない爲め、文化年中の作と推定さるゝばかりである。成美の存命した同十三年以前であるのは云ふまでもない。

朝からの紅葉を散らす莚かな　鷺白

十月かすむ飴賣の笛　一茶
鵜雀砂に繪を書く跡もなし　成美
瓢の口をこそぐりて見ん　白
名月のぼろ〳〵壁に筋違て　茶
秋もへり行く寐好旅好　美
喰初め黄菊膾も嵯峨近く　白
皷法度の雨の降る也　茶
朝夕を持くろめたる親の跡　白
山の小鳥のさゞめいて來て　仝
我戀の田植櫻は咲にけり　茶
平野の鈴をきくが嬉しき　美
月の夜に御茶めされる少納言　白
爺がふぐりの露にぬれつゝ　茶
雲に鴈明石の躰をまなぶらん　美
袋の紐にくゝる長芋　白
大事〳〵牡丹餅ほどの花が散る　諫圃
とても寐るなら春の茶莚　美
香煎のうまい匂ひも薄霞　白
小判ならべて狆を買ける　圃

多羅葉集　文化年中

素玩の著『多羅葉集』にある兩吟歌仙である。坎窩久臧の序を文化元年として手抄してあるので、『俳句選抄』には「肱まくら」の發句を同年作として擧げたが、『隨齋筆紀』に「タラ葉經　文政元年九月廿日入　編素玩」とあるに氣が附いて不審が起つて來た。殊に『七番日記』の文化十五年正月、素玩が柏原に訪ねて來て、二月湯田中に同道した記事があるので同年の作とする方が正確かも知れない。前の「古焦な」の巻と同時の作であらうか。

獨坐

肘まくら蝶は毎日來てくれる　一茶
花から直にみばや五畿内　素玩
のどけしや町の中より船出して　茶

錢まいてやるそで靜なり　玩
けふの月葎さゝ原どこよけん　茶
つり行燈のゆれる秋風　玩
ウ
縄解て鹿に授ける普門品　茶
皆たちかへる六波羅の者　玩
なでしこの花に忍て笑ふなり　茶
寐まき二枚に星のこぼるゝ　玩
むら鳥啼やあへなき御最期と　茶
茶屋から横にみゆるあら海　玩
雪ともに其簔かはんそれ買ん　茶
踏荷ののろき國府の彌陀佛　玩
子供らをたらひの中へ拾ひ込　茶
桃のさかりのはつと出る月　玩
盃を流すばかりの川ほりて　茶
對のざしきを明る春先　玩
ニオ
今の世をおのれと思ふ年もあり　丶
此夕ぐれに紙子鹿背山　茶
小鳥居の西へちよつほり初しぐれ　玩
女ふたりが蜘捨るなり　茶
長持の棒のつかへる這入口　玩
雷は鳴る經ははじまる　茶
一人〳〵懐の鳥放ちやり　玩
さんだら敷てねまる草の穂　茶
月のかげきのふ碎けし家の番　玩
およし狐に酒を振舞ふ　茶
大川へ散てしまひし枕がみ　玩
戸棚の隅へかくす戀人　茶
ナウ
麓へは夏より外のたよりなし　玩
極樂淨土みたやうにいふ　茶
あつ風呂の門を嗅出す宵の程　丶
三日法度にむしる萱の薬　玩
あつさりと山は淺黄に花咲て　茶
水をひだりに住馴し春　玩

蕉門中興 俳諧一覽集　文政二年

『七番日記』には「へな土でおつつくねても雛

かな」と文化十五年三月の發句にあり、又、文政二年の『句帖』には「我こねた土の雛もまつり哉」となつてゐるが、希杖と兩吟の發句として再案したものと見て、此の歌仙を文政二年の作と推定する。此の巻は遺篇にも出てゐる。

へな土でつくねた雛も祭り哉　一茶
　夕暮かへす桃の小坐しき　希杖
船うたや蝶のむらがる汐先に　、
　けぶり立なと鉄棒を引　茶
棟上の矢の根ひら〳〵けふの月　、
　子寶つまむ（イ本(つまん)）露のしら玉　杖
秋風に奥大名の通る也　、
　入りの一間に（イ本(を)）封じきりつゝ　茶
義理のある母（イ本(翌)）の位牌に膳を居へ　、
　はや鉄漿はげぬうたを唱る　杖
青によし奈らの木辻の小夜時雨　、
　粥一なべを鹿にふるまふ　茶

南無妙法蓮華經普門品第廿五の巻　、
　弦音（イ本(高)）遠き能登が弓勢　杖
月影の松ともの言波まくら　、
　難波の花も今は露霜　茶
死こぢれ同士より合て綿勸化　、
　柱暦にくるむ晝めし　杖
仲人のからもどりする夕間暮　、
　拾ふた狀で櫛をふく也　茶
大口はきけど江戸氣の長屋にて　、
　大黒どのへあける燈明　杖
年ごとの畑祝ひに（イ本(の)）餅搗て　、
　榎小たてに凉む爺組　茶
祭禮の無疵に濟だあつめ錢　、
　垣結かけて筆かりにゆく　杖
まてしばし腕一ぱいの不二の山　、
　近來稀な十五夜の月　茶
簪に折桔梗刈萱女郎花　、
　露の貢のうすき（イ本(かろき)）かり衣　杖

踏足のよごれわびしき朝風に　丶
　夜食のたしにうなる高砂　茶
かたさとは松かさ焚も慰に　丶
　二人揃ふた親のめでたき　杖
花の枝天秤棒にそよがせて　丶
　評判駱駝殊に春先　茶

蕉門中興 俳諧一覽集　文政年中

ノ左の『一覽集』にある卷を本文としたが、寫本の卷には「田中入湯のころ」とあつて文字に二三の異同がある。文政二年の三吟と推定したが、此の發句は文政十年の句稿にもあるので、或はずつと晩年であらうかとの疑ひも起つて來る。

田中にて

七夕やすゞしき上に溫泉につかる　一茶
　今としは稻もつゝ（イ本（うれひ））がなき花　希杖

悠然（本（悠々））と駕籠も行也霧わけて　其秋
　月見の殘ンを手へはさみつゝ　茶
松柏まがり形なる家ぶしんに　杖
　へんなところへつける雪車道　秋
窓の穴猫のかよひ路吹とぢよ　茶
　さびしくなれば文をよみつゝ（イ本（けり））　杖
約束はかゝさじ物とうち粧ひ　秋
　行燈〳〵に灯のとぼる見ゆ　茶
名代〳〵奈良の汗ふき新摸様　杖
　今としは別て暑いことかな　秋
御藥にはるかさがりて手をつかへ　茶
　神の御告もひらく夢占　杖
息吹てぬぐふ鏡のうす曇り（イ本（くらく））　秋
　日かげ小路の藪のむら雨　茶
さく花の枝にちらほら月さして　杖
　さらり〳〵と竹の秋風　秋
露の世は三人一所（イ本（一所に））覩じつゝ　茶
　こゝろの垢を洗ふ谷水　杖

折〱は笛鰐口の音す也　秋
　辨當の菜を配る路の葉　茶
枝郷と泣合山の公事濟て　杖
　西に東に仰ぐきみが代　秋
棚にありかならず福とぼた餅は　茶
　是も〱孫へ印籠巾着（イ本（これをも））　杖
追風に四國九國吹れつゝ　杖
　笠縫山の月を見しかな　茶
芒からくさめちらほら走るらん　杖
　かざしのかけに及かくして　秋
南無〱にこは究竟の霧下りし（イ本（て））　茶
　むかふ通るはみな坊主也　杖
國〱へ名も聞へたる廊下口　杖
　ぞんぶんひねた梅を植けり（イ本（梅をば））　茶
そろ〱と花笑ひゆ咲てゆ　杖
　茶碗にうけるはるの夕暮　杖

遺篇　文政初年

希杖の家で試みた兩吟で、「八な土り」の巻と同年の作であらうが、文政二年の日記を見ないから確言は難しい。一巻の調子からいつて文政になつてからの連句に疑ひないが、或はもつと後年のものかとも思はれる。

鳥ども〻町うらへ行は巣した〻か（マヽ）　希杖
　獨活の跡から鯛賣の聲　一茶
かばざくら淺黄櫻の世なりけり　ヽ
　つら〱垣にさらし竿して　杖
月影に八文酒の騒がしく　ヽ
　角力の札を建る坂口　茶
淺間（ウ）霧よいほど寒くなるまゝに　ヽ
　江戸のむすこを送る赤馬　杖
立臼の上にちよつこり膳居て　茶
　扇ひらけば風薫る也　杖

買ひ給へさあ買たまへ戀衣　茶
　旅の小笠に挾む簪　杖
板壁にをんなの名など書捨て　茶
　住吉町の有明の月　杖
橋かけて踊の趣向いたすなり　茶
　時平どのゝ顏に稻妻　杖
埋れ木に花が咲ぞよかゝる世に　茶
　今ぞすみれにこほす盃　杖
ニ
湖に春の行方の城みえて　ヽ
　念佛庵の雨の夕暮　茶
いろは上けた褒美に江戸繪取らす也　ヽ
　曲りふくべに入る橋錢　杖
葛飾の眞間の蒟蒻作るとて　ヽ
　日蓮宗に廿日なりけり　茶
女づれ辻に待せてうち粧ひ　ヽ
　菖蒲でひとつ叩く戀人　杖
是からは酒の御祓もいざはやせ　ヽ
　さつさと庭へ流す玉川　茶

物まぜの一人は曾呂利新左衛門　ヽ
　屁より大きな今日の月　杖
ナ
燒飯にちらほら萩の花散て　ヽ
　彼岸談義の跡が始まる　茶
手を打てば孫はにこ〳〵這もどる　ヽ
　得意まはりに膳居る也　杖
花衣ほしき人にはさつくれん　茶
　山街道の春ぞたのしき　杖

遺篇　文政初年

作者は中野の連衆なので同所で催した五吟歌仙であらう。年代の推定は發句によつたのでなく、文化十五年の雨錦と兩吟より間もないものと見て、翌文政二年の作としたのである。

世が直る〳〵とでかい螢かな　一茶
　下手のはなしの夜は凉しい　一巴

覺書草の癈葉に筆とりて　雨錦
赤そぶ水で事の足りけり　素外
名月の山に人來る當もなし　茶
一つ西瓜を余所へ貰はれ　錦
ウ
正直のかうべに蜻蛉とまるなり　巴
蚤ひとつにて長い旅する　錦
飴で餅喰ふやう塔に取持て　外
泪もろきは常の事也　露月
貰ふたるべんべら物を拜みつゝ　茶
黑猫なめる鉢の水仙　月
海道の一番茶屋か木葉焚　巴
昨日の舟はみんな酒樽　錦
かん〳〵と板木たゝいて休まする　外
寐そべる隙に義太夫本讀む　月
咲く花にちつとづゝでも智恵付て　巴
馬の腹下ぬける雀子　茶
二
嫁入の荷を椽に積む春の風　巴
借着のまゝで牛房切つゝ　錦
灯盞を番茶俵につゝ懸る　茶
何をか見ても拜む貢似する　月
大門はみな敷石がずらり出來　ヽ
待かねゆと月に瞻すへ　外
（二句闕）　錦
鶉啼く野の馬鹿廣き哉　巴
新村に釘鍛冶ばかり家建て　月
極内ゝで小金貸す也　茶
又近い中に御座れと暇乞ひ　外
もつたいつけて撫る手あぶり　錦
ナ
冬の夜はいづれ豆腐が賴みなり　巴
町場へ一里野中新田　錦
手拭のなみに草鞋をぶらさげて　月
ころりびしりと雷の鳴る　外
年寄のせいにほく〳〵花盛　巴
とつとき凧を揚て見るなり　執筆

遺篇　文政二年

湯田中の希杖亭で試みた両吟である。文政二年の『句帖』には「飛べよ蚤」となつてゐる。『おらが春』も同一である。同年六月の詞書がはし書にあるので年代に疑ひはない。

文政二年六月

蚤飛べよ同じ事なら蓮の上
　涼み莚に入相の月
宗旦がいくつの年に山兀て
　古素麺の名所なりけり
霜枯の三百店に住ならひ
　風に吹れて髭買が來る
ウ
昇る日にいらかも移る橋も見て
　今や始る念佛のかね
這ひ習ふ童が飯をかいつかみ
　菖蒲の花で汗を拭くなり

一茶　希杖　、茶　、杖　、茶　、杖

一夜かせ江口の宿の時鳥
　ほとんと舟は着てゆ
盃のもめをあづかる中納言
　ことしの月の名殘なりけり
露時雨風のひやひやする程に
　笛吹になる花守が秋
呑もくの穴師の山に神酒上げて
　鶏をだきつゝ遊ぶべら也
二
白砂の旅笠よごす米の飯
　八嶋に似たる島うらめしき
散る芥子の御製に泪奉り
　灸こらえし娘小むすめ
小豆煮るその日の雨に錢出して
　硯のさきは武隈の松
その馬にそれそれ頼む笛袋
　弓びんびんと綿の雪散る
廻のさきから月の出たりけり
　角力勞れに寐たる兒達

、茶　、杖　、茶　、杖　、茶　、杖　、茶　、杖　、茶

廣前にいの字ろの字の池掘て　ヽ

杖で教へる竜田街道　杖

いざゝらば八文酒で雪見せむ　ヽ

はたけも添てゆづられし寺　茶

世は越路〱の中の柏崎　ヽ

棚なし小舟花だらけぞよ　杖

山吹に細帯ほどの道がつく　ヽ

窓の先から春は行くなり　茶

遺篇　文政初年

長嘯は越後高田の人で北山氏、芙蓉坊と稱した俳行脚である。一茶を訪ふて「花よりも團子のほしき山路哉」と戯れたので、「有様は我も花より團子かな」と一茶の答へた逸話などが傳へられる。

啞蟬のだまりこくつて別哉　長嘯

冷水無用とし寄の有　一茶

濱庇に笠二ッ三ッ月の出て　希杖

何處もかしこもゆで豆の秋　嘯

月代のえひによいほどうそ寒き　茶

さら〱川へ流すうの売　杖

遺篇　文政二年

一茶の童心の殊に澄んだ句境として『おらが春』によつて人口に膾炙する發句であるが、兩吟の作者露月は『隨齋筆紀』に二句あるが人物は解らない。發句によつて文政二年の作と推定したのである。

名月をとつてくれろと泣子哉　一茶

小錢ちらばる萱の秋風　露月

露時雨雜役二疋菰着せて　ヽ

古もの町のひよろ長い哉　茶

鉢植の松にちよこ〳〵酒くれる　丶
　割箸洗ふ笊の陽炎　月
ウ
鶯に竈の味噌の焦るなり　丶
　門掃ながら論語教へる　茶
山伏に大脇差をさつくれて　丶
　はじめて富士へのぼる六月　月
晝飯を地藏菩薩の膝に置　丶
　北風除と榎植けり　茶
小莚を終の敷寐と頼む哉　丶
　行燈消してうそ寒き月　月
子供らが上總念佛に啼く鶉　丶
　茶の子の中の鰯掘（マヽ）るなり　茶
腰かける眞柴の花をへし折て　丶
　橋にさからふ水の春雨　月
ニ
貧乏樽ひつかたげつゝ茶を摘みに　丶
　今一休と人やいふらむ　茶
金拾ふ傳受柱におつ張て　丶
　居抜に家を賣し豆腐屋　月
濟口の喧嘩に三度判取られ　丶
　南無あみだ佛淺茅生の月　茶
裏山の栗拾ふても暮さるゝ　丶
　燒味噌呉れて鹿を呼ぶ也　月
神の日に撫へらされし煙草盆　丶
　灯の上に明る青空　茶
舟からもさらば〳〵と小盃　丶
　鶴の來るとて庭を掃也　月
ナウ
藪竹の賞翫される涼しさに　丶
　さあ寢そべれよ例の夕鐘　茶
餓鬼どもに足のほてりを踏すなり　丶
　馬壹疋に投げる宿帳　月
人別の改め濟めば花咲て　丶
　雨正月を觸る春風　茶

遺篇　文政初年

深川の芭蕉庵で佛頂和尚の住庵を思ひやつた

作といはるゝ芭蕉の月の句によつて、脇起しを行つた四吟である。松宇は『一茶發句集』の「夜涼が笑ひ納でありしよな」のはし書に「きのふは鮮魚に宴して、けふは松宇佛」とあるので、その句の文化十三年故人となつた如く信じられて居たが、『七番日記』によると「夜涼が」は闕之の追悼である。

川上とこの川下や月の友　翁
　むかしの松のやゝ寒き空　松宇
門並に麻布たゝく石居て　一茶
　今度の市は馬ばかりなり　春甫
上敷のたばこの粉を拂ひ捨　茶
　根なし蔓をも壁に這する　甫
風清き小隅をもらふ小倉山　茶
　今日は念佛日翌日は連歌日　甫
逢ひに來た從弟をやけとこき使ひ　同
　ふとんの上にこぼす丸藥　茶
拜領の補も是きりといぶしたて　甫
　泪もすこしつき合の月　茶
紅葉より奥は女人を入れぬ也　同
　土鳩の扶持をちらす秋風　甫
兒達は親といふ字を書習ひ　茶
　鎌倉染を送るいたはし　甫
評判の蕎麥屋が花の盛にて　甫
　水茶もほける陽炎も立つ　茶
すは鳴るぞ東近江の彼岸鐘　同
　朝寐の癖のふと直るなり　同
桑の木に洗ふた髮(カ)毛(モジ)突掛て　甫
　この文讀んでたびよ商人　同
いとをしの忘れがたみが又笑ふ　茶
　桃湯引する門の夕暮　同
涼しやと竹の子笠を尻に敷き　甫
　伊勢へ三度のたんを切つゝ　茶
酒くさく鳴海の浦の薄月夜　甫
　雁に鷗に足にからまる　茶
祕藏笛秋の名殘を吹からに　甫

ちん／＼煮よ素湯と菓子盆　茶
子供好布袋／＼と呼れたり　同
抹香提げて下る奈良坂　甫
灯の見ゆる家見えぬ家夜の明て　茶
いざ／＼唄へ彌勒十年　甫
先以て花の世の中よかりけり　茶
たなびく空も長沼の春　甫

遺篇　文政二年

俳諧寺の社中として一茶の生前存在を認められた水内郡長沼の門人が、一茶の捌きに依つて正式に行つた俳諧である。魚淵は遲刻して二の表四句目から加つたが八吟の歌仙で、掬斗は醫師の順碩、士英は西澤氏である外の人々の事は、それ／＼の巻に記して置いた通りである。

文政二年九月

鼻先の生姜畑や一時雨　春甫
圍炉裏ばたまで鶏遊びつゝ　一茶
手廻しになんぼ箒を結立て　松宇
川の御幸の近寄（イ本近づき）にけり　呂芳
植添し松に早速三日の月　素鏡
詠向に小男鹿の鳴　栢葉
ウ客莚ひろける野らの下冷に　掬斗
はした芝居の太皷聞ゆる　士英
いろは書く娘が酌に諷ふらむ　葉
鳥の聲（イ本鶏啼まで）をいはふ別れ路　斗
朝夕の目覺し山と詠め（イ本詠り）けり　甫
罌粟の一重を好きな僧正　鏡
眞丸の月よ／＼（イ本月と一しよに）と夕間暮　斗
餅配れとて百舌鳥の啼くらん　甫
石橋の渡初するやゝ寒に　英
德利こかすなやよ太郎冠者　茶
あれ花が咲てハ咲きハ　鏡
菫の上にどさり寢そべる　英

ニ
うす霞氣儘仲間に入にけり　宇
猪喰ふ家をたてし象潟　茶
紙草履ちよろ〱川にほうり込　甫
さあ古里の咄はじめん　魚淵
ゆづられし一ッ茶碗ぞ實なる　茶
冬中籠る槇の下庵　甫
山茶花の花が咲迚なむあみだ　英
今年の師走よいしはす也　葉
鼻唄にほく〱歸る坐頭の坊　宇
迹の祭に御能始る　斗
引受る大盃に秋の月　淵
一首侍れと配る蔦の葉　甫
ナ
行燈にひよろ〱青い虫が啼く　斗
何ぞ振舞へ箱根越す馬　英
しら〱と弓持五人夜の明て（イ本(大名の)）　淵
小便所としるす立札　茶
團子屋が場取して置く花の山　斗
雉子の尻尾へたばこ吹也　鏡

遺篇　文政二年

春甫亭の興行である。一座の作者から推定して文政二年の作としたが、第二が「どこまでも左の方に海を見て」となつてゐる異本があり、その他ところ〱異同があるから、一茶の再考して訂正したものであらう。但しどちらが初案かは知り難い。

中仙道
杉の木の下のお茶屋の時雨けり　春甫
寒い〱と草鞋うつ石　一茶
紅の夕の海を右に見て　掬斗
百人前の膾もる月　士英
早稲菰を四五枚庭の風除に　ましと
初花すゝきいかう騷ぐな　松宇
ウ
山城の木幡のばくち始りて　栢葉
曲つた堤に豆腐やく也（イ本(廻)）　素鏡

紙人形手際くらぶる女中衆　呂芳
　うつり香くらき半蔀の陰　英
時鳥澁茶の醉のさめにけり　鏡
　杭より西は寺の領内　芳
朝の月瘧の落る石かりて　英
　角力もくろむ萩の小脇に　市
田の人を新酒の樽でまねく也　茶
　おくそこもなき窓の陽炎　鏡
近付の花も咲たよ（イ本（さ））山ざとに　葉
　痰切飴をくるむ蕗の葉　斗
二
最明寺らしとひたすら拜むなり（イ本（つゝ））　宇
　笛吹く女（イ本（小にくかりけり））烏帽子ふりつゝ　英
今様の手拭（イ本（かはく庭の松））さほす杉垣に　茶
　凉しき方へ据る客膳　宇
螢とべ〲とて（イ本（夕せし））ねまる也　市
　おれが歌でも降りし（イ本（大雨））此寺　魚淵
いらぬ世話人の天窓を剃れ〲と　斗
　木辻に入れて仕廻ふ家藏　茶
御時宜する猿に小袖をとらせたり　鏡
　門からかどへ霰たばしる　葉
枯柴を秤にかける暮の月　英
　虫もこつ〲茶を立るなり　市
ナ
ころり寐の惟然が屛（イ本（と））書に書て　茶
　佛になるは年若なうち　斗
岩はなの辷らぬやうに灰をまき　葉
　力一ばい螺貝をふく　淵
祖師の日にてうど初花咲にけり　茶
　手桶のふちに遊ぶ雀子　執筆

遺篇　文政二年

文政二年の『句帖』に詞書も同一で此の發句を記してある。同年長沼の雲士と兩吟で、初裏の折立まで試みたものを、後に雲士の伜雄士が宋鵜と共に韵を次いで半歌仙としたのであらう。

信濃ぶり

我門やたゞ四五本の大根ぐら　一茶
　降るは時雨よ樂に寐ころぶ　雲士
染物は往來の馬に埒明て　同
　小萩の上に火繩置くなり　茶
名月の一の見所の栗丸太　同
　放して壁に鳴かす蟀　士
年寄の仕事に庭を作りつゝ　同
　やつと仕揚になりし伊達垣　宋鶴
夏空は名もなき山も近まさり　同
　夜毎〳〵にほとゝぎす聞く　雄士
み熊野の浦こぐ船にのりあるき　同
　平家のための水施餓鬼せん　鶴
いらぬとていらぬ扇も引裂(ママ)　同
　泣兒のきげん直す夕月　士
椽はなに餅よ〳〵とおし並べ　同
　とつぷりしづむ花の居風呂　鶴
乙鳥の宿に軒端を貸馴て　同
　信濃の奥も長閑なる春　士

遺篇　文政三年

文政三年の日記は編纂者の手許にないので、その年の一茶の消息に接し得ないから、推定で此の三吟を同年作と見て置くが、確證を發見したいと思つてゐる。梅塵父子との三吟は文政五年二月のはし書のある卷はあるが、同年夏は中野に行つて居ないので、その年の作とは決定しかねる。

氣の早い夜の明様や草の上　梅塵
　傳馬を呼る入梅晴の里　一茶
無雜作に大橋小橋つゞくりて　梅堂
　二人が、ふたり貧乏高ぶる　塵
十五夜に態とあけたき壁の穴　茶
　手に取るやうに棹鹿の啼く　堂
ウ薄紙に賽錢ひねる露時雨　塵
　逢ふ人ごとに契り捨つゝ　茶
骨折て木辻なまりとなりすまし　堂
　博奕ざかりに極寒もなし　塵

降雪に果なし坂をつゝ越て　茶
　酒は名代の鬼ころし也　堂
板繪圖のまゝに年ふる成就院　塵
　上京と披露しては旅立　茶
川留の圍碁に百文してやつて　堂
　祕藏の花に札を張なり　塵
月霞む足輕町の裏通り　茶
　蕣の化るといふはまことか　堂
二
塩斷に種ゝさまぐ＼の願ひ事　塵
　男法度の部屋しんとして　茶
隱しても流石お通が茶の手前　堂
　垣に螢を這す夕暮　塵
さあ負た菖蒲を二束三文に　茶
　肴もたんと御座る市町　堂
びつしりと俄さむさのはやり風　塵
　一本きめて薪割る也　茶
鉢植の能なし松をひねくりて　堂
　今年も味噌をつける名月　塵

蕎麥切で堪忍し給へ江戸の衆　茶
　同者もほろりぐ＼溫泉の秋　堂
ナ
挑灯に釣鐘どのと緣組て　塵
　小豆俵にかける振袖　茶
咲く花に草餅强る姥が家　堂
　鼻の先より雲雀立けり　塵
春風や天秤棒に夜の明て　茶
　牛の糞ふむ車街道　堂

遺篇　文政年中

前の卷と同じく梅塵亭に於ける三吟であるが、初裏の五句目で中絶して一卷に纏まらなかつたらしい。不時のさし合ひか、卷中の運びが一茶の氣に入らなかつたかであらう。

親竹におつゝかつゝや今年竹　梅堂
　弟が袷もそよぐ干竿　一茶

塗つた下駄ぬらない下駄とちごはごに　梅塵
　辷り勝手に古き板橋　堂
大降のきのふの雨やけふの月　茶
　茶にこまつてとうふ田樂　塵
秋寂に關守どのゝから欠び　堂
　鳥の飛びしとこの井戸を掘る　茶
弟は誰に似たやらたまかにて　塵
　馬糞で出かす掻ための山　堂
ずぶ〳〵と杭などさすや俄照り　茶

遺篇　文政年中

春甫亭の三吟である。春甫は村松氏、水内郡長沼の六地藏に住んで居たので、此の連句は同家で柏葉と共に催したのであらう。

小男鹿や啼ほど啼てうつぱしる　春甫
　ひや〳〵風の蕎麥の葉の月　柏葉
木綿買大ものさしを突差して　一茶
　まんまと越えし乘合の船　甫
そゝくさと茶漬の膳をあつらへる　葉
　しだれ柳の仰に涼しき　茶
ついそこに伊豆の大島見ゆる也　甫
　八文酒にいそぐ御飛脚　葉
日の暮にいやな小雪の降出して　茶
　亥の子の餅を犬もいたゞく　甫
奥女中共下々も打粧ひ　葉
　うはの空にて鰐口たゝく　茶
月かけにおとく狐の踊る見ゆ　甫
　けろりおこりの落る秋風　葉
啼虫の入間郡へいざさらば　茶
　貧乏鬮にあたる小無盡　甫
額の皺のばし藥の花咲て　葉
　さあ〳〵かすめ〳〵むだ山　葉
うぐひすに御供の菜もひと舁　甫
　火の用心の鐘がなる也　茶

名物の澤庵買ひに走らする　市
是非かへさぬと羽織あづかる　葉
忍ぶ草そよ〳〵風の初戀に　茶
嘘も商ふ門の市立　英
夕暮の風呂屋の榎かつ散て　士
子息上手に茶を強る月　葉
初雁も共角が忌日啼やらん　茶
石にかぶせてかへる菅笠　英
酒にさへ醉へば奇妙に面白き　葉
ちよろ〳〵水も瀧にこそなれ　茶
きのふから漸く天下泰平に　英
親子三人筆でやしなふ　葉
傘張と隣合せの假住居　茶
鉄棒がらり〳〵長閑けき　英
一木の花も日に〳〵客とれて　葉
ふくら雀もをどれ陽炎　茶
英

遺篇　文政二・三年

此の發句は一茶の句帖に發見されないので、年代を定める事を得ないが、文政二・三年の作らしいので、こゝに入れて置くが、なほ研究を要する。

上の上極上赤の木の葉かな　一茶
麥蒔てから用のない里　梅塵
又しても矮鷄は茶の間に糞をして　〃
ひるねがはりに將棊組みつゝ　茶
涼しさは天水桶の月細き　〃
狀の駄賃に菓子くれる也　塵
ほつ〳〵と根氣つはしの板木彫　〃
藥王品に上る牡丹餅　茶
鼠嫌ひの猫よ〳〵とほんそして　〃
嫁の女のおてんたらいふ　塵
おかしさは土産の西瓜のころび出し　〃
裸仲間の大月夜かな　茶

百棒のちんぷんかんも翌日きりに　丶
　年の功とて醫者もなさるゝ　塵
ぎよろ／＼と煙出しばかりこけらぶき　丶
　貧乏驛と語りつゝ行く　茶
咲く花にあんな土橋を五文とは　丶
　飼ぬ狗もよく肥る春　塵
二
庫裏ばゝの何年知れず出代らで　丶
　手拭見世へ名を貸してやる　茶
水無月にざんざ踊がはやる也　丶
　男仕立に紺の足袋はく　塵
針箱のいはれ因縁根問して　丶
　百日ぶりに晦日經よむ　茶
小刀で齒の呪咀が奇妙院　丶
　御育柄とほめる惣領　塵
鳥籠を暖簾の釘に懸ならべ　丶
　指先筑波指さすは富士　茶
名月はくはら／＼晴れた明方に　丶
　客にかづけてしめる初雁　塵

ナ
うけもちの神の森より秋の風　丶
　鋤の柄杖に立つ親爺かな　茶
今に雨急度落ると請合て　丶
　沓掛までは花のなき旅　塵
湯豆腐の鍋に隙やる暖さ　丶
　さあ呑めうたへ御代の春先　茶

遺墨鑑　文政四年

信濃高井野の天滿宮奉額に一茶の書いたもので、皋鳥は紫の人中村氏、牧人は堀の内の人梨本氏である。皋鳥と共に催主で擧句の作者春畊は同じく紫の久保田氏である。奉額には其の日社參の發句が十一句あつて、終に文政四年二月廿五日と記してある。

朝詣

片皃は梅の風也朝の月　皋鳥
　高い山からかすみ始る　稲長

それ〲に牧の春駒札つけて　茶
　大評判の酒が賣れけり　鳥
碓のがたりぴしやりと霜枯に　長
　迹の舟より上る丸石　鳥
天人の衣に松のとしよりて　長
　茶屋の娘も歌でよむ也　鳥
時鳥古き夜明のわかれぢに　長
　なでしこなどをかざすぬか雨　鳥
とりはやせ彈正狐の藪やしろ　長
　わせ田の稗も十分の月　鳥
ふき替の屋根につや〲霜置て　長
　豆煎り皮をちらす秋風　鳥
縄簾は乙のわらはに勝れたり　長
　又迹からも通る赤鎗　鳥
なむ自在天滿宮の花咲て　茶
　暮るもおそき高井のゝ春　春畊

遺篇　文政三・四年

文政四年も亦一茶の日記を見ないので、作者によつて推定するより外ない。此の半歌仙は其秋は田中の者であるが、露月・素外は中野の人なので、文政三・四年の作でないかと思ふ。

春風も久し振にて吹日かな　露月
　晝の蛙の間おいて啼　素外
しめりある内にほまちの畑打て　其秋
　えひして三所居風呂の涌　一茶
蕎麥切の長く續きしけふの月　月
　冬の近よる雨の晴際　秋
ウ
江戸出しの黄菊しら菊船に積　茶
　一市ごとに狂ふ雨替　月
人〲の犬の喧嘩に寄たかり　秋
　拾ふた文を壁におつ張　月
ざれ噺茶の子一ッに代なして　茶

破れ扇も役にたつ也　　秋
足軽の馬さしに出る暮の月　　月
安請合にうつら三疋　　茶
秋の夜の明待かねる横雲に　　秋
耳ふたつほど海が鳴けり　　月
辨天の御蛇拜む花盛り　　茶
今年もまめでけふの藪入　　秋

遺篇　文政四年

中野の梅塵亭の三吟である。作の年代は文政四年の『句帖』によつて推定したのだが、同八年の句帖にも一字の異同なく出てゐるので、疑問の起らない事はない。年代の早きにしたがつて置く。

深川や蠣売山の秋の月　　一茶
犬も江戸氣に振ふ白露　　梅塵
小手早くまづ新蕎麥をかつ込て　　痩菊
この骨柳ひとつ賴む跡駕籠　　茶
さつきなの噺の末をさあ〳〵と　　塵
うそのやうにざしやくり取りたり　　菊
ウ 夏書窓身になる風の吹けらし　　茶
蚊のすね程の足に灸する　　塵
これは又まゝ妄想な朝茶の子　　菊
聟といはるも今日ばかり也　　茶
拵へた夢を語るも夢の世に　　塵
寐鳥うつなと子曰　　菊
小竹垣物知らしく有明て　　茶
時宜する袖に蜜柑ころげる　　塵
口軽に曾呂利は秋をすべらかし　　菊
菊一鉢を棒にふる也　　茶
散花によりの戻りし此塞さ　　塵
雲ふんづけて登る山伏　　菊
ニ 春の日の赤丸薬を頰ばりて　　茶
涙もろさに目のかすむ也　　塵
くわらり〳〵御寺の有奉加　　菊

槌を枕にころ〳〵と寢る　茶
上の慈悲尾に尾をつけて咄し合　塵
けふからおつけい晴れた女房　菊
貸小袖箪笥の鍵をぴんとあけ　茶
湯治場までもはやる念佛　塵
下手歌が結句見事に暮す也　菊
板塀越しに散る紅葉哉　茶
村雲は根きりはきりに月晴て　塵
座禪の尻にとうる下冷　菊
燒餅を半分鹿にさつくれる　茶
此一村は疱瘡せぬ也　塵
いかめしく小幟立て御用木　菊
大道中にけぶる居風呂　茶
降らぬとは百も承知の花曇　塵
頭陀にぶらりと春の旅笠　菊

遺篇　文政四年

前の三吟と同一の發句で別に露谷とこの兩吟を試みたのであらう。露谷は高井郡六川の人である。前の三吟が文政八年になれば同一の發句である此の卷も同年の作となるが、しばらく四年說を取つてこゝに掲げる。

深川や蠣売山の秋の月　一茶
新酒はじけのわめく元船　露谷
萎わら鞍牛の尾に鳴て　ゝ
小粒な家の安氣なりけり　茶
笑ふぞよそれ子寶が笑ふぞよ　ゝ
樗の花の靄におさまる　谷
蚋のさす苔の細道けふ越て　ゝ
西に見ゆるは善光寺樣　茶
念頭にふくろび縫ふて吳る也　ゝ
痘のいたさのつらき手枕　谷
唐茨のよりも揃はぬ霜枯に　ゝ
拜むやうにして借りるじや〳〵馬　茶
ものいはず二はいかつ込む二八蕎麥　ゝ

顔のすぢ立つ笠紐の跡　谷
皺もなき入江の釣の月ながら　、
　雁もはら／＼圓覺の鐘　茶
追善の大花火ある札を建　、
　五十過ても迷ひ子と呼　谷
二 たしなみの骨柳の中より松蘿　、
　木賃代の噺はじまる　茶
につこりと這ふ兒の膳を引かぶり　、
　荒神棚へあげる初苗　谷
入黴雨に醉（マヽ）へる三位の衰へて　、
　鶯雉子ひまくれる也　茶
竜田川場へ流るゝ晨明に　、
　芦の穗架につゝむ堂嶋　谷
假初の情としらぬ口惜しさは　、
　のたくり捨る壁のざれ書　茶
糸鬢の奴に刀かつがせて　、
　くらり／＼としたる枠械　谷
ナ 拭てとる様な空から散る霙　、
　鰒日／＼とさわぐ雲助　茶
ばくち錢なしても／＼三百ぞ　、
　鶴見ぬさきの不可入斗村　谷
花よ花花の太郎のすこやかに　、
　柳山吹つくる神垣　茶

遺篇　文政年中

素外は「随斎筆紀」にもその名を見出さないので、その人物が明瞭でない爲め年代を定める旁證を得ない。後日の考證によりたい。

瘦蚤の不便や留主になる庵　一茶
　白瓜二本のせる丸盆　素外
夕虹の思ひ通りに引張て　、
　淵の小隅に氣に入つた松　茶
馬市の小判並べる砂の月　、
　高く見ゆるは相撲取也　外

ウ案の如くさつきの風に梨子落て　、
　藥ぬくめる弟子の尼君　茶
鎌倉の鬼の噂も聞なれる　、
　馬さしどのゝ氣がねするなり　外
抱火鉢それと煙草の火に貸して　、
　肴板何に木がらしの吹く　茶
法螺貝にかつぽと起し門の犬　、
　新田村へ水のおし込　外
跡からも又ひよろ長い鑓立て　、
　わんぱくだけはひしやり泣やむ　茶
月花に無盡の講を掘ならべ　、
　鶯聞きにぬけて出るなり　外
ニしと〳〵と傾城町の春の雨　、
　伽羅の足駄を蹴込む椽下　茶
かた膝に巾着切をねぢ伏て　、
　念佛申してあがる大門　外
煙草さへ呑ぬ土用の照つゞき　、
　痩る藥をせんぎするなり　茶

えいやつと夫ひとりを聞出して　、
　いたづらものを除る札張　外
ギヤマンの細工に月の出たりけり　、
　長崎こと葉で躍をしゆる　茶
青い柿酒の肴にさん出して　、
　はつち坊主に宿を貸しけり　外
ナ小百両たまれば金も苦にならず　、
　木辻のものをぐつと呑込　茶
鹿の子に丸めてくれる空起請　、
　湯殿の前に水汲で置く　外
咲花を伐るな〳〵と抱とめて　、
　さつさと醉をさます春風　茶

遺篇　文政四年

此の兩吟は文政四年の『句帖』に詞書と共に出てゐる發句から、同年の作と推定したのである。姥捨の月見をあり合ひの山の月ですまし

躍く、一茶の洒落と不性とが、此の句にちやんぽんに現はれてゐる。

姥捨などゝは老足むづかしく

有合の山ですますや今日の月　一茶
押かけて來る客の秋風　一巴
雁金の大かた遊ぶ田を刈て　素外
三人がみたり旅の相談　茶
渡し守空の日利を上手也　巴
白山吹の盛りなるらむ　外
ウ
赤い帶矢の催促も道理だぞ　茶
忍ぶ間さへも持ぬ身の上　巴
供奉の人宵の内から髮結て　外
大饅頭をはたらいて來る　茶
江戸の町裏屋脊戸屋のうそ寒き　巴
月夜あかりで飯を喰つゝ　外
いたゞいた菜に露の山越る　茶
鳥の聲ものみこんだ顏　巴

これが膳所あれが粟津と指さして　外
けふは枕のあがる姫君　茶
戀の歌花の小枝にふら／＼と　巴
二
瓦の苔のほける春風　外
雛の社日藥を賣出して　茶
垣の小隅に掛る菅笠　巴
正直な積りになつて物參り　外
橋錢呼べば知らぬ皃して　茶
しと／＼とみぞれ降る日の勞れ馬　巴
階子の上へ眞鴨ならぶる　外
三味線を枕にしたる業花夢　茶
手を打つ音に妹が小返事　巴
關東のから氣の強い旅をして　外
茶屋らしきのは一軒もなし　茶
間似合の月見支度を急ぎつゝ　巴
ナウ
芒束ねて庭を掃く也　、
拙者儀は今年たばこの一煙　茶
兎角三人よればかまける　、

米の値のぴんとはねたる舟便り　巴
　妙に氣轉のきいた御亭主　、
炭俵積置く年の花日和　茶
　あぐらの膝に蝶の寢て行　、

遺篇　文政三・四年

「有合の」の卷と同年の作であらう。中野の梅塵との三吟なので、文政四年の日記を手にすれば年代が定つて來る筈だが、文政三・四年の作と假定して置く。

粒栗をころばして子に取らせけり　素外
　えいして田畑片づけし月　梅塵
十月の隣の澤に鴫立ちて　、
　茶を呑め〳〵と板木たゝく也　一茶
笑ふ子をつくらこてらに雪車に乘り　、
　らう竹賣つて五人口すぐ　外
ウ
仲人の七ッのうそは承知にて　、
　猫にふまるゝ裾を引けり　塵
雷に線香たてるたばこ盆　、
　不二見る所へ据る蕎麥切　茶
法印を馬の上から抱下ろし　、
　秋風そよとちまたふく也　外
名月にめつけものなる大天氣　、
　はせをが好きな梨子のふつてい　塵
此邊をはやふた昔駕籠揺て　、
　奇妙にしやくりとれる念佛　茶
はれ業の花を天晴さしにけり　、
　陽炎の立つ塗立の壁　外
二
春霞大肌ぬぎの船大工　、
　子供喧嘩の泣別れなり　塵
田休の餅をさつさとおつくれて　、
　いざ一枕門の芝原　茶
茶俵も元値限りに賣拂ひ　、
　鼻血きりゝととまる呪咀　塵
ぢゝは山へばゝはと昔物語　、

降れ〳〵小雪丹波の小雪　茶
縮面の猿にねん〳〵ころ〳〵と　、
久しい老の赤藥賣　塵
蕎麥切のゆで湯ねだりて窓の月　、
もひとつ踊れおどれ子供衆　茶
ナ
なけなしの柿をはら〳〵投散らし　、
うかれ序と伊勢参りする　塵
小夜時雨鬼の目にさへ涙かな　、
年寄組に入る小座舗　茶
見覺えの花五六本咲にけり　、
毎日ひにち同じ蝶來る　塵

遺篇　文政四年

一茶の發句は文政四年の『句帖』に記してあるから、同年の兩吟と推定したが、四方丸といふ人物はちよつと心當りがないので、何處で催したものか知れない。

名月のさつさと急ぎたまふかな　一茶
盃とばす露の狹莚　四方丸
ありふれし歌の披講に秋闌て　茶
何と名もなき山のうつくし　丸
手こまかにして讀めぬ旅日記　茶
投網にかゝる四五百の鮒　丸
小竹筒を涼しき方へ持歩き　茶
西もひがしも早苗とる也　丸
加茂川の水さへやせる頃なれや　茶
思ふにくるし玉簾の内　同
絹賣の絹にさら〳〵物書て　丸
折々くばる儉約の札　同
こは高に村繼ふれる月かげに　茶
蟋蟀やみくもに鳴く　同
棒鼻に漸寒見ゆる頬かぶり　丸
二分金はふる栗の板敷　同
咲初る花に賓主のさは立て　茶
雨降はるゝ風の芽芒　同

遺篇　文政四年

作者は孰れも長沼の連衆である。一茶の游杖中、同席して此の九吟歌仙を行つたのであらうが、歌仙には六句不足してゐる。名殘の裏が全く鈌けてゐる。

文政四年十月九日

神〳〵の留主振舞や菊の花　一茶
挨しめしにざつとふる雨　完芳
ふりうりの大立臼をこかし來て　春甫
海へ手ぢかくつける門口　掬斗
名月に松一本の名所なり　呂芳
淋しみ好きと歩行く白露　素鏡
うそ寒の壁に壽の字をにじり書　茶
關東そだちは酒もよく呑　斗
南方といへばすぐさま味方して　士英
杓子で雁を招く夕暮　甫

浮船の戀の机に月のかけ　魚淵
しのべ〳〵とそよぐ秋草　呂
留守もりの天窓の先の赤蜻蛉　二休
目黑參りのつゞく菅笠　斗
重代の刀一腰つゝさして　茶
作法たゞしく若菜摘なり　茶
咲花に咲ぬうちから歌をよみ　甫
今日うぐひすの試に啼く　完
嵐ふく雲の目利をしたりけり　茶
さもなき川を蓮臺に乘る　甫
啼虫の涙のかゝる古鎧　芳
月は十五夜素湯わかすべき　茶
秋篠を風吹く窓へ搔とらん　甫
あさな〳〵に乾く土橋　芳
淋しさの放下の前に人寄て　茶
百に直がなる長門印籠　甫
二ッ三ッ牛のいなゝく山の間　芳
鳥居の工夫ふつとひらける　茶

若木よりほつ〳〵花の咲出して　市
蛙鳴きたつ四方のうらゝか　芳

遺篇　文政四年

〔「七番日記」の文化十年閏十一月に「むまさうな雪がふうはりふはり哉一」とあるが、同年の連句ではない。「ふうはり〳〵と」と再案した文政四年のものと年代が一致するものとして同年作と假定する。皐句の花の「うまさうな花に師弟の膝居て」は發句の「うまさうな雪」に應じたのである。〕

うまさふな雪がふうはり〳〵と　一茶
見ずに値段の出來る黒鴨　素外
松の木をおのが氣形に押曲て　一巴
翌の番日を操替るなり　茶
身祝ひの酒澤山に强る月　外
亂れ芒に道の小狹き　巴
ウ
補陀落や岸うつ波で栗拾ふ　茶
馬鹿ほど母の氣に叶ふ也　外
手短に哥に忍ぶといはせつゝ　巴
局廊下の細長くして　茶
鶯と大工はけふも入ふたり　外
圍ひのうちに霞む里〳〵　巴
文七が元結車の長閑にて　茶
孝行札のかゝる板橋　外
燒飯を鳩にも分けてさつくれる　巴
尻當莚も雨の夕月　茶
觀音のおがませ給ふ花咲て　外
白壁遠く見ゆる陽炎　巴
草餅の臼の下より啼雲雀　茶
十年ぶりで表替する　外
じつとして居ても涙のきく新田殿　巴
ぎつしり人のつまる武藏野　茶
あれ馬を乘しづめたる若葉陰　外
目も當られぬ强い夕立　巴

行水を盥一ぱい汲込で　茶
　飯の板木をたゝく摺古木　外
まち〳〵に人の出違ふ門の先　巴
　ふたゝび暮るゝ夕山の霧　茶
名月にあつちこつちと場も召して　外
　おつゝけひつゝけ雁の啼なり　巴
新背もひとりべりだぞ今年から　茶
　勅使の駕籠へ泣て取附　外
筑紫から箱根東へ聟養子　巴
　ぺん〳〵草の行灯珍らし　茶
うまさふな花に師弟の膳居て　外
　遊び日ごとに霞む山里　巴

遺篇　文政三・四年

素外との両吟であるが、たゞ中野で催したのだらうと推定されるだけて、年代を考證する記録がない。假に文政三・四年の作として置く。

庭の蝶子が這へば飛べはへばとぶ　一茶
　ほまちに染る纑の春風　素外
苗代に十間ばかり縄張て　、
　戸板の上に駄菓子並べる　茶
あぶなげな空持直すけふの月　、
　出刃包丁で萩を伐る也　外
小道まで勘辨なしに落し水　、
　仕舞談議の山寺のかね　茶
豆腐切る拍子かた〳〵おもしろや　、
　このみて咄す吉原の事　外
娵の疣あてざつほうに兇咀て　、
　行燈ですゝり過し朝飯　茶
杜若駄荷の小附におつぱさみ　、
　水うち並ぶ町の入口　外
存の外似せ膏薬が流行る也　、
　可愛や熊の餅をいたゞく　茶

南無大慈大悲の花の盛にて　、
月も格別霞む山合　外
二 名物の干大根を荷に造り　、
小船頭へも据る一膳　茶
紅の襷おさんがかくされて　、
けふは來る日と雲で占ふ　外
鯵のぱつぱととれる北風に　、
小とり廻しに濱の店つき　茶
弟がまんまと客を仕こなして　、
あすの天氣を百も請合ふ　外
本丸の太皷すゞしく聞ゆ也　、
盥に澄る不二と名月　茶
放ちやる鳩にさづける普門品　、
何も仕事と菊を咲する　外
ナ 御上から慈悲の廻狀また廻り　、
川の東にふえる新村　茶
打はやすあんば大杉大明神　、
大饅頭が二階から降る　外
三介が花見の列に加はりて　、
舞ひまふ番にあたる麗　茶

遺篇　文政年中

春甫の發句で一茶の捌きを受けたものらしく、一茶はたゞ脇句を附けてゐるのみである。これも長沼の會の作であるが年代は明確にし難い。文政三・四年でもあらうか。

土臼も秋めかしけり草の花　春甫
月夜〳〵に川音もあり　一茶
旅笠を三日着たれば鴈啼て　呂芳
塩荷たしなき風のかはりめ　掬斗
賣石のとつてもいなず年の暮　素鏡
雪見るたびに梅の咲けり　杉谷
鶯に貸してやらうぞ古被　芳
横槌までものぼる陽炎　市

片里は春の手透に土持て　鼠十
　ふみの着りは氣の浮いた事　吾柳
夕風に紅粕出すも久しぶり　長皐
　藪の裏手の直路覺ゆる　雪丸
細流れ月の名所と申すべし　厭路
　芝押くべてこぞるうそ寒　斗
あちこちに狩殘されし鹿の鳴　有好
　寺の普請に石をあつめる　甫
主のなき花の目出度咲初て　柳
　蔦の輪をまふ空の麗　路

遺篇　文政年中

長沼呂芳亭の六吟であるが、發句の年代を發見し得ないので、前卷と同時の作と見て、更に考證を要する事として置くが、此の卷は一茶も一しよになつて附句を試みてゐる。

夕顏の十ばかり咲く秋の雨　一茶

　小低き山へ月はしる也　呂芳
初雁に入船まじる門掃て　掬斗
　べた〳〵つける足袋の裏粘　春甫
榾を焚く夜の明方の面白き　完芳
　跡の村にも餅をつきつゝ　杉谷
乙松もはやく年寄れ啼く雀　茶
　備後へ莫蓙を買出しに行　斗
小刀の錆をこそげて夕涼　甫
　心まめなる爺が蚊遣火　芳
近頃は吉野の姫の御なやみ　谷
　夢見し松に水そゝぐなり　茶
帆柱の里までとゞく月の影　斗
　きり〳〵す買ふ耳白の錢　甫
團栗を上總叺へへしこんで　芳
　つひに彼岸の過ぎし夕鐘　茶
咲とめの花も一度に散ぬらん　甫
　つちくれ動く陽炎の中　芳
うき時は門の柱をたゝくなり　茶

文にかきこむ鷄の宵鳴　市
うか／＼と行けば仁和寺法輪寺　芳
ふた月瓜をくはぬ相談　茶
打水に庵の雜水を汲ほして　市
門近く來る五鬼の法螺貝　芳
嵐吹く雲の口利をしたりけり　茶
さもなき川を蓮臺に乘る　市
鳴く虫の淚のかゝる古鎧　芳
月は十五夜柰湯湧すべき　茶
秋篠を風吹く窓へ掻取らん　市
あさな／＼に乾く土橋　芳
淋しさの放下の前に人寄て　茶
石に値がたる長門印籠　市
二ツ三ツ牛(マヽ)のいなゝく山の間　芳
鳥居の工夫ふつとひらける　茶
若木よりほつ／＼花の咲出して　市
蛙鳴きたつ四方の霞か　芳

遺篇　文政三・四年

呂芳の發句は「嗜齋雜紀」に抄錄されてゐる。文政三・四年長沼經善寺で催した連句らしいが、初裏の九句目から五句、別の人が入つて又前の作者となつてゐるので、時を隔てゝ滿尾したものゝ如くである。

見世馬の蠅にやせたり秋の暮　呂芳
稲の匂ひに出かゝる月　一茶
うそ寒き黑木を船に積上て　春甫
少しの酒に人よばりつゝ　杉谷
初時雨客も世話しく見ゆるなり　雪丸
冬の暮しの長閑なる里　掬斗
潮口に彌勒祭の餅搗て　茶
御下手の鞠に人のあつまる　芳
横棚のかげに隱るゝ姉娘　谷
なぐり書なる文に紫陽花　甫

よき程に風の運びし青簾　斗
大和に二日鈴をふりけり　茶
有明の小雲のかげのうれしくて　芳
相撲くづれに藪をふまるゝ　谷
北濱の市のたつとて鴈の啼く　素鏡
雨もる家に明礬をやく　稻伽
花の山一木も見えぬ時もあり　有好
たれも長閑な夕ぐれの空　厭路
啼雲雀心は旅になりにけり　笹人
風に吹れて子供あらそひ　丸
碁の一手工夫が盡きて不二を見る　甫
筏に立は何のけぶりぞ　芳
雪の日は軒端にあさる村雀　谷
都の夢を見たき木枕　茶
持馴し鏡を岡へ捨る也　丸
畚に運べるかはらけの土　甫
白菊の座も日出度き月の客　芳
栗をへらしに人の來にけり　二休

鍋洗ふちよろ〱水も霧立て　茶
矢竹こなしに出る五六里　甫
鎌倉の人のこゝろも美しき　芳
熊野參りに木綿ほどこす　茶
究竟の夏となりけり明の雲　甫
嵐ふけ〱なけ閑古鳥　芳
一本は寐て見る花と申すべし　茶
春の日永に練藥をねる　芳

遺篇　文政三・四年

長沼の春甫と兩吟が試みた卷で、二の表の三句目までよりない。歌仙に滿たない中に事情あつて中絕したのであらう。文政三年か四年かの作らしい。

この次はどこの月夜の里神樂　一茶
うれしき野良の枯そむる也　春甫

鳴く雀大瓶ふせる土こねて　仝
青い疊にわたる初春　茶
君が代の若菜を摘がはやるなり　仝
又とはあらぬ今日の長閑さ　甫
蒟蒻も賣りて年寄る男かな　仝
藪のあちらの里も高田派　茶
京行きの薄花衣凉しくて　仝
啼け行々子德利冷さん　甫
投網をより(マヽ)寄付にすきにけり　仝
一雨づゝのをどり淋しき　茶
穂屋蓮桔梗刈萱女郎花　仝
瀬がしらのぼる月は名月　甫
若殿の木馬をせむる鞭とりて　仝
汁も膾も風に吹るゝ　茶
夕暮は畑も木部屋も名所なり　仝
さくら咲〱上總念佛　甫
啼盛る藪鶯に水波んで　仝
麻の直段の下る春風　茶
津の國のいとこと越る瀨田山　仝

遺篇　文政五年

中野の梅塵・梅堂父子との三吟である。『九番日記』の文政五年二月の日記に「中野湯一見」とあり、湯田中に逗留して居るので、その折此の三吟を試みたのであらう。

文政五年二月

鶯も素通りせぬや窓の前　一茶
手盛りで廻す鍋の春風　梅塵
麗に保養湯治の樂寐して　梅堂
のつぺり兀の山を繪に書く　茶
ふた國へふた分されの川の月　塵
早稲の匂ひのたひら一面　堂
草臥た足に新酒を吹かけて　茶
近づく甲斐に有明しおく　塵
狼の聊〱しくも吼る也　堂

念佛狂女の行も三年　茶
月凉し鏡の裏の天下一　塵
ほとゝぎす鳴く琵琶の海原　堂
錢投て腹拵へる松の蔭　茶
博奕ざかりに神たゝりなし　塵
造作も馬鹿念入の裏座敷　堂
あつたら花に筒法度也　茶
陽炎にさゝいな足の豆いたみ　塵
ふらり〳〵と春も行くかな　堂
二
からしけに浦の笘屋のきよんとして　茶
襟からそつと壹歩づゝ出す　塵
疝氣むし鳴き止めば夜の明にけり　堂
熱風呂好きの門の初雪　茶
一村を一手に仕舞ふ御取越　塵
乞食仲間の喧嘩して居る　堂
ちさい子はとゝが背中へ請とりて　茶
なもて〳〵と瘤の呪咀　塵
鷄のひよこに米を蒔散らし　堂
妾御殿の棟上の月　茶

白萩に引れた袖を打拂ひ　塵
大噓に霧のかた寄る　堂
ナ
ねぢ伏せた夜盜にどさり腰かけて　茶
江戸を見た氣のぬけぬ惣領　塵
打水になからかいほす柄杓井戸　堂
椽に茶瓶を居る夕暮　茶
施主寮の花咲にけり〳〵　塵
蝶に胡蝶に虻のごたまぜ　堂

一茶文虎 兩吟連句帖　文政五年

淺野の文虎を同道して高井野の「巣に入」と同年四月十二日の「九番日記」に見えてゐる。十五日は「晴　知洞來る」とあつて滯在中である。文虎と兩吟の記事はないが、文虎の附註に四月十五日とあるのだから同日の試作か、それとも道々作つて來てその日滿尾となつたかであらう。

對レ月待二杜鵑一

かゝる夜を何が不足ぞほとゝぎす　文虎
膳にすじがふ夏山の月　一茶
俵屑脊戸の入江に掃キ捨て　虎
贅よ〳〵と爺を呼ぶ也　茶
霜がれの鹿に饅頭まきちらし　虎
連歌喧嘩に負ヶて嬉しき　茶
ウ
秋草のこゝろ〳〵に咲みだれ　虎
新長谷寺へおどり手向る　茶
宵の月山はむかしの山ながら　虎
あつたら嫁に苦をゆづるとは　茶
細聲の唱哥に人の立かゝり　虎
うかれついでにたばこ吹つゝ　茶
我戀のさいはひ橋を越かねて　虎
穢ッ多が松の雪の夕暮　茶
辻〳〵に大泥坊がはやるなり　虎
猫とふたりで留主をして居る　茶
雪隱の脇から花の直通り　虎
白酒賣に笠をあづける　茶

二オ
陽炎のあへなき御製ふしおがみ　同
笛の上手は女なりけり　虎
涼しさに思はぬ舟に飛のりて　同
ひだるい腹を二夜かゝへる　茶
親といふ字をしれ〳〵とふる時雨　同
一升炭もからき世の中　虎
雀等が上にも出來る小いさかひ　同
杭より西は本願寺村　茶
たて茶呑つれに妹をさつ奥て　同
寐むしろ作る椴の下蔭　虎
白雲の丹波へ急ぐ暮の月　同
栗をざぶ〳〵洗ふ門川　茶
ナ
皆の衆に綿の直段を聞合せ　同
さび長刀を大事がらるゝ　虎
或時はばくちもめさる奇妙院　虎
茶の子ひとつを闇取にいざ　茶
朝わらい福々しさの花の雲　同
赤兒の顔に東風が吹なり　虎
文政五年午四月十五日

遺篇　文政五年

『九番日記』の文政五年十二月十二日「斗＝入、希杖來」の記事で、一茶が長沼の掬斗亭に投じ田中から希杖のたづねて來た事が解る。此の半歌仙はその折の興行であるらしい。

鶯をまるで二羽見る小窓哉　希杖
おもふ通りに伸る青柳　掬斗
陽炎の腰かけ客に膳据て　春甫
人の來ぬ間に寫す山水　一茶
一番に月さす草のそよぐなり　斗
屏風ばたりとかへる秋風　杖
ウ
新米をつけ出す馬のいなゝきて　魚淵
先一ぷくと尻かける石　甫
死なふとて約せし戀のおかしさは　茶

千両が文で障子張る也　斗
螢とぶ刺身の鉢の一氣色　杖
まづは連哥の涼しかりける　淵
ついそこに身どもが里の見ゆるなり　甫
しばしと母を下ろす小座敷　茶
四方山の咄にけふの日も暮て　斗
彼岸團子をたてまつる月　杖
とつときの烏帽子狩衣花咲て　淵
渡初する橋の糸遊　甫

遺篇　文政六年

蘭腸は梅堂の醫者としての通稱である。左介も中野の者であらう。此の四吟ははし書に「文政六年彌生」と明記してあるが、『九番日記』で見ると、一茶は柏原に在庵して他郷した記事がないので、いさゝか不審である。或はそのはし書に年か月かを誤つたのでないかと思は

ろゝが、暫らくそのまゝにして置く。

文政六年彌生

山市の人にはぐれて啼雲雀　　左介
　居酒の小家のつゝじ款冬　　一茶
行春のけしき附木に書とめて　　蘭腸
　からみの馬のから機嫌也　　梅塵
塩直段どんどゝさがる三日の月　　介
　風呂敷輕き旅の盆前　　腸
初鴈の侘して泚す和歌の浦　　茶
　上座に通る中井与右衛門　　介
疱神のすきな霰のころ〳〵と　　塵
　二ッの犬に餅をふるまふ　　茶
えゝやつと米といふ字を書ならひ　　腸
　露の小玉のころび合ふ月　　塵
戀すれば窓近く啼くきり〴〵す　　介
　おどけに夢をさます秋風　　腸
相口の和尚を樽でまねく也　　茶
　嵯峨の杜子美と人はいふらん　　介
山の花十一介に咲みちて　　塵
　そこは味噌搗爰は草餅　　茶
鶯に小田の蛙の鳴おされ　　腸
　七里法華に口もあかれず　　塵
麥秋もおろしに歩く赤藥　　介
　柴ねぢ込でいぶす茶の下　　腸
きぬ〴〵の滅法界に明過て　　茶
　東ンかぜをうらむ出船　　介
一しほの鰯で年を拾ひけり　　塵
　貧乏神へあける燈明　　茶
首取は急度御狩と治定して　　腸
　自慢たら〳〵貸してやる笠　　塵
皿鉢の見世にちらかる今日の月　　介
　砧あはれに何處で打やら　　腸
さゝ栗の伊賀の上野に秋暮て　　茶
　狀の返事にほつとあきれる　　介
一折敷ほつり〳〵ととく粽　　座

横から見てもよい御城也　茶
洗濯の粘もきいたる花日和　鵬
脊中であける小坊主の凧　塵

遺篇　文政六年

「山市の」の卷と同じ連衆で、これには洞松が一枚加はつてゐるだけなので、同時の作であらうと思ふ、しかし、前卷の年代に過誤があれば此の五吟も亦年代の訂正を要する。しばらく前卷のはし書によつて置く。

辻堂の曲りを隱す柳かな　蘭鵬
珠數かけ鳩の下りる陽炎　左介
長閑さや鈴ふる馬に乘替て　梅塵
赤兀山を帳につけけり　一茶
大雨のあげくを月のぱつと照ル　洞松
聲張上げてりんと鳴く虫　鵬
ウ
太秦は壁の穴まで蔦紅葉　介
脚半の紐のとける草臥　塵
夕霞歌念佛のはかやつて　茶
用心土のしみあがる也　松
風呂吹の大根ぐつ〳〵煮崩れ　鵬
行燈張りて暮す半日　介
名月に疝氣の虫の啼出して　塵
曾良を力に歩く萩原　茶
秋の風羽黑の札のひら〳〵と　松
やたらに賣れる狐膏藥　鵬
何處もかも人澤山な花咲て　介
腹のへるほど黄鳥の鳴く　塵
ニ
寢て待てどまてども福は遠霞　茶
傾城したもひと昔也　介
うれしさを信濃たばこに刻み込み　鵬
ない髭撫てくれし胡麻餅　塵
庭風呂に峯の松風通ひけり　松
青田祝ひの大花火哉　茶

大磯へ飛せる酒の貧乏樽　塵
烏啼くのも氣にかゝる空　鵬
傘張て其日〱を忍びつゝ　介
聖靈棚に殘る衣の香　松
拜領の石に水打つ宵の月　茶
兄弟ながらよい相撲也　塵
强飯に腹こしらへる峠前　鵬
薄緣の花どつと吹散る　介
紙屑が飛んでも蝶の世なりけり　松
白酒賣らん只居やうより　茶
細い手を合せて賴む屆け文　塵
つれなき雨をはぢく乘物　松

蕉門中興俳諧一覽集　文政六年

獨吟の年月に就いて『一覽集』のまへがきに疑問がある。文政六年八月二日は七月廿九日江戶から越後行脚の道すがら、舊知一茶に逢ふ爲め柏原に立寄つて一茶亭に投じた椿丘太節が滯在中である。『寂砂子』及び『九番日記』を參照して其の日附にあやまりがない。太節と「なきみ笑ひみ萬うち忘て」（寂砂子）、その一方悠々獨吟をやてつゐるとは一茶の性格から見て考へられない。四日太節の出立した後ならいざ知らないが、八月二日では解し難い。『遺篇』には「文化三年六月三日獨吟」とあるが、これも『旅日記』で見ると、同日は浦賀の專福寺に參詣したりして旅行中だから獨吟などして居られさうもない。よつて『一覽集』の文政六年說にしたがつて獨吟の月日だけなほ疑問として置かう。

文政六年八月二日
獨吟　一茶

蚤蝿にあなどられつゝ今日も暮ぬ
すゞしく見ゆる庭の草花
水風呂の桶の際より月出て

ことしの綿のはけ口を問ふ
はつ雁にちよろ〳〵川を渡る也
　庵の玄關の小きい（イ本(不綺麗)）な事
まだ生ています〳〵と袴着て
　大佛つくる大淀の雪
棒のふる（イ本(來る)）酒の喧嘩とし暮ぬ
　ふたり揃ふてかへる絹買（イ本(柏鷺)）
緣結ぶ神の榎の尊くて
　書つけておく曉の夢
秋風の隣もおなじ草枕
　五百が虫をはなす須磨山
鼻先に月は（イ本(が)）上らせ給ひけり
　洗濯摺れの門の靑石
朝〻の朝茶の爲に花植て
　今や非人の鶯もなく
彼岸とてめでたき水の（イ本(る)）流皃
　烏帽子序に京へいて來る
おと〻へ（イ本(おと〻ひ)）の菖蒲に句をよくおほえ

　入相きけと窓をあてがふ
世をしのぶ藥にもなれ隅田川
　たき火折〳〵見ゆる乙姬
打つけるやうに丸雪のたばしりて
　一ばん鐘も（イ本(の)）いそぐ松原
山寺に（イ本(へ)）金二包ほうりこみ
　どちのきぬたも古郷でなし
月の雲うそ〳〵寒くなるまゝに
　露の中から下る川舟
みちのくや最上郡の住よくて
　餉もいわしもたゞ五文也
より合て念佛講の灸をする
　日がな一日花のちるなり
かる〳〵と旅笠着れば鳴雲雀
　庄屋の庭に春風のふく

蕉門中興 俳諧一覽集　文政六年

ノ左の「一覽集」は作の年代を記さないが、文

虎の遺稿『両吟連句帖』には「梅松寺知洞法印は万歳おそき春の頃から、こゝち只ならざりければ浴せん迚、ふと來れり　されば四子一莚にかゝる風交する事、まことにうどん花といつゝべし。眠るものあらば酒浴せんなど、たはぶれあひぬ」といふ前文があつて、文政六年六月十七日の興行と附記してある。但し『両吟連句帖』の方は二の表二句目からは一茶と文虎との両吟となつて、此の卷は全く別のものであるが、こゝには『一覽集』によつて掲げる。

湖(イ本(湖水))から出現したり雲の峰　一茶
我も氷を(イ本(家・毎に雪を))いはふ夕暮　希杖
松陰に鶴の餌蒔の笛さして　知洞
山を左に秋は來にけり　文帋
旅籠錢膳へから〳〵朝の月　茶
籬(イ本(垣))の瓢に假の名を書　杖
さびしさも古風の嵯峨の這入口　其秋
牛馬喰は女もすなり　帋

行川の曲り形なる戀をして　洞
腹立たびに雪や見るらん　茶
やよやまて一ばん舟の人々よ　杖
ほた餅は棚に有明の月　洞(イ本(虎))
膝の虫つゞれさせとてすだく也　帋(イ本(茶))
書寫のたよりを秋のうへ吹　杖
駕の中でも怠らぬ普門品　茶
市の喧嘩に犬も飛こむ　帋
是見よと花の大枝引かつぎ　杖
なみ〳〵うける盃の春　茶
陽炎のきゆる契は日延して　、
世に諷はれん妓王寺の鐘　杖
女郎花中將殿へたてまつる　、
無賃でおくる駄荷の秋風　茶
名物のそばきりすゝる月明り　、
瘤まじなへをはやす手枕　杖
兎も角もこゝを死場に家建て　、
伊賀のたよりに囉ふ筆箱　茶

竹火繩それから夫へ又それへ　、
　宮の掃除のすゞしかりけり　杖
唐は指の先ぞよ淺黄空　、
　矢きずかぞへてわらふ明がた　茶
あつさりと素湯漬飯が所望也　、
　小雨ふるとて投る風呂しき　杖
二代目の竹齋おくる奈ら坂や　、
　鴉かう／＼何かおかしき　茶
下手植の花も咲たぞ／＼ぞよ　杖
　先穴賢やよひ吉日　、

遺篇　文政六年

湯田中の希杖亭で芭蕉忌の三吟を試みたのである。楚江は坂口氏、夜間瀬の人で『九番日記』の文政六年の記事によると、十月十二日田中にやつて來たので、此の歌仙の一人に入つた譯である。「田中湯治の馬のこしらひ」の附句で、今も坂道であるが、中野から田中に行く道の險しさが思ひはかられる。

十月十二日

はせを忌や豆腐の上の菊の花　希杖
　時雨を拜む草庵の月　一茶
大道に一把の眞木を買分て　楚江
　髻にはさむ屆け狀かな　杖
無利強（イ本（無理やり））に呂いはひの草團子　茶
　瓢の中に騷ぐ雀子　江
ウ拍子木の霞む祉日の夜も明て　杖
　田中湯治の馬のこしらひ　茶
盃の底に外山のかげ見えて　江
　ひとり笑へばひとり泣く戀　杖
千兩の文を鼠に取れけり　茶
　から／＼／＼と箸（イ本（樒））の曙　江
若松のめでたき唄に舟出して　杖
　拜領羽織の派をきかせけり　茶
むらさきの瀨田の茄子漬塩辛く　江

あたり隣を居風呂に呼　杖
さつさと川の掃除する也　杖
つゝがなく花咲きしまふ暮の月　茶
折節は日傘も通る花日和　丶
踏ばふむほどほける若草　江
藪入を待つ餅のあちこち　茶

二

大淀や桂の爪の紐落て　杖
顏の賣れたる五位の小法師　茶
ひねり錢湯屋の三方に投る也（イ本（三方の前に））　丶
祝こそすれ朔日の雪　杖
茶碗酒例のかき汁いざすゝれ　丶
あれにゆ戀の岡崎　茶
定紋の三味絃箱に浮名立　丶
袖から猫が出たり入たり　杖
靜さにまたとり出す手とり鍋　丶
按摩坊主を垣越に呼ぶ　茶
下京はかた側斗月夜にて　丶
只二三本竹の春風　杖
摺鉢にひよどり上戸美しく（ナ）　丶
刀さしつゝ會津盆ぬる　茶
御觸狀隣の名にも点かけて　丶

一茶 文虎 兩吟連句帖　文政六年

文政六年八月は長沼に杖を引いてゐたが、十一日來の雨で洪水となり、馬や長持などの流れた事が「九番日記」にある。十九日淺野の文虎亭に入り、廿四日中野に赴くまでの間に此の兩吟を試みたのであらう。

月の外人もさし來ぬいほり哉　文虎
露のにし山露の北山　一茶
くれなゐの柿を一升三文に　丶
連まつ橋に笛を吹なり　虎
凉風に苔のかゝらぬ石もなし　丶
庭でこたへるもの中の聲　茶

ウ
おかしさや寺に勝たる嫁とりて　丶
　又だまさるゝ瘤のまじない　虎
うきとしもはや四十にやゝちかき　丶
　飯かつこんで下る大坂　茶
相談のいよ〳〵きまる賣屋敷　丶
　立まはつては親子いさかひ　虎
居風呂の番しながらに月を見て　丶
　けふの仕事に茸一本　茶
町人となりて氣樂な古袷　丶
　あしのまろ家に提婆品讀ム　虎
咲花にこんな里でも名所あり　丶
　馬の上にてすゝる蕷汁（イ本〔雜炊〕）　茶
ニ
緣切ッた褒美にほふる節小袖　丶
　枕くらべに灯のとぼる見ゆ　虎
ほとゝぎす後段の酒の最中に　丶
　あやめ一輪盗む計略　茶
今剃の影殊勝さよ我ながら　丶
　横にしぐるゝ白川の關　虎
まけ軍跡のまつりの工夫して　丶
　ほかり〳〵とたばこ吹なり　茶
蚊いぶしの素湯が煮たつ夕木陰　丶
　錢の山つく馬市の月　虎
泥坊に近付になる秋の風　丶
　連歌のまねもなさる藪寺　茶
ナ
灸点の禮にせんたくしてくれる　丶
　人鬼もなき君が代の春　虎
みちのくのゐぞも來て見よ花盛　丶
　品玉は鳴りうぐひすは啼ク　茶
片店の土人形に日のさして　丶
　ざぶ〳〵汐のかゝる茶畑　虎

文政六年未八月

一茶文虎兩吟連句帖　文政六年

一茶は十月四日淺野の文虎亭の客となつて、同月九日中野に發足してゐる。『九番日記』にさう書いてある。此の兩吟は奧書の如く出立

の當日催したので、「懐舊」の題と、脇句の「誰〳〵活て冬籠る月」で見ると追悼の巻らしい。

懐舊

何事も枯野になりぬ野はなりぬ　文虎
誰〳〵活て冬籠る月　一茶
糸堅に鯨背負ふて歸るらん　丶
海の上まで枝たれし松　虎
あさぢふの李白が家の涼し過　丶
今度の小僕(チヨク)小料理もする　茶
百敷や都は町も素直にて　丶
念入て見る文の跡先　虎
宴の相手選ばぬ女子衆　丶
さい〳〵ながらきせるかりつゝ　茶
拜領の松の植所きまりけり(イ本〔きまるなり〕)　丶
孝行の名のぱつと立つ月　虎
秋風に馬街道の普請して　丶
柿盜人に柿打ちつける　茶
石ころをいろはの上にそつと置　丶
堂の玄關はかいはいの出來　虎
花ざかり茶を乞ふものにほつとして　丶
蝶とおなじく芝に寐そべる　茶
蜂あれてこちらへむけば盲姫　丶
小沙彌が戀を諷ふ春風　虎
新町の夜はほの〳〵と淺黄空　丶
金を拾ふて棒で打たるゝ　茶
夕顏の實入らぬ運に髮剃て　丶
青田の雨をほめて居るなり　虎
宗鑑が咄茶にして鳴烏　丶
門につくねる不二の名月　茶
腰かけに並べる錢の露けくて　丶
大黑棚の秋の若松　虎
入舟のけふは格別日和なり　丶
上荷にたのむ書狀一束　茶
庭なども掃てことしもよい仕廻　丶
又子寶を笑はするなり　虎
へろ〳〵の神が和尙につゝん向て　丶

庚申様の目の光りつゝ　茶
一里石二里塚花は咲にけり　丶
飴を掴んで霞む古鳶　虎

文政六年未十月九日

一茶 文虎 兩吟連句帖　文政六年

第三までは其角の『いつを昔』元祿三年板にあつて「霜月下の七日、尙白亭醉支レ枕」といふ詞書を添へてある。偶然の感興から一茶がこれに四句目を附け、文虎と兩吟で歌仙の數に充たしたのであらう。

ひとつ松

ひとつ松この所より浦の雪　加生
鵯こす峯に入かたの月　其角
鈴の聲片原町に馬次で　尙白
むりにかつこむ名物の蕎麥　一茶
連歌師のまた或時は碁いさかひ　文虎
芍藥までも似た隣なり　茶
ウ
入梅晴の居風呂桶に澁引て　同
よりさはりにも戀の謎いふ　虎
なま醉を荷ひ出したる揚屋町　同
大行燈に着せる片袖　茶
降雪を幸ひ文に書添る　同
女ふたりが寢て咄す月　虎
荻の露枝から枝へまた枝へ　同
觀音堂に柿なども賣ル　茶
西念もまさかの時は七兵衛　同
百里の旅に三日寐にけり　虎
君が代ははこするにさへ花の陰　同
ほんほりかすむ施藥寺の鐘　茶
二
長閑さの市の中なる茶水川　同
見るほど苦き山伏の顏　虎
天龍で打れし人の肩持て　同
めつたむせうに餅しひるなり　茶
上敷のたばこの挨り吹ッぱらひ　同

七十の賀の園の若松　虎
涼風の小橋に笛の稽古して　同
姉人よびに走る傘持　茶
照り降りを占ふ紙をとばす也　同
猫に浴せる盃の月　虎
秋好の長頭丸が家を逃ケ　同
知恵かりに來る紅葉一枝　茶
ナ
糸髪に朱鞘の刀かつがせて　同
鎌倉山をつく〲と見る　虎
雨ながらもはや十夜も過にけり　同
客人とめて飯買に出る　茶
下〲の下の花もさかりぞ〲よ　同
めでたくかしくけふきりの春　虎

一茶文虎兩吟連句帖　文政六年

『おらが春』には「冬籠り悪く物喰な習けり」とあるので、その再案であらうが、文虎との兩吟はそれより後で、文政六年の奥書ある連句の間に挾んである爲め、同年作でないかと思はれる。

小人閑居成ニ不善ニ

冬ごもり悪くもの喰のつのりけり　一茶
大聲あげる丘の初霜　文虎
萩芒荻から舟に飛のりて　丶
目利の通り青天の月　茶
荒番の木札隣へおくるなり　丶
身の無病さを自讃する秋　虎
ウ
一本の杖をたのみに關越て　丶
娘にあはす聟どの丶墓　茶
あな憎の盃順に廻しけり　丶
こつくりしてもうき夢を見る　虎
ひとりある親にいとまを申かね　丶
東は茄子西は瓜畠　茶
月の夜はから雷も涼しくて　丶

そら寐入して咄聞なり　虎
膳椀をから〳〵洗ふ松の蔭　丶
花に五石の御朱印の寺　茶
犬追ふた去年のいざこざ冴かへり　丶
元和元年玉川の春　虎
二
陽炎に富士も杖だけ二階から　丶
遊女の御意に遊女嫉ひッ丶　茶
愛敬の神を小藪に勸請して　丶
母のかたみの袷着て見る　虎
ほとゝぎす佛生れし日暮より　丶
さても大雨大あらしかな　茶
さあうんぷてんぷと白刄抜連て　丶
酒屋の榎石になりなん　虎
馬士の馬にも伊達をつくすなり　丶
村のばくちはおらが開山　茶
生大根丸口かぢるけふの月　丶
やたらに折し萩の初花　虎
ナ
宇治山は宇治山だけの秋の風　丶
死日を壁におつ張て置ク　茶
孫どもに田の作りやう傳授して　丶
赤重箱にあられふらする　虎
咲花にどの窓からも鳰の海　丶
かすめ〳〵と迯す雀子　茶

一茶 文虎 兩吟連句帖　文政七年

栗之は小布施から淺野の西原家へ養子に來た人で文虎の父である。孺子亭と号して文政七年は七十一であつた。此の歌仙一折は栗之の爲め催した三吟である。『九番日記』に正月廿九日「鶯アサノニ入」と見えるので、次の三ッ物のをはりにある日附と對照して、同日の作である事が知れる。

朝若菜　三吟

黄鳥や眞青な杉朱の鳥居　栗之
朝若菜つむ烏帽子四五人　一茶

陽炎のちよろ〱水に菓子まいて　文虎
貸雪隱の長閑なりけり　之
二番荷は少しおくるゝ月明り　茶
許六が皃に秋風が吹　虎
茶の湯者は露の訛りも殊勝にて　之
それその門の天窓用心　茶
涼しさについ一斬したりけり　虎
藪をぬければ直に嵯峨山　之
母親にまた逢ふまでの淺し文　茶
なみだかくして月や見るらん　虎
いざそよげ桔梗刈萱女郎花　之
そも〱是は草菴の秋　茶
息才な身の嬉しさよおかしさよ　虎
莚織にも諷ふ高砂　之
咲花も酴醾(ドビロク)漉嗅き在所也　茶
へろ〱神よ子供等が春　虎

一茶 文虎 兩吟連句帖　文政七年

これは歳旦の嘉例とされる三ッ物俳諧であつて、發句・脇・第三の三句で獨立の連句の躰をなしてゐるのだが、こゝには便宜上、二巻の三ッ物を同一に扱つて置いたのであるから、そのつもりで見られたい。正月廿九日の日附の如く前の三吟一折と同時に作つたのであらう。

○

鶴夫婦のさり〱と春日かな　栗之
雪の上にも若菜つむ人　文虎
淡雪に詩を書ク杖の長過て　一茶

○

雀子や息才過ギて憎まるゝ　文虎
櫻吹雪の盥小だらひ　一茶
膳立に藤も躑躅も咲出して　栗之

○

ふらんどや櫻の花を持ながら　一茶
小筥の中にひばり鳴つゝ　栗之
陽炎の藪の下から町家にて　文虎
文政七年甲正月二十九日

遺篇　文政七年

『九番日記』の同年二月八日「中野ニ入」とあつて、更に十日「晴イカヤニ入」とある其の伊賀屋は梅塵亭である。此の兩吟はその時の作であらうと推定されるが、發句は前年五月の部に見える。

陽炎やそば屋が前の箸の山　一茶
三人乘の馬の春風　梅塵
雉子の聲木で鼻かむだそぶりにて　〃
てんこつもないよい日和也　茶
名月も安請合にうけ合し　〃
廻しびらきの相撲始る　塵

秋の風加賀は加賀だけの町造　〃
軒下掃いて鰍あきなふ　茶
品玉にそれ豆藏もあきれなむ　〃
猫も杓子もはやる帷子　塵
紙のぼり立る大願成就院　〃
屁ひつた事もまけ嫌ひなり　茶
むつとしてもめ盃をつき戻し　〃
江戸にたしない雪を見る月　塵
長の年勤めた袴子に譲り　〃
さあ念佛の申しだめせん　茶
植込の木もやあれやれ花盛　〃
あてがい扶持の黄鳥の啼々　塵
二
借いらへしても江戸氣の麗に　〃
芝居日といふ小長屋の雨　茶
重箱の中は煎豆ざぜん豆　〃
ほめて按摩を長くとらする　塵
定宿の德にはでかい蚊屋釣て　〃
妙法蓮華經安房の小湊　茶

折角に出したを喰ぬ夕茶飯　丶
　茶碗と茶碗同士の戀中　塵
ぐる曲に精進うちの洗ひ髪　丶
　屑を掃込む土間の突上　茶
一市のてきぱき濟で朝の月　丶
　爪くちたてゝ見たる唐茄子　塵
ナ木曾殿に縁ある寺の秋寂て　丶
　さても奇麗な砂の箒目　茶
唐傘に子を拵へて狂はする　丶
　雪駄のかねのとゞく青空　塵
ばんくりの如くめぐりて花の春　丶
　孫の彦のと屠蘇の盃　筆

遺篇　文政六年

發句と脇句は前の卷と同一であるが、第三は蘭腸で、四句目は幻一といふ風になつてゐるので、最初四吟で始めたが、表六句で中絶した爲め、更に兩吟で卷き直したのかと思ふから、前の卷より此の方が先作であるかも知れない。

陽炎やそば屋が前の箸の山　一茶
　三人乘の馬の春風　梅塵
鶯にあほふ鳥の啼まけて　蘭腸
　南さがりの町の入口　幻一
一笊の子芋を値ぎる暮の月　塵
　こびんの先に虫が啼也　茶

遺篇　文政七年

中野の伊賀屋には文政七年二月十日から十二日まで滯在して居るので、此の三吟も同時の作であらう。梅塵の家を伊賀屋とよぶのは醬油屋を營み、その屋號であつたからで、今でも中野の山岸氏は伊賀屋と稱して醬油を釀造してゐる。

たんぽゝや菜種の從弟はとこ草　蘭腸
　其またいとこ同士の蝶鳥　梅塵
霞む日の船賃たゞの三文に　ゝ
　矢立の尻へたゝく吸殼　腸
塵〱と何を案山子の小獸頭　ゝ
　南瓜の汁の煮こぢる月　塵
ウ紅葉する服紗ながらの鉋屑　ゝ
　お吃なさる殿の御噺　腸
時鳥戀の黑星啼あてゝ　塵
　夢のやうなる茄子の初物　腸
からくりの商賣あがる雨さかる　塵
　旅籠屋癖の口のおんべら　腸
所がら餅搗までに出代て　塵
　梅も間に合ふ年越の宵　一茶
面白や月の花のとねだり喰　腸
　伊勢の乞食の胡蝶ほどつく　塵
跡馬よ此骨柳たのむ夕霞　茶
　風にちらかる屋根の葺草　腸

ニ子をつれて賃貰はずの湯洗濯　塵
　佛の米を鷄に蒔也　茶
葉柳にかゝる暑さもまぎらかし　腸
　逢れぬ戀の廻り道して　塵
死神に見込れまじと櫛埋る　茶
　大口あけておくり狼　腸
座頭の坊悠然として笛を吹　茶
　連歌の席に小首傾け　腸
小夜時雨豆腐の煮やう傳授して　茶
　二十五番にきまる賣居（マヽ）　腸
けふの月安房の得意は立れけり　茶
　かた身殘しておろす初鮭　塵
ナ置く露の大藪越に噺し合　茶
　今朝の喧嘩の尻も結ばる　塵
町内はみな東派にかたまりて　茶
　歩行しまよむ母からの文　塵
咲く花に俄あがりの上日和　茶
　垣に畑に鶯の啼く　塵

遺篇　文政七年

文政七年の二月此の句を詠んでゐる。同月十三日田中に入つて四日希杖と同道で横倉に行き、二十九日田中に戻つてゐる。『九番日記』に「田中八日」とあるので、その日の兩吟であらう。

上野の花

大名を馬からおろす櫻哉　一茶
　飴の陽炎素湯の春風　希杖
賣雛のばん(ママ)ざ(と)ふ濟て手打らん　〃
　提げ提灯の宵過の月　茶
霧雨の寒くも暑くもなかりけり　〃
　ひとふさ膳に垂れる早稲の穂　杖
千(ウ)隈川曲り〳〵に宮建て　〃
　謙信びいきみな力む也　杖
門涼み諸白五升棒にふり　〃
　閾とりにして盗む小娘　茶
縁ゆかりなくて宿かす奇妙院　〃
　二日かゝつて寫す山の圖　杖
ちやれさかる猫にたばこをほつと吹　〃
　祭が過ぎて急に淋しき　茶
居風呂に初花おろしざぶ〳〵と　〃
　畑の荳にほゝる白水　杖
戀猫の繩といてやる暮の月　〃
　三ッ重なるこしかけの酒　杖
二
湖をくるりと寺の古着買　〃
　時雨序に鐘を撞なり　茶
放れ馬菊水仙をひりにして　〃
　籬も舟に送る西國　杖
振袖に射越す矢文をなぐり捨て　〃
　義理の泪を拭ふ盃　茶
いざはやせ石部金吉どのゝ舞　〃
　より取りみどり萩の花笠　杖
名月の城下町のひよろ長き　〃

生駒の霧に相場見習ふ　茶
大栗を前巾着にへし入て　丶
辻の地藏の屋根葺替る　杖
乞食も來よ〳〵けふの舟祝ひ　丶
借薄べりに札付る也　茶
したゝかに年の寄つたを自慢して　丶
親のゆづりのこの小脇差　杖
庭の花てうど彼岸を咲にけり　丶
雀の扶持に蝶のむらがる　茶

遺篇　文政七年

中野には文政七年三月廿日に入つてゐるが、廿二日は毛野に廻つてゐるので、『九番日記』によると此の廿三日の日附が疑はしくなる。遺篇は轉々寫本されたので書損はあり勝であろから、同月廿・廿一・廿二の三日の間の作であるまいかと思ふ。

文政七年三月廿三日

題遲櫻

どう仕案し直したやらさくら咲く　梅塵
翌は夏とて騷ぐ里人　一茶
眞東風吹く居風呂桶に澁ぬりて　丶
障子かさ〳〵のぼる蜂　塵
雨水に有明月のほそ〳〵と　丶
駕籠の窓から柿値ぎる也　茶
小初瀨の山を祈りに雇れて　丶
耐えてぢつと物いはぬ妻　塵
摺古木でかりた掃き出す年の暮　茶
長小便に夜の明る也　塵
聾に大音聲の時鳥　丶
卯の花町の馬鹿廣いかな　茶
空死の萱泥坊に灸すへて　丶
一休さまはよい男也　塵
長い日で見よ〳〵今に月霞む　丶
氣の藥とて植る初花　茶

朝飯をわけて喰せる雀の子　丶
照か曇る歟べろ〱の神　塵
ニ
嫁入前豆のころぶもおかしくて　丶
うかれ序に摺臼ひく也　茶
下り舟投るぞそんじよそこの傘　丶
遊行御座ればはやる念佛　塵
榾の火に小長くなつて噺しあひ　丶
狸にひとつ茶の子振舞ふ　茶
山の神おしませ給ふ杉植て　丶
麻疹のあとは猶まめになる　塵
そこしめよかしこ立てよと暮の月　丶
萩の下より逃す戀人　茶
白露のきゆる契りの返歌して　丶
譽れば狆のかしこまる也　塵
ナ
院家寺は院家寺だけにつんかゝと　丶
くはら〱すみし町内のもめ　茶
夕飯を大道中へ持出して　丶
よい馬買つて乙に曳せる　塵

咲花に節句めいたる天氣哉　丶
薺蒔に暦見るなり　茶

一茶文虎兩吟連句帖　文政七年

文政七年の兩吟とすれば、「九番日記」の四月十日「アサノ〻入」とあると對照して、その日文虎亭で行つたのであると思ふ。しかし、此の發句は文政九年の句稿にあるので、多少の疑ひのない事もない。

花見笠

今の世や猫も杓子も花見笠　一茶
竹押まげた茶屋の春風　文虎
幽齋の鑓も長閑に坂越て　丶
石のたいらにまた眠るなり　茶
林間に酒あたゝむる秋の月　丶
只ひと笛に參る棹鹿　虎
ウ
我宿の露を見給へ京の菜　丶

八合升で錢はかりつゝ　茶
上り舟狀を一本投込で　ゝ
福は寐てまつ傾城の親　虎
初雪に夢商ひを氣張る也　ゝ
龜に呑せよ口明の酒　茶
南無天滿自在に梅の咲にけり　ゝ
廊上下の子供等が春　虎
玄關に荷ひ込んだる鹿の角　ゝ
法花紐とく芥子園の月　茶
述懷の御哥に手向く香けぶり　ゝ
もはや四十と見ゆる年榮　虎
まてしばし七本鑓の人〳〵よ　ゝ
名代の餅の燒立をいざ　茶
駄賃帳それと問屋へほふる也　ゝ
犬になかれて迯る順禮　虎
小佛の關をひだりに一時雨　ゝ
かんてらてらす辻の二八屋　茶
ちよつくりとはした盜人ねぢ伏て　ゝ
芥子坊主でも男山かな　虎
螢火のぴつかりとして野路の闇　ゝ
藥ふるまへとある草庵　茶
名月の間に合せねばならぬ折敷　ゝ
木の實を拾ふ烏帽子狩衣　虎
大寺は無住になりし秋の風　ゝ
鍋も盥も羽生へてとぶ　茶
童はわらんべ組のばくちして　ゝ
川より北は相馬領なり　虎
花の木に棚をふつたる市の中　ゝ
狐の面のかはくかけろふ　茶

遺篇　文政七年

柏原の俳諧寺で催した兩吟である。『九番日記』に文政七年六月廿七日「梅塵來」とあるが、それは一茶が長沼滯杖中訪ねて來たので、梅塵が柏原に來た事ではないけれど、同年五月は殆んど柏原に在庵するので、その折の作で

あらうと思ふ。

一茶宗匠の草庵にて

涼しさも棚へ上たる住居かな　梅塵
團扇の上へのせる盃　一茶
輕尻をまけたく／＼と聲かけて　、
百日も照る盆前の月　塵
紅茸の紅のぬけぬを賞翫に　、
しんに成つてもをどる大庭　茶
ウ
吹からに稲葉に腹のふくれけり　、
家の梁かぞふ富山賣藥　塵
案の如く七ッからして雪が降る　、
洗足鍋で手をもぬくめる　茶
おかしさはけふも壹歩を棒にふり　、
寡婦馴たる御内儀の顔　塵
あなた様まかせぞ夢の世に住ば　、
いざくざなしにさつくれる山　茶
ひとり酒おのが頭の蠅追て　、
遣ふた留主にこまる出所　塵
此様な末世も花はおほろ也　、
春めきにけりかた田から崎　茶
二
朝夕の飯の菜にも啼く雉子　、
並よき痘を送る手太皷　塵
あれしきなほくねんじんも袴着て　、
山陰谷底天下泰平　茶
節穴も身になる風が吹にけり　、
こんどの嫁はげに福の神　塵
麥飯にとろゝでゆと袖曳て　、
蕣の蚊にたばこ吹かけ　茶
有明に淺草參りいざゝらば　、
脊中に冷る富士の白雲　塵
十分に風はらむ帆を引下ろし　、
あまつた蕎麥をやみとかき込　茶
ナウ
先供の高股立に夜が明て　、
城の太皷に春は來にけり　塵
初花の潮煮二膳椽に居　、

ぶちよ〳〵に女猫かけよる　茶
大道の屑を古箕にすくひ込　、
腮でかぞへて見たる供勢　塵

みはしら　文政七年

大坂の脊陰舎百堂著『みはしら』の三吟一折である。『九番日記』の同年五月十二日に「百堂カシマヤ泊」とあるが、此の巻は善光寺の文路と三吟なので、その日の作ではなからう。「はや文政も七つにぞなる」と百堂の附句にあるので年代は確定的のものである。

善光寺

蓮の香にはさまれて夜を明しけり　百堂
鳴けほとゝぎす天下泰平　文路
ともかくも瓢のうちの世界にて　一茶
はや文政も七つにぞ成る　堂
月の照る共道筋をいもの這ふ　路
ざぶりと露をあびし小男　茶
寐て延す足の先より秌の來し　堂
入相つきに登る石壇　路
きのふまで有しみやこの川澄て　茶
松にさらりとさはる前髪　堂
兆(ウラカタ)に星かぞふれば雲かゝる　路
腹一ぱいに凉むうら窓　茶
西東帆の上下を指南して　堂
人のりちぎな安藝の宮嶋　路
妹は大竹原をゆづらばや　茶
からくれないに霞む三日月　堂
むだ山も上ゝ吉の花咲て　路
胡てふだらけに成し庵哉　茶

糠塚集　文政七年

脊恭の著『糠塚集』は文政八年五月の板行で、此の表六句を收めてある。文政二年の『おらが春』に「一つ蚊のだまつてしくり〳〵かな」

といふ先案はあるが『九番日記』の同七年五月十三日「小諸　魯恭來る」とある記事と對照して出板前年の兩吟であると思ふ。魯恭は小山氏、信州小諸の人である。

晝の蚊やだまりこくつて後から　一茶
菖蒲の露をあびる旅笠　魯恭
ひよろ長き城下はづれに海みへて　茶
撞きる鐘につゐと入る月　恭
汁鍋にほつ／＼黄菊むしり込　茶
名もなき風の吹にふくあき　恭

一茶文虎兩吟連句帖　文政七年

前文の「訪㆓俳諧寺㆒」は文虎が柏原の俳諧寺を訪ふた事と解釋してよいようだが、『九番日記』には六月五日「アサノニ入」とあるので、「俳諧寺に訪はる」といふ意味である事が解る。

六月五日訪㆓俳諧寺㆒

涼しさや手と身ばかりの草の庵　文虎
幸ひ貰ふ清水一桶　一茶
上紺のとつとき羽織引ッかけて　、
根なしばなしに入相の月　虎
地たばこのけぶり輪にして秋寒き　、
廻れば三里霧の兀山　茶
妹はとても天狗の所爲ならん　、
小袖の摸様人に見せつゝ　虎
ものおもひ棚のともし火消さうに　、
丸めてはふる丸藥の紙　茶
下り舟やあれしばしと聲かけて　、
血刀かくす萩の下露　虎
もや／＼の關越て寐んけふの月　、
酴醾漉樽ぞたのむ迹馬　茶
藏はさて木部屋の壁の白くして　、
落花の塵を谷へ掃やる　虎
小鳥居の東うぐひす西は海　、

馬上からやる草餅の錢　茶
二
北條の落居を根とひ葉問して　、
糸なき琵琶をかゝへては泣ク（イ本つこ）　虎
かくす戀ぱつとせけんに諷はるゝ　、
雁間からついと鎌倉を立　茶
相場状一〳〵腮でよみ仕廻　、
犬にふるまふ細魚三疋　虎
九十九髮小そりの刀つゝさして　、
いざゆるすぞよ子分ゝ盃　茶
風ふけ〳〵青田の際の敷莚　、
天窓かすつて鳴クほとゝぎす　虎
山伏の家十ばかり月さして　、
自慢じやないがと瓢見せけり　茶
ナ
こつ〳〵と虫も古流の茶をたてる　、
田みのゝ嶋を窓の正面（イ本庭）　虎
涼しさは罪もへるかと思ふ程　、
僧は余力に雁る稽古せん　茶
清書の褒美に花の形押て　、
ちやか〳〵光る鍋の春風　虎

文政七年甲六月

遺篇

此の三吟は『九番日記』の文政七年八月の記事に五日「其秋・希杖參」とあつて七日「希杖皈」とある間の合作であるまいか、一茶は六日「晴横倉ニ入」それからずつと滯杖して居たのである。但し發句は『七番日記』に上五を「みたらしや」として出てゐる。

門川や澄み捨てある后の月　一茶
小鍋の盞に螽飛なり　希杖
投節を唄ひつれたるやゝ寒に　、
物喰ふことは見せぬ關守　其秋
人の來ぬ間にてきぱきと灸を居　、
いざ降れ〳〵と雪はやしつゝ　茶
ウ
釣たての棚へ迎へる福の神　、

仙臺俵を庭にかさねる　、
大聲に翌日も天氣ぞ〳〵と　杖
さあ板行にしたぞ山の圖　茶
中〳〵に江戸の住居の面白や　杖
あゝのこうのと狂ふがき共　秋
往還に涼み臺出す宵の月　茶
小錢のたまる傳受咄しに　杖
木の皮をむいて手染の戀衣　秋
髭にくれる露の莖糸　茶
鍋墨によごれた草も花吹雪　杖
彼岸太郎に石臼を挽く　秋
二三日ゆるり寐そべれ京の衆　茶
眞土の泥を洗ふ瀧口　杖
日の玉を不動もどきに貝吹て　秋
ほどこし風呂に坊の入込　茶
むかし〳〵すてはて戀を咄しつゝ　杖
なぶりとられし田地百反　秋
彌陀佛を柱の穴に安置して　茶
太平樂の枡まくら哉　杖
螢來よほたる來よ〳〵茶碗酒　秋
ふつゝり喧嘩やめる相談　茶
ゆうぜんと月の上るぞたつた今　杖
丘の踊のしんになりけり　茶
而（ナ）つきを見ては振廻ふことし酒　秋
竈塗りよし藏の建替　杖
大隱居大槌に腰かけて　茶
撫さすられた犬どもが寄る　秋
笠出して一枝貰ふ門の花　杖
社日藥をたゞくれる也　茶

遺篇　文政七年

『九番日記』の文政七年十月廿八日には「夜御取越」とあるが、五日「正覺ニ入」といふ記事のつゞきなので、長沼に滞在中、春甫亭で此の三吟を催したのであらう。

菜畑もあなたのものぞ御取越　春甫
　鍋で水汲む川の夕霜　一茶
放れ馬がら〳〵杭を引ずつて　同
　市の仕舞の笛を吹きつゝ　甫
約束のやうに小早く月も又　同
　萩の中から背戸へ行く道　茶
秋風に寺の藥の賣れるなり　同
　鷄法度にて夜の明る里　掬斗
うき人の後姿を繪にかゝせ　甫
　泪ほろ〳〵落る爐の灰　茶
一雨のくはらりと晴れぬ物思ひ　斗
　今や門出の血祭の酒　甫
いざ笑へいざ〳〵笑へちいさい子　茶
　寐蓙の蚤ら三十日掃とて　斗
笹粽隣の犬にふるまはん　甫
　七里四方はみな法華宗　茶
散際のさもなき花を鼻にかけ　斗
　行幸のあたり蒲公英の露　甫

長閑さに海手の窓を操廣げ　斗
　母の瘡をなほす三味線　茶
行燈にふはりとかけし麻被　同
　小石拾ふて樽のほぞ拔く　甫
死どころながらなりには定まりて　同
　同行二人下る江戸舟　茶
白髮のかぞへどまりに雲の峰　同
　晝寐の足しに茨の咲く也　甫
味噌仕込め〳〵とて鳴雀　同
　こんな庵にも足がらみなる　茶
名月の信濃知らずとけなさるゝ　同
　後生大事に菊を作りて　甫
むかし程啼くべき鹿の啼ぬなり　斗
　世をうぢ山にはやる豆腐屋　茶
借合羽かし傘の小うるさく　甫
　伊勢へ參れと雲雀せたける　斗
野に畑にへらへいとうに花咲て　茶
　隱居仕事に白酒を賣る　筆

遺篇　文政七年

士英は西嶋氏、長沼上丁の人で酒屋を業として居たが、書は米庵の門人である。文政七年の十二月三日「士英ニ入」とあるのでその時の作と見たが、確證がある譯でない。

掃除した跡の落葉や客まうけ　士英
冬の朝日に冬空はなし　春甫
大橋や綿商人の馬曳て　一茶
門屋の石を先づほめるなり　系寧
見るほどの硯の海も秋の月　魚淵
稲葉〳〵の露の祝ひに　素鏡
朝夕の茶にも酒にもきり〳〵す　完芳
はやくまるれと寺の大鐘　眞之止
村上の院の施紙に焼香して　淵
けさ幸ひに牡丹咲きけり　茶
ほとゝぎす又跡からも〳〵　甫
貸傘の千二百番　茶
皺袴くる〳〵巻てほうり出し　甫
いざ〳〵酌に来れ腰元　茶
大蜜柑三つ四つふみに引くるみ　英
ひねた垣根をしのぶ夕暮　芳
月花をひとり仕舞の日出度さよ　甫
馴て久しき松の陽炎　英

遺篇　文政年中

長沼の經善寺で催した卷であらう。呂芳の父完芳は擧句にその名を列するのみである。文政七年の頃でゝもあらうか。しかし、しつかりした年代はいへない。

のりつけほゝんは宵の寒さなしらせ顔に啼、夜なべ虫はつゞれさせとすゝむ。秋の淋しくなりゆくまゝに、彼の長嘯が窓の心地す

雪除に押まけらるゝさくらかな　一茶
千鳥になれて鍋の炭かく　呂芳
馬の鈴今や夜明の音立てゝ　同
簾〳〵のみな青き也　茶
あい悄や月の過たる草の原　同
しぼり漆の乾く秋風　芳
まてしばし佐野の渡りの虫からん　同
朝茶の泡の飲ぶりを見よ　茶
大榎雨降るたびににくまれて　同
身延参りと人に知らるゝ　芳
竈のかげから冬の月もさし　同
ゆふべ〳〵の霜を苦にやむ　春甫
妻なしがひねくり松と詠りけり　茶
忍ぶたしにもならぬ紫陽花　芳
爐を水に流すがおもしろく　甫
わたくし不二のはるゝ飯時　茶
したゝかに立圃が櫻咲出して　芳
風吹く度につくし伸たり　完芳

一茶 文虎 両吟連句帖　文政八年

文政八年の『句帖』によると、二月廿日「晴アサノ＝入」とあるので、附註の二月を同年と解してよからう。「蕗の葉に煮〆を配る」發句をこゝでは脇句に應用してゐる。「太平樂」は文虎のつけた題である。

太平樂

かゝる代に生れた上に櫻かな　文虎
酒の肴を配る蕗の葉　一茶
立馬の首の叺に東風吹て　丶
舟から直に通る小坐敷　虎
すりこ木の音も聞ゆるけふの月　丶
ことしの露も日出度かりけり　茶
ウ
はち〳〵の廻り場の柿赤らみて　丶
日市のたちし山の山中　虎
泥坊のしら髪つぶりに年もくれ　丶

佛の灯にてばくち始まる　茶
降は雨蕎麥とりに行ク闇出して　丶
手持不沙汰の下戸の名月　虎
目の上におつかぶさりし秋の山　丶
奇妙にしつの直る脊戸の湯　茶
足按（モン）だ褒美に赤い櫛投て　丶
戀の上手な都商人　虎
占のめつたにはやる花ざかり　丶
藪入下駄の鳴るが嬉しき　茶
几巾子供にかりてあげるなり　丶
鶴の間を歩行ク隅田村　虎
涼風の吹木にまつる疱瘡神　丶
だばこ盆ごと莚引づる　茶
後添の内儀は至極氣輕なり　丶
愛相に足をあらふ旅人　虎
がつくりと寒うなりたる關の前　丶
馬は通さぬ葱畑の札　茶
醫者の外手跡指南の無緣寺　丶
海へ登る茶けぶりの月　虎
綿相場機嫌の直るひがん過　丶
首引勝て栗を一鍋　茶
若（ナ）役にいざと出て行ク猪の番　丶
岩からいはにわたす箱樋　虎
井戸ひとつあたり八軒つかふ也　丶
とんだ所からもどるからかさ　茶
祖師様の日といひ殊に花日和　丶
人すれて鳴クひばりうぐひす　虎

文政八年酉二月

前記文政八年の「句帖」に二月廿二日「幻一来る」とあるから、そこへ中野の梅塵も来合せて此の歌仙一折が出来たのであらう。

遺篇　文政八年

じつとして馬に躱るゝ蛙かな　一茶

盥の中に遊ぶ雀子　文虎
咲く花に最合〳〵の髭剃て　幻一
綿の相場の元氣出す月　梅塵
素湯土瓶夜寒の躰をたぎる也　虎
だぶり〳〵と草の白露　一
ウ
貰ふたる聟の持参の力瘤　塵
あたり八間もれし噺き　梅堂
木で鼻をくゝつたやうな隣にて　茶
一把の薪這す晝顔　塵
子を負ふて麥搗く母の古風也　一
つい三年すむ鎌倉の寺　茶
小澤山捻り重ねし灸艾　堂
月夜〳〵に旅の寐心　一
念佛にまでも賽の入る彼岸前　塵
秋風たてば病癒けり　堂
立ながら二本してやる十團子　茶
座頭のかんに口を驚かす　塵

遺篇　文政八年

白兎は上高井郡六川の人のようである。露谷は常に白兎と共に一茶に接してゐるので同郷であらう。「乾く迄」の句は文政八年の『句帖』には三月と四月とに重出してゐる。三月なら四日、四月なら二日と九日・六川に入つてゐるが確定的にはいひ難い。

乾く迄縄張る庭やわか葉吹　一茶
折敷にちぎる茄子初瓜　白兎
鶴を木端(マヽ)の中へ据させて　露谷
子供角力の肩を持つ也　茶
團栗を小笊ではかる暮の月　兎
壁の破れをきり〳〵す鳴ク　谷
ウ
西念がほつくり往生目出度くて　茶
座敷をはじめ大胡坐かく　兎
牧の野に放れし馬を連歸り　谷

升の角から酒をしてやる　　茶
降は雪吉に小簔つゞくりて　　兎
鯨のとれし跡にすむ月　　谷
福原の夢ばかり見る草の庵　　茶
しのぶたそくに植る松の木　　兎
陀羅尼などちとづゝうなる亂れ髪　　谷
まだ跡どもの鰐口がなる　　茶
咲く花に大青竹の柵ふつて　　兎
羽根ある蟻が一箕ほど出る　　谷
子供來よ蛤俵の口明に　　茶
きのふのやうな上日和なり　　兎
胸につかへ〳〵た山を跡にして　　谷
さあ御祈禱に餅を一盃　　茶
愛敬に庭を流るゝいさゝ川　　兎
割釣瓶で藤の尺斗　　谷
点かけて廻狀渡す節句前　　茶
鶯同士を取替る也　　兎
燒かして味噌の香がする朝朗　　谷
座敷からはく草鞋の月　　茶
此筋は露の名所ぞ淺茅原　　兎
畑ぐるめに菊の直が出來　　谷
ナ 一莨いざとかけやに腰かけて　　茶
御寺の犬を可愛がる也　　兎
伯父と名を呼れて果に身の樂さ　　谷
二疊敷でも廣すぎる家　　茶
初花の東叡山は手元にて　　兎
春の深さに芽をほごす蓮　　谷

文政八年の『句帖』を見ると七月一日一茶は六川に入り、同三日「白兎富坐帳寄進」とあるので、その折の三吟であるまいかと思ふ。余丈といふ人物は知れないが、六川の者であらう。

遺篇　文政年中

珠數かけて名月拜む山家哉　　一茶

鹿の夜食をあける古桶　白兎
けつそりと野分の塵の落付て　知洞
供の背中へはさむ錢入　茶
紙袋刀のさやにふら／＼と　兎
歌によまるゝ橋の初雪　洞
宇治山にちよくりちよんと庵をたて　茶
口淋しさにわかす居風呂　兎
ともすれば腹だつ事が地癖にて　洞
蠅は迯つゝ佛うつ也　佘丈
柚の花の風にもまるゝ夕暮に　兎
瓜と茄子の畑さぐる月　茶
もどかしと茶碗で酒をしてやつて　洞
座頭を馬に抱き乗せる哉　茶
戀種の花も散らして染暖簾　兎
しのぶたしにもなりし春雨　洞
かんざしに草餅さしてくれるなり　茶
鳶の窓から覗き見をする　兎
二
界隈に念佛上手の名を取て　ゝ
たゞでもさあと強る山駕籠　茶
閑古鳥夜は螢の古迹なり　ゝ
樗の花にところ繁昌　兎
不細工な蕎麥すゝり込む立ながら（イ本 立ながらすゝり込）　ゝ
馬を曳せぬ橋の制札　茶
約束の御八ッがなれば打粧ひ　ゝ
この大降は誰がなみだ雨　兎
耳塚に撫子咲きぬやれ咲ぬ　ゝ
ちと涼んでもはたく巾着　茶
國の衆に見て貰ふたる內證藏　ゝ
操つて繪ばかり双紙讀む月　兎
ナ
うそ寒し文治二年の山颪　ゝ
はつち／＼を木兎も笑ふか　茶
父戀し母戀しとて砂に書　ゝ
西の空から霞たなびく　兎
花盛げにもまれなる上日和　ゝ
蝶にまぶれて日傘白笠　茶

文政八年

一茶 文虎 両吟連句帖

作の年代ははし書に「八月六日」とあるが、何年の八月六日か明瞭でない。文政八年の『句帖』には五日「晴　アサノ入」とあり六日は「晴夜雨」となつてゐる。同年の作と見てよからう。

八月六日両吟

窓先へ人の朝顔咲にけり　文虎
　土鍋の粥に有明の月　一茶
きり／＼す袋の中に鳴出して　ゝ
　無分別にて能キ童なり　虎
(イ本(ヒ))筝はよんべの雨や生にけん　ゝ
　木履ざぶ／＼洗ふ古沼　茶
(ウ)札見せて錢湯へさそふ夕嵐　ゝ
　二階はしごに千鳥鳴くなり　虎
傾城の親の噂もなみだにて　ゝ
　疊の酒を帯でふき／＼　茶
涼風に紙とばすのがおもしろや　ゝ
　小坊主ばかりならぶ名月　虎
大寺は隅の隅まで秋の聲　ゝ
　書物四五把を鹿に負せる　茶
唐眞似の一賢人が笏さして　ゝ
　岩の鼻から茶水流るゝ　虎
小奇麗に(イ本(た))小料理菴の花咲て　ゝ
　彼岸めぐりの駕の器供　茶
(ニ)霞む野にはたらいて來るたばこ盃　ゝ
　六浦の方に午の貝ふく　虎
一本の松をたのみに家建て　ゝ
　茶講序に嫩披露する　茶
上張の染もらち明くもどり舟　ゝ
　稲荷の宮に餅を備る　虎
惣／＼が手を叩くなり藍問屋　ゝ
　閻引かちて風呂に飛入ル　茶
はきなれしわらぢを仕廻ふ蓙の下　ゝ
　子を片膝にきぬた打なり　虎
月見とは只喰ふ事を山のおく　ゝ

持ッた病にむだ火たく秋　　茶

ナ
赤玉の輪珠數を弟子に盗まれて　　、

翌は都へたつ宵の雨　　虎

第一に火の用心と壁に書キ　　、

猫でも人にかりぎらひなり　　茶

初花に法花の塔のつんとして　　、

四角四面にうぐひすの鳴　　虎

一茶 文虎 兩吟連句帖　　文政八年

一茶は淺野の文虎亭に閑談して、文政八年八月九日此の兩吟を行ひ、十一日中野に向つて出立してゐる。但し「墨染が」の發句は文政八年の「句帖」八月には出てゐない。日附から云つて前の卷と同じ時分の作である事は解る。

八月九日兩吟

墨染の蝶がとぶなり秋の風　　一茶

七ッ下りの蓬生の月　　文虎

濁り酒先ッ三盃はしてやりて　　、

いざくざなしに山越るなり　　茶

傍杭に村名などをもなぐり捨　　、

扨も奇妙な蕎麥の看板　　虎

ウ
開帳は二夜三日の日延にて（イ本〔三日に日延しこ〕）　　、

地藏の腕に笠をぶらさげ　　茶

蕗の葉の清水を先へ子に呑せ　　、

犬もあなどる長旅の月　　虎

出女の情の强さよ秋のくれ　　、

芥もくたを露の切文　　茶

木枕に團子のやうな灸すへて　　、

思ひあまりに指ばかりかむ　　虎

春風に吹れ次第の草の家　　、

一箕の落花川へ流して　　茶

ぬけ作と呼るゝ奴長閑なり　　、

鳶にとられた餡をしぞおもふ　　虎

二
立た棒横にもならぬ北しぐれ　　、

すはや相圖の摩耶の大鐘　　茶

ざつぶさぶ水かけ飯をかつ込で　、
ちやかり〳〵とすり火打なり（イ本うこ）　虎
松蔭に太平樂をこきちらし　、
連歌の會に點かけてやる　茶
椽蓙に錢一包慰斗付て　、
天窓をはりし犬が尾をふる　虎
小坊主の襟にさしたるならうちは　、
內〳〵見せる庭の松嶋　茶
姫からの書狀をすかすけふの月　、
耳にこたへる棹鹿の聲　虎
くり〳〵と山田小山田刈ぬけて（ナ）　、
一もくさんに京參りかな（イ本（すゞ））　茶
聖人をかつこなされてほろ泪　、
窓切抜て小松三本　虎
あつさりと利休が花の咲にけり　、
かすみ〳〵て日傘ぬり笠　茶

文政八酉年

遺篇　文政八年

「汁の實の」發句が文政八年の「句帖」にあるので、同年作と推定したが、中七は「ほちや〳〵ほけて」になつてゐる。同年九月七日「中ノ＝入」十一日まで逗留してゐるから、その間の兩吟であらう。

汁の實の見事にほける夜寒哉　一茶
口さびしさにたばこ吹く月　梅塵
青石や親重代に秋ふりて　、
馬繋がせぬ町の松の木　茶
大道に取散らしたる黄小袖　、
今日のぬくさは雪になるらん　塵
母の日と順禮たちに宿かして（ウ）　、
によき〳〵山のいとき（マヽ）始める　茶
蚊いぶしを舳先に居て下り船　、
腕にりきみの付し入墨　塵

四五年のうちに三人聟取て　、
村一番の柾木垣なり　茶
自慢無用と月は上らせ給ひけり　、
莽筍の中にて蟀の鳴く　塵
秋祭みんなこぞつて遊びつゝ　、
小笊で魚をすくふ石川　茶
花の木を右へまがれば中仙道　、
しよひ草臥し骨柳の青海苔　塵

二
殕餅も春のなぐれと雜煮して　、
祖師達の日を壁におつ張　茶
乘掛を隨分じみに拵らはせ　、
名古屋はけうに長い町なり　塵
丁寧も殊にこそよれ北時雨　、
こじりあけても暗きうら窓　茶
阿房やい阿房やあいと子を呼んで　、
附木に書いて麥借にやる　塵
客立て塩花をふる朝の月　、
室のせつくをひとり呑込　茶

上黑に髮染なせば冷つきて　、
細からげなる闘を守けり　塵

ナ
氏神に祭れば杉もつや〳〵と　、
盃見せて狐呼びつゝ　茶
朔日の祝儀に曾呂利何ぞいへ　、
扨も奇妙な花の咲やう　塵
加賀笠の荷のかさばりてうす霞　、
羽織ながらに馬糞かく春　茶

遺篇　文政八年

文政八年の『句帖』には發句中七を「米を喰ふ也」と再考して「飯を」としたものと二句記してある。四吟歌仙である。素外は此の一坐に入つてゐるので中野の人である事が知れる。

淋しさに飯を喰ふ也秋の風　一茶
名月すぎて用のなき山　素外
縄張を自由に鹿の飛越て　梅堂

爰の一里にあつとあきれる　梅塵
湯豆腐の小皿に錢をかぞへ込　外
　火の用心をふれる初霜　茶
ウ
こきりこが町の喧嘩の起りにて　塵
　たしか翌日頃かゝる假橋　堂
取かへの林檎戸板に盛並べ　茶
　おふ子抱子とふたり持けり　塵
野ぶせりの行くあてなしに村雨て　堂
　年取の日も入相の鐘　茶
掻まぜるおろし鱠の番椒　塵
　木辻なまりを書て覺える　外
指を切る事は當分日延して　茶
　千兩箱の上に咲く花　塵
御剃刀いたゞく顔のおぼろ也　、
　眠氣ざましに鳥の囀る　堂
ニ
枯柴に茶釜の蓋のくら〳〵と　外
　跡鐘見えて明る品川　茶
形よりはとんだやさしい鶴の聲　塵
　茶漬の膳に涙こぼるゝ　外
くけかけた袖を針でおつゝかね　茶
　今降るぞよとでかい雷　堂
塗桶の中へぶちこむ道明寺　外
　晩方來いと供返す也　茶
餌になれて鉄炮垣に啼く雀　堂
　鼬おとしに池の小蝶　塵
下戸組へ芭蕉も逃るけふの月　茶
　砧聞〳〵二タ寐入りする　外
ナ
降雨をねらいすまして渡る雁　堂
　がらくた見世に柿も賣るなり　塵
一村の庄屋どのでも雪車曳て　外
　德本念佛唄へ子供等　茶
初花を重の移りに參らせむ　塵
　雉子が啼けば鳩も鳴立　外

遺篇　文政八年

白兎亭で試みた三吟歌仙であるが、年代を定

める手がゝりの文政六年の『句帖』には、六月の部に「冬」として手錄してあるので、前年か或は翌年の連句でないかといふ不審も起つて來る。しかし決定的の資料がないので同年作として置く外ない。

二時雨ならんで來るや門の原　一茶
落葉煙のなびく夕暮　白兎
雜役の罘（裾）湯あけるを待兼て　露谷
椽に持出す蕎麥の膳立　茶
ともすれば爪膝立つて山の月　兎
相撲崩れの帶を引づる　谷
ウ
澁柿の喧嘩の尻をとり結び　茶
鴉の羽根をつるすすく（マヽ）道　兎
立膝に鏡の埃うちはらひ　谷
はしら相手に恨み百程　茶
蚊にさゝれさゝれし迹のおかしさは　兎
明日賣るべき氷ほるなり　谷

義理のある母に手鍋を提させて　茶
こゝろ筑紫の僧に宿かる　兎
鬼の栖む噂に過ぎし世の中ぞ　谷
花見がてらに越る夕山　茶
荻の芽に一入月の照添ひて　兎
陶の側へはねる若鮎　谷
無禮講さあとて荻生惣右衛門　茶
中二階から投る舟賃　兎
挑灯で埋る御祓の佃嶋　谷
袖より袖へ書状とゞける　茶
垣越の戲に猫をうち付て　兎
伽のつらきは手替りもなし　谷
山茶花の中へ紙燭をそと挾み　茶
わやくや千鳥もつと遠かれ　兎
大寺の墓原廻る奥道者　谷
たばこ法度にほつと悶る　茶
名月の上杉風の烈しくて　兎
あきつの歩く汐の引際　谷

立鴫をそのみそのまゝ菴の名に　茶
　大觴で其角をまねく　兎
交代の西國方の御同勢　谷
　庭掃く箒摺こぎになる　茶
四五軒の最合の花の咲き揃ひ　兎
　龜のきげんのうつる若草　谷

遺篇

白兎亭の興行で兩吟初裏から、知洞和尙が入つて三吟となつたもので、前卷と同時の作と推定するが、前の卷の年代が違へばこの連句も亦影響を受けなければならぬ。

小座敷の半分通り小春かな　一茶
　紙衣の穴をふさぐ飯粒　白兎
繩張のしめ野に鴨の打群て　丶
　魚釣るものを入れぬ建札　茶
夕かげは仰に凉しい三日の月　丶
　たばこ烟りの横にそびへる　兎
村長に宮の移徙談合して　丶
　枕のたしに配るさい槌　茶
居風呂にもつと〳〵と雪を埋め　丶
　キンニヤグニヤアと胼のまじなへ　兎
思ひざしなどゝ盃もめ出して　茶
　引四ッ過は月の吉原　丶
虫籠の虫を放して啼す也　兎
　折〳〵窓にさはる荻の葉　丶
御藥を煎じながらも普門品　茶
　一人扶持の山田一反　丶
咲花を世間の人にうらやまれ　兎
　餅のかびれを削る椽先　知洞
鶯も雀も至極馴染なり　茶
　女子にまじる石なごの玉　兎
鬮取に火土の茶の子を掘出して　茶
　どんとはねたる炭の夕暮　兎
一しめり待たぞ〳〵初時雨　茶

例の刈萱道心の段　兎
御袋に座蒲團讓り奉り　茶
朝〳〵神酒をあげる感狀　兎
青梨子の四角四面に柵ふりて　茶
雁が渡れは烏帽子かたむけ　兎
有明にちら〳〵散らす盆の米　茶
水の聞えて風のやみ口　兎
木曾山に丸五十年住ならひ　茶
石をいたゞけおこり請合　洞
曉の椽に釣瓶と水茶碗　兎
初時鳥またほとゝぎす　茶
咲花は十一分の盛りにて　兎
莚の下もすみれ蒲公英　洞

遺篇　文政九年

梅堂は中野の醫者である。梅を愛してその庭は梅林のようだつたので、梅堂の号を得たのだそうで、その子梅塵が一茶の門人である爲め俳諧にこゝろを寄せ、六十一の自賀に一茶を招いて此の三吟歌仙を催したのである。

文政九年三月三日
梅堂老人の六十一を賀す

老松や改てまたいくかすみ　一茶
軒端に馴れし春の友鶴　梅堂
目ばたきをするまに山の笑ふらむ　梅塵
鼻紙のとぶ方へ旅立　茶
置露に月もくはらりと有明て　堂
只今來たる雁が啼也　塵
綿市をあてにとつとゝ舟湯焚　茶
阿房〳〵と子寶を呼ぶ　堂
山拔の跡の祭りに杭打て　塵
酒代のたしに膏薬を煉る　茶
猫の目を見ては竈の下を焚く　堂
御命講あれか海鳴がする　塵

駕に鎌倉土産ぶらさげて　茶
傾城町は早き夕暮　堂
肴にと小判をはさむ戀衣　塵
笑ひ上手の京の商人　茶
門先の花にはさまる峯の月　堂
蛙のきよんと居る布杭　塵
霞む鐘奈良坂なりと評議して　茶
ほつり／＼と落る宮方　堂
ほとゝぎす時に取つての辻占に　塵
あらこと／＼し國の夕顔　茶
天窓からさかさ落しに比叡颪　堂
手樽提げ來る念佛講中　塵
むりやりに貸挑灯の火ともして　茶
くれ／＼頼む江戸の用向　堂
一流行跡なし事もばつ／＼と　塵
女長屋の片意地をいふ　茶
名月の芋の仕廻をなぶり買　堂
髪の白髪にきり／＼すなく　塵
ナ
野分した盥の雨の冷たさよ　茶
とくより見ゆる雪の朝不盡　堂
言傳も門行く川の下り舟　塵
へいきに成て巣をこぼれ鳥　、
又の賀の時にひらけと花蒔て　茶
杖の丈より永き春の日　堂

遺篇　文政九年

還暦を喜ぶ梅堂の發句に脇・第三を附けて三ッ物俳諧としたので、三句づゝで獨立した連句になるのであるが、こゝには同一に扱つて置く。便宜の爲めである。

六十一の春をむかへて
二度ほこのわやく叱るな花の春　梅堂
鉢に元氣も若すゑの梅　梅塵
初霞童子に筆をかつがせて　一茶

○

本卦にかへりて

我としの六十ごろやすゝけ雛　梅堂

小松をそへて流す盃　梅塵

花衣石のくぼみに墨摺て　一茶

遺篇　文政九年

一茶の發句は文政九年の句帖に見出さるゝので、同年の春中野で催した連句である事が推定される。梅堂の還暦祝ひに招かれて出掛けた時の四吟であらう。擧句の「拙者が宿も十分の春」で梅塵亭の興行である事を暗示してゐる。

鶯ののにして鳴くや留主屋敷　一茶

氣隨にのびる垣の青柳　一巴

ほてふりのぬらりくらりと春暮て　ゝ

茶前の天氣持直しけり　茶

身祝ひに月見仕度の酒瓢　ゝ

圍ひのうちに鶉啼つゝ　素外

ウ藪菊を畑ぐるめに値段して　ゝ

押あてがつた疊の板木打　巴

相口の和尚とけふも噺し合　ゝ

阿彌陀如來を拜む眞似する　茶

裏窓にちらりほらりと木の葉ちる　外

馬鹿よ／＼と子を呼りつゝ　巴

夕暮の鍋で水汲む飛鳥川　梅塵

杜にかける越の菅蓑　外

五月闇町のはづれに宿かりて　巴

こんの藥とこんぶかみけり　塵

花見るも一ッの罪ぞ有明に　ゝ

名利の京とよみし春風　茶

うすがすみ傾城風俗のぬけかねて　外

引ずる裾をこがす夕暮　巴

玉あられ拂子で拂ふ入坐敷　茶

子供好きとて菓子は絶さぬ　塵

人並に雀も遊ぶお朔日　巴
まてな大工の入ふたるなり　外
定例のあじの干物をぶらさげて　塵
夜市喧嘩の尻を丸める　茶
時貸をかいた附木を取集め　巴
月さすまでは行燈と寐る　ヽ
萩垣のうしろを犬のかけあるき　塵
おちのつかざる雨の降る秋　外
どつしりと碇おろして湯を浴る　茶
帯一筋を狀のよみ賃　ヽ
見かけより心のすぐな女房也　巴
難くせもなく若葉ほけ立　ヽ
藪木でもおとりはせじと花咲て　外
拙者が宿も十分の春　塵

たねおろし　文政九年

長沼の素鏡が一茶に編集を托した『たねおろし』に載する兩吟歌仙である。素鏡は住田氏、永く一茶の面倒を見てゐたので、『七番日記』その他に「素＝入」といふ記事がしば〳〵出て來る。『たねおろし』は南齢の口繪を附けて同年板行されたが、一茶の眞蹟稿本は住田家に保存されてゐる。

見るうちに智惠が付たぞ雀の子　素鏡
種四五俵をつける門沼　一茶
花の木に日延節句の札張て　ヽ
辻の放下に人のあつまる　鏡
十六夜はてんこつもなく晴給ふ　ヽ
垣の代りにしをん咲也　茶
しばらくの留主をたのむぞ蛬　ヽ
右は三熊野左やまと路　鏡
奈良柴の駄賃喧嘩に枝さいて　ヽ
かゝり着次手にのぞく町内　茶
しのぶ身は犬の氣がねもしたりけり　ヽ
砂利に水うつ夏の夕月　鏡

跡からも其あとからも富士詣　丶
　此赤壁にむだ書無用　茶
上杉に引ぱりのある鍛冶屋にて　丶
　巳の日〳〵に配る强飯　鏡
先以うす花ざくら咲にけり　丶
　愚僧が畠も春かすみゆ　茶
ニ
袴栄に替へて進ぜよはつ蕨　丶
　石のくぼみに乘る灯蓋　鏡
妹は極内〳〵に下り船　丶
　文の先にて嶋をかぞへる　茶
白露の御製に露の手向して　丶
　ぐゎんぜなき児があれ笑ふ秋　鏡
三ヶ月のそりの合ふたる兩長屋　丶
　魚喰ひがてらさそふ旅笠　茶
屁をひつた事をも帳に付ヶちらし　丶
　大蠟燭のぱつ〳〵と立　鏡
本山の御使僧風の跡掃て　丶
　そこは酒組爰は餅ぐみ　茶
ナウ
手のこつぼすつてきせるをかりる也　丶
　三里にしては長い砂原　鏡
虹の輪や比良の高根を筋違に　丶
　撰集に入りし乞食の菴　茶
茶初尾を朝〳〵花に備へッ　丶
　村へ下さる山の春風　鏡

遺篇　文政九年

希杖の寫した一茶の句帖の文政九年に、閏六月六日一茶の書狀を持つて有隣が田中　入湯した事がある。有隣は伊豆の人、「隨齋筆紀」に消息を記してあるが、此の四吟は同年の夏、六川の梅松寺で行つたものであらう。

田廻りの尻に敷たる團扇哉　一茶
　山の陰より蜩の鳴　白兎
有明に酒屋の馬の出揃ふて　知洞

右にひだりに萩の咲つゝ　有隣
むりやりに風雅めかして庵を立　茶
まぐれあたりに賣れる燒餅　兎
ゥ
村しぐれ晴るゝ其夜に通ふ人　隣
爽の飯をやつとぬすみて　茶
明俵米のたはらもつみ重ね　兎
土藏の間をのぼる川舟　洞
すや〳〵と尿瓶枕に寐そべりて　茶
屛風の中に醫者と煉藥　隣
笛吹けば小雀山がら四十から　兎
木曾に住では面白い月　洞
戸板にて柹や豆藪を賣ひろめ　隣
夜泣をとめる父が十念　兎
朝〳〵も貧する猿に花上て　茶
乳房啞へて雲雀詠る　隣
ニ
空寒く彌生半も暮かゝり　洞
さあふりたてよ翌は國入　兎
ふんぞつて按摩とらせてから眠り　隣
障子の穴をのぞく傾城　洞
吹風の浮名に己が名の立て　茶
時の贔屓に藝の上達　隣
けふは今日翌日はあすとて手打蕎麥　兎
隣の顏を貸りて酒買ふ　茶
赤馬の竹齋どのは來られけり　洞
よき次手なり星合の歌　兎
大雨の垣根も洗ふ朝の月　茶
によきり〳〵と鷄頭の砂　隣
ナ
常不斷謡ひくせるが得手勝手　兎
翌日の日番に碁會呑込む　茶
さし出た山のはづれに腰をかけ　隣
扇をまねく胡蝶乙鳥　兎
大事がる花の中には風吹て　洞
賣たあまりをくれる草餅　茶

遺篇　文政九年

有隣を同行して高井郡六川の白兎亭で、同所

の知洞も一坐して四吟歌仙を催した卷である
が、歌仙には五句不足してゐる。

白兎亭にて

さいはいに燒餅くるむ一葉哉　一茶
迎挑灯まゐる名月　白兎
てつぺんにから〳〵柿の久しくて　有隣
めつそふかいな大座敷也　知洞
光琳が螢ちら〳〵〳〵と　兎
何喰ずともあゝ涼しいぞ　茶
ウ
つくばねの水は畑へ流れ入る　洞
太神宮のやしろ相談　兎
烟草盆とりて橫座に坐り込み　茶
早速分ける書置の文　洞
しのぶ身を千鳥がなけば犬も吠　兎
玉のすだれの絕へぬ浪風　隣
ぐひ〳〵と大盃を引かけて　洞
馬鹿正直のお國侍　兎
宗旨違ひなどゝ一文くれる也　茶
玉味噌くさき夕暮の里　洞
にこ〳〵と月さし覗く花莚　兎
鋲打駕のはち(マヽ)く春雨　隣
二
黄鳥に木辻なまりをよく覺え　茶
かくし咄を琵琶で答へる　兎
上書を取つて渡せば常時斗　隣
表玄關へまはる代脉　茶
のしかゝり〳〵來る橫時雨　兎
日は暮かゝる腹はへるなり　茶
むさし野も梟笑ふ末の原　兎
この涼しさは至極上ゝ　茶
埜より一里ばかりを迎ひ船　隣
すや〳〵鶴を膝にねぶらせ　茶
窓の木や夕月などの邪魔をして　隣
露もどうやら赤い鷄頭　兎
ナ
秋風の歌よみためる日頃だけ　茶

遺篇　文政九年

前の巻と同時の作であらう。一坐の顔ぶれも全く同一なのでさう思はれる。歌仙としては二の表の折端から同裏にかけて七句不足してゐる。未滿のまゝで中止したのであらう。

夜〱や蚯蚓の唄もきばり行く　一茶
前もうしろも霧の遠里　有隣
子供等が角力最合の橋かけて　知洞
行幸の沙汰も反古となりけり　白兎
落花して月は梢にけろ〱と　隣
刀の柄にちぎる草餅　茶
ウ 初午の後の祭の下屋鋪　兎
子供雇ふて踊らするかな　隣
繼衣苔のころもゝぬぎ捨て　洞
今ぞ知りぬる夢の世の中　茶
九ッの鐘を相圖に飯を喰ヒ　隣
車に積で瓦敷石　洞
初雪のちるを拂子で打拂ひ　茶
藥をたべに參る棹鹿　隣
呉竹の風をちよつ〱と嬉しがり　洞
暖簾のすきを月のさす也　兎
曉の霧押分て通ひ舟　隣
この四五日は安い初鮭　茶
ニ 若殿の御代も靜に朝乙鳥　隣
行儀正しく並ぶ雛の間　兎
毒なりと鯛一切も喰ぬ也　茶
伯夷が眞似に山へ引込む　兎
今少し涼むべら也堂の椽　隣
線香花火にかゝる夕立　茶
あくせくと草笛吹いて大津牛　兎
一杯のんで心うき〱　隣
窓の月ひとり見るにはありあまり　茶
鮎に鰍に中のよいかな　兎
兄弟のはなし合たる秋祭　隣

遺篇　文政年中

一茶の發句は文政八・九年の記錄で見たようであるが。さがして見ても知れないから確定的には云ひ得ない。中野の梅塵亭に於ける兩吟である。

御揃や孫星彦ほしやしやご星　一茶
山盛につむくだものゝ月　梅塵
今日はけふ翌はあしたに紅葉して　、
住めば田舍も氣樂なりけり　茶
寢たければ寐てたばこ吹く夕涼　、
二文花火に蚊のぱつとちる　塵
ウ
厄介の上に聟の伯母持つて　、
朝茶仲間に漸〱と入　茶
せま庭の土の西行のかこち皃　、
下十五日ひしと時雨るゝ　塵
通ひ路は藏と〱の間にて　、

隱してつけるしつの妙薬　茶
竜宮の乙姫役にあたる也　、
花毛氈に花ぞ散しく　塵
入相の鐘のうなりも朧にて　、
洗足鍋に蛙啼する　茶
讓られし肩打槌を貸ぬなり　、
夕餉といへばいつも燒餅　塵
ニ
貧乏神などゝ子供を叱りつけ　、
臼掘かけて箱根越なり　茶
雪ちらり〱師走も廿日過　、
市の喧嘩は酒が始める　塵
首だけも新山伏のせい高く　、
跡のはなしが奇妙なりけり　茶
粟飯にづぶり〱と箸さして　、
正月觸れるめつけ夕立　塵
日に何度可愛い中の小いさかい　、
先火燵から見ゆる我山　茶
年を取るばかりとなりし暮の月　、

若い時より日課つとめる　塵

ナ
義經と知れてもしらぬ顔をして　、

駕で木辻を戻る曉　茶

一昨日の夢を五日に手をたゝき　、

福蜘なりとはなす梅の木　塵

花曇風に雲雀に行雁に　、

都は別て長閑なりけり　茶

遺篇　文政九年

希杖の寫本によつた『九番日記其他』の「文政九戌春」の一茶句帖に此の發句があるので同年の作と推定される。梅塵の一肱につゝぱる杖先の月」の脇で、一茶の中風に衰へた事も推察される。

鳫が茶ものけて置いたぞ其畑　一茶

肱につゝぱる杖先の月　梅塵

塩の値の鼻を打たる秋寒に　、

馬糞の山へ放る草鞋　茶

迹連の笠が見えつゝ初時雨　、

買つた德利をもちにつく也　塵

ウ
耻をはぢと思はぬ人の顔若く　、

女の狀で窓を張りつゝ　茶

手煎じの藥をさます二階住　、

水鶏聞〱觀世よりする　塵

口でいふやうに動かぬ今參り　、

煤掃の日に富士を見る哉　茶

村中にちよこ〱庵の金貸して　、

猫あしらへにしたる膝の子　塵

入ふ(マヽ)たる大工は馬鹿が取得也　、

手ごろな箱に植る初花　茶

月影も仰にぬくとい下屋鋪　、

蜆の売で目藥をとく　塵

ニ
五六人付て頼みし屆け狀　、

場末にすめば樂な大坂　茶

無造作にぐる〱まげの節句髮　、

鰹に指をきりし俎板　塵
こみついふ村役人のおかしくて　丶
ほん今様に染し木曾布　茶
だゞつ子が生姜とけて宵祭　丶
てんこつもなく晴れる名月　塵
山萩の亂れぬもまた哀れにて　丶
生過ぎたとてたてる茶煙　茶
むら雨の身延嘶しにほろ泪　丶
用ありさうに鶺鴒とぶ　塵
酒やめたほど規摸のなき冬籠　丶
隣で掃いてくれる門先　茶
負るなと子供喧嘩をけしかけて　丶
佛の花は二文から賣る　塵
鰹節削る朔日汁に春の風　丶
人並に打つて仕廻ふ小畑　茶

遺篇　文政九年

希杖の寫本には「名月や抔とは上べ稲見かな」となつて文政九年の部にある。それから推定して同年作の四吟としたが、梅塵亭の興行らしい。自芸と自芳は中野の者であらう。

名月やとはいふものゝ稲見かな　一茶
樽ごて庭へ直すどびろく　梅塵
角力取ところ嫌はずろくに居て　自芸
手織の縞の太きだんだら　自芳
三文で一羽まけたる餡の鳥　丶
町造りたる村の春風　塵
暖う日傘で醫師の歩行るゝ　丶
四日の空も草餅の色　芳
手見きんと最初下手碁のかためして　丶
眼鏡ながらにづぶ寝して居る　塵
百呉れて貳朱と書たる奉加帳　丶
來たての嫁と見ゆる髪つき　芳
ひけらかす鏡蒲團の巨燵がけ　丶
丸めた雪にこまる出し所　塵

蒸菓子をいと尋常な御手づから　ヽ
　正直ものゝ南無字六右衛門　芳
苫の婆娑やれ花見それ月見とて　ヽ
　鴫立澤の春の夕暮　塵
枸杞飯の御造作になるつもり也　茶
　狐はなれてうそ鈍になる　塵
若がへる四十嶋田に薄化粧　芳
　ぱつぱとくれる玉のかんざし　茶
からきりの他人同士の年忘れ　塵
　江戸より京は雪も倹約　芳
御佛名豆腐の脉もあがるとて　茶
　旅籠の代に烟草一玉　塵
朝雨が降ると定式天氣なり　芳
　奉公ぶりして庭を掃つゝ　茶
月見とて共むき〳〵のから大和　塵
　露の飯櫃も見ゆる芋の葉　芳
ナウ
うそ寒き六十六部ねぢ伏せて　茶
　角を入たる庄屋代官　塵
新開の棚田どさりと欠崩れ　芳
　早く〳〵と呼る挑灯　茶
咲花に堪忍ごろの小糠雨　塵
　（一句闕）　筆

遺篇　文政九年

前巻と同時の連句であらうが三吟である。一茶の附句に「ことしは膝に子の居らぬ也」といふのが文政二年早世したさと女のことらしく、もある。さうすると年代は狂つて來るが、文政九年としても膝に子のない月見をしてゐる譯なので、確證の發見さるゝまで九年説に假定して置く。

有難や居辨慶でも今日の月　自芳
　馬を曳せぬ蕎麦畑の秋　梅塵
木槿から木槿へ小川流るめり　一茶
　滅法界に賣れる目藥　芳

たつた今傘預けしを村しぐれ　塵
　椽はな借てちと眠る也　茶
大聲に出船〱と呼りけり（イ本、かけ）　芳
　壹歩の錢を寄合で買ふ　塵
女講一間へついと膳居て（イ本（膳を居））　茶
　夏も柳の風に媚く　芳
多過て結句螢の淋しさよ　塵
　ことしは膝に子の居らぬ也　茶
口輕の借せ〱どのに酒くれて　芳
　廿日鼠を落す俎板　塵
廟守のほまちに箸を削りつゝ　茶
　月代ほどにはへし若草　芳
咲花におぶさつて居る三日の月　塵
　蛙おづ〱渡る丸橋　茶
又しても琵琶小淋しくかきならし　芳
　小いさい顏ででかい嘘つく　塵
木辻中のもめを安〱呑込で　茶
　蜘の巣拂ふ鉢の水仙　芳

髪とれどもとの五兵衛で濟しけり　塵
　朝茶仲間のかしら鬮ひく　茶
曳て來る土佐材木に蝶吹て　芳
　子供と金は時のわきもの　塵
跡は野になれ〱旅は此人數　茶
　蚊にせゝらるゝ盆頃の月　芳
露の身は我手に脉を探りみて　塵
　國から袷やつと來る也　茶
喧嘩からけちのついたる出開帳　芳
　膝行の立ちし噺もつぱら　塵
柏葉にくるむ一盃五人餅（イ本（一杯））　茶
　上る天氣に簑の陽炎　芳
けふも花〱とて假寐して　塵
　すゞしく晴る山〱の春　茶

遺篇　　文政九年

これも同じ時の三吟らしく思はれる。梅塵は

一茶の晩年になつてから殊に接近して居るので、前二巻と共に同年作とする理由のない譯はない。

豐秋

名月の二年ぶりてる田畑かな　梅塵
親椀につぐ酒の秋風　一茶
尻べたに莚のなりの冷ついて　白芳
おどけ噺はもつてこいなり　塵
定宿はおれにゆ一里塚　茶
こんな天氣に雪のちらつく　芳
ウ 大どもに子供の交る錢ばくち　塵
障子の骨にかける灯盞　茶
明烏出船〱と呼歩き　芳
義經公に瓜たてまつる　塵
耻かしき事を百ばか笛に吹き　茶
ひとりごろりと手枕の夢　芳
飯の湯も今に藥のにほひして　塵

一字一石埋る香久山　茶
笹の葉に月の光のさあらさら　芳
花ものん氣に咲きし秋の野　塵
若駒に早稲燒飯をほうばらせ　茶
うんぷてんぷに不意討んいざ　芳
ニ 女房ども母を賴むぞ〱よ　茶
蘇鉄の鉢をのせる小蒲團　塵
寐覺にも探つて見たるくすね金　芳
お伊勢に籠る大年の夜　茶
犬どもが人をちやにして鳴ぬ也　塵
膝行車の走る坂道　芳
夕立がはたけの隅にちよんぼりと　茶
腰掛椽に薄べりをして　塵
赤〱と小咳拂ひの緋の衣　芳
柿盜人が下手に隱れし　茶
福は天にありとて月を見たりけり　塵
隣も同じ肌寒き風　茶
ナ 疱瘡に藪醫も枕ならべつゝ　芳

江戸では錢が散るやうにいる　塵
晝飯に餅を包んでくれる也　茶
よい口癖の念佛六兵衞　芳
呉服から花の枝まで在郷見世　塵
日延節句をふれ流す春　茶

たねおろし　文政九年

素鏡の『たねおろし』には第三までよりないが、遺篇には初裏三句まであり、表の六句目は附句が記してない。未完成の連句なので表三句だけ『たねおろし』に掲げたのであらう。

遊二松林一

松茸や犬のだくなも嗅ぎ歩く　一茶
盃ゆるす山の秋風　素鏡
名月に大長刀のけいこして　士口
返歌たよりのわらは三人　呂芳
杜若打盡されもせざりけり　茶
（一句闕）　口
家うしろへ莚ひろげる夕涼　鏡
耳から耳へ噺吹きこむ　芳
美しき緣にこつそり水さして　茶

遺篇　文政年中

芭蕉忌の興行である。最初は三吟で起つて、二の表になつて梅塵が加り、更に露月が出席して五吟歌仙となつたのである。場所は中野であらう。

芭蕉忌や客が振廻ふ夜蕎麥切　一茶
箸をかへして直す炭の火　一巴
番町の天水桶を塗替て　素外
晩の月見は誰が役也　茶
買込だ芋を分け取る大箕笊　巴
犬としかとが交こぜに啼く　外
ウ
何時と十三鐘が鳴り出して　茶

指切とまで言はで立ぬく　巴
吉原の法度の札が改り　外
鞴眞青に屋根〳〵の桶　茶
時鳥駕籠の左右を啼歩き　巴
山のほこらも端午成りけり　外
武者扇團十郎する子供等に　茶
からくりの月三文で見る　巴
善光寺様の御堂もやゝ寒く　外
柿と米とを貰ふ重箱　茶
有明に百ばか花の噂して　巴
櫻のかげに朝比奈が醉　外

二

山雉子の聲が高いぞ〳〵ぞよ　茶
こんな橋さへ（イ本(殿)）天下普請に　巴
村長のはなし羽織が自慢にて　外
一夜の旅をまた誘はるゝ　茶
手のこつほ揩る眞似をして金を借り　巴
虱と仇名つきし惣領　梅塵
夕時雨うそもたまさか言當て　〻
内で呑むより白湯の味さよ　茶
小田原が向ふ下りに見ゆる月　露月
米が一升五十せぬ秋　塵
やゝ寒に蜊の片輪をかばい置　茶
時でもないに雷がなる　月

ナウ

奈良坂やこの手あのてと酒汲て　外
謎とけかねし文のしら紙　塵
咄にもならぬ小指も切損に　〻
千人殺す橋の春雨　茶
御威光の日に〳〵高き花ざかり　月
畑燒れて小鼠（チツ）飛び出す　塵

一茶・文虎 兩吟連句帖　文政九年

淺野の文虎亭でこの兩吟を作つたのである。「戌十一月」の奥書は文虎の心覺えで、これあるが爲め作の年代が確定する譯で故人の用意な多としなければならぬ。埋火の發句・影法

師の脇句で、芭蕉の「埋火や壁には客の影法師」をその俳諧的境地とした事を知り得る。

影法師

埋火や素湯ちん／＼夜の雨　一茶
　壁にも来る客の影法師　文虎
きり／＼す二合半升に鳴出して　丶
　百里うけあふわらんぢの月　茶
霧しぐれ鐙のなげくら拍子づき　丶
　地をするばかり下馬先の松　虎
ウ七十にござる／＼と袴着て　丶
　火鉢の炭を筆でつみつゝ　茶
御別れにもいたつたのむ小盃　丶
　大極上に夢はんじけり　虎
なでられにちよこ／＼猫が膝に来る　丶
　しやつくりしてもなむあみだ佛　茶
百文の錢を階子につゝかけて　丶
　雨一見の須磨の夕ぐれ　虎
歌讀ぬ身のかなしさよ淋しさよ　丶
　茶の子のあんに花のちる月　茶
おくそこもなくて暖氣な隣なり　丶
　うぐひすの啼々上田三反　虎
ナオ春の風もろこし舟を吹つけて　丶
　人はつとちる挑灯の紋　茶
聟どのゝ發明あほぐ白扇　丶
　恨の筋を横笛にふく　虎
木枕に撫子のさく柴垣に　丶
　腰かけ薪よ乗るさん俵　茶
豆藏の手づまの不思議咄し合　丶
　みぎりは餅屋ひだり酒店　虎
親犬が犬にかまれた／＼と　丶
　いろはがすんで頭ふる月　茶
柿の木の下へ脚立（キヤタツ）を引ずつて　丶
　谷そこ見れば栗刈の聲　虎
ナウ秋風のさあらさら／＼荏の葉に　丶
　普門品第二十五の紐とく　茶

小わらはゝ茶を汲んで來てけろりくわん　丶
　椽から直に鯛を釣なり　虎
翌〱と待し出口の花咲て　丶
　花より〱と東風の吹かな　茶

文政九年戌十　月

遺篇　文政年中

希杖と同行して長沼に入つて、四吟を巻きかけ、表六句で中止したものであらう。秋、同行した記録がないので文政年中の作と推定し得るまでゝある。

菴先は草の市場になりにけり　春甫
　笠の下から秋風の吹く　希杖
腰かけるやうな小山も月夜にて　掬斗
　笛も賣なり餅も賣る也　一茶
大根も葱も四五反作り取　杖
　雪が降るとて槌借に來る　甫

遺篇

『隨齋筆紀』に「紫村新婚賀」といふ題で「たくましく桃に非ずや新枕　文木」とあるが、龍卜は『三韓人』に淺野の人として出てゐる。此の三吟は文政の末年であらうと思ふ。

鶺鴒やいかにも古き池の形　一茶
　杭も見らるゝ今朝のうす雪　文木
五里六里小松が原に杖捨て　仝
　一つの梨子をゆづり合つゝ　茶
名月をあてに明たるうしろ窓　仝
　俵くゝりて冬をこそまて　木
柴の火に黑みし顔を笑はれて　仝
　あらましあたる夢の占　茶
撫子にかたみの衣早乾なり　仝
　ひたと藪蚊のさわぐ文車　木
和田殿の小唄の端の細長く　仝

ひとり飯たけ一人棹させ　茶
夕べの月烟りは須磨に似たりけり　仝
長刀なりの戸をかへす也　木
綠豆の莢かなぐりて遊ぶなり　仝
花守が日をまつる粟酒　茶
鶯の啼きふるしたる杜にて　仝
かすむ入江に塵を掃込む　木
ぞろ／＼と鎌倉坊主見ゆるなり　仝
椎の林に朝日わたりて　龍卜
片店の梅漬匂ふ風が吹　茶
枕の謎を誰が語るらん　木
俤の行燈細りて千鳥啼く　卜
名古曾を越し吉次吉六　茶
草村に酒をさましてよい加減　木
駒のいなゝくばかりなりけり　卜
ちま／＼と念佛申す家たてゝ　茶
きつと一曲吹は尺八　木
菊萩は月より先に露を置き　卜

水汲む筋に鴈の啼くなり　茶
天窓から音づれにけり初嵐　木
筏に物のさはりなき川　卜
麻糸を染てもすぐす五人口　茶
欄干たゝきうたふ聲／＼　木
みやびやか花と入日のにらまるゝ　卜
うか／＼くらす春の草道　茶

遺篇　文政十年

一茶は今年六十五で元日は中野の梅塵亭で祝つたらしく、三吟の脇句に「三人前をつける禮帳」とある。發句の元日に對照して梅塵亭興行說が確かになつて來る。

文政十年正月

元日やわれらぐるめに花の娑婆　一茶
三人前をつける禮帳　梅塵
酒さます加減こゞちに東風吹て　蘭鵬

ひらりと馬に横ざまに乗る　茶
名月を今年は旅のうちどめに　塵
新蕎麥ねだる山中の宿　鵬
ウ
祭迄大きな臼をころばして　茶
律義之助に嫁を取持つ　塵
嶋原の伯母御ゆるりと二夜がけ　鵬
つくらの椽に芥子を一花　茶
べん／＼と雨にかづけて長噺　塵
耳の側から山寺の鐘　鵬
一の湯の湯桁半分夜の明て　茶
豆いりほつ／＼八十の親　塵
ごろ／＼と初雷の小手早く　鵬
たゞでも負けてしまふ花の木　茶
月霞むみぎりに千部供養塔　塵
近江の海は直に目の下　鵬
若君のぶら／＼病つい癒る　茶
麻上下でこままはす也　塵
ゆるぐ齒も忽ちすはる此寒さ　鵬
左に海を透す反橋　茶
按ッで張て只八文と大聲に　塵
雨はら／＼と市のつぶるゝ　鵬
そんじよそこへいやかとそつと袖曳て　茶
柘植の小櫛を借取にする　塵
又しても義理ある親の目にはづれ　鵬
この物騒にひとり夜あるき　茶
盗人は其名の殘る松の月　塵
によき／＼石に初霜をおく　鵬
ナ
下冷に朝茶土瓶と敷蒲團　茶
家うち家中が贔屓髮結　塵
元服の孫は親より大きくて　鵬
毎度手引てくれる門橋　茶
ゆるりつと花に御慶を申し入　塵
空までしやんと草餅の色　鵬

遺篇　文政十年

田中の湯は一茶の氣に叶つて居たので、文政

十年の夏もまた入浴に出掛け、希杖と此の雨吟み催したのであると、同年の句帖に此の句があるので推定される。

打水やうち湯やひとつ月夜也　一茶
　楓實櫻すかぬ人かげ　希杖
文机にちんぷんかんとうなづきて　ヽ
　例の豆腐の鍋かけるなり　茶
さつ〳〵と松を濡して初時雨　ヽ
　船頭どのゝ火打からなん　杖
我形も歌によまれし破れ笠　ヽ
　一杯呑がさいごふざける　茶
行燈に恨なんどを書散らし　ヽ
　其角が戀を啼く時鳥　杖
涼しさや肩にかゝらぬ大浴衣　ヽ
　折敷の先に松のうら嶋　茶
朝夕をかゝさず鶴に食くれて　ヽ
　七福神をまつる名月　杖
踊らずば跡へされ〳〵地藏尊　ヽ
　太郎に柿を頰ばらせつゝ　茶
大釜の下へはき込む切草鞋　ヽ
　百人前は花の膳立　杖
新寺やてら子ばかりの春普請　ヽ
　犬さへ見ればけしかける也　茶
たひら雪嬉しきほどに降出して　ヽ
　雨の袂に泪ふきつゝ　杖
いたはしと松葉に契る濱庇　ヽ
　鷗啼くなり須磨の臺所　茶
塗桶に南無阿彌陀佛採ためる　ヽ
　桑のしもくの杖を立居に　杖
水上は白川山の茶の煙　ヽ
　先づほた餅は有明の月　茶
寐加減のてうどよい程肌寒み　ヽ
　むし選り分けて迯す笹原　杖
四季折〳〵笛も上手な名を取て　ヽ
　無賃で駕籠に乘る夕暮　茶

五里六里かたまりて石法華村　丶
　吹に錢の這入る春風　杖
用心の藏の戸前へ花植て　丶
　この三月は多い吉日　茶

遺篇　文政年中

發句は文政十年の句帖にあるが、雲路といふ人物は明瞭でない。『隨齋筆紀』をさがしても見つからない。晩年の門人であらう。

人の世は砂あるいても蚤うつる　一茶
　雲の峰より生ぬるい風　雲路
大男枴を杖に川越て　丶
　市のさんまを買ひあてし月　茶
むだ口もきけばきゝどこ秋の風　丶
　こくも薄くもみな紅葉也　路
觀音を一文投げて拜みけり　丶
　急に主用にのほる上み方　茶
髮切つた頭へ布をかぶせつゝ　丶
　人目の關をぬけるうら川　路
小座頭は三味線箱をぶらさげて　丶
　松の横日に蟬の諸聲　茶
日枝の鐘湖水の上に鳴りすぐる　丶
　都の米と投る燒飯　路
笠の字を書くうちぢつと手を突て　丶
　花が降る也東西南北　茶
大名の天水桶の月霞む　丶
　牛の起きたる跡の陽炎　路
二人ともあらばかまけじ目疾の子　丶
　けふは芝居日翌日はからくり　茶
取替の夏桃戸板に並べ立　丶
　思ふたよりはたんと涼しき　路
破れ壁に風の藥をおつ張て　丶
　只居やうより草鞋でも賣れ　茶
咄聞て貰ふばかりに酒を買ひ　丶
　船から投げる手紙一本　路

遠眼鏡上總の方へおん向て　丶
百日法華てうど名月　茶
山茸君へと取つて奉る　丶
忍ぶでもなき夜さむ朝寒　路
親の慈悲叩き起して市へ出す　丶
もう初春も翌あさつて也　茶
ほつ〳〵と窓の障子を切張て　丶
外の方へと起す立臼　路
西方に名代の花の咲にけり　丶
てんこつもなくぬくい春風　茶

遺篇　文政十年

此の三ッ物は梅塵父子が一茶の病中を見廻つて、その本復を祈つて作つたらしいが年代を確證する記録はない。文政十年は推定である。

宗匠の快方を祈る

月の雲一枚紙をはぐやうに　梅塵
誂らへどふり腹のへる秋　一茶
漸寒にぬく〳〵普請むくろみて　梅堂

遺篇

一茶の『方言雜集』は未定稿ながら馬琴の師吾山の『諸國方言物類稱呼』と共に、近世の俳人で方言研究に着手した先驅者であるが、その一茶に此の信濃方言連句の存在する事は方言の開拓者として國語學史にその名を傳へて好いと思ふ。それはとにかく此の獨吟の年代は、いつの事とも明瞭にしがたいのは殘念である。

信濃方言　**獨吟**

こりよそけへいつけて置けよ御年玉
何この國でか春風のふく
引かけてひつさばいては凧張て
ずんべらぼうにばか長い町

ごうせいな噺に更る月の秋
　そねいに啼くなくつわ蟀
見せいかず花火の揚るそれ揚る
　このけんまくにつけられし文
めつほうに妹のかたは器量がよい
　うらのたんぼで何かさゝやく
おやけねへ芝居のあるに雨がふる
　へいもの葉から露のころげる
後の月見つめておなべはじめつゝ
　新酒の出來にたまげ申た
こけたまに船に積こむ今年米
　それそのほこにきもやかせるな
わんだれもさうじやぞ花の眞盛
　けいろも啼けばがにも這出す
御笑止なこねへにたんと草の餅
　ちとばた待てぢぢまつて行く
せつなしなてゝのない子をつゝばらみ
　ごんぜやくほどなほつのる戀

うんぜいに夕立雨がふり出した
　まつぱだかにてすゞむ椽先
おつかなや犬が啼つく夜の道
　へい賣切つた市のくだもの
とつときの日傘をさして善光寺
　ろくに居ながら茶を飲で出ろ
煤じみたはぐろの水に月うつる
　でいの炬燵へいんで寐そべれ
米の値をのほうづもなく引上て
　かまけながらも法事つとむる
がんぢやうな柱の見ゆる臺どころ
　あちや一杯とうけるさかづき
餓鬼どもがへし折て來る花の枝
　やみぐもに啼く藪のうぐひす

一茶紀行・日記集

寛政紀行

寛政七年 此年旅拾遺 正月八日觀音寺立乙二月廿八日歸ル。三月八日立、四月十八日大坂ニ入ル

乙卯 歳旦　於專念精舍

今日立春向寺門　ゝゝ花開愈淸暾
入來親友酌樽酒　豈思是異居古園

元日やさらに旅宿とおもほへず

讃 全日遍路人

誰人か孤着ています花の春　とありしは、都近きほとりに春をむかへてとなん。予も今年玉藻吉讃岛に春を迎侍るに、此國や掛毯もあやに畏き大師の御法をしたふとて、樹下石上を住家と成す雲水抖擻も遠近にありて、春を迎へる事を想像りて

乞食も護摩酢酌むらん今日春

看 飯富山 短歌一首

人皆は今を春邊と飯比古の
山のしら雪かすみたなびく

春日向東北　眼前有富山
擧頭望殘雪　頻涙破袖攘
何日罷漂泊　古園到富山

幷短歌

これやこのさぬきふじてふ足引の
山をし見ればあづまこひしも

浦輪を逍遙して

遠かたや几巾の上ゆくほかけ舟
家飛〳〵凧巾も三ッ四ッふたつ哉
梅がゝに障子ひらけば月夜哉
天に雲雀人間海にあそぶ日ぞ
白魚のしろきが中に青藻哉
長閑しや雨後の島の朝煙り

人日

七中の音に負じと鳥かな

八日 十六ざくら見んと觀浦の旅家を首途するに、此地より明の方に當れば、

吾恵方詣は正月ざくら哉

三十丁となん、三島てふ名所に到。

　しづけしや春を三島のほかけ舟

土居、島屋と云はたごやに宿。八里也。人々は金比羅参とて相宿いすたく(二)つけても、君が世のありがたさは、きのふや今日までは松かざりのありしが、はや

　出て見れば我のみならず初旅寐

九日　入野の曉雨舘を訪ふ。

　梅がゝをはるぐ尋ね入野哉

此里は入野てふ名所にしあれば、世々風流人のことの葉のあれば、やつがれも昔ぶりの哥一首を申侍る。

　長歌一首

ものゝふの。矢なみつくろひ立向ひ。入野ゝ原の冬ごもり。春さ(ル)り來れば。籠毛與美籠母乳。夫久思毛與。美布君持而。此原わか菜摘妹。石上古哥のこる。壺菫いかにと問へば。玉手次かけのよろしく。立留吾にかたらく。あかねさすうす紫の。一花のゆかりの色香。色々に常めづらしみ。亂尾の長春日を。見れどあかぬ鴨。

　反哥

　はろぐに尋入野ゝ壺すみれ
　　ゆかりあればぞ我も摘みけり

十日　二里半ほど、新濱、騎龍亭に泊。

　帳閉る加勢もせずに旅寐とは

十(一)二日　八里程と覺、中村と云所に泊る。

十(二)三日　四里、今治卯七を訪ふに公のさはりあれば、又半道、波止濱、花雀亭に宿。

　御出皐ながら春宵千金ぞ

十三日　樋口村などいへる所を過て七里となん、風早難波村、茶來を尋ね訪ひ侍りける(三)、已に十五年迹に死き(三)也。後住西明寺に宿り乞に不許。前路三百里、只かれをちからに來つるなれば、たよるべきよすがもなく、野もせ庭もせをたどりて、

　朧々ふめば水也まよひ道

百歩ほどにして五井を尋當て、やすぐと宿りて、

　月朧よき門探り當たるぞ

十四日　十丁程、八反地村、兎文に泊る。

　門前や何万石の遠がすみ

哥仙滿卷して

十五日　松山、二疊庵に到る。

十六日　名たゝる櫻見んと、とみに山中に詣侍りきに、花は咲滿たる芝生かたへにさゝゑなどして、人ゝの遠近にあつまりたるを見て、

　玉櫛笥二名の島のむつみ月
　　むつむや花のもとにつどへり

探題

已に春ちる露見えて松の月
里かすみぬ里人は我が霞と見なん哉
日でり雨几巾にかゝると思ふ哉
雨の日や狙起るゝ猿まはし
根分して菊に描き木札哉
桃ところ〴〵何思出て餅の音
或時は花の都にも倦にけり
いつの間に乙鳥は皆巣立けり

魚文かたに、素堂・芭蕉翁・其角の三幅對のあれば、訪ふて拜す。

　正風の三尊見たり梅の宿

累日風交して、探題、

　猫飼ずば罪作らじを雀の子
　春の雨倦もはてなで糸車

二月朔日　を小正月と云て、雜煮の仕納となん、此地のならひ也。

　召仕新しき哉小正月

道後溫泉の邊りにて、

　寐ころんで蝶泊らせる外湯哉

五日　松山を出て二里、三津濱、方十亭を主とす。

九日　人ゝと共に小深里の洗心菴ゞ會、前文略。

　汲みて知るぬるみに昔なつかしや

旧懷の俳諧して浦邊を逍遙して、

　にな蟹と成て女嫌れな
　山やく山火と成りて日の暮るゝ哉
　梅の月一牧(枚)のこす雨戸哉

十一日　三津を出て（マヽ）里、又、八反地村に戻る。途中吟、
遠望

几巾青葉を出つ入つ哉

十四日　又、波止濱ニ戻る。
十五日　巣月菴に遊ぶ。雨の日、前書略。

軒の雨鉢うつさくら閑しや

十九日　波止濱を出て六里、中村ニ泊る。明月村ゟ十丁程、寶報寺の櫻見にまかるに、今を盛なれば、壹樹ざくらと云。

冷泉爲村卿 宴の四方にさす枝廣き花ざくらよそのちるとを一もとの春

花盛かゝる一木を中まくら
旅にしなくば守まく惜も
思ひきや此さくら木の常ならで
折しも花に巡り來んとは
遠山と見しは是也花一木

神前寺 御百度や花より出て花に入

並櫻遙拜す人をてらす哉

廿日　四里、大町はたごやに泊る。
廿一日　雨、逗留のつれ〴〵晝寐して、

起て見れば春雨はれず日も暮れず
桃の雨スサ切男眠氣也

廿二日　伊會野・都英子と、折から雨後のさくらのちり〴〵なる神社に參りて、

拜（マヽ）上頭に花の雫かな

四里、津の阿みだ堂に泊。
廿四日　半道程、田上、影香舍に泊。

長閑や雨後の繩ばり庭雀

廿五日　入野の曉雨舘に泊る。
廿六日　野邊を逍遙す。折から住吉の宮に詣て、

樂書の一句拙し山ざくら

廿七日　雨天なれば、恭山和尚と共に土居の人ゝを訪ふ。乙春亭にて、

春雨や獨法談二はいかい
忌明の伽に來る日ぞ春の雨
雨かすむ貴地のあの山めづらしや

三風士に相見してかへる。
廿八日　入野を出て三里、三島のやしろに拜上す。是大山積（祇）のやしろ也。

冥加あれや日本の花惣鎭守

是より壹里半程、三角寺に詣。

是でこそ登かひあり山櫻

川之江に下る。四里、觀浦に宿。

三月三日 此里の習ひとて、家々に花をかざるこそ、いと風流なる風情也。

京にもかくありたきよ軒の花

桃柳屁(庭)〳〵の花見かな

こゝの專念精舍に住せる五梅法師は、あが師の門に遊びたまひしときくからに、予したひ來て、しばらくヅヽの旅愁を休むることしば〳〵、さらに我宿のごとして、已四とせの昵近とは也けらし。しかはあれど雲水抖擻の身にしあれば、今日や誠の別にのぞむ。實、老少不常(定)のうき世、是むつみの終と思ひ給へ、思べしと、此水莖を殘すもの也けらし。

便なくば一花の手向情あれや

亡師の石頭を拜して、

塚の花にぬかづけや古鄕なつかしや

八日 觀浦を發足して六里、九龜の舟に乘じて、下津井の源介がやぶれ家に宿ゝ。海中七里。

九日 藤戶、天柄木などいへる所を過て、備前岡山に至ル。此地に風流好るものゝ粗ありといへ共、派違なれば尋ねず。城下一里離れて二本松に泊。

十日 道連に豐前の僧の二人あれば、未明に出立して途中吟。

蛙鳴き雞なき東しらみけり

十一日 いそぎつるまゝに十二里、有年に泊。

十三(二)日 は播刕楫(揖)東郡に來れば班(斑)鳩庄、こゝに大(太)子山てふ大寺ありて片岡山・富小川は境内に有となん、通りばたより遙拜して(ママ)、

是より篚峠などてふ山を越して、半里ほどゝ覺ゆ。書寫の分道のあれば、同行三人登山して、三ツの道・奥院・女人堂などいへる有り。夕暮になれば荒墻に順拜して、麓の農家に宿。七里。

十三日 姬路の城を通る。寫(ママ)より一里也。先青にきく名城を見て(ママ)、

豆崎より高砂・曾根の別道に起く(註)。曾根の松ゝは、菅公の植給ふと、惜い哉、片技かれてあれば、

(此一句墨消シ)世の人に見よと枯たか松片え

散松葉昔ながらの掃除番

是ゟ半道ほど、石寶殿に參るに高二丈六尺、方三間半ありとなん。是や大已貴の石屑投給ふ石と也。うへに松の二三本生たり。

十かへりの花いくかへりの石室かよ

是より一里、野渡をわたりて、高砂、布舟に泊る。相見。

先しるき前の池哉さくら哉

十四日　逗留。哥仙の會アリ。

十五日

播磨がた遠くもへだつ武さしのゝ　眞紹
月をたがひの形見とは見よ

和哥

わかれては松吹かぜも君が聲と
よびつゝきかん風吹くごとに

此大人、馬の鼻むけにとて、ねもごろなる玉づさを贈たまり(註)つるに、予も拙き一くさをたいまつるとて、

高さごの松のとかへる花しゆも
いくかへり見ん君があたりを

探題

かくあらば衣賣まじを春の霜

蝶と共に吾も七野を巡る哉

十六日　加古川に泊る。相見句略。雨天逗留。

十七日　明石より兵ごの道連あれば夜道して、同行二人、頻に眠氣催れば軒をかりて、

笠の露眠むらんとすれば犬の聲

夜はほの／＼と明比、大坂に來る。黄花庵を主とす。題庭前、相見、二十里也。

松そびへ魚をどりて春を惜む哉

處ゝの風士を訪へど、相見唫、自他を略す。

廿七日　天王寺に詣。

蝶一ッ舞臺せましと狂ふ哉

是より六十町、河内平野に至ル。途中吟、

魁てうき中浮けり苗代田

振向ばはや美女過る柳哉

山うどの山出て市は日傘哉

こゝに融通大念佛寺と云あり。練供養のありしと見えて、共橋がゝりあり。

春風や順禮共がねり供養

此堂ゟ天王寺の塔、酉・いぬの方に半里ほど小村あり。東南の方より大和川流る。こゝより二里、藤井寺、西國五番の札處也。

小山團扇名物

藤咲くや順禮の聲鳥の聲

十五丁程、譽田の好ゝ亭宿。

玉簾や玉のすだれの春深かき

四月一日

衣がへ替ても旅のしらみ哉

三日 譽田より大和川を渡りて、土師村菅公廟に詣るに、贈大（太）政大臣正一位と云額ありて、社内に天穗日命の社あり。はた門前に梅の並木ありて、

青梅や餓鬼大將が肌ぬひで

（欄外横書）
既や鶏なき里の時鳥

寺は道明寺と云。わづか行ば玉手山、尾劦公の茶毘處あり、龍眼肉の木ありて、此かいわいの景地也。艮の方にかづらき山見ゆる。折から遊山人、處ゝにつどふ。

初蟬や人松陰をしたふ比

下山して遠望、

雲折〱適に青葉見ゆ玉手山

八日 譽田祭。

砂盛や打水や笹はたき哉

又、空海上人雨祈給ふ井・社内にありて、

更衣ふりかけらるゝ湯花哉

遙拜す御廟は白し夏木立

一葉主人のみのゝ辻の句乞はれて

みのゝ辻辻が花人たゆまざる

入梅雨のふりみふらずみのゝ辻の

辻行妹が見へみみへずみ

探題

山はわか菜人は身輕き比に哉

つかれ鵜の見送る空やほとゝぎす

つく〴〵と鵜ににくま(る)ゝ鵜飼哉

五月雨や借傘五千五百ばん

九日 三里、左海(堺カ)に參る。道ニ野中村、青竜山埜中寺と云あり。馬場村などを通りて、行ゝ堺近くなれば穏坊あり。

左海湊なる風講堂に泊る。日毎雨陰して、此地南宗寺に詣ければ、千宗易利休居士の墓あり。命終二月廿八日。又、大黒菴紹鷗が墓もあり、十月廿九日也。三村大明神、(南荘大鳥郡舳穴下條開口村——御食ノ時始て口開給ふ地也。)鎭守寺を密乘山大念寺と云今大寺と云。鎭守三村大明神は、旧事記天神七代、日向國小戸に御誕生ありしとかや。は、神后皇三韓退治の時、力を合給ひ、御歸陳(陣)の時舟を着せる處を九般小路と云。舳の松と云、今猶存せり。御祓の團子を開口だんごと云。開山は、人王四十七代聖武天皇の御宇、行基井に勅定ありて、天平十六甲申歳佛地と成(寺領八十石)。毎年六月御祓の御旅處、門前にあり。

(御旅所カ)の松葉かをりて夕涼み

御旅所を吾もの顔や蝸牛

有樂屋敷も此邊り也。はた田出井三國山の艮に方違大明神あり。

方違幸あり武庫のほとゝぎす

植し跡の竹と我とが涼み哉

雨よ風よいつ迄咲ぞ野太(大)根

一日 三ッ四ッの友どちと共に、高師の濱(傍)ひしてゆくに三光松、此邊りより葛城山は東南に連けり。眞砂にめづらしき泉涌く。

礒清水旅だんすほしき木陰哉

花見の記

東西の花に散立られて、心も山にうつり行といふ日は三月廿日也けり。

煤くさき笠も櫻の降日哉　一茶

（六阿ミダ五番ノ寺也）山下常樂院に、人々こぞりて尊ふとむ佛おはしけるが、ことし千百年の供養なりとて讀經いと殊勝也。かくふつゝかなるおのれさへ、すくせの結縁うすからざるにや、かゝる時に生れ逢ふことのうれしく、しばらく隨喜の泪を拭ひぬ。そのかみ其角が、六阿彌陀かけて鳴らん時鳥とありしも、けふのやうなる折にやあらん。是さへ今は百とせのかたみと成りぬ。かくいふけふも、いつか又昔とならん。されど我後の世をたのみおく軒ばの梅さへ持たぬ境界、御佛必見捨給ふなよ。

花桶に蝶も聞かよ一大事　一茶

上野なる淸水の糸櫻は、いつか靑葉となりて隙明き顔に打そよぐ。散こそ花は愛たけれといへるもさることながら、またしたひ來る人もおほかるべきに、氣短かなる華のちりやう哉とつぶやきつゝ、舞臺に添ふてなごりをおしむ。けふは町隣なる麻美と前の日より約し置けるに、かれさはりありてやみぬ。さはとて翌の命待ものかはとたゞ獨來たりしに、幸懐に五元集といふものゝあれば、是究竟の句相手也。

小坊主や松にかくれて山櫻　其角

小坊主や親の供して山櫻　一茶

見ぬ世の人を友とすといふ吉田の法師がかけるに效（傚）て、けふは晋子が櫻を兄として醋酌せば・けふ一日の一興なるべし。

秋色が櫻、餘所に見てやみなんも殺風景なればとて其邊りに吟ふ。落華片々としてひたすら暮春の有樣を見する。それさへかなしきに木間の鐘は無常をつげて、しきりにうしろ寒く覺へて、懷舊の片言をずして過る折から、いづくより來りけん、頭は灯心を束ねたらんやうに、色は槁木の吹古されしごとくなる老女が顔に杖して、としを花の見おさめなどゝ咄して、たのしげに何か諷ふ口つき、

江口の君がなれの果か、檜垣の姥が再來かともあやしみけるに、やがて我ずし捨たる句に脇したりといふ。

古櫻花の役とて咲にけり　老女

いたゞく桶の春の夕暮　女

足引の山鶯に宿かして　供ノ女

かく云終りて、角田川にて逢んなどゝ二人ともにかへりぬ。おのれ男には生れたれど、かゝる馴〳〵敷業思ひもよらず。誠に、彼長松下に世上の人を看他すといふ有さま、何の善惡は時によるべし。其氣質を賞して爰にしるしぬ。

上行堂は、去年鐺もて人を害ひし曲者住し所と思へば、さすがの碧殿もおそろしきやうに覺へて、そこ〳〵に拜みて過ぬ。

柵ゆひ廻して人を禁ずる老木有、夜〳〵天狗の踊る所といふ。

祟りなす杉はふとりてちる櫻

咽潤さんと藤棚の下に便る。安房・上總一目にかすみて山第一の奇絶也。下なる町、所々事始に立たりし古簀の竿先に吹るゝは、其まゝに時雨待かとおぼへておかしく、家々相風（マヽ）は春風に飄て、多少の樓臺雲に聳へて又なく賑ふおもふき、長安の春といふとも、御代の豐饒なるにはやはか勝べきとおの〳〵口〳〵にのゝしる。

散る花を脇になしてや江戸最負

心を轉じて淺草眞土山に登る。爰に隱れ家茂睡が石（旁闕、碑カ）有。かれあく迄閑に住なしたらんは、歌のさまにしられて昔したはしく、

庵崎や古きゆふべを春の雨

橋場のわたりにいたる。山を押出したるやうなるもの有、是おほやけの御船といふ。

隋齋見殘されし木陰と見へて、淋しげなる女と淸右衞門といへる人と、から破籠など守りてありけるにおなじく笠敷て、

ほた餅や迹の祭りに櫻ちる

咲花に迹の祭の木陰哉

角田堤

櫻木や花の威をかる里の人

里人の花の威をかる櫻哉
咲く花に武張り給はぬ御馬哉
山櫻松は武張て立にけり
櫻花賤しき袖にかゝりけり
靑くさきたばこ吹かける櫻哉
雉なくや彼梅わかの泪雨

淺草東陽寺手向野

菫咲て手凹程の名所哉

木行寺道くわん物見塚

凡に三百年の菫かな
春雨の晴所也君が松
さく花や昔〳〵はどの位

○

蚊の出て蚊をやく草も生へにけり

三ツばかりなる兒の母の懐にありけるが、損(指)シしてはよゝ〳〵と泣ぬ。おのれかたはら(の)藪陰にあれば、我形のとやうなるにおそるゝにや。さあらば爰さらんといふに、何さまさせるものおどろきならばまだしもなるに、あの花おりてのゝ様に奉れとて、けさから願ひて泣疲にすや〳〵と寝たりしに、今覺て又むづかる也。されど爰はおほやけの櫻木、一枝を折らば一指を切の例に行れんとのおそろしく、はや〳〵歸らんといふ。げに〳〵蘭は二葉より芳しく、いまだ黑白のけぢめもわかぬむつきの上に有て、かゝるやさしきねぎごこそ、彼兒につけたき梅の花との給ひしにもたぐへられて、尊(マヽ)ふく有がたく末たのもしき丼心にぞありける。是を思へば、おのれ半死白頭の齡ひなるに、朝〳〵の茶の手向さへおこたりがちにして、貪・瞋・癡の病は日〳〵さかしく、翌、父の逮夜をさへ忘るゝていたらく、阿鼻大城のくるしみもうす氣味わろく、又嬰兒の志もはづかしく、佛前に灯をとぼし侍る。是をさへ長く修せんとは思れざりけり。

白露にお花の種を蒔ばやな

春立といふばかりにや吉野椀

浪花に春迎へて

○能因が腹と成たる雜煮かな

○草の戸の春は來にけり蕗の臺

豫州道後十六日櫻

又たぐひ世は梅さかり此櫻

○其齋有たけ買ん娘の子

炭賣の日數わずかに梅の花

いせにて

鶯も笠ぬふ竹の都哉

長崎十善寺村にて

〻傾城も世帶ごゝろのわか菜哉

北國逆旅せんと

〻さくら咲世をふん切て小菅笠

○大男おのが遊びか几巾

○人聲に鶴もおりけり梅屋敷

〻鶯も一かど取れし山路哉（京の山）

〻藤花にいかな放さぬ頭巾哉

大黑の櫻をる畫に

〻頭巾にも志賀のむかしを花の雪

〻度〻の花にあれ行壘哉

〻花盛浮世の外のかはら葺

大津繪、鬼の酒呑み三絃ひく圖に

〻あたら身を佛になすな花に酒

〻陽炎の膝にもゆるや閼の前

○行鴈やものゝいひたき三ヶの月

〻淺山のいよ〳〵あさき雉哉

○七種や辨慶喜三太おしへだて

布袋月見る畫

○まんぢうも袋にはなし朧月

○何鳥の跡ぞ柳の爪はじき

題靑樓

○宵〳〵や花に心の廿山

○春の日の入所也藤の花

千貫戶樋にて

〻高戶樋や雫して行藤の花

○大井川蝶の羽風もあまる也

爐塞やまだ定らぬ寄り柱

梅に竹の雪畫讚

〻んめ咲りいざ掃除せん鳥の留主（がゝにゝ）

○行春に一足おそき矢橋哉

〻人先へさもなき人の袷哉

西國順禮の時

○時鳥とまり定めず須磨明石

宇津山 ○十団子蔦のわか葉につゝむべし

高清水山中心ちあしくて、やゝ杖を曳くに山賊につけられて

さはつたら我身ながらも芥子花

入梅晴の引残しけり竹生嶋

姥捨山

し植残せせめて夕は月に暮の田一枚

或人芸職にくろしむをあはれむ

よそからは百人前のあつさぞよ

し鮓賣の急がぬ聲に暮凉し

し夕立のうらを見せたる峠哉

し木に打は竹には足らぬ古井哉

橋や此人にしてこの匂ひ

石瀬祭花齋の号をゆづられし時

人の香の更て凉しや都鳥

両國橋下 ○母親ははるかの艫に夕凉み

○澁園さてもつれなき命哉

○五月富士田植の笠の休む時

嵯峨雅園にて

我心露かと走る青田哉

野ゝ宮に隠れたる歸芝法師をとふ

し柴門や青田の風にやしなはれ

し誰願ひ星に一葉の吹ちるは

○なぐさみの灯籠も間〳〵哉

○遣て出る主たのもし生身魂

富天をとふて

しもどりにはどの橋越ん星月よ

し吹けあらし共世の秋を人の松

し霧雨や日〳〵に木末の薄明り

し老ぬれば聞とはなしに夜の鹿

讃州善通寺西行古迹 ○いなづまの遠山松にかゝりけり

し土くさき烟はづれやなく鶉

し秋の暮いづくとまりのひとつ鳥

し秋の日に力を添るわか葉哉

大坂を出船して

秋の雲吹れ次第や西の海

○明放れはなれて衞士の寒哉
うかりける人をいで〳〵煤はらひ
○鰒汁やさくらがもとの明心
〻　初雪やあしたの原の吹とまり
馬光墓
〻　あら淋し塚はいつものみそさゞい
〻　しぐるゝかされはせうじに鳥さはる
長崎
〻　唐は降るかも雲のしぐれ口
〻　千鳥なくとぎれ〳〵や粥やらふ
〻　木がらしや吹くたびれし山の鐘
埋火やおぼろ〳〵と老ごゝち
〻　○傾城も山かつらせい(り)とし暮
○我朝の物とは見へぬなまこ哉
輿　替
〻(頤カ)　頰へたゞ空直の啌は守るべし
箱根六道辻
〻　寒空にはなれ〳〵や芥達
小寺と(マヽ)りとりて
○思ひ入る山のおくにも師走哉
商万錢者日有苦商一錢者日有樂
〻　笛吹て大卅日を飴の鳥

みとり日記　父の終焉日記

四月廿三日　は清和天雲なく晴て、山ほとゝぎすのはつ音告渡る日、父はなすびの苗などに水などかけておはしけるに、なにとおほしてんや、破再青陽の日なたをうしろにうけていましける。一茶云、いかなればかゝる淺ましき所にうつぶし給ふらんと抱き起し侍るに、蓬の下の土となり給ふ前表なりと後に思ひしりたり。いかなる悪日にやありけん、いさゝか心ちなやましうとなんありけるに、急發熱さかんにして、膚は火にさはるがごとくなれば、飯を進れども一箸も喉に通らず。こはいかにとひとりおどろき、魂を消といへどもせんすべなく、只もみさするより外はなかりけり。

廿四日　晴　友がき竹葉のもとより藥を貰ふて進けり。

廿五日　曇　晴　病日に〳〵重りて、けさは重湯も通らず。只たのみとするは藥の一雫づゝ納まるのみ也。終日、テキナイ、コシタイばかり、もだへくるしみもがき給ふ。傍につき添ふ事のかなしびは、みづからなやむより思ひまさりてくるしかりき。

廿六日　晴　野尻の里迅碩を請待して診せしむるに、脈は裡にひづみて、いはゆる陰生の傷寒なれば、快氣も万にひとつなるべしと、たのもしげなく云るゝ。心も轉倒して允に空しき舟に乗れるがごとく、さてしも果ぬ事なれば、むりに藥をすゝめける。野尻の叔母泊。

廿七日　雨　いとゞ淋しきに雨のふりまさりてくらしかぬるを、友がき竹葉の許よりかくなん。

五月雨あめとて空をかざすかな

廿八日　晴　祖師の忌日なり迚、朝とく嗽ぎなどし給ふに、熱のさはりにもやならんと止むれども、一向にとゞまり給はず。御佛にむかひ常のごとく看經なし給ふに、御聲低う聞ゆるいかうおとろへたまふ後姿、心細くおほゆ。

廿九日　父は病の重りたまふにつけて、孤の我身の行末

を案じ給ひてんや。いさゝかの所領はらからと二ツ分けにして與んとて、くるしき息の下より指圖なし給ふに、中島てふ田と、河原てふ所の田を弟に附屬せんとありけるに、仙六心に染ざりけん、父の仰にそぶく。其日父と仙六いさかひして事止ぬ。皆、貪欲邪智諂曲に眼くらみて、かゝる息卷(敷圍)はおこりけり。いかなれば不レ顧二親ノ養一ヲ任他五濁惡世の人界、淺ましき事なりき。此夜は別して脈あしければ一人にては心細く、仙六、父の心に叶ざる弟なれども、父にいまはの時もいたらば、血を分けたる子の事にしあれば本意なくやあらん。弟の心を思ひやりて父の傍に寢させつゝ、灯のかげに寢顏をふりむけて、父ノ寢すがた守り居たりけるに、夜只くるしげにいきを空へ向て吐給ふに、見るも心いたましく、汐の時の直るを便りにしばらく安堵の思ひをなしぬ。

野尻の醫師のかたにあるてふ熊膽もちゐて見たしとなんの給ふに、僅一里の巷にしあれども、母はきのふ父とあらそひありければ、我もとめにいなば看病も心もとなく、弟をやとひて遣しけるに、おりしも夜の五月雨はれて、水は艸の上越すありさまなるに、田の水のチボツカナキありさまなるに、仙六はいづちへ行きてんと尋ね給ふに、今はかくすべきようすがもなく、しか〳〵と答へ侍りける。父は二なく息卷給ひ、我に聞かずして、なじかは熊膽乞に走らせたは(る)。汝迄我をながしら(こ)になすとて、いかり給ふ。閨のかたよりは母のよき折からと聲をはげまし、仙六に朝飯もたべずいなせし一茶の骨盜人よ。弟の腹の空しく思ひしらずやなど、あたりに人なきごとくのゝしるに、我身一つのくるしさ今更すべき術もなく、首を疊にすりつけ手すりつゝ、重ては愼むべきと、涙を流して前非悔るに、父のいかりもやゝしづかになりき。生み、ころしみ、父の戒は皆我身の幸にしあれば、なじか惡ざまに請べき。さるにても父のいかり給ふ聲の細り、うたて(マヽ)ありさまなれ。よべは父に長の別れと思ひしに、今朝は父のせつかんにあふことのうれしさは、盲龜のうき木にあへりしも是にはいかでまさるべき。かくて日もほろ〳〵たけて弟ものろ〳〵もどりけり。

五月一日 空晴わたりて、麥は穗のいそがはしげにそよ

ぎ、百合も俄に紅白の色をあらはし、世の中は田植・早苗とりとひしめきあへるに、常健なる父の起もし給ぬ御有さま、はがゆげに見へて、唯日永きに晝頃より、まだ日はくれぬかとかまけらるゝに、思ひはかりてあはれ也けり。

二日　變起りていとくるしびたまふに、母、例のあらがひに見もしむきもせず。弟は分地此かた父の中よろしからず。いかに腹がはりとも、かく淺ましくいどみあらそふとは、いはゆる過去敵としも思れ侍る。父は一茶の夜の目も寝ざるをいとをしみ給ひて、晝寝してつかれを補へ、出て氣はらせなどと、和かきこと葉をかけ給ふにつけても、母は父へあたりつれなく、父の一寸のゆがみをとがめて、三從の戒をわすれたり。是てふも母にうとまるゝおのれが、枕元につき添ゆへに、母は父に迄うきめゐ見する事の本意なさやと思へども、かゝる有様を見捨てゝいづちへかそぶきはつべき。

三日　迅碩はおのれが匕(匙)にては、薬も得とゞかざるむね告たりけるに、今迄神佛ともたのみし醫師にかく見はなさるゝ上は祕法佛力を借りて諸天應護のあはれみを乞んと思へども、宗法なりとてゆるさず。只手を空うして、最期を待より外はなかりけり。さてしも果ぬ事なれば、善光寺の醫師道有をまねかまほしく、とみに人を走らせけり。いまだ玉の緒のあまりも此度は元の人になり給へと、醫師の來るをのみ待居たりけるに、日入果てゝ門〳〵に灯ともす頃、やゝ駕の見へければ、とみに病人を見せしむるに迅碩がいへるがごとく、よろづに一つも此世の人とは見へずとなん云るゝ。今はたのむべき綱もきれて、只湯水の喉に通ふを力に、夜の明るを待たりけり。

四日　きのふに打替りて見うるはしく、何ぞたうべたきなど云るゝに、うれしさかぎりなく、よべの藥の印に親の蘇生かゝりたる心地して、かたくりなど練りて參らせけるに、鋺(宛)に三ッ四ッ二ッすゝり込み給ふ。道有も此おもぶきにて變の來らざれば、ほどなく快氣なるべしとなん云るゝに、枕につき添をのれもやゝ安堵のおもひをなしぬ。道有老かへり給ふに古間の里迄見おくり侍る。雨

雲も西へ東へかたづきて、空のさまこよなうめづらしく、時鳥の初聲おり得兒に告る。此鳥とくも鳴つらんに、父のいれいの日より、日は日すがら夜すがら心を空にして仕へまつれば、魂狂事のみにして、聞つるは今日初ての心ちなりき。

時鳥我も氣相のよき日也

凉めとの許しの出たり門の月

けふ田うへ日とて、ゆひしたる人・やとひたる人・家にある人、一とせに一度のしつけ日なれば、皆出はらひて枕元につき添ふは我一人也。かくて日も壁にうすつき飯時にもならんとする比、人のきらふ病なれば閨に入れ參らせけり。弟なるおのこいへるは、我父も今死たらんには、よき往生なりなどかたる。今より後にながらへば、活過るとはいはぬばかりなりき。親は二度あはるゝものにしなき事(原註)アラネバにあれば、百とせつき添ひたりとも倦たらまじきに、猛き虎も親はくらはず、人の惡む烏も五十日親を養ひ返すとなん。況や人としてなでふ氣づよくも、かゝる事やかたらうべき物かは。さるにてもなを父のいたはしく、ともしびをかゝげて首をもみ、足をもみてまゐらする也。

五日　藥相應したりければ、しば〳〵進め參らせ度炭火焔ぎつゝ、心ちよげに寢すがた倩守り奉るに、皃色うるはしく、脈をうかゞふに一ッとして不足なければ、十ニ九ッは本腹ならめと祝ひ侍けり。末に思へば、快氣あれかしとおもふ慾目の見る所也。

足もとへいつ來りしよ蝸牛

六日　天晴たれば、伏してばかりも退屈にやおぼしめさんと、夜着打たゝみてよりかゝらせ申たりきに、こしかたの物がたりなど初給ひけり。抑、汝は三歲の時より母に後れ、やゝ長なりにつけても、後の母の中むつましからず。日〳〵に魂をいため、夜〳〵に心火をもやし、心のやすき時はなかりき。ふとおもひけるやうは、一所にありなばいつ迄もかくありなん。一度故鄕はなしたらば、はた、したはしき事もやあるべきと、十四歲と云春はろ〳〵の江戸へはおもぶかせたりき。あはれよ所の親は今

三とせ四とせ過たらんは家を任せ、汝にも安堵させ、我等も行末をたのしむべきに、としはゝゆかぬ痩骨に荒奉公させ、つれなき親とも思ひつらめ。皆是すくせの因縁とあきらめよや。今年は我も二十四輩に身をなして、かの地にて一度汝に巡りあひ、相果つるとも汝が手を借らんとおもひしに、こたびはる〲來りてかゝる看病こそ淺からざるゑにしなれ。此度は往生とげたりとも何の悔かあらんと、はら〱と泪を落し給ふに、一茶はたゞ打ふして物も得言はず。夏の消やらぬ不士の雪より厚く、紅ひの二入より深き父の恩を、つき添ふ事もなくて、只うかめる雲のごとく、東にあるかと思へば西に漂ひ、光陰は坂上に輪をころがすごとく、今とし二十五年になりぬ。首は白霜をいたゞく迄親のそばを遠ざかりぬる事、五逆罪とも是に過てんやと心にふし拜み、我泪を落なばやまひいよ〱重らせ給ふべき。皃おし拭ひ打笑ひ、させる事心に思ひ給はで、はやく快氣なし給へと藥を進めける。やがてすこやかになりたまはゞ、我、元の彌太郎となり、艸ぎり土ほりて心を安じ、今迄の爲體ゆるし給へといへば、父はかぎりなく祝び給ひき。

七日 晴 仙六は藥を乞に善光寺に逝(行)く。夏の日のつれ〲にのみおはしければ、何ぞたうべたきと、穀のたぐひしか〲と好み給はねば、梨(ひとつ)一參らせたくは思へども、御薦刈しなのの不自由なる我里は、青葉がくれに雪のしろ〱とのこるばかり、野もせ山もせ夏寒き風の吹のみなりき。早速(いちはやく)梅賣る人の聲の門に聞れば、青梅たうべたきとむつがりたまへど、毒なりとてゆるさず。あはれいつの日か毒斷のなき人にして見まほし。掌の物とるごとく心はやたけにさわげども、うつら〱と首重たげに見へ給ふこと、あぢきなきありさまなりき。

八日 晴 田休みなればとて、ゆかりあるもゆかりなきも、聞傳へかたり傳へて訪ひ來る人もおほかりき。父が好むものなりとて、酒もて來るもあり。そば粉もて訪ふもあり。父はよろこばしげに首をもたげて手を合せ、ほど〱に會釋給ひき。身後黃金北斗にさゝゆとも、しかじ生前一杯酒と、唐も大和も人の情等しく、亡迹にて

佛事供養びゞしく盡したらんより、存命の和らぐこと栞にはまさらじ。今は世くだりて、他の一寸のゆがみはとがめて、おのれが一尺のひがみはみえず。よろづうしろめたきがちにて、我不幸なりと思へる人だにもなかりき。

うけがたき人と生れてなよ竹の
　直なる道に入るよしもがな

此よは子の刻ひとつの比より寝られねば、夜永うおぼし、いまだ夜は明ぬか雞は啼ざるかと、我に問給ふ事三度、四度、七度、九度に及べど、只星明りのみにして軒の妻の樅・楓の木陰、そこにかしこにくらく、ふくろふの夜更を諷ばかり也。あはれ、雞の空音を作りて關の戸の明しためしはあれど、夜の朗なるてふは天のなせるわざにして、火を袋に入る幻術は知らず。入日を返す勢もあらねば、只ともしびをかゝげて寝兒を守るばかり也。

十日　晴　しきりにありの實をたうべたきとむつがり給へば、此邊のゆかりあるもなきも、したしきかぎり、富みたる家、心あたりある門、聞盡し尋探し盡すといへども、ありのみ一ッたくはへたる人としもなく、夏さへ淋しき山里なりき。けふは藥のたへ間なれば善光寺へ行まほしく、曉に支度して門を出るに、さ月の空もほの〲はれて白雪は太山に有から、青葉がくれの花は春を殘して種蒔の山人なつかしく、時鳥の三聲二聲もこよなく時得兒なるに、なじかは心はれぬあけぼのなりけり。

卯の下刻、牟禮てふ驛にいたるに、こはそのかみ一茶江戸へおもぶける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今は廿四年の昔なりき。河の音・坂の形もほのかに心おぼえありて、何となくうれしく、人は知らぬ兒のみとなりけり。醫師の家にいませるうちにと足をはやめければ、辰の刻ばかりに善光寺に着く。醫師はいまだ朝飯比及と見へて、道有老の聲かしこに聞ければ、とみに病のさまをかたりけるに、やがてかうがへの匕もて御藥合せて賜りけり。抑ゝ此地は御佛の淨土にしあれば、肆は軒をあらそひ、幌は風にひるがへり、入る人・いづる人、國々よりはる〱歩をはこびて、未來成佛をねがはぬ人もなく、おのれはけふ父の命をうけて、御藥使、はた梨を捜

しに來つるなれば、此役、濟さゞらんうちは御佛も遥拜して、天をかけり地を潜りてなりとも、梨一ツ得まほしく、ある程の乾物店・ある程の青物店を足を空にしてかけ巡るに、悲しさは片われ一ツありともさかゆる人もなかりき。昔、雪中に筍掘、氷上に魚を求したためしもあるに、我梨一ツ得ることあたはざるは、光天我を捨て給ふや、佛神我を見かぎり給ふや、一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待て居給はん。此まゝに歸りて父を何となぐさめんと思へば、胸せきふたがり、忍び落る泪は大道を潤し、ゆきゝの人の狂者と笑はんもはづかしく、しばらく手を組み首をうなだれて心をしづめける。此地になきものいづちにあらん。只一足もはやくもどりて藥ばし進め奉らんと、手を空しく吉田てふ里に來れるに、木立の山烏三四五、我を見ては聲立るに何となく父の身上の心にかゝり、息もつきあへず足をはやめし程に、山の日影は八時といふ比、宿にもどる。父はいつよりも皃うるはしく、笑ひをふくみ給ふにも、梨得ざる事をかたらば、又やけしきを損なはん。とやせんかくやせんとためらふに、父の聞給へばありのまゝを答ふ。翌や高田へ參りて尋來りて參らすべしと、白雲のよすがもなき根なし（事）云て、父をなだめ奉るは本意なき夕べ也けらし。

十一日　畠のざうやくなりとて、人々は皆鎌提、塊槌もて門を出れば、迹は父とさし向ひ也。父は快う眠り給へば、一茶は藥を煎じながらも、寢皃の蠅を追やりつゝ病顔を守り居るに、父の行末の世中（二字不明）おし給ひてのたまはく、我れかくかはりつゝも倚なりゆきをおしはかり、此家のものども汝と我とを、敵のやうにさからひ或はのゝしる。我命ながらふる中は、我身に替て汝をすくへばこそ、一日半時も家に居られめ。我が亡迹にしもならば、いかで彼等に敵しがたからん。日〳〵夜〳〵修羅のくるしみたへざらめ。其時、汝又我遺言もかへりみず、他國せんは鏡の形をうつすより明か也。生とし生るものゝ病難死苦はのがれがたし。汝足なへこしかがまりて古郷にもどりたらんは、家のうからやからは、さみつる事よと犬・猫よりも淺ましく下墨（さげすみ）のゝしられたらんは、草葉の蔭にて

もいかばりかなしくやあらんくやしくやあらんと、涙はら〳〵と落し給ふに、一茶もキスイ涙に打ふして、誠の親なればこそ、かゝる孤のふつゝかなる身を憐み給はめ。やゝ皃を上げ、かゝる事心にかけ給はで、此度は我命にかはりても快氣なさしめん、とみに快氣なし給へ、御望通り我も妻迎えして御心のまゝに事へまつらんといへば、よろこばしき體に笑ひ給へり。晝になれば野の人ばら〳〵と內へもどりけり。

十二日　病人、水を好み給ふ事しきりなるに、醫師のかたく戒たれば、水ゐ煮返して進めけるに、水ぬるしとてむづかりたまふ程、熱のくるしみさこそありつらめ。しかれども、いかでか毒を進め奉るべき。醫師の中たりける事、つれなき事を巾物哉とて、ひたすら聞入れ給はず。かくてきのふ迄いさかはれし母は、毒をも返り見ず、井水を天目に三ッ四ッつゞけてしるらるゝに、是こそ誠の清水なれ、今迄の水似せ物なり。いしくも一茶は我をたばかりける哉と、むづかりたまふ。比干は紂王をいさめて胸をさかれ、奸人內にはびこる時は、仁義ほどこしがたしとや。それより水を好み給ふ事、一日に二升あまりになんありける。枕元につき添ひて目前の非なる事、みす〳〵諫むる事あたはざるは、是非もなき事ども也けり。良藥口に苦しといへども病に利あり、諫言耳にさかふといへども殆家治る。毒をすゝむる人には、うれしげに笑ひ、藥をしるるものは、あしざまに思ひたまふ。家內心を一ッにして父の本腹をねがはゞ、なじかは毒はすゝめらるべき、まゝならぬ世の中なりき。

十三日　けさは別して心よしとて、酒たうべたきと云るゝに、醫師のいかう禁めたれば、一雫なりとも全快迄は進めまじと思ひしに、訪ひける人いはく、もし死れたらんに、さまで好まれしを停じて後に悔るともかひなからん。何にまれ好まるゝものを、おほくはならずとも、一口二口は進めてんこそ本意なれと云はるゝに、透を見て隗を入れんとおもふ人達、耳をそばだて聞居たりしが、けさは病人の好まるゝに任せて、進よ〳〵とて進らる

ゝ。病人は渡りに舟得しやうに日比の望たりぬ兒して呑るゝ程に、鯨の海を吸ふがごとく、朝の間に五合斗りかたぶけ給ふ。二十日あまりも穀たうべき給はぬやまひに、かくあら〳〵しき事をなすとは、三歳の兒に聞かすとも眉をヒソムベキと、一茶ひとり手に汗をにぎるといへども二人に敵しがたく、遂にいさむるにかたかりき。表には父をいたはると見へて、心には死をよろこぶ人達のいたしざまこそ口おしけれ。

十四日　かくてけさの兒見奉るに、きのふなかりし兒のむくみこそ心得ね。またく酒毒の兒にのぼりたるべしと、倩、五體をうかゞひ見るに、むくみ又倍せり。酒毒を消ス藥をも哉とおもへども、邊地今の間に合ず、とやせんかくやせんと思ふばかり也。かくすものは見度、停ずものはたうべたきならひ、又酒ほしとなんの給ひけり。けふは心にそぶくとも、かたく參らせらじとあらそひけるに、むづかり給ふけしきたゞならぬ聲にて、汝醫師にはあらじ、何をかしらん。きのふ呑ミてさはりなきもの、何かくるしかるべき。延引せずともはやく出せとむづかり給ふ。今は諫むるにこと葉なく、しからば椀一ツとちかひて參らすに、舌打して呑給ふありさま、も一ツほしげなれども、是におき給へとすゝめざりき。父の咽を干すやうに傍なる人はいへども、火をもて薪をさかんにするがごとく、熱に酒もて病を長増さするよりはまさりぬべき。

十五日　御兒のさま心にかゝれば、夜の明るを待てうかゞひ奉るに、財帛の邊りいさゝか惡しき黑氣あらはれぬ。はやく醫師に見せまほしく思へども、五里の道程にメ家内(うち)ものせうちせざれば、只一人もだゆるとも、蟷螂が斧ふるがごとく無益の論なれば空しく夜に入ぬ。抑、床つき給ふ日より、朝夕の看經怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもまゝならず。床にありながら、ともしび影ほのかに、稱名の聲となへたまふ聲の常に替りて聞ゆるこそ、何となく心ほそけれ。はやく口立給ふをのみ思へば、夜はとて明がたく、日とて夕(くれ)がたく、夜は明るをねがひけるが、やゝ八聲の雞つけ渡る。病人よろこび我も

安堵なしぬ。

十六日　晴　心にかゝるは皃のむくみ也。さりながら訪ふ人のあるが中に、ゑやみは廿日過ぬれば氣づかひなし。心をたしかにいたわれと云かく日立ぬればつゝがなし。心をたしかにいたわれと云る人、又ある人、枕元により添、往生の大事忘れ給ふなと念佛を病人に進め、をのれもたかく〳〵ととなふる人あり。父の本復うたがひなしと力を添る人は、詞のつやながらもうれしく、往生をすゝむる人は、誠かはしらねどもうらめしき。(三字不明)聖の教もとゞかざる里のならひ也。家内の輩弟を始として、父は今往生とけられなば、よき世の仕舞などゝさゝやきあふ。一人として父の本復ねがふものなし。只邪見キウマンの咄のみにして、昔、老たる姥を捨けん遺風ともしられたり。

十七日　日〳〵皃のむくみ、又心にかゝるは咽の痰のころ〳〵となるのみ也。抑、始よりいさゝか痰の兆ありしが、父の病の心にかゝるは痰とむくみなるに、痰は砂糖にておさへ下して、是迄はさ程の事もなかりしが、今は凡人の力にはおぼつかなしと、野尻の迅碩にせうそこ飛して、今やおそしと待たりけるに、何のさゝはりありてや其日は遂に來ずなりぬ。折しも月の短夜、夜毎明るを待ざる夜はなかりけるに、今よひはわきて醫師の來ざれば明がたき夜也けり。かくて、かく朝飯の比はいさゝか心やすげになりぬ。

十八日　夜明いさゝか心よくやおぼすらん。起てよりかゝらんとなんのたまふにいとうれしく、例のごとく夜着打重ねぬれば、やゝしばらくもたれて居給ひけるが、息遠しくやありなん、又よこになりたきとなん給ふ。かくするうちに迅碩來りて、とみに父のさまをうかゞひていへらく、脉もよろしく、只むくみと痰一通りなれば、むくみを消す藥をあたへやるとて、匕とりて直に得さすれば、とく煎じ進らるに相應やしけん、尿の度々下りけり。心すくやかになり給ふらん。すや〳〵とねぶりたまひけり。一茶は例(の)御足もみて居たりけるに、父はふと目をさましのたまはく、汝、此度は長〳〵晝夜の介抱過分也。深き

父子の縁にしあればこそ、かかる時におりあふならめ。必心労なりなどと思ひくれなよと、さめ〴〵とおほすに、かく命またくありけるも皆親の恩にしあれば、十とせ廿とせかゝる病におはすとも、親に對して、なじかは拙き心ばへを持べき。心しづかに本復なし給へといへば、われも快氣とは思へども、一世の重病にあれば今もしれがたく、われ往生ばしとげなば、我巾通妻して、汝も此國を遠ざかることなかれ、死後たりともそぶくなとおほすに、かゝる有がたき御こと葉、天神・地祇も御上覽あれば、我心岩木にしも、たとへ亡迹なりとも何かは變じ申べき。必うしろやすくおぼしめせとなだむれば、又すや〳〵と眠り給ひぬ。日もすか〳〵と夕(くれ)たりき。夜も五更の比、善光寺に便あれば、父は砂糖求たきよし云るゝに、けしきあしく立て、是迄の砂糖、何程〳〵と價を數へ立て、また砂糖たうべる存寄かと、死かゝる人についゑとなりければと、又かれこれいさかひとはなりぬ。父の咲の藥に調へたる砂糖、父は我にたうべよと云るゝ事もあれば、吾たうべると推察して、かくのゝしらるゝか。いづれにせよ恐ろしき欲界也。遂に砂糖は求ずなりぬ。此夜子一ツの比より大熱にして冷水ほしなん給ふに、井に汲に出なんとすれば、父は童の如く思はるゝにや、父のおほせに、井に落るなと、など教訓ありければ、母は寝て居たりけるが、それを聞きつけて、こなたのたからむすこ、さ程に迄愛せらるゝ物哉と、忽瞋恚眼に角立、髮の毛は針を立たる如く逆立、はたと白眼し目ざし、むべも大蛇ともなるべきおもざし也。

十九日　今迄は朝になれば心ちよげに笑ひなどし給ひしが、けさは湯水も好み給はず。かんばせのやうも、たのみとおもふ色つやもなかりけり。晝過より病變じて、もがき給ふ事もなく、こゝをもめ、かしこをたゝけと給(宣)事もなく、木の佛を横になしたるごとく、すや〳〵と眠り給ふばかり也。ある人の云、ゑやみの神ののき給へば、三日・四日程は病人は物もたうべずいねるものにあれば、あしき事には候はじと云はるゝ。はやく快氣のことのみねがふ心より、させるためしのありてふは、幸ひ我も看

病の本意をとげたる心ちして、うしろやすくこそおもひけり。夜も五更とおぼしき比、人々は皆寢しづまり我も日比のつかれに、しばしいねみいねずみ枕して物しづかなるおりからなるに、父うるはしく目をあき給ひ、い、い、い、いなん、連れて歩め、と云るゝ。いづくへばし行給ふらんと問ひければ、いふにやをよぶ、至心々經欲生我國と、病なき時の聲のごとくたから〳〵にとなへたまふ。心にかゝる事ばしの給ふ物哉と、心におもへども、うは言にもやあるらんと心をすまして居たりける。いざ行ん〳〵としきりにの給へば、我も起すまねびをして、いざ行んとの給ふに、我もいざ〳〵と四度、七度、九度、いざ〳〵とばかりいへば、又すや〳〵と眠り給ひき。後におもへば是ぞ物の給ひ終、おもへば辭世にてありし也。

廿日　熱は次第に盛にして、朝は淡粉一つばかりもたうべ給ひしが、晝頃より御皃のけしき靑〳〵と、目は半ふさぎ給ひ、物ばし給ひたきやう唇うごかし給ふばかり、いづる息・引くいきに咲はころ〳〵と命を責め、是さへ次第によはり給ひ、窓をさし入日影も末の歩み近く比、人の俤も見わき給ず。よろづたのみすくなきありさま也。あはれ、おのれ命に替へて一度は、すこやかなる父にして見まほしく、たうべたきとの給ふもあしかりなんと戒しが、今は耆婆扁鵲が洒落もとゞかざらん、諸天善神の力も及ばざらんと、只念佛申より外にたのみはなかりき。

寢すがたの蠅追ふもけふがかぎり哉

かくて日も暮れぬれば、枕元の器の水に、かひなき唇をぬらし參らすばかり也。

廿日の月は窓をてらし、隣〳〵は寢しづまりては、八聲の雞も遠く聞ゆる比は、しきりに息の通ひも低くなり、始より心にかゝりし痰はしば〳〵咽をふさぐ。あはれとても叶はざる玉の緒ならば、せめて痰をとり參らせたく思へども、花陀にあらざれば妙なる術も更にしらず。しほ〳〵と手を空しくして、いまはの時を待のみの胸のくるしび・かなしびを、天神地祇もあはれみもなく、夜はほがらかに明かゝり、卯の上刻といへる比、眠るごとく

息たへさせ給ひけり。あはれ空しき屍にとりつき、夢ならばはやさめよかし。夢にせよ、うつゝにもせよ、闇に灯をうしなへる心ちして、世にたのみなきあけぼの也けり。無情の春の花は風にさそはれてちり、有界の秋の月は雲にともなつて隠るゝ、況や生者必滅會者定離の世のならひ、誰しも一度は行道なれど、父の命のきのふけふとはしらざりけるもおろか也。おとつい迄は父といどみあひ、いさかはれし人達も屍にとりつき、泪はら〳〵と流して、稱名の聲くもりがちなるは、さしも偕老同穴のちぎりのいまだ盡せざりしとは、今こそ思ひしられたり。

廿一日 法師は塩崎てふ里にして、行程九里の巷なれば、葬は翌廿二日に定たれども、ゆかりある人は訪ひつどひ、或は紙花を造りて、しばらく愁を避に似たりき。

日は片壁に横たはり、夕を告山烏は西山さして飛かへり、無常の聲の入相は皆人々の上にひゞき、さらでもゆふべはかなしぶに、集まれる人々さへ大かた家へ歸りければ、常に見る灯のかげさへも物たらぬやうに思はれて、是さへかなしびの員とはなりぬ。

今よひは誠のなごりと思へば、父の屍に添寝して香のけぶりのたへなる時しは、寝すがたを倩ながめ奉るに、おとついの朝、笑ひながらこしかた・行末の物がたりありしが、今よひの今は空しき屍と變じ給ふ。おもへばおとついが笑ひ皃の逢納なりき。是迄なやみ在せる折しも朝はいさゝか快ければ、さ月のみじか夜も父は明を待かね給ひ、我も夜明ば父の御皃見るうれしさに、鐘をうらみ雞をのゝしりて夜明をのみ待たりしが、今夜の明がたが一世の別れ、翌のかなしびはいかならんと思へば、胸もふさがり魂つぶれて、人なき國にしあれば、誰はゞからぬ紅涙は目にさへぎつてねぶられず、死皃守り居たりける。今迄長きとおもひし夜も、今夜はすら〳〵明けにけり。

廿二日 ちかしき人はよりつどひ、うれたき屍は棺に納て、今はむなしき俤さへ後のうはさとはなりにけり。う

たゞうき世のありさまなりき。あはれ我は此家の宗領と生れながら、いかなるすく世の緣にしあればや、親につき添ひ仕へ奉らん事叶はず。しかりといへども、ハクヱキ遊戯を好み、親の財寶を損じたるにもあらざるに、前世に世を謗したるむくひに、天より拙き性を下給ふにやあらん。一寸の孝を盡さんとすれば、直に一尺の魔のそねみにあひ、小鹿の角のつかの間も家の治る時しなかりき。父は我を一度古鄕を遠(さ)くにしくはあらじと思はれけん、十四歳の春の曉、しほ〳〵家を出し時、父は率禮迄おくり給ひ、毒なる物はたうべなよ、人にあしざまにおもはれなよ、とみに歸りて、すこやかなる皃をふたゝび我に見せよやとて、いとねもごろなることの葉に、おもはず泪うかみしが、未練の心ばしおこりなば連なる人に笑はれん、父によはき歩みを見せじと、むりに勇みて別れけり。しかしてより此かた、我は諸國わたらひを業として、東は松島・きさがたの月にさすらひ、西はよしの・小はつせの花にうそぶき、念々不住猶電光、我も頭に霜をいたゞく迄、あるとある山〳〵浦〳〵を宿として日をおくる境界、もしはゝ木のあるにもあらぬ山のおくに、むもれ木の道しらぬ里にしあらば、父の一期は夢にもしらじ。此度ふしぎに巡り來りて、病の始終守るてふは、ゆかりの綱いまだきれずやあらん。千はや振スハの御神の引合せにやと、是のみ生前の面目なりき。

けふも申の刻ばかりに木々のむら雨しばらく晴て、艸の雫に夕日うすつく比、やゝ塩崎の導師來り給ひて、今は野おくりの時とはなりぬ。父のちなみの女どもは、しろきいろてふ木綿をかつぎ、徑はいとゞ露けきに、夏せみの音をのみなきて思ひをちらし、我は山吹のいはぬ色なるかなしび隱さんとすれど、泪はしのぶによすがなく、道も遠からねば棺は草のたかみに居へて、香をひねる手の力さへ夢幻のやうにおぼへける。導師のグハンキシクト(クト)共に棺は煙と成りにけり。有爲轉變のありさま也。

廿三日　曉、灰よせなりとて、おの〳〵卯木の箸折て仇し野にむかふ。けさは俤のけぶりさへ消へて、只誠なるは松風の凄々としてふくのみ也。三月のゆふべは逢ふて

硯の盃をいたゞく、けさの曉は別れかなしき白骨を拾ふ。キドアイ樂はあざなへる縄のごとく、あへば別るゝ世中今更おどろくべき事にはあらねど、今迄は父をたのみに古郷へは來つれ。今より後は誰を力にながらふべき。心を引さるゝ妻子もなく、するすみの水の泡よりもあはく、風の前のちりよりもかろき身一つの境界なれど、只きれがたきは玉の緒なりき。

。生残る我にかゝるや艸の露

晝は人々よりつどひ、力を添ものがたりなどに、しばしかなしびを忘るゝに似たり。夜は人々も大かたにもどりて、ともしびの明きにつけても床の邊のなつかしく、あからさまに寢給ひし父の目覺むるを待心ちして、なやみたまふ兒は目をはなれず。よび給ふ聲は耳の底にのこりて、まどろめば夢に見え、さむれば俤に立添ふ。

夜々にかまけられたる蚤蚊哉

行水ふたゝびかへらず、石の火にかへらず、八千度いかにくゆともかひなき事にしあれど、たのみとおもふゆかりも皆かれ果て、しらぬ國へひとり放たれしごとく、便なき孤の一茶が心内、思ひはかられて哀なりき。

廿四日

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

初七日なれば、父のいまぞかりける時、我に妻むかへして、とゞめよと人に云、おのれにも戒られしが、ある人の中に聞かぬふりに空耳したる人あり。ことに六欲兼備の輩、遺言にそふか、はた顔あかめあふことの本意なさに、又元の雲水と成ていかなる岩木のはざまにも身をひそめ、風をいとひ雨をしのがんにも、するすみの身一ッ何のはぢかあるべき。しかあれど、云で止なんも又父の仰にそぶく。悪しき石ながらも打ねば火を生せず、破れたる鐘もたゝけばひゞくは、天地自ぜんのことはり也。いなや、返しなきに無下に國出せんも亡父の心にそぶくかと、しめ野分るを談じあひけるに、父の遺言守るとな

れば、母家の人のさしづに任せて共日はやみぬ。

父ありてあけぼの見たし青田原

（大正十四年七月六日、稿本所藏者久保田暖菰氏の厚意にて借覽し、野尻湖畔小松居にて校合せるものに據る。（晉））

一茶書翰抄

一茶書翰抄

元夢宛　寛政六年

『旅拾遺』で見ると、備後の尾の道には長月庵若翁が行脚の杖をとゞめてゐるので、九州旅行の歸途この福山でしばらく佇徊し、それから讃岐に赴いて越年したのであらう。元夢は森田氏、葛飾派で今日庵と号し、寛政十二年七月故人となつた一茶の先輩である。（斗囿編一茶翁文通）

秋暑に候得ども御安康御くらし被レ遊候哉奉レ賀候。小人もしきりに貴方なつかしく、此地より歸道におもぶき候へども、夏よりの片照りにいまだ暑甚候へば、行旅すゝみかね、人ゝ留るに任せ足をとゞめ候へども、そろ〳〵秋冷に相成候はゞ、早速に歸道におもぶき度奉レ存候へば、おそくとも冬の始めは參上候而得ニ尊意一候。何事も出立といそぎ候へば早々申入候。頓首。

閏七月廿四日　備後福山より　一茶

元夢老師

旱魃

水かくや稻の花迄いまいく夜

青空や夜さりばかりの秋の風

など申棄、御評可レ被レ下候樣奉レ希候。

立砂大人・玄阿大人よろしく御傳聲可レ被レ下候。

一茶坊

斗囿宛　文化六年

下總流山から馬橋の斗囿に送つた手紙で『隆達』には成美の序があり、『すみれ』は春甫の著で文化六年の刊本である。手紙の年代はそれで推定される。（一茶翁文通）

今日わざ〳〵參上候へども折あしく候間、流山に參り

候、されば流山より二十冊參り候哉。

一 源語　三

則松本のうり上(アゲ)ともにしんじ候

一 隆達とすみれ二冊　しん上仕候

一 外二冊は御覽のゝち御返し可レ被レ下候

右申入度早ゝかしく。

五月十一日　一茶

とゆふさま

斗圃宛　文化七年

成美と本行寺の一瓢とに關係ある俳書で、此の手紙に該當するのは『物見塚記』である。成美の跋は自筆のまゝ板下に使つてあるから、「彫直しに相成」といふのに合はないが、しばらく假定して置く。（一茶翁文通）

御安清被レ成候哉。されば序の書(マヽ)したゝめ、本行寺にて成美の草稿のまゝにて板屋におくり、成美立腹にてつひに彫直しに相成こまり申候。左樣に候へば來三月ごろ參り候間、正月の御手透御認可レ被レ下候。右申入度萬ゝ得ニ尊意一候迄と申殘候かしく。

十二月十五日　一茶

我國やつひ戲れも雪佛

斗圃大人

斗圃宛　文化十年

『七番日記』の文化十年二月に「西山や」の發句は出てゐるが、三月十日の日記は「南吹未刻ヨリ雪」とのみで、當時柏原に在庵中であつたらしい。（一茶翁文通）

日〱日の立つにも、淋しき春をなし給ふならめと、そなたに向て念佛申ばかり也。私も四月ごろ立歸りに參り度、序ながら御やうすうかゞひ度如レ斯候可祝。

生殘りて物淋しき折から

西山やおのれが乘るはどの霞

三月十日
秋本さま

春耕宛　文化十年

下谷一番の句は『七番日記』の文化十年四月にあるので、同年の手紙と推定したが、五月十五日は「善光寺大門松屋ニ入」と同日記にある。（久保田慶稲氏蔵）

御安清被レ成候哉奉レ賀候。されば□治方の一書春水子より貴家におくり申様申來候間、此人に御渡可レ被レ下様(マヽ)奉ニ願上一候。右申上度、万ゝ得ニ貴意一候。明と申残候かしく。

五月十五日　一茶
春耕様

手まり唄
下谷一番の顔して衣がへ

宛名なし　文化十年

『七番日記』の文化十年七月に「御見遂よ」の句があるが、日附の九月十八日は「雨」とのみで記事はない。文中の反古は善光寺の人で『三韓人』にも見えてゐる。

秋冷候へども彌御安清被レ成候や奉レ賀候。されば過日は別してありがたく、御蔭にて天窓の寒さを助かり申候。竹とり物語しんじ候。ゆる〳〵御覧被ニ成下一候。

一成美點八月分、善光寺反古と申人勝になり申候。東都より此方にむけて懐紙其外景物どんと送申候間、昨日馬序に送り申候。貴子も十月分御句案被レ成候ば廿四日直に御出し被レ成候とも、みのや久七反古迄なりとも、御出し被レ成候へば善光寺連と一つに致遣し可レ申段、一茶申候迚御送り可レ被レ成候。萬ゝ得ニ高慮一時と申残候かしく。

九月十八日

善光寺の閏を思ふ
虱ども夜永がろうぞ淋しかろ

御兒達赤いきのこに化さうな
貴評可ㇾ被ㇾ下ㇾ候。　一　茶

雪居宛　文化十年

雪沓をそのまゝ忘れて來たが人に穿かれては困るから、しまつて置いてくれとの手紙である。雪居は柏原の隣、古間村の人である。『七番日記』文化十一年閏十一月十日に「古間書出」とあるのが此の手紙の事であらう。

善光寺
一　茶
古間
小林庄吉郎様

ことしは暖冬にて候へば彌御安清奉ㇾ賀候。此邊は草履のから〳〵道に候。貴方は氷のかん〳〵道なるや、何にもせよあたゝかにてくらしよく奉ㇾ存候。されば私の雪沓を直藏さま御仕廻被ㇾ下候處、其節御賴申上候へども又候申上候。其沓並よりは大ぶりにて出來合に不ㇾ有候。四五日前よりあつらへ不ㇾ申候ては出來不ㇾ仕候間、餘りに急にこまり申候間、何とぞ人のはかざる所へ御隱しおき被ㇾ下候様奉ㇾ願上ㇾ候。右申入度かしく。

閏十一月十日

かしは原の舊巣をおもふ

我庵は夢に見てさへ寒さかな

貴評可ㇾ被ㇾ下候。　一　茶

雪居さま

斗囿宛　文化十一年

文面の「一世一代がてら」は江戸へ出て『三韓人』を板行する意圖を告げたので、『七番日記』の文化十一年五月廿四日「成美書出、守靜・斗囿・松井・一峨」とある其の一通がこれだらう。發句も五月の中に記してある。（一茶翁文通）

正月廿四日出しい一書相とゞき候哉。彌御安清被ㇾ成候哉奉ㇾ賀候。されば私も漸此世の人に相成申候。四・五月ごろにも相成候はゞ、一世一代がてら參り申度、先そ

れ迄と申残ゆかしく。

三月廿四日

此やうな末世をさくらだらけ哉

有様は我も花よりだんご哉

大茶小な喰らふ側から花咲ぬ

貴評可レ被レ下候。　一茶

斗囿様

文虎宛　文化十一年

十五日「文虎ヨリ大茄子一袋來」と「七番日記」の文化十一年七月にある記事に對して、その禮狀である事が解る。發句も同月の作である。手紙の上封には「文虎大人　俳諧寺」としたゝめてある。（村松義弘氏藏）

そのゝち御安清被レ成候哉奉レ賀候。さればうつくしき茄子一袋御めぐみ、ありがたく奉レ存候。万ゝ参上ノ時ニ御禮申上度早ゝかしく。

七月十四日

迯しなや瓜喰かいてきりぎりす

西國寺

茶屋が灯のげそりとあつさへりにけり

などキ評可レ被レ下候。

文虎さま

二白、神代巻は江戸ニ有レ之、此方になく取寄次第しんじ申度、どなたさまへもよろしく奉ニ賴上一候かしく。

斗囿宛　文化十二年

文化十二年正月十六日の日記に「今日我家有ニ寶引一　大熱舌焦如レ盡」とあるのが、文中の「やく病神にとりつかれ」と一致する。二月廿三日「東都文通」として斗囿の名も記してあつて、一茶が柏原在庵中の手紙である。（一茶翁文通）

御安清被レ成候哉。されば私正月十六日より、やく病神にとりつかれ、今にふら〳〵とちり殘る木の葉の風を待がごとし。もし古人に相成候はゞ、集は册に相成候間よろしく奉レ頼候可祝。

二月廿三日

念佛にはやされて上る雲雀哉

犬と蝶他人むきでもなかりけり

鳩、いけんしていはく

梟よつらくせ直せはるの雨

鳴な〳〵それ程まめで歸る雁

やく病神に引たくられ候ば、一向なく御評可レ被レ下候。

斗囿様　一茶

便り所　小傳馬町三丁目さつてや茂兵衛守靜方

春耕宛　文化十二年

『七番日記』によると文化十二年の手紙らしい。同書六月廿一日「ケノニ入」廿四日柏原に戻つて、廿六日は「書卷等入レ倉」とあるのでさう考へられる。成美の歿する前年になる。（久保田慶祐氏藏）

毛野から一度、此方より二度書しんじ候へども、一度も相とゞき不レ申候哉、いかゞ。成美の返事一覧仕度、參候哉不レ參候哉、御返事御聞せ可レ被レ下候樣奉ニ願上一候。

右申入度かしく。

六月廿九日

煤けたる家向きあふて夕涼み

星待や人は若くも思ふかと

墓持たぬ人が箔（マヽ）きて參りけり

など〳〵　一茶

魚淵宛　文化十二年

魚淵の著『迹祭』の出板を引受け、その延引に

つき申譯に江戸から長沼へ送つた手紙である。『七番日記』文化十二年十月七日の記事に「寅一刻ヨリ雨」とあつて、諸方へ文通の中に魚淵の名も記しとゞめてある。

九月二日三好屋より集入、又書通相とゞき申候。冬冷少しきざし候へども、其後彌御安清被レ成候哉奉レ賀候。集迹祭りも板木師目をわづらひ申、いまだ取かゝり不レ申候。外へあつらへ申候ても、ひよつと出來あしくては、又後悔の種に候間是迄見合せ申候。

一、道彥に序申入度十度參り候へども、魚釣(卯六より)りの留守にていまだ逢不レ申候。いづれ近々に參り可レ申候。

一、野尻御序も有レ之候はゞ、坊主をちよつと御覽可レ被レ下奉レ願上候。

一、此一封三好屋へ、いつなりとも間違ひ不レ有レ之人に御屆可レ被レ下奉レ願上候かしく。

十月七日

鳶ひよろひよろ神の御立けな

旅じたく神の御身もいそがしや

口切やはやりて通る天つ雁

猫の子のちよいと押へる木葉かな

土團子今日も木がらし〳〵ぞ

き評可レ被レ下候。　一茶

魚淵様

二白　又々新町とぎやへ早々おくり可レ被レ下候。

魚淵宛　文化十三年

『七番日記』の文化十三年十一月六日に「迹祭六十部信州送」とあるから、その日の手紙である。ひぜんには頗るなやまされたと見えて、翌年三月八日の記事にも「足の疥瘡大ニ腫苦痛甚」とある。（一茶遺墨鑑）

青陽、彌御安清被レ成候哉奉レ賀。されば私は九月三日、一日ぬれ鼠となりて歩行候かけんか。又あまり新句吐くゆへ、和歌三神の天窓敲き給ふにや、十一月初つかたよりひぜんといふ腫物、總身にでき申候得ば、氣づかひな

る所にはちと延慮。吉田町廿四文でもなめたかと思はれんと推察候得ば、下總西林寺といふ山寺、五十日あまり籠り申候。

一　迹祭り御集おくり申候、書箱八百四十八文にて急に買申候。私がおくり候紙包み等、其箱に入御預置可ㇾ被ㇾ下候。

一　松宇様御集出來候はゞ、みちのくの配分は、私の逗留中御送り可ㇾ被ㇾ下候様、御傳聲可ㇾ被ㇾ下候。ひぜんにて手うごかず、漸したゝめ申候かしく。

十一月六日

なふち様

文虎宛　文化十三年

十二月三日「長沼ヨリ書通來」と日記にあるに對しての返事で、同四日「魚淵・文路・文虎ニ返書出」とある其の一通である。『七番日記』による。（一茶遺墨鑑）

二白、成美も、十一月十九日、佛と成り申候。

十一月廿三日出の御書拜見、彌御安清奉ㇾ賀ゝ。はた當冬、雪等降らぬやら目出度奉ㇾ存候。されど私は來春ならでは歸鄉もなりがたく奉ㇾ存候。万ゝ來春と申殘候かしく。

十二月四日

藥といふより始りぬあばれ喰

年内立春

柊にちよつと春立つ月よ哉

縄帯の悴いくつぞけさの春

などゝ、き評可ㇾ被ㇾ下候。

一茶

文虎様

成美宛　文化十三年

成美の死ぬ文化十三年の手紙であるが、『七番日記』に文中の發句はないから、その更に以

前、江戸から柏原へ歸つて間もなく書いたものゝようである。（一茶俳集）

七月一日御書、外に包み三品今相とゞき忝く收納仕候。荷物拵へかた〴〵いやはや一口には御禮申がたく、ありがたく奉レ存候。彌御安淸奉レ賀候。さて道ゝ馬埃ぱつぱと目口も明れず、其上三伏のくはん〳〵照りにてり焦るゝやうに覺えて、天窓には簁をかけ、腹には水と砂糖でやう〳〵に命をつなぎ、二日といふに庵入候。

一、長ゝ留守中、北國すじの文通・扇面など少ゝたまりて、さいそく狀五六本づゝ有レ之候へども、いまだ長旅、炎日のほとぼりさめかね筆とることのむづかしく、凉風立申候ころには追かけ〳〵未進をすまし申度、又のたよりに急度板下しんじ度候。

一、北山の碑も御序に奉レ願上一候。

七月十四日

○

凉しさに妹が蚊を追ふ投子(マヽ)かな
おれが田を誰やらそしる夕凉み
蠅よ蠅　(引用書闕字)　もしろは
今來るは木曾夕立か淺間山
うそ寒や垣の茶筅の影ぼうし
日ぐらしやおまんが布の二三反
我もはや五十そこらぞきり〴〵す
はや五十聞かば虫の音峯の月
みそ萩や手にとるからに秋の立
秋(マヽ)や夜の戸をかく祕藏猫
安房草どこ迄伸る秋の風
夕されば鳴つく奴が立にけり
星待つや人は若くも思ふかと
汁鍋は稻妻おつる所かな
朔日は迹になり行く瓢かな
野分して見事に萎るゝ焚火かな
袂から門から霧のたちにけり

序に候へば、くた〴〵しくしるし申候。有様は一月なりとも遊びたく、尊慮御聞せ被レ下度奉レ希候。

一茶

成美様

おきく宛　文化十四年

一茶が五十一で娶つた柏原の妻きく女へ、下總行脚から江戸へ一時立戻つた化文十四年三月三日、こま〴〵と書き送つた手紙で、ひぜんになやみつゝ柏原の空なつかしく、妻女の留守をなぐさめると共に、十四日の祖母の忌日及び十七日の母くに女の忌日は必らずとむらへと誡むるなど、こゝろの屆いた文章である。（一茶翁文通）

其後御安清被レ成候哉奉レ賀。されば私前に申越候通り、去十一月よりひぜん發し、外へ行も延慮いたし居候所、十二月十三日より足のうらも腫候へば、山寺に籠り療治仕候。早直しの付藥も人ょ進め候へども、追込ん事をおそれて、さやうなる藥りさつぱり用ずして出來次第ニいたし置候所、今以てぢく〴〵膿水したゝり申候。毒立等も一向不レ仕候。食物等常の通り不ニ相替一、しかし十一月より今三月迄、丸四月どちらへも行ず居り候へば、用むき一向に方付かずこまり入候。當月中ごろよりそろ〴〵上總の方ニ可レ參候へども正味四月一月にて、五月廿一日迄ニは足を引ずりても墓參り仕度、さやうに候へば、四月一月卄日の中ニは、用むき半分もらち明不レ申候と奉レ存候。何を申もひぜんといふ人のいやがるものにできられたる此度の仕合、是も前世の業因ならんとあきらめ申候。

長〴〵の留主、さぞ〴〵退屈ならんと察し候へども、病ニハ勝れず候。其方にはうす着になりて風でも引かぬやうニ心がけ、何はたらかずともよろしく候間、十四日・十七日の茶日ばかり忘れぬやうに賴入候。旧冬より此方は雪ちら〴〵したる事も有レ之候へども、一寸ともつもる事なく埃ばつぱとかん〴〵道なれば、自由自在に馳歩んと思ひけるに、ひぜんに引とゞめられたる一茶が心、御推察可レ被レ下候。世俗ニいふ通り、一升入の德利はいつでも一升ぎりより外這入らずと心にあきらめ申候。四月は上總ニ參り候間、手紙もおぼつかなく長〴〵と申入候かしく。

三月三日　　一茶

おきくどのへ

宛名なし　文化十四年

「去三月廿日御書面拝見」とあつて、日附が三月三日なのは不審ながら、「おかしからぬ小集」は『杖の竹』か『迹祭』かであらう。（一茶俳集）

江戸便所　小傳馬町三丁目幸手屋茂兵衛

去三(マヽ)月廿日御書面拝見、彌御安清被レ成候や、玉吟御聞せありがたく、いづれも甘心仕候。又おかしからぬ小集に御句加入仕候へばしんじ候。御笑納可レ被レ下候。追かけ〳〵小集仕候へば御近作御聞せ被レ下度いのり申候。右申入度かしく。

三月三日

うかれ猫奇妙に焦てもどりけり
爪上てゆるりとしたる小村かな
親雀見て居て子どもとられけり

貴評可レ被レ下。　一茶

魚淵宛　文化十四年

文中の追摺は魚淵から托された迹祭の事で、『七番日記』文化十四年四月六日「魚淵文通出」とあるのが此の手紙であらう。下総から江戸に戻つて松井方から出したのである。

前略　二合半領吉川といふ處を通り申候へば、三月二十七日田植始り申候。尊地はいかゞに候哉、私もひぜん癒りかね、五月頃ならでは、歸鄕なりがたく奉レ存候。追摺廿册代、急ゝに御送り可レ被レ下候。是れにて迹祭り雜用仕廻ひに候。右申入度萬ゝ後よりとかしこ。

四月三日

初袷松の見る目も耻かしや
庵の蚊のかせぎに出るや三日の月

老翁岩に腰かけて一軸を授くる圖に

我汝を待事久し時鳥

貴評可レ被レ下候。　一茶

正風院法印様

希杖宛　文化十五年

江戸の素玩を湯田中に案内して、二月廿日「素玩東に立」と『七番日記』文化十五年にある翌々廿二日附の手紙である。素玩の忘れた珠數の事が見える。廿四日には文中の六川に入つてゐるが、此の手紙に關係のある記事はない。（湯本五郎治氏藏）

陽炎ぱつぱ立、片道かたまり、漸心暖ニうつり申候。彌安清被レ成奉レ賀。されば過日は參り長く御坐敷ふさけありかたく奉レ存候。素玩も私より御禮申上候申候。是も廿日三好屋を出立東行を急候。

一、大内山の時鳥の書本下書、三好屋より出候間、尊家の一軸此方に御送被レ成候樣申上候へどもよろしく奉レ存候間、右御せうち可レ被レ下候。

一、紫竹の杖は御序に御つき被レ成候而、六川知洞樣迄御出可レ被レ下候樣奉ニ願上一候。

一、素玩珠數一連、四疊坐敷のかけ物の折釘にかけ候而、失念仕候樣申候。もし素玩申候樣ならば其珠數も梅松寺迄御屆可レ被レ下奉レ希候。右申入度萬々春永にとかしく。

二月廿二日

陽炎や新吉原の晝の躰

善光寺御堂

花さくや伊達にくはへし殼きせる

かるかや堂

蝶とぶやしんらん松も知つた兒

花の世は佛の身にも親子かな

キ評可レ被レ下候。　一茶

希杖樣

宛名なし　文化十五年

『七番日記』の文化十五年八月に「十五夜や」「姨捨や」の二句、九月に「なぐさみの」の句が出てゐる。八・九の兩月を通じて此の手紙にあ

てはまる記事はないので、宛名を調べられない。

加賀御遊行とありて折角御立寄られ候所、折から他行仕候て殺風景不ㇾ過ㇾ之御用捨下さるべく候。さて別後御なつかしきこと、むさし野の草葉しげく、あふみのや湖より深し。世の中の流行あづまものがたりなどうけたまはらず、殘念に奉ㇾ存候。御句澤山御聞せ、中にも秋風の雲は、連山をすりぬけて靑天きら／＼と目立候樣、其外草花・いな人等甘心仕候。又うるまの肩ありがたく、とみに十五夜のはれを仕候。御短册上ゝ吉過、ぶる／＼とふるひながらしたゝめ申候。御笑納可ㇾ被ㇾ下候。春出版も仕候つもりをべん／＼とづるけ候程に、おらが世といふ小集、板木屋いそがしくならぬ前にと、人にせつかれて本意なく出かけ候。御存の長沼へ御立寄被ㇾ成候はゞ、得ニ御意ㇾ候事もあるべきか。もし間違等もあらばあづままで一書をもつてうかゞひ申度候かしく。

九月九日良夜

六月よりの片てり、所〻の雨乞もしろしなかりければ

十五夜や丁度もち込む祈り雨

姨捨はあれに候とかゞしかな

小僧追錦勸進

なぐさみのはつち／＼や秋日和

御評可ㇾ被ㇾ下候。　一茶

文路宛　文化十五年

『七番日記』の文化十五年七月廿二日には『三好男、金百疋入』とあるから其の使の男に托した手紙である。「ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉」は日記に下五「天窓哉」とあるが、此の手紙で見るとその時既に「そぶり哉」と再案した事が解る。（口繪參照）

御書面彌御安清奉ㇾ賀。さて／＼いつぞやの夜は始て御泊り゠寒い目にあはせ、本意をうしない申候。其後夜着一つ建立仕候間、又の夜御出程奉ㇾ待候。毎度ながら、

一 上田の大包、碩齋へ包御屆忝奉レ存候。
一 御年暮山吹百疋、ありがたく落手仕候。
一 佛前明り、又坊主が天窓ニ迄、御祝義あつかましくも
御貰ひ申候。
一 御句、節きゝのせど、目の先の雪山、馬の子、小雀
等中山(マヽ)ゝニ奉レ存候。万ゝ正月迄と申殘候かしく。
　十二月廿二日

衣配天窓數にははづれけり
厄拂などうかれしも昔哉
一文で厄はらひけり門の月
雪ちりて人の大門通り哉
　白像ニいふ
ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉
　御評可レ被レ下候。　一茶
　文路様

春甫宛　文化年中

江戸から長沼の春甫に送つたので、年代は知れさうで『七番日記』の類をあさつて見たが、符合する記事はない。文化年中の手紙であるらしく思はれる。（山口久治氏藏）

三月十日御書相とゞき拜見、彌御安清奉レ賀候。さて當方花紅葉うつり行、時鳥まち顏に、卯の花ちらほら開きかゝり、又永代橋・大橋・東橋の三所、廻船問屋より申上候而錢とらぬ橋と成行、ことし始て四月十七日町ゝ日光祭致候樣御觸有レ之候。○はた土中出現の藥師ありがたき事、成美もめづらしがり申候。○三月八日出にして殘りの御書しんじ候。相とゞき申候哉、小人明廿二日出立參候間共時ゆる〳〵申上度、万ゝ申殘候かしく。
　三月廿日　一茶
　春甫様

玉吟いづれもおもしろく、その中に、めくじり立る花。○なの花。○放鳰等別して甘心仕候。

卯の花や臼の目きりと鶯と
夏籠のけしきに植る小松哉

更衣朝から松につかはるゝ
　　などゝ御許可レ被レ下候。

可好宛　文化五年

此の手紙の「五月十三日より半年の留守」は『旅日記』の文化五年五月以後の缺損して居る事及びその斷簡と思はるゝ同好會本『七番日記』附載の同年十一月と推定さるゝ記事に「十九日晴　江戸入」とあるのと、「霜月十九日東都に入申候」といふ文中の月日と對照して同年の書翰と見てよいであらう。

二白、与惣治様へもよろしく御傳へ可レ被レ下候様願上候。

此度大道上人御返り被レ成候間せうそく申上候。いよ〳〵御安清奉レ賀候。隨て小人も霜月十九日東都に入申候。五月十三日より半年の留守にて、垣・塀等月〻のあらしに倒れ、庇などは夜〻の雨に朽ちたれば、とみに其繕ひに取かゝり、彼是と暇なく、又東西の知己をも訪ひて未だ俳事にさへかゝり不レ申候間、御不音御用捨可レ被レ下候。

一　紙衣の事庵中を探し候へ共、一向に見え不レ申候へば、跡より心しづかに尋ね候て、しんじ申度左様御承知可レ被レ下候。

一　御存知之紛失一件　六左衞門様、御歸り被レ成候はゞ、貴家に差上置候所の屛風の引裂等、彼方より御尋ね可レ被レ下候間、御見せ被レ成可レ被レ下様奉レ願上候。

一　私も明日あたりより申上置候俳書三昧に閉籠り、來る正月は出版いたして世の人口を防ぎ、それより脇目もふらず尊方へ赴き度、萬〻後の便と申殘し候可祝。

師走八日　一茶

可好大人

垣など繕ふて

霜よけの足しに引はる小藪かな

けふも〳〵竹に見とるゝ火桶かな

斗圃宛　文政二年

下總馬橋の斗圃は秋本氏、父は一茶の俳友柏日庵立砂である。此の手紙は柏原から書送つたので、『おらが春』の「とし、みちのくの方、修行せんと乞食袋首にかけ」四月十六日出立したが、故郷はなれ難くて中止した記事と呼應する。椋鳥の句も『おらが春』に出てゐる。

（一茶翁文通）

文政二年七月廿七日一通、九月十二日相とゞき、當年六月九日一通、七月三日にとゞく。兩度ながら御深志の程並み／＼ならず奉ㇾ存候。かゝる遠路のおくしなのゝ野中の埋井も、もとの心をしる人ぞ汲と、ひとりうれし泪をこぼし申候。舊冬十二月三日杖をならし東の方に踏出して、

　椋鳥と人に呼るゝ寒かな

と、つぶやきたる折からに、うすみぞれざぶ／＼降ぬれば、道ぬかり只ならず候に、行つかぬ前から碓井峠が胸につかへて、老足のむづかしく中途より取て歸し候。ことし三月ごろ是非／＼と思ひけるに、風の神・雨の神の暑いの何のかのといふうち、又ことしも引込思案になり申候。かくの通りに候得ば、得二尊意一萬〻申上度御返事もしんじ不ㇾ申候。しかる所また／＼御書累々難ㇾ有奉ㇾ存候。

　さて御句は○上白の露○足からみ○みそ萩はそら小便と一直いかゞ候哉。其次○鹿の子や畫○夏痩の眞瓜に團扇を上げ申候。いかゞやらんいづれ御笑ひ可ㇾ被ㇾ下候かしく。

九月十四日

どう追れても人里をわたり鳥

喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥

露の玉つまんでみたるわらは哉

茸狩のから手でもどる騒かな

　二番休

乳呑子の風よけに立案山子かな

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

御評可レ被レ下候。　一茶

斗囿樣

斗囿宛　文政二年

一茶の中風を發したのは文政二・三の兩年說があるが、此の手紙で見ると二年說の方に、より確かさをみとめる。斗囿の『一茶翁文通』は草稿の綴ちがひがあつて、其の寫本には別の手紙の發句がまぎれ込んで居るが、こゝには私見を以て混入の疑ひあるものを削除して了つたのである。（一茶翁文通）

十月二十一日出の御狀、十一月二十六日相屆彌御安清奉レ賀。されば秋野(マヽ)の大すり物十葉、草々吹亂れて見事也。殊に黒か成を御植込忝奉レ存候。それのみならず、白寶二方御惠御辭退なく取込、袋棚に納、御蔭を以て炭火澤山に、寒村孤僕(マヽ)的暖氣にありがたく奉レ存候。小人も

十月十六日に淡雪の淺野の途中にて辷り轉ぶと等しく中風起り、五里の道も駕にて庵に乘り込、とみに大根おろしのしぼり汁にて、半身不遂(隨)は癒候へども、いまだもとのごとくの足に成かね候。花の三月ごろ身輕になり申候はゞ、歩かれべきと奉レ存候。其時東の方へ踏出して御ことばにすがり、御うらの別莊にこもらんと今からたのしみ申候。旦暮の御すり被レ成候樣句御申越し候へども、いまだ春仕込不レ仕候。されども少々別紙に認、しんじ候。御評可レ被レ下候。

十月七日

病中俳諧寺のていたらく

袵形に吹込雪やまくら元

はつものゝうちになくなれ門の雪

初雪を着て戻りけり祕藏猫

里の子や手でつくねたる雪の山

節季候やさゝらでなでるんめの花

御成場

江戸川や人よけさせて浮寢鳥

栗のいがいぶるや人も時雨顔
風の子が掴みなくすや窓の雪
わらんじの並に釣すや丸氷
　信濃ぶり
我門や只四五本の大根藏
　兩國橋
寒垢離にせなかの龍の披露哉
　節分
一聲に此世の鬼は逃るよな
雪ちるやおどけもいへぬしなの空
炭の火や朝の祝儀の咳ばらひ
さをしかやゑひしてなめるけさの霜
冬籠悪く物喰を習かな
餅搗が隣へ來たといふ子かな
大根引く拍子にころり小僧哉
是等にて御評可レ被レ下候。

一茶

斗囿様

御句おのずからの芒。朝風やかのこ雪。月に見ゆる秋はちと一句落着せずやありけん。
　目に見ゆる秋とはなりぬはたて雲
と一直いかゞあらん。早風雲がよからんか。
神の風はあまりくはしくやあらん。
　ともし火や砧の風のおり〳〵に
芭蕉忌は翁の日だけいひ過たらん。
　栗津から來たのか今の一しぐれ
など一直つゝ仕候、御意如何あらん。是等みな〳〵甘心、小福帳にとめ申候。
二白、何とぞ半紙此位にてよろしく、二帖勸進に付可レ被レ下候様奉レ希候。此板有レ之候てすり呉候樣、先便今日庵に御賴申上候間、來春初便に御送り可レ被レ下候。一峨宗匠へも御傳聲奉レ希候。
　毎月十七日大傳馬塩町萬屋藤助方迄飛脚やれ〳〵と申せば心急ぎ春迄申殘候可祝。

春甫・掬斗・素鏡・雲士宛　文政三年

長沼の俳諧寺社中の人々が、一茶の中風見舞に來てくれた禮手紙である。俳諧寺の記は其偶作な文通の中に記して、「いまだ半出來ながら」とあるように推敲の不充分なところもあるが、冬の柏原風物が素朴な筆で描寫されてゐる。（一茶遺墨鑑）

いつぞやは夜をこめて鶏のそらねをはかりて御見廻、御深志ありがたくと一口にいふも、あまりなぐり口上ながら、野中の古井もとの心をしる人ぞ汲むと心に拜み申候。其上何よりの御みやけ、是又忘れがたく忝奉レ存候。はた御歸のころは、牟禮の前坂邊りは、のしこし山のあたり迄はね泥ならんと奉レ察候。されど、あんころのさたもなく、御里入被レ成候哉奉レ賀。私も年内に御禮がてら参上などゝ口にていへど、甚よはりゆと見へて、足だめしに古間迄參り候に坂口にて二度休み、ほく／＼と漸に歸庵仕候しだら、七種ごろは、よ程よろしからんと奉レ存候。それ迄、御安清御累年可レ被レ遊候。御禮申上度かしく。

十二月八日

俳諧寺記

苓芳しき楚地の雪といひ、木ごとに花ぞ咲にけるなどとほんぞうめさるゝは、錢金程きたなきものあらじと、手にさへふれざる雲の上人のことにして、雲の下の又其下の下／＼の下國の信濃もしなの、おくしなのゝ片すみ黒姫山の麓なるおのれ住る里は、木の葉はら／＼と峰のあらしの音ばかりして淋しく、人目も草もかれはてゝ、霜降月の始より白いものがちら／＼すれば、悪いものが降る、寒いものが降ると口／＼にのゝしりて、

　初雪をいま／＼しいといふべ哉　旅人

三四尺も積りぬれば、牛馬のゆきゝは、ぱたりと止りて、雪車のはや緒の手ばやくとしもくれは鳥、あやしき孤にて家の四方をくるみ廻せば、忽、常闇の世界となれりけり。晝も灯にて糸くり縄なひ、老たるは日夜ほだ火にかぢりつくからに、手足はけぶり黒み、髪は尖り、目は光

りて、さながらあすらの体相にひとしく、餓顔したるもの貰ひ、蚤とりまなこの掛乞のたぐひ、わらじながらいろりにふみ込み、金は歯にあてゝ眞僞をさとり、葱は竈に植りて青葉を吹く。都て暖國のてぶりとはとてもことかはりて、さらに化物小屋のありさまなりけり。

　羽生へて錢がとぶ也としの暮

　いまだ半出來ながら御評可レ被レ下候。　　一茶

　　春甫様
　　掬斗様
　　素鏡様
　　雲士様

外に年の闕辭・柏原雪賦も少々つくり候へども、手凍へ追々入ニ尊覽一度奉レ存候。

斗囿宛　　文政四年

一茶再度の中風やゝ癒えた文政四年の手紙であらう。前年十月十六日發病の事はこれで解ろが、その他に正確な記錄がないから、手紙のまゝ信ずる外ない。二月五日の日附以下の文章は發句の詞書である。（一茶翁文通）

正月十日御書、二十六日拜見、彌御安清被レ成候哉奉レ賀。珍らしき御すりもの十葉、ことにしなのゝかぢけ雪も御加へ忝奉レ存候。其上に南方無垢世界童女のもちたる寶一方御惠み、はつ子のけふの玉はゝき、手にとるより玉の緒も延る心ちし侍るなり。さて十月より一足も外へ出ず候へば一句もなく、されども少々御覽に入候。しかし舊とし御聞せ申たるもおぼつかなく、萬々春永にと申殘候かしく。

　　二月五日

去る十月十六日中風に吹倒されて直に北邙の忌〳〵しき土と成しを、ふしぎにも此正月一日初鷄に引起されてとみに東山の旭のみがき出せる玉の春を迎へるとは、我身を我珍らしく、さながら生れ代りてふたゝび此世を歩

くこゝちになんありける。

今年から丸まうけぞよ娑婆遊び
餅組みも一座敷あり梅の花
日歸りの湯治道者やはるの雨
春駒は竹でしてさへいさみけり
鶯よ風を入るなあたら口
かすむ程たばこ吹つゝ若菜つみ
猫の子にかして遊ばす手まり哉
ひかひかとつぶりにしみる梅の花

牛盗人と見らるゝも、後世者のふるまひすべからずとは、尊ときしめしなるを、盗心の上に肩衣かけて大道を歩くを、善人といふせんかたなき所がらなりけり。

　みどり子の二七日の墓
春風のそこ意地寒ししなの山
陽炎や目につきまとふ笑ひ皃
　おなじく
散花の杖にとまらぬなげきとは
　思ひきれどもおもひきれども

むごらしやかはいやとのみ思ひ寝の
　ねぶる隙さへ夢に見へつゝ

忍ばずが岡の龜ども、人に口明て菓子ねだる有様を見るに、此苦の娑婆に萬年の逗留さぞ退屈ならめと、

永日を喰ふやくはずや池の龜　一茶

などゝ指を噛むばかりに候。

　斗囿様

二白、布川月船、折ふし何なども御聞被レ成候哉。今日庵迄舊とし申越し候へども、いまだ返事もなく、何とぞ風の便もあらば、御聞可レ被レ下候様奉ニ願上一候。舊友一入なつかしく被レ存候。

可厚宛　文政四年

『随齋筆紀』に文政四年七月廿八日、可厚より井眉一通届いた事を記してあるから、その時の手紙であらう。可厚は水内郡マユミ田の人である。

夫秋はしなのぶり御送り、ことにおろかなるをも御加入、御禮かれこれ延引するうち、又候浪花井眉一通御屆けかたく〳〵忝なく奉レ存候。玉吟あるが中に、涼しさの・星様の・薬みがきの・鼻緒と甘心仕候。まづ得二尊意一候迄ともかく御禮申入候。

七月廿九日

踊る夜やさそひ出されし庵の笠

狗のどさりとねまる一葉かな

田のくろあらそひて、おほやけにうつたへんといふをなだめける

吹く風も身にしみ〳〵と秋の田のかりの此世にいつまであらん

などゝ御評可レ被レ下候。　一茶

可厚様

旅中有合の紙御免可レ被レ下候。

卓池宛　文政四年

卓池は三河岡崎の人で青々處と号したが、此の手紙で見ると當時江戸に出て、品川に旅寓して居たらしい。文政五年九月廿三日の日記に「希杖・犬筑波借ス」とあるから、その前年の文通であらう。

十月二日の御書、廿一日拜見、彌御安淸のおもむき奉レ賀候。されば犬筑波久しく心に願ひに此度送り給り、衣のうらを得しやうにうれしく、おかしく熟覽候。さて私も十月十六日途中にて辷り轉ぶを相圖に中風起り、最早道(マヽ)駕籠にて庵に乘込み候。すはや成美の跡追ふて彼國一見かと思ひけるに、手合せの藥にて口曲りも半身不隨も癒候。しかれどもかの破れ道具なれば、生涯中風のつぎ目は直るまじく候。若又此まゝにころりとしたらば、御方角を迷ひ歩かんと被レ存候。其譯は文路がおらが世・春耕が菫塚・素鏡が種おろし、此三部の外にもさま〳〵江戸に

参りて編むべく思ひ候間、其集との半途果たらば執心必ふはり／＼として、一番に品川へも出かけ申べく、其時わつとかけ出し被レ成ず、幽靈太皷のどろ／＼でも鳴らして御用心可レ被レ下候。

十一月十一日　一茶

卓池家様

奉行所宛　文政四年

柏原の奉行所へ村の役錢免除方を申出でたので、陳情書といふべきものだから、書簡の中に入れるのはどうかと思ふが、手紙の体をなしてゐるのでおかしくもあるまい。彌市は異母弟仙六との和解の際の立會人で一茶の親戚である。一茶は彌市に好意を持つて居かなつたので、此の場合の引合ひに出したのだとすれば、そのやり口の甚だ辛辣で、それ故柏原の人には嫌はれたのも一茶の性格の致すところであつたと云はねばならぬ。

申上候事

正月二日集會の節、萬屋彌市どのは役金などいくら出すものやら一向にしらざるよしに候。私は享和元酉のとしより、文化十年酉迄、金一歩ヅヽ御上納同様上納仕候。御帳面御改可レ被レ下候。其内享和元より文化十迄、十三年のうちは江戸住居、又は園右衛門どのゝ家の小隅借りて住むうちも、空家に金一歩ヅヽ上納仕候。彌市などは祭り棧敷になぐさみの錢散しながら、上納同様の役錢出さず、棧敷かけるちからなき私が、かゝさず役料とらるゝ事、闇夜の草原歩くやうに分りかね候。あはれ、青天白日たる明鏡の御心に御尊察可レ被レ下候。おのれ中風此かた歩行心のまゝならず、出入の度に駕賃に追ひまくられて困窮の上に、生れるの死ぬの又生れるの死ぬのと、大にこまり候。なよ竹の直ぐなる御捌きにて、役金ちとの間休ませ可レ被レ下候。其代り今迄長／＼よい子の皃して休みたる彌市より、役金は御取り立被レ下候はゞ生ゝ世ゝ有難く奉レ存候。参上候而御ねがひ申べく所、今日御他駕のよし、夜は中風の名殘り老足よろ／＼と、川にお

ちん事のおそろしく如レ斯候。御憐み給へ。

文政四年十二月廿九日

おいぬばゞより
第三番目　百姓　彌太郎

當村
御奉行所
御役人様

春のころ權左衛門様・喜左衛門様・半左衛門様の御耳に入置候。よろしく御勘辨被レ遣可レ被レ下候。

魚淵宛　文政五年

文政五年の日記に八月十五日田中に向ふ途中洪水の爲め川を越す人の乳を没するを見て「匆暈テ不レ爲レ渡」して六川に歸るとある、その當時の手紙らしい。

廿二日御書拝見、愈雨降り候へども御安清に寺や駒場の世話やき被レ成候や奉レ賀候。されば茸取には杖笠等決してもたずね候へば、山捜しなど御やめ可レ被レ下候。さて其後も只ふり降るものから、廿五日田中へと足を向けかへば、いまだ川滿ゝとしてたま／＼越す人を見るに、のしこし山を打越して、乳のあたりまで水に浸り申候へば、見おろして川より(マヽ)六川へ取てかへし候。出金は彼の地よりとゞけられ候様たのみ置候。さ様御承知可レ被レ下候。くれ／＼山尋ね(マヽ)など延引を申入候かしく。

六月廿九日洪水

啼きながら虫の流るゝ浮木かな

正風院法印様

伯司宛　文政六年

妻菊女の重病にて隣村古間の醫師で俳人の伯飛に容態を報じた手紙である。「九番日記」文政六年三月六日「菊瞑眩」とある其の日の事であらう。　（一茶俳葉）

今日來菊大瞑眩にてしきりに水を乞ひ候。巴豆ならざ

れば水呑せても不レ止候や。何とぞ御聞せ被レ下度右申入
度、萬々得ニ尊意一時と申殘候。

（マヽ）
卯月六日　　　　一　茶

伯司様

指月宛　文政七年

妻のきく女の歿した翌年の正月六日、越後關川の淨善寺住職である指月に、後妻の取持ちを頼んだ手紙である。一茶時に六十二。（俳諧寺一茶）

二白急々に御報希候。

御安清被レ成候哉奉レ賀候、されば殘り候一男子、十二月廿一日歿候へば、御咄の坊守ほしく候。參候て御頼申上度候へども、御地は青繩さわぎのおそろしさに延引仕候かしこ。

妻におくれて子にさへすてられて、なげきの晴る丶間もなく年のくれけるに、婆婆のことの小むづかしく。

みだ佛のみやげに年を拾ふ哉

かくれ家やからの咄しの年忘

など貴評可レ被レ下候。

正月六日　　　　一　茶

指月上人

文路宛　文政七年

文政七年十一月八日の日記に「文路文通　筆五木來」とあるので、右手紙の返事に書送つたのである。文路は上原氏、善光寺の人である。十五日の日記に「文路ヨリ羽折來價廿五日」とあるので注文の「つむぎふとりの羽折」が屆いた譯である。（住田祥和氏藏）

御安清御歸奉レ賀候。されば二度の大病よりして蝿のちからもなく、布子重く身のふりがたく、横倉のやうなれども、ぜひなくつむぎの綿入一つ九月貰ひ、今は一つ

にてこゞへ死申候間、つむぎのふとりの羽折ほしく候。平八殿ニ右御咄し可レ被レ下候。金は右から左りにしんじ候。二分ぐらい出ても引込んでもよろしく、一刻もはやく長沼上町酒屋迄御送可レ被レ下候。柏原へ歸れば晝夜巨燵辨慶何にてもよけれど、逗留中と道中駕にすくみ申候。右申上候。當地より宿次にて歸鄕仕候つもりに、上ミ下へたのみおき候。又のたよりとかしく。

十一月十日

江戸へ大馬下り候由、御覽被レ成候哉。

日本のとしをとるのがらくだ哉

宿ニ山寺ニ

寐た下を凩づうん〳〵哉

皮足袋を位ではくや本丁店

かくれ家や尿瓶も添えて衣配

二番寐の枕もとより榾はらひ

埋火やきせるで天窓はりこくり

艸庵

來る人が道つける也門の雪

長沼仕込まだ澤山なれど、年寒くむづかしく。

一茶

文路様

文路宛　文政七年

前記羽折の屆いた禮狀である。のしこし山は信濃方言で男性の「かくしどころ」で、同日の日記にも「陰　時々雪」とあるように、惡路と寒さの爲め文路の見舞ひに來やうとするのを斷つたのである。（久保柳葉氏藏）

十三日の書十五日來り候、羽折御世話、有り難く御陰にて凍へもせず、廿日歸鄕仕候。金二歩差上申候。諸勘定は御申越可レ被レ下候。扨道は沼田になり候て、のしこし山のてつぺん迄泥に埋り候處、御光來は忝奉レ存候得共、先づ御やめ可レ被レ下候、何事も寒くむづかしく。

十一月十九日

敷島の道物騒なりと定九郎出れば是きりにして

一　茶

文路様

春耕宛　文政七年

文政七年の十一月は柏原に在庵して居るので「追々歸郷仕候」の追々が不審である。私の寫し誤りかも知れない。皐鳥は中村氏、春耕方の家人である。『九番日記』にも此の悼句は記してある。（久保田慶祐氏藏）

甚寒く候へども彌御安清奉レ賀候。されば私ら追々歸郷仕候。來陽目出度可レ得ニ尊意一、當時は寒くむづかしく。

十一月廿九日

おらんだ渡大馬

日本のとしをとるのがらくだ哉

脇寄てせきゆさすや門の犬

年尾

このなさや三百八十四かん日

一人前つく迚餅のさはぎ哉

送ニ皐鳥佛一

十万億土よい道連なれど、ちと用あれば迹から

先へ行て下冷へぬ場必よ

かくお添可レ被レ下候。一茶

みさご　文政七年

これは書翰ではないが、江戸の雪水軒井上茶静の發句を一茶の選んだものである。茶静の著『みさご』にある。一茶は柏原に引退して居たので茶静から書通があつて、その返事に添へて此の選句を送つたのであらう。返書を發見し難いのは殘念であるが、選句のかうして摸刻されてあるのを幸ひ凸版としてこゝに挿入した譯である。

梅室宛　文政年中

梅室は櫻井氏、号に素信である。一茶以後に名高くなつた俳人であるが、雪雄の前号な用ゐて居ないから、此の手紙は文政の末江戸に出て來た梅室に送つた年玉の挨拶狀であらう。

十二月十二日御書廿八日拜見、彌御安淸奉レ賀ゆ。さて又金百匹御惠み忝奉レ存ゆ〳〵外、貼小南三は落手仕ゆ。ことしは久しぶりきゝん、めづらしいやらして長沼など大騷ぎなれば出立ゆ而十一月廿二日庵に入ゆに、その時ちいび〳〵天にも雪のきゝん哉　と仕ゆへば腹や立給ひけん、廿七・八・九と大雪、家はみり〳〵心細く、鮓になりはぐり、先目出度かしく。

正月十五日

外ならば梅がとび込む福茶かな

藪垣にやり梅つうひ〳〵かな

歩しま口上いふや衣配

栗餅ももやうに並ぶ莚かな

人つぎや野原の草も若盛り

など丶貴評可レ被レ下候。　一　茶

梅室主人様

夜間瀬四人衆宛　　文政九年

一茶の病氣平癒に就き病中の見舞に對する禮狀である。四人衆とは高井郡夜間瀬の小林邑雲・坂口楚口・中島雲里・柳澤貞淳の四人を稱したのである。（小林銑一郎氏藏）

祝御句忝奉レ存候。いまだ半本復ながら、ほく〳〵まはりて御禮申上度かしく。

八月廿三日

山里やあ丶のかうのと日延盆

思二遠國旅人一

えいやつと來て姨捨の雨見哉

などキ評可レ被レ下候。

高井郡
四人衆様

太笻宛　　文政九年

希杖に托して太笻へ送つた手紙であるが、希杖の家に殘つて居る事を考へると、太笻に逢はずにしまつたのらしい。文中の夢南は一具庵一具の前號である。（湯本五郎治氏藏）

去月は久しぶりにて御花墨ありがたく、さて花國大人は御安全御歸郷被レ成候哉奉レ賀。されば希杖と申人、小人常〳〵御噂申入候湯田中の人、此みちのくに行かけ御菴訪ひ申候樣御風交可レ被レ下候樣奉レ賴上一候。はた小集を御たのみ江戶へ遣し申候所、尊地に御逗留の由、夢南樣へたのみ申候。此趣江戶へ御申越可レ被レ下候。奉レ願上一候。申上度はさま〳〵なれどかしく。

九月十七日

九日 十日雨　十一晴

客好や節句仕直す菊の花
生役やあんな小雀も里かせぎ
雁が茶ものけておいたぞ其岜

などゝキ評レ可レ被レ下候。　一茶

太節様

春耕宛　文政十年

文政十年六月一日の急火で、俳諧寺の灰燼となり、假に燒殘りの土藏住居をしてゐたが、暫らく旅に出るつもりで發足の途中から、高井野の春耕にさし出した手紙である。

御安清奉レ賀候。されば私は丸やけにて是迄參り候。此人田中へ參り候。私參るまで御泊め可レ被レ下候。右申入度かしく。

亥六月十五日

土藏住ひして

やけ土のほかり／＼や蚤さわぐ　一茶

栗 春耕大人

春耕宛

手紙の年代は知れないが、柏原から高井野の春耕に送つたもので、「御書拜見」とあるから返書である事だけは解る。（久保田慶福氏藏）

御書拜見、仰の通秋冷候へども御安清奉レ賀候。されば御病人御心配、是又御大切の御事に候。はた十一月ごろ參上候間御せうち可レ被レ下候かしく。

八月十六日

かくれ家は氣の向た夜が月見哉
古壁やどの穴からも秋の月　一茶

春耕様

呂芳宛

長沼六地藏の經善寺住職で、完芳の子になる呂芳宛の手紙である。文政七年六月の句に「隣でも二番涼みや門の月」といふ句がある。（故東松露香氏藏）

せんたくありがたく、さて御句二ッとも〻甘心仕候。何事もあつく、むつかしく候。

おもしろう汗の流し浴衣哉

寐がけ衆が二番涼みや門の月

六月十三日　など、一茶

ろ芳様

雲士宛

長沼内町の雲士が自然薯を持參して、俳諧寺を訪問した禮手紙であるが、年代は正確に知り得ない。（吉村仙太夫氏藏）

過日ははる〴〵御出御見廻の品ありがたく、又其上に大薯澤山、好物のもの故とろゝ汁を仕候間賞味御禮申上度かしく。

一　しちやう紙二枚、とぢのひら〴〵横帳御書物の間などに紛れ込み候哉、もしあらば春迄御仕廻置可ㇾ被ㇾ下奉ㇾ頼上ㇾ候。

十二月八日

里の子や雪待かねし株角力

雪丸と成りおふすれば捨る也

節季候も三絃にのる都かな

御評被ㇾ下候。　一茶

雲士様

斗圓宛

此の手紙も年代の手掛りがない。「猫の鳴」は「猫の戀」の寫しあやまりであるまいか、それ

とも「猫の妻」か――（一茶翁文通）

いつぞやは得ニ尊意一、ことに御惠み忝奉レ存候。右御禮申入度、萬ゝ來陽に申殘候かしく。

十二月廿五日

あの藪が心がゝりか猫の鳴

案直し候へば御許可レ被レ下候。

斗圓うし　　一茶

素鏡宛

素鏡の母八十八歳の賀に長沼から柏原まで、祝の餅を屆けたので、その禮狀で發句の「米の字形の」に米壽を賀する心持をふくませてゐる。（住田祥村氏藏）

おとゝひははらく〵ありがたく、さればゞ又御賀餅御祝ひ、千代萬代と奉レ賀候かしく。

三月一日

門畠や米の字形りの雪げ水　　一茶

素鏡樣

希杖・其秋宛

手紙の年代は解らないが一茶の晩年であらう。長逗留を謝して、希杖父子に別盃を促した文面である。（湯本五郎治氏藏）

長くありく〵（マヽ）、しかれば此度が長のいとまごひになるかもしれず、今夕ちと小ばやく一盃奉ニ願上一候。

二月廿二日　　一茶

其秋樣
希杖樣

麥士宛

水内郡淺野の文虎亭に泊つて居た時の手紙であらう、文政となつてからの書翰と思ふが年代は知れない。麥士は「隨齋筆紀」に一句出てゐる。

小網酒屋
小林清藏様　　淺野ゟ　一茶

御安清被レ成候や。されば千本松かり給御存知の龍良亭におき候。御序におとり寄せ被レ下度奉レ願上レ候。

八月十九日

むかふずねざぶとなぐりし芒哉　　一茶

麥士様

呂芳宛

柏原から長沼の經善寺に明日行くからといふ

前觸れの手紙である。「今夕忝奉レ存候」とあるから、招れたその夕方醉つて行けなかつた申譯もかねてゐる。（山口久治氏藏）

舌代

今夕忝奉レ存候。しかる所晝酒大酩酊、是より一眠と出かけ候。き様へは明八日御見廻申度候。春甫様へも右御傳聲可レ被レ下候。何事も寒くてむつかしく。

七日　　一茶

呂芳様

卜英宛

宛名の卜英は「たねおろし」で見ると長沼の人である。短冊及び摺物の無心に對して、雪圍ひの爲め家の中が暗くて探されないといふ申譯で面白い。

御安清被レ成候哉奉レ賀。されば短尺・すりなど御入用御

申越被レ成候處、此節入りの一間、雪圍にて日中眞の闇、共と甚だ寒く探しかね候也。二月頃春暖の時迄御待ち被レ下度、其時よく〳〵探し進申度萬〻申上候かしく。

十二月十九日

北陸道

雪車引や屋根から呼る屆狀

年かさをうらやまれたる寒かな

一茶

ト英様

考證

中村氏の『一茶選集』は可好宛の手紙に附けてあるが、それには「二白与惣治様へも」とあるから、全然別個の書翰中、此の分だけが殘存したのであるまいか。『一茶一代全集』には別項に掲げてある。

二白　扨〻長逗留の內、淺からぬ御取計ひ難レ有奉レ存と計り、一と口には申難く、朝な夕な御顏見かけ候得ば行廻り參り候て、耳房に蜂のつきまとふ如く、うるさく思召しやしつらんと奉レ察ながらも、御存知の孤なれば旱魃の魚に等しく、便りに思ふ水も乾きて、取付くべき岩陰さへ持たぬ身の上なるを御仁意の御惠み、誠に雨の草木の生り蘇りたる心地して、又〻世に長らふるも遍へに〳〵、已〻さまの御陰、行末ともに助け給へ。あが佛と陰ながら奉レ存候。御禮といふも人めかしく奉レ存候得共、只やみなんも本意なく露ばかり申上度、今夜旅立たるゝ荷拵への中なれど、方隅の灯かげによりてしたゝめ候得ば、吃の舌の分り兼ねべく許し給へ。かしこ。

考證

此の手紙は難船の水主をあはれんだ文章をしたゝめ、人に報じたのであるが、『七番日記』の文化八年十二月廿四日「夜酉刻布佐ノ洲ニテ

布川義右衛門舟破」とあるのとも相違するの
で、後日の考證による事としよう。

夫廿四日、不二おろしに檜垣一艘、直に海底の藻屑とはなれりけり。あはれ舟人のこゝろ、活て主人に面會せんよりともに身を沈めてと思ふべきに、さりとて、白灰のふたゝび木に歸らず、雜物の(金)黄金になるてふ術もなく、只十方眼くらみて、天を仰ぎ地に伏して岩の染るまで泣さけぶ。さてしも果ぬ世の中にしあればと想窮、とまれ角まれ、一度いのちまたくして、古郷の妻子に逢はまほしく、潮たれ衣しぼりて辛き玉の緒は切(マヽ)し侍る。きのふは嵐に力を得て悦び、けふは嵐に財を失ふてかなしむ。万事あぢきなき此世なりけり。

としとるもわかれ〳〵やしらぬ旅

廿八日、百首より浦賀に渡る。破船の品〳〵浮びたゞよふに、われも人もみな念佛して、

霜あらし誰罪作る流れ樽

など〻思ひ出るまゝにかいつけてしんじㇹ。御高覧の上は火中奉レ希ㇹ。

不昧禪師　一茶

たびしうね

一茶著作集（一）

一茶房亞堂の大人は、過ぬるころ東を首途してゆ、玉鉾の道もはろ／＼なる心筑紫の巷に吟ひ、ことし六とせぶりとや、此地に足を止むる折から、こゝだく拾ひ集たるくさ／＼、呑魚の禍あらんを歎き、梓に鏤んと予が端作りを乞るゝに、いな船のいなみがたきてふも古めかしく、とみに開巻して倩見るに、おかしみさびしみのことの葉さはなれり。こや昔宇治亞相の日記もおもほしいづるまゝに、禿たる筆を染て旅拾遺となづくるものは、河内國古市里みのゝ辻の一葉なりけらし。

寛政七卯のとし秋

たびしうゐ

俳諧之連歌

天廣く地ひろく秋もゆく秋ぞ　一茶房 亞堂
人おのづから胸の有明　孚舟
北あらし百日うたふ臼すへて　升六
追へばはら／＼家雞の二番子　仙所
下毛の花まだ殘る暮がてに　井眉
無事をとゞくる又傳手の狀　蘭戸

ウ

何するもたのみは眼鏡一ッにて　莵江
しぐるゝ窓に消炭を吹　六
土器の味噌に事足るしづかさは　舟
鼻つまむのもしれぬくら闇　眉
約束の琴は狐火かきならし　所
所も爰はいなのさゝ原　江
朝の月露なきものゝあらばこそ　戸
後鬼も角折此ごろの秋　舟
牛賭のすまひに牛を棒にふる　六
噓すれば淡雪の散る　所
たわし根の花にいくらの節ひきて　眉

檜一本に三代の春　戸
二
碁月の佛事に布を織おろし　江
嫁入すゝめる邪に泣く　六
戀死ナば敵うらみん魂ぞとも　舟
あはれ(旦)泪羅の霜の明暮　眉
骨柴の骨にこたふる斧うちて　所
酒泥房とよし云はゞいへ　江
ざは〳〵と御輿の迹の人崩れ　戸
舟にせり込ム橋本の月　舟
錢なくて懷寒き秋なれや　六
豆腐漉たる縄竿の絹　所
颸追ふ瓢に暮の風聞て　眉
くわらりと覺る本來の夢　戸
二ウ
傾城に數の家藏賣はたし　江
戀は曲もの今もむかしも　六
調布の臼にはおしきふしはかせ　舟
小石〳〵の水むせぶ也　眉
東雲の花にしばなく山鴉　所

きさらぎ半三月の來る　筆

○

梅が香によい夢見よと枕哉　和仭可翠

推敲亭に越のたよりをきく

しら〳〵と嘘つく秋の寒哉　壺仙
雨はきのふにふり替る露　共成
月見すと竹分登ル客引て　石蘭
笙もちとなる宮童也　北花
綾衣の袂の鈴にあらし吹　斗醉
夏來にけらしいつく島山　ア堂
右表六唫

句〻任順道

やぶ入や一夜ははせの堂ごもり　東肥八代文曉

暮てゆく秋や木末の切かづら、化仙
垣津旗池の深きぞ恨みなる、柿青
雪晴て空に万家のけぶり哉、孤鴻
村中へ水はわかれて燕子花、遊虎
しゞみとり青砥が昔おもふ哉、埜梅
川ばたや人待ひとの日傘、万李
山寺やはや瀬にうつる高燈籠、芦石
雛鶏の口嘴當る木芽哉　仝　支硯
喰かけて摘に出たり青山椒　仝　竹路
里ありや遠山越の几巾　仝片志田　桂雪
登りくだり終に家根越ス小てふ哉　仝甲佐　素羅
朝雨や土を離るゝ瓜のつる　仝　夢月
あさ顔に箒目の水さやか也　クマ　之謙

、

青きものするどし秋の日かげ山　仝熊本　綺石
我ながら花野にみだれごゝろ哉　輕舟
風ありて薄に膝をくむ日哉　仝　普行
秋の夜や何思ひ出て猫の妻　仝　潭月

、

すな原や何所にかくれて虫の聲　仝　箕溪
長き夜や舍人が聲の更のころ　仝　飲露
人聲や小闇きかたも夏の月　仝　龜令
御しのびの客四五人や朧月　仝　里周

、

北山や夕がすみより雪の散る　防州山口　天民
かはほりや奥竹しげく里烟る　長島舟木　波月
雪の日や窓に人待わたし守　仝　梅月
岸の藤吹ばぞ花はうごくなる　防島一ハ　春郷
つく／＼と朝の亘燵の四すみ哉　仝雄島　羽琴
夕涼み笛吹のほるみねの寺　仝　琴那
いく日見る藪の椿のひとつ哉　仝下津令　明良
秋の夜や琴の音に来る松の風　仝山口　鴉跡
豊の明すが／＼し雪のかゝる哉　仝　霞衣

、

須磨の月あわぢへ通ふ雁も哉　赤間關　羅風
冬木立人影ほそくうごきけり、文川

魂火の落かゝりけり枯尾花　　、左定
白萩の亂れかゝるや宵月夜　　、水城
砧止て誠をきくや遠ぎぬた　　、左右樹
埋火と我のみ更る雨夜哉　　、梅麗
やどり木に世を空蟬のひとつ哉　　、里山
憎からぬ雨や御秡(祓)の人走る　　、薫里

、

谷むらのおくとはしとにきぬた哉　　豐コクラ 夏夕
日あらしや秋を定る水の上　　、南明
小男鹿の雲に見返る朝日哉　　筑前 眞人
大原や花にゆきゝの中むすび　　仝 此原
雪の日や障子の内の蝶ぐもり　　仝 君花
雪の日や大佛の手のむら雀　　仝 蝶醉

、

糸竹は名利の人の月見哉　　豐後 菊男
板壁の木の丸どのや蚯蚓なく　　仝 蝸若
しら萩や重る上の薄月夜　　仝 此柱
日すがらの雨にも終に木槿哉　　仝 青容

名月の見所にせん天王寺　　仝 馬篤
春かぜや燈あをつ夜の市　　仝 英丸
春ひとり淋しく咲ぬ白椿　　仝 我卜
こがらしや月は眞上のよしの山　　備後 柳紫
腰かけて水をふみ／＼凉み哉　　、春牛
櫻みな日本魂もて咲ぬ　　、西湖
末つむや主は二十ばかり也　　、何人
白ぼたん咲て綿ぬく世也けり　　、一壺
夕顔や小家がちなる垣に咲　　、柏女
鷹狩や凡一里の笄役　　仝 蘭秀
火を借し庵ははるかよ山櫻　　讃岐 楠五
汁鍋に早乙女が笠のしづく哉　　仝
莚にはむしろ連也けふの月　　仝
一日はたづねて暮す頭巾哉　　仝
鶯に開そめたりよしの道　　仝 操舟
白張の屏風目に立夜寒哉　　与丹岐 巵
やせ麥や雪より上の小一寸　　仝 梅里
はつ雪や朝山人のふところ手　　仝 百弄

うめ咲くや平埜へあまる願ほどき　仝　馬亮
梅さくや峰の白雲荷にならず　仝　周胤
星と共に四五輪曙のさくら哉　仝　橋平
人來ぬ日我に友ふる櫻哉　仝　千蠶
雉子鳴やわか菜に行し蝿手道　仝　騎竜
附木さく間に火や消て鹿の聲　仝　時風
寐ごゝろや春も十日の夜の雨　仝　卯七
山鳥の鳴かくれけりつゝじ山　仝　蔦輔
宿かれば桃さくらあり藪の家　仝　魚天
見にもどる尼が本家のぼたん哉　仝　花雀
蹈干男立けり初あらし　仝　春臺
夕涼ミ加茂河の水に任せたり　仝　兎文
下京や物音盡て遠ぎぬた　仝　圃夕

、

大かたは散そめて花のさかり哉　仝　桴堂
春の月枯木の上にさしのぼる　仝　素交
猿引のさらでもよきを美男哉　仝　麥士

、

秋風や糊こはき衣の肌ざはり　仝　魚文
薄がすみ花の咲く木は何〳〵ぞ　仝　宇好

、

それなりに出てうかれけり春の月　仝　方十
鉢蔵枯木に音のある夜哉　仝　雪堂

書譜

松原や白帆に見越ス春の風　雪堂子の息十二歳　有道
雪の日や骨ばかりなる辻の堂　備後　縄流
水底に大根ころげる寒哉　仝　李朝
冬籠ならびて寐たりつくし琴　仝　李山
見るうちに雪添ふ土堤の柳哉　播　布舟
春風や糸竹聞ゆみねの房　、　鳥栗
みがくれに山吹黄也片折戸　、　五栗
この比や一重ざくらの薄月夜　、　歸木
あざやかにむくげ花咲く旦哉　、　五艸

、

荻もけふよくたはゝせり浦の雪　藝　東吹
浦島が箱明がたやきり〳〵す　、　五鹿

梅がゝや見る人〳〵のこゝろ程、六合
、
子に借して出ぬ日もあらん傀儡師、可友
水仙や男ばかりの一すまひ、丈巴
傾城の我菴といふ巨燵かな、瓜道
馬も耳すぼめてむすぶ清水哉、亀兒
、
白き花にしろき虫とぶ四月哉、堺 風講堂 喜齊
おぼつかな清水がもとの心太、加山
老梅やうぐひすはもふ何代目、雙五
名もしらぬ中這まとふ夏野哉、如冠
なら柴に菫なしたり風の藤、青忽
秋雨や行燈巡るひとり虫、亀兮
寺〳〵は淋しさくらの實のり哉、白辰
雪どけや櫻仁介が小屋構、布冠
鶯も夏來て老の茶に聞かれ、柳支
炉塞や嘶さげ釘の打所、藤士
紗つりや錄（祿）盗人の小編がさ、荷風

寒菊のおのれとせまる師走哉、爲桑
年の暮嫁かつき柴もとむべし、をとめ
わか竹の行衛も日〻にまさりけり、舟可
宗因の蛸なあがりそ藤の花、羽觴
ものおもふ眉の上より花曇り、鳳渚
、
ひつた〳〵木葉時雨てしぐれ哉、仝 芦月堂 矩流
鳩吹くや家より高き栗畑、器水
我宿は月に預てつき見かな、一朝
月出て河音高し五月雨、白騎
玉水の音止ば虫の聲しきる、五立
艸の戸を明れば遠し虫の聲、五明
みさゝぎやひそかに紅葉松かしは、弓六
蚊やり盡て月は眞上にある夜哉、蔓友
雉子鳴や日和の替る溫泉の匂ひ、鬬鳥
柴の戸を出て見る蔦の紅葉哉、柏雅
植付て月にあてがふ田毎かな、五井

此地向泉寺に詣たびまつりて

かたゝがひ幸あり武庫の郭公　　雲水 一茶

、

晝はまだひる顔咲ぬ秋の風　　浪花 升六
沸かみて僧かへる也冬の月　　、全
菜の虫の化してとびゆく日和哉　　、孚舟
暮いそぐ僧を埜上の花すゝき　　、仙虎
晝顔やつるを探ればひる寐塚　　、蒐江
みの虫の鳴き初る夜や盆の月　　、共徳
橋〳〵や水の五月のちから石　　、蕉里
あきかぜや心のとゞく所まで　　、雅席
七十の蜻蛉釣あり藥畠　　、雨來
髮賣し貧女が軒や秋の月　　、盛雅
秋立や小魚あつまる岸の蓼　　、栢後
名月やおもはず明てかねの聲　　、東波
灰汁桶もかれて散込ゝ柳哉　　、可策

靜坐

雨窓を打て吾に月ある今宵哉　　、井眉

題四方出戈

うらゝかやこがね花咲海の果　　、丁江
雅(すた)子の脊に眠るやもゝの花　　初丸

、

谷水に鶯の影うつりけり　　、二柳
名人の場もうちこして春の月　　、旧國
畑おとこ茶花に飯を焦しけり　　、八千坊

、

菊の虫妹に取らせて夕涼み　　尾之道 若翁
鶯の二羽來てうめの古さ哉　　赤間關 花縣
鉢敲我門たゝく夜明かな　　雲水 北花
夕顔や首ばかりよき小傾城　　河内 蟄ゝ
山畠やしるても延ぬ艸尾花　　、
明はなつ朝寐の幗にとんぼ哉　　、艸子
浦風の琴に通ひて夜寒哉　　、
秋雨や大闕どのゝ大鼾　　、市六
蚕の子も囀りて雀をどり哉　　、

、

一株は刈のこされて花すゝき　　、雨掌

一もじの白みをみがく月夜哉　、
風炉手前北窓に心轉じたり　、靜嘉
瓦山へのつと出てけりまよひ鹿　、
短夜や孝女糸とる窓の月　、好ゝ
老僧の門敲るゝ夜寒哉　、
菊黄ぎく氣まゝに咲り小六月　、鯉麥
見返れば我影わかき頭巾哉　、
眞うしろにつりがね一ッ閑古鳥　、一葉
雷は北に鳴る哉落し水　、
大寺や晝の藪蚊の巡る聲　、久一
舟引の影凊る見ゆ花すゝき　、
靑ものゝ市に色なし暮の秋　、如柳
僧正の御手づからなる柚みそ哉　、
水際の日ゝ遠し中の花　、不亂
雨風や裸足の美人柿拾ふ　、
摘度に我にうつるや紅の花　、春木
朝霜や門に手を吹く清茶賣　、
柴の戸に亂れて殘る黄菊哉　、壺鈌

煤はきや老は出てゆく朝茶湯　、
鰒汁に我いろ〱のおもひ哉　、東耆
聲は風に吹へだてけり寒苦鳥　、
春雨や水の濁に蟹こける　、我笑
溪河の落栗を待小猿哉　、

花見んと年ごとまかりけるに、ことしや我遲かりければ、木末は櫻の迹かたもなし。しかはあれど花は盛をのみ見るものかはと、名だゝる名所の靑葉も物なつかしく

一春は山見てもどるよし野哉　、登舸
水垢の匂ひや殘るつるべ繩　、
重たげに白露ふるふ眞萩哉　、
橋の雪無官の坐頭うづくまる　、一葉妻
春雨の晴間しのぶやみのゝ辻　、時女
ぬぎ捨しわらじになくや蚤　、
鴨の聲さむき水茶の旭哉　、一歌
寒聲や右ッの湖は鳥の聲　、
朝霧に鳥の羽ふるふ木間哉　、南岡

年忘無藝小すみに眠りけり　　爾　堂

、

冬がれや獨かたぶく石燈籠　　西宮　其　跡
澁柹や木は其まゝの山畠　　梅　船
片敷し扇つめたし秋の雨　　兵庫　春　更
寐てきくも世の有さまや落水　　、柳　夫
大寺や人もさはらぬ梅もどき　　、來　屯
子をほめる鵜匠が闇のこゝろ哉　　、米　堂
身にこたふ水から臼や秋の風　　、之　園
玉ほこの道うるはし・や金剛艸　　、魯　夫
雲にして先買ふておけ花の山　　、敏　馬
島守もさては妻あり小夜礎　　、渡　鴻
秋立や星とぶかたに水の音　　、夏　雄
篩燒人は老けりくじら突　　、秋　卜
山里はあけほの遲し鹿の聲　　、葉　司
君があたり雲深き夜や時鳥　　イ銀セ　佾
竹賫の篁過て露寒し　　水口貫　志
白菊にしばし滿たる旭哉　　ヒ洪ノ竹

○

わか竹やふかき隱者の表藪　　京　都　雀
寒梅や晝は流るゝむもれ水　　紫　曉
いなづまの根のなき空や夏の月　　月　居
冬の月池見る人もなかりけり　　花　月
水底にしづむがどし冬の月　　其　成

芭蕉堂之會　　闌　更

月うつる我顏過ぬほとゝぎす
風こゝちよき入梅晴の道　　亞　堂
わら薄く土器燒が軒垂て　　白　黛
思ひよらざる竿の細ぬの　　百　爾
朝まだき小闇きまゝに霜滿る　　芦　翁
楠伐たをす山とゞろ也　　月　峰
頭に青砥獨はあぐらして　　堂
舞の袂を亂るともし火　　更
松風の中に祭のおこなはれ　　芦　涯
鯛なき波の西あかき空　　黛

マタロスが古郷を泣く明がたに　堂
　淋しく裂て柘榴こぼるゝ　黛
秋時雨月のかさぎの連哥堂　堂
　はた〱飛て髭匂ふ也　黛
鶺借れば鶺の残暑のたゞならね　堂
　鳥井峠は諏訪による名か　黛
門口の花に煙ルは燒うなぎ　堂
　二月は俗にありし人の世　黛

二

戀衣春の御秡にぬれ初て　涯
　夕とゞろきは我を待らん　得終
呉竹の窓のさゝがに風吹けば　堂
　居合刀のしづかならざる　更
母親の給仕おそるゝ八ッさがり　繡虎
　死ナでもどりし舟のともづな　涯
藥にもならぬ防風のひよろ〱と　終
　盆山によき石起し見る　爾
曲縁なき人のゆづりし古屋敷　涯
　國三良が年忌つとむる　芦
明からぬ月に燈ならべ添へ　更
　車止メし犬かひの秋　涯

ナウ

家つとの紅葉ゞ折らんとばかりに　芦
　女翁の酒さめぬ顔　更
夜を込て疊一朱三の亂聲　堂
　橋を過れば鶏の羽たゝく　虎
岫に入る雲しづかなる花見へて　涯
　なへは天氣になりすます春　隼

○

こきまぜて鳶も鳥も花野哉　重厚
何にせん錢一からげ冬ごもり　丈左
花と咲く秋も小帥にかゝる哉　玉屑
眞先にさくや埜鍛治(西)が軒の梅 和名サクラ井　吐雲
松原に取りつくまでの扇哉　、
杵哥のとなりは止みぬきり〱す　、
雪の日や柴の乏しき柚が家　、
一木にて事足庭の櫻哉　里川
無言にて盃さしぬ時鳥　、

硯屛に筆休めけり雁の聲　、

墨染の袖より落る霞かな　、

いふまゝに黑木買けり梅の花　、馬阜

葛城や松あらはるゝ秋の暮　、

春雨や机にさむる晝の夢　ミ　和ハ山

行秋や時雨をふくむ峰の雲　、

雛の內裡酒の狂人御覧ある　出　鹿合來

もの洗ふ女立けり夏の月　、

山路來て楽山子を里のたより哉　高　紅田園

銀屛に夕榮あまるぼたん哉　、五柳

よしのゝ山にて建武の昔をおもふ

つはものゝ燒殘したる櫻哉　百　如雲水

ほと〱と芭蕉を敲く雨夜哉　有芳

虹立やしぐれの跡の三笠山　笛　夢堂半

凩ややぶは外よりあまる音　郡　素山洲

我に増りし友や一ッの桐火桶　法　魯隆寺衡

當所なき月にさゝぐる小芋哉　、

染たりな木ゝの梢は藍媚茶　素雀

狂哥一首

竹の子のかは迠拾ふ世中に

身を捨る藪がなんのあらふぞ　良　烏福寺橋

佛にもならず冬木の櫻哉　彥　繡城虎

朝起や鹿呼でゆく宮大工　江　ノヘ庵

鹿寒くふるや萑の窓の露　帯　江臺

菊の香やあすは十日の雨もよひ　浪　寄花淵

花寺におのが日はなきさかり哉　、蘭戸

冬川や白浪荒く立あがる　逢　江坂艸

山里やとなりを起スはるの雨　河　吐內園

一畝町麥蒔のこす時雨哉　、

鰒洗ふ心の水のにごり哉　ナ　夏ニハ江

夜は明ぬ端居の扇白きより　タ　佛イコ大

火を焚てゆふべ忘るゝや五月雨　寺　南田和

川床やすはり定て月すゞし　仝　良水

蓮の香の堤を越る夕ゞ哉　ヤ　斗ハタ流

風に落て水の玉ゆくほたる哉　仝　古律

雉子なくや鼻つき合す原の駒　京　桃李

小渡しの舟に風もつ日傘哉　、
新らしき嘘と成けり夷講　芦涯
雲の氣色どこぞに夏の始哉　玄華
東武よりせうそこの種〻
花むくげ小町乞食の小屋いづこ　素丸
摘ほどはなぐさみ蒔の若菜哉　石漱
夕顔やほの〴〵見ゆる相の宿　元夢
おなじく
遲ざくらおそしと花に逢日哉　完來
凩に吹出されてきり〴〵す　成美
二三町松原過て花野哉　風化
浪華に足を留ムアリ東に赴クアリ、共に是雲水
羅の薄きぞ旅のかねてより　尺艾
身は涼風に任せぬる月　一茶
湖に天つむら鴈かけ落て　東波
莚につたふ陶の露　雨來

なぐさみにしころを敲く泊客　爾掌
都馴しを手がら兒なる　鯉麥
寒梅も添へて配るいせごよみ　好ゝ
やゝ春近く駒もいなゝく　雅笑
帘しかすが富る古家に　東耆
選ミ當たる嫁はものかは　壺缺
さゝやきの果は棲違に月くらく　一葉
（榮）
黄壁山の雨のもみぢ葉　登舸
韮漬來たり古郷の初だより　春木
無我につどへる剛毅木訥　靜嘉
陽炎のあはき棺や埋むらん　久一
ほろ〳〵雉も曇る夕ヾに　如柳
共ゆふべ花の吹雪の笠に來て　盛雅
衣にしのべる官人の大刀（太）　葉司
内くもり瀧てふ水のさゝら波　夏雄
宮ちいさくも浦の名をよぶ　春更
松一木新羅の昔とゞめたり　柳夫
總角も共にうたふ詩　來屯
濃髭やすゞりの海にひたるらん　禮王

七野を巡る白雨の雲　秋卜
ものおもふ身を難面も蚊のせゝる　米堂
待夜のふすま潛るともし火　敏馬
此鄕に長と見へたる棟造り　一貫
津浪の人に藥ほどこす　春魯
さいはいは空にも光ル三日の月　其跡
虫の戾に萩や手折る　梅船
賤が秋さはつて通る風も吹　雅席
笆をもるゝ妹がそぎ袖　之園
言よらん鞠相鹿せし文使　魯夫
夕日ちら〳〵雨後の二月　初丸
咲ば匂ひにほへば花の世にみちて　栢後
東西南北正風の春　執筆

（一枚闕丁）

梅がゝの里にあまりて月夜かな　福原ひとつ
柳より起るあらしや野ゝ庵、　一貫

夏吟

ちる芥子を寒くながむる聖哉　和州今井濮水

冬景

こがらしや岡の木白き鳥の糞、　菊裡
われた笛吹がごくよ寒念佛、　八日坊
雪の山簾を卷ば暮近し　ひぜんの人汶江

冬夏二句

吉野山冬來れば冬の花見哉　むさしの、亞堂
鹿かのこ待て打くれん發句屑、
燈のきへなんとして秋の風　三ノ宮春魯
山ざくら夜は狼の聲す也　イガ上野一青

餞別唫

六月も見送る心は寒き哉　相州素栢
早乙女の藪にほしたる脚半哉、　杷柳
後は何所へ迯ん土用の朝曇　伊豆松十
蕣は踏な綱引のうしろ足　江戸紗言
売蠣も音をや鳴らん芦の雨　ナゴヤ士朗

元日

して出たよ春の旦の物もらひ　江州可能

京三條通寺町西ゑ入ル
蕉門俳諧書林　菊舍太兵衞

我春集

一茶著作集（二）

發會序

昔〳〵淸き泉のむく〳〵と湧出る別莊をもちたるものありけり。たやすく人の汲みほさんをおそれて、井筒の廻りに覆におほひを作て、倩年をへたりける程に、いつしか垣もくち水もわろくなりて、茨・おどろおのがさま〴〵にしげりあひ、蛭・孑孑ところ得兒におどりつゝ、ついに人しらぬ野中のむもれ井とぞなれりける。此道こゝろざすも又さの通り、より〳〵魂の蹼を洗ひ、つとめて心の古みを汲みほさゞれば、彼腐れ俳諧となりて、果は犬さへも喰らはずなりぬべき。されどおのれが水の嗅(臭)きはしらで、世をうらみ人をそしりて、ゆく〳〵理屈地獄のくるしびまぬかれざらんとす。さるをなげきて籠山の聖人、手かしこく此俳幗をいとなみ、日夜そこにこぞりておの〳〵練出せる句〳〵の決斷所とす。春の始より入來る人〳〵相かまへて、其場のがれの正月こと葉など必のたまふまじきもの也。

文化七年十二月　日

しなのゝ國乞食首領　一茶書

着到帳　第一番

我春も上々吉ぞ梅の花　一茶

去十二月廿三日

行としや空の靑さに守谷迄　同

寒が入やら松の折れ口　鶴老

鶯が赤みそ汁を鳴やらん　同

鐺ひねくつて遊ぶ陽炎　茶

有明はことにおぼろと申也　天外

玉子賣る迚植る柿の木　老

急ぎゆ西に見ゆるは善光寺　茶

六月寒きけさのむら雨　外

時鳥蚤の迹まで奇妙也　老

夢の通りに小宮作りて　茶

拾ふものあらばと櫛を流すらん　外

無分別なる雁の來所　老

名月の少すじかふ家を建　茶
　貫之始メ蓼にむせつゝ　外
かりそめに吹てのけたる蝶の貝　老
　東かさいの春は來にけり　茶
花曇り心任せの筏さし　外
　蝶に別てもどる猿引　老

ナオ
灯の珍らしくなる夕枕　茶
　鎧手向るかまくらの方　外
松風の吹起したる雪踏て　老
　妹が山茶花盛り也けり　茶
籥入の泪ぐむ程なぶるらん　外
　畏を解てももどす獺　老
凉しさや赤い鳥居に月さして　茶
　遊行の植し合歡しげりつゝ　外
小三太ははや十三の小脇差　老
　美濃の德意に任す行灯　茶
どや〳〵と閏師走も中過　外
　梨買に出る空也寺が妻　老

ナウ
風になびく朝茶けぶりと唱へ捨　茶
　舟の日記の多き吉日　老
みちのくの錢一〆に身を賣て　茶
　兒つきあはす兄弟の春　外
花の旦花の夕にとしよらん　老
　大悲大慈の初がすみ哉　茶

一茶十三句　鶴老十三、　天外十、

走り行名なら形なら磯千鳥　天外
　あらし木がらし赤き夕空　鶴老
五六年藁の小家に伏くれて　外
　鼠のわらふ秋のはじまり　老
月さゝば楓の陰も匂ふらん　外
　痞の晴るゝ露の先ぶり　老

ウ
長池の堤おりれば豐後橋　外
　鵆の眞似する鳥の侘しき　老
凉しさに烏帽子召せる御姿　外

樗を送る宵の別路　老
思ふ事百年へても哀にて　外
南无阿彌陀佛木曾の棧　老
一概に寒う成り行三ケの月　外
目をつくばかりさはぐ蜻蛉　老
鍋かりて蜆打込む秋しぐれ　外
花の序に砂をいたゞく　老
門守が寢言にかすみ引はりて　一茶
釣瓶おとしの春の鳫金　外

ナオ

藍染の匂ひを笹に押かくし　老
瘤取る鬼を祭る赤飯　茶
朽かゝる廊下を風の吹ぬけて　外
三里の灸にむせる實方　老
澁柿の花にせかるゝ普門品　茶
けふも暮行甲斐が根の空　外
湖の端に小村のかたまりて　老
五文の酒に爺が舞ふぞよ　茶
子共等は陸（ウツツキ）神を送るらん　外
鶉の逃しけさがたの夢　老
名月の俵に萩をつゝさして　茶
霧にぬれたる山形の客　外

ナウ

どや／＼と舟より上る栗丸太　老
十里四方の見ゆる瓶風呂　茶
給りし替地は花の咲にけり　外
祭りは過し人丸の宮　老
石なこの玉の朝から長閑にて　茶
よこ町曲る鳥おひが唄　外

天外　十五句　鶴老　十四句　一茶　七、

帥臥したねや時雨の筑ば山　老
我國の口をおがむ冬枯　外
白梅に月の遊ひ工夫して　老
霞のかたへ放すしの弓　外
さればこそ勇立たる福わかし　老
雀は踊るうぐひすはなく　外

ウ
春風のはつせの繩を引はらせ　老
上手にならす晝飯の貝　外
うき人は山のむかふにありと聞　老
芥子の曇りに袂ぬらして　外
秋もはや月のしらける海士が家　老
世にあまされし蚌の聲　外
幻の枯校(蓮)刈かや糸すゝき　老
式部が日とて雨はふりきぬ　外
へら鷺に門のけしきを作りけり　老
腹一ぱいに寢タルはつ春　茶
花守が乙子の髻見はやして　外
淺黄にかすむ夜の大原　老
選集をしまへば崩す小家也　茶
ナ
酒ふるまふてゆづる鷄　外
裸身ですむべきものよ神輿かき　老
辻の夜店のつゝじ紫陽花　茶
月のさすよ所の蚊いぶしうらやみて　外
御油の遊女のくや〳〵と寢る　老
・若乞食適皷ならしけり　茶
世界の花を我ものにして　老
暖に小判ならぶる會津盆　茶
寄合町の春の夕暮　外
鶯のとしも四十を越シぬらん　老
筆一本でたてし家藏　茶
ナウ
頼朝の御成がすみて閑也　外
土人形を作る朔日　老
砂除の枳殼藪も名所にて　茶
稻妻こぼす山本の雲　外
月くらき舟幽靈にもの着せん　聲(老カ)
露心あれ吹く女郎花　茶
老十五、(句)　外十三、　茶八、

文化八年　正月一日

初空や不二の埃のたゝぬうち　鶴老
はつ空や是にもほしき時鳥

草庵

節穴や我初空もうつくしき　一茶
鶯や梅や無我には暮されず　天外
梅の地にして置く五間四方哉　〻
万歳の丈の高さよ梅花　鶴老
ひよ鳥の拾ふて行やんめの花　〻
米搗や臼に腰かけ梅の花　一茶
蓬萊に南無〳〵といふ子供哉　〻

其引

ひよ鳥のひろふて行や梅花　鶴老
窓蓋上げて晝ごろの春　一茶
夫婦が桶の輪を組陽炎に　天外
あらけたゝまし酢賣酒賣　老
けふの月五尺の稻のざはつきて　茶
追るゝ鹿のよくおよぐ也　外
ウ
傘好が莚の切と寝ても見ん　老

雹(霰)來よ〳〵山の連哥日　茶
大かたは武藏さがみの人〳〵よ　老
身は傾城の今の夕暮　茶
風呂敷に恨十程書ちらし　老
蚤をはき込むせどの湖　茶
名月の迹へ〳〵と立まはり　老
黒蒟蒻をくるむ穗芒　茶
白露にをどりの輿やさますらん　老
ぞろ〳〵舟を上る加賀衆　茶
我顏を花の木間にさし出して　老
うき世は彌生三日也けり　茶
夜をこめて一坂越る瀬田蜆　〻
初郭公聲をおしむな　老
大雨に小野小町をおがむ也　茶
魚屋の息子の茨刈行　老
松柏姿御殿のありさまや　茶
佛の鐘も戀くさにして　外
一時に蟬の小川へ這入る也　老

餅も降レかし卅日の空　茶
灯をいくらも付る假住居　外
桐のひろ葉に露奉る　老
三ケ月にたとへられたる御運にて　茶
黒髪山の遠く冷つく　外
ナウ　むら雨にふり殘されし中の庵　老
此子たのむぞ又六が舟　茶
奉行所の使せわしくさゝやきて　外
鶴にをさるゝ如月の雲　老
波際の花表も花の咲やうに　茶
菫の上へ配る重箱　外

老十四　茶十五　外七

其三

鶯や梅や無我には暮されず　天外
見よ世中は皆菫也　一茶
春の月餉壺よりも哀にて　鶴老
十町ばかり馬におくるゝ　外

麻の葉のさつとぬれたる凉しさに　茶
粽のやうな家の灯　老
ウ　かづらきの鐘に泪のかゝる哉　茶
哥に詠れてつらき初雪　老
上張の上に荒繩引〆て　茶
村にほしがる那須のしの原　老
相應にほまちの蕎麥も咲にけり　茶
山のあちらへ消る三ケ月　老
初鴈に湯守が兒のきよんとして　茶
あら閙しき鉦の打やう　老
散花のそれさへいとふ御枕　茶
文書く隙も不二川の春　老
乙松が獨活のあえものかい摑み　茶
袋の紐のきれし朔日　老
ナ　間丸が門から見ゆる男山　茶
鳶にとらする鮒の膓　老
芍藥のかほそきうちを樂みて　外
朝な〱に直ス閨の圖　茶

うき人の影さへさゝぬ空の色　老
仇塩からきいせの喰物　外
松の木にくだらぬ發句ぶらさげて　茶
百になる迄灸きらひ也　老
さればこそ明ひろげたる無常門　外
道灌殿のめで給ふ月　茶
刈萱と桔梗とすまふ始たり　老
柱なでゝも秋は行らん　外
ナウ
古郷の片兀山を夢に見て　茶
時に范蠡飯を焚けり　老
板の間の廣サ千疊ばかり哉　外
兄方に當る花の刀禰川　茶
鶯姫も丸一日は鳴かぬ也　老
山鳥の尾に霞引する　外
天外八、一茶十四、鶴老十四、

七日會

鶯の聲をかぎりの枕かな　竹里
鶯の親子仕へる梅花　一茶
〱大聲や廿日過ての御万ざい　、
初空を今拵へるけぶり哉　、

貞外

黄鳥の聲をかぎりの枕哉　竹里
菊苗伏せて十日日の露　一茶
中餅の臼の中より月出て　鶴老
さし來る汐に舟廻す也　天外
里人よいづれの山が涼みよい　茶
榎の下に膳を並べる　里
ウ
ひた〱とよみ終タル提婆品　外
摩耶が高根に雨がふる迚　老
懐は三文程の寒さ也　里
巾をかぶせてかくす行灯　茶
上紺に染通したる戀なれや　老
盆の跡の足揃へする　外

宵の月杵を里の名に呼て　茶
稲の匂ひの門に吹き込　里
弟は天神様へ走る也　外
雪でつくりし淡路島山　老
如月や朔日ごろの花の空　里
蛤やけば旅のありさま　茶
ナ
陽炎に倒るゝ程の家かりて　老
文治五年の夢ばかり見る　外
黒髪を菖蒲に添ておくりけり　茶
入梅晴るゝ市人の聲　里
大鍋に馬の喰もの拵へて　外
垣の外から盗む鶏　老
木がらしに尻を居へたる葛西舟　里
御八日講に参る夕月　茶
嘘に紛らかしても露寒く　老
秋の流の藍瓶に入　里
童が照り〱法師いとなみて　東陽
尾張なごやも神無月哉　外
ウ
寒菊や今も隷のかゝる也　茶
爺が命をつなぐ水飴　老
春雨は平野の方へ降去て　里
車の御簾に運ぶ雉の音　陽
遍昭が花もはら〱咲くならん　外
みそすりかけて箱根越す也　茶

九日夜探題

けろりくわんとして烏と柳哉　一茶
下總へ一すじかゝる柳かな　、
柳さし〱ては念佛哉　、
番町や夕飯過の凧巾　、
今やうの凧の上りし山家哉　、

十日會

初空へさし出す獅子のあたま哉　一茶
あざら井や猫と杓子と梅花　、
うす壁やどちの穴から春が來る　、

辻諷ひ凧も上ッて居りにけり　、

相馬京舊懷

梅さくや平親王の御月夜　、

三ケ月やふはりと梅に鶯が　、

鶯の鳴てをりけりひとつ釜　、

狂歌

手をそらし〳〵つゝいけ花の
はなの身ぶりを仕る哉　、

正月や子供らがする團十郎　天外

片かげや這入ば直に梅の花　鶴老

蓬萊や親ありし時の朝げしき　素淳

何せうとまゝぞ朧の丸一夜　東陽

竃獅子や大口明て梅の花　一茶

正月廿九日於本行寺會

陽炎や道灌どのゝ物見塚　一茶

茶の花と知りつゝ呑や釣瓶から　一瓢

むつましや生れ替らば野べの蝶　一茶

辛崎や田も打上て夜の雨　、

あさぢふや歩きながらに鳴蛙　、

象潟や櫻を浴てなく蛙　、

我菴や蛙初手から老を鳴　、

赤馬の鼻で吹けり雀子　、

月さして一文橋の春邊哉　、

小大工の兒に似つかぬ長閑哉　少年 米堂

墨つける笠の端より長閑也　鬼一

春雨に呼るゝ窓のけぶり哉　一和

鶯が腹をへらすや南吹　和扇

わか草に門の葎もうき世哉　蛙足

長閑さや親子の兒へ風の吹　一鬼

家程の霞が出來て鳩の鳴　一竹

黒土や中履のうらも梅花　一茶

下手つぎの梅の初花咲にけり　、

春雨や貧乏樽の梅の花　、

春雨に大欠ビスル美人哉　、

餅買に箱てうちんや春雨　、

門口のいぢくれ松も朧かな　、

鍬かまのカンともいはず春雨　一瓢

陽炎やされば柳の植所　祗兵

せきゆや跡から急ぐ小節季ゆ　、

棒桐を留主のゝりや朧月　、

畠打や手渧をねぢる梅の花　一茶

不性神そこのき給へ春雨　、

二月廿五日より開帳

春風や牛にひかれて善光寺　、

人の來て元日にする花哉　佐原も と

漣やけぶりにさはる夕燕　太節

巾の戸や人のさしたる柳陰　兄直

鶯にすゝめられたる巾履哉　月船

白梅の四五日さくやしゞめ汁　、

菅笠の外はかすみの野山哉　青岱

佐川田へかたるな花に朝寢すと　對竹

わら苞やとうふも見えて春雨　一茶

八重題火防

門の木や念彼觀音の春の雨　、

暮春

山ざくらそなたの空も卅日哉　、

ゆさ〳〵と春が行ぞよ野べの草　、

根岸にて

山吹をさし出シさうな垣ね哉　、

鍬の柄に鶯なくや小梅村　、

月花や四十九年のむだ歩き　、

花の月のとちんぷんかんのうき世哉　、

花守りや夜は汝が八重櫻　、

花の木にさつと隱るゝせがれ哉　、

二月や天神さまの梅の花　、

閏二月廿九日といふ日、雨も漸おこたりぬれば朝とく陀(マヽ)袋首にかけて、足ついで例の角田堤にかゝる。東はほの〴〵しらみたれど、小藪・小家はいまだ闇かりき。しかるに上のならせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤〳〵とう

かめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はと／＼く板をわたして、おの／＼御遊を待と見えたり。誠に無心の草木にいたる迄春風に伏しッゝめでたき御代をあふぐとぞ覺へ侍る。

五百崎や御舟をがんで歸鴈　一茶

木母（寺）の鐘曉をつけて又なく閑也。花のあたりに魁の聲有。したひ行けば木根に腰打かけて、梅干のしわびたる老法師が手爐の灰うつくしくしなしつゝ、淋しさにたえたる人あらば、たばこの火ほどこさんつらつきして、あたら櫻を誰にか見すべきと、ひとり言いふさへいかにもたゞ人とは見えざりけり。そこにしばし休らひけるうち、又寢亂髪のちりもはらはで、やうじといふものに歯をすりッゝ、ぬり下駄から／＼ならして、あちこちさまよふさま、男十人もちたらんやうにいろ／＼しくぞ思れける。又坂の下より男五六人、糞たごといふものを枴の迹前にゆひつけッゝ、かさい鳥の鳴やうにはなしもて來りけるが、程なく木陰に立かゝりて、女のかたはら過がてに、山神けしかる朝起よな、雨もやふらん。などさゝやきけるを、女はやくも聞とがめて、おのれいしくもいひつるもの哉、今一度さなのゝしりそ。しや首ねぢふせ、しや足打折らんなど、女にげなきわろ口にも、花の事のちり／＼に吹ちりて心に留るけはひもなく、是らも木間の春げしきとはなりぬ。

下／＼に生れて櫻／＼哉　茶

文化八年閏二月十三日

花を折ル心いく度もかはりけり　成美

さく／＼汁の春の夕暮　一茶

鳥打がかすみの布子ぬぎ替て　美

あらうつくしの橋のかけ様　茶

箕であふつ糖（粉）（糠）の先の三ケの月　美

木槿かざして人の行らん　茶

ウ赤染が露の印の石を見て　美

あらくれ武士に身を任せッ、　茶

匂ひなき木地の小箱を打詠　美

涼しき足しにならぬ柿の木　茶
短夜の袴をぬらす地藏講　美
　欠法度と書て張る也　茶
笠程に淵見ゆる窓きりて　美
　皷うち／＼よばる旅人　茶
山雀の袂をぬける月寒し　美
　うき世は花の胴ぶくら哉　茶
舟にめす入道どのゝかげろひて　美
　長閑也ける乞食の舞　茶
二
鐘聲あれが大和の西なるや　仝
　明家へ這入る一期つたなし　美
白梅の片開きなる年とりて　茶
　あばたの君と誰か名によぶ　美
戀衣大行灯に打かぶせ　茶
　三輪の鳥が耳につくなり　美
秋風の賢者を流すはりま浮　茶
　藥王品の草に入る月　美
桐一葉三葉四葉にかや葺て　茶
　雨の茶湯の人を待かね　美
古沼に小桶を浮す夕げしき　茶
　財布おとしていふ事もなし　美
ナウ
ほか／＼と壁の穴から花の春　茶
　子日を老にくやむ針立　美
東風吹ばほまち無盡のはやる也　茶
　宵は更しか黑犬をふむ　美
臼唄のわか松樣もねたましや　茶
　杉の葉程に髯は細りぬ　美

成美十八句　一茶十八句

卅日なき所が有やら歸る鴈　一茶
梅の花雀がつんで仕廻けり　丶
五月雨の翌は榾もたのみ哉　成美
乙鳥の親の浮れ子を鳴　太節

鹿染るさら〳〵小川さらさらに　一茶
　籾かつぎと人によばるゝ　美
ちる露に月の心のうつるかと　節
　今や栗やけ二郎三郎　茶
ウ
寅日の古キ兜に早稲盛りて　美
　うき世の端の甲斐の狙橋　幽嘯
うつくしき夢見る家をむすぶなり　茶
　遊女の情霰ふりけす　節
ちる柾葉守の神はないじや迄　嘯
　けふ聞初る丘寺の鐘　美
尺八吹に別て後の秋風　節
　うどんの上も皆月夜也　茶
冷〳〵と放下の袴かしてやり　美
　死損ひの紙魚とたはれて　、
青鼻ぱつぱつと花のちれかしな　茶
　山葵の泪うつりたりけり　節
二
古かぢの跡とりすゑし宵の春　嘯
　人にかくして烏さしに出る　美

菅蓑をいた〳〵しくもきせ申　節
　閨にほしがる小百合なでしこ　茶
いやながら五年預る佐田宮　美
　國が芝居の名の通り來る　嘯
桐木に目鼻を書てわらひけり　茶
　いざ薬めせ鴨の夕聲　節
蘆火焚かげに兜巾をひけらかし　嘯
　名を替てより木賀を別るゝ　美
誰やらは都の月をきらはれて　節
　たゞ七文の花の朝顔　茶
ナウ
傘張は秋に隠るゝ傘の陰　美
　よい子拾ひに参る階　嘯
かづらきや外山の雲にものいふて　茶
　佐川田どのゝ花に痩たり　節
艸の香に額をつけし蓋ノ聲　嘯
　夕兒蒔てしづかなる暮　、

成美十句　太節九、　一茶九、
幽嘯八、

文化三年十一月廿五日

鳥買の行や霜おく漂滞　太節
　家さへあれば汁ぶる寒空　成美
枝ながら松の倒木引捨て　乙因
　飯より白き菊を称て見る　浙江
宵〳〵の月夜に牛を撰ぶらん　一茶
　秋の哀にまけぬ日もあれ　太
貰ふてはやたらに植る艸の株　美
　あだし心をうつすうら富士　因
斧の柄の古くもならぬ戀をして　江
　一むら竹に鶏を葬る　茶
さく花の京を小脇に家もてば　太
　御見がてら米買に出る　美
青天の淋しく神の鳴初て　因
　うれしき物を膝に置けり　江
はる〳〵の心とけたる善光寺　美
　荻も誠の秋になり行　太
こつそりと蜆口明く薄月よ　江
　浴衣忘れし露の中垣　因
貫之が眠りし榎祭るなり　茶
　卯浪の比の蝶のへら〳〵　美
さま〳〵に田葵の雨を佗果て　太
　夢見る家は別に作りし　茶
人悩きあまりに餅をくひちらし　因
　御葛籠馬を畫にうつすらん　太
めた〳〵と二月になりて旭さす　美
　菫のおくの謎ときをよぶ　因
雀にも胡葱鱠祝せて　茶
　二つばかりは見たる玉川　美
槇柱それさへ月の馴安く　太
　袷著たさに鈴をならしつ　茶
蕣を踏で小沙彌のあはめられ　因
　僅の雲の湖にかぶさる　太
盃を並てものを申しけり　美
　筆に追やる鳩の餌ぶくれ　因
たゞ頼め昔念佛の花の時　茶

杉のあはひの水の糸ゆふ　太

十六日の昼ごろきせるの中塞りてければ、麦わらのやうに竹をけづりて、さし入置たりけるに中につまりてふつにぬけず。竹の先わづかに爪のかゝる程なればすべきやうなく、缺残りたるおく歯にて、しかと咥へて引たりけるに、竹はぬけずして歯はめり〳〵とぬけおちぬ。あはれあが佛とたのみたる歯なりけるに、さうなきあやまちせしもの哉。かの釘ぬくものもてせば力も入らず、すら〳〵とぬけぬべきを人の手かることのむづかしく、しかなせるなり。此寺は廿年あまり折ふしにやどりて、物事よそ〳〵しくはあらねど、それさへ心まゝならぬものから、かかるうめきに逢ひぬ。まして四十餘年の草枕、狼ふす草をかたしきて、夜通たましひ消るおそれをしのび、あらし吹舟をやどとして、底の藻屑に身を浸すうさをしのぎ、たま〳〵花さく春にあへば、いさゝかうれひを忘るゝに似たれど、ほと〳〵霧ちる秋の行末をかなしむ。重荷負ひて休ふごとく、たのしみの中にくるしみ先立、其折〳〵に齢のひたものちゞまり行ことを、今片われの歯を見るにつけて思ひしられぬ。いつの日むしろ二枚も我家といひて、人に一飯ほどこさるゝ身となりなば、是則安養世界なるべし。

しわ聲に呼べども〳〵ほたる火の
聞ぬ㒵してつい走りけり　一茶

がり〳〵と竹かぢりけりきり〳〵す　、
ちさいのは眞正面なり雲の峰　、
涼しさは雲の作りし佛哉　、
心から鬼とも見ゆる雲の峰　、
門涼み爺が乙鳥の行義也　、

淺艸反甫にて

夕立にうち任せたりせどの富士　一茶
切株にすり鉢きせて閑古鳥　、
植る田やけふもばら〳〵歸鴈　、

のつきてさみだるゝなり二番原　　、

夕されば螢の花のかさい哉　　、

夕立や乞食どのゝ鉢の松　　、

夕暮の聰につゝ張る扇哉　　、

唐きびも闇の涼のたより哉　　白老

さは〳〵と夕貞の夜もなくなりぬ　　一茶

露の世の露を鳴也夏の蟬　　、

上總の國百首の郷は、東南に山連り、西北にうみ開けて、防人の備に究竟の地なりとて、此度陣屋いとなむ繩張りといふこと有。其畠の瘤のやうにさし出て妨なる小家あり。主と見えて翌をもしらぬ老婆ひとり、麻をうみて居たりけるを奉行人深く憐みて、汝子ありやといへば老婆いふ、をのこひとりもちたりけるが、いつ〳〵のとし古郷をよ所にふり捨て、今は江戸の本所とやらんに人の髮ゆふわざをなすよし、風の便りに聞侍るとばかり涙はらひ〳〵こたふ。さあらば其男呼返すべし。よろしき替地にかひ〳〵しき家をあたへん。しかのみならず其男には永く髮結司のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ぶちといふを申下して身をやすくすぐさせん。あさ糸の細き稼ひをやめて、遲々たる春の日にはちりかゝふ花に無常を觀じ、凄々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ、明暮心任せに芥(菩薩)の種を蒔なば、なんぼうたのしからん。汝の此家このかまへのさはりになるこそ、天より汝に幸ひ下たまふなれ。とく〳〵爰をしりぞき、あしこにうつれよといふに、老婆むく〳〵とはらだゝしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふやう、よくもあざむきたまふもの哉。是はわらはが先祖よりいく世ともなく住みふるして、大事の〳〵栖なれば、たとへ黄金星にとゞく程給るとも、我目には一椀の麥飯にしかずこそ思ひはべへ。たゞ〳〵此はにふの小屋こそさうなき寶なれ。よしや命斷るとも外へは行かじと、手すり足すり貝を作りてなかぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も今は施すべきようすがなく、老婆のちになくひそと、ふだゝび繩はりして、つひに其家をよきて地どりなりぬ。あはれ月

日の照らすかぎり、露霜のおつる所に生とし活るもの、たれか國命をむき奉らん。しぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられ給ふ夕涼み　一茶

さはいへ、そだち盛りの田畑こき捨られて、かなしむもむべなりけり。

青稲や薙倒されて花の咲　〃

古かゞし三つ四つそれも角田川　一茶
荻の葉に二の足ふむや迷鹿　〃
蜂にふみつぶされし庇哉　〃
露見ても活て居るゝ住居哉　〃
秋の風一茶心に思ふ様　〃

題松島

嶋〱や一こぶしづゝ秋の暮　〃
象潟や田中の嶋も秋の暮　〃
初雁や芒はまねく人は追ふ　〃
鳫とぶよそれ〱そこは鬼の家　〃
荻の葉にひら〱殘る暑哉　〃
角力場やけさはいつもの細念佛　〃
角力とりや親の日といふ艸花　〃
夕暮を空得心のかゞし哉　〃
薄月に殘る暑をたのみ哉　〃
蕣やうつとしければ韭も咲　〃
けぶりして露おりて無我の在所哉　〃

七月廿日素丸逺忌

かつしかやなむ廿日月艸の花　〃
雁鳴や村の人數はけふもへる　〃
すぢかひに雁の鳴込庵哉　〃
はつ雁やあてにして來る菴の畠　〃
なか〱に人と生れて秋の暮　〃
牛の子の旅に立也秋の風　〃
名月や高觀音の御ひざ元　〃
なまあつき月のちり〱野分哉　〃
青柴の杯にかゝるはつ時雨　〃

＼御地藏の何かのたまふ露時雨　、
＼赤い月是は誰のじや子供達　、
名月や女だてらの頬かぶり　、

七月廿六日ごろより北方七星の邊りに、稻つかねたらんやうなる星現る。老人豐秋のしるしといふ。

＼里並や芒もさわぐはゝき星　一茶
むだ人や秋の夜寒の身づくろひ　双樹
＼小けぶりやさて又鴫の影法師　一茶
何事のかぶり〱ぞ女郎花　、
秋風や壁のヘマムシヨ入道　、
さほてんの皺はだみれば秋の風　、
うしろから大寒小寒夜寒哉　、
豐年を招き出したる芒哉　、
＼ほ芒やおれが小びんも共そよぎ　、
きり〲すふと鳴出しぬ鹿の角　、
親鹿や片ひざたてゝ何かいふ　、
名月や藪蚊だらけの角田川　、
蜂が兒こそぐつて通りけり　、
秋の夜やせうじの穴が笛を吹　、
おち葉して佛法流布の在所哉　、
千鳥鳴九月卅日と諷ひけり　、
佛にも作る氣はなし庵の雪　、
はつ雪や雪隱の供の小でうちん　、
わら苞やもちろん鰒と梅花　、
はつ霜やかた衣かけてさす小舟　、
菴崎の犬と仲よき千鳥哉　、
雁鴨よなけ〱としが暮るなり　、
正月の町にするとや雪の降　、

普化忌

口笛も御意にかなふかはつ時雨　、
門口に來て氷る也三井の鐘　、

信州善光寺商人のいはく、今日は越後今町の沖にて漁あらんといへば、三日ばかりへて必魚荷所せく迄引つゞき

て來ぬ。けふはなしといへばはたしてしか也。是其道に志深き物から、廿里をへだたりたる彼地に魂もやかよふなめりと、友人柳荘常にかたられ侍りき。されば立砂翁と今は此世をへだてたれど、我魂の彼土にゆきゝしてしりけるにや、又佛の呼よせ給ふにや。十三回忌といふけふ、はからずも巡り來ぬることのふしぎさに、そゞろに袖をしぼりぬ。

何として忘ませうぞかれ芒　一茶

法莚の夕がたなれば

此時雨なぜおそいとや鳴烏　、

塚の霜雁も參て啼にけり　、

冬木立むかし／＼の音す也　、

夕暮の頭巾へ拾ふ紅葉哉　立砂

紅葉や爺はへし折子はひろふ　一茶

寛政十年十月十日ごろ、二人てこな・つぎ橋あたりを見巡りし時のことなり。

眞間寺で斯う拾ひしよ散紅葉　、

生殘り／＼たる寒かな　、

眞實に人のさしたる樒かな　、

はつ雪やとても作らば立砂佛　、

來もきたり抑けふの御霜月　、

ちる木葉則去ル夕かな　、

松蒔て十三年の時雨哉　、

木がらしや是は佛の二日月　、

けふまではちらぬつもりか歸花　、

墓の前にて手向心の十三句也。人に聞すべきものにあらねば、草葉の陰に穴をほりていひ入ぬ。

木がらしにしく／＼腹のぐあひ哉　、

あら寒し／＼といふも榮耀かな　、

合點して居ても寒いぞ貧しいぞ　、

ゐせ侍の祿をうしなひ、世にはふれて小ばくちにさへまけほうけて、たよるべきよすがもなく國々を巡りて、人をおびやかして身をやしなふと見ゆる徒五人ばかりとか

や。十二月二日の夕かたとよ。下總かとり郡鳩山村といふ所に來りて、一夜のやどりたびてんやとひた乞にこひけり。しかるに名主といふものも、頗心きゝロかしこき男にて、さらにうけがふけはひもなくて、虻蠅をはらふがごとく腮の先にてあしらひけるが、後／＼は聲をあらくし目を皿にして、たがひにのゝしりあひけり。其間に名主はからひけん、かまびすしく鐘つき貝吹ならして、棒引さけ鎌ふりて村人百人ばかりおしよせぬ。名主大音に、やよ／＼きやつらにものないはせぞと呼りつゝ、五人をひし／＼とり卷たり。曲者どもも今を最後とや思ひけん、おの／＼太刀ぬきかざしてしばらくたゝかひけるが、終に名主の首打おとし、むらがる人を四五人きり伏せたりければ、むら人おそれて風の木葉のはら／＼と逃ちりけり。曲者共も闇のまぎれと走りうせぬ。かくして一日二日へたりけるに、其跡に神職の免狀といふもの一紙、おちちらばひてありけるを、村人おほやけに訟へけり。其一紙おとしたるものは、佐倉領六方野の神主木田大進といふものゝ弟子にぞありける。大進、けふ十五日布川の里に妻ぐし來りて、年忘といふ遊びすとて謳ひ舞、鼓ならして心打とけ戯れ居たるを、寢みゝに水のおし來るやうに、追捕使の武士どや／＼とおしかさなりて、大進に繩かけて鶤籠といふものに押込たり。そばにありあふ人／＼は顏を中の葉のやうに成て、我にもあらぬ氣色して立さはぎぬ。大進は露おどろきたるありさまもなくて、

鳩山で切て放した鷹はそれ
　とんだなんぎが木田の大進

と高聲に吟じて、江戸松平兵庫頭の廳へ引れ侍りき。あはれかゝる期にいたりて魂消たるけはひも見えず、又なく肝ふときおこの者にぞありけると里人かたり傳へけり。

又小見川の里いかけしが人を殺し、ばくち打が追剝すなど、風聞みな此あたりなれば小南行は思とゞまりて、布川の里にとしをとりぬ。

行としやたのむ小藪もかれの原

（をはり）

株番

一茶著作集（三）

文化九年正月十五日、下總國相馬郡布川の郷なる月船亭に日待といふことをして、人々こぞりて夜の明るをなんまちける折から、さる生かしこき人のいふ、ことしのいなり祭りは丙午といふにて、大火地火にあたれり。六十年に一度の大凶日なれば、其日地より火起りて其けぶり大きくなりて、其災野邊の駒に及ぶおそろしき日也。つゝしむべしと、事觸が告たりしとかたりぬ。又隅の方より白雪の士に汚れしやうなるかしらつきして、おこづきたる叟のやをらよろぼひ出ていふやう、雲をつかむやうなる根なしごとをゆめ〳〵誠としたまふな。それは事觸等がそらよみと覺ゆ。大火には侍らじ、天火なるべし。ことしの初午は天地ことの外あたゝかになりて、かすみがくれの桃柳、おのがさま〴〵色をあらそひ、其たのしび野邊の春駒におよぼし、夢に見てさへよいけしきぞよと、我〳〵ごとき老かゞまりたる身も、めでたき時にながらへて、うどんげの花まつやうに今からたのもしく思ふ也。そこ達も火用心はしかるべし。さらにおそれはあらじといふに、主、手ばやく暦投出して是見られよといふ。叟、目じるふき〳〵いく度もすかし見るに、しかいふごとく大火也。しばらく小首かたぶけていふやう、昔長頭丸の句に、螢もや暦にはなき天火地火　とこそつゞけ、是はいせのひがもじなめり。かくては上下とのはずとこよみを疊めば、人々同じ聲に、まさしく栗の花が咲ても木はならの木と、しひごとのみないひそ。上み萬乘の君より下乞食にいたるまで、天下のきくとなすもの露おろかやあらん。ましてそなたのやうに衣のきたなげなるものゝ及ぶ事にやはと、きやら〳〵と笑ひ、わう〳〵とのゝしりあへり。

程なく成見寺の鐘曉をつげて、布佐臺の鳥かは〳〵と鳴わたるに、おの〳〵ばら〳〵歸りけり。

是萬人の定たる大火によらんや。一人の極たる天火にしたがはんや。思ふにふたつながら非なるべし。前の日しか〳〵のことあれば、必あらんと思ひこみて、空しき株を守る輩にぞありける。されば我らがたま〳〵練出せる發句といふものも、みづから新しきとほこれば、人は古

しとあざける。ふたゝびよく〳〵見れば人の沙汰する通り、いかにも古くほと〳〵おのが心にもうんじ果、三日ばかりも口を閉れば、是又木偶人のごとくへんてつもなく、よし〳〵汝はなんぢをせよ。我はもとの株番。

おのれやれ今や五十の花の春　一茶

○かゝる世に何をほたへて鳴蛙　〃

○行がけの駄ちんに鳴やけさの鴈　〃

蝶と鹿のがれぬ中と見ゆる也　〃

山鳥おれがさし木を笑ふらん　〃

○やよかにも御鶯ぞ寛永寺　〃

猪ねらふ肱にすがる小てふ哉　〃

うつくしや雲雀の鳴し迹の空　〃

いたぶりし今の乞食よつゝかすむ　〃

鶯を招くやうなるわらび哉　〃

春雨や翌は何くふ浦の家　〃

文化九年正月廿四日

霞日の咄するやら野べの馬　一茶

へそにあてたるやき飯の春　鶴老

几巾庄屋の松に引かけて　〃

朔日汐のやうな夕月　一茶

綿市をいざ迎鼓打ぬらん　〃

露もつ艸を今しもて来ぬ　老

侘ぬれば柱の数もむつかしく　〃

車序に越るあふ坂　茶

夕立のかきなぐらるゝ恨みにて　老

お竹如來を祭るさゝ百合　茶

惟然坊が鼻のひこつく涼風よ　老

天和二年と壁に張る也　茶

薄月のちら〳〵蝶の世となりぬ　老

大かはらけの花にまぶれる　茶

青草に獅々(子)の頭を投出し　老

あらありがたの那智の晩鐘　茶

ひよろ長くつき並べたる橋の錢　老

臼ころがして皆あそぶらん　茶
牛の子も殿の御紋をきたりけり　丶
黄色なめしにかゝるむら雨　老
うれしさを蕗の廣葉に書つけて　茶
閨の灯の見ゆる節穴　老
御馳走に鴫なきそ角田川　茶
としとり豆をはかる赤貝　老
木のはしの親をひたすらおがむ也　茶
咄に聞し大はらの里　老
有明の裸祭りが始りて　茶
九尺四方のきりの葉がちる　老
露寒き塩茶の淡に住ならひ　茶
又來る人も狐なるべし　老
奥にさく〱花を吹つけて　茶
苦みのぬけし壬生の念佛　老
めし給へ爺が艸餅召し給へ　茶
山時鳥はや過にけり　老
眉墨のたしにもならぬ杜若　茶
鈎簾のうしろに立る仇人　老

西林寺に今日至來の一木満花也

あのくたら三百文の櫻かな　一茶

おなじく廿八日張行

鶯も雀と寝てや軒の松　鶴老
ほんまの春よけさの有明　一茶
一かすみ舟こぐ人にはじまりて　丶
石をひろひに出たる小わらは　老
おとゝひの連哥にまけてあやめ引　丶
桶の中からほたるとぶ也　茶
八九年野上の酒にわかやぎて　丶
走り出てもしのぶ俤　老
たゝら踏音は師走のたゞ中よ　茶
大山伏の兜巾すゞ掛　老
鍋飯につゝさす笹のそよぐ也　茶

圖にはづれたるむら雲の月　老
今捨る身の思出にをどらばや　茶
志賀の薪は露にぬれつゝ　老
ほの〳〵と虱の辻の風の吹　茶
山をゝしへて迯す山鳩　老
能登どのゝ袖かけ櫻咲にけり　茶
ひゝなの宵の虫歯かゝへる　老
二
行春を追ッ立るやらたゝき鉦　丶
鈴鹿は曇る宮の御馬　茶
ちる芥子のかるはづみなる泪にて　老
菜汁にかゝれ夢のうき橋　茶
一休の前に備へし小長刀　老
てうちあはゝで暮す木の子　茶
鳴雀きのふに替る寒かな　老
河内國へ三足ふみ込　茶
茶をまいれ江湖崩れの羅漢達　老
そも咲たりな垣の朝皃　茶
大名の寢間迄月のさし入て　老
こん度の角力面目もなし　茶
ナ
さればこそ美人に似たる角田川　老
なんぞふるまへ婆ゝが艸菴　茶
百年に一度かそこら鶴の鳴　老
おの〳〵赤き木綿たつ也　茶
初花に角を並べる芋頭　老
さあ是からはおれが春風　茶

二月一日至來文通

二ッ三ッ喰ふがまとの雜煮哉　金令
梅翁の塚と聞さへ春ごゝろ　丶
几巾人かけ寒し高簀垣　丶

題鶴龜松竹

鳴鶴の退屈もなしいせの海　鶴老
彌陀佛にたまはる龜の齡哉　丶
住吉の松にかくるゝ月日かな　丶

鐵兒を洗ふて見ばや竹の雨　〃
○鶴の子の千代も一日はやまりぬ　一茶
○龜どのゝいくつのとしぞ富士の山　〃
○松陰に寢てくふ六十よ州哉　〃
竹にさへまるにまろきはなかりけり　〃

思事ふたつのけたる共跡は花の都もいなか(ゐ)なりけり、と此ふたつは何やうのものならんと、ある知識に尋ければ、それは牡丹餠と饅頭なりとこたへたまふとかや、いとありがたき事になん。

正月十六日布川閻魔堂に參りて

ちる梅の影がはら〳〵と淨破利の
　かゞみの中も春風ぞ吹　一茶
淨破利の鏡の月の難波江や
　よしあし言の葉にぞうつろふ　讀人しらず

題猫小判

君が代は猫も杓子も夫婦哉　鶴老

月雪花ほとゝぎすにも小判哉　〃
○三日して忘れられぬか野らの猫　一茶
○小けぶりも小ばんのはしぞ江戸空　〃

賀治世

松陰に寢てくふ六十よ州哉　〃
　鶴と遊ばん龜とあそばん　老
月影のだん〳〵細き春なれや　〃
　八重山吹のかくす行灯　茶
餅賣の聲をづんづと東風吹て　〃
　子どもの走ル辻の獅々舞　老
むく起に肝のつぶれし蚕の迹　〃
　五尺の菖蒲見ぬ別して　茶
うき人の鎧も山に朽ぬらん　老
　霰たばしる朔日の膳　茶
又ふけと又せがまるゝ蝶の貝　老
　あはうに長き加賀の金澤　茶

ほちや〳〵と餅屋が月は出たりけり　老
　鈴ふり二人急ぐ秋風　茶
雁がねのおち來る程にくるほどに　老
　寢蓙も捨よ風呂もわかせよ　茶
有がたや東叡山の花の雲　老
　かすみたがりて歩く供の衆　茶
鶯に赤の御はんをふるまはん　ゝ
　不二を向ふにしたる海士が家　老
忍夜は只どひやうしに明過て　茶
　ひぢ笠雨のうつり香をとく　老
青簾三日都といはゞいへ　茶
　笋ほりに共角嵐蘭　老
宵の月はした祭りは過にけり　茶
　霧一面に三井寺のかね　老
不甲斐なき御最期かくせ糸芒　茶
　菓子を貰ひに出たる山猿　老
權禰宜が小春日向にはだかりて　茶
　しぐれの舟の迹もどりする　老
ウ山城の入口見えて茶のけぶり　茶
　芹の皃の眞つ白き也　老
梅がゝの垣の草履は五文にて　茶
　花に吹かれて參る糞汲　老
格別に世中よしと鳴蛙　茶
　藍でそめたる明ぼのゝ空　老

題六道

地獄

○世の中は地獄の上の花見哉　一茶
是がまあ地獄の種か花に鳥　鶴老

餓鬼

○花ちるや呑たき水は遠霞　一茶
しらぬ火の春も忽暮にけり　鶴老

畜生

○散花に佛とも法ともしらぬ哉　一茶
牛馬の寢て食ふ春の野山哉　鶴老

修羅

散花に太刀長刀もかざり哉　老

○穴一のあなかしましや花の陰　茶

人間

人〳〵よ花もあらしもうはの空　老

○さく花の中にうごめく衆生哉　茶

天上

○かすむ日やさぞ天人の御退屈　丶

永日と思ふ程なほ暮やすし　老

欣求浄土同行百人

我一にかせげよ〳〵花の春　丶

元旦

云なしの花の先さく世界哉

といふ句を、ある旅人これ解せるにやと問ふ。おのれさら〳〵とけがたきといへば、是大切の事なれど、一樹の陰も他生の縁と聞からにをしへとらすべしと、懐より和歌呉竹集といふもの出したり。其書に曰、梅の異名をさして、いひなしの花といふ。

古今集

うち渡す遠方人に物まうす我そのそこに白くさけるは何の花ぞも

是は梅の咲たるを遠かた人にとひかけたり。

返し

春されば野邊に先さく見れどあかぬ花まひなしにたゞ名のるべき花の名なれや

哥の心は花も云なしにてあれば、我こたへん花の名にあらずと、梅を賞翫していへる也。是よりして梅を云なしの花といふ也。

云なしに花もなのらぬ匂ひかな　宗祇

此句の心は、梅がかは人の云なしにて、けがるべきにあらずとなん註し侍る。是おのれごときのをこがましけれど、此の解のさまにては、夢にいめ見るやうにとり所なく覺ゆ。是は賂なしには名のられぬ花のといふ哥の心と聞侍りぬ。發句もまひなしになのられぬといふを、昔あやまりて傳へしものならん。さなくては、はきとわきがたき也。おぼつかなく思ひ給ば、古今打聞といふもの見らるべしといへば、旅人あきれたる皃して、わどのはおのがしらざるをば棚へあげて、大事の書に泥をぬりぬ。彼慈悲すればはこするとはそこのこと也迚、口をとがらして歸りぬ。世の中にはかゝるねんごろなる人もありけり。

彌陀佛もゆるせし龜の齡哉　鶴老
和哥の流を染色の山　一茶
有明の初花守に補せられて　丶
大蛤に春は立けり　老
めり〱と霞の中をおし歩き　丶
世はことぐ〱く更衣する　茶
小蓮の子ににぎらする芥子花　丶
局の汨ほねをとくらん　老
御灯を初瀬の御山につきつけて　茶
追(雑)灘の宵のあらし風　老
酒くれて長尻どのを歸す也　茶
髻切ておくるふる鄕　老
宗因の大事がられし月が今　茶
はつと立たる小雀山がら　老
お花葺ほやのばくちがざは〱と　茶
兒に放れたる狩人が妻　老
うつくしき年うち暮て仇火たく　茶
さのゝ渡りに馬を逃して　老

竹垣も翌の御用に立かとよ　丶
袖つゝ張て空を詠る　茶
涼風の西も東も砧うつ　老
聖靈もまいれかまくらの米　茶
ひよろ〱と杨の先に月出て　老
山から見ゆる土間のへつつい　茶
九十九の母をしばしと筵の上　老
足利様の御代の青空　茶
艸枕昆布かぶつて寝たりけり　老
赤鬼致せやよ太郎冠者　茶
大雪の夜に大鍋をかりかねて　老
辨才天をおくる川舟　茶
鶯のとしより聲のなつかしく　老
志賀の菫に丸二年すむ　茶
咲く花に大小さしてまかり出　老
べそかく妹を駕にへし込　茶
百年も思ひ切たる文書て　老
我名なきそ奈良の小男鹿　茶

古鐘やかすめる聲もむつかしき　一茶
鶯のさて大づらもせざりけり　〃
世につれて菴の草もわかいぞよ　〃
はんの木のそれでも花のつもり哉　〃
かすむ日や鹿の寝て行さらし臼　〃
御不運の佛の野梅咲にけり　〃

三人上戸

笑

古鳶も笑へやわらへふく俵　老
とゝ喰た花と指す佛哉　茶

泣

○彌太良泣ならやらん梅の花　仝
夜明から泣せ給ふや花の神　老

忿

鶯が來ても腹立上戸かな　仝
東風吹や今ほふつたる陶から　茶

團十郎

咲たりな江戸生ぬきの梅花　一茶

春もはや千兩箱の夜明哉　鶴老

芥子之介

○錢降れとをがむ手元へ櫻哉　一茶
ちる花の間へちよいと月夜哉　鶴老

濱藻

鶯や田舎巡りのおちやつぴい　仝
乙鳥よ紅粉がたらずば梅の花　一茶

住空聲聞未必鈍根

梅の木や月がなくても共通り　仝
何のそのだまつて居ても鶯は　仝

題東都

○かすむぞよ金のなる木の植所　一茶
○錢から〳〵敬白んめの花　〃
○はや淋し朝皃まくといふ畠　〃

不忍池

○永の日を喰ふやくはずや池の龜　〃

雜

○佛ともならでうか〳〵老の松　〃

松苗や果はいづくの餅の臼　〃

どこへなと我をもおぶへ磯の龜　〃

修羅といふ題をとりて

腹中は誰も淺間のけぶり哉　〃

○鷄に修羅もやさせて遊ぶかな　〃

猫小判

耻入てひらたくなるやどろぼ猫　〃

古猫の蛇する不性〳〵哉　〃

同じ世をへろ〳〵百足小ばん哉　〃

○天からでも降たるやうに櫻哉　〃

葛西辭

せなみせへ作兵衛店の梅だんべへ　〃

青柳も見さめしてや歸る鴈　〃

○おりよ〳〵野火がついたぞ鳴雲雀　〃

○どちむくも万吉とや鳴蛙　〃

十二日まれの晴天なれば、篭山を出てあたご町といふ所を過るに、いまだ廿にたらぬと見ゆる女の荒布のやうなるものを身にまとひ、古わらぢ・馬の沓のたぐひ、いくつともなく腰にゆひつけツヽ、黑髮に簪あるひはきせるなどさして、かくす所もかくさず、あらぬさましてさまよふ者あり。人にとへば、おすか氣違とて此里のものなるとぞ。何として佛神に見はなされたるや。盛りなる菖蒲の泥をかぶりて、折る人さへもなく思はれて哀なり。汝、父やあらん母やあらん。

布施東海寺に詣けるに、鷄どもの迹をしたひぬるとの不便さに、門前の家によりて米一合ばかり買ひて、菫・蒲公のほとりにちらしけるを、やがて仲間喧嘩をいく所にも始たり。其うち木末より鳩・雀はら〳〵とび來たりて、心しづかにくらひツヽ、鷄の來る時小ばやくもとの梢へ迯さりぬ。鳩・雀は蹴合の長かれかしとや思ふらん。士農工商其外さま〴〵の稼ひ、みなかくの通り。

米蒔も罪ぞよ鷄がけ合ぞよ　一茶

春風や浮名も立し古地藏　双樹

梅さくや闇はきらひな今の人　ヽ
青柳や樒提るも片ごゝろ　ヽ
青柳や腐た錢も芽を出して　ヽ
蝶〳〵や艸に寢るのも是らから　ヽ
○麥の葉も朝きげんぞよ春霜　一茶
○花の咲くうちにしまへよ鳴蛙　ヽ
蝶どももうろ〳〵欲のうき世哉　ヽ

下總田唄

あれみさい筑波の山の横雲
よこ雲の下が我らが親の里

○有明のかりになりたや行かりに　一茶

十七日　隨齋會

○おくゑぞや佛法わたる花の咲　一茶
○一大名蝶にまぶれて仕廻けり　ヽ

十八日　本行寺

○陽炎や貝むく奴がうしろから　ヽ
○乙鳥や里のばくちをべちやくちやと　ヽ
○山〳〵は袂にすれて青むぞよ　ヽ
○花さくや榎に張りし火用心　ヽ
○薹や天神さまのむら雀　ヽ
○雛達そこで見やしやれよしの山　ヽ
○ついそこの二文渡しや春の月　ヽ
むさしのやたゞ一ッ家のうかれ猫　ヽ
松原に何をかかせぐ子もち猫　ヽ
猫なくや中を流るゝ角田川　ヽ
なの花のとつぱづれ也ふじの山　ヽ
春雨やてうちん持の小傾城　ヽ

三月三日

翌は又どこぞの花の人ならん　双樹
　川なら野なら皆小てふ也　一茶
水風呂はゑひして焚きぬ田うち時　樹

宿ちんだけの居合はじめる　茶
腰伸よく卯の花うす月よ　樹
蔽蚊の中に御馬よぶ聲　茶
ウ
手でなでし壁も三とせの夢にして　樹
遊女が墓に髝居へる也　茶
そこといふ所も一里の上總路や　樹
貧乏鳥すこししぐれよ　茶
(拙)
堀植ルひよろく松に餅くれて　樹
濱の喧嘩に又枝がさく　茶
布施に引荒山畠淋しけに　樹
親の眞似して月を見る哉　茶
風の秋うつせの舞がはやる也　樹
柱に張りし御彼岸の事　茶
淺ましの老を櫻にかこつけて　樹
志賀と一ッにかすむ鍋ぶた　茶
二
輪竹のそよぐ先から歸鴈　丶
与作屋敷に金ほりそむる　樹
丸雪でも鑪でもふらば降れかしな　茶

縛りからげて送る山篠　樹
六條は忍びぐらしによい所　茶
朝妻ぶしをうたふねぶたさ　樹
輿にくゝしつけたるけしの花　茶
死も活るも珠數の世の中　樹
べら坊と人に呼るゝうれしさよ　茶
子ばかりふへる畠新田　樹
名月の大杉様を祭る也　茶
一本橋に名をつける露　樹
ナウ
風の吹芒の下に住なれて　茶
紅葉折にも琵巴(逵)かつぎつゝ　樹
僧正の御成あるやら鐘をつく　茶
犬の巣をくふとうふやが門　樹
さく花の何へんてつもなかりけり　茶
(ゑ)
常盤がましき春の松風　樹
鶯を横に坐とるやばくち宿　ノ旦

蛙なく守り貰ふや二月堂　ヽ
山寺ははや籠して雉の聲　護物
白魚も子にあかるゝな角田川　遲足
今のめる迄も花咲く老木かな　一茶
鴈行や迹はほんまの角田川　ヽ
雉と臼寺の小豊は過にけり　ヽ
雉なくや見かけた山のあるやうに　ヽ
なむあみだおれがほまちの茶が咲た　ヽ
雉うろ〳〵菴を覗くぞよ　ヽ
鶯のむだ足したる垣根哉　ヽ

四月七日張行

短夜の草に生れしとんぼ哉　貞印
布つく唄に夏がなくなる　一茶
五六枚新らし疊淋しくて　とく阿
茶の水汲に參る夕月　工雪
霧時雨はら〳〵松をすぢかひに　阿
給羽折を馬にかぶせる　雪

ウ
夕市の三輪の御山に造酒上ん　茶
子どもがしらの逃る鬼面ゝ　印
冬枯のよろこび鳥鳴にけり　雪
かさい隣の藪に住つく　白老
明暮の涙の玉に灰かけて　茶
謎に作りし峰のしら雲　老
僧正の刈給ひける女郎花　阿
ふる廻風呂のしづかなる秋　印
月うすき叺に胡麻をはかり込　老
おの〳〵祝へあれが木曾山　茶
ちる花に寢ぐせの付くがおもしろき　阿
文珠(殊)を刻む窓の陽炎　印

二
うつくしき飯を燕の笑ふらん　老
母のふとんをほふる川舟　茶
君が代は啌つきどもも凉しくて　印
牛のうしろの鈴が鳴る也　阿
幻の鳥羽田へ雨をやり過し　老

いざ〳〵一首侍らんかな　茶
かた衣の綛に直がなるとしの暮　印
丸い枕をころがして見る　阿
したゝかな赤かう薬のうらめしや　老
山ほとゝぎす志賀をあらすな　茶
宵の月鍋を莚に引ずつて　阿
芒がもとの祭り過けり　印
ナウ
うそ寒しさむしと鐘のなるまゝに　茶
何の願ひの錢みがくやら　老
臍のをはきのふ埋たる門畠　印
ひたちこと栗のまだ抜ぬ也　阿
さく花は我らがための卉にて　老
蕗の葉ごとに餅を並べる　茶

貞印 八句　一茶 九、　徳阿 八、
工雪 三、　白老 八、

上づさの國富津の里に、西蓮寺法師とておこの名僧あり

けり。狂歌を好みて眞顔といふものゝ弟子になりて、名をば鶴雛丸とぞよびける。おり〳〵高點の狂哥をよみけるが、此ごろ眞顔のもとより時鳥・卯花・雛などいふ題おこせたるに心得ぬ皃して、同じ里、壽千代丸が元へ參りていふやう、此ざつといふ題何とよむべきにやと問けるに、千代丸思ふやう、此僧、我をなぶらん迚かゝるざれ事いふにやと思ひはかりて、おのれもえしらず、只ざうの歌よむ也と答へければ、やがてよみて參りぬ。

鼻長く色白うして耳たれて
舌をべろりと出した象哉

百文の錢を二つに折介の
袖を引たる五十ざう哉

と短尺に書て出しぬ。ありあふ人々皃に袖を覆ひていふやう、御哥こそ、彼小人玉此かたの秀哥なるべけれとそらほめにほめければ、又なくゐつぼに入りて歸りしとかや。是ざふの事と千代丸かたり侍りき。

白露の玉をいだきて萎
もがれし足もいとはずになく　三嶋升隅

金拾ふ夢よりはるかめで度は
　かねをおとした夢のさめ際　不知人

せんきの藥

魚（旁闕、鱒）一本常のごとく煮て、上酒一升呑べし。筋下りて癒ると、砂明上人かたられき。

去㆓蛇毒㆒藥

露草三寸程づゝ二本、なめくじり一疋、右二味を黒燒にして胡麻油にて練て付べしと、同人。

八日　灌佛

お日和のかたまる四月八日哉　德阿
御佛の生れ給ひしぼたん哉　貞印
けさ程や子供がしても花御堂　一茶

おなじく

卯の花の中に顯れ給ふゆへに
　雪の御山のとうしといふらん　阿
ちよ〳〵と祝ひはやしてみ佛の
　うぶやにおどるむら雀かな　茶

菴の苔花さくすべもしらぬ也　ヽ
かはいさうな花の咲けり麥の秋　一茶

やけどの藥

胡瓜をいくつも陶の中へつめ置、其きふり數日してこと〳〵く水に變ず。其水一味、やけどにつくれば、さらに迹つかずして癒るとかや。これ德阿上人拵へおきて多の人を介けしとなん。

大原や前〻の小町が芥子花　一茶
けしさくや賣れるともなき赤藥　白老
夕陰や今植たれど苔の花　一茶
古郷や細い柱の苔も咲く　ヽ
夕立のとつて返すやひいき村　ヽ
夕立の始る海のはづれ哉　ヽ
金が降る〳〵てふ白雨を
　はら〳〵海へ捨るむら雲　一茶

十六日晴　砂明上人入來

卯の花や夜のう月も晴々し　砂明

十八日晴　出歌仙畧之

萍も願ひありてや西に咲　一茶

萢の苔花さくすべもしらぬ也　〃

時鳥聞ふりするがむつかしき　〃

麥秋やうらの苫やは魚の秋　〃

雲の峰草にかくれて仕廻けり　〃

三粒でもそりや夕立といふ夜哉　〃

朝〳〵や花の卯月の時鳥　〃

なでしこやそなたは親の番椒　〃

鹿の子の迹から奈良の鳥哉　〃

萍のそれも樂やら花の咲　〃

四月廿七日　於二大樂寺一張行

朔日や袷もたねば嚢をきる　房州萬三門人 雉啄

　とある小家も靑すだれせり　一茶

へら鷺の見事に並ぶ舟引て　とく阿

　翌の西瓜を荷ふ人聲　貞印

うす月の少冷つき給ひけり　茶

　雛の兒見る萩のいはひに　啄

ウ 小はつせの大鐘聞にいざゝらば　印

　人が安房といふがうれしき　阿

鹿の道をその道にも雪降りて　啄

　壁の先からとしは暮けり　茶

筋違にずらりと居るそばの膳　阿

　土器うりに折らす草花　印

みちのくの月夜〳〵に御泪　茶

　閨の灯の露にかはりて　啄

闇當の鳥居をどつと雌すらん　印

　必返すな花のからかさ　阿

さく花の一重のうちは鴈が鳴　啄

　長刀形りの川かすむ也　茶

二 投節に那智の御山の畠打に　阿

　螢のやうなちよつとした戀　啄

さらしなの石の世並が直るやら　印

　風が吹込む土間のへつゝい　阿

馬士に默禮うけし帘　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　啄
　彌勒芹を祭る名月　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　茶
稻の穗や榎の股(こ)芽を吹て　　　　　　　　　　　　　　　　　　　阿
　鶉鳴かせに猿澤へ行　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　印
綾錦それもけぶりになさばやな　　　　　　　　　　　　　　　　　　茶
　鏡戸さして白髮ふりむく　　　　　　　　　　　　　　　　　　　啄
誰が子ぞ陶さけて今かへる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　印
　將棊法度の雨の夕暮　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　阿
旅人に鯉の鳴子を引きられ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　啄
　くるり〳〵と暖になる　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　茶
ありたけの花のこぼれし朝朗　　　　　　　　　　　　　　　　　　阿
　たて茶の淡のそよぐ春風　　　　　　　　　　　　　　　　　　　印

探題

風道の小笹に交ル太蘭かな　　　徳阿
車坐に飯くふ舟や入梅明り　　　雉啄
萍の花に來い〳〵爺が茶屋　　　一茶

住の江の隅の餅屋が茂り哉　　　丶
蚊柱の外は能なし榎かな　　　丶
鴨の子の走り込たりほつと雨　　　雉啄
夏の夜や短い町のうつくしき　　　とく阿

通題

時鳥つゝかけてなく走り水　　　雉啄
若役に寢に行く丘やほとゝぎす　　　とく阿
時鳥つゝじまぶれの野よ山よ　　　一茶
御地藏よ河原なでしこたゞ頼む　　　丶
罌粟は子の日せし野に咲にけり　　　雉啄
なでしこに添へて貰ひし佛哉　　　とく阿
里の子と一所に步く鹿子哉　　　丶
しかの子の大事に步く家陰哉　　　雉啄
さをしかよ我に得させよ迹なる子　　　一茶

古調兩花

むら雨のふるの垣ねや野鼠の
　あなうの花のさくばかり哉　　　丶
時鳥通すまじとや夕暮の
　蚊やりも雲を拵る哉　　　丶

七夕

星たちの人見たまはゞむさしのゝ
　草葉の虫とおぼしめすらん　〃

京都銀閣寺鐘銘　細川玄旨法印

夫鐘の功德廣大成事は經文にとき給へば、山鳥の尾のなが〱しきは今の世の人の心〱にかなはず。

聞よりも心に思ひ身に修せば
　いつか菩提に入相の鐘
いかにせんきのふも過ぬけふも暮
　翌しらぬ身の入相のかね
入相のかねとばかりに聞すへて
　我身の暮をしる人ぞなき

其角花つみの下に
　いせの國にて狐の人につきて云い
　でける句
仁あれば春もわかやぐ木目哉

此狐つき、日比の田夫にてぞ有ける。狐いにて後は無筆な

りしと也。其筆迹正しう狐にて侍れば、誠にあやしくたえなるためしにもと書付侍る。元祿元年七月の事にや。

　五月十七日　於隨齋一人百句
　致しける其中より二ッ三、みづ
　からより侍りぬ

○我菴を夜と思ふか鳴水鷄　一茶
水鷄なく拍子に急ぐ小雲哉　〃
佛のかはらなでしこあの通り　〃
なでしこや片陰作る夕藥師　〃
○わか竹やさも嬉しげに〱　〃
蓮の葉に乘せたるやうな菴哉　〃
掌の虱に並ぶ氷かな　〃
鶯よ江戸の氷室は何がさく　〃
我菴の巾着茄子にく〱し　〃
戸口から難波がた也夏の月　〃
夕立を天王さまが御好げな　〃
粽とく二階も見ゆる角田川　〃
帷やふし木のやうな大男　〃

むさしのや蚤の行衛も雲のみね　丶
夕顔の花にぬれたる抄子哉　丶
蓑虫の運の强さよ五月雨　丶
行月や花の都も一ト凉み　丶
艸花が咲ゆと扇かな　丶
瓢から餅が出る迚扇かな　丶
苔清水さあ鳩も來よ雀來よ　丶
初蟬といへば小便したりけり　丶
湖に尻を吹かせて蟬のなく　丶

六月七日　菊池氏にて

むく犬や蟬なく空へ口を明く　丶
家なしも蟬の羽衣きる折ぞ　丶
なでしこのもまれて咲や汐風に　丶
隱家に何の來ずともよい螢　丶
馬は鈴虫ははたをる夕凉　丶

寛文九酉九月廿貳日曉靈夢

言のはをせとにも門にも植置て　東順
いづれやくにはたちつてとかな

○秋立や隅の小すみの小松島　一茶
聖靈にとられてしまふ寢所哉　丶
蚯蚓諷ひ蚊が餅をつく盆の月　丶
露下りて四條はもとの川原哉　丶
○稻妻や蚊にあてがひし足ながら　丶
艸花を腮でなぶるや勝角力　丶
風そよぐ赤てうちんや星迎　丶

小兒をすかして

泣者を連ていぬとや秋風　丶
むだ花にけしきとられて青瓢　丶

輕井澤

有明や淺間の霧が膳を這ふ　丶
狗の葬さきぬ店の先　丶
夕陰や下手におりても須磨の鴈　丶
明く口へ月がさす也角田川　丶

外ケ濱

けふからは日本の鴈ぞ樂に寢よ　丶
月も月そも〳〵大の月よ哉　丶

雁ごや〱おれが噂をいたす哉　丶
末の露もとの雫や賑しき　丶
露はらりはらり大事のうき世哉　丶

小梅筋を通りて

かしましや将軍様の雁じや迚　丶

兵庫築島

行秋や入道どのゝにらみ汐　丶
朝皃やだまつて居たら天窓へも　丶
湖へおりぬは雁の趣向哉　丶
涼しさは露の大玉小玉哉　丶
我星はどこにどうして天の川　丶
初雁に旅の寝様をおそはらん　丶

獨旅夕暮

我やうや十間ばかり跡の鴈　丶
迹の雁やれ〱足がいたむやら　丶

文通

涼しさの夜をやり過す莚哉　素迪
笋によしや痩ても奈良法師　至長
庭掃てそして晝寝と時鳥　双樹

契沖法師富士百首　寛政十年三月板　平春海編

口なしのゆきげの雲は空とぢて
　人ぞいひつぐふじの高ねは
ふじのねに年をわたりてふる雪の
　めづらしげなくめづらしき哉
ふじのねは烟りこそたていつよりか
　始て人ののぼりそめけん
山人のやどの玉だれをだえして
　ふじのすそ野に霞ふる也
ふじのねに昔くだりし天乙女
　ふりけん袖や今のしら雪
いつはりのある世になれるふじのねは
　雪のみしろし雲のあなたに
なる澤におひたるしのゝしのぶれば
　あまる思にふじもゆるらん
月と日の光りをさくること國の
　山もふじにはかくろひぬべし
ふじのねに牛のぼらば雪を出て
　天が下さへちひさくやみん

ふじのねは土とてふんも雪なれば
　なほや乙女の心空なる

山人のけぶりの衣日にそめて
　名も紫に高きふじのね

夏の雲峰はなせどもふじのねの
　風のあたりにえやはくらぶる

夕立のすそ野過るをしぐれにて
　ふじの高ねは初雪ぞふる

雪の山人の國にも聞ゆれど
　我ふじのねぞ高くたふとき

空の海天乙女子もしほやゝく
　けぶりの下のふじのしら雪

唐に山祭りする山よりも
　ふじのけぶりぞかみたちにけり

（校訂者曰、本文は一茶門人山岸梅塵舊藏本によりたれば、　茶の自筆本として知らるゝ湯本氏藏本とは本文の異同ありと知るべし。）

三韓人

一茶著作集(四)

木のかくれ・岩のはざまにも、ひさしくとゞまらざるは法師の境界なり。しなのゝ國にひとりの隠士あり。はやくよりその心ざしありて、森羅萬象を一盌の茶に放下し、みづから一茶と名のりて、吾ひのもとの中をこと〲くめぐりて、風飧露宿さらに一方に足をとゞめず。さるをこの江戸に來りては風土のよろしきにやめでけむ。また友がきのおもしろさにやほだされけむ。こゝに住ると、年をこえ年をかさねてやゝ十年にもあまりぬべし。さるからいよ〱まじはるものおほくなりまさりて、今は本土をわするゝに似たり。此ほどすみだ川に逍遥せる頃、わたし舟のおそきをまつとて、心なく我かげのうつれるをみるに、汀の浪は額によせ、雪とぶ尾花は頭につもれるに、今はじめておどろくにはあらねど、かゝるかたちになりていつまで名利の地にあるべきぞ。蟬の小川はわたらじとちかひし人もあるをと、はじめのこゝろざしにたがひたるをしきりにくいはぢて、たちまち草菴を打やぶり、古さとにひきこもらむとす。旧知・心友のなごりをしみて、袂をひかへ杖をとゞむれどもさらに聞いれず、今はさらばとて、はなむけにふかき心ざしを見せてさま〲の物おくる中に、ある人、笠翁が畫贊一幅をながきかたみにとておくりぬ。其圃、其角・嵐雪と友雅せる處を書て、其・嵐の二人すでに世をさり、われ八十余の齢をえて世の中にとゞまるよしの句あり。叟大によろこびて、是第一のたまものなり。われ此江戸にあそぶ中、友だちの先だてるもの指ををるに數おほし。されば吾しばらくとゞまるに似たれど、此笠翁が夢物がたりにことならず、なほ我こゝろの此畫におもひあたれる事おほしとて、すみやかに笠わらぢ、すぢりもぢりにしたゝめて霜しぐれをおかして出たつ。かのわたのべの聖のがり、薄ならひに行けむ心のあはたゞしさにもにたり。われまたそのうしろ影を見おくりて、二十年の旧交おもひ出る事のさま〲は、むさしのゝ草葉における今朝の露もかぞふるにたらずとこそ。

文化甲戌冬至日

隨齋成美

同行三人玉川一見も今は昔のむか
しとなりぬ

馬かりてかはる／＼に霞みけり　天明七年九月七日没　蓼太

病中

鶴に乘術もあらば花の山　寛政二年三月十三日没　竹阿

千どり鳴やふいと悲しき羽箒　寛政三年九月十三日没　白雄

元日や此氣で居たら九千歳　寛政七年七月廿日没　素丸

竹の子や二本並んで朝の月　文化四年八月十五日没　寸來

梅さくや鼠の歩行く大坐敷　文化八年二月十九日没　浙江

花をまつ氣のみぢかさよおろかさよ　文化九年正月一日没　素嶠

年よりの目にさへ櫻／＼かな　文化十年五月十六日没　松井

いざよひや坂東太郎またゝく間　文化十年十二月廿七日没　麥宇

石の上の住居のこゝろせはしさよ

雪ちるやきのふは見えぬ借家札　一茶

楢に雀の寒さ足音　成美

鍋ひとつ其日／＼がうれしくて　一瓢

たもとかざせば晴る夕雲　諫圃

京人と月のうき世をかたり合　美

丸書なぐる壁の秋風　茶

千貫に琵琶のうれたる露しぐれ　圃

山葵に鼻をはじく君が代　瓢

極樂の夫よ來よ／＼咲華に　茶

小箱もかほれいざ蝶と寢ん　美

炮烙の二ッも破れる春の雨　瓢

かなしき事に濁る湖　圃

住果ぬ寺を百里の迹に見て　美

大さかづきに入相の月　茶

頬かぶり萩盗人とはやされし　圃

おどりの後を野心にして　瓢

吹あらし垣に結こむ初瀬山　茶

遊びがちなる左甚五郎　美

きのふ見し旅人もどる五月雨　虎美

元日句なし二日試筆

かりそめに三日にせうぞ米ふくべ　みち彦

おしげなく若葉折けり魚屋の人　其堂

谷へはく箒の先やほとゝぎす　文化十一年十一月十八日没　巣兆

秋暮ぬ百がものなき痩からだ　寥松

元日やうしろに近き大晦日　完來

朝夕を煙ばかりや冬の山　白芹

砧槌に永き日脚のかゝりけり　一峩

さゝ小笹雪にさもあれよき隣　應々

聟入の諷ひ果けり村の雪　袁丁

晝過の皃にうつるや藤の花　老阿

露の世と見えてさつさと蓮の花　車雨

卯のはなや疊かえたる浦の御師　心匪

茂るともなしに垣根の闇さかな　長閑

どこからか夜〳〵は來てなく千鳥　久臧

陽炎や伏見の翁どこに寐た　凡魯

小坐頭がむんずと掴む櫻哉　諫圃

人數やそれさへ炭の明俵　梅壽

狼のおくりも絕て茨の花　直也

鶯や朽ても椽はもち中　兀堂

分別のはたちにもどる花見哉　叟石

朔日や乙子の守の朝粧　宥盧

さればこそ茫然として鴨も立　松杜

朝雉子の雲鳴はがす峠かな　竹馬

木場にて

丸太屋が手をうつ中やほとゝぎす　守靜

陽炎の五器をせりあふ家鴨哉　栞園

朝皃やあかるゝこちは晝も咲　木卯

朴の葉に豆煎おかし五月晴　大民

更衣へついの神も出給へや　三化

名月や升にさしたる草の花　東鶴

柿喰ふ面横さまにしぐれけり　藏輝

小雀なけ十日の菊のあいしらい　碓令

小晝から蚊遣りもおくや臼の上　素玩

蛤の口あかせたる櫻かな　夯貨

朝鶴の寒ふ成けり藪しらみ　闌蘿
凉風をばいとりがちの眞菰哉　素樸
連翹や共身そのまゝかへり花　理峨
鰒の毒消しにのぼるや愛宕山　徐風
加茂川へ蚤のはね込月夜かな　兎一
すゞしさの足で明たる障子哉　徐柳
大山が崩れて來ても巨燵かな　一瓢

下總

山ぶきや草にかくれて又そよぐ　斗圃
どの松も手くらがりぞよ網代守　、
狗の供して來たるさくら哉　信喜
吉原のうしろ見よとやちる木葉　岩松
鍬かけて長閑にしたる榎かな（寛政十一年十一月二日没）　立砂
あかつきの空へひつつく柳かな（享和三年六月廿五日没）　雨竹
垣並に此世の月も見たりけり（文化九年八月廿二日没）　一堂
霜枯の藪やかならず茶のけぶり　可長
秋風をことしも聞や此長屋　杉雫
螢火もかくれぬ程のかきねかな　友賀

朝飯も焚ぬうちから閑古鳥（文化九年十月十七日没）　雙樹

七日／＼と移り行淋しさは

ひとりゐや別な時雨の降やうに　女 承阿
梅がゝの爰までござれ三ヶの月　、

猿橋ふみしめるころは、たゞならぬ寒さなりけり

甲斐がねや江戸で見て來し秋の雲　鶴老

三井寺

又もなけ鐘にあられのかゝる時　、
十人が十色に寢たる暑さかな　若雨
郭公まてばしきりに筑波山　司耕

鎌倉にて

軒下の舟にあまりてきり／＼す　太山
煤掃や正月めきし茶の煙　守中
けふも又美人にせまし梅屋敷　野英
竹の皮朝／＼人におつるなり　近嶺
川添に暮遲き日の流れけり　露水

兩國にて

蟲賣の出て夜に入やうす哉　月船

蝶一ツふたつ朝飯過にけり　、
花守が余所の花見る月夜かな　、
長閑さや愛宕で逢しけさの人　一白
虫篭や或夜は螢ほとゝぎす　、
梟の山へつんむく春の雨　升入
鶯にきらはれさうな笹屋かな　第々
人の來て元日にする菴かな　蘆月
秋も先萩の月迄とゞきけり　月價
親に似ぬ人こそなけれ露の秋　青岱
朝嬉し鰺の片手もかきつばた　蒼莪
海山や月をふさいでも秋の夕（文化七年九月十四日没）　恒丸
草の戸や人のさしたる柳蔭（文化十一年九月六日没）　兄直
あれこれと我笋に迷ひり　研石
連翹はものゝまぎれに咲たりな　太節
すゞしさの夜をやり過す莚かな　素迪
臼にきく澁もおかしや蔦のてり　雨塘
素麺の細き筋より天川　至長
人しばし雪しばし野の廣さ哉　一山

雀さへ親と呼れていとまなき　金堤

上總

春風や奈良山こゆる經机　輪之
いやさうに枯芦そよぐ日暮かな　白老
傘張が門の日和や麥のあき　渭水
ひよ鳥の見えてはや鳴はつしぐれ　雨十
竹齋がうしろ姿の夜寒哉　、
片兒は月夜也けり春霞　、
雪ちるや藁打石に日のさして　女　三代
冬枯やよしなき門の菊のはな　魚澤
初雪や梅に筋かふ釣瓶竿（文化十一年三月廿日没）　祇兵
此沼もおなじ向なり天河　德阿
里の子と一所に歩くかのこ哉　、
下水も露の明りや小松原　尼　貞印
なでしこはいつが終りぞ露時雨　、
置露や手にとるやうな夜の空　子盛
用のなひ(こ)髪とおもへば暑さかな（文化九年四月三日没）　女　花嬌
春風や女ぢからの鍬にまで　、

鳴なくや筑波をまたぐ日和虹　里丸
我菴は茶にも酒にもさくらかな　砂明
あり明やことしも活て青簾　、
霜がれの蓮に我身をかたりけり　、

安房

見殺しにすると思ふなきりぎりす　文化九年九月三日没　兒石
どの家も夕飯過ぬ春の雨　淡水
蕎麥莖の赤きを見れば夜寒哉　越明
葉ざくらに笙の都と成にけり　買風
生壁に秋のさはる夜寒かな　竹叟
衣うつ明り先なる榎かな　茶顚
埋火に鴇ありたけ聞えけり　知足
八朔やすゞめがはやす梅嫌　共文
世中や月夜がらすも花の中　郁賀
梁ははや暮にけりあきの風　池月
松に藤それさへも蚊のさはぎ哉　也草
埒なしに長閑なりけり山畠　杉長

信濃

梅咲てかくれきられぬ菴かな　天龍　梨翁
花の雨ねらひすまして濡にけり　葛三
人はとし露見て居(マヽ)をくらさるゝ　善光寺　五什
朝かげや馬の年きく大根引　一考
枇杷の葉の匂ひ淋しき扇かな　反古
落葉して雀の木とは成にけり　文路
雛の先がけしたるわかれかな　春尾
雪とけて町一ぱいの子ども哉　柯尺
長閑さや萩見し丘を田に出かす　武曰
涼しさは誰のでもなし三ヶの月　享和元年二月七日没　猿左
けさの雪竹のふし所も見廻たし　文化八年十月二日　柳莊
跳たやうに梅ふく戸口かな　富竹　みち丸
はつとして野分の月の出たりけり　、
かゝる代に生た上に櫻かな　アサノ　文虎
三ヶ月のしやんとつゝ立暑さ哉　、
華の事云ては腹をへらしけり　竜卜
涼しさや萩もすゝきも寝入ばな　長沼　允兆
春雨や居た共見えぬ藪の家　松宇

入月を今しばしとや鳴水雞　杉谷
淋しさを我にうつすな女良花　春甫
陽炎や中臥兒の古佛　呂芳

卯月廿五日發足の折から

江戸へいざ〳〵とやほとゝぎす　一茶
右は早苗ひだり卯のはな　春甫
市小屋に有明月の筋がひて　呂芳
茶呑に來よと笛をふく秋　魚淵
初あらしあつらへ通り過にけり　松宇
五尺の山も名所とぞいふ　允兆
二番目の膳はとつぷり夜に入て　甫
參り候御犬三疋　茶
あなにくの拵へ髭も凉しさよ　宇
袖引雨のけふも降つゝ　兆
唐崎や松の小脇の家かりて　掬斗
つひの行幸の牛洗ひけり　甫

子供らが錢崩(詩カ)け〳〵と夕月に　素鏡
桔梗刈萱やみくもにさく　斗
一人前栗もこなして仕廻けり　鏡
今や彼岸の谷(ヤツ)〳〵の鐘　筵人
此華をいくらも折れと札を立　淵
雀の分も青む萱畠　人

一茶立急して先しまひぬ

春風や猫のお椀も梅のはな　九才女しう
雫ちりて日ぼしき家もなかりけり　素鏡
鐘持の念佛中日永かな　掬斗
朝雨に腹ふくらして歸る鴈　筵人
我花を狹しと牡丹咲にけり　魚淵
植つけて先月を見る門田かな　程我
雁共が又落あひしさはぎ哉　三千可
紛れ來てひとり笑ひや苔清水　釋二休
乙鳥やほちり〳〵と竿の雨　有麥

けふきりの春と成けり門の垣　雪丸
朝詣鬼灯提てもどりけり　一保
雛頭やおのれひとりの秋日和　文化十一年四月廿五日没　冬水
鶯のふんまたぎ行小家かな　田中　希杖
郭公茄子の色の夜なりけり　丶
大鶏の身をもかこたす梅花　共翠
うつそりとして五月雨の烏哉　丶
行螢あちらの水がうまひやら　可候
そく〱と魚の面出す春の雨　白飛
暑き日も残りすくなの老木哉　雪居
引上げて見れば風吹燈籠かな　享和元年五月一日没　高井野　兎園
曲り所の草の青さよ春の水　春耕
門畠の上辷りして梅のはな　女　成布
我宿や清水の風の行とゞく　阜鳥
初秋や無事な御皃の三ヶの月　稲長
三月十日此邊の山ぶみして
氣に入た櫻の陰もなかりけり　一茶

夕顔も人の咲せる借家かな　六川　知洞
柴の戸やさく〱歩くきり〱す　丶
五月雨の蘚の付たる柳かな　大綾
降雨や十にも足らぬ鉢蔵　丶
山吹の友くづれする垣根哉　スハ　素檗
郭公鳴た空なり見て置ん　若人
夕暮や霧にせかれて元の川　飯田　壺伯
人なげになくや朝日の郭公　何頼
かはせみの声にちよいとや角田川　蕉雨
おさらばぞ仲よくいたせ門涼　享和元年五月廿一日辭世　柏原　宗原
梅がゝや門よりおくの長い事　文化十年十二月八日於當所没　若翁
甲斐
いふとのさはるやう也夜の華　可都里
みそ萩の咲えぬもけふに折られけり　有斐
晩までのこゝろすましけり更衣　漫々
蘚やたゞ咲事をうれしげに　草丸
田鼠の皃も見らるゝ春の雨　百二
朝な〱にくまれて咲梅のはな　樵村

秋風や小藪の中の富士の山　重行

夕案山子我にしばしのあるじせよ　一作

霜の夜や甲斐に居しめる膝頭　嵐外

江州

蛙なく夜が出來にけり比良伊吹　千影

やどり木の見えて春立梢かな　巾齋

湖をうれしがりけり角力取　宇洋

雲雀まで聲がとゞくぞ豆腐賣　鳥頂

人に來てとまりさうなり雪の鳥　洪園

所〳〵柳は見えて家遠し　士明

雲雀鳴湖へ捨るや足袋の砂　班車

俎にのせてもかすむ櫻かな　春雄

火を焚て見せる小家の青田哉　花陶

目をあけば日の暮てある櫻哉　于當

馬市や小川並べる雪の上（享和元年七月十七日没）　馬瓢

越後

閑古鳥こゝろ長くもなく事よ　幽嘯

風の來る窓から覗く春の月　喜年

蟷螂の男めかしてなかぬけな　長蕭

どのやうな木が嬉しいか閑古鳥　竹里

きく賣にゑぼし着せたる日柄哉　司風

若草の夜明もあるかかゝり舟　年眉

歸る鴈なけばぞけふも見てやりぬ　左琴

越中

蚤とりて殺しもせぬや角力取　白年

江戸の櫻大錢はらり〳〵かな　乾夫

有たけの夏のうまみかかきつばた　虎白

花に蝨の晴がましとや木隠る（文化十一年七月三日於高丘没）　秋守

加賀

幸は人にもよるやほとゝぎす　車大

鳥どものおし出れけり春の水　眉山

稲妻や閉しるものは荻の聲　甘谷

常陸

はつ春の人とも見ゆる妻子哉　湖中

春うれし茶水捨ても草になる　松江

三日月のはしより寒の募りけり　祇鳴

肌寒や藪木の下の明ず門　里石
水見ても笑ふが如し春の月 文化九年九月十五日没　遲月

奥(マヽ)陸

梅がゝの壁吹よごす草の菴　平角
玉まつり平家の人の通りけり　素郷
長閑さや足のつかへる菴の戸　雪岦
むら芒見やう見まねに穗に出る　東原
水鷄にも疎まれがまし世にあれば　雄淵
老けりな華見る迄を人まかせ　雨考
畑にも名をもつ夜也梅のはな　松前 布席
黄鳥のころがして行茶の實哉　冥々
菊もてば佗ぬ日はなし馬の面　きよ女
そこらうちいひ合せてやとぶ蚉　乙二

出羽

氣みじかに飛で戻てなく千鳥　野松
夏山や子にあらはれて鹿の鳴 享和三年十月廿五日没　五明
我ための夜のはしらや高灯籠 文化十年八月十二日没　長翠

三河

梅持て尻から這入戸口かな　卓池
ひとたびは父にも花のよしの山　秋擧

伊勢

薺や植しけふより華のやど　椿堂
梅の月うすくもこくもを(なカ)かりけり　路白
おなじくはひとつで更よきりぎりす　丘高

相摸

老らくと見てやくはしく鳴雲雀　澧水
山鴉に天窓つかへて露しぐれ　玉珂
濡色になづまぬ草の螢かな　叙來
しぐるゝや野は近付の女郎花　知(マヽ)㖨

尾張

梅盜む人は大かた月夜かな　岳輅
額朝の御馬先や初松魚　五雄
湯あがりの爪きれば散けしの花　逸人
梅折や腰から上は月ながら　梅間
植る間もはや隱れたし竹の蔭　東陽
屑籠の轉げて寒き戸口哉　麥阿

草の根にかくれて聞ん閑古鳥　文化四年三月廿五日没於名古屋　乙因
何をして人は暮すぞ須磨の秋　文化九年五月十五日没　士朗

京都

枯芦の日に〳〵折れて流れけり　寛政十一年五月三日没　闌更
山伏の螺にしづまる芒哉　蒼虬
夕燕ひとつは谷へ帰りけり　雪雄
我門を野山と思へほとゝぎす　金茶
ゆふぐれの山の高さよむら芒　其成
夕立にうたせておきぬ旅ごろも　月居

攝州

聲よきはぬるゝ鴫と思ひけり　尺艾
黄昏ば迹へよりけり梅のはな　八千坊
柳から見ればちいさし親の家　奇淵
蝶〳〵のくひ兀しけむ箔佛　魯隠
道のべのかゞしも逢ふやお霜月　長斎
落る所けふもかはらで桐一葉　非屈
すがる鳴ひゞきに開く桔梗哉　米彦
鶏の道も付たる清水かな　三津人
むら千鳥誰ぞか明し玉手箱　竹齋

華の日を伊達に閉たる切戸かな　松隣
きのふのが皆とおもへば帰る雁　万和

伯藏司賛

世は芒穂にこそ出ねみな狐　享和元年十二月廿八日没　二柳

自像賛

春の花こんな親爺じやなかつたに　文化二年三月十七日没　大江丸
不断来る人もかすむや畠道　桐栖
花の雲ことしも夢に暮す哉　一草

八月廿二日、叟身まかりぬと聞て、筆の落るもしらずお

どろく折から、またかたのごとくの書とゞく。さながらあの世へさそはるゝやうに、そゞろにうしろさむく、

此次は我身の上か鳴烏　一茶

大事の人をなくしたれば、此末つゞる心もくじけてたゞちにしなのへ歸りぬ。

文化十一年霜月十九日

後編　一　韓　人　来三月刻

信州俳諧寺一茶

江戸便所　小傳馬町三丁目幸手屋茂衛守靜方

おらが春

一茶著作集（五）

これ又因縁によれるべらし。

嘉永壬子春涅槃日

東都　瓢隱居逸淵

（序）

世々の變風、元祿に至りて正雅やゝ定まりしよりこのかた、諸家の風調、おの〳〵その得失によりて、風姿極りなしといへども、かの向上の一路は踏たがふ事なく、ひばりのくちさかしく、蚯蚓の鈍くおかしげなる、又は蓬の直よかに蕀のくねれるも、みな自然の風旨を具して、一しかも正雅にもとらざるは天の妙といふべし。其一妙を得たるしなぬの一茶、一期の風雅・言行ともに洒落にして焔王も眼をとき、獄卒も臍をかゝゆべし。しかはあれど毛頭れいの向上の本意を失はず、實に近世獨歩の俳道人とせむ歟。こたび同國の一之、家に傳へし坊が遺稿を、その儘上木して追慕のこゝろざしを盡す。予も旧知己をわすれず、坊が命終の年、柏原の旧里を訪ひて往事をかたるに、あるひは泣、あるひはわらひてわかれぬ。其俤まぼろしに見へて、扨こそこの集の序者にたてるも

昔たんごの國普甲寺といふ所に、深く淨土をねがふ上人ありけり。としの始は世間祝ひごしてざゞめけば、我もせん迚大卅日の夜、ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して、翌の曉にしか〴〵せよと、きといひをしへて本堂へとまりにやりぬ。小法師は元日の旦、いまだ闇み〳〵は小闇キに、初鳥の聲とおなじくかばと起て、敎へのごとく表門ンを丁〳〵と敲けば内より、いづこよりと問ふ時、西方彌陀佛より年始の使僧にゆと荅ふるよりはやく、上人裸足ニておどり出で、門の扉を左右へさつと開て、小法師を上坐に𥡴(請)じて、きのふの手帋をとりてうや〳〵しくいただきて讀ていはく、其世界は衆苦充滿にゆ間はやく吾國に來たるべし、聖衆出むかひしてまち入ゆ。とよみ終りて、おゝ〳〵と泣れけるとかや。此上人みづから工み拵へたる悲しみに、みづからなげきツゝ初春の淨衣を絞りて、したゝる泪を見て祝ふとは物に狂ふさまながら、俗人ニ對して無常を演ルを禮とすると聞からに、佛門においてはいはひの骨張なるべけれ。それとはいさゝか替りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴龜にたぐへての祝盡しも厄拂ひの口上めきて、そら〴〵しく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家は、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。

目出度さもちう位也おらが春　一茶

こぞの五月生れたる娘に、一人前の雜煮膳を居へて

這へ笑へ二ツになるぞけさからは

文政二年正月一日

とし男つとむべき僕といふものもあらざれば

名代にわか水浴る烏かな　一茶

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月　〃

山の月花盗人をてらし給ふ　〃

善光寺堂前

ツボサウゾクハウハギハ上ツ衣ノマヲハサミタ

灰猫のやうな柳もお花かな　〃

さくら〳〵と唄はれし老木哉　〃

ル婆也、今云カイドリハシヲリノサマ也。玉カヅラニツボヲリ婆ト云」。

櫻へと見えてじん〳〵端折哉　丶

初午

花の世を無官の狐鳴にけり　丶

かくれ家や猫にもすへる二日灸　丶

葎からあんな胡蝶の生れけり　丶

上野遠望

白壁の誹れながらかすみけり　丶

苗代は菴のかざりに青みけり　丶

花の陰あかの他人はなかりけり　丶

二月十五日

小うるさい花が咲迚寝釋迦かな　丶

みな佛や寝ておはしても花と銭　丶

猫の子や秤にかゝりツゝじやれる　丶

玉川

さらし布霞の足しに聳へけり　丶

妙專寺のあこ法師たか丸迚、ことし十一に成りけるが、三月七日の天うら〳〵とかすめるにめでゝ、くはんりうといふ、ふとくたくましき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまかりて、芹薺などつみて遊ぶ折から、彼綱おろしの雪解水、黒けぶり立て動〳〵と鳴りわたりておし來たりしに、いかゞしたりけん橋をふみはづしてだぶりと落たり。やあれ観了たのむ〳〵と呼はりて、爰に頭いづると見れば、かしこに手を出しツゝ、たちまち其聲も蚊のなくやうに遠ざかると見るを此世の名殘として、かげも容ちも見えざりけり。あはやと村の人〳〵打群りて、炬をかゝげてあちこち捜しけるに、一里ばかり川下の岩にて(は)さまりてありけるをとり上て、さま〴〵介抱しけるに、むなしき袂より蕗の薹三ツ四ツこぼれ出たるを見るつけても(見るにカ)、いつものごとくいそ〳〵歸りて、家内へのみやげのれうにとりしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆〳〵袖をぞ絞りける。とみに駕にのせて、初夜過るころ寺にかき入れぬ。ちゝ母は今やおそしとかけ寄りて、一目見るより、よゝ〳〵と人目も耻ず大聲に泣ころびぬ。日ごろ人に無常をすゝむる境界も其身に成りては、さすが恩愛のきづなに心のむすび目ほどけぬ(ぬるカ)はことはり也けり。旦には笑ひのゝしりて(はやし)(墨消シ)門出したるを、夕には物いはぬ屍と成りても

どる。目もあてらぬ(られカ)ありさまにぞありける。しかるに九日野送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下萠いそぐわか草を　一茶
野邊のけぶりになして見んとは

長〳〵の月日、雪の下にしのびたる蕗・蒲公のたぐひ、やをら春吹風の時を得て、雪間〳〵をうれしげに首さしのべて此世の明り見るやいなや、ほつりとつみ切らるゝ草の身になりなば、鷹丸法師の親のごくかなしまざらめや。草木國土悉皆成佛とかや。かれらも佛生得[た]る。の(たる)になん。

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙哉　一茶
梅の花炎を盜めとさす月か　〃
松嶋の小隅は暮て鳴く雲雀　〃
大猫の尻尾でなぶる小蝶哉　〃

三月十七日ほしな詣

花ちるやとある木陰も小開帳　〃
通りぬけせよと垣から柳かな　〃
餅腹をこなしがてらのつぎ穂哉　〃

正月元日の夜の丑刻より始りて。八日目〳〵(打つゞき)に天に音樂あるといふ事、誰いふともなく云觸らして、いつ〳〵の夜、。しかとき〻し(そんぜうここにて)(いふ脱カ)と人も有。又吹風の迹なし事とけなすものもあり。其噂、東西南北にぱつと弘りぬ。つら〳〵思ふに全く有りと信じがたく、又ひたすらなしとかたづけがたし。天地ふしぎのなせるわざにて、いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞したためしなきにしもあらず。今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優してたのしむならめ。それを聞得ざるは、其身の罪の程によるべし。何にまれ、あしからぬとりさたなりと、三月十九日夕過より誰かれ我菴につどひつゝ、おの〳〵息をこらして。待うち(今や〳〵と)、夜はしら〳〵明て、窓の梅の木に一聲有。

今の世も鳥はほけ經鳴にけり　一茶
鶯の馳走に掃しかきね哉　〃
馬迄もはたご泊や春の雨　〃
雀の子そこのけ〳〵御馬が通る　〃
かすむ日やしんかんとして大坐敷　〃
横乘の馬のつゞくや夕雲雀　〃

京嶋原

入口のあいそになびく柳かな　〃

藪村やまぐれあたりも梅の花　一茶

正月や夜はよる迚うめの月　〃

茶屋むらの一夜ニわきし櫻かな　〃

翌〳〵と待たるゝうちが櫻かな　白飛

なぐさみニわらを打也夏の月　一茶

四月八日

長の日をかはく間もなし誕生佛　〃

五月雨も中休ミかよ今日は　〃

病後

ちりの身とともにふは〳〵紙帳哉　〃

五月雨も仕廻のはらり〳〵かな　〃

小坐頭の天窓ニかぶる扇かな　〃

竹の子と品よく遊べ雀の子　〃

入梅晴や二軒並んで煤拂ひ　〃

谷藤橋

這わたる橋の下よりほとゝぎす　〃

はつ瓜を引とらまへて寝た子哉　〃

人形町

人形に茶をはこばせて門涼ミ　〃

今迄は罰もあたらず昼寝蚊屋　〃

蚊がちらりほらり是から老が世ぞ　〃

世がよくばも一ッ泊れ飯の蝿　〃

卯の花に一人きりの社かな　〃

幽栖

虫に迄尺とられけり此はしら　〃

身一ッすぐす迚、山家のやもめの哀さは

おの(が)里仕廻てどこへ田植笠　一茶

あつぱれの大わか竹ぞ見ぬうちに　〃

花つむや扇をちよいとほんのくぼ　〃

としよりと見るや鳴蚊の耳のそば　〃

戸隠山

居風呂へ流し込だる清水かな　〃

此入りはどなたの菴ぞ苔清水　〃

一ッ蚊のだまつてしくり〳〵かな　〃

其門に天窓用心ころもがえ　丶
かくれ家の柱で麥を打れけり　丶

越後女旅かけて商ひする哀さた

麥秋や子を負ながらいはし賣　一茶
笋よ人の子なく(マヽ)ば花咲ん　丶
芝でした休み所や夏木立　丶
山苔も花さく世話はもちこけり　丶
孑孑の天上したり三ヶの月　丶

獨樂坊

寢所見る程は卯花明りかな　丶
法の山や蛇もうき世を捨衣　丶

似雲法師（西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染の袖）としみちのくの方修行せんと、乞食袋首(にカ)かけて小風呂敷せなかに負たれば、影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるに、心は雪と墨染の袖と思へば／＼入梅晴のそらはづかしきに、今更すがた替へるもむつかしく、卯花月十六日といふ日、久しく寐馴れたる菴をうしろになして二三里も歩ミしころ、細杖をつく／＼思ふに、おのれすでに六十の坂登りつめたれば（天哉子ノ迹ナガラ是モ歌ノヤウナレバ書ツケヌ　ながらへて歸らんとも白川の關をはろゝゝ越る身なれば　一茶）一期の月も西山にかたぶく命、又ながらへて歸らんとも白川の關をはる／＼越る身なれば、十府の菅菰の十に一ッもおぼつかなしと案じつゞくる程に、ほとんど心細くて家／＼の鷄の時を告る聲も、とつてかへせとよぶやうに聞へ、畠／＼の麥に風のそよ吹くも誰ぞまねくごとく覺へて、行道もしきりにすゝまざれば、とある木陰に休らひて痩脛さすりつゝ詠るに、栢原はあの山の外、雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて、何となく名殘りおしさに、

思ふまじ見まじとすれど我家哉　一茶

おなじ心を

古郷に花もあらねどふむ足の
　跡へ心を引くかすみかな　仝
あまひらをおどろかさじと青麥に
　ほどよき風の吹すぐるかな　仝

朱文公勸學文
　日ゝ懈怠ニシテ不レ惜ニ寸陰ー
勿レ謂けふの日も棒ふり虫よ翌も又　一茶

今日不ㇾ學而有ㇾ來日。勿ㇾ謂今年不ㇾ學而有ㇾ來年。日月逝矣、歲不ㇾ我延。嗚呼老矣。是誰之愆ゾ

無ㇾ限欲有ㇾ限命

此風に不足いふ也夏坐敷　ゝ

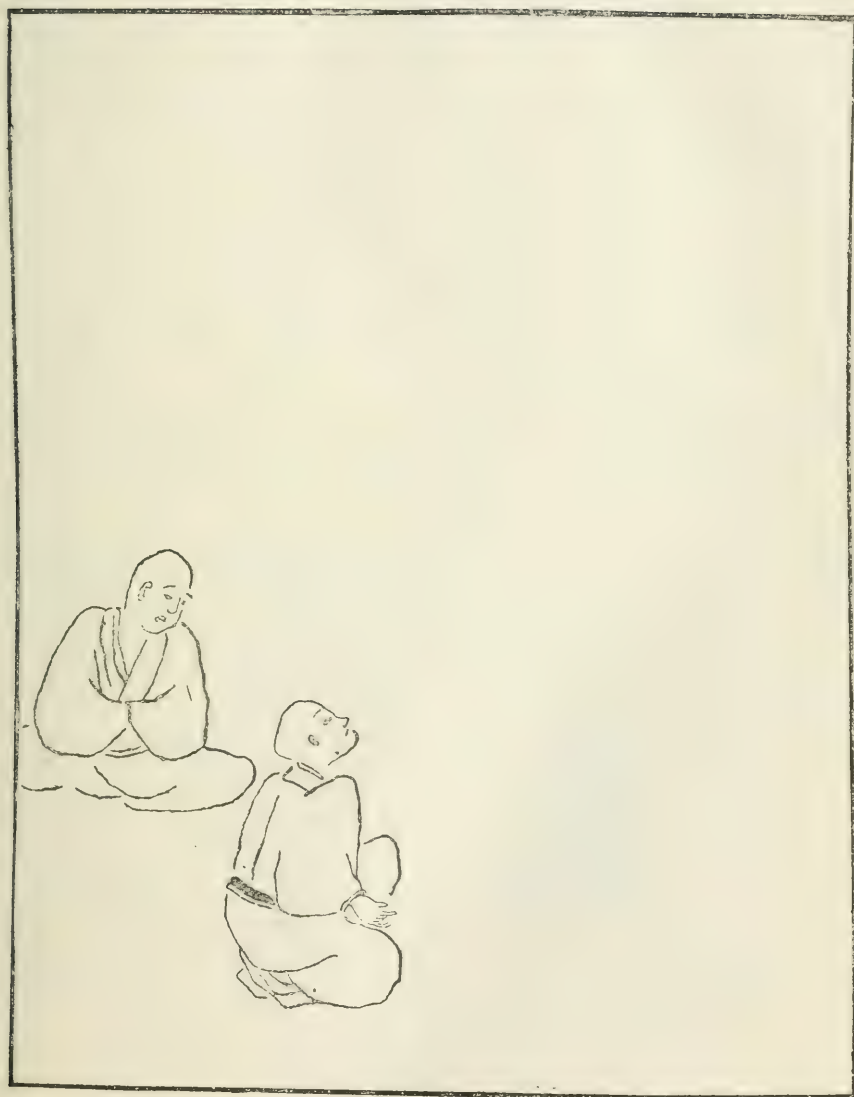
起〳〵の欲目引張る青田哉　ゝ

心に思ふことを

古郷は蝿迄人をさしにけり　ゝ

直き世や小銭程でも蓮の花　ゝ

松陰や寝蓙一ツの夏坐敷　ゝ

題童頭

三度掻て蜻蛉とまるや夏座敷　希杖

片息に成て逃入る螢かな　一茶

夕兒の花で涕(マヽ)てかむおばゝ哉　一茶

あつい迚つらで手習した子哉　ゝ

大螢ゆらり〳〵と通りけり　ゝ

田中川原如意湯に書浴みして

なを著し今来た山を寝て見れば　ゝ

なむあみだ佛の方より鳴蚊哉　ゝ

とべよ蚤同じ事なら蓮の上　ゝ

かくれ家は蝿も小勢でくらしけり　ゝ

ひいき鶉は又もから身で浮みけり　ゝ

松の蝉どこ迄鳴て晝になる　ゝ

（重出）今迄は罰もあたらず晝寝蚊屋　ゝ

はなれ鵜が子のなく舟にもどりけり　ゝ

わが友魚淵といふ人の所に、天が下にたぐひなき牡丹咲きたり迚、いひつぎきゝ傳へて界隈はさら也、よそ國の人も足を勞してわざ〳〵見に来るもの、日〳〵おほかりき。おのれもけふ通がけに立より侍りけるに、五間ばかりに花園をしつらひ、雨覆ひの蓆など今様めかしてりゝしく、しろ・紅ゐ・紫、はなのさま透間もなく開き揃ひたり。其中に黒と黄なるは、いひしに違はず、目をおどろかす程めづらしく妙なるが、心をしづめてふたゝび花のありさまを思ふに、ばさ〳〵として何となく見すはらしく、外の花にたくらぶれば、今を盛りのたをやめの側に、むなしき屍を粧ひ立て、並べおきたるやうにてさら〳〵色つやなし。是主人のわざくれに、紙もて作りて葉がくれにくゝりつけて人を化すにぞありける。されど腰

かけ臺の價をむさぼるためにもあらで、たゞ日〳〵の群集に酒・茶つひやしてたのしむ主の心、おもひやられてしきりにをかしくなん。

紙屑もぼたん兒ぞよ葉がくれに　一茶

蛙の野送

爰らの子どもの戯に、蛙を生ながら土に埋めて諷ふていはく、ひきどのゝお死なつた、おんばくもつてとぶらひに〳〵、と口〳〵ニはやして、芣苡の葉を彼うづめたる上に打かぶせて歸りぬ。しかるに本草綱目、車前艸の異名を蝦蟇衣といふ。此國の俗、がいろつ葉とよぶ。おのづからに和漢、心をおなじくすといふべし。むかしはかばかりのざれごさへいはれあるにや。

卯の花もほろり〳〵や蟇の塚　一茶

此もの諸越の仙人ニ飛行自在の術ををしへ、我朝天王寺には大たゝかひに、ゆゝしき武名を殘しき。それは昔〳〵のことにして、今此治れる御代に隨ひ、ともに和らぎツゝ夏の夕暮せどに莚を廣げて、福よ〳〵と呼べば、やがて隅の藪よりのさ〳〵這ひよりて人と同じく涼む。其つら魂ひ一句いひたげにぞありける。さる物から長嘯子の虫合に哥の判者ニゑらまれしは、汝が生涯のほまれなるべし。

ゆうぜんとして山を見る蛙哉　一茶

鶯にまかり出たよ引蟾　其角

思ふことだまつて居るか蟾　曲翠

電(イナヅマ)一雫天窓なでけり引がへる　一茶

そんじよそこ爰と青田のひいき哉　〃

闇の蚊のぶんとばかりニ焼れけり　〃

鵜の眞似は鵜より上手な子ども哉　〃

寝並んで遠夕立の評義哉　〃

留主中(も)釣り放しなる紙帳かな　〃

山番の爺が祈りし淸水かな　〃

蓮の葉に此世の露は曲りけり　〃

狗ニ爰へ來よとや蟬の聲　〃

五月廿八日

とらが雨など輕んじてぬれニけり　〃

しなのゝ國墨坂といふ所に、中村何がしといふ醫師ありけり。其の父のわざくれに蛇のつるみたるを打殺したりけるが、其夜かくれ所の物づき〳〵痛み出して、つひにくされて、ころりとおちて死けるとかや。其子、親の業をつぎて三哲といふ。並〳〵より勝れて、ふとくたくましき松茸のやうなるものもちたりけり。しかるに妻を迎へて、始て交りせんとする時、棒を立たるやうなるもの、たゞちにめそ〳〵と小さく、灯心に等しくふは〳〵として、今さらにふつと用立ぬものから、耻しくもどかしくいま〳〵しく、婦人を替たらましかば又幸あらんと、百人ばかりもとり替へ引かえ、妾をかゝえぬれどみな〳〵前の通りなれば、狂氣のごくたゞいらちにいらちて、今は獨身にてくらしけり。かゝる事うぢ拾遺物語、其外昔双紙などにばかりと思ひ捨侍りけるを、今目の前に見んとは、是かの蛇の執念に其家血筋たやすならんと、人〳〵ひそかに噂(マヽ)きけり。されば生とし活るもの、蚤・虱にいたる迄、命おしきは人に同じからん。ましてつるみたるを殺すは罪深きわざなるべし。

魚どもや桶ともしらで門涼み　一茶

とくかすめとく〳〵かすめ放ち鳥　〃

彼岸の蚊釋迦のまねして喰れけり　大江丸

水ふねにうきてひれふる生け鯉の
　命まつ間もせはしなの世や　光俊卿

ふしつけしおどろが下に住むはへの
　心おさなき身をいかにせん　俊頼卿

淺間山

焚兒やほつほと燃る石ころへ　一茶

俳諧宗匠雲水に送る

鬼茨も添て見よ〳〵一涼み　〃

孟子　古之爲ㇾスハ關ヲ也、將ニ以テ禦ガントㇾ暴ヲ。今之〔爲〕爲ㇾスハ關ヲ也、將ニ以テ爲セントㇾ暴ヲ。

關守りの灸点はやる梅の花　一茶

人聲に子を引かくす女鹿かな　〃

はつ螢其手はくはぬとびぶりや　〃

蓮の花少曲るもうき世哉　〃

限（マヽ）界のなまけ所や木下闇　、

大沼
萍の花からのらんあの雲へ　、

越後
柿崎やしぶ〳〵鳴の閑古鳥　、

江戸住居
青草も錢だけそよぐ門凉　、
なでしこに二文が水を浴せけり　、

小金原
母馬が番して呑す淸水哉　、
風あるをもつて尊ふとし雲の峰　、
疫病神蚤も肩（負）せて流しけり　、

茂林寺
蝶〳〵のふはりととんだ茶釜哉　、
櫻迄惡く云はする藪蚊哉　、
蟻の道雲の峰よりつゞきけん　、

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森ニて栗三ッ拾ひ來りて、庭の小隅に埋め置たりしに、つや〳〵と芽を出し

て嬉しげなりけるを、東隣ニて家ニ家を造り足しぬるからに、月日の惠みとゞかず、雨露の潤ひうとければ、其としやをら一尺ばかり伸びけり。しかるを此國のならひ、冬に成れば東より、西より、南より、北より家の大雪をひたおとしに落し込むからに、恰も越のしら山、一夜に兀（忽）と涌出たるにひとしく、其山に薪水をはこぶ道を作るに愛宕山の石檀（壇）登るがごとし。漸二三月ごろおしなべて長閑なるニ、隣〳〵の脊戸畠は草木靑み　わたりて花もまれ〳〵咲けるに、彼山はいまだ眞白妙に風冴へて嚴寒を欺くけしきニて、やゝ卯月八日、髮さけ虫の歌を厠に張るころ、山鶯の折しり皃に鳴けば、雪の消ぇ口より見るに哀なるかな、栗の木末は根際よりほきりと折て仕廻ぬ。人ならば直に無常のけぶりと立昇るべきを古根よりそろ〳〵靑葉吹て、かろうじて一尺ばかり伸けるを、又前のごく家の雪を落し込れてほきりと折れ、年〳〵折れ〳〵て、とし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入るちからなく、されど此世の緣盡ざれば枯も果ずして、生涯一尺程にて生て居るといふばかりなるべし。我又さの通り、梅の魁

に生れながら茨の遅生へに地をせばめられツヽ、鬼ばヽ山の山おろしに吹折れ〳〵て、晴れ〳〵しき世界に芽を出す日は一日もなく、ことし五十七年、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ也。しかるに、おのれが不運を科なき草木に及すその不便也けり。

なでしこやまゝはゝ木ゝの日陰花　一茶

さるべき因縁ならんと思へば、くるしみも平生とは成りぬ。

朝夕に覆かぶさりし目の上の
辛夷も花の盛り也けり　一茶

其引

子ばかりの蒲團に芦の穗綿哉　山崎 宗鑑

竹の雪はらふは風のまゝ子哉　正勝

うつくしきまゝ子の皃の蠅打ん　紅雪

なけゝ迚蚊さへ寝させぬまゝ子哉　未達

貞享四丁卯歌仙
葛の綱目をゆるされし文
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて　芭蕉

祇園拾遺
下部ひそかに首埋めける
繼母の又ロばしる夜の雨　未達

おく五哥仙
山木「か」かくれて草に血をぬる　芭蕉
わづかなる世をまゝ母に僞られ　風流

小さき土鍋のありけるを我腹の子にとらせて、とらせざりければ、鶯の鳴をきゝてよめるとなん。

鶯よなどさはなきそちやほしき
小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでも知れる、爪を咥へて門に立。と子どもらに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの畠に木萱など積たる片陰に踞りて長の日をくらしぬ。我身ながらも哀也けり。

我と來て遊べや親のない雀　六才 彌太郎

昔、大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一椀見せびらかしていふやう、是をあの石地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、まゝ子はひだるさたへがたく、石佛の袖にすがりてしか〳〵ねがひけるに、ふしぎやな石佛、大口明てむし

〳〵喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もほつきり折て、それより我うめる子とへだてなくはごくみけるとなん。其地藏ぼさち今ニありて、折〳〵の供物たへざりけり。

　ぼた餅や藪の佛も春の風　一茶

こぞの夏、竹植る日のころ、うき節茂きうき世ニ生れたる娘、おろかにして、ものニさとかれ迚名をさとゝよぶ。とし誕生日祝ふころほひより、てうち〳〵あはゝ天窓てん〳〵、かぶり〳〵ふりながら、おなじ子どもの風車といふものをもてるを、しきりニほしがりてむづかれば、とみニとらせけるを、やがてむしや〳〵しやぶつて捨て露程の執念なく、直に外の物に心うつりて、そこらにある茶碗を打破りツゝ、それもたゞちニ倦て障子のうす紙をめり〳〵むしるに、よくした〳〵とほむれば誠と思ひ、きやら〳〵と笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一点の塵もなく、名月のきら〳〵しく清く見ゆれば、迹なき俳優見るやうになか〳〵心の皺を伸しぬ。又、人の來りてわん〳〵はどこにといへば犬に指し、かあ〳〵はと問へば鳥にゆびさすさま、口もとより爪先迄愛敎こぼれてあひらしく、いはゞ春の初草に胡蝶の戯るゝよりもやさしくなん覺へ侍る。此おさな、佛の守りし給ひけん、逮夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして鈴(リン)打ならせば、どこに居てもいそがはしく這よりて、さわらびのちいさき手を合せて、なんむ〳〵と唱ふ聲、しほらしく、ゆかしく、なつかしく殊勝也。それニつけてもおのれ、かしらにはいくらの霜をいたゞき、額にはしは〳〵波の寄せ來る齡ニて、彌陀たのむすべもしらでうか〳〵月日を費やすこそ、二ツ子の手前もはづかしけれと思ふも、其の坐を退けばはや地獄の種を蒔て、膝にむらがる蠅をにくみ、膳を巡る蚊をそしりツゝ、剩、佛のいましめし酒を呑む。折から（是ヨリ見ルニツケツヽ迄小兒ノサマ）門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲のすれば、たゞちニ小椀投捨て片いざりにいざり出て、聲を上げ手眞似して、うれしげなるを見る(に)つけツゝ、いつしかかれをもふり分髮のたけになして、おどらせて見たらんには、廿五芥の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと、我身につもる老を忘れて、うさをなんはらしける。

かく日すがらをじかの角のつかの間も手足をうごかさずといふ事なくて、遊びつかれる物から朝は日のたける迄眠る。其うちばかり母は正月と思ひ、飯焚そこら掃かたづけて、團扇ひら〳〵汗をさまして、閨に泣聲のするを目の覺る相圖とさだめ、手かしこく抱き起してうらの畠に尿やりて、乳房あてがえば、すは〳〵吸ひながら、むな板のあたりを打たゝきて、にこ〳〵笑ひ顔を作るに、母は長〳〵胎内のくるしびも、日〳〵襁褓の穢らしきもほと〳〵忘れて、衣のうらの玉を得たるやうに、なでさすりて一入よろこぶありさまなりけらし。

　蚤の迹かぞへながらに添乳哉　一茶

より〳〵思ひ寄せたる小兒をも、遊び連にもと爰に集ぬ。

柳からもゝんぐあゝと出る子哉　〻

蓬萊になんむ〳〵といふ子哉　〻

年問へば片手出す子や更衣　〻

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷　〻

名月を取てくれろとなく子哉　〻

子寶がきやら〳〵笑ふ榾火哉　〻

あこが餅〳〵とて並べけり　〻

妹が子の春負ふた形りや配餅　〻

餅花の木陰にてうちあはゝ哉　〻

涼風の吹く木へ縛る我子哉　〻

わんぱくや縛られながらよぶ螢　〻

其引

あゝ立たひとり立たるとし哉　貞德

子にあくと申人には花もなし　芭蕉

袴着や子の草履とる親心　子堂

花といへも一ツいへやちいさい子　羅香

春雨や格子より出す童の手　東來

早乙女や子のなく方へ植て行　葉拾

はしとり初たる日

折とても花の木の間のせがれ哉　其角

鵙鳴や赤子の頬をすふ時に　仝

男にきらはれて親のもとに住みけるに、おのが子の初節

句見たくも、昼は人目茂げゝれば、

　去られたる門を夜見る幟かな　　女 よみしらず

子を思ふ實情さもと聞へて哀也。猛きものゝふの心を和らぐるとは、かゝる眞心をいふなるべし。いかなる鬼男なりとも風の便りにもきゝなば、いかでかふたゝび呼び歸さゞらめや。

所有畜類是レ世々ノ親族ナリ　となん、親をしたひ子を慈む情、何ぞへだてのあるべきや。

　人の親の烏追けり雀の子　　鬼貫

　夏山や子にあらはれて鹿の鳴　　五明

　負て出て子にも鳴かする蛙哉　　東陽

　鹿の親笹吹く風にもどりけり　　一茶

　小夜しぐれなくは子のない鹿に哉　　、

　子をかくす藪の廻りや鳴雲雀　　、

樂しみ極りて愁ひ起るはうき世のならひなれど、いまだたのしびも半ばならざる千代の小松の二葉ばかりの笑ひ盛りなる緑り子を、寢耳に水のおし來るごとき、あら〳〵しき痘の神に見込れツゝ、今水濃のさなかなれば、やをら咲ける初花の泥雨にしほれたるに等しく、側に見る目さへくるしげにぞありける。是も二三日經たれば痘はかせぐちにて、雪解の峡土のほろ〳〵落るやうに瘡蓋といふもの取れば、祝ひはやしてさん俵法師といふを作りて、笹湯浴せる眞似かたして神は送り出したれど、益〳〵よはりてきのふよりけふは頼みすくなく、終に六月廿一日の蕣の花と共に此世をしぼみぬ。母は死兒にすがりて、よゝ〳〵と泣もむべなるかな。この期に及んでは行水のふたゝび歸らず、散花の梢にもどらぬくひとなどゝあきらめ兒しても、思ひ切がたきは恩愛のきづな也けり。

　露の世は露の世ながらさりながら　　一茶

去四月十六日、みちのくにまからんと善光寺迄歩みけるを、さはる事ありて止みぬるも、かゝる不幸あらん迚、道祖神のとゞめ給ふならん。

其引

子におくれたるころ

　似た兒もあらば出て見ん一踊　　落梧

母におくれたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮　尙白

娘を葬りける夜

夜の鶴土ニ蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて、三月三日野外に遊ぶ

宿を出て雛忘れば桃の花　猿雖

娘身まかりけるに

十六夜や我身にしれと月の欠　杉風

猶子母ニ放れしころ

柄をなめて母尋るやぬり團扇　來山

愛子をうしなひて

春の夢氣の違はぬがうらめしい　仝

子をうしなひて

蜻蛉釣りけふはどこ迄行た事か　千代

やんごなき人〳〵の歌も、心に浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ。

哀也夜半に捨子の泣聲は　よみ人しらず

母に添寢の夢や見つらん

捨て行く親したふ子の片いざり　爲家卿

世に立かねて音こそなかるれ

人の親の心は闇にあらねども　兼輔卿

子を思ふ道に迷ひぬる哉

頌曰

未ダ擧ゲレ歩時キ先ヅ已ニ到ル　未ダ動レ舌ノ時キ先說キ了ル
直饒著ヽ在ルモ機先ニ　更須クレ知ルレ行ニ向上ノ竅一

落々ハ其ノ一言バ一手ヽト云心也

貰ふよりはやくうしなふ扇かな　一茶

俄川とんで見せけり鹿の親　〃

大寺や扇でしれし小僧の名　〃

曲者隱れてうかゞふ圖

あばれ蚊のついと古井ニ忍びけり　〃

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷かな　〃

太郎冠者まがひに通る扇かな　〃

紫の里近きあたり、とある門に炭團程なる黑き巢鳥をとりて、籠伏せして有りけるに、其夜親鳥らしく夜すがら其家の上に鳴ける哀さに、

子を思ふ闇やかはゆい〳〵と
　聲を烏の鳴あかすらん　一茶

流人おのが古郷に隠れて縛れしに、
　業(ガウ)の鳥罠を巡るやむら時雨　〃

御成り場所に、鳥どもの餌蒔をしたふ不便さに、
　人呪き鵆よどちらに箭があたる　〃

箭の下に母の乳を呑む鹿子哉　立志
　さすがのさつ男も聲切りしはかゝるおり
　になんありける。

おのれ住る郷はおく信濃黒姫山のだら〳〵下りの小隅なれば、雪は夏きへて霜は秋降る物から、橘のからたちとなるのみならで、万木千草上ゝ國よりうつし植るに、ヿ〳〵く變じざるはなかりけり。

九輪草四五りん草で仕廻けり　一茶

　鎮西八郎爲朝、人礫うつ所に
時鳥蠅虫めらもよつく聞け　〃
鹿の子や横にくはへし萩の花　〃
　老翁岩に腰かけて一軸をさづくる
圖に
我汝を待こと久しほとゝぎす　〃

　幽栖
我家に恰好鳥の鳴にけり　一茶
二三遍人をきよくつて行螢　〃
飛螢其手はくはぬくはぬとや　〃

史記李廣傳カ贊ニ桃李不言下自成蹊

　成蹊子こその冬つひに不言人と成
　りしとなん　鶯笠のもと印より此
　ごろ申おこせたりしを
つの國の何を中も枯木立　〃
白笠を少さますや木下陰　〃
まかり出たるは此の藪の蟇ニてゅ　〃
雲を吐く口つきしたり引蟇　〃
赤い葉の榮耀ニちるや夏木立　〃
稲妻や一切ツヽに世が直る　一茶
石川はくはらり稲妻さらり哉　〃
夕霧や馬の覺へし橋の穴　〃
秋風に歩て逃る螢かな　〃
　二番休
乳呑子の風よけに立かゞし哉　〃

連にはぐれて

一人通ると壁に書く秋の暮　〃

七月七日墓詣

一念佛申だけしく芒哉　〃

木啄のやめて聞かよ夕木魚　〃

木つゝきが日利して居る蓶哉　〃

經堂

虫の屁を指して笑ひ佛哉　〃

得手ものゝ片足立や小田の鴈　〃

山寺や椽の上なる鹿の聲　〃

下手笛によつくきけとやしか(の)聲　〃

茸狩のから手でもどる騒かな　〃

さと女卅五日墓

秋風やむしりたがりし赤い花　〃

さをしかの喰こぼしけり萩の花　〃

我やうにどつさり寢たよ菊の花　〃

のらくらが遊びかけんの夜寒哉　〃

露の玉つまんで見たるわらは哉　〃

立よらば大木の下迚、大家には貧しき者の腰をかゞめて、おはむきいふもとはりになん。爰の諏方(訪)宮ニ大きさ牛をかくす栗の古木ありて、うち見たる所は葉一ツもあらざりけるに、其下をゆきゝする人、日〳〵とり得ざるはなかりけり。

十五夜は高井野梨本氏ニありて

古郷の留主居も一人月見哉　一茶

月蝕皆既　亥七刻右方ヨリ缺、子六刻甚ク丑ノ五刻左終。

人數は月より先へ缺ニけり　〃

人の世は月もなやませ給ひけり　〃

(僭)潜上ニ月の缺るを目利かな　〃

酒盡てしんの坐ニつく月見哉　〃

おのが味噌のみそ嗅(臭)をしらず

蕎麥國のたんを切ッゝ月見哉　〃

九月十六日正風院菊會

鍬さげて神農兒や菊の花　〃

菊園や歩きながらの小盃　ヽ
杖先で蕾解する也きくの花　ヽ
入道の大鉢卷できくの花　ヽ
下戸苍が疵也こんな菊の花　ヽ
さと女笑兒して夢に見えけるまゝを
頰べたにあてなどしたる眞瓜哉　一茶
どう追れても人里を渡り鳥　ヽ
山雀の輪拔しながらわたりけり　ヽ
鵙の聲かんにん袋きれたりな　ヽ
蟷螂や五分の魂是見よと　ヽ
高井野の高みに上りて
秋風や磯石にあてる故鄕山　ヽ
行灯を松に釣して小夜砧　ヽ
行な鴈住ばどつちも秋の暮　ヽ
若僧の扇面に
影法師に耻よ夜寒のむだ歩き　一茶

こんな村なんどの行か渡り鳥　白飛
藪陰やとし酒屋のとし酒　士英
老樂
子どもらを心でおがむ夜寒哉　一茶
蚌のとぶや唐箕のほこり先　ヽ
小菊なら縄目の耻はなかるべし　ヽ
戸迷ひせし折からに
小便所爰と馬よぶ夜寒哉　ヽ
喧嘩すなあひみたがひの渡り鳥　ヽ
さをしかやゑひしてなめるけさの霜　一茶
狼は糞ばかりでも寒かな　ヽ
一つかみ塗樽拭ふ紅葉哉　ヽ
むら千鳥そつと申せばぱつと立　ヽ
炭の火や朝の祝義の咳ばらひ　ヽ
三介が敲く木魚もしぐれけり　ヽ
木がらしやから呼されし按摩坊　ヽ
善光寺門前憐乞食
重箱の錢四五文や夕時雨　ヽ

大根引拍子ニころり小僧かな　〃

はつ雪の降り捨てある家尻哉　〃

木がらしや折介歸る寒さ橋　〃

菜畠を通してくれる十夜哉　一茶

雪ちるやおどけもいへぬしなの空　〃

能なしは罪も又(原註、亦)なし冬籠　〃

强盗はやりければ

張番ニ菴とられけり夜の霜　〃

彼是といふも當坐ぞ雪佛　〃

お袋がお福手ちぎる指南哉　〃

餅搗が隣へ來たといふ子哉　〃

餅花

かまけるな郷の枝にもちがなる　〃

子のまねを親もする也節きゆ　〃

東に下らんとして中途迄出たるに

椋鳥と人ニ呼るゝ寒かな　一茶

護持院原

木がらしや廿四文の遊女小屋　〃

兩國橋

寒垢離ニせなかの竜の披露哉　〃

かも川をわたらじとちかひし人さへあるに、ひと度籠りし深山を下りて、しら髪つむりを吹れツゝ名利の地に交る

はづかしやまかり出てとる江戸のとし　〃

其迹は子どもの聲や鬼やらひ　一茶

小人閑居成ニ不善一

冬籠り悪く物喰を習けり　〃

廿一日節分

一聲に此世の鬼は逃るよな　〃

けふからは正月分ぞ麥の色　〃

札納

梅の木や御祓箱を負ながら　〃

廿七日晴

坊守り、朝とく起て飯を焚ける折から、東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば、例之通り來たるべし。冷てはあしかりなん、ほか〳〵湯けぶりの立うち賞翫せよといふ

からに、今や〳〵と待にまちて、飯は氷りのごとく冷えて餅はつひに來ずなりぬ。

我門へ來さうにしたり配餅　一茶

他力信心〳〵と、一向に他力にちからを入て頼み込み輩は、つひに他力縄に縛れて、自力地獄の炎(ホノホ)の中へぼたんとおち入ゆ。其次に、かゝるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金の膚になしくだされと、阿彌陀佛におし誂へに、誂ばなしにしておいて、はや五体は佛染み成りたるやうに惡るすましなるも、自力の張本人たるべくゆ。問ていはく、いか様に心得たらんには御流義に叶ひ侍りなん。答ていはく、別に小むづかしき子細は不レ存ゆ。たゞ自力他力、何のかのいふ芥(アクタ)もくたをさらりと、ちくらが沖へ流してさて後生の一大事は、其身を如來の御前に投出して、地獄なりとも極樂なりとも、あなた様の御はからひ次第、あそばされくださりませと御頼み申ばかり也。如斯決定しての上には、なむ阿みだ佛といふ口の下より、欲の網をはるの野に手長蜘の行ひして人の目を霞め、世渡る鴈のかりそめにも我田へ水を引く盜み心をゆめ〳〵

持べからず。しかる時はあながち作り聲して念佛申に不レ及、ねがはずとも佛は守り給ふべし。是則當流の安心とは申也。穴かしこ。

（親鸞上人陽ヌル地獄極樂ヨクキケバ只一念ノシハザ也ケリ）ともかくもあなた任せのとしの暮　五十七齢　一茶

文政二年十二月二十九日

此一卷や、しなのゝ俳諧寺一茶なるものゝ草稿にして、風調晒(洒)ゝ落ゝ今杜をなす。こや寸毫も晒落にあらず。しかもよく佛離(離)祖室をうかゞひ、さる法師がつれ〳〵もあやからず。一休・白隱は猶しかなり。手ぶりはおのれが手ぶりにして、あが翁の細みをたどり、敢て世塵を厭ず、人情またやるかたなし。悪我此外に何をかいはむ。

嘉永四辛の亥春彼岸仲日　瓢界四山人しるす

かの岸もさくら咲日となりにけり

惟然坊は元祿(㋘)の一畸人にして、一茶坊は今世の一奇人也。そが發句のをかしみは人々の口碑に殘りて、世のかたり草になるといへども、たゞに俳諧の皮肉にして、此坊が本旨にはあらざるべし。中野のさと一之が家に祕めおける一卷物や、ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれを盡して、人情世態無常觀想殘す處なし。もし百六十年のむかしに在て、祖翁の過眼を得むには、惟然の兄とやのたまはんか、弟とや申し玉はむか。

惺庵西馬

脇起誹諧連歌

元日や上々吉の淺黄空　一茶居士
むつくり起にくゞる門松　一之
惣領の爪に次郎も加勢して　逸淵
からすおどしの鎌のいらだつ　詠久
ものほしへ月見道具をかざり付　西馬
おつとりまいて蕎麥すゝる音　弘湖
十人が九人はしらぬ牛祭り　半湖
おどけばなしに道のはかどる　松室
温泉もどりの折から不意の出來心　銀岱
あづけた先で娃がかしづく　和春
幾軒もおなじ暖簾の糸屋町　潮堂
吹雪のあとの鐘しづかなり　完和
冴る月洗ふ葱のともひかり　生々
輕籠仲間の小無盡を取る　梅塵
此頃は耳のほめきも遠のいて　烏霞
寄かゝるには都合よい壁　迎祥
花殘るわか葉に酒も呑ならひ　梅笠

諏訪の水鶏のかすみ行影　蓑一

右一順

見おろした柳見あぐる泊りかな　京 梅室
柴舟に寄そふ鴉やはるの雨　梅通
何庭やらになじみある野のすみれかな　有節
田代りやあまりにはやき旅すがた　禾明
鶴聞て萬歲道入る木の間かな　九起
雪も地におかぬ往來や若夷　ナニハ 鼎左
はつ花や折られぬ幹に梅の花　其山
咲ぬ樹も大分見えて山ざくら　ヲハリ 而后
明しらむ星はことしのひかりかな　黃山
聲ゝに都へむくやはつがらす　アハ 鳳棲
わか菜つみけふよりはるのゆるみ哉　茶雷
歸る氣の見えても久し小田の鴈　トサ 古鳳
聖をまつ間に鶯の高音かな　雲外
磯菜つむ手にさゞ波のそばへけり　イヨ 鶯居

浪に手を洗ふて歸る子日かな　オク 舍用
ひた〳〵と雪解の草の靑みけり　一止
老たちの出る夜となれば朧月　たよ女
山ゝのわらひさそふや松の聲　デハ 御風
夜咄しや蚤に寢ぬ眼を持ながら　エチゴ 乙良
はだか木のぬれて明たつ霞かな　鷺眠
さほひめやうかゞふ島のわら家かな　水溪
梅白し雪は空から消て降る　如水
香を傳にうめを尋る闇夜かな　一得
花に手のとゞく樹はなし原の梅　千布
花の雪それさへ終に消にけり　梅二
田へ出てさわぐ鷗や風かすむ　大經
うきいでゝみゆる月夜のさくら哉　茶山
山かげや晝の月にも啼かはづ　エッチウ 旭芝
漣に遠くしらむやうめの花　恕兮
咲たわむ花の重みや朝ぐもり　三山
撫て見る膝のしめりや夜の花　蘭圃
身のぬくみ雨にうたせて歸る鴈　梅人

鶯や三聲四聲で往にがまひ　カヾ大夢
懸鯛のめにさへはるのひかり哉　卓丈
聲おくるやうに田毎のかはづかな　柳壺
黄鳥に着替て出たり贋小袖　江波
葉のかちて折透のなき椿かな　サガミ立宇
仰山に吹は吹てもはるの風　貞止
散とまる花やほのかに水のおと　ヒタチ紫山
わらの香のはつ日にほめく戸口かな　李郷女
井ざらひの水さへ梅のながれかな　上毛分尾
蜑の子も鳥も囀る日ごろかな　米室
肱まくらそれにもあるや花のはる　梅雄
笑ふやらこちら向きけり筑波山　米白
月日よりうとき花なれ木蓮花　臥鶴
雨わびる志賀の旅寝や鮒鱠　一朗
いらぬ灯もともしてあるや薺夜　栗堂
鶯や東風ふく耳に手をかざす　鹿鳴
はる雨や人につき来る野の匂ひ　竹煙
年禮や生れかはりし悪太郎　下毛桃僊

黄鳥の音にしる谷のふかさかな　布巣
はつ鶏の聲にしづまる街かな　ムサシ大齢
浸しおく水に芽をふく山葵哉　其椎
譬やうも見るたび變る柳かな　天山
掃ぞめや數奇屋がゝりの玉襷　汶平
ひとすぢにかぎらぬ道や御忌詣　南ゝ
江の水のむかふしらみや梅の花　凉花
蓬莱にかけて置けり母子ぐさ　竹山
夕だちにぬれぬ處や春の雨　江戸四山
元日にそむくものなし朝げしき　可川
摘えらみして蒿のなき木の芽哉　生ゝ
蝶の舞ふかたからかわく畑かな　机友
わたくしにうごく日はなき柳かな　靖夫
山ざとや日のあるうちに梅の月　介于
封きらぬうち先うれし懸想文　笠山
梅咲て月の廣がる小庭かな　梅月女
こゝろほど仲ぬ睦月の日脚かな　左波
西ひがしいづれをとはむはなの雲　井蛙

今栽た木の根におくや花すみれ　柏堂
切爪のみゆるまで見て泣子かな　克明
鶯の朝來て啼木知れに兒　相我
寄るなみをみて居るさまや春の鳥　雲水 玄子
花の中楓もゆるぞいそがしき　波同
こゝろよくやればまた來つ梅貰ひ　立器
鶯や雨になれたる朝の聲　墨芳
たいらみのあれば山路も揚雲雀　五八九
薄いのにけつく奥あるかすみ哉　蓑一
兎もすると如月の星冴にけり　樊弟
夜は夜の遊びありけり花の春　蒼布
口のさして消ぬ風情や梅の雪　銀侶
人の見る柳にしたるさし木かな　田禾
萬藏やふるきすがたのめづらしき　可大

鳴た兒そゝいではうくかはづかな　梅笠
風のひかりにかわく細道　一之

鞦韆のおさななじみの家訪ふて　笠
下戸と上戸にとりわける菜　之
鹿笛のうたぐちしめす月の影　笠
蓍ほつ〳〵みゆるあさがほ　之
露霜に野水が庭も思ひ出し　笠
蹴あげの泥に羽織よごるゝ　之
巣鴨より冬がれ早き雑司が谷　笠
玄猪の餅をくばる店内　之
告ぐちもしたげに狆の氣をもみて　笠
乳母がしらきる顏のをかしさ　之
油筒ふいた反古よむ月あかり　笠
濱の野分にたかぬ塩竈　之
放下師が着込の綰のうそ寒く　笠
箒の先へかゝる粒錢　之
花七日氣もなくくれて山洗ひ　笠
燕歸る里の門ゝ　之

知り安き人のこゝろや花の春　一具
柴垣やほかまでもなし初霞　由誓
まほろしやまだ見ぬ方の花も添　抱儀
春風の吹もさだめず二日月　遅流
日もそふてかはらず來るや窓の春　詠久
地に空にかけおく柳ゝかな　雄太
後先にきくや羽音と雉子の聲　一水
水にかけしたしき空のはじめ哉　祖郷
鶯や月の黄昏やゝしばし　得蕉
數有て深山木めかぬ柳かな　古山
引替て降るを庭の梅見哉　見外
がつくりと下り込里の柳かな　念ゝ
黄鳥にとゝのふ睦月ごゝろかな　等栽
神の灯や筋に通ふ嫁が君　幻外
元日は眠いさなかを夜あけたり　叩月
雜木まで色こきまぜて遠柳　爲山
苔むせど香のたしか也磯の梅　卓郎
福わらや香もたつばかり日の當る　草宇

いたいけな苔もちたる薊かな　潮堂
遠しともせぬ海山や着衣はじめ　松什
吹あける香にしられけり雛の梅　氷壺
ながれ來る柴にも海苔のつく日哉　萬古
根通りは朧に見えて春の山　波鷗
けふにあふ身の早起や日のはじめ　不染
海みえて猶口ごもるさくら哉　松室
聲もちて松も夜明る余寒かな　波平
轉寐や蚕しまふ夜の醉心　素交
雪霜におほれぬいろのすみれ哉　故庄
つきながらとひこたへする手鞠哉　薫道
月と日に起ふしかはる巣鳥かな　弘湖
はつ花のうつぶきがちに咲にけり　半湖

田家眺望

雉子なくやみどりをふくむ朝煙り　梅笠

墨田漫興

夜のはるのさかりになりぬ朧月　西馬

去年をゝしみことしをまつに誰ゝ

も枕を忘れて、元日の夜は殊にいぎたなければ

人は寢てそちがはるなり嫁が君　逸淵

一之

鶯の朝かげうつる塗戸かな　祥
冴かへる日の多いきさらぎ　迎
芽もとかぬうちに接穗の手讐して　鳥　霞
市のほこりをはらふ履もの　之
荷をわけて艀下へはこぶくれの月　祥
角力にかりる普請場の跡　霞
棚經はみなそこ〳〵にしてはしり　之
はなしもならぬ椽の見通し　祥
臍の緒に知れた生れのはづかしく　霞
若竹そよぐ音におくある　之
教授家へ灸の(炙)ひまをこひにやり　祥
宮の支配でとまる川かけ　霞
月よりも高うすみきる空の色　之
寐酒のさむる鐘のやゝ寒　祥
うらがれのとり分早きあらしやま　霞
捨たもしらず遊ぶ雛　之
こゝろあふ友を旅路の花にして　祥
露にまぎれぬすみれゆかしき　霞

若水や手早にくむもあとおもひ　信　葛古
人聲にふりむく鹿や朝がすみ　圭布
深入は結句さびしや花の中　靜一
はつ〳〵にさくや老樹のはな配り　照樹
薺粥芹ひといろのにほひかな　三都里
鳴る風のこなたにすむや松の聲　雪蓑
夜ざくらやわりなき兒の人通り　木鷺
ひとつ居て妻よぶ聲や舟の猫　雪頂
さびしさに掴んで見たり落椿　士芳
うごかねば見る氣ののらぬ柳かな　二芳
行はるや葉かげにのこる花の蘂　梅軒

散立た花や下枝は葉に移る　橘茶
はつてふのかげかざす也水のうへ　長荘
膝による猫の祇らず居蘇の漏　文潮
山吹やひとつながれを幾わたり　楚水
燃しぶる松葉のかざやはるの月　眞砂
爪先の冷つく朝や山ざくら　榮李
水音にわかれてさびし藤の花　よし丸
朝虹の薄らぎにそふかすみかな　竹雨
かぞへねど彼岸はちかし水の音　志德
土がらによらぬ花さくすみれかな　左右太
都合よき家のかざりや惠方棚　常艸
吹よどむ山ふところやかぜかすむ　鶯室
わか芝やはし折るほどの藪もある　雲裳女
雪とけて世に憂事もなかりけり　其秋
薊さく野を庭に見る小家かな　南中
日がな吹だけのゆるみやはるの風　かと丸
何の氣もなくて立よる柳かな　快雅
月遠く餘寒の海のひかりかな　菊雅

淡ゆきや青み引出す桃の枝　白也
菁洗ふ鳥にも水のぬるみけり　文耕
さほ川のきさらぎ淋し千鳥滅る　自然
はつ午の海はしづかな入日かな　吾山
しら梅に鳥芋商ふ戸口かな　螻堂
ながゝりし春の名殘をけふやしる　一朗
青柳や空をはなるゝ空のいろ　願三
たまに來してふ追なくすゞめ哉　蒿齋
一すぢの綱に老けりさるまはし　籟之
めき〳〵と山ははれたる二月哉　荘茂
芹つむやはかまながらの禮がへり　嬌雨
塵拂ふうめもはつ日の匂ひかな　蘭兒
盗まれた日がさかり也宿のはな　其峰
梅見えて奥ある里のけぶり哉　梅好
はつ空やきのふながらの空のいろ　五泉
漣に白根みせけり芹の仲　穴蟹
てふひとつあぶなげに來るながれ哉　正齋
咲までにしてもらひけり福壽草　可咲

青柳やあやどりとけて日のくるゝ　貞林
約束の客ははづれてうめのはな　都邑
野の末に響きこゆるかすみかな　蒼孤
黄鳥や初手に朝日のとゞく枝　花郷
波あげた釣舩もはるのけぶりかな　笠仙
手ぬぐひにつゝんで來たりはつ若菜　碎月
川筋やてふ舞ふ中の薄けぶり　梅兒
やゝ幾日塵なき海や春のおと　朝嵐
畑みちや日はつら〳〵と萠る草　龍雄
しらうめやしめり持たる土のいろ　精二
隣にも響る聲する雛かな　鵑村
きさらぎのめにたつ沖のくもりかな　可厚
寢ごゝろの江に廣がるやはつ蛙　ノ左
雉子啼て夕山がすみさめにけり　吾佛
はるの夜とおもふに寒し庵の月　都久裳

題孤山放鶴圖

珍らしき鶴の高音や梅のそら　迎祥

白魚にいやしきは灯のひかり哉　生ゝ
寢ざめうれしき春の雨音　一之
藪入のはなし羽をりを家づとに　梅塵
依にしたる秣うつくし　生
はつ〳〵に温泉けぶりかゝる晝の月　之
まだ生て居る寒たての鳴　塵

春の水遊びがてらにながれけり　古　蘭鵬
鶯や竹の下みち風のふく　吐佛
永き日のみゆる机のほこり哉　梅堂
傘かりた禮にして行接穗哉　扇露
鎌（造）鍛冶の入口せばきやなぎかな　只遊
入相のかねをさくらのいのち哉　昔ゝ

古人の遺吟を拾うて因にこゝにあぐ

朽木にも陽炎のたつ山路かな　一陽
ほつちりと白しはじめて咲た梅　素梅
折かけて馬から下りるさくら哉　箕升

黄鳥を聞殖したる月日かな　松巖
ながれ來る木にもみゆるや別れ霜　之笠
吹あれし笹原山や梅のはな　喜水
行はるや麥の風きく夕ごゝろ　朝鳥
はつ東風や都に近き畑の中　雲鳥
我にのみものいはせけり山ざくら　五風
わが畑としらずにとふやわか茶摘　其風
花の中柏の古葉落にけり　樵歌
湖の廣きもしらず這ふ田螺　白彦
天津空富士もことしとなりにけり　完和

花の降る日はうかるゝといへるも、げに昇平の恩光ならんか。

看經の手先もはなのほめき哉　烏霞
蓬萊をいたゞいてたつ同者かな　和春

老僕

草崩もよそにのみ見てたつ日哉　梅塵
眼にみゆる風のひかりや東窓　一之

嘉永壬子春

製本所　江戸神田通新石町　須原屋源助

通説

芭蕉時代を過ぎ、蕪村時代を過ぎて、私達はだん／＼現代に近づいて來た。こゝに一茶時代と稱する文化文政を中心としたる一時代は、一面から云へば芭蕉の俳風に對する追慕研究が盛んであつたと共に、一面から云へば、在來の傳統を破壊して新しき世界に突入せんとする傾向の燃えはじめた時である。それはたゞ燃えはじめたに過ぎないけれども（而も、無意識的ではあつたけれども）此傾向は俳句史上に於て甚だ重要なる意義をもつものと私は考へる。で、以上の三時代（寧ろ、芭蕉、蕪村、一茶を中心として）を俳風の傾向を以て名けて云ふならば、當今の洋畫家が繪畫史上の傾向を論別する時に用ふる次の言葉が其まゝ、ぴつたりと之に當てはまると思ふ、即ち

一、芭蕉時代（芭蕉を主として）……クラシック

二、蕪村時代（蕪村を主として）……バロツク

三、一茶時代（一茶を主として）……モデルン

所謂、クラシックは靜である、正である、永遠といふものを見つめた心である。所謂、バロツクは動である、巧である、刹那の生命を生かした心である。次にモデルンとは、破である、自主である、而して此の破であり自主である所のものは決して一時の氣まぐれではなくて、其中に前時代のものよりも一層大きな眞實がある、少くとも其眞實を伸ばすべき正しい胎境があるといふ事に、モデルンの意義は存する。ところで、上にも一言したやうに、一茶に於けるモデルン的傾向といふのは、其時代の全體的特色ではない（全體的特色といふ事に就ては、第十四卷の通說に於て述

べた通り)、僅かに頭を擡げはじめた所の萌芽である。而して此萌芽が明治大正に至つて育成されることがなかつたならば、萌芽としてすらも認められずに終つたかもしれぬ位のものである。此モデルン傾向の萌芽が一茶といふ人に於て著しく代表されてゐる、といふ意味で、私は俳句史上に於ける一茶の地位を是認し尊敬したいのである。されば、昭和の今日に於ける俳句の現代的傾向を是認しない方々は（昭和の今日に於ても俳壇人の大多數はクラシック、又はバロックである）一茶の價値をも重く見ないのが當然だと思ふ。又、當今は一茶の俳句とは離して一茶の人間としての味をありがたがる方も少くないやうだが、其は又別の問題となる、但し、單に一人間として一茶程の直情と野趣と童心と飄逸とをもつてゐた人は、さしてめづらしくあるまい。こゝには、俳人としての一茶、その俳句其他の作品に就てのみ私は通論を試みようと思ふ。

芭蕉以後、俳人の境地とする所は風雅といふ言葉を以て現された。それが作品の上に於ける心法としては、さび、しをりである。之は象徴的な、きはめて漠然とした言葉だけれども、かなり適確に、簡明に、俳諧道の要諦を語つてゐる。而して又、此のモツトーに依て俳諧道といふものが、他の文學に對して特色づけられ、正しく護持せられ、又、好き發達を促されたといふ事も事實である。然しながら、此モツトーに依て、俳諧道といふものが文學の世界に於ける特殊部落となり、鎖國的となり、行きづまつてしまつたといふ事も亦事實である。それは、一茶時代以後に於ける一般の俳諧や發句といふものを見る人に多少の批評眼があれば、すぐ解る事である。それは全く生氣がない、あそびである、形だけは整つてゐても肝心な魂が拔けてゐる、傳統に之れ遵はじとのみするから、模倣域を離れない。つまり風雅の塔に立てこもつて、さび、しをりの窓を閉ざしてしまつた形である。そこには風雅の言葉を聞くことは出來るけれども、その言葉を語る人間を見ることは出來ない、つまり、風雅といふものが全く概念化せられて生命力を失つ

たのである。斯様な状態を救ふべき道は、こゝに潑溂とした自己をもつた人が出て來て、傳統よりも生命は尊く、約束よりも實感は尊いことを實證して見せるより外はない。それは或意味に於ては前代の破壞かもしれないが、破壞の爲の破壞ではない、已れとして其處に出なければならぬ所に出たのである、卽ち模倣を捨てゝ表現の道を選んだといふ事である。而して其表現の道が單に已れ一個の爲でなく、萬人の爲に新しい表現の道を開通せしめた事に當り、又、在來行きづまつてゐた所の道を打開した事に當るといふ意味に於て、其の新人の試が初めて肯定される。其新人こそ一茶であると私は云ひたいのである。

これがまあ終の栖か雪五尺　一茶

芭蕉は「いづれか幻の栖ならずや」と諦觀してゐたかもしれぬが、さう悟りきれない所がどこまでも人間である所の我々凡夫の僞らぬ聲ではないか。せめて老後の安住地として戻つて來た故郷は奥信濃の僻地なる雪の中、あゝ之が終の栖かと嗟嘆した心、それが發句にならうとは「風雅の塔」に籠つてゐた人達の考へ及はなかつた所なのである。此雪は雪月花趣味の觀賞用の雪ではない、私達の生活にぴつたりと迫つてゐる雪である。全く、之は風雅どころの話ではない、で、風雅の心のないものは發句でない、と云つて否定し去る人があれば其もよからう、けれども此作者の涙と吐息とを否定し去る人はあるまい、而して其を斯うした形で表現せずにゐられなかつた作者の氣持にも同感しない人はなからう。そこに、在來の傳統と約束とを以て閉ざされてゐた堅い窓を開く所の新しい生命の鍵を感ずべきではないか。

古里やよるもさはるも茨の花　一茶

故郷の人達に對する感情を赤裸々に投げ付けたのである。古里といふ言葉のもつ親愛い感じ、茨の花といふ語がもつ

香ばしい感じに對しても、此句の心は謀叛してゐる。此句は風雅の概念に對して破壞的の叛逆をしてゐる、しかも其中に籠められた實感のもつ力の大いさ、其大きな力こそ新しい建設の根本精神となるものでなくて何であらう。風雅の心を象徴するさびといふ事は、たしかに俳句道の極北である。凡ての俳句が指針的に其方向を指してゐる事に間違はないのだけれども、それが私達の實生活といふものと離れ、生きてゐる人間の味と離れて、露を吸うて生きてゐる仙人のやうな、脂のない、骨立しきつたものになることは考へものである。されば此の俳句道を常に私達の生活の上に置くといふ事は必要である。

木枯や雀も口につかはるゝ　一茶

鶯の口すぎにくる落葉かな　同

雀を見ても、鶯を見ても、彼等も亦生活に追はれてゐるのだといふ事を感ぜずにはゐられなかつたのが一茶である。それ程、彼自身がいつも生活意識から離れずにゐたのである。

町住みや雪とかすにも錢がいる　一茶

世につれて花火の玉も大きいぞ　同

夕燕われにはあすのあてもなし　同

汚れ猫それさへ妻はもちにけり　同

「夕燕」の句は彼が江戸に放浪して、食客的な生活をしてゐた頃の作である。彼が齡五十を越すまで妻帶しなかつたのも、主として其經濟上の事情からであらう。されば彼の所謂「茨」だらけの故鄕であつても、そこに一家の主として、父の遺産の一部も襲ぎ、氣まゝに暮らせるようになつてからは

勿體なや晝寢してきく田植唄　一茶
かくれ家や歯のない聲で福は内　同

と感謝と微笑とを洩らし、又、妻を得、子を得てからは

久方の花𦥑星よ𦥑星よ　一茶
餅花の木かげに手うちあはゝかな　同

と自分の生活を祝福してゐる。しかも又、其妻を失つては

小言いふ相手もあらば今日の月　一茶

と嘆じ、其子を失つては

秋風やむしりたがりし赤い花　一茶

と歎いてゐる。彼の生活、彼の心情、そのまゝが彼の吟詠となり、彼の發句となる。それが本當ではないか。此外に何の本當のものがあらう。上品らしく取りすました風雅、いや風雅めかして取つくろつた發句に、藝術として何の生命があらうぞと云ひたいのである。さび、しをりといふ其しをりといふ事は、俳句に藝術としての味を與へるかんどころでもある。けれども、此しをりをのみ好んでゐては、工夫に捉はれ、技巧に墮ちて、やはり生命の稀薄なものとならざるを得ない。しをりをも無視する位に、素材的の力のあるものが欲しい。今日、無技巧の說ある所以である。

梅が香や客の鼻には淺黄椀　許六
梅が香やどなたが來ても欠茶椀　一茶

許六の句は「客の鼻には」といふ所にしをりがある。一茶の句は少しもしをらずにたゞ、投げ出してある、其爲に、

其貧しさを衒ふといふのでなく、たゞ平氣でゐるあけつぱなしの氣持が快くうけ入れられるのである。

湖や兀げならびたる雲の峰　　去来
湖へずり出しけり雲の峯　　一茶

去來の句は「兀げならびたる」にしをりがある。此句は此巧みさで生きてゐる。然しさうした巧みなどを目ざゝずに、たゞ、ありのまゝに「ずり出しけり」と云つた無技巧さには、此作者が無心にして空や水を眺めてゐる好い氣持がすつと出てゐる。

一茶の句は卑近である、題材を卑近な所にとる、表現の法も言葉の選み方も實に卑近である。然し、通俗的ではないのである。此卑近と通俗といふ事の別をはつきりとして置きたい。

穀値段くつくとさがる暑さかな　　一茶

之は卑近の材をとつて、卑近な言葉で現したものである。然し、此句には俗に媚びた所は少しもない。

うまさうな雪がふうわり〳〵と　　一茶
霜がれやおれを見かけて鉦たゝく　　同

所謂「風雅」といふ高いものを目ざしてばかりゐるのでないから、脚は常にたしかな地上を踏んでゐる、眼は常に身邊の近い所を見てゐる。それが卑近の自然さである。俳句が正しい意味に於て大衆のものとして立たんが爲には須く此意味の卑近さに立脚すべきである。之に反して通俗的といふのは、藝術の心を知らない世間の人達に、藝術らしいものを掴ませて、うなづかせて、一般的の賞玩を博するやうな、多數迎合を主としたものである。之は風雅を看板とする、風雅ぶる、然かも實は極めて俗惡なのである。

鶯や妻もあらうに一羽づゝ　梅室

畑あらす行儀ではなし雁の列　同

斯ういふ句を味ふには感情に訴へる事は要らない、理智でうなづかせるのである。だから、藝術を口にする資格のない人々に「なるほど」と膝を打たせる、そこを覗つて作つたものである。所謂、一茶時代といふ文化文政以後、天保時代にかけては斯様な通俗趣味の俗調が一世を風靡してゐたのであるが、其中に立つて獨り一茶が毅然として、卑近ではあるが通俗に墮しない俳調を鼓吹してゐた事は甚だ尊しと云ふべきである。

一茶の發句に就ては、論ずべき事が猶多いけれども、本篇「類題一茶俳句選抄」のどの一ページでも一讀されたならば、彼の本領は直に諸君に現前するであらう。彼の俳句は最も雄辯に其特色を語るであらう。私の駄辯は之以上なくもがなであらう。

「一茶俳諧歌集」に輯められた彼の俳諧歌といふものも、彼の生活、彼の感情を好く打出してゐる。

霜露はいたくおけども山柿の
澁のぬけざる我こゝろかな

慾あかのよごれ込んだるぼんの凹
心のおくの煤も掃かなん

七番日記、九番日記の如き彼の日記で見ると、發句を作ると同じ氣持で此の俳諧歌を書付けてゐる（發句　俳諧歌と内容的に融通しあつてゐるものも少くない。

世の中はあなたまかせよ七ころび
八おきの春にあひにけるかな　（文化十一年）

ともかくもあなた任せの年の暮　（文政二年）

一寸の此身も五分のたましひと
　鎌ふり上げてむかふ蟲かな　（文政二年）

かまきりや五分の魂これ見よと　（文政二年）

えいやつと人に生れて山道の
　曲りくねつて世をわたるかな　（文化八年）

なか〳〵に人と生れて秋の暮　（文化八年）

彼のいはゆる俳諧歌といふものには、全く和歌と見るべきもの

ながらへて歸らん事も白河の
　關をはる〳〵越ゆる身なれば　（文政二年）

小雨ふる柴の扉をしば〳〵に
　音訪ふものは螢なりけり　（文化十年）

の如きものもあれば、又、全く狂歌と見るべきもの

挑灯と釣鐘ならば大としの
　夜はやみ雲に日出度かるらん　（文化十四年）

ほの〴〵と赤らむ柿を鶏が
　とつてくはうと鳴きにけるかな　（文化九年）

の如きものとある。所で、此俳諧歌の藝術的價値といふものに就ては、私は其を重く見ることが出來ない。然らば何

故に、同じやうな内容が發句としては宜しくて、俳諧歌としては面白くないのか、こゝに問題として殘しておく。

因に、一茶の俳諧歌の中に

手取鍋おのれが口はさし出たぞ雜炊たくと人に語るな　(文化七年、七番日記)

といふ一首は彼が人から聞いたまゝ、日記の中に書込んでおいたものであらうか。之は京都粟田口の隱者、善輔といふものゝ作として名高い歌である。善輔は此手取鍋で雜炊もたけば、茶も煮たりして往來の馬士や駕舁に振舞ふのを樂しみとした。豐太閤が此事を聞き、其鍋で茶會を催したいと、利休を遣はして所望せしめた所、善輔は怒つて之を軒下の石に投付けて碎いてしまつた。太閤は其を悔いて利休が記憶に依つて、元と同じやうな手取鍋を作らせ、一つは善輔に辨償し、一つは已れが愛翫したといふ話、尤も此手取鍋の歌は堺の隱者一路といふ者の作であつて一休和尚との間に問答があつたといふ別說もあるが、兎も角、一茶より昔に名高くなつてゐるもので、一茶の作ではない。「行け螢やかんの口がさし出たぞ」(文化九年)「うそ寒なよそへかたるな手取なべ」(付句)の如きも、是から思ひついたものに違ひない。

「一茶連句集成」に輯められた其連句に於て注意される事は、彼の發句に於てと同じやうに、同じ趣向が非常に多い事だ。例へば、舟へ何かをぶち込む事、動物に物を食はす事、行燈に物を掛ける事、兀山を眺める事、觀音經に關する事等等。然し、好い付句も少くない。

寺にも寢たる細きあきなひ　　成美
名月の一年增しに寒うなり　　一茶
×
ほとゝぎす茄子の色の夜なりけり　　希杖

空の際よりそよぐ麥の穗　一茶

×

青天のあけぼの覗く二階から　文虎

赤い薬を禿ほしがる　一茶

×

着ものに鳥の糞も春かな　心非

小うるさい戀の追分出ぬけたり　一茶

×

仲人のからもどりする夕間暮　希杖

拾ふた狀で櫛をふく也　一茶

×

陽炎の腰かけ客に膳据て　春甫

人の來ぬ間に寫す山水　一茶

×

思ひざしなどゝ盃もめ出して　一茶

引四ツ過ぎは月の吉原　同

×

腰かけるやうな小山も月夜にて　　　掬斗

笛も賣るなり餅も賣るなり　　　一茶

「一茶紀行日記集」中、「寛政紀行」の

九日……此地に風流好るものゝ粗ありといへども、派遊なれば訪ねず……

とは微笑させられる。

「花見の記」は、一日、花を見ながら、見る所を發句にして行く、其行き方は後年、子規が寫生と唱へて、早取寫眞的の句作をした其先鞭を一茶がつけてゐるとも云へよう。一体一茶の句には、いはゆる寫生風なる眼前のスケツチがなか〳〵多いのである。

「みとり日記」（父の終焉日記）を讀むと、父に叱られたり、あまへたり、心配したりする一茶の心持が少年のやうであつて、三十九歳の壯年とは見えない、父も亦一茶を極めて子供扱ひにしてゐる。一茶の俳句に好く出てゐる所の彼の童心といふものは、彼のヒガミの心と背中合せをして、彼の性格の中に根深かつたのだといふ事が、此日記から好く解る氣がする。

「一茶書翰抄」では文化十四年、妻のおきくに送つたものが面白い。

長々の留主、さぞ退屈ならんと察し候へども、病には勝れず候、其方も薄着になりて風でも引かぬ様に心掛け、何働かずともよろしく候間、十四日、十七日の茶日ばかり忘れぬやうに頼入候　（文化十四年三月三日）

文路に宛てたついむぎのいいふとりの羽織を註文した手紙は、一茶の經濟狀態が決して左程貧しいものでなかつた事を語る

一證左である。

……されば二度の大病よりして蟷の力もなく、布子重く身の振がたく、我儘のやうなれども、ぜひなく、紬の綿入一つ横倉より九月貰ひ、今は一つにて、こらへ居申候間、紬の太織の羽織ほしく候、平八殿に右御咄可被下候、金は右から左りに進じ候、二分位出ても引込みても宜しく候……(文政七年十一月十日)

終に、「一茶著作集」として本篇には「旅拾遺」以下の五篇が收められてある。信州湯田中なる湯本五郎治氏方で藏書をいろ〳〵見せて貰つた時、『增補俳人俳士年表』(文政二年、有鱗撰)といふ折本の表紙題簽の側に一茶といふ小さな印が捺してあるのが、不圖目につき、展げて見ると、一茶が所持してゐたもので、其木版刷の年表の中に、まぎれもない一茶自身の筆でいろ〳〵の書入れをしてある。其中に

寛政七年　　一茶「旅拾遺」選

寛政十年　　一茶「さらば笠」選

とあつたので、一茶の處女作は「旅拾遺」だといふ事が解り、其から此書が掘り出される事になつたのである。此書中に

かたゝがひ幸あり武庫の郭公　　雲水　一茶

とある。又

浪華に足を留ムアリ東ニ赴クアリ共ニ是雲水

羅の薄きぞ旅のかねてより　　尺艾

身は涼風に任せぬる月　一茶

旅人としての一茶の氣持は此時からずうつと續いてゐた。それは「旅拾遺」の成つた寛政七年より約二十年後、「三韓人」の成つた時、成美は其に序して次の如く書いてゐる。

木のかくれ岩のはざまにも、ひさしくとゞまらざるは法師の境界なり、しなのゝ國にひとりの隱士あり、はやくよりその心ざしありて、森羅萬象を一盌の茶に放下し、みづから一茶と名のりて、吾ひのもとの中をこと〳〵くめぐりて、風飡露宿さらに一方に足をとゞめず………

「我春集」と「株番」は一茶の放浪生活が殆んど終に近くなつた頃ではあるが、猶、此地の誰から彼地の彼へと訪問しては食うてゐた時代の作(寧ろ手帖的原稿)である。されば「我春集」の序に

文化七年十二月　日　しなのゝ國乞食首領　一茶

とあるのは面白い。到る處で食はして貰つてゐるのだから「乞食」に違ひない。然し、決して恥しい乞食ではない。所謂、田舍蕉門の徒が芭蕉を賣り物にして、點料をかせいであるく俳諧業者に較べれば、此「乞食」の方がどれだけ清く、どれだけ純であるかしれない。されば彼は「乞食首領」と威張つて大書してゐる譯なのである。

「株番」には

おのれやれ今や五十の花の春　一茶

の句を卷頭にして、人生五十といふ、その歳旦に當つて、まだ五十だ、人生の花の春だというてゐる。其時一茶は頭髮皆白く、齒は悉く脫落してゐたさうだから、此句は幾分つけ元氣のやうでもあるが、然し、五十二歳にして初めて結婚した事を思ふと、一種の若さはあつたものに違ひあるまい。

「おらが春」は一茶五十七歳の手記であるが、之で見ると、彼の氣持は大分に老境に入つてゐる。老衰といふ程ではないが、我執がとれて、圓く、柔くなつて來てゐることは解る。「我春集」の卷頭には

我 春 も 上 々 吉 ぞ 梅 の 花　　一 茶

と書き、「株番」には正月の祝として題鶴龜松竹といふ句を作つてゐる。ところが、「おらが春」の卷頭には「鶴龜にたぐへての祝盡しも厄拂ひの口上めきてそら〴〵しく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑家は、くづ家のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける」として

目 出 度 さ も ち う 位 な り お ら が 春　　一 茶

の句を出してゐる。「上々吉」を以てよろしとした時代から、上々吉よりも「中位」の方が自然で、安氣で、一層よろしいといふ所まで氣持が移つて來たといふ事に、或意味から云へば、彼の老境的の潦倒が見えるし、或意味から云へば彼の境地的の圓熟があると云へるのである。

次でながら、「おらが春」の初めの方に

玉川

さ ら し 布 霞 の 足 し に 繼 へ け り

といふ句がある。霞の足しに繼へるとは何の事か意味が解らぬけれども、一茶自筆の原稿をすきうつしにした木版本で見ても、さう讀める。尤も一茶が自筆のものに彼自身でずいぶん澤山の書き誤りをしてゐる事は、私が「株番」や「我春集」の一茶自筆原稿を寫した時にも氣がついた事なのだから、此句も何かの誤であらうと思ひつゝ、先頃、希杖の筆寫した「しだら」を見るに及んで、漸く此疑問が解けたのである。「しだら」には

さ ら し 布 霞 の 足 し に 添 へ に け り

とある。之で氷解した。所で、「おらが春」の木版本を開いて、もう一度[illegible]ると、此誤の徑路もはつきりとした。それは「添」といふ字を草書で書き「に」を「耳」と書きつゞけ、「けり」と書いた。そこで一茶は「へ」といふ字を脫した事に氣がつき「添」と「耳」との間に書込むべき所を、そこはもう空地がない爲か或は匆卒にしてか「耳」と「けり」の間に「へ」の字を書いてしまつた。で、「添耳へけり」、之が「鋒へけり」と見えるのも無理はなく、在來の活字本には凡て「鋒へけり」と讀んであるけれども、句意から云つても、「添へにけり」でなければならないのである。（荻原井泉水）

日本俳書大系　第十二卷　終

昭和二年八月廿日印刷
昭和二年八月廿五日發行

非賣品

日本俳書大系
（12）

著作者　神田豐穗
發行者　神田豐穗
東京市日本橋區數寄屋町一番地
印刷者　谷口熊之助
東京市牛込區早稻田鶴卷町四〇三

印刷所
春秋社印刷所

發行所
東京市日本橋區數寄屋町・春秋社內
日本俳書大系刊行會
振替東京二六八七二・電話大手二一二四
二一二四